

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

一括ダウンロード

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009681



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10番1号
電話 06-6876-2151 (代)
<http://www.minpaku.ac.jp/>

研
究
年
報

2019

国立民族学博物館



National Museum of Ethnology
2019

国立民族学博物館

国立民族学博物館

研究年報

National Museum of Ethnology

2019

目次

あいさつ	3	人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト	242
1 組織		[2-5 研究成果の公開]	250
組織構成図	4	刊行物	250
運営組織	5	国立民族学博物館学術情報リポジトリ	252
館内運営組織	5	学術講演会	252
現員	6	[2-6 学会開催]	252
歴代館長・名誉教授	6	学会開催	252
研究部教員の紹介	7	[2-7 若手研究者奨励セミナー]	253
・館長	8	若手研究者奨励セミナー	253
・副館長	11	[2-8 研究員制度]	253
・人類基礎理論研究部	15	外来研究員	253
・超域フィールド科学研究部	39	特別共同利用研究員	259
・人類文明誌研究部	58	[2-9 データの利用]	260
・グローバル現象研究部	81	標本資料および映像音響資料に関するデータ	260
・学術資源研究開発センター	103	文献図書資料の収集・整理・利用状況	261
・国際研究統括室	129	民族学資料共同利用窓口	262
・IR室	130	民族学研究アーカイブズの構築事業	263
・梅棹資料室	130	データベースの作成・利用状況	263
・機関研究員	130	[2-10 みんぱく施設の利用]	269
・プロジェクト研究員	136	博物館施設の利用状況	269
・拠点研究員(人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター 「北東アジア地域研究」国立民族学博物館拠点)	142	施設の整備状況	270
・拠点研究員(人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター 「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点)	143	[2-11 受賞・特許]	270
・拠点研究員(人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター 「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点)	144	受賞	270
・拠点研究員(人間文化研究機構総合情報発信センター 「人文知コミュニケーター」)	146	知的財産形成・特許出願など	271
・客員教員(人類基礎理論研究部)	148	3 展示	
・客員教員(人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門(附置))	149	入館者数	272
・客員教員(人類文明誌研究部)	152	本館展示	272
・特別客員教員(人類基礎理論研究部)	153	特別展示・企画展示など	276
・特別客員教員(人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門(附置))	155	展示関連出版物およびプログラム	279
・特別客員教員(グローバル現象研究部)	157	4 国際連携と研究協力	
・特別客員教員(学術資源研究開発センター)	160	海外研究機関との研究協力協定	282
・外国人研究員	164	MINPAKU Anthropology Newsletter	287
2 研究および共同利用		みんぱくフェローズ	288
概観	172	「博物館とコミュニティ開発」コース	289
[2-1 みんぱくの研究]	173	国内研究機関等との研究連携、協力の推進	290
特別研究	173	5 広報・社会連携	
人類の文化資源に関するフォーラム型情報		概観	294
ミュージアムの構築	180	国立民族学博物館要覧2019	296
共同研究	194	ホームページ	296
研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、 研究フォーラム、国際研究集会への派遣	219	報道	296
館長リーダーシップ経費による事業・調査	224	月刊みんぱく	297
民博研究懇談会	225	みんぱくゼミナール	297
[2-2 外部資金による研究]	226	みんぱくウィークエンド・サロン	299
科学研究費補助金による研究プロジェクト	226	研究公演	304
受託事業	229	みんぱく映画会	304
民間などの研究助成金などによる研究活動	231	博物館社会連携	306
[2-3 文化資源関連事業・情報関連事業]	232	その他の事業	309
文化資源関連事業	232	ボランティア活動	309
情報関連事業	241	6 学術資源研究開発センター	
[2-4 人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト]	242	センターの設置目的	312
		センターの研究事業	312
		7 国際研究統括室	
		設置目的	314
		2019年度活動報告	314
		8 総合研究大学院大学	
		索引	320

あいさつ

国立民族学博物館（みんぱく）は文化人類学・民族学とその関連分野の大学共同利用機関として1974年に創立され、1977年に開館しました。みんぱくには現在専任教員が52名在籍し、それぞれが世界各地でフィールドワークに従事しています。人類学関係の単体の教育研究機関として、世界全域をカバーする研究者の陣容と研究組織をもつという点で、みんぱくは世界で唯一の存在といえます。

一方で、みんぱくがこれまでに収集してきた標本資料は、現在、34万5千点を超えます。これは、20世紀後半以降に築かれた民族誌資料のコレクションとしては世界最大のものです。また、博物館施設の規模の上で、民博は、世界最大の民族学博物館となっています。

文化人類学分野の国際的中核研究拠点として、本館はこれまでに海外26大学・博物館、国内16大学・研究機関等と学術協定を締結し、機関間の共同研究や連携展示等の活動を展開してきました。本館ではまた、2019年度に、「現代文明と人類の未来」をテーマとする国際共同研究プロジェクト「特別研究」3件のほか、公募制の共同研究を26件実施しました。国際シンポジウム・ワークショップは31件開催しています。これらの研究集会への参加者、及び外国人教員や客員教員、外来研究員など本館を活用する国内外の研究者は1,193人にのぼります。こうした共同研究やシンポジウムの成果は、日本語・外国語の刊行物によって国内外に発信しています。とくに本年度は、世界の文化や芸術に関する映像番組や音声資料をそのまま論文と同様に掲載できる国際マルチメディア・オンラインジャーナル『TRAJECTORIA』を創刊したことが特筆されます。

研究資料の国際的集積・発信拠点として、本館では、現在、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」というプロジェクトを推進しています。このプロジェクトは、国内外の大学・博物館のみならず、研究対象となる社会（ソースコミュニティ）との協働の作業に基づいて、本館所蔵の標本資料・映像音響資料を中心とした人類の文化資源に関する情報を蓄積し、その国際的な発信、交換、生成、共有化と世代を超えた継承を目指すものです。

2020年3月には、新世代型電子ガイドと、それと連動した新ビデオテークシステムの開発を完了し、展示場への展開を図りました。特別展、企画展、巡回展は、計11回開催しています。また、館内外での講演会、セミナー、研究公演、映画会などの広報活動も積極的に実施しました。以上の博物館活動により、2019年度には新型コロナウイルス感染症拡大の影響による臨時休館があったにもかかわらず、前年比35%増の約29万2300人の観覧者を迎えることができました。

2019年9月には、ICOM（国際博物館会議）2019京都大会が開催され、本館も「博物館とコミュニティ開発」のセッションを組織する一方、世界の民族学博物館・コレクションの国際委員会 ICME のオフ・サイトミーティングを本館において開催しました。参加者から、本館の展示、保存科学の実践と国際的人材養成についてきわめて高い評価が寄せられ、博物館分野において本館が国際的に先導する位置にあることを改めて確認したところです。

グローバル化の急激な進展により、世界の諸地域の社会や文化は大きく変容する一方、文化間の摩擦も生起しています。さらに2020年初頭からは新型コロナウイルス感染症の地球規模での拡大により、社会の成り立ちそのものが問い直されるとともに、社会に潜在していた差別意識の浮上による世界の分断も生じています。異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の別を超えて共に生きる世界を築きあげる上で、本館の果たすべき役割は今後ますます重要になると認識しております。

『研究年報』は、以上のような、みんぱくの教員の研究調査をはじめとする多方面の活動とその成果について、みなさまに知っていただくために編集されました。大学共同利用機関としてのみんぱくの一年間の活動を集約してお伝えするものです。

この『研究年報』は、従前、冊子体で刊行して参りましたが、情報環境の変化に合わせ、より多くの皆さまのお手元に直接お届けできるよう、一昨年度の『研究年報2017』から全面的なオンライン化を図っております。

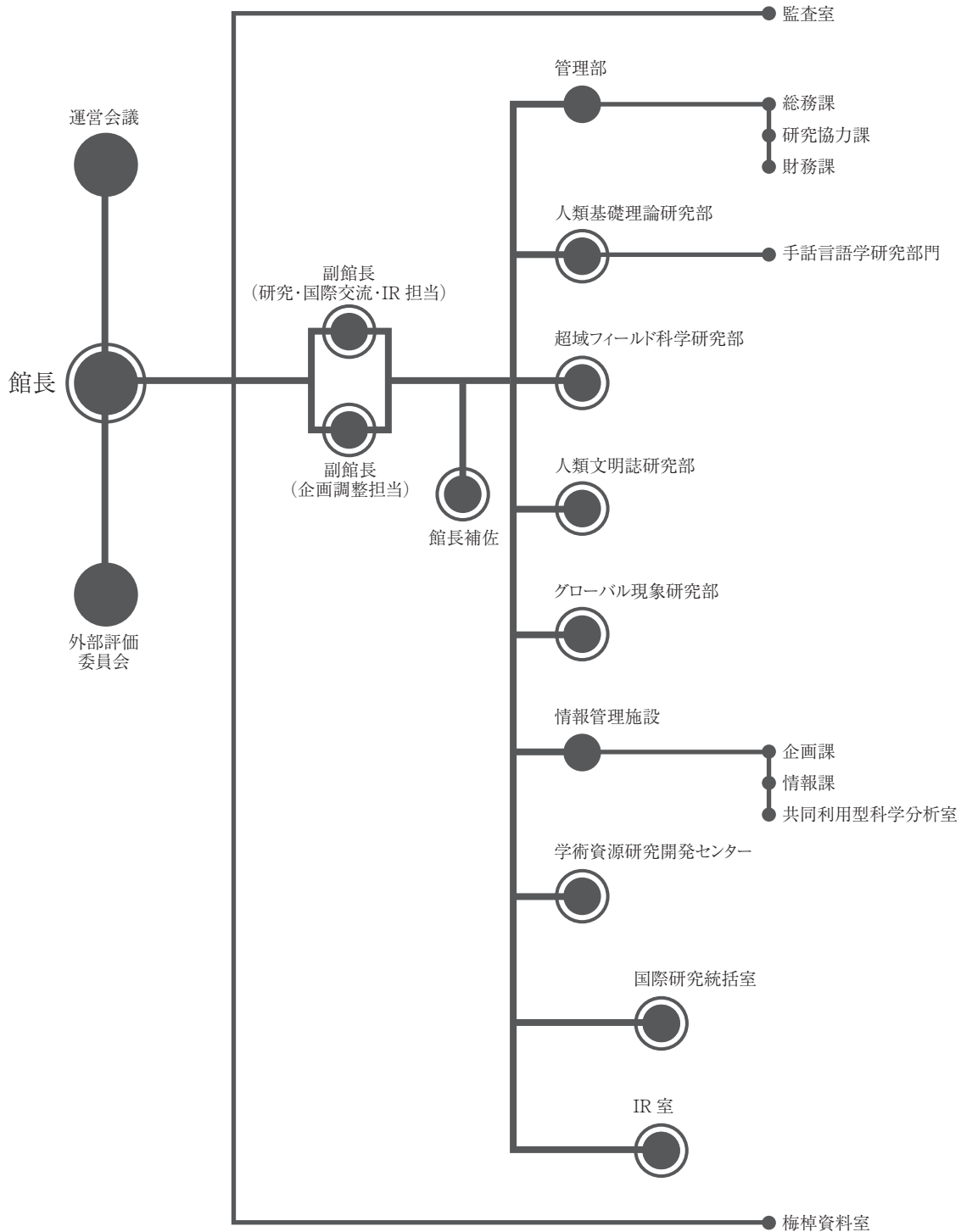
本誌を通じ、みんぱくの活動をご理解いただき、今後とも、本館に対して、みなさまからのご指導とご支援をいただけますことを念願しております。

2020年3月
国立民族学博物館長
吉田 憲 司



1 組織

組織構成図 (2020年3月31日現在)



運営組織 (2020年3月31日現在)

●運営会議

窪田幸子	神戸大学大学院国際文化学研究科教授 *2
栗本英世	大阪大学副学長*1
後藤 明	南山大学人文学部教授*3
佐野千絵	東京文化財研究所保存科学研究センター長*3
出口 顕	島根大学副学長*2
富沢寿勇	静岡県立大学国際関係学部特任教授*1
豊田由貴夫	立教大学観光学部教授*1
松田素二	京都大学大学院文学研究科教授*2
山梨俊夫	国立国際美術館長
飯田 卓	人類文明誌研究部長*1*2*3
宇田川妙子	総合研究大学院大学文化科学研究科 比較文化学専攻長／超域フィールド 科学研究部 教授*1
關 雄二	副館長（企画調整担当）*1*2
園田直子	人類基礎理論研究部長*1*2*3
野林厚志	学術資源研究開発センター長*1*2*3
林 勲男	超域フィールド科学研究部長*1*2*3
平井京之介	副館長（研究・国際交流・IR担当） *1*2
三尾 稔	グローバル現象研究部長*1*2*3

注) *1 人事委員会委員
*2 共同利用委員会委員
*3 研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達 淳	国立情報学研究所副所長
池田博之	公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団理事長
大野 泉	独立行政法人国際協力機構 JICA 研究所長
八村廣三郎	立命館大学名誉教授
堀井良殷	公益財団法人関西・大阪21世紀協会理事長
水沢 勉	神奈川県立近代美術館長
山極壽一	京都大学総長
山下晋司	東京大学名誉教授
山本真鳥	法政大学経済学部教授

館内運営組織 (2020年3月31日現在)

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会	大学院委員会
創設五十周年記念事業推進委員会	情報運営会議
福利厚生委員会	文化資源運営会議
安全衛生委員会	国際研修博物館学コース運営委員会
ハラスメント防止委員会	施設マネジメント委員会
広報企画会議	危機管理委員会
特別研究運営会議	大規模災害復興支援委員会
刊行物審査委員会	国際研究統括室会議
研究出版委員会	フォーラム型情報ミュージアム委員会
知的財産委員会	研究資料共同利用委員会
地域研究拠点運営委員会	

現員 (2020年3月31日現在)

区 分	館長	教授	准教授	助教	事務職員・技術職員	計
館長	1					1
管理部					28	28
情報管理施設					22	22
監査室					1	1
研究部		19(1)	20	1(1)		40(2)
学術資源開発センター		4	4	1		9
客員(国内)		6	4			10
客員(国外)*		5	1			6
計	1	34(1)	29	2(1)	51	117(2)

注) ()は特任研究員の人数を外数で示す
注) 客員(国外)*は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2020年3月31日現在)

●歴代館長

初代/梅棹忠夫(故人)	1974年6月～1993年3月
第2代/佐々木高明(故人)	1993年4月～1997年3月
第3代/石毛直道	1997年4月～2003年3月
第4代/松園萬亀雄	2003年4月～2009年3月
第5代/須藤健一	2009年4月～2017年3月
第6代/吉田憲司	2017年4月～

●名誉教授

祖父江孝男(故人)	1984年4月1日	森田恒之	2002年4月1日	八杉佳穂	2015年4月1日
岩田慶治(故人)	1985年4月1日	石毛直道	2003年4月1日	須藤健一	2017年4月1日
加藤九祚(故人)	1986年4月1日	栗田靖之	2003年4月1日	塚田誠之	2017年4月1日
伊藤幹治(故人)	1988年4月1日	杉田繁治	2003年4月1日	竹沢尚一郎	2017年4月1日
中村俊亀智(故人)	1988年4月1日	熊倉功夫	2004年4月1日	横山廣子	2018年4月1日
君島久子	1989年4月1日	立川武蔵	2004年4月1日	印東道子	2018年4月1日
和田祐一(故人)	1990年4月1日	田邊繁治	2004年4月1日		
垂水 稔(故人)	1991年4月1日	藤井龍彦	2004年4月1日		
杉本尚次	1992年4月1日	山田睦男(故人)	2004年4月1日		
梅棹忠夫(故人)	1993年4月1日	江口一久(故人)	2005年4月1日		
大給近達(故人)	1993年4月1日	大塚和義	2005年4月1日		
片倉素子(故人)	1993年4月1日	松原正毅	2005年4月1日		
竹村卓二(故人)	1994年4月1日	石森秀三	2006年4月1日		
周 達生(故人)	1995年4月1日	野村雅一(故人)	2006年4月1日		
松澤員子	1995年4月1日	大森康宏	2007年4月1日		
大丸 弘(故人)	1996年4月1日	山本紀夫	2007年4月1日		
友枝啓泰(故人)	1996年4月1日	松園萬亀雄	2009年4月1日		
藤井知昭	1996年4月1日	松山利夫	2010年4月1日		
佐々木高明(故人)	1997年4月1日	長野泰彦	2011年4月1日		
杉村 棟	1997年4月1日	秋道智彌	2012年4月1日		
和田正平	1998年4月1日	中牧弘允	2012年4月1日		
清水昭俊	2000年4月1日	小林繁樹	2014年4月1日		
黒田悦子	2001年4月1日	田村克己	2014年4月1日		
崎山 理	2001年4月1日	吉本 忍	2014年4月1日		
端 信行	2001年4月1日	久保正敏	2015年4月1日		
小山修三	2002年4月1日	庄司博司	2015年4月1日		

研究部教員の紹介 (2020年3月31日現在)

組織図に基づく現員一覧

館長		吉田憲司		
副館長(企画調整担当)		關 雄二		
副館長(研究・国際交流・IR担当)		平井京之介		
研究部	職名・研究部門	教授	准教授	助教
人類基礎理論研究部	研究部長	園田直子		
	第一超域	日高真吾	福岡正太 山本泰則	
	第二超域		川瀬 慈 吉岡 乾	
	第三超域	出口正之	菊澤律子 丸川雄三	
附置	日本財団助成 手話言語学	※飯泉菜穂子	菊澤律子(併)	※相良啓子
超域フィールド科学研究部	研究部長	林 勲男		
	第一超域	櫻永真佐夫 韓 敏	太田心平 奈良雅史	
	第二超域		菅瀬晶子 松尾瑞穂	
	第三超域	宇田川妙子 ピーター・J・マシウス	新免光比呂	
人類文明誌研究部	研究部長	飯田 卓		
	第一超域		卯田宗平 小野林太郎 寺村裕史 藤本透子	
	第二超域	池谷和信	上羽陽子	
	第三超域	齋藤 晃 鈴木 紀 關 雄二(副館長)		
グローバル現象研究部	研究部長	三尾 稔		
	第一超域	信田敏宏 平井京之介(副館長)	河合洋尚 廣瀬浩二郎	
	第二超域	西尾哲夫	相島葉月 三島禎子	鈴木英明
	第三超域	鈴木七美 森 明子		
学術資源研究開発センター	センター長	野林厚志		
	第一超域	笹原亮二	齋藤玲子	
	第二超域	寺田吉孝 山中由里子	南 真木人	
	第三超域	岸上伸啓(併)	伊藤敦規 丹羽典生	八木百合子
	人文知コミュニケーター			大石侑香(併)
国際研究統括室		平井京之介(室長)(併) 韓 敏(兼務) 齋藤 晃(兼務)	卯田宗平(兼務) 丹羽典生(兼務) 福岡正太(兼務)	鈴木英明(兼務)

※は特任研究員を示す。

1955年生。【学歴】京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）【職歴】大阪大学文学部美学科研究生（1980）、ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（1993）、国立民族学博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2000）、国立民族学博物館民族学研究部教授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センターセンター長（2006）、放送大学客員教授（2010）、国立民族学博物館副館長（2015）、国立民族学博物館館長（2017）【学位】学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】博物館人類学、文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族藝術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、アフリカ学会美術協議会（The Arts Council of the African Studies Association アメリカ）

【主要業績】

[単著]

吉田憲司

2014 『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。

1999 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。

1992 『仮面の森——アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

【受賞歴】

2004 第1回木村重信民族藝術学会賞

2000 第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）

1993 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

文化の創造と継承、そしてその表象における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化の創造と継承の過程をいかに追跡し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。本研究は、文化の研究と表象の課題を改めて検証し、問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を実践的に考究することを目的としている。

本年度は、科学研究費（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」の一環として、南部アフリカ、ザンビアのチェワ社会およびンゴニ社会における文化の伝統とその創造的継承の実態についての現地調査を実施した。あわせて、国際博物館会議（ICOM）京都大会の場で、「博物館とコミュニティ開発」「（民族誌博物館における）多様性と普遍性」のセッションを組織し、基調講演を担当して、博物館による文化の継承と表象のあり方について、新たな提言をおこなった。

また、本格実施が承認された、科研費による研究基盤リソース支援プログラム「地域研究画像デジタルライブラリ」の構築を通じて、国内に所蔵される世界各地の自然と文化の記録画像の集積と共有化の作業を継続した。

・成果

チェワ社会を含む南部アフリカの文化の伝統とその創造的継承に関する研究については、チェワ社会に隣接するンゴニ社会で10年を費やして公開に至った、同社会のコミュニティ・ミュージアム、ンスインゴ・ミュージアムにおいて、現地ワークショップを実施し、実際にミュージアムの建設・資料収集に携わったコミュニティの人びととの間で、その建設過程の検証と評価の作業を実施した。その成果は、2019年9月に開催された国際博物館会議（ICOM）京都大会の「博物館とコミュニティ開発」のセッションにおける基調講演の中で公表した。その内容は、下記刊行物に掲載している。

YOSHIDA, Kenji “Museum as a Basis of Community Development”, Sonoda, Naoko(ed.)

Museums and Community Development, Organizing Committee of the ICOM Kyoto session “Museums and Community Development”, pp.7-26, 2020.

南部アフリカ全域を覆う宗教運動に絡んだ文化の継承・創造の過程については、これまでの作業で、その大要を把握しえたが、本年度内にその成果の欧文出版に向けた作業を完了した。

さらに、2000年以降の世界の博物館の動向に関する研究成果を踏まえて、広範囲な読者を対象とした博物館学の啓発書の刊行準備を進める一方、民博の所蔵する世界の仮面をもとに、世界の無形文化遺産の創造的継承のありかたを総覧する刊行物の編集を進めている。

「地域研究画像デジタルライブラリ」については、同プロジェクトの向こう3年間の本格実施が承認され、進行中の科学研究費補助金による外部の研究プロジェクト15件を対象にデジタル化とデータベース構築の支援を実施した。

◎出版物による業績

[論文]

Yoshida, K.

2020 Museums as a Basis of Community Development. In N. Sonoda(ed.) *Museums and Community Development*, pp.7-26. Kyoto: Organizing Committee of the ICOM Kyoto session “Museums and community development”.

[その他]

吉田憲司

2019 「現代のことば 桜とプラント・ハンター」『京都新聞』4月16日夕刊。

2019 「通巻五〇〇号の節目に」『月刊みんぱく』43(5):1。

2019 「現代のことば アートと人類学の接近」『京都新聞』6月27日夕刊。

2019 「共感・共創の時間空間の創造」『チームラボ永遠の今の中で teamLab AT THE NOW OF ETERNITY』pp.86-93, 京都:青幻舎。

2019 「仮面の来訪者」『ベストエッセイ2019』pp.154-156, 東京:光村図書出版。

2019 「エキタビ 大阪モノレール万博記念公園駅(大阪府吹田市)『世界の文化 こんにちは』『読売新聞』7月20日夕刊。

2019 「想像界の生物相 キフェベの仮面」『月刊みんぱく』43(8):14-15。

2020 「記憶をつなぐ——災害と文化遺産」『かがやけ みらい 小学校 道徳 5年 きづき』pp.86-88, 東京:学校図書。

2020 「大阪・国立民族学博で『みんぱくセミナー』欧米博物館の変貌紹介」『奈良新聞』2月28日。

2020 「インタビュー 博物館がつなぐ人、文化、社会——異なるものへのまなざし」『CEL』124:2-7。

2020 「万博の正解」『BRUTUS』41(5):34-37。

2020 「ごあいさつ」『先住民の宝』pp.4-5, 大阪:国立民族学博物館。

2020 「ICOM京都大会を振り返る——成果と課題」『別冊 博物館研究 ICOM京都大会2019記念特集号』東京:日本博物館協会。

2020 「『民博通信』のオンライン化にあたって」『民博通信 Online』1:2。

Yoshida, K.

2019 WELCOME ADDRESS. *ICOM ICME 52nd ANNUAL CONFERENCE Diversity and Universality Programme Abstracts*.

2020 Intangible Cultural Heritage and Local Communities: A Perspective on Museums. *Proceedings of International Researchers Forum: Perspectives of Research for Intangible Cultural Heritage towards a Sustainable Society*, pp.1-10. Osaka: International Research Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region(IRCI).

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月9日 「文化多様性の時代におけるミュージアムの役割」公開シンポジウム『文化多様性は何をめざすのか ミュージアムと考える、新時代』北海道大学

2019年6月15日 「民族藝術学会の新たな展開に向けて」対話フォーラム『民族藝術学会と民族藝術学会のこれ

からを考える』大阪大学豊中キャンパス

- 2019年9月3日 'Museums as a Basis of Community Development.' 第25回ICOM(国際博物館会議) 京都大会2019みんなく JICA セッション "Museums and Community Development", 京都国際会館
- 2019年9月5日 'Ethnographic Museums at the Turn of Civilization.' ICOM ICME 52nd Annual Conference 2019 "Diversity and Universality", ホテル阪急エキスポパーク
- 2019年11月9日 「万博博覧会という装置——その過去、現在、未来」『万国博覧会と人間の歴史』研究会、京都大学吉田キャンパス
- 2019年12月17日 「無形文化遺産と地域コミュニティ」国際研究者フォーラム『無形文化遺産研究の展望——継続可能な社会にむけて』東京文化財研究所
- 2019年12月21日 「人類学と博物館——これまでとこれから」南山大学人類学研究所設立70周年記念事業公開シンポジウム『人類学と博物館——民族誌資料をどう研究するのか?』南山大学
- 2020年2月1日 「日本美術はいかに語られてきたか?——欧米の美術館・博物館の中の日本」国際シンポジウム『展示室で語る「日本美術」』東京国立博物館
- 2020年2月11日 「ICOM 京都大会を振り返る——成果と課題」ICOM (国際博物館会議) 京都大会2019記念シンポジウム『日本のミュージアムの未来』京都国立博物館

・みんなくゼミナール

- 2020年2月15日 「文明の転換点におけるミュージアム——みんなくのこれまでとこれから」第500回みんなくゼミナール

・広報・社会連携活動

- 2019年9月13日 「文化の展示の現在」JICA、国立民族学博物館
- 2019年9月26日 「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築『みんなくアフリカ展示場から』」神戸市シルバークレッジ、国立民族学博物館
- 2019年10月25日 「武器をアートに——モザンビークにおける内戦後の平和構築」日本国際連合協会関西本部、帝国ホテル
- 2020年1月20日 「武器をアートに——アフリカ・モザンビークにおける平和構築の営み」国立民族学博物館、文部科学省エントランス
- 2020年1月24日 「人類文化の多様性と普遍性——仮面をめぐる私のフィールドワークから」香川県中小企業家同友会同友会大学、香川産業頭脳化センター

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

- 2019年5月26日 「国際博物館の日 記念シンポジウム『文化をつなぐミュージアム——伝統を未来へ』パネルディスカッション」ICOM 京都大会組織委員会、京都国立博物館
- 2019年7月26日 「『未来志向のミュージアム——都市（まち）のシンボルとして』コメンテーター」千里文化財団、ホテル阪急インターナショナル
- 2019年9月29日 「みんなく研究公演『能と怪異』 対談 吉田憲司×辰巳満次郎」国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

- 2019年8月4日～8月25日—ザンビア（ザンビア国立博物館機構との協定に基づく博物館ワークショップの実施と、ザンビア東部州における文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する調査・研究）
- 2019年10月26日～11月1日—カナダ（先住民族の無形文化遺産管理に関するカナダとアフリカとの比較調査研究）
- 2020年2月21日～2月24日—カナダ（先住民族の無形文化遺産管理に関するカナダとアフリカとの比較調査研究 総括）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

- 科学研究費（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人2025年日本国際博覧会協会シニアアドバイザー、独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館評議員、公益財団法人教育美術振興会第55回教育美術・佐武賞ゲスト選考委員、公益財団法人京都服飾文化研究財団評議員、大阪府第26回山片蟠桃賞審査委員、日本民族藝術学会会長、独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター理事、ICOM 京都2019組織委員会委員、公益財団法人大阪府文化財センター評議員、公益財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、ASEMUS (Asia-Europe Museum Network) Executive Committee、African Arts (UCLA) Consulting Editor、Museum International (ICOM) Editorial Board Member、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員会委員、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、公益財団法人日本博物館協会参与、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、日本展示学会評議員、独立行政法人国立美術館国立国際美術館評議員、関西サイエンス・フォーラム理事

・他大学の客員、非常勤講師

浙江大学客員教授、放送大学客員教授

關 雄二 [せき ゆうじ] ————— 副館長（企画調整担当）、人類文明誌研究部教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学分科卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程退学（1983）【職歴】東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授・部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2016）、国立民族学博物館民族文化研究部研究部長（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）、国立民族学博物館副館長（2017）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1982）【専攻・専門】アンデス考古学、文化人類学 古代アンデス文明の形成過程、現代ペルーの文化行政、考古学と国民国家形成、世界遺産と国別の文化遺産との相互関係【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology、Institute of Andean Studies

【主要業績】

[単著]

關 雄二

2010 『アンデスの考古学 改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス——権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

[編著]

關 雄二編

2017 『アンデス文明 神殿から読み取る権力の世界』京都：臨川書店。

【受賞歴】

2019 カハマルカ州名誉勲章（ペルー）

2019 アントニオ・ギジェルモ・ウレロ大学名誉博士号

2016 外務大臣表彰

2015 ペルー文化功労者表彰

2008 濱田青陵賞

2008 科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008 クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈を行う。具体的には、ペルー北部山中パコパンバ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B.C.2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費（基盤研究（A））をあてた。

・成果

2016年度から科学研究費（基盤研究（A））を取得し、フィールドワークを含め、研究を推進した。こうした成果を、共著書1冊、論文4本として出版した。

また、6月にハンガリーで開催された第19回ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟(FIEALC)でダニエル・D・サウセド・セガミ、ルーシー・C・サラサルとともにシンポジウム『Materializando identidades: El patrimonio cultural y la formación de identidades locales, regionales y nacionales en América Latina』を組織した。

このほか、ペルー文化省とともに日本とペルーの文化交流記念シンポジウム『Protección del patrimonio cultural Peruano en el nuevo milenio: Perspectivas y experiencias de investigadores de Perú y Japón』、9月にはペルー北高地カハマルカ市の文化省カハマルカ支局で日本人調査40周年記念展示『Año de la amistad Peruano Japonesa y los 40 años de investigación de la Misión Arqueológica Japonesa en Cajamarca』および日本人調査40周年記念シンポジウム『Entre el pasado y presente: Estudios y protección del patrimonio cultural en la costa y sierra norte del Perú』、12月には東京文化財研究所においてシンポジウム『ペルーの文化遺産保護の最前線——アンデスの黄金、ナスカの地上絵、インカのミイラ』を開催し、研究発表をおこなった。これらのシンポジウムおよび展示は、文化庁から「日本ペルー交流年における文化遺産保護に係るシンポジウム等実施委託業務」の資金を得て実施した。

◎出版物による業績

[編著]

Burger, R. L., L. C. Salazar, and Y. Seki (eds.)

2020 *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC* (Yale University Publications in Anthropology 94). New Haven: Yale University Department of Anthropology and the Yale Peabody Museum of Natural History. [査読有]

[分担執筆]

関 雄二

2020 「アンデス文明におけるモニュメントと権力生成」国立歴史民俗博物館・松木武彦・福永伸哉・佐々木憲一編『日本の古墳はなぜ巨大なのか——古代モニュメントの比較考古学』pp.54-69, 東京：吉川弘文館。

Seki, Y., D. A. Paredes, M. O. Livia, and D. M. Chocano

2020 Emergence of Power during the Formative Period at the Pacopampa Site. In R. L. Burger, L. C. Salazar and Y. Seki (eds.) *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC* (Yale University Publications in Anthropology 94), pp.107-127. New Haven: Yale University Department of Anthropology and the Yale Peabody Museum of Natural History. [査読有]

Seki, Y.

2020 La centralidad del espacio social en el Periodo Formativo Temprano: Una perspectiva desde el Norte de los Andes Centrales. In R. Vega-Centeno and J. Dulanto(eds.) *Los desafíos del tiempo, el espacio y la memoria: Ensayos en homenaje a Peter Kaulicke*, pp.309-338. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú. [査読有]

Sakai, M., S. Shibata, T. Takasaki, J. P. H. Villanueva, and Y. Seki

2020 Monumental Architecture, Stars, and Mounds at the Temple of Pacopampa: The Rising Azimuth of the Pleiades and Changing Concepts of Landscape. In R. L. Burger, L. C. Salazar and Y. Seki (eds.) *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC* (Yale University Publications in Anthropology 94), pp.129-148. New Haven: Yale University Department of Anthropology and

the Yale Peabody Museum of Natural History. [査読有]

[論文]

- Nakagawa, N., Y. Seki, J. P. H. Villanueva, M. Ordoñez, D. Alemán, and D. M. Chocano
2019 El proceso del complejo arqueológico Pacopampa. *Actas del V Congreso Nacional de Arqueología* volumen 1: 199-209 (CD-ROM).
- Nakagawa, N., J. P. H. Villanueva, Y. Seki, and D. M. Chocano
2019 La cerámica utilizada en el festín en Pacopampa durante el Periodo Formativo. *Actas del IV Congreso Nacional de Arqueología* volumen 2: 7-15 (CD-ROM).
- Nagaoka, T., Y. Seki, J. P. H. Villanueva, and D. M. Chocano
2020 Bioarchaeology of Human Skeletons from an Elite Tomb at Pacopampa in Peru's Northern Highlands. *Anthropological Science*. (doi.org/10.1537/ase.200218) [査読有]

[その他]

関 雄二

- 2019 「カハマルカの温泉」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』59：3。
2019 「マチュ・ピチュ生中継」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』60：3。
2020 「書評：古谷嘉章著『縄文ルネサンス』」『西日本新聞』3月28日。

◎映像音響メディアによる業績

・TV・ラジオ番組などの制作・監修

関 雄二監修・出演

- 2019年6月1日～6月2日 「謎の天空遺跡 マチュピチュ大中継」NHK 4K、NHK BSプレミアム（出演）
2020年2月23日 「世界遺産 チャン・チャン遺跡地帯——アメリカ大陸最大！土でできた古代都市」TBS（監修）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2019年12月14日 「パコパンパ遺跡——金製品の発見と地域文化遺産の保護」ペルー日本人移住120周年・日本ペルー交流年記念シンポジウム『ペルーの文化遺産保護の最前線——アンデスの黄金、ナスカの地上絵、インカのみイラ』東京文化財研究所

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年6月28日 'Relacionando el patrimonio cultural material e inmaterial par su uso y protección en la sierra norte del Perú.' XIX Congreso de la FIEALC, Departamento de Estudios Hispánicos, Universidad de Szeged, Szeged, Hungary
- 2019年8月9日 'Pacopampa: Arquitectura y poder en el Periodo Formativo de la sierra norte del Perú.' Simposio Internacional CHAVÍN "100 años de arqueología desde Julil C. Tello hasta nuestros días", Auditorio del Centro Cívico de la Municipalidad Distrital de Chavín de Huántar, Ancash, Perú
- 2019年8月13日 'Las investigaciones ye el uso social del sitio arqueológico Pacopampa.' "VI Congreso Nacional de Arqueología, Simposio por el de Amistad entre Japón y Perú", Ministerio de Cultura del Perú, Cajamarca, Perú
- 2019年9月6日 'Pacopampa: 14 años de investigación y conservación del patrimonio cultural local.' "Simposio conmemorativo por los 120 años de la inmigración japonesa / Año de la amistad Peruano Japonesa y los 40 años de investigación de la Misión Arqueológica", Campo Santo, Complejo Monumental Belén-DDC-Cajamarca, Cajamarca, Perú

・広報・社会連携活動

- 2019年4月20日 「チャビン問題再考」アンデス文明研究会
2019年6月10日 「南米アンデス文明の探求——なぜ神殿を掘るか？」川西公民館集会室
2019年6月24日 「南米アンデス文明の探求——アンデスの文化遺産の保護と活用」川西公民館
2019年7月8日 「池田市制施行80周年記念中央公民館特別講座『アンデス文明の謎を追って 日本の考古学調査60年』」池田市中央公民館大ホール
2019年9月28日 「現代における持続可能な文化遺産の保護——アンデス文明調査での経験から」関西広域連合／歴史街道推進協議会／文化庁地域文化創生本部、堺市総合福祉会館

- 2019年10月1日 「アンデスの文化遺産をめぐる問題——盗掘の実態」 阪神シニアカレッジ
- 2019年10月1日 「アンデス文明の神殿を掘る」 阪神シニアカレッジ
- 2019年10月5日 「アンデスの古代遺跡とそこに暮らす人々」(県立図書館とことん活用講座) 岡山県立図書館
- 2019年12月21日 「パコパンバ追跡調査概報2019」 アンデス文明研究会
- 2019年12月22日 「アンデスの世界 神殿のひみつ」 2019 地球たんけんたい⑧ワークショップ
- 2020年1月10日 「アンデス先住民と文化遺産——インカをめぐる葛藤」 阪神シニアカレッジ
- 2020年1月10日 「マチュ・ピチュの発見と出土品の行方」 阪神シニアカレッジ

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員(2人)、副指導教員(2人)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(基盤研究(A))「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」研究代表者、科学研究費(基盤研究(B))「生物考古学資料にもとづく古代アンデス社会の複雑化過程の解明」(研究代表者: 鶴澤和宏(東亜大学))研究分担者、科学研究費(基盤研究(B))「先住民の視点からグローバル・スタディーズを再構築する領域横断研究」(研究代表者: 池田光穂(大阪大学))研究分担者、金沢大学戦略的研究推進プログラム超然プロジェクト「古代文明の学際的研究の世界的拠点形成」(研究代表者: 河合 望(金沢大学))プロジェクト担当者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

東京大学総合研究博物館外部評価委員、日本ユネスコ国内委員会文化活動小委員会ユネスコ「世界の記憶」選考委員会委員、公益財団法人高梨学術奨励基金選考委員、金沢大学研究域附属研究センター外部評価委員、文化遺産国際協力コンソーシアム副会長、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員、金沢大学国際文化資源学研究所センターアドバイザー、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、アンデス文明研究会顧問

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]——副館長(研究・国際交流・IR担当)、グローバル現象研究部教授

【学歴】東北大学文学部社会学専攻卒(1988)、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了(1992)、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了(1998)【職歴】国立民族学博物館第一研究部助手(1995)、国立民族学博物館民族文化研究部助手(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(2001)、国立民族学博物館研究戦略センター教授(2013)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授(2017)、国立民族学博物館人類文明誌研究部部长(2018)、国立民族学博物館副館長(2019)、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授(2019)【学位】Ph.D.(ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部1998)、M.Sc.(ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部1992)【専攻・専門】社会人類学 水俣病被害者支援運動の人類学的研究、タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute

【主要業績】

[単著]

平井京之介

2011 『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』東京: NTT出版。

[編著]

平井京之介編

2012 『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』京都: 京都大学学術出版会。

Hirai, K. (ed.)

2015 *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、熊本県水俣において、水俣病という悲惨な出来事を伝える場所やモノがいかんして「負の遺産」として保存されるようになったか、水俣病紛争が沈静化した現在の水俣社会においてそれらはどのような役割を果たしているかを明らかにすることである。本研究では、①水俣病被害者が運動のなかで収集してきたモノや記録が1990年代以降になって、いかんして「遺産」と認識されるようになったか、②行政がどのような経緯でそれらを「負の遺産」として保存・活用するようになったか、③「負の遺産」は社会においてどのような役割をもつか、を解明することを具体的な研究目的とする。なお、当研究に関わる現地調査においては、自身が代表を務める科学研究費（基盤研究（C））を利用する。

・成果

水俣病に関わる「負の遺産」の保存・活用の実態とその歴史的経緯を把握するために、科学研究費（基盤研究（C））を利用して、水俣病を語り継ぐ会や水俣市立水俣病資料館、熊本県水俣病保健課などを対象とする約50日間の現地調査を実施した。調査の中心になったのは、1990年以降に水俣病問題に関連する行政の施策に参加してきた関係者からの聞き取り調査と、現在、行政およびNPO団体が実施している水俣病の教訓に関する教育普及活動への参与観察である。特に、水俣病資料館の博物館活動と、熊本県水俣病保健課が水俣病を語り継ぐ会と共同で実施する水俣病啓発事業について重点的に調べた。さらに、本研究の調査結果をまとめ、来年度の投稿に向けて論文執筆を進めた。

◎出版物による業績

[その他]

平井京之介・黄 貞燕・日高真吾・謝 仕淵・林 奎妙・寺村裕史・川村清志

2019 「総合討論」『地域文化を保存する——実践者の視点から』pp.203-230, 大阪：国立民族学博物館。

平井京之介・林 琮穎

2019 「挑戦公害病及其汙名——日本水俣病事件的博物館実践」『中華民国博物館学会』。

平井京之介

2019 「書評：永野三智著『みな、やっとの思いで坂をのぼる——水俣病疾患相談のいま』』『ごんずい』154：10-11。

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「ポスト紛争期の水俣における『負の遺産』の生成過程に関する博物館人類学的研究」研究代表者

人類基礎理論研究部

園田直子 [そのだ なおこ] ————— 部長（併）教授

【学歴】 Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学文学部美術史と考古学・美術史卒(1980)、Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学 / U.E.R Art et Archéologie/ Maîtrise des Sciences et Techniques: Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques 修士課程修了(1982)、Ecole du Louvre エコール・ド・ルーブル卒(1983)、Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学 / Histoire de l'art 美術史博士課程修了(1987) 【職歴】 Direction des Musées de France / Labora-

toire de recherche des musées de France / アメリカ・グッティエー財団との共同プロジェクト研究員(1987)、Direction des Musées de France / Service de restauration des peintures des musées nationaux / assistante scientifique (1989)、国立歴史民俗博物館助手 (1991)、国立民族学博物館第5研究部助手 (1993)、国立民族学博物館第5研究部助教授 (1997)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授 (1998)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (1999)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授 (2004)、国立民族学博物館文化資源研究センター教授 (2007)、国立民族学博物館民族社会研究部教授 (2016)、国立民族学博物館民族社会研究部研究部長 (2016)、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授 (2017)、国立民族学博物館人類基礎理論研究部研究部長 (2017) 【学位】 博士 (美術史) Doctorat de 3ème cycle en Histoire de l'art (Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学 1987)、科学技術修士 Maîtrise des Sciences et Techniques - Spécialité: Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques (Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学 1982)、文学士 Licence es Lettres (Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学1980) 【専攻・専門】 保存科学 【所属学会】 ICOM (国際博物館会議)、IIC (国際文化財保存学会)、IIC-Japan (国際文化財保存学会日本支部)、文化財保存修復学会

【主要業績】

[編著]

Sonoda, N. (ed.)

2016 *New Horizons for Asian Museums and Museology*. Singapore: Springer.

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学 (第2版)』東京：岩田書院。

[学位論文]

園田直子

1987 *Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse*. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain, Thèse de Doctorat de 3ème cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2019 文化財保存修復学会第13回学会賞

2010 文化財保存修復学会第4回業績賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

持続可能な資料管理に向けた収蔵庫再編成

・研究の目的、内容

本館における収蔵庫再編成は、単なる狭隘化対策ではなく、保存科学研究と連動した持続的な資料管理の一環として、IPM (総合的有害生物管理) 研究の延長線上に位置づけている。これまで民族資料を対象とした収蔵庫再編成の手法に関しては、小型・中型資料 (特別収蔵庫 〈毛皮〉 〈絨毯〉 〈漆器〉)、第3収蔵庫) と大型資料 (多機能資料保管庫 〈船〉、第1収蔵庫)、それぞれにおいて確立してきた。本年度は、衣類資料の収納・保管方法のプロトタイプの完成を目指すとともに、生物被害にあいやすい資料を対象とした不活性雰囲気での資料保管法の継続調査と検証をおこなう。また、2018年の大阪府北部を震源とした地震は、収蔵庫における収納・保管方法の安全性、有効性を検証する契機ともなった。このうち改善が必要な事項について対応策を検討する。

・成果

収蔵庫の狭隘化対策はいずれの館においても大きな課題である。本館においては、長期的視点のもと、計画的に収蔵庫再編成に取り組んでいる。本館の収蔵庫再編成においては、資料にとって安全な配架・収納であることは当然ながら、研究者が調査・閲覧しやすいことにも留意している。2018年の地震による収蔵庫の被害とその直後の対応については、2019年6月に開催された第41回文化財保存修復学会で発表し、本館の経験を開連分野の研究者と共有した。収蔵庫に関わる調査・活動の詳細とそこから得た知見は、「国立民族学博物館における大阪府北部を震源とする地震による収蔵庫の被害と対応」として論文にまとめた (『国立民族学博物館研究報告』44巻1号 (2019))。

◎出版物による業績

[編著]

Sonoda, N. (ed.)

- 2019 *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2020 *Museums and Community Development*. Kyoto: Organizing Committee of the ICOM Kyoto session "Museums and community development".

[論文]

園田直子

- 2019 「国立民族学博物館における大阪府北部を震源とする地震による収蔵庫の被害と対応」『国立民族学博物館研究報告』44(1)：1-51。[査読有]

Sonoda, N.

- 2019 Introduction. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.1-7. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2019 Sustainable Collection Management in a 1970s Building: A Case Study of the National Museum of Ethnology, Osaka. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.39-55. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2019 Environmentally Friendly Pest Control Treatment Facilities at the National Museum of Ethnology, Osaka. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.87-95. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2020 About the Publication of Museums and Community Development. In N. Sonoda (ed.) *Museums and Community Development*, pp.1-5. Kyoto: Organizing Committee of the ICOM Kyoto session "Museums and community development".

[その他]

田中祐輝・岡山隆之・小瀬亮太・関 正純・園田直子

- 2019 「微細セルローズファイバー塗工による脆弱化した経年紙資料の強化処理」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会於東京研究発表要旨集』pp.130-131。[査読有]

河村友佳子・園田直子・日高真吾・末森 薫・橋本沙知・和高智美・川越和四・富岡康浩

- 2019 「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会於東京研究発表要旨集』pp.290-291。[査読有]

橋本沙知・日高真吾・園田直子・河村友佳子・末森 薫・西澤昌樹

- 2019 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会於東京研究発表要旨集』pp.218-219。[査読有]

末森 薫・園田直子・日高真吾

- 2019 「オランダにおける資料管理・収蔵施設の動向——持続可能な共有型収蔵施設の建設」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会於東京研究発表要旨集』pp.272-273。[査読有]

日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸江

- 2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会於東京研究発表要旨集』pp.206-207。[査読有]

園田直子・日高真吾・末森 薫・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸江・和高智美

- 2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会於東京研究発表要旨集』pp.208-209。[査読有]

園田直子

- 2019 「収蔵庫再編成とその舞台裏」特集「みんなの収蔵庫」『月刊みんなく』43(4)：2-3。
- 2019 「学会賞・受賞者の声」『文化財保存修復学会通信』165：2。
- 2020 「ICOM日本・国立民族学博物館 Museums and Community Development 博物館とコミュニティ開発」『ICOM 京都大会準備室編「文化をつなぐミュージアム——伝統を未来へ」第25回 ICOM (国際博物館会議) 京都大会2019報告書』p.117, 京都：ICOM 京都大会2019組織委員会。

Okayama, T., Y. Tanaka, R. Kose, M. Seki, and N. Sonoda

2019 A Paper Strengthening Method Combined with Mass Deacidification: Applicability of Fine Cellulose Fibre Coating with Vacuum Drying. *XIVth Congress Warsaw 2019, International Association of Book and Paper Conservators (IADA)*, p.18. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年5月19日 'Conservation Research on Ethnological Collection.' International Museum Day Forum "Museum as Cultural Hubs: The Future of Tradition", National Museum Nay Pyi Taw, Mini Theater Hall, Myanmar
- 2019年6月22日 (田中祐輝・岡山隆之・小瀬亮太・関 正純・園田直子と共同発表)「微細セルロースファイバー塗工による脆弱化した経年紙資料の強化処理」文化財保存修復学会第41回大会、ポスター発表、帝京大学八王子キャンパス
- 2019年6月23日 (末森 薫・園田直子・日高真吾と共同発表)「オランダにおける資料管理・収蔵施設の動向——持続可能な共有型収蔵施設の建設」文化財保存修復学会第41回大会、ポスター発表、帝京大学八王子キャンパス
- 2019年6月23日 (橋本沙知・日高真吾・園田直子・河村友佳子・末森 薫・西澤昌樹と共同発表)「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会第41回大会、ポスター発表、帝京大学八王子キャンパス
- 2019年6月23日 (園田直子・日高真吾・末森 薫・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸江・和高智美と共同発表)「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、ポスター発表、帝京大学八王子キャンパス
- 2019年6月23日 (日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸江と共同発表)「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、ポスター発表、帝京大学八王子キャンパス
- 2019年6月23日 (河村友佳子・園田直子・日高真吾・末森 薫・橋本沙知・和高智美・川越和四・富岡康浩と共同発表)「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」文化財保存修復学会第41回大会、ポスター発表、帝京大学八王子キャンパス
- 2019年9月23日 (Okayama, T., Y. Tanaka, R. Kose, M. Seki, and N. Sonoda) 'A Paper Strengthening Method Combined with Mass Deacidification: Applicability of Fine Cellulose Fibre Coating with Vacuum Drying.' *XIVth Congress Warsaw 2019, Polin Museum - Auditorium, Warsaw, Poland*
- 2019年12月5日 'Risk Mitigation and Risk Prevention for Storage - With Special Reference to National Museum of Ethnology, Osaka.' Seminar on Conservation and Storage Management for Paintings and Fabric Artefacts for Museum Professionals in the ASEAN Countries, Mingalar Thiri Hotel, Nay Pyi Taw, Myanmar

◎調査活動

・海外調査

- 2019年5月17日～5月21日—ミャンマー (ミャンマー「国際博物館の日」フォーラムでの講演)
- 2019年9月22日～9月29日—ポーランド (IADA (図書・紙の国際保存修復協会) 大会参加と発表)
- 2019年12月2日～12月6日—ミャンマー (ASEAN 諸国の博物館専門家を対象とする国際セミナーでの司会および講演)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費 (基盤研究 (A)) 「ネットワーク型博物館学の創成」(研究代表者: 須藤健一) 研究分担者、科学研究費 (基盤研究 (B)) 「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」研究代表者、科学研究費 (基盤研究 (B)) 「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」(研究代表者: 日高真吾) 研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

京都橋大学「国立民族学博物館での資料管理」、京都橋大学「民族資料の収蔵と保管」

出口正之 [でぐち まさゆき] 教授

1955年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）【職歴】ジョンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教授（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2017）【専攻・専門】NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学【所属学会】国際NPO・NGO学会（ISTR=International Society for Third Sector Research）、非営利法人研究学会、日本文化人類学会、日本NPO学会

【主要業績】

[著書]

出口正之

1993 『フィランソロピー』東京：丸善出版。

[共編]

Vinken, H., Y. Nishimura, B. L. J. White, and M. Deguchi (eds.)

2010 *Civic Engagement in Contemporary Japan*. New York, Dordrecht, Heidelberg and London: Springer.

本間正明・出口正之編

1996 『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

【受賞歴】

1995 ESP 大来佐武郎賞

1988 東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞

1988 日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

トランスフォーマティブな非営利研究/サイバー空間のフィールドワーク

・研究の目的、内容

トランスフォーマティブな非営利研究は、科学研究費補助金挑戦的研究（開拓）「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」を中心とした研究である。新しい分野の研究に積極的に挑戦して行く。あわせて、「民都・大阪」フィランソロピー会議議長として、「ビジネスセントリズム」に基づかない文化人類学的な視点により、本研究の成果として、地域社会貢献の実績を積んでいく。研究は、Shore & Wright (1999) が主張する「地理的フィールド」ではない「社会的かつ政治的空間としてのフィールド」を研究対象としたものであり、実際の政策に適用していくことによって一層の研究を深めていく。また、昨年度からは、21世紀社会の新現象である「サイバー空間」もShore & Wrightのいう「フィールド」として捉えることで、萌芽的に「サイバー空間」のフィールドワークにも挑戦し、メールにおけるデータ収集を行う。Shore, C., & Wright, S. (Eds.). (1997). *Anthropology of policy: Perspectives on governance and power*. Routledge.

Budka, P., & Kremser, M. (2004). *Cyberanthropology-anthropology of cyberculture*. in Khittel, S., Planckensteiner, B., & Six-Hohenbalken, M. eds. *Contemporary Issues in Socio-cultural Anthropology. Perspectives and Research Activities from Austria*. Wien: Löcker.

・成果

出口正之

2020/02/01 「難産だった米国企業フィランソロピー」（フィランソロピー寄付探訪）『「フィランソロピー」』（396）：22-22. 東京：公益社団法人日本フィランソロピー協会。

出口正之

2019/10/01 「『社会的インパクト評価』とエドセルの法則」(フィランソロピー寄付探訪)『フィランソロピー』(394):22-22. 東京:公益社団法人日本フィランソロピー協会。

出口正之

2019/08/01 「『まちかどのフィランソロピー』のバトンの行く先」(フィランソロピー寄付探訪)『フィランソロピー』(393):22-22. 東京:公益社団法人日本フィランソロピー協会。

出口正之

2019/07/01 「ヨーロッパ財団センターの30周年年次大会『自由・平等・フィランソロピー』に参加して」『JFC Views』(97):5-5. 東京:公益財団法人助成財団センター。

出口正之

2019/06/01 「ロックフェラーの愛した用語」(フィランソロピー寄付探訪)『フィランソロピー』(392):22-22. 東京:公益社団法人日本フィランソロピー協会。

Deguchi, M.

2019/05/28 “The Universality of Philanthropy” Alliance Magazine.
<https://www.alliancemagazine.org/blog/the-universality-of-philanthropy/>

出口正之

2019/05/01 「改革の趣旨と第三者機関の役割」『公益・一般法人』(986):1-1. 東京:全国公益法人協会。

[口頭発表]

出口正之

2019/10/05 「アウトサイダーから見た論理矛盾」会計制度・政策研究会臨時研究会、関西大学梅田キャンパス

出口正之

2019/09/15-2019/09/16 「税制優遇のルビンの壺: 価値的多様性と手段的多様性の奨励」非営利法人研究会全国大会、久留米大学: 招待講演

出口正之

2019/07/15-2019/07/16 Shifting Sands of dormant accounts policy for public interest activities in Japan: global trend and Japanese culture, The 11th International Society for Third Sector Research, Asia Pacific Regional Conference, Bangkok

Deguchi, M.

2019/04/20-2019/04/21 Applying for a government grant as ritual process?: Anthropological perspective on Japan's "sleeping account funds", AJJ(Anthropology of Japan in Japan) Spring Workshop 2019, National Museum of Ethnology 招待講演

◎出版物による業績

[その他]

出口正之

2019 「改革の趣旨と第三者機関の役割」『公益・一般法人』986:1。

2019 「寄付探訪④ ロックフェラーの愛した用語」『フィランソロピー』392:22。

2019 「ヨーロッパ財団センターの30周年年次大会『自由・平等・フィランソロピー』に参加して」『JFC Views』97:5。

2019 「寄付探訪⑤ 『まちかどのフィランソロピー』のバトンの行く先」『フィランソロピー』393:22。

2019 「寄付探訪⑥ 『社会的インパクト評価』とエドセルの法則」『フィランソロピー』394:22。

2020 「寄付探訪⑧ 難産だった米国企業フィランソロピー」『フィランソロピー』396:22。

Deguchi, M.

2019 The Universality of Philanthropy. *Alliance*.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年4月20日 ‘Applying for a Government Grant as Ritual Process?: Anthropological Perspective on Japan's “Sleeping Account Funds”’, “AJJ(Anthropology of Japan in Japan) Spring Workshop 2019”, National Museum of Ethnology

2019年7月15日 ‘Shifting Sands of Dormant Accounts Policy for Public Interest Activities in Japan: Global

Trend and Japanese Culture.' The 11th International Society for Third Sector Research, Asia Pacific Regional Conference, Bangkok, Thailand

2019年9月15日 「税制優遇のルビンの壺——価値的多様性と手段的多様性の奨励」非営利法人研究会全国大会、久留米大学

2019年10月5日 「アウトサイダーから見た論理矛盾」会計制度・政策研究会臨時研究会、関西大学梅田キャンパス

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年8月25日 「えっ、何で博物館で会計の話？ おかねの言語体系『会計』と人類学」第552回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2019年5月20日～5月26日—フランス（ヨーロッパ財団センター主催 会議「自由・平等・フィランソロピー」に出席）

2019年7月12日～7月18日—タイ（国際学会 ISTR での研究発表）

2019年12月2日～12月6日—台湾（台北大学訪問及びSocial Value International Conference 2019: Social Value Matters, Going Mainstream に参加）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」研究代表者

日高真吾 [ひだか しんご] ————— 教授

1971年生。【学歴】東海大学文学部史学科日本史学専攻卒（1994）【職歴】（財）元興寺文化財研究所研究員（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（2002）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助手（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2019）【学位】文学博士（東海大学2005）【専攻・専門】保存科学、保存修復【所属学会】文化財保存修復学会

【主要業績】

[単著]

日高真吾

2015 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』大阪：千里文化財団。

2008 『女乗物——その発生経緯と装飾性』平塚：東海大学出版会。

[編著]

日高真吾編

2012 『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』大阪：千里文化財団。

【受賞歴】

2016 文化財保存修復学会業績賞

2009 日本文化財科学会第4回ポスター賞

2008 文化財保存修復学会第2回奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

地域文化の再発見とその表象システムの構築

・研究の目的、内容

本研究では、グローバル化や災害を原因として大きな変貌を遂げている地域社会において、どのように文化が

継承され、新たな文化が構築されているのかについて調査・研究をおこなう。さらに、地域社会の動向に対して人間文化研究がいかに貢献しうるかを考察することを研究の主眼とする。

この研究からは、①豊かな地域社会の創生に向け、災害時における地域文化の重要性の提示、②博物館を積極的に活用し、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを住民自身が感じることができるとするプログラムの策定、③地域の文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築、④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指す。

なお、本研究を進めるにあたっては、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表 日高真吾）および、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（代表 日高真吾 18H00760）の研究プロジェクトと関連づけながら実施する。

・成果

2019年度は、①豊かな地域社会の創生に向け、災害時における地域文化の重要性の提示について、特別展「復興を支える地域の文化——3.11から10年」（仮称）を2021年3月から開催するための準備を開始した。②博物館を積極的に活用し、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを住民自身が感じることができるとするプログラムの策定では、村上市教育委員会の民俗資料を対象として、小学校の授業で使用可能な教育キットの学校運用を開始した。③地域の文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築では、台北芸術大学との協定のもと、地域文化の活用に着目した国際フォーラム『地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割』を開催した。④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指す点では、2018年度に実施した京都造形芸術大学における連続講座「民俗文化財の保存・活用入門」の成果を2021年3月から開催の特別展「復興を支える地域の文化——3.11から10年」（仮称）にあわせて刊行する準備を整えた。

以上の研究は、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表 日高真吾）および、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（代表 日高真吾 18H00760）の研究プロジェクトと関連づけながら実施した。

◎出版物による業績

[編著]

日高真吾・黄 貞燕編

2019 『地域文化を保存する——実践者の視点から』京都：Knit-K。

[論文]

日高真吾

2019 「大阪府北部を震源とする地震で被災した国立民族学博物館の復旧活動」国立民族学博物館編『国立民族学博物館研究報告』44(1)：53-127。[査読有]

2019 「被災した国立民族学博物館の取り組み事例について——展示施設を中心に」文化財虫菌害研究所編『文化財の虫菌害』78：10-15。

2020 「災害と地域文化——研究者が果たす役割」民族藝術学会編『民族藝術学会誌 arts/』36：42-45。

Hidaka, S.

2019 Mobile and Non-Chemical Pest Control Measures Applicable to Small-Size Museums. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.69-84. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年10月30日 「博物館の事前学習のための教育キット——地域文化の宝箱」国際フォーラム『地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割』宜蘭県立蘭陽博物館、宜蘭県、台湾

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月22日 「3Dスキャナーによる判読困難な津波碑の文字情報取得の可能性」第41回文化財保存修復学会大会、帝京大学

2019年6月22日 「オランダにおける資料管理・収蔵施設の動向——持続可能な共有型収蔵施設の建設」第41回文化財保存修復学会大会、帝京大学

2019年6月22日 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」第41回文化財保存修復学会大会、帝京大学

- 2019年6月22日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」第41回文化財保存修復学会大会、帝京大学
- 2019年6月22日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」第41回文化財保存修復学会大会、帝京大学
- 2019年6月22日 「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」第41回文化財保存修復学会大会、帝京大学
- 2019年11月10日 「学校教育における民具の活用 地域文化の宝箱の展望と課題」日本民具学会第44回大会、桜美林大学
- 2019年12月22日 「フォーラム型情報ミュージアム『時代玩具コレクションデータベース』について」近畿民具学会2019年度研究大会、大東市立歴史民俗資料館

・展示

2019年3月21日～5月28日 特別展「子ども／おもちゃの博覧会」国立民族学博物館

・みんなくウィークエンド・サロン

2019年4月14日 「戦後のおもちゃ」第539回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2019年4月2日～4月3日 一高知県南国市（津波碑調査）

2019年4月8日 一 大妻女子大学（大妻女子大学の特別展についての意見交換および時代玩具コレクションDBに関する研究会）

2019年4月9日 一 セカンドブレン（寺社石碑DB改修についての検討会）

2019年4月15日 一 大徳寺（京都府9（土蔵の環境調査））

2019年4月21日 一 枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館（鋳物に関する教育パックについての研究会）

2019年4月22日～4月23日 一 高知県南国市琴平神社（津波碑の3Dスキャナー調査）

2019年5月11日～5月12日 一 国立民族学博物館（地域文化を対象とした教育パックに関する研究会）

2019年5月12日～5月13日 一 岩川八幡神社（鹿児島県大隅町）・西都原考古博物館（宮崎県西都市）（弥五郎どん祭りの基本調査と宮崎県西都原考古博物館の博物館活動の調査）

2019年6月8日～6月10日 一 大分県豊後高田市（お田植え祭りの調査）

2019年6月11日～6月12日 一 新潟県村上市（地域文化を対象とした教育パックの学校運用の可能性についての意見交換）

2019年6月28日～6月29日 一 能生町白山神社（新潟県糸魚川市）（宝物庫の環境調査）

2019年7月20日 一 滋賀県日野市馬見岡綿向神社（馬見岡綿向神社祭礼渡御図絵馬の調査および日野大祭の調査）

2019年7月24日～7月25日 一 滋賀県米原市・富山県南礪波市・石川県金沢市（米原市及び城端曳山の山蔵の環境調査と江戸村の活動調査）

2019年7月29日 一 熊本県水俣市（水俣病候所管の展示資料の状態調査）

2019年8月3日 一 福井県越前市（曳山の山蔵の実態調査）

2019年8月5日～8月7日 一 新潟県村上市（教育パックの展示と説明会の開催）

2019年8月9日～8月10日 一 熊本県熊本市（熊本地震関連シンポジウムに関する打ち合わせ）

2019年8月24日～8月26日 一 岩手県釜石市（東日本大震災で被災した明治の津波碑の状態調査と修復に向けた意見交換）

2019年9月1日～9月4日 一 京都国際会館（ICOM京都大会での障害者向け展示ツールの展示）

2019年9月4日～9月5日 一 香川県観音寺市神恵院観音寺（教育活用を目的とした涅槃像の複製品の制作）

2019年9月19日～9月20日 一 愛知県豊橋市（津波碑の調査）

2019年9月24日～9月26日 一 新潟県村上市小川小学校（小川小学校における教育パック活用のための意見交換）

2019年9月30日～10月1日 一 国立民族学博物館（気仙沼市の魚食をテーマとした教育パックに関する意見交換）

2019年10月13日 一 滋賀県米原市（米原曳山祭りの調査）

2019年10月16日～10月17日 一 東京都国立市・神奈川県川崎市（台風19号による被災博物館等施設の状況調査）

2019年10月21日～10月22日 一 熊本県熊本市（被災した熊本城の復興に関する実態調査）

2019年11月29日 一 愛知県豊橋市（津波碑関連の調査）

2020年1月14日～1月16日 一 神奈川県川崎市（台風19号で被災した川市民ミュージアム民具資料の今後の教育利用の可能性についての意見交換）

2020年2月2日～2月3日—国立民族学博物館（教育パックの利用も含めた東日本大震災から10年の展示会についての研究会）

2020年2月22日～2月24日—新潟県村上市・十日町市（教育パック運用に関する意見交換と東日本大震災関連展示の打ち合わせ）

・海外調査

2019年4月26日～4月29日—台湾（台北市・宜蘭市にて国際フォーラムの打ち合わせおよび宜蘭の蘭陽博物館及び淡水の古蹟博物館の調査）

2019年10月12日～10月17日—中国（敦煌莫高窟における壁画技法・材料の調査）

2019年10月28日～11月4日—台湾（国際フォーラム「地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割」での発表及び意見交換）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「アイヌ民族の衣文化交流——博物館資料から北東アジア史を見直す」（研究代表者：佐々木史郎（独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館））研究分担者、科学研究費（挑戦的研究（萌芽））「被災地芸能の二次創作に関する実践研究」（研究代表者：橋本裕之（大阪市立大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「時代玩具コレクションの公開プロジェクト」研究代表者、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「地域における歴史文化研究拠点の構築」（研究代表者：小池淳一）メンバー、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

一般社団法人文化財保存修復学会理事、日本展示学会理事

川瀬 慈 [かわせ いつし] ————— 准教授

1977年生。【学歴】立命館大学文学部卒（2001）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2010）【職歴】日本学術振興会特別研究員PD/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（2007）、日本学術振興会海外特別研究員/マンチェスター大学グラナダ映像人類学センター（2010）、メケレ大学 Abba Gorgoryos Guest Professor（2011）、SIC-Sound Image Culture 客員講師（2011）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2012）、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所 Hiob Ludolf Guest Professor（2013）、プレーメン大学人類学・文化調査学部客員教授（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科2010）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科2007）【専攻・専門】アフリカ研究、映像人類学、民族誌映画制作【所属学会】英国王立人類学協会、日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

[単著]

川瀬 慈

2018 『ストリーートの精霊たち』京都：世界思想社。

[編著]

川瀬 慈編

2019 『あふりこ——フィクションの重奏／遍在するアフリカ』東京：新曜社。

[論文]

Kawase, I.

- 2017 ETHNOGRAPHIC FILMMAKING IN ETHIOPIA, the Approach and the Film Reception. In S. Dinslage and S. Thubauville (eds.) *Seeking out wise old men: Six decades of Ethiopian Studies at the Frobenius Institute revisited* (Studien zur Kulturkunde 131), pp.75-86. Berlin: Reimer-Verlag.

【受賞歴】

- 2019 第6回鉄犬ヘテロトピア文学賞
 2013 第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞
 2008 最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovative イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画の研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、自身の映画制作や上映活動を事例に、コミュニケーションによって生成する人類学的な映像実践を示すことにある。報告者は、撮影者の存在や行動を前景化し、撮影の過程でかわされる撮影者・被写体間の議論を映像の中であえて開示し、撮影プロセスを明示する方法論を発展させてきた。民族誌映画においては、観察型、解説型の映画様式が重視され、制作中の撮影者・被写体間の相互作用や、映画を視聴する幅広いアクターの役割が軽視される傾向にあった。そのようななか本研究では、民族誌映画を固定的で完結した表象としてではなく、視聴する人々とのたえまない相互作用のなかに位置づける。さらにその相互作用が、研究の新たな展開を生成させる創発的な営みであることを自身の民族誌映画制作の実践や映画公開の活動を基軸に提示し、論文としても発表する。

・成果

2019年度は研究課題に関する複数の著作を執筆し、発表することができた。まず、映像人類学の研究論集『ジャン・ルーシュ——映像人類学の越境者』（千葉文夫、金子遊編、森話社、2019年）にフランスの映像人類学者ジャン・ルーシュの映像民族誌の制作方法論を分析すると同時に、自身の方法論を省察的に検討する論考を発表。人類学者による小説集『あふりこ——フィクションの重奏／遍在するアフリカ』（川瀬 慈編、新曜社、2019年）においては、アフリカでの音楽職能集団を対象にした人類学調査の成果を小説の形式で公開した。Senri Ethnological Studies 102には国立民族学博物館が所蔵するドイツの映像百科事典 *Encyclopedia Cinematographica* の使用事例に立脚し、アーカイブ映像の創造的な活用を提案する論考を発表した。また、科学研究費（基盤研究（C））「アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究」の資金で、エチオピア北部の音楽芸能を中心とした無形文化の調査と映像記録を実施し（8-9月）、複数の映像民族誌の制作に取り組んだ。エチオピア政府によって、ユネスコ世界無形文化遺産登録への申請準備がすすめられているお祭り「アシェンダ」を対象にした映像民族誌では、行政によって「文化遺産」としての価値を付与され、構築される祭りの記録を、現地の人々の祭りに対する多様な願いや個人的な記憶をとりいれながら制作し、完成させた。

◎出版物による業績

[編著]

川瀬 慈編

2019 『あふりこ——フィクションの重奏／遍在するアフリカ』東京：新曜社。

[分担執筆]

川瀬 慈

2019 「神々との終わりなきインプロヴィゼーション」千葉文夫、金子 遊編『ジャン・ルーシュ——映像人類学の越境者』pp.167-184, 東京：森話社。

[論文]

Kawase, I.

2019 Exploring the Creative Use of Germany's *Encyclopedia Cinematographica*. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.157-164. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

川瀬 慈 監修

2020 『アシェンダ！ エチオピア北部地域社会の女性のお祭り』（ビデオテープ 番組番号7251）（日本語・38分）

◎調査活動

・海外調査

2019年5月15日～5月27日—エチオピア（エチオピア、ティグレイ族の祭り“アシェンダ”を対象とした映像民族誌の制作）

2019年8月18日～9月2日—エチオピア（エチオピアの音楽職能集団アズマリの都市における活動調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習Ⅰ」、「地域文化学基礎演習Ⅱ」、「比較文化学基礎演習Ⅰ」、「比較文化学基礎演習Ⅱ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究」研究代表者

菊澤律子 [きくさわ りつこ] ————— 准教授

1967年生。【学歴】東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程退学（1995）、ハワイ大学大学院言語学部言語学専攻博士課程修了（2000）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2005）、総合研究大学院大学人文科学研究科准教授（2006）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】Ph. D. (Linguistics)（ハワイ大学2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）【専攻・専門】言語学 音声言語と手話言語の対照言語学、記述言語学、歴史（比較）言語学、言語類型論、オーストロネシア語族、歴史（比較）統語論、フィジー語諸方言、マラガシ語諸方言、オセアニアの先史研究、ヒトの移動誌、動植物のドメスティケーション、文化接触・文化交流、他分野との協働による研究 1 言語情報と地理情報システム（GIS）【所属学会】日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society (UK)、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics、日本手話学会、Sign Language Linguistics Society、関西言語学会

【主要業績】

[単著]

Kikusawa, R.

2003 *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*. Canberra: Pacific Linguistics.

[編著]

Kikusawa, R. and L. A. Reid (eds.)

2013 *Historical Linguistics, 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011* (Current Issues in Linguistic Theory 326). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

[論文]

Kikusawa, R. and K. A. Adelaar

2014 Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480-516.

【受賞歴】

2015 2014年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

- 2014 2013年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞
- 2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀研究者賞
- 2008 第4回日本学術振興会賞
- 2005 第4回日本オセアニア学会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

フィジー諸言語の発達史研究における地理情報システム（GIS）の応用

・研究の目的、内容

昨年度に引きつづき、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））の二年度目として、フィジー語諸方言データの地理情報システム（GIS）を活用し、言語情報とその地理情報を組み合わせることで、当該言語の史の変遷についてどのような研究ができるのか、その手法の研究を行う。

GISは近年、考古学や歴史学等の人文科学系分野にも応用されるようになり、成果をあげているが、言語データへの適用は限られている。その理由のひとつに、言語データはその分布域の特定が難しく、そもそも地図上にデータを落とすことが困難であることに加え、その手続きを踏むことの利点が見えにくいことがあげられる。特に、言語データの比較がマクロレベルで行われる場合には、地理情報・地形情報と言語との結びつきはゆるやかであり、人間の目でみて分析することができた。ところが、近年、現地調査による詳細なデータが報告されるに連れ、ミクロレベルでの比較再建が必要となってきた。言語は、垂直伝播と水平伝播が入り組んで発達するが、今のところ、これらを組み合わせて動的な史の変遷の模様を解明するツールはない。これを、地面情報を媒介とし、音対応、語彙や文法現象の共有・非共有といった言語情報と、地形や行政や文化にかかわる区域を組み合わせる分析を可能にすることで、新しい研究手法に結び付けられる可能性があると考えている。本研究では、そのためにどのような情報をどのような形でシステムに組み込んでゆく必要があるのか、昨年度に引き続き、基盤整備を進めつつ、合わせて理論的な裏付けについても取り組む。また、国際共同研究、学際共同研究の一例として、課題や解決法について発生の都度、報告をまとめること、また、地図として成果物の博物館展示への応用や社会還元の方法などについても検討することで、学界および社会貢献にも結び付ける。

・成果

本研究は、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「時空間を融合する——GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ」（2018.10-2023.3、研究代表者：菊澤律子、日本学術振興会科学研究費補助金）の一部として行った。海外メンバーが確保した研究資金と組み合わせることで、ウェブ上で動作するベータ版を完成した。ニュージーランドで開催したワークショップ & シンポジウムでは、このプロトタイプを操作しながら、言語学、地理学、統計学、文化人類学、それぞれの視点で評価を行い、今後の研究計画をたてた。SESに報告書を投稿中である。

国際シンポジウム「Fijian Languages Symposium」（2020年1月31日）およびサテライト・ワークショップ（2月1日～2日）をニュージーランドのマシー大学で開催した。

詳細 <https://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/20200131>

◎出版物による業績

[編著]

Kikusawa, R. and F. Sano (eds.)

2019 *Minpaku Sign Language Studies 1* (Senri Ethnological Studies 101). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[分担執筆]

菊澤律子

2020 「ポリネシアの言語の起源とアジアとのつながり」 秋道智彌・印東道子編『ヒトはなぜ海を越えたのか』pp.180-186, 東京：雄山閣。

[論文]

Sagara, K. and R. Kikusawa

2019 Paradigm Leveling in Japanese Sign Language and Related Languages. In R. Kikusawa and F. Sano (eds.) *Minpaku Sign Language Studies 1* (Senri Ethnological Studies 101), pp.147-163. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Kikusawa, R.

- 2019 Utilizing Visual Materials for Introducing the Languages of the World and the World of Language. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing world* (Senri Ethnological Studies 102), pp.195-204. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

菊澤律子

- 2019 「声の言葉と手の言葉²² コトバの変化(2)」『ミネルヴァ通信「究」』97：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²³ 言語と仲間意識」『ミネルヴァ通信「究」』98：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²⁴ フィジーの地図プロジェクト」『ミネルヴァ通信「究」』99：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²⁵ フィールドにでかけよう！(1)」『ミネルヴァ通信「究」』100：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²⁶ フィールドにでかけよう！(2)」『ミネルヴァ通信「究」』101：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²⁷ フィールドにでかけよう！(3)」『ミネルヴァ通信「究」』102：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²⁸ ソースコミュニティ還元」『ミネルヴァ通信「究」』103：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²⁹ 言語アートを垣間見る」『ミネルヴァ通信「究」』104：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉³⁰ 多言語社会に向けて」『ミネルヴァ通信「究」』105：20-23。
2020 「南の島でコトバの調査をはじめのまで」『わたしの外国語漂流記——未知なる言葉と格闘した25人の物語』pp.177-184, 東京：河出書房新社。
2020 「旅・いろいろ地球人 フィジー語で暮らす① 私は『ワイレヴ人』」『毎日新聞』3月7日夕刊。
2020 「旅・いろいろ地球人 フィジー語で暮らす② 私達ってだれのこと？」『毎日新聞』3月14日夕刊。
2020 「旅・いろいろ地球人 フィジー語で暮らす③ これ、あげる！」『毎日新聞』3月21日夕刊。
2020 「旅・いろいろ地球人 フィジー語で暮らす④ 単純ではない公用語」『毎日新聞』3月28日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2019年12月7日 'Arbitrary Signs Are More Stable Than Iconic Signs: Evidence from Taiwan Sign Language and Japanese Sign Language.' The 8th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics, National Museum of Ethnology
2020年1月31日 'Linguistic Mapping and Historical Analyses: Vertical and Horizontal Transmission and Potential GIS Applications.' Fijian Languages Symposium, Massey University, Palmerston North, New Zealand

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年6月16日 「フィジー語の森にでかけよう！——『ことば』と『場』と『担い手』と」関西学院大学手話研究センター言語手話学コロキウム『ことばの森に出かけよう！フィールドワークによる言語の研究』関西学院大学梅田キャンパス
2019年7月5日 'Toward the understanding of Alignment Changes and "Subjecthood" in Austronesian Languages.' The 24th International Conference on Historical Linguistics (ICHL24), Australian National University, Canberra, Australia
2019年12月7日 (with Jane Tsay and Keiko Sagara) 'Arbitrary Signs Are More Stable Than Iconic Signs: Evidence from Taiwan Sign Language and Japanese Sign Language.' The 8th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics, National Museum of Ethnology
2020年1月28日 (平山 亮と共同発表)「音声および手話生成における運動器官の計測と比較」電子情報通信学会音声研究会 (SP)、高岡市生涯学習センター
2020年3月1日 「音声言語と手話言語の共通点と相違点——言語学の視点と今後の研究への展望」人工知能学会分科会 (言語・音声理解と対話処理研究会)、東海大学清水キャンパス

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員 (1人)

◎調査活動

・海外調査

- 2019年6月4日～6月12日—スペイン (言語展示に関する打合せ)
2019年6月29日～7月15日—オーストラリア (国際歴史言語学会出席・手話言語学研究に関する学術交流)

2019年9月23日～10月2日—ドイツ、スペイン（TISLR 出席・言語展示に関する打合せ）

2020年1月29日～2月3日—ニュージーランド（国際シンポジウムとプロジェクト研究会の開催）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「手話翻訳システム構築を目指した手話対話における文単位の認定」（研究代表者：坊農真弓（国立情報学研究所））研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「時空間を融合する——GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明」（研究代表者：相良啓子）研究分担者

- ・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

日本財団助成金「『手話言語学研究部門』の設置および手話言語学事業の推進」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

Virtual Conference: Language, Communication and Education 学術評価委員、日本言語学会常任委員、日本歴史言語学会会長、大阪大学2017-2019年度全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」コーディネーター、Brill's Studies in Historical Linguistics 編集顧問委員、Journal of Historical Linguistics 編集顧問委員、Journal of Historical Syntax 編集顧問委員、日本歴史言語学会理事、International Society for Historical Linguistics (ISHL) 国際歴史言語学会評議委員、The Conference on Asian Linguistic Anthropology 専門委員

福岡正太 [ふくおか しょうた] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京藝術大学音楽学部楽理科卒（1986）、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了（1991）、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2004）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】芸術学修士（東京藝術大学大学院 1991）【専攻・専門】民族音楽学、東南アジアとくにインドネシア西ジャワのスンダ伝統音楽についての研究【所属学会】東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

[論文]

福岡正太

2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」端信行編『民族の二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9）pp.144-160, 東京：ドメス出版。

2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究——民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28(2)：257-295。

Fukuoka, S.

2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J. S. Eades (eds.) *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp.95-110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

映像音響メディアが伝統的音楽芸能に与える影響に関する研究

- ・研究の目的、内容

音声および映像の記録技術は、学術的な記録および分析の手段として、音楽芸能研究において一定の役割を果

たしてきた。民族音楽学の誕生と展開は、映像音響メディアの影響を抜きにして論じることができない。一方、20世紀を通じて、映像音響メディアは、人々が音楽芸能を楽しむ媒体として普及定着し、メディアの変化発展が音楽芸能の展開に大きな影響を及ぼすようになった。さらに、手軽なビデオ撮影機器の普及により、音楽芸能の伝承や創造、研究の過程において、関係者が自ら映像を作成して発表するようになり、映像は音楽芸能にかかわる活動に不可欠なものとして組み込まれつつある。こうした状況の中、研究機関等にとって、音楽関連資料をいかに活用可能な形でアーカイブ化するかが大きな課題となっている。本研究は、様々な位相における音楽芸能と映像音響および情報メディアの結びつきについて明らかにすることを目的としている。

具体的には、①20世紀のアジアにおいて、レコードやラジオなどのメディアおよび博物館や学校などの近代的制度が音楽にもたらした変化を明らかにする研究に取り組む。民博が所蔵する日本コロムビアレーベルの外地録音金属原盤資料について、台湾大学等との研究協力を深めながら、そのデータ共有の意義と方法について検討する。また、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアの現代芸術におけるラーマーヤナの多元的意味に関する研究」（19H01208、代表者：福岡まどか）により、インドネシア芸能の発展とメディアや近代的制度とのかわりについて研究を進める。②楽器資料に関するフォーラム型情報ミュージアム「世界の音楽と楽器」を活用し、通文化的な広がりをもつ双方向的データベースにより、楽器に関する学術的な知識の蓄積と活用の可能性を探るとともに、音楽関連資料のアーカイブ化における諸問題を明らかにする。③科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（18K01205、代表者：福岡正太）により鹿児島徳之島および三島村の芸能を例として、芸能の映像記録を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像記録が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。

・成果

①日本の博物館におけるラーマーヤナに関する展示についての考察をおこない、バンコクで7月に開催された国際伝統音楽学会（ICTM）において、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアの現代芸術におけるラーマーヤナの多元的意味に関する研究」（19H01208、代表者：福岡まどか）の一環として、“Contemporary Development of Ramayana Theatre in Southeast Asia”と題したパネルにおいて、国立民族学博物館の東南アジア展示場におけるラーマーヤナに関連する展示の変遷について研究発表“Southeast Asian Ramayana in a Museum of Japan”をおこなった。また、レコード産業初期の時代に日本に本拠をおくレコード会社（日本蓄音器商会）が台湾向けにどのようなレコードを制作したかを明らかにするため、情報計画事業により、国立民族学博物館が所蔵する金属原盤のうち1910年代に台湾の音楽を録音されたと思われるものを、再生しデジタル化する作業を日本コロムビア（株）に依頼しておこなった。②国立民族学博物館が所蔵する楽器資料の研究の成果の一環として、9月に友の会講演「世界の楽器を探る」をおこなった。また、音楽芸能の研究資料のアーカイブ化に関する研究の一環として、国立民族学博物館が所蔵する「東洋音楽学会調査記録」資料について、その実態と将来の活用の可能性についての研究を進め、埼玉大学で11月に開催された東洋音楽学会大会においてパネル「民博所蔵東洋音楽学会調査記録資料の意義と今後の活用」を組織し、研究発表「民博所蔵東洋音楽学会調査記録資料の研究」をおこなった。さらに、同資料についての研究を発展させるため国立民族学博物館と東洋音楽学会間の連携に関する協定を結んだ。③音楽芸能の上演や伝承において映像記録が果たする役割を実践的に探るため、徳之島の天城町、伊仙町、徳之島町の協力を得て、フォーラム型情報ミュージアム「徳之島の唄と踊り」の活用についての検討を進めた。成果の1つとして、天城町立西阿木名小中学校の授業等での実験的利用に基づき、フォーラム型情報ミュージアムの経費により、教室等で使いやすい画面デザイン等を工夫した。また、共同研究「音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究」（代表者：野澤豊一）において5月に研究発表「ミュージッキングとしての映像記録作成——フォーラム型情報ミュージアム『徳之島の唄と踊り』」をおこなった。さらに、国立民族学博物館学術資源研究開発センターと科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（18K01205、代表者：福岡正太）の共催による国際シンポジウムを3月に開催する準備を進めたが、新型コロナウイルス感染症の広がりにより延期となった。

◎出版物による業績

[分担執筆]

福岡正太

2019 「音楽」白坂 蕃・稲垣 勉・小沢健市・古賀 学・山下晋司編『観光の事典』pp.348-349、東京：朝倉出版。

2019 「ポピュラー音楽」信田敏宏・綾部真雄・岩井美佐紀・加藤 剛・土佐桂子編『東南アジア文化事

典』pp.440-441, 東京：丸善出版。

- 2019 「人形劇」信田敏宏・綾部真雄・岩井美佐紀・加藤 剛・土佐桂子編『東南アジア文化事典』pp.454-455, 東京：丸善出版。

[論文]

Fukuoka, S.

- 2019 The Use of Images in the Music Gallery. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.177-181. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

福岡正太

- 2019 「旅・いろいろ地球人 世界をめぐる楽器① インドの楽器と分類」『毎日新聞』4月6日夕刊。
 2019 「旅・いろいろ地球人 世界をめぐる楽器② 木琴の起源」『毎日新聞』4月13日夕刊。
 2019 「旅・いろいろ地球人 世界をめぐる楽器③ 棒ツィター」『毎日新聞』4月20日夕刊。
 2019 「旅・いろいろ地球人 世界をめぐる楽器④ 名前の一人旅」『毎日新聞』4月27日夕刊。
 2019 「ワヤン人形の目」『月刊みんぱく』43(12)：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年5月12日 「ミュージッキングとしての映像記録作成——フォーラム型情報ミュージアム『徳之島の唄と踊り』」『音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年7月13日 'Southeast Asian Ramayana in a Museum of Japan, the 45th International Council for Traditional Music World Conference.' Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand
 2019年11月17日 「民博所蔵東洋音楽学会調査記録資料の研究」東洋音楽学会第70回大会、京都市立芸術大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年7月21日 「ジャワ島のガムランのリズム」第548回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2019年9月14日 「世界の楽器を探る」第127回国立民族学博物館友の会東京講演会、千里文化財団、国立音楽大学

◎調査活動

・海外調査

2019年7月11日～7月18日タイ（国際伝統音楽学会バンコク大会に参加し研究発表をおこなう）
 2019年10月25日～10月29日—韓国（映像上映会への参加および死者儀礼の調査）
 2019年11月21日～11月28日—インドネシア（「世界無形文化遺産フェスティバル2020」にかかわる招聘芸能の調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（3人）、

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアの現代芸術におけるラーマヤナの多面的意味に関する研究」（研究代表者：福岡まどか（大阪大学））研究分担者、国立民族学博物館共同研究「音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究」（研究代表者：野澤豊一（富山大学））メンバー、国立民族学博物館特別研究「パフォーマンス・アーツと積極の共生」（研究代表者：寺田吉孝）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

広島市立大学「音楽人類学Ⅱ」（集中講義）、広島市立大学「音楽人類学Ⅰ」（集中講義）

・その他の社会活動・館外活動

日本民俗音楽学会理事、東洋音楽学会理事

【学歴】東京工業大学理学部応用物理学専攻（1996）、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻修士課程修了（1998）、東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻博士課程単位取得退学（2001）【職歴】東京工業大学精密工学研究所助手（2001）、科学技術振興機構 CREST 研究員（2003）、国立情報学研究所高野明彦研究室特任助手（2004）、人間文化研究機構本部プロジェクト研究員（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任助手（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授（2007）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】博士（工学）（東京工業大学大学院 2003）、修士（理学）（東京工業大学大学院 1998）【専攻・専門】文化財情報発信、連想情報学【所属学会】アート・ドキュメンテーション学会

【主要業績】

〔論文〕

丸川雄三

2018 「美術関係資料アーカイブズにおける情報管理発信システムの研究」『アート・ドキュメンテーション研究』25：3-17。〔査読有〕

2017 「ミュージアムの情報発信力を高める文化遺産オンラインの活用法」『情報の科学と技術』67(12)：628-632。〔査読有〕

丸川雄三・阿辺川武

2010 「横断的連想検索サービス『想—IMAGINE』——データベース連携が拓く新たな可能性」『情報管理』53(4)：198-204。

【受賞歴】

2017 第11回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞（身装画像データベース）

2011 文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムを、データと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行う。

2019年度は、美術情報分野を中心とする制作者データベースとその発信環境の研究開発を実施する。この研究は、科学研究費（基盤研究（B））「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（代表：丸川雄三、2014年度～2017年度）の助成を受け実施してきたものであるが、研究成果をふまえて今年度も継続して研究を進める。さらに文化庁の「文化遺産オンライン」や国立映画アーカイブの「日本アニメーション映画クラシックス」など、これまで国立情報学研究所高野明彦研究室と共同で進めてきた文化財情報の活用と発信に関する研究を、今年度も継続して進める。

・成果

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究として、国立情報学研究所と国立映画アーカイブの共同研究に参画し、明治から昭和初期に制作された映画フィルムのデジタルアーカイブを活用した情報発信の実証を進めた。その成果として2019年6月にウェブサイト「映像でみる明治の日本」が一般に公開された。この研究に関連して、以前に公開されたウェブサイト「アニメーション映画クラシックス」に関する技術研究論文がSESに採択され12月に刊行された。またデジタル技術を活用した展示場情報発信の研究として、国立情報学研究所と奈良国立博物館の共同研究に参画した。その成果として奈良国立博物館特別陳列「法隆寺金堂壁画写真ガラス原板——文化財写真の軌跡」（会期：2019年12月7日～2020年1月13日）において映像展示とデジタルビューアが公開された。美術情報分野の情報統合手法の研究については、ウェブサイト「『みづゑ』の世界」のリニューアル公開に向けた準備を進めた。その他にミュージアムが所蔵する作品や資料の情報を公開するためのデータ

変換手法の研究に取り組み、成果の一部を2019年6月に開催されたアート・ドキュメンテーション学会で発表した。

◎出版物による業績

[論文]

Marukawa, Y.

2019 Creation of the “Japanese Animated Film Classics” Database. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.145-156. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

丸川雄三

2019 「文化財デジタルアーカイブズの活用を目的としたメタデータ自動付与の研究——文化遺産オンラインにおける過去の取り組みを例に」『2019年度アートドキュメンテーション学会年次大会要旨集』pp.10-11。

2019 「『知の世界』への入り口をつくる」『鴨東通信』108：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月9日 「文化財デジタルアーカイブズの活用を目的としたメタデータ自動付与の研究——文化遺産オンラインにおける過去の取り組みを例に」アート・ドキュメンテーション学会年次大会、成安造形大学

・展示

2019年12月7日～2020年1月13日 「『法隆寺金堂壁画写真ガラス原板』ムービー&デジタルビューア」(制作ディレクション)『特別陳列「重要文化財 法隆寺金堂壁画写真ガラス原板——文化財写真の軌跡」』奈良国立博物館

・ウェブサイト

2019年6月27日 「映像でみる明治の日本」国立映画アーカイブ(制作ディレクション)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(新学術領域研究(研究領域提案型)『学術研究支援基盤形成』)「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」(研究代表者:吉田憲司)研究支援分担者、国立情報学研究所客員准教授、国立美術館客員研究員、東京文化財研究所「近現代美術資料の収集、整理、公開に関する調査研究」客員研究員、奈良国立博物館「仏教美術に関する共同調査研究」調査員、立命館大学アート・リサーチセンター「歌舞伎・浄瑠璃データベースの活用に関する研究」客員協力研究員

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

立命館大学

・他の機関から委嘱された委員など

日本写真家協会「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」諮問委員

山本泰則 [やまもと やすのり] ————— 准教授

【学歴】大阪大学基礎工学部生物工学科卒(1978)、大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻生物工学分野博士前期課程修了(1980)、大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻生物工学分野博士後期課程退学(1983)【職歴】国立民族学博物館第5研究部助手(1983)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手(1998)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授(1998)、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(2000)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授(2004)、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授(2007)、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授併任(2007)、国立民族学博物館人類学基礎理論研究部准教授(2017)【学位】工学修士(大阪大学大学院基礎工学研究科1980)【専攻・専門】博物館情報学【所属学会】情報処理学会、情報知識学会

【主要業績】

[論文]

Yamamoto, Y., F. Adachi, and K. Hachimura

2013 Common Metadata to Search for Non-Digital Cultural Resources in Heterogeneous Databases. *Proceedings of the International Conference on Culture and Computing 2013*, pp.224-225. IEEE Computer Society. [査読有]

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-266。[査読有]

山本泰則

2011 「国立国会図書館 PORTA と人間文化研究機構統合検索システムの連携について」『人間文化情報資源共有化研究会報告集』pp.53-68, 東京：人間文化研究機構研究資源共有化事業委員会。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館資料・情報・展示の関係性について

・研究の目的、内容

本研究では、博物館資料（モノ）とそれがもつ情報、情報提示としての展示の3者の関係性について考察をおこなう。博物館では所蔵資料を情報化し、データベースに蓄積している。一方、博物館でおこなう展示は、モノを直接観覧者に提示する行為で、それに資料解説が補われる。民博が所蔵する民族誌資料について、記述に必要な不可欠な情報項目や音楽展示・言語展示、ドキュメント展示の方法を分析することにより、モノ資料がもつ情報と展示を介してモノから観覧者に伝わる情報の本質を明かにする。

今年度は、ここ10数年携わってきた共通メタデータによる人文系の分野横断的な検索手法の歴史を再調査するとともに、その限界を明かにし、モノ資料がもつ情報と記述される情報の関係性について考察する。

・成果

今年度は、民博の13のデータベースを国の分野横断ポータルをめざすジャパンサーチを介しても公開する作業を完了した。そして、すでに確立している民博のデータベースを人間文化研究機構の統合検索システム（nihuINT）の登録データへ変換する手続きとは独立して、民博のデータベースからジャパンサーチの登録データに変換する処理方式を確定した。

これにより、以下のことを具体例を通して示すことができた。nihuINTとジャパンサーチはともに異分野間の情報連携を目的とするシステムであるが、共通メタデータに変換したときに損なわれる原データベースの情報に補う方法が異なる。そのため、両者の共通メタデータ間の直接の変換は適切でなく、原データベースからそれぞれの共通メタデータの特性に応じて変換する方が望ましい。この点に関しては、電子図書館やデジタルアーカイブを専門とする宇陀准教授（筑波大、民博客員）とも議論をおこない、賛同を得た。

なお、この成果の一部は、2019年10月に民博で開催された身装文化デジタルアーカイブ研究会において「MCDのnihuINTおよびジャパンサーチへの移行の試み」と題した発表をおこなった。

◎出版物による業績

[論文]

Yamamoto, Y.

2019 Videotheque: Past, Present and Future. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.205-208. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年10月4日 「MCDのnihuINTおよびジャパンサーチへの移行の試み」身装文化デジタルアーカイブ研究会、国立民族学博物館 第4演習室

・みんなくウィークエンド・サロン

2020年2月16日 「バリ島トゥンガナン暦100年分のカレンダーをつくる」第565回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年11月14日～11月15日 「Databases at Minpaku」（博物館とコミュニティ開発コース 個別研修H: Documentation and Databases）国際協力機構、民博社会連携室

吉岡 乾 [よしおか のほる] ————— 准教授

1979年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語学科卒（2003）、東京外国語大学大学院地域文化研究科アジア第三専攻博士前期課程修了（2007）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2012）【職歴】国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト奨励研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員PD（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部助教（2017）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2019）【学位】博士（学術）（東京外国語大学 2012）、修士（言語学）（東京外国語大学 2007）【専攻・専門】言語学 記述言語学、ブルシャスキー語、ドマーキ語、カティ語、南アジア（パキスタン）研究【所属学会】日本言語学会、関西言語学会、日本南アジア学会、Societas Linguistica Europaea

【主要業績】

[論文]

吉岡 乾

2015 「ブルシャスキー語の動詞語幹と他動性」パルデシ プラシヤント・桐生和幸・ハイコ ナロック編『有対動詞の通言語的研究——日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』pp.321-334, 東京：くろしお出版。
[査読有]

Yoshioka, N.

2019 The Decay and Reconstruction of Nominal Classes in Srinagar Burushaski. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 44(2): 239-254. [査読有]

2017 Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 41(2): 109-125. [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、系統的孤立語であるブルシャスキー語、北パキスタンの消滅の危機に瀕した言語であるドマーキ語を中心しつつ、カティ語、カラーシャ語、コワール語、シナー語、カシミリー語といった周辺言語も併せて、現地調査によって得られたデータを基に言語記述をしていくことを目的とする。

・成果

2019年度は8月から10月に掛けて、パキスタン北部へと現地調査に赴き、ギルギット・バルティスタン州のフンザ谷で東ブルシャスキー語とドマーキ語を、ギルギット市でシナー語と、新規にパシト一語北東方言を、ヤスイン谷でコワール語と西ブルシャスキー語を、ハイバル・パフトゥンフワー州ルンブール谷でカラーシャ語とカティ語とを、それぞれ調査した。ルンブール谷では、2020年度に予定している南アジア展示関連の資料の買い付けに関して、打ち合わせも行って来た。

研究の成果として、10月にブルシャスキー語スリナガル方言に関連したジャーナル論文（英語）を発表した。8月には、現地とフィールド言語学とに関連する一般書を刊行した。近日公開予定の、国立国語研究所の名詞修飾表現データベースに、ブルシャスキー語のデータを提供している。同テーマの論文集も近刊予定で、ブルシャスキー語に関する論文（日本語）を寄稿している。

◎出版物による業績

[単著]

吉岡 乾

2019 『現地嫌いなフィールド言語学者、かく語りき。』大阪：創元社。

[論文]

Yoshioka, N.

2019 The Decay and Reconstruction of Nominal Classes in Srinagar Burushaski. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 44(2): 239-254. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年4月28日 「どうして言葉は変わるのか」第541回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

2020年1月25日 「消滅の危機に瀕した言語」第128回国立民族学博物館友の会東京講演会、モンベル御徒町店
サロン

2020年2月13日 「食べるフィールド言語学——「Food×風土」の視点から」『読売新聞 大手町アカデミア：
食べるフィールド言語学——「Food×風土」の視点から』読売新聞ビル3階新聞教室

◎調査活動

・海外調査

2019年8月26日～10月17日—パキスタン（北部にてドマーキ語、ブルシャスキー語、シナー語、パシュトー語、
コワール語、カラーシャ語、カティ語に関する調査）

2020年1月29日～2月5日—ニュージーランド（フィジー語 GIS プロジェクトの会議）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクト
の代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MIND-
AS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見
た日本語の音声と文法」サブプロジェクト「名詞修飾構造」（リーダー：ブラシャント・バルデシ共同研究員、
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る(1)：文法
の多重性と分散性」（研究代表者：中山俊秀）共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共
同利用・共同研究課題「[アルタイ型]言語に関する類型的研究(2)」（研究代表者：児倉徳和）共同研究員、科
学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「時空間を融合する——GISと数理モデルを用い
た新たな言語変化へのアプローチ」研究分担者

飯泉菜穂子 [いづみ なおこ]——— 特任教授

【学歴】早稲田大学法学部卒（1985）、お茶の水女子大学家政学研究科修士課程修了（1989）【職歴】日本アイビーエム株式会社入社（本社人事部）（1989）、NHK 手話ニュースキャスター（1990）、フリーランス手話通訳、手話講師（1993）、学校法人大東学園・世田谷福祉専門学校手話通訳学科および手話通訳専攻学科学科長（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任准教授（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部特任教授（2017）【学位】家政学修士（お茶の水女子大学、1989）【専攻・専門】手話通訳論、手話通訳養成【所属学会】日本通訳翻訳学会、日本手話通訳士協会、全国手話通訳問題研究会

【主要業績】

[著書]

飯泉菜穂子

2013 「手話通訳士専門養成機関（世田谷福祉専門学校）における養成について」『手話通訳士試験の在り方等
に関する検討会』pp.64-72。

[共著]

小谷眞男・下城史江・飯泉菜穂子

2011 「新しいリベラルアーツとしての日本手話 お茶の水女子大学における『手話学入門』導入の経験から」
『手話学研究』20：19-38。

[映像教材]

飯泉菜穂子

1995 『DVDで学ぶ手話入門講座』<http://www.hj.sanno.ac.jp/ps/course/4092>（構成、テキスト・スクリプト
執筆、演出、ナビゲーターとしての出演）産業能率大学通信教育講座。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

学術手話通訳者養成の実践とカリキュラムの検討および検証

・研究の目的、内容

目的：将来的に関西地区における学術手話通訳ニーズを関西地区の手話通訳で担うことが出来る最低限度の学術手話通訳の人数確保・質の担保に寄与することを目指した学術手話通訳養成研修事業を展開する。

内容：(1)研修員研修会：スクリーニングにより選考した少人数の「学術手話通訳研修事業研修員」に対して、年間を通じて定期的・安定的に研修会（休日を利用した一日研修会および平日夜間の通訳技術研修会）を実施。(2)学術手話通訳OJT：関連講座およびみんぱく手話部門所属教員の担当する民博主催講座等を研修員による学術手話通訳OJTとして活用。研修事業修了者・担当教員をメンターと位置づけて研修員とメンターの組み合わせでの通訳を実施し、通訳記録映像・音声を用いて研修会で通訳技術検証を実施。(3)関連諸講座：学術手話通訳を目指す一般の通訳者および通訳者を目指す人、通訳者を養成する人を対象とした有料の公開講座①『みんぱくで手話言語学を学ぼう！』②『みんぱくで手話通訳士を目指そう！』③『みんぱくで手話通訳技術を磨こう！』を実施。(4)『大阪府と国立民族学博物館との手話言語に係る連携協力に関する協定書』を締結。協定に基づくトライアル事業を計画・実施。（飯泉は上記すべての事業のコーディネートおよび講師を担当。）

・成果

学術手話通訳研修事業の中心事業である研修会の回数・質ともに充実させることができた。研修本体と関連講座・民博主催講座を強固に連動させることで、本事業4年目にして、年間を通じてコンスタントに学術領域に特化した研修を提供する環境をようやく構築することができたと判断している。みんぱく手話部門終了予定の2020年度末（2021年3月）を目標に進めている『みんぱくで手話言語学を学ぼう！』のテキスト発行に向けた準備も進行中である。

新しく大阪府と締結した協定に基づき、大阪府の「手話通訳養成講師の質の向上」（関連講座①『みんぱくで手話言語学を学ぼう！』の現任研修指定）、「登録手話通訳者の質の向上」（関連講座③『みんぱくで手話通訳技術を磨こう！』の現任研修指定）に寄与することができた。のみならず大阪府からは『若手手話通訳者養成トライアル事業』を受託し、手話言語条例関連事業に参画している「若手ろう者の手話通訳理解の向上」「若手聴者の手話通訳技術・業務への関心の向上」に結びつくようそれぞれ「A:late signer 講座」「B:若手手話通訳者講座」を企画した。（しかし、残念ながら、新型コロナウイルス対策の影響のためAは中止、Bも予定していた6講座のうち実施できたのは1講座にとどまった。）そのほか、本事業で使用する手話ネイティブ話者の談話を集めたDVD教材を作成した。若手手話通訳者養成は、学術手話通訳研修事業本体の実施目的との関連性の強い事業であり、来年度も大阪府と協働していく予定である。

◎調査活動

・海外調査

2019年7月16日～7月22日—フランス（世界手話通訳者協会（WASLI）カンファレンス2019への参加）

相良啓子 [さがら けいこ] ————— 特任助教

【学歴】筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻修士課程修了（1999）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所大学院 MPhil 修士課程修了（2014）【職歴】株式会社JTB 首都圏新橋支店営業三課パリアフリーツアー推進担当（2002）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所研究官（2010）、国立民族学博物館プロジェクト研究員（2014）、国立民族学博物館特任助教（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部特任助教（2017）【学位】手話言語学修士（M. Phil.）（セントラル・ランカシャー大学国際手話言語学・ろう者学研究所（iSLanDS）2014）、修士（筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻 1999）【専攻・専門】手話言語学類型論・聴覚障害児教育【所属学会】日本手話学会、日本語学会、日本歴史言語学会、社会言語科学会

【主要業績】

[編著]

Zeshan, U. and K. Sagara (eds.)

2016 *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

[論文]

Sagara, K. and U. Zeshan

2016 A Comparative Typological Study. In U. Zeshan, and K. Sagara (eds.) *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*, pp.3-37. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

Nonaka, A., K. Mesh, and K. Sagara

2015 Signed Names in Japanese Sign Language: Linguistic and Cultural Analyses. *Sign Languages Studies* 16(1): 57-85.

【2019年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明

・研究の目的、内容

本研究の目的は、歴史的に関連がある日本手話、台湾手話、韓国手話（日本手話ファミリー）の語や表現における意味および用法の変化を明らかにし、これら3つの手話言語における史の変遷を体系的に示すことである。本研究は、科学研究費（基盤研究（C））「日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明」（代表者：相良啓子）によって推進していく。まず、現在使用されている表現と似ている形をもつ古日本手話のデータ約「100語」を抜き出し、これらの語彙について音韻および形態の情報を記述する。現在使用されている日本手話については、原が作成した『日本語——日本手話事典』（1997）を基にした語彙の音韻情報のデータベースの中から関連する語を選択し、Global Signbank に登録する。Global Signbank を構築しているラドバウド大学のCrasborn氏と打合せを行い、具体的な語の記述方法と分析のあり方について研究分担者とも確認しながら進めていく。

・成果

6月に、Global Signbank を構築しているラドバウド大学のCrasborn氏および研究分担者の原と、データの登録方法について打合せを行った（科研費、19K00592）。データの入力開始に向けて、現在使用されている表現と似ている形をもつ古日本手話のデータ「100語」の抜き出し作業を進めている。

本研究の関連として、9月にハンブルク大学で開催された第13回国際手話言語学会において、「Numeral Variants and Their Diachronic Changes in Japanese Sign Language, Taiwan Sign Language and Korean Sign Language」についてのポスター発表を行った。また、「日本手話、台湾手話、韓国手話の二桁から四桁の数の表現における変化——『10』『100』『1000』に着目して」のタイトルで執筆した論文が、『国立民族学博物館研究報告44巻3号』に掲載された。

◎出版物による業績

[共著]

加藤三保子・小林昌之・相良啓子・赤堀仁美・重田千輝・中山真一郎

2020 『アジア太平洋諸国の手話』（DVD付）岐阜：コムラ

[分担執筆]

菊澤律子・相良啓子

2019 「日本手話の方言」木部暢子編『明解方言学辞典』pp.114-115, 東京：三省堂。

[論文]

相良啓子

2020 「日本手話、台湾手話、韓国手話の二桁から四桁の数の表現における変化——『10』『100』『1000』に着目して」『国立民族学博物館研究報告』44(3)：557-583。[査読有]

Kikusawa, R. and K. Sagara

2019 Paradigm Leveling in Japanese Sign Language and Related Languages. In R. Kikusawa and F. Sano (eds.) *Minpaku Sign Language Studies 1* (Senri Ethnological Studies 101), pp.147-163. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月26日 'Chinese Language Influences on Tibetan Sign Language Users in Lhasa: Cardinal

- Numbers and Days of the Week.' Theoretical Issues in Sign Language Research 13, University of Hamburg, Hamburg, Germany
- 2019年9月26日 'Numeral Variants and Their Diachronic Changes in Japanese Sign Language, Taiwan Sign Language and Korean Sign Language.' Theoretical Issues in Sign Language Research 13, University of Hamburg, Hamburg, Germany
- 2019年12月6日 'Arbitrary Signs Are More Stable Than Iconic Signs: Evidence from Taiwan Sign Language and Japanese Sign Language.' The 8th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics, National Museum of Ethnology
- 2019年12月7日 「世界の手話における数のしくみ、日本手話系言語の数変化」GEC手話科目開講記念シンポジウム『日本手話を学ぼう——日本にある「もう一つの言語」の習得を目指して!』早稲田大学

◎調査活動

・海外調査

- 2019年7月9日～8月6日—連合王国、フランス（手話言語と音声言語の社会言語学シンポジウムでの発表、世界ろう者会議への参加、研究打合せ等）
- 2019年9月24日～9月30日—ドイツ（TISLR13での研究発表とTISLR14（in Minpaku）に向けての打合せ）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 科学研究費（基盤研究（B））「アジア太平洋諸国における手話の対照言語学的研究：外国手話事典の編集をめざして」（研究代表者：加藤三保子（豊橋技術科学大学））研究分担者

超域フィールド科学研究部

林 勲男 〔はやし いさお〕 ————— 部長（併）教授

【学歴】 立教大学文学部史学科卒（1980）、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了（1983）、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学（1992）**【職歴】** シドニー大学人類学科客員研究員（1992）、国立民族学博物館第4研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2001）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2012）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部研究部長（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2018）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長（2018）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2019）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部研究部長（2019）**【学位】** 文学修士（立教大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】** 社会人類学 パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究、オセアニア近代史の人類学的研究、自然災害への対応に関する人類学的研究**【所属学会】** 日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会、The International Union of Anthropology and Ethnological Sciences (IUAES)、Japan Anthropology Workshop (JAWS)

【主要業績】

〔編著〕

林 勲男編

- 2016 『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店。
- 2015 『アジア太平洋諸国の災害復興』東京：明石書店。
- 2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

災害の想起における媒体の役割——遺構・モニュメント・語り継ぎ

・研究の目的、内容

大規模災害の被災地では、遺構や遺物の保存・公開、モニュメントの建立、被災体験の語り継ぎなどによって、被災経験を後世に継承していかうとの活動が生まれる。その一方で、こうした活動は、被災の苦悩や悲痛さを喚起するものとして、反対もしくは距離を置く人びとも存在する。本研究は、大規模災害の集合的記憶を、物を介して保存・伝承（物象化）したり、言葉により語り継いでいく（物語化）活動をプロセスとして、それぞれの地域社会の動態の中で捉える。今年度は、記憶と物質性と語りの関係について先行研究を整理するとともに、現地調査を東日本大震災と新潟県中越地震の被災地で予定している。調査には、科学研究費（基盤研究（A））「災害の想起における媒体の役割——遺構・モニュメント・語り継ぎ」（研究代表者：林 勲男）を当てる。

・成果

2019年11月16日、東北大学災害科学国際研究所主催による講演会にて「災害を伝える——ミュージアムと災害の記憶・記録」（於：同研究所気仙沼分室）のタイトルで講演をおこない、研究成果の一端を紹介した。

2020年1月24日から26日に神戸市で開催した「2020世界災害語り継ぎフォーラム」の実行委員として関わり、上記科研プロジェクトが共催となり、25日には分科会「災害遺構と記憶の継承」を開催した。成果は2020年度に日・英語で出版予定である。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2019年11月16日 「災害を伝える——ミュージアムと災害の記憶・記録」第32回防災文化講演会、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

◎調査活動

・海外調査

2019年12月23日～12月29日—インドネシア（アチェ津波ミュージアム及び災害遺構・モニュメントに関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「マイクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築——20世紀前半収集資料を中心として」（研究代表者：林 勲男）研究代表者

宇田川妙子 [うだがわ たえこ]——教授

1960年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1984）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】東京大学教養学部助手（1990）、中部大学国際関係学部講師（1992）、中部大学国際関係学部助教授（1995）、金沢大学文学部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2002）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2018）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1984）【専攻・専門】文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究、ジェンダーとセクシャリティ研究、ヨーロッパ近代をめぐる問題群【所属学会】日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

[単著]

宇田川妙子

2015 『城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す』京都：臨川書店。

[共編]

宇田川妙子・中谷文美編

2016 『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』京都：世界思想社。

2007 『ジェンダー人類学を読む——地域別・テーマ別基本文献レビュー』京都：世界思想社。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的、内容

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性（私性）という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、まずは、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。今年度は、昨年度同様、食という観点からの研究調査を続けるが、特に家族を中心とする親密圏との関連に焦点をあてる。

・成果

本年度は、昨年度同様、食の場面に着目して、主として親密な関係性と公的な関係性との関連についての研究を行った。また、親密な関係性に関しては、セクシュアリティ研究の再検討にも着手した。その主な成果は以下の通りである。

[刊行物]

2019年9月 『『地中海料理』というイメージ——国民料理を補助線として』西澤治彦編 『『国民料理』の形成』 pp.88-108, ドメス出版。

2019年9月 「むしろ、ジェンダー研究を進化論から見直すために」『日本人類学会進化人類学分科会ニューズレター』 pp.23-27。

[口頭発表等]

2019年9月28日 「イタリアの食におけるナショナル・ローカル・グローバル——トマトを事例として」イタリア近現代史研究会第40回全国大会「品種改良と食文化」、京都キャンパスプラザ。

2019年11月2日 「イタリアの食に関わる運動における『地域』」地域研究コンソーシアム一般公開シンポジウム「グローバル時代の文化力」、国立民族学博物館。

2019年12月11日 「イタリア人と食——生活を楽しむために」（阪急生活楽校講演会）阪急、みんぱく友の会（千里財団）、阪急うめだホール。

2020年1月18日 「イタリアにおける人と食のかかわり——地域への関心」第499回みんぱくゼミナール、国立民族学博物館。

◎出版物による業績

[分担執筆]

宇田川妙子

2019 『『地中海料理』というイメージ——国民料理を補助線として』西澤治彦編 『『国民料理』の形成』 pp.88-108, 東京：ドメス出版。

[その他]

宇田川妙子

2019 「むしろ、ジェンダー研究を進化論から見直すために」『日本人類学会進化人類学分科会ニューズレター』（2019/9）：23-27。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月28日 「イタリアの食におけるナショナル・ローカル・グローバル——トマトを事例として」イタリア近現代史研究会第40回全国大会『品種改良と食文化』京都キャンパスプラザ

2019年11月2日 「イタリアの食にかかわる運動における『地域』」2019年度地域研究コンソーシアム年次集会一般公開シンポジウム『グローバル化時代の文化力——〈地域知〉のマネージメント』国立民族学博物館

- ・ **みんなくゼミナール**
2020年1月18日 「イタリアにおける人と食のかかわり——地域への関心」第499回みんなくゼミナール
- ・ **みんなくウィークエンド・サロン**
2019年12月15日 「サンタクロースとなまはげ——ヨーロッパの時間と季節の感覚」第562回みんなくウィーク
エンド・サロン 研究者と話そう
- ・ **広報・社会連携活動**
2019年12月11日 「イタリア人と食——生活を楽しむために」阪急うめだ本店・千里文化財団主催阪急生活楽校
講演会、阪急うめだホール
- ◎ **調査活動**
- ・ **海外調査**
2019年10月20日～11月1日—イタリア（イタリアのフードムーブメント組織の運営に関する調査研究）
- ◎ **大学院教育**
- ・ **指導教員**
副指導教員（2人）
- ◎ **上記以外の研究活動**
- ・ **人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクト
の代表者・分担者など**
科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」（研
究代表者：出口正之）研究分担者
- ◎ **社会活動・館外活動**
- ・ **他の機関から委嘱された委員など**
日本文化人類学会評議員

樫永真佐夫 [かしなが まさお]————— 教授

1971年生。【学歴】早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1997）、ベトナム民族学博物館客員研究員（1997）、放送大学学園非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）、総合研究大学院大学教授併任（2016）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）【学位】学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）【専攻・専門】文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」——村のくらしと恋』東京：雄山閣。

2011 『黒タイ年代記——「タイ・プー・サック」』東京：雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀——家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第6回日本学術振興会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナムにおける黒タイ文字と文書

- ・研究の目的、内容

ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイ（ベトナムではターイの地方集団として分類）の伝統文化の継承に焦点を当てた現地調査と文献調査に基づく民族誌的研究を継続する。

とくに黒タイ文化の独自性が近代以降にどのように構築され、現在に至るまでどのように継承されてきたのかを視野に入れつつ、黒タイの「伝統」を考察する。

- ・成果

『季刊民族学』に、黒タイが伝えてきた独自の暦の特徴について、暮らしとの関わりから描き出した「黒タイの暦」を2019年4月に発表した。

『東南アジア文化事典』（丸善出版）の「タイ」「米」「ビンロウ」「格闘技」の項目を執筆し2019年10月刊行した。

ボクシングの受容と発展に関する各個研究の最終成果として、2019年4月に拳で殴る暴力の精神史を描いた単著『殴り合いの文化史』を左右社から刊行した。この成果に関連するその他の業績としては、エッセー「100年前のボクシング——『チャップリンの拳闘』」を『月刊みんぱく』（2019年9月号）の執筆、文筆家佐伯誠氏との対談「思索の射程、知の体幹」（2019年9月12日（木） 於・東京都渋谷区 Roundabout）、哲学者萱野稔人氏との対談記事が『月刊サイゾー』2020年2月号と3月号に連載された。

外部資金の導入はない。

- ◎出版物による業績

- [単著]

樫永真佐夫

2019 『殴り合いの文化史』東京：左右社。

- [分担執筆]

樫永真佐夫

2019 「タイ」信田敏宏編『東南アジア文化事典』p.107, 東京：丸善出版。

2019 「米」信田敏宏編『東南アジア文化事典』pp.394-395, 東京：丸善出版。

2019 「ビンロウ」信田敏宏編『東南アジア文化事典』pp.418-419, 東京：丸善出版。

2019 「格闘技」信田敏宏編『東南アジア文化事典』pp.492-493, 東京：丸善出版。

- [論文]

樫永真佐夫

2019 「ベトナム、黒タイの暮らしと暦」『季刊民族学』168：32-39。

- [その他]

樫永真佐夫

2019 「100年前のボクシング——『チャップリンの拳闘』」『月刊みんぱく』43(9)：18-19。

- ◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月12日 「思索の射程、知の体幹」『殴り合いの文化史』（左右社）刊行記念対談、Roundabout

2019年9月30日 「『殴り合いの文化史』について」アイアイ例会、ローレルタワーサンクタス梅田30階会議室

2019年10月27日 「『殴り合いの文化史』出版記念講演」一般社団法人日本ハイインテンシティトレーニング協会例会、ホテル京阪京橋グランデ

- ◎調査活動

- ・海外調査

2019年11月21日～12月2日—ベトナム、ラオス（ベトナムとラオスの文化的多様性について情報収集）

- ◎大学院教育

- ・指導教員

副指導教員（1人）

- ・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

- ・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）、博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化——東南アジア資料を中心に」(研究代表者：小野林太郎) メンバー

韓 敏 [ハン ミン]—————教授

1960年生。【学歴】中国吉林大学外国語学部日本語科卒(1983)、中国吉林大学大学院外国文学言語研究科日本文学専攻修士課程修了(1986)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了(1989)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了(1993)【職歴】武蔵大学人文学部非常勤講師(1992)、東京大学教養学部客員研究員(1994)、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師(1995)、東洋英和女学院大学社会科学部助教授(1998)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授(2000)、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授(2001)、Harvard University Fairbank Center for East Asian Research Visiting Scholar(2002)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授(2004)、総合研究大学院大学文化科学研究科教授(2011)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(2011)、国立民族学博物館民族社会研究部研究部長(2012)、人間文化研究機構国立民族学博物館運営会議委員(2012)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授(2017)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部研究部長(2017)、人間文化機構国立民族学博物館運営会議委員(2017)【学位】学術博士(文化人類学)(東京大学大学院総合文化研究科1993)、学術修士(文化人類学)(東京大学大学院総合文化研究科1989)、文学修士(中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科1986)【専攻・専門】社会、歴史と象徴に関する人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

韓 敏

2015 『大地の民に学ぶ 激動する故郷、中国』(フィールドワーク選書18) 京都：臨川書店。

Han, M.

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

韓 敏編

2009 『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』 東京：風響社。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

社会、歴史と象徴に関する超域フィールドの研究

・研究の目的、内容

本研究は、近代社会における社会記憶と歴史の資源化に焦点を当て、超域フィールドの視点から国家と社会の多様な関係性を考察する。

具体的に昨年度に引き続き、人間文化研究機構北東アジア地域研究(代表者 池谷和信)の分担者として、中国北部のシボ族における歴史と文化の資源化の動態について論文執筆を行う。また、本館の共同研究「グローバル時代における寛容性/非寛容性をめぐるナラティブ・ポリティクス」(2018.10-2022.3 代表：山 泰幸)の分担者として、中国の口頭伝承における異人論の要素およびその口承性や書承性を考える。最後に、これまでの研究成果をまとめ、毛沢東をめぐる社会記憶に関する単著を執筆する。

・成果

これまでの研究成果をまとめ、論文執筆や口頭発表に努めてきた。

具体的に人間文化研究機構北東アジア地域研究(代表者 池谷和信)の分担者として、中国北部のシボ族における歴史と文化の資源化の動態について英語の論文を執筆しているところである。

また、儺戯、龍舞、獅子舞と京劇に関する項目の執筆を完成し、『世界の仮面文化事典』(丸善出版)に掲載

する予定である。

2019年3月1日(金)に本館において開催された学術潮流フォーラムⅡ 超域フィールド科学研究部・国際シンポジウム「歴史のロジックと構想力——世界のフィールドから」について、英文のエッセイ *The Logic and Conception of History: Cross-field approaches from the world* を執筆し、MINPAKU Anthropology Newsletter (48: 13-14) に掲載し、世界に発信した。

また、中国展示場において、第546回ウィークエンド・サロンを担当し、「中国文化の中の『動物』たち」(2019/06/30) について、動物のもつ社会的、文化的意味およびその変化を紹介した。

◎出版物による業績

[その他]

韓 敏

2020 「みんぱく回遊 茶の旅」『月刊みんぱく』44(1): 16-17。

Han, M.

2019 *The Logic and Conception of History: Cross-Field Approaches from the World. MINPAKU Anthropology Newsletter* 48: 13-14.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年6月30日 「中国文化の中の『動物』たち」第546回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員 (5人)

・博士論文審査委員 (総研大に限る)

博士論文審査委員 (1件)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究「グローバル時代における『寛容性/非寛容性』をめぐるナラティブ・ポリティクス」(研究代表者: 山 泰幸) メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」(拠点代表者: 池谷和信) 拠点構成員

◎学会の開催

2019年11月2日 地域研究コンソーシアム「グローバル化時代の文化力——〈地域知〉のマネージメント」国立民族学博物館第4セミナー室

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョゼフ]————— 教授

1959年生。【学歴】オークランド大学生物科学部人類科学部植物学卒 (1981)、オークランド大学大学院生物科学植物学修士課程修了 (1984)、オーストラリア国立大学大学院先史考古学遺伝学博士課程修了 (1990) 【職歴】科学技術庁農水産省野菜茶業試験場特別研究員 (1990)、日本学術振興会 Plant Science 特別研究員 (京都大学理学部) (1993)、Freelance Editor/Self-employed Editor (1994)、国立民族学博物館助手 (1995)、国立民族学博物館助教授 (1999)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (2002)、国立民族学博物館研究戦略センター助教授 (2004)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授 (2008)、国立民族学博物館民族社会研究部教授 (2015)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授 (2017) 【学位】Ph.D. (オーストラリア国立大学 1990)、M. Sc. (オークランド大学 1984) 【専攻・専門】民族植物学、先史学【所属学会】Society for Economic Botany、Indo-Pacific Prehistory Association、Society of Writers, Editors and Translators、International Aroid Society、European Association of Science Editors、World Archaeology Congress、Royal Society of New Zealand

【主要業績】

[単著]

Matthews, P. J.

2014 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History* (Senri Ethnological Studies 88). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

Spriggs, M., D. Addison, and P. J. Matthews (eds.)

2012 *Irrigated Taro (Colocasia esculenta) in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historical Perspectives* (Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Ahmed, I., P. J. Matthews, P. J. Biggs, M. Naeem, P. A. McLenachan, and P. J. Lockhart

2013 Identification of Chloroplast Genome Loci Suitable for High-Resolution Phylogeographic Studies of *Colocasia esculenta* (L.) Schott (Araceae) and Closely Related Taxa. *Molecular Ecology Resources* 13(5): 929–937.

【2019年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

1. 『東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証』科学研究費（基盤研究（B））海外学術調査 課題番号17H04614、2017年度～2020年度）研究代表者として、海外の研究者と共同して研究を進める。
2. 『政治的及び地理的に隔離された少数民族独自生存圏での植物遺伝資源及び伝統知の賦存』科学研究費（基盤研究（A））海外学術調査 課題番号17H01682、2017年度～2020年度）研究分担者として、海外の研究者と共同して研究を進める。

・研究の目的、内容

1. MoUs were prepared with a counterpart (Dr Mhd A. Hossain) at Bangladesh Agricultural University, Mymensingh, where I gave a lecture on 7th Nov., 2019. DNA sequences obtained from samples collected in Bangladesh, Vietnam and China were analysed. I also visited the Department of Sociology, Delhi University, India, as an associated visiting researcher, and conducted fieldwork in Kolkata, where I also gave a lecture at the Acharya Jagadish Chandra Bose Indian Botanical Garden (19th Sept., 2019).
2. For the study of plant genetic resources, I established an MoU with the School of Forestry, Kasetsart University, then carried out fieldwork in Bangkok and vicinity with Dr Duangchai Sookchaloem from the Dept of Forest Biology, Kasetsart University. On 15th Jan. 2020, I gave a lecture at the Dept of Forest Biology.

・成果

See publications.

Public outreach & exhibition

Continued to (i) serve as leader for the Oceania Gallery curatorial team, Minpaku, and as leader of the Editorial panel for Minpaku Anthropology Newsletter, (ii) maintain two websites, The Research Cooperative (<http://researchcooperative.org>), and Wild Taro Project (<http://colocasia.net>), and (iii) serve as a board member for the New Zealand Studies Society - Japan (<http://nzstudies.org>). Published a short essay in Minpaku Monthly (Feb. 1, 2020): “Toshio Asaeda and Templeton Crocker: journeys for art and science”.

◎出版物による業績

[共著]

Aoyagi, M., H. Ikeda, A. Otani, M. Kondo, H. Shiota, H. Shibata, and Matthews, P

2019 Japan Society for New Zealand Studies (ed.) *New Zealand Today*. Yokohama: Shumpusha.

[論文]

Matthews, P. J.

2019 Why are Kauri Dying? In Japan Society for New Zealand Studies (ed.) *New Zealand Today*, pp.130–131. Yokohama: Shumpusha.

2019 Can I Swim in This? In Japan Society for New Zealand Studies (ed.) *New Zealand Today*, pp.128–129. Yokohama: Shumpusha.

2019 Zealandia: the 7th Continent? In Japan Society for New Zealand Studies (ed.) *New Zealand*

Today, pp.2-3. Yokohama: Shumpusha.

2019 Why is Auckland the “City of Sails”? In Japan Society for New Zealand Studies (ed.) *New Zealand Today*, pp.190-191. Yokohama: Shumpusha.

◎調査活動

・海外調査

2019年8月21日～9月5日—フランス (École nationale des chartes (フランス国立古文書学校) で開催される国際交流研究会で発表、Bonaguil Castleでワークショップ「From Earth to Air, an Archaeology of Dreams」を開催)

2019年9月14日～10月2日—インド (デリー大学でのセミナー開催、研究打ち合わせ。コルカタ植物園での標本調査。ガンジス川流域のサトイモ科植物の野外調査)

2019年11月1日～11月10日—バングラディッシュ (バングラディッシュ農科大学でのMoU締結、セミナー開催、研究打ち合わせ、サトイモ科植物の野外調査)

2020年1月13日～1月24日—タイ (カセサート大学でのMoU締結、セミナー開催、研究打ち合わせ、サトイモ科植物の野外調査)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費 (基盤研究 (A)) 「政治的及び地理的に隔離された少数民族独自生存圏での植物遺伝資源及び伝承の賦存」 (研究代表者: 渡邊和男 (筑波大学)) 研究分担者、科学研究費 (基盤研究 (B)) 「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」 研究代表者

太田心平 [おおた しんぺい] ————— 准教授

1975年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒 (1998)、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程修了 (2000)、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得退学 (2003)、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了 (2007) 【職歴】文部科学省アジア諸国等派遣留学生 (2000)、(韓国) ソウル大学社会文化研究院比較文化研究所研究員 (2003)、(韓国) 暎園大学歴史・哲学部非常勤講師 (2003)、(韓国) ソウル女子大学教養教育部非常勤講師 (2003)、日本学術振興会特別研究員 (PD) (2004)、京都産業大学文化学部非常勤講師 (2004)、天理大学国際文化学部非常勤講師 (2005)、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手 (2005)、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教 (2007)、同志社大学社会学部嘱託講師 (2007)、大阪大学大学院人間科学研究科招へい研究員 (2007)、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究者 (2009)、国立民族学博物館研究戦略センター助教 (2010)、宮崎公立大学人文学部非常勤講師 (2010)、(米国) アメリカ自然史博物館人類学部門上級研究員 (2011)、国立民族学博物館民族社会研究部助教 (2012)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授 (2013)、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授 (2014)、大阪大学大学院人間科学研究科非常勤講師 (2014)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授 (2017) 【学位】博士 (人間科学) (大阪大学 2007)、修士 (人間科学) (大阪大学 2000) 【専攻・専門】北東アジア研究、博物館学、社会文化人類学 【所属学会】日本文化人類学会、韓国文化人類学会 (韓国)、Association for Asian Studies (米国)、韓国・朝鮮文化研究会、American Anthropological Association (米国)

【主要業績】

[分担執筆]

太田心平

2012 「国家と民族に背いて——アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学——21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.304-336, 京都: 昭和堂。

[論文]

오타 심페이

2006 「료한 : 일본에서의 한국문화 표상양식에 관한 지식인류학적 연구」『한국문화인류학』39(2): 85-128. [査読有]

Ota, S. C.

2015 Collection or Plunder: The Vanishing Sweet Memories of South Korea's Democracy Movement. In K.

Hirai (ed.) *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91), pp.79-193. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性

・研究の目的、内容

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

この期間には、この研究に2つの柱を立て、両側面から研究を推進する。

第1の柱は、1980年代以降の政治文化を対象としたもので、韓国の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ——マイクロ双対性をもっていたのか、その一貫性と非連続性を明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとする。この期間には、これまでに公開した研究成果を整理しなおしつつ、新しい関連研究とつきあわせて再検討し、総括する作業を進める。この推進のため、人間文化研究機構の地域研究推進事業である北東アジア地域研究プロジェクトの資金を使用する。

第2の柱は、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。この分野を遂行するため、本館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究」を研究代表者として既に実施している。また、研究者はアメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業するが、この兼業も同プロジェクトのためである。

・成果

上記3で示した第1の柱に関しては、主題に関連する国際研究グループを作り、それを率いた。IUAES (国際人類学・民族学連合) の2019年大会パネル「Rethinking the Relationships between Real Societies and Cyberspaces」を、デンマーク国立博物館のMartin Petersen 上席研究員とともに組織して採択され、その一部として個人発表「The Laboratory for Anyone: South Korean (Anti-)Ethno-Nationalism on HellKorea.com」をおこなう一方、パネル全体に対するコメントを韓国科学技術院の金東柱助教と分担して務めた。なお、これは韓国文化人類学会の海外理事としての活動でもあった。このパネルを準備し、学会に参加するために、人間文化研究機構の地域研究推進事業である北東アジア地域研究プロジェクトの資金を使用した。

一方、上記3で示した第2の柱に関しては、本館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの資金を資料し、資料データベースの強化について所定の成果を上げた。特に、アメリカ自然史博物館人類学部門の研究者および技術者で行ってきた国際共同研究に、本館の外来研究員や総合研究大学院大学の大学院生を参加させたことで、このプロジェクトの推進のみならず、次世代の研究者にも研究のためのノウハウやネットワークを伝えることが出来たものと考えられる。ただし、本年度の最終四半期に予定していた総括のための活動は、新型コロナウイルスの国際的感染拡大のため、断念せざるをえなかった。

◎出版物による業績

[その他]

太田心平

2020 「旅・いろいろ地球人 韓国に特有のこと① 元日はみんなが歳をとる日」『毎日新聞』1月4日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 韓国に特有のこと② キャッシュレス先進国の気持ち」『毎日新聞』1月11日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 韓国に特有のこと③ 化粧する青少年たち」『毎日新聞』1月18日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 韓国に特有のこと④ 急速な国民の再編成」『毎日新聞』1月25日夕刊。

2020 「改良韓服は語る」『みんぱく e-news』224: 巻頭コラム。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年8月30日 'Rethinking the Relationships between Real Societies and Cyberspaces.' IUAES 2019 Inter-Congress "World Solidarities", Adam Michiewicz University, Poznan, Poland

2019年8月30日 'The Laboratory for Anyone: South Korean (Anti-)Ethno-Nationalism on HellKorea.com.' IUAES 2019 Inter-Congress "World Solidarities", Adam Michiewicz University, Poznan, Poland

・研究講演

2019年5月11日 「嗜好品とAI」嗜好品文化研究会、京都新聞社

・展示

2019年6月1日～2020年3月31日 「梅棹忠夫生誕100年記念企画展『知的生産のフロンティア』ワーキング」
国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2020年2月11日 「韓国人はどうして大統領を罷免できたのか」大阪府高齢者大学校「現代社会を考える科」

2020年2月19日 「韓国の親日と反日は矛盾しない」大阪府高齢者大学校「現代社会を考える科」

◎調査活動

・海外調査

2019年7月19日～9月12日—アメリカ合衆国、オランダ、ポーランド（アメリカ自然史博物館において標本資料データベースに関する研究、アダムミツケヴィッチ大学においてIUAES年次大会への参加と研究動向調査）

2019年9月26日～9月30日—韓国（朝鮮半島の文化展示の改修にかかる標本資料の収集）

2019年12月1日～12月9日—韓国（フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの成果物評価会について協議）

2019年12月20日～2020年1月22日—アメリカ合衆国（フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの成果物の最終調整とその評価会について協議）

2020年2月20日～3月31日—アメリカ合衆国（米国の現政権下の移民制度とニューカマー韓国系移民の調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習I」、「地域文化学基礎演習II」、「比較文化学基礎演習I」、「比較文化学基礎演習II」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（2件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト（強化型）「朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

Grant for Intl Study Trip, Dept. of Anthropology BrainKorea21 Plus Team of Seoul Natl Univ. 「Preliminary Fieldwork on the Contemporary Sociocultures in Machiya Neighborhoods」（研究代表者：JIN, Seo-Hyun (Department of Anthropology at Seoul National University, MA Student)) Field Advisor, International Scholarship Exchange of PhD Candidates, Polish National Agency for Academic Exchange 「Field Research on Japanese Urban Legends」（研究代表者：SALAMONIK, Anna (Institute of Anthropology and Archeology, University of Gdansk, PhD Student)) Organiser

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

株式会社CDI嗜好品文化研究会メンバー、韓国文化人類學會海外理事、味の素の文化研究所責任編集委員

・他大学の客員、非常勤講師

American Museum of Natural History・Research Associate

1959年生。【**学歴**】早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学（1992）【**職歴**】帝京大学非常勤講師（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、東方研究会専任研究員（1992）、国立民族学博物館第三研究部助手（1993）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2004）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）【**学位**】博士（文学）（筑波大学大学院 2019）、文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）【**専攻・専門**】宗教学・東欧研究【**所属学会**】東方研究会

【**主要業績**】

[単著]

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国——ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

[共著]

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途3 人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

[論文]

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教——民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』24(1)：1-42。

【**2019年度の活動報告**】

◎各研究

・研究課題

知識人亡命の二つの形態——国外のミルチャ・エリアーデと国内のコンスタンティン・ノイカ

・研究の目的、内容

社会主義体制が成立した国々では、それ以前の体制に尽くした知識人たちは亡命を余儀なくされた。ルーマニアの場合、エリアーデ、シオラン、イヨネスクなどは国外へ逃れたが、ノイカは国内にとどまり、厳しい監視下に置かれた。亡命は故郷喪失の悲惨な体験であるが、前者たちはそれによって世界史に残る名声を得ることになった。一方、後者は弾圧下での苦しい体験を経たが真に後継者とよべるリチュエヌたち思想家たちを育てた。これら二つの異なる運命から知識人の移動とはなんなのかという問いを立ててみたい。ロシアのツァーリ体制、スターリン体制、ドイツのナチズム体制から逃れた知識人たちについての古典的なテーマに属するものではあるが、ルーマニアの歴史事情に即して考察を行って知識人の戦略、教育使命、権力との関わり方などについてエリアーデとノイカを通して考察した。

・成果

研究の成果は「戦間期ルーマニアの知識人と歴史表象」（平藤喜久子編『ファシズムと聖なるもの/古代的なるもの』所収、2020年4月刊行予定）として発表される。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2019年11月16日 「ルーマニア近代の知識人と民衆——民族主義、正教信仰、社会主義のなかで」第497回みんぱくゼミナール

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

菅瀬晶子 [すがせ あきこ] 准教授

【学歴】 東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒（1995）、東京外国語大学大学院地域文化研究科アジア第三専攻博士前期課程修了（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程修了（2006）**【職歴】** 総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、総合研究大学院大学融合推進センター特別研究員（2010）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2010）、神奈川大学経営学部非常勤講師（2010）、共立女子大学国際学部非常勤講師（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2011）、滋賀県立大学非常勤講師（2012）、神戸女子大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】** 博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（学術）（東京外国語大学大学院 1999）**【専攻・専門】** 文化人類学・中東地域研究（パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏）**【所属学会】** 日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

[単著]

菅瀬晶子

- 2012 『豊穡と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』（民族紛争の背景に関する地政学的研究19）大阪：大阪大学世界言語研究センター。
- 2010 『イスラームを知る6 新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。
- 2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』広島：溪水社。

【受賞歴】

- 2006 長倉研究奨励賞
2006 総研大研究賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的、内容

20世紀前半、歴史的パレスチナで活躍したナジブ・ナッサーらアラブ・ナショナリストの活動について調査する。宗教をこえたナショナル・アイデンティティの創出の過程をあきらかにするとともに、キリスト教徒であった彼ら自身の宗教的アイデンティティが、彼らの執筆活動に与えた影響をさぐる。また、平行して彼らがおもな活動の場としていたアラビア語紙に寄稿していた中東系ユダヤ教徒に注目し、アラビア語によるアラブ・ナショナリズムとシオニズムの議論とその影響を調査する。

・成果

年度前半は現代中東地域研究国立民族学博物館拠点のメンバーとして、企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『見られる私』より『見る私』」の準備と運営、後半は委員長をつとめるJICA博物館学コースの運営に多大な労力を割いた。前者において、各個研究とのかかわる部分については、2019年8月19日におこなったウィークエンドサロン「ヒジャーズとパレスチナ、その歴史的なかかわり」で講演した。

各個研究の内容については、2019年5月1日におこなわれたイスラーム映画祭4の解説としても講演した。ほかに、コーヒー文化研究については2017年度におこなった新着資料展示「標交紀の咖啡の世界」をもとに、西アジア展示内に「グローバル文化としてのコーヒー」を新しくもうけた。この新セクションについては、いずれ研究の推進にとまない内容を拡充してゆくことを視野に入れている。

さらに、特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」の関連書籍として出版された山中由里子・山田仁史（編）『この世のキワ〈自然〉の内と外』に、「歴史的パレスチナという場とジン憑き」（pp.149-162）を寄稿した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

菅瀬晶子

2019 「歴史的パレスチナという場とジン憑き」山中由里子・山田仁史編『この世のキワ——〈自然〉の内と外』（アジア遊学 239）pp.149-162, 東京：勉誠出版。

◎調査活動

・海外調査

2019年7月14日～8月6日—イスラエル、パレスチナ自治区、連合王国（歴史的パレスチナにおけるアラブ・ナショナリズムの調査、およびキリスト教祝祭の参与観察）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

奈良雅史 [なら まさし] ————— 准教授

1982年生。【学歴】筑波大学第一学群人文学類卒（2005）、筑波大学大学院人文社会科学研究科一貫制博士課程修了（2014）【職歴】日本学術振興会特別研究員PD／国立民族学博物館（2014）、Sciences Po Bordeaux Les Afriques dans le monde 客員研究員（2015）、北海道大学メディア・コミュニケーション研究院助教（2015）、北海道大学メディア・コミュニケーション研究院准教授（2017）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2019）【学位】博士（文学）（筑波大学大学院人文社会科学研究科、2014）、修士（文学）（筑波大学大学院人文社会科学研究科、2008）【専攻・専門】文化人類学、中国地域研究、イスラーム地域研究【所属学会】日本文化人類学会、「宗教と社会」学会、IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences)、EASSSR (East Asian Society for the Scientific Study of Religion)

【主要業績】

[単著]

奈良雅史

2016 『現代中国の〈イスラーム運動〉——生きにくさを生きる回族の民族誌』東京：風響社。

[共編]

西川克之・岡本亮輔・奈良雅史編

2019 『フィールドから読み解く観光文化学——「体験」を「研究」にする16章』京都：ミネルヴァ書房。

澤井充生・奈良雅史編

2015 『「周縁」を生きる少数民族——現代中国の国民統合をめぐるポリティクス』東京：勉誠出版。

【受賞歴】

2020 観光学術学会2020年度教育啓蒙著作賞

2018 北海道大学平成29年度教育研究総長表彰（研究部門）

2017 日本文化人類学会第12回日本文化人類学会奨励賞

2017 国際宗教研究所第12回国際宗教研究所賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

宗教と移動に関する人類学的研究——現代中国における回族の事例から

・研究の目的、内容

本研究は、中国内陸部から中国沿岸部にアラビア語通訳として出稼ぎに行く、回族と呼ばれるムスリム・マイノリティの動きに焦点を当て、中国政府による「一帯一路」構想の推進に伴う中国とイスラーム諸国との間での経済交流の促進が人々の移動の活発化をもたらし、イスラーム復興を促進してきたプロセスを明らかにすることを目的とする。

本研究は、研究代表者を務める科学研究費（若手研究）（19K13454）「宗教と移動をめぐる人類学的研究——現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク」研究分担者として加わる科学研究費（基盤研究（B））（18H00787）

「中国ムスリムの超国家・超民族的ネットワークの構築と多文化共生圏の創出に関する研究」、科学研究費（基盤研究（B））（17H02248）「東アジアにおける拡張現実時代の観光に関する研究」の援助を受けて実施する。

本研究では以上の目的を達成するため、回族と呼ばれるムスリム・マイノリティの出身地におけるイスラーム復興の状況と沿岸部への出稼ぎの実態を明らかにする。本年度はこれらの地域における現地調査を通じて、宗教活動に大きく影響する中国共産党の宗教政策、および出稼ぎに影響する中国共産党の経済政策の実施状況についても明らかにするとともに、出稼ぎ先でのトランスナショナルなムスリム・コミュニティの実態とそこでの宗教実践のあり方を明らかにする。

・成果

当該研究による成果は以下である。

◎出版物による業績

[編著]

西川克之・岡本亮輔・奈良雅史編

2019 『フィールドから読み解く観光文化学——「体験」を「研究」にする16章』京都：ミネルヴァ書房。

[分担執筆]

奈良雅史

2019 「観光の領域横断的な拡がり——中国ムスリムの宗教／観光実践」西川克之・岡本亮輔・奈良雅史編『フィールドから読み解く観光文化学——「体験」を「研究」にする16章』pp.182-199, 京都：ミネルヴァ書房。

2019 「ムスリムによる公益活動の展開——中国雲南省昆明市回族社会の事例から」石森大知・丹羽典生編『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』pp.291-326, 横浜：春風社。

[その他]

奈良雅史

2019 「書評とリプライ 鈴木正崇著『東アジアの民族と文化の変貌——少数民族と漢族、中国と日本』」『宗教と社会』25：162-166。

2019 「国立民族学博物館の収藏品⑩ 中国のコーラン」『文部科学 教育通信』464：2。

2019 「義理の親？」『月刊みんぱく』43(8)：20。

2019 「書評 木村自著『雲南ムスリム・ディアスポラの民族誌』」『文化人類学』84(2)：202-205。

2020 「回族の宣教活動に参加する」『月刊みんぱく』44(1)：10-11。

2020 「回回は天下に遍し」『月刊みんぱく』44(3)：16-17。

2020 「エスニック・ツーリズム開発に伴う民族間関係の変化——中国雲南省における回族社会の事例から」『國學院大學研究開発センター研究紀要』14：196-214。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年11月28日 「エスニシティの変容とゆらぐマジョリティ／マイノリティの境界——中国雲南省における回族の事例から」2019年みんぱく若手研究者奨励セミナー『ゆらぐマジョリティ／マイノリティ』

・民博研究懇談会

2019年7月24日 「民族間関係の変容——中国雲南省回族社会における民族観光とイスラモフォビア」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年7月27日 'Exchange of Piety: Islamic Revival and Social Change among Hui Muslims in Contemporary China.' The 2nd Annual Conference of the EASSSR (East Asian Society for the Scientific Study of Religion), Hokkaido University, Sapporo

2019年8月30日 'Entanglement of Islamic Missionary Activities and Islamophobia through Tourism Development: A Case Study of Hui Muslim Society in Yunnan Province, China.' The IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) 2019 Inter-Congress "World Solidarities", Adam michiewicz University, Poznan, Poland

2019年9月12日 「日本の回民研究」中日人類学学术交流研讨会、中央民俗大学、北京、中国

2019年9月28日 'Changes in Textbooks of Islamic Education and Entanglements of Ethnicity and Religiosity.' EAAA (East Asian Anthropological Association) Annual Meeting 2019, 全北大学校、全州市、韓国

2019年10月14日 「『異教徒』を迎え入れる——中国雲南省紅河州沙甸区における民族観光」日本文化人類学会
課題研究懇談会『歓待の人類学』第3回公開研究会、札幌市民交流プラザ

・研究講演

2019年10月9日 「オンライン・コミュニティによる観光実践——観光が生み出す社会的つながり」北海道大学
メディア・コミュニケーション研究院2019年度公開講座『観光とメディアの新たな出会い』
北海道大学

・広報・社会連携活動

2020年1月11日 「中国に生きるムスリムたち」第496回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2019年8月5日～8月11日—台湾（台北市、桃園市、新竹県、屏東県、台南市にて客家の宗教信仰に関する調査）

2019年8月26日～9月2日—ポーランド（IUAES（国際人類学民族科学連合）2019 Inter-Congressに参加し、基
盤研究（B）「東アジアにおける拡張現実時代の観光に関する研究」（17H02248）の
成果として口頭発表を行うとともに、当該プロジェクトに関する情報収集を行う）

2019年9月15日～9月22日—中国（浙江省義烏市にてトランスナショナルなムスリム・コミュニティに関する
調査）

2019年10月31日～11月4日—台湾（台北市、桃園市、宜蘭市にて台湾におけるムスリム・コミュニティに関す
る調査）

2020年1月16日～1月20日—中国（香港、マカオ、珠海市にてムスリム・コミュニティに関する調査）

2020年2月29日～3月18日—台湾（台北市、桃園市にて台湾におけるムスリム・コミュニティに関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクト
の代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「東アジアにおける拡張現実時代の観光に関する研究」（研究代表者：山田義裕
（北海道大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「中国ムスリムの超国家・超民族的ネットワークの
構築と多文化共生圏の創出に関する研究」（研究代表者：木村 自（立教大学））研究分担者、科学研究費（若
手研究）「宗教と移動をめぐる人類学的研究——現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク」研究代表者、国立
民族学博物館共同研究「グローバル化時代における『観光化／脱——観光化』のダイナミズムに関する研究」
（研究代表者：東賢太朗（名古屋大学））メンバー、国立民族学博物館共同研究「社会・文化人類学における中
国研究の理論的的定位——12のテーマをめぐる再検討と再評価」（研究代表者：河合洋尚）メンバー、東北大学東
北アジア研究センター共同研究「移動と流行——移民がもたらしたもの／持ち帰ったもの」（研究代表者：川口
幸大（東北大学））メンバー、京都大学「東南アジア研究の国際共同研究拠点」共同研究「移動者がホームにも
たたらすもの——中国と東南アジアにおける人口移動と送り出し社会の変容」（研究代表者：堀江未央）メンバー

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

植松東アジア研究基金「エスニシティと多文化共生をめぐる人類学的研究——台湾ムスリム・コミュニティの
事例から」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会『文化人類学』編集委員

松尾瑞穂 [まつお みずほ] ————— 准教授

【学歴】 南山大学文学部人類学科卒（1999）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了
（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2007）【職歴】 日本学術振
興会特別研究員（PD）（2007）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科講師（2010）、新潟国際情報大学情報
文化学部情報文化学科准教授（2013）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2014）、国立民族学博物館超
域フィールド科学研究部准教授（2017）【学位】 文学博士（総合研究大学院大学文化科学研究科 2008）、学術修士

(名古屋大学大学院国際開発研究科 2002)【専攻・専門】文化人類学、ジェンダー医療人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本宗教学会、宗教と社会学会

【主要業績】

[単著]

松尾瑞穂

2013 『ジェンダーとリプロダクションの人類学——インド農村社会の不妊を生きる女性たち』京都：昭和堂。

2013 『インドにおける代理出産の文化論——出産の商品化のゆくえ』東京：風響社。

[編著]

杉本良男・松尾瑞穂編

2019 『聖地のポリティクス——ユーラシア地域大国の比較から』東京：風響社。[査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インドにおけるサブスタンスと人種に関する研究

・研究の目的、内容

(1) 目的

本研究は、南アジアにおける遺伝子というサブスタンスとそれにまつわる諸実践を検討することを通して、人、家族、親族、カースト、宗教といった自他のカテゴリーの生成や圍繞、他者とのつながり (relatedness) の様態の変容について明らかにすることを目的とする。サブスタンスとは、親子や家族、集団の間で共有し、継承されるとみなされる身体構成物を指す。このサブスタンスの共有がいかに関と集団のカテゴリーの同定や差異を形成するののかについて、血液、母乳、精液といった、南アジア社会における伝統的なサブスタンス概念と、卵子、精子のような配偶子や遺伝子といった新しいサブスタンス概念との比較に注目する。また、人種のような集団の差異の「自然化」や「実体化」にサブスタンスが作用するメカニズムを考察することも目的である。

本研究が具体的に対象とするのは、インドにおける人種や民族、カーストといった集団の差異化において、血と遺伝子をめぐる言説が、社会のなかで科学的知識として生成され、流通し、機能している様態である。そこには、歴史、政治、ナショナリズムなどが複雑に絡み合っている。例えば、ヒンドゥーナショナリズムの台頭と宗教的対立が深まる近年のインドにおいては、ヒンドゥーとムスリムの(想像される)本質化された差異が強調されている。このような絡み合いを解きほぐすことを通じて、「遺伝子化」の時代における社会集団の範疇化や他者との差異化について考察を行う。

(2) 内容

1) インドにおける人種概念の検討

インドにおける人種主義は、大英帝国の植民地支配や、植民地下での啓蒙主義的人種主義とロマン主義的人種主義の交錯、アーリア人概念の変遷、民族とカーストなどが複雑に絡み合って成立している。例えば、インドでは「アーリア人侵略説」は、先住性と権利を主張する南のドラヴィダ系政党によっては政治的なアジェンダとなる一方で、その否定は、ヒンドゥー・ナショナリストにとってはインド文明の連続性を主張する思想的基盤を与えるものとなる。インドにおける人種概念は、欧米のそれとはまったく異なった位置づけを持っているのである。近年では、こうした集団の差異を歴史的な解釈のみならず、より「科学的」だとみなされる遺伝子や生物学的差異によって同定しようとする動きも広がっている。例えば、形質人類学、考古学、遺伝学などを用いて、インダス文明の担い手は、南部のドラヴィダ系集団と類似性が高くみられる、と結論付ける研究知見は、単なる「科学的事実」とはならず、常に政治的な論争的になる。こうした科学を取り巻く状況のなか、インドにおいて人種という概念はどのように変化し、現在はどのようなものとして現れるのだろうか。今年度は、アーリア人学説、インダス文明論、歴史修正主義、ムスリム異人種論について特に資料を読解し、分析する。

2) ヒンドゥーとムスリムの「差異」の検討

ヒンドゥーナショナリズムの思想的支柱とされる「ヒンドゥットワ」は、インド=ヒンドゥースタン(ヒンドゥーの土地)に生きる人は、言語、宗教、カースト、階級などの差異にかかわらず、本質的に「ヒンドゥー」であるとする概念である。そこでは、インドに居住するムスリムもヒンドゥーからの改宗者であることが強調され、本来的にはヒンドゥーであるといなされる本質的同化主義が主張されている。だが、その一方で近年で

はヒンドゥーとムスリムを生物学的に（人種的に）異なる集団であるとして、差異化する言説も広まっている。そのどちらもが、同時に進展しながら、他者としてのムスリム像を作り上げてきた。ヒンドゥーとムスリムの差異について語られる際のイディオムとして、何がどのように用いられているのか。ヒンドゥーとムスリムの差異が顕在化するいくつかの事例の検討を行う。

・成果

上記のテーマに関し、文献収集と文献読解、現地調査、共同研究会の組織・運営、現代南アジア地域研究事業（INDAS）第11回国際シンポジウム「Life and Death in Contemporary South Asia: Living through the age of Hope and Precariousness」の企画・運営、第32回日本南アジア学会での分科会「Food and body in South Asia」での研究報告をはじめとする多数の学会、ワークショップ、共同研究会での研究報告を実施した。これらを通して、インドにおける配偶子（卵子や精子）がインド社会で有する文化的な特徴の明確化と、生殖医療（代理出産や配偶子提供など）の現場における卵子のような新たなサブスタンスの可視化、顕在化について明らかにするとともに、それがより広範囲の人種といった社会的カテゴリーと接合する文脈について考察を深めた。暫定的に、1) 今日、インドにおける「人種」概念は、宗教的差異（特にヒンドゥーとムスリム）との関係づけが顕著になっていること、2) 血とともに、遺伝子というイディオムの使用が専門職だけでなく、少なくとも都市部の若い世代では一般化されつつあること（たとえばネット空間）、3) それゆえ、人種とサブスタンスの関係はきわめて政治化されていること、が明らかになった。同時に、人種概念の歴史性（導入時の現地語への翻訳過程、カーストと宗教の人種との混合など）をより詳細にたどる必要があるという課題も明らかとなった。

競争的資金を得た調査研究活動は、次の通り実施した。まず、松尾が代表を務める科学研究費（若手研究（B））「現代インドにおける遺伝子の社会的配置に関する人類学的研究」として、インドにおける遺伝的つながりと血のつながりの認識における差異と類似、および民俗生殖論の観念などについて、文献調査およびインド・マハーラーシュトラ州での聞き取り調査を行った。都市部でのドナー配偶子利用者へのインタビューおよび農村部での生殖年齢にある女性たちへの生殖観に関する調査を行った。

また、研究分担者である科学研究費（基盤研究（B））「現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究——ジェンダーの視点から」（研究代表：白井千晶静岡大学教授）のため、前年度までに収集したデータの整備・分析を勧めるとともに、成果報告会および報告書の作成を行った。さらに、MINDAS（現代南アジア地域研究・民博拠点）プロジェクトの一環として、スリランカにおけるサブスタンスと生殖に関する予備的調査を実施し、スリランカにおける出産、授乳慣行、ラクテーションマネジメント、生殖医療に関してコロポ市、キャンディ市等で病院の訪問調査、産婦人科医への聞き取り調査、保健師・看護師調査を行った。また、分担者となっている科学研究費（基盤研究（B））「開発のアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究」（研究代表：杉田映理大阪大学准教授）の一環で、インドとシンガポールにおいて、教育現場における月経・性教育に関する政府およびNGOの取り組み、教材開発とローカルな社会の慣習の変容に関する調査を行った。

研究会活動としては、3年半にわたる研究会の最終年度にあたる民博の共同研究会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的配置の比較研究」を研究代表として組織し、開催するとともに、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代南アジア地域研究」（MINDAS）として、松尾がリーダーを務める「社会変動と親密圏」班の運営を行った。

成果公開として、科研の成果報告書『現代アジアのリプロダクションの変容に関する国際比較研究』の分担執筆（「インド」「スリランカ」）、『月刊みんぱく』へのエッセイを執筆、刊行するとともに、学会・共同研究会等での研究報告を10回、来館者向け講演会を1回実施した。

◎出版物による業績

[その他]

松尾瑞穂

2019 「鬼の棲む島——『鬼ヶ島』の古今東西」特集「驚異と怪異——想像界の生きものたち」『月刊みんぱく』43(8)：8-9。

2020 「シネ倶楽部M 月経のタブーに挑む心優しきヒーロー『パッドマン——5億人の女性を救った男』」『月刊みんぱく』44(1)：18-19。

2020 「インド」白井千晶編『現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究——ジェンダーの視点から調査報告書』pp.233-247。

2020 「スリランカ」白井千晶編『現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究——ジェンダーの視点から調査報告書』pp.248-261。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年7月13日 「サブスタンスの人類学に向けて——序論検討」研究会『グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究』国立民族学博物館

2020年2月2日 「サブスタンスと関係性の構築と分断」研究会『文化人類学を自然化する』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月2日 'Sociocultural Practices Influencing the Medical Termination of Pregnancy in India.' 第71回日本人口学会、香川大学

2019年9月5日 'Blood and Egg: Making Relatedness in Third-Party Assisted Reproductive Technologies (ARTs) in India.' XI AFIN International Conference, Granada University, Granada, Spain

2019年10月6日 'The Body in Difference: "Naturalisation" of the Communal Difference in India.' 日本南アジア学会第32回全国大会、慶應義塾大学（査読あり）

2019年10月18日 「身体物質のやり取りから見えるもの——サブスタンス研究の射程」京都市人類学研究会10月例会、京都大学

2019年10月26日 'Living with Bodily Contingency: Pregnancy loss among childless women in West India.' 2019 INDAS シンポジウム国内研究会、京都大学

2019年12月14日 'Living with Bodily Contingency: Pregnancy Loss among Childless Women in West India.' 2019 INDAS Symposium on Life and Death in Contemporary South Asia, Ryukoku University, Kyoto

2020年1月6日 'Creating Relatedness, Cutting Ties: Corporeal Reality in Third-Party Assisted Reproductive Technologies in India.' 9th Annual Arts, Humanities, Social Sciences and Education Conference, Prince Waikiki, Hawaii, United States

2020年1月25日 「サブスタンス概念の検討とその射程」中部人類学談話会（日本文化人類学会中部地区研究懇談会）、名古屋大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年10月20日 「インドにおける異形の神々」第557回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2019年8月1日～8月16日—インド（インドにおける生殖観と遺伝的つながりに関する調査）

2020年2月18日～2月29日—スリランカ（スリランカにおけるリプロダクションの実践に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習 I」、「地域文化学基礎演習 II」、「比較文化学基礎演習 I」、「比較文化学基礎演習 II」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究（B））「現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「グローバルなアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究」（研究代表者：杉田映理（大阪大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究——ジェンダーの視点から」（研究代表者：白井千晶（静岡大学））研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化））「遺伝子化時代の社会集団のカテゴリー化と差異化——インドにおける血と遺伝子を中心に」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

人類文明誌研究部

飯田 卓 [いいだ たく] 部長（併）教授

1969年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1992）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻修士課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学（1999）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1）（1994）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2000）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻准教授（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2018）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻教授兼任（2018）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2019）、国立民族学博物館人類文明誌研究部研究部長（2019）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学 2000）、修士（人間・環境学）（京都大学 1994）【専攻・専門】漁撈社会、技術と知識、物質文化、視覚メディア、文化遺産、日本人類学史【所属学会】生態人類学会、日本アフリカ学会、日本文化人類学会、地域漁業学会、日本島嶼学会、環境社会学会、Association of Critical Heritage Studies

【主要業績】

[単著]

飯田 卓

2014 『身をもって知る技法——マダガスカル漁師に学ぶ』京都：臨川書店。

2008 『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。

[編著]

飯田 卓・朝倉敏夫編

2017 『日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告139）大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

2010 第22回 日本アフリカ学会学術研究奨励賞（日本アフリカ学会）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

知識と情報、コミュニケーションに関する諸概念の理論的検討

・研究の目的、内容

2018年度末に刊行された論文“Traveling and Indwelling Knowledge: Learning and Technological Exchange among Vevo Fishermen in Madagascar” (Keiichi Omura et al. (eds.) *The World Multiple: The Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds*, London and New York: Routledge, pp.190-204) において、筆者は、知識と呼ばれているものについて広く考察し、①個人の身体に宿る身体知、②物理的屬性や形態・構造などのかたちでモノが備えた情報、③メディアに記録された情報、④ヒトがモノを知覚したりヒトとヒトとのあいだでコミュニケーションがおこなわれるさいに受け渡される情報、などに分類できることを指摘した。本研究ではこれらの概念を基礎として、信念や確証できないことから、想像、期待、夢想、幻想などの現象の情報学的基盤について考察する。

理論的研究であるため、特段の外部資金獲得を予定してはいないものの、進行中のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトや特別研究、また申請中の科研費プロジェクトなどの成果もできるだけ本研究に関わらせて考察していく。

・成果

共同研究「エージェンシーの定立と作用（2013～2016年度）」の研究成果『存在論的コミュニケーションの人類学』（杉島敬志編、臨川書店、2019年）において「技術習得と知識共有——マダガスカル漁撈民ヴェズの事例から考える」を分担執筆し、近年の人類学における存在論的転回の議論において既刊の情報論を位置づけた。ま

た、同じく共同研究「呪術の実践＝知の現代的位相（2014～2017年度）」の研究成果『呪術の現代的位相——文化人類学的探究』（川田牧人・白川千尋・飯田 卓編、春風社、印刷中）の一章として「経験されざるものを知る——マダガスカル漁撈民ヴェズにおける霊と呪術のリアリティ」を準備し、環境のアフォーダンスを手がかりとした想像世界のたち現れについて論じた。ただし後者の問題は、知覚に連続したアブダクションの観点からより深く考察する必要がある。この点は、中川 敏を代表とする共同研究会「文化人類学を自然化する（2017年度～2020年度）」における口頭発表で明確化し、同研究においてさらに深めていく予定である。

◎出版物による業績

[分担執筆]

飯田 卓

2019 「技術習得と知識共有——マダガスカル漁撈民ヴェズの事例から考える」杉島敬志編『コミュニケーション的存在論の人類学』pp.304-342, 京都：臨川書店。

Iida, T.

2019 DiPLAS: Academic Image Platform for Twentieth-Century Photographs. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.165-174. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

飯田 卓

2019 「書評 高田 明著『相互行為の人類学——「心」と「文化」が出会う場所』『アジア・アフリカ地域研究』19(1)：68-71。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年2月2日 「読むことの現象学」研究会『文化人類学を自然化する』（代表者：中川 敏）国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月18日 「くらしのなかの文化遺産——物質文化研究と博物館活動、そして文化継承支援を統合する試み」日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学、京都

2019年6月18日 'Communal Wellbeing among Competitive Fishermen.' International Seminar by the UK-Japan Network on the Political Ecology of Coastal Societies "The Politics and Pitfalls of Maritime Governance", University of Aberdeen, Aberdeen, United Kingdom

2019年6月18日 'What Matters for Natural Kelp Collectors and Kelp Aquafarmers? Physical and Social Factors Taken in Account.' International Seminar by the UK-Japan Network on the Political Ecology of Coastal Societies "The Politics and Pitfalls of Maritime Governance", University of Aberdeen, Aberdeen, United Kingdom

2019年7月13日 「国立民族学博物館のアフリカ研究」TICAD7パートナー事業シンポジウム『日本のアフリカ研究を総覧する』上智大学四谷キャンパス、東京

2020年3月2日 'Ethnology in Interwar Japan: Keizo Shibusawa's Ethnographic Collection and Its Surrounding Currents.' Conference au Musée d'Ethnographie de Genève, Musée d'Ethnographie de Genève, Genève, Switzerland

・広報・社会連携活動

2019年11月15日 「遺産観光におけるバーチャリティ」第20回みんぱく公開講演会『アニメ「聖地」巡礼——サブカルチャー遺産の現在』日経ホール、東京

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年5月27日 「マダガスカルのバスケットリー」科学研究費（基盤研究（B））「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」（代表：上羽陽子）研究会、国立民族学博物館

2019年5月27日 「無形文化遺産はマダガスカルでいかにふるまったか——ザフィマニリの木彫り知識を事例に」科学研究費（基盤研究（B））「文化遺産の「社会的ふるまい」に関する応用人類学的研究——東部アフリカを事例に」（代表：飯田 卓）研究会、国立民族学博物館

2019年6月10日 「日常生活的文化遺産化（日常生活の文化遺産化）——馬達加斯加木彫商品化案例（マダガスカルの木彫り商品化を例に）」（國立臺北藝術大學博班實驗室系列講座『時空移轉・文化續存』國立臺北藝術大學、臺北、台湾

◎調査活動

・海外調査

2019年6月9日～6月10日—台湾（文化遺産に関する研究打合せ）

2019年6月16日～6月22日—連合王国（アバディーン大学の研究会「沿岸社会のポリティカルエコロジー」への参加）

2019年7月24日～8月25日—ケニア（スワヒリ海岸部の文化遺産とそれを支えるコミュニティの調査）

2019年10月24日～11月11日—マダガスカル（マダガスカル海岸部の文化遺産とそれを支えるコミュニティの調査）

2019年11月28日～11月30日—韓国（日本と韓国の漁業に関する展示観覧と研究会参加）

2020年1月8日～1月17日—ケニア（ケニア国内における文化遺産行政の調査）

2020年2月27日～3月15日—スイス、フランス、連合王国（両大戦間期の人類学界における日仏交流に関する調査、文化遺産の人類学に関わるシンポジウム準備としての研究打ちあわせ）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」（研究代表者：吉田憲司）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究——イワシをめぐる韓国の民俗変化」（研究代表者：松田陸彦（国立歴史民俗博物館））連携研究者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」（研究代表者：Peter Matthews）連携研究者、科学研究費（基盤研究（S））「『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服——人類の未来を展望する総合的地域研究」（研究代表者：松田素二（京都大学））連携研究者、科学研究費（基盤研究（B））「文化遺産の『社会的ふるまい』に関する応用人類学的研究——東部アフリカを事例に」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」（研究代表者：上羽陽子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「ファシズム期における日独伊のナショナリズムとインテリジェンスに関する人類学史」（研究代表者：中生勝美（桜美林大学））研究分担者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「人類学／民俗学の学知と国民国家の関係——20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」（研究代表者：中生勝美（桜美林大学））メンバー、国立民族学博物館共同研究「文化人類学を自然化する」（研究代表者：中川 敏（大阪大学））メンバー、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（研究代表者：日高真吾）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

国立歴史民俗博物館企画展示「海がつなぐ日本と韓国（仮称）」展示プロジェクト委員、文部科学省・日本ユネスコ国内委員会「民間ユネスコ活動助成のための補助事業」審査委員、日本文化人類学会理事、日本文化人類学会評議員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員、ICOM（国際博物館会議）京都大会運営委員、京都大学東南アジア研究所 CIRAS センター（京都大学地域研究情報統合センター）共同研究課題選考委員、文化遺産国際協力コンソーシアムアフリカ分科会委員、マダガスカル研究懇談会世話役

・他大学の客員、非常勤講師

静岡県立大学国際関係学部「国際社会論」（集中講義）、神戸大学大学院国際文化学研究所「文化情報リテラシー特殊講義」（集中講義）

池谷和信 [いけや かずのぶ] ————— 教授

1958年生。【学歴】東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】京都大学アフリカ地域研究センター教務補佐員（1987）、日本学術振興会特別研究員（DC）（1989）、北海道大学文学部附属北方文化研究施設文化人類学部門助手

(1990)、国立民族学博物館第一研究部助手(1995)、国立民族学博物館民族社会研究部人類環境部門助教(1998)、総合研究大学院大学先導科学研究科生命体科学専攻助教(1999)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(2007)、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻教授(2007)国立民族学博物館民族文化研究部研究部長(2015)、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授(2017)、総合研究大学院大学文化科学研究科研究科長(2019)【学位】理学博士(東北大学大学院理学研究科 2003)【専攻・専門】環境人類学・人文地理学・地球学・生き物文化誌学 世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、植民地時代における民族社会の変容に関する研究、地球環境問題および地球環境史に関する研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、国際人類学民族学連合(IUAES)、アメリカ人類学会(American Anthropological Association)、日本生態学会、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会、生態人類学会、国際狩猟採集民学会(International Society for Hunter Gatherer Research)

【主要業績】

[単著]

池谷和信

- 2014 『人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える』(フィールドワーク選書5)京都:臨川書店。
- 2003 『山菜採りの社会誌——資源利用とテリトリー』仙台:東北大学出版会。
- 2002 『国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』(国立民族学博物館研究叢書4)大阪:国立民族学博物館。

【受賞歴】

- 2007 日本地理学会優秀賞
- 1998 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

狩猟採集民の生業に関する歴史人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人類文明誌研究の一環として、「狩猟採集民の生業の歴史の変容を把握すること」が目的である。これまでの狩猟採集民の歴史研究においては、植民地以前や先史時代の狩猟採集民とのかかわり方が不明瞭であった。本研究では、狩猟採集民の生業に注目して過去100年を超える時間のなかでの変容と持続を把握することが目的である。このため、アフリカ南部のカラハリ砂漠での地域研究を軸にして、西アジアのヨルダン地域、東南アジアの大陸部、シベリア北東部における先史から現在までの狩猟採集民の歴史を復元することを計画している。

・成果

狩猟採集民の生業に関する歴史人類学的研究では、3つの成果がでている。

1) 論文:2019年5月末に、狩猟採集民の犬猟に関する論文(「犬を使用する狩猟法の人類史」)が、学術図書分担部として刊行された。この論文は、カラハリ砂漠のサンの犬猟の実態を軸にしながらも世界の狩猟採集民の犬猟に関する一般的傾向に言及している。

2) 短報:アラビア半島の岩絵に描かれている犬と人のかかわりに対して民族考古学的に解釈を加えた。「アジアの新人文化における狩猟活動について——アラビア半島の犬猟に注目して」野林厚志編『パレオアジア文化史学B01班 2019年研究報告』4、1-4頁。

3) 研究発表:名古屋大学の門脇誠二氏との連名で、国際第四紀学会(ダブリン)にて報告した。報告タイトルは、“Adaptive strategy to dryland among Paleolithic hunter-gatherers: ethno-archaeological approach of using water and animals in southern Jordan”である。なお、参加したセッションにはマックスプランク研究所(人類史)の研究者が多く、最先端の情報を得るには有効であった。

なお、狩猟採集民の生業そのものではないが、狩猟採集民の装飾文化や認知革命を扱っている研究が2020年3月に刊行された。それは、「序章:人類とビーズ」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』pp.1-20、昭和堂である。今後、先史狩猟採集民の生業と装飾とのかかわり方を論議する予定である。

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[編著書]

池谷和信編

2020 『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』京都：昭和堂。

[論文]

黒澤弥悦・池谷和信

2019 「変わりつつあるイノシシと人の関係」『BIOSTORY』31：8-13。

池谷和信・那須浩郎

2019 「変わりつつある野菜と人の関係」『BIOSTORY』32：8-13。

池谷和信

2019 「犬を使用する狩猟法（犬猟）の人類史」大石高典・近藤社秋・池田光穂編『犬からみた人類史』pp.46-67, 東京：勉誠出版。

2020 「サン、ソマリ」『先住民の宝』pp.91-106, 大阪：国立民族学博物館。

2020 「アジアの新人文化における狩猟活動について ——アラビア半島の犬猟に注目して」野林厚志編『パレオアジア文化史学 計画研究 B01班2019年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.1-4, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）

2020 「序章 人類とビーズ」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』pp.1-20, 京都：昭和堂

2020 「日本で華開くビーズ文化——ガラスビーズ・ビーズバッグ・ビーズ織り」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』pp.285-295, 京都：昭和堂

[その他]

池谷和信

2019 「ビーズに秘められた可能性⑥ 生き物の歯」『Bead Art & Embroidery』29：66-69。

2019 「東南アジアの狩猟採集民からみた旧石器時代人の環境適応」野林厚志・彭宇潔・高木仁編『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第8回研究大会』pp.4-5, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班。

2019 「ビーズに秘められた可能性⑦ 多様な素材」『Bead Art & Embroidery』30：60-63。

2019 「イッカクとユニコーン」山中由里子編『驚異と怪異——想像界の生きものたち』p.225, 東京：河出書房新社。

2019 「ビーズに秘められた可能性⑧ ビーズバッグ」『Bead Art & Embroidery』31：66-69。

2019 「アフリカ人の心のあり方」『大法輪』86(11)：104-108。

2019 「アジアの狩猟採集民の多様性」門脇誠二編『「パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」第7回研究大会予稿集』18-19, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班。

2019 「ハンターとともに走る」『月刊みんぱく』43(4)：10-11。

2020 「アマゾンにおけるベッカー狩猟活動について」川本直美・中尾央編『出ユーラシア・プロジェクト第1集 第2回全体会議予稿集』p.35。

2020 「主役なき土地権運動——カラハリ先住民」『季刊民族学』171：56-63。

2020 「おわりに——人類の美の起源を探る」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』pp.296-297, 京都：昭和堂。

2020 「はじめに」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』pp.i-ii, 京都：昭和堂。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月11日 「アジアの狩猟採集民の多様性」パレオアジア文化史学第7回研究大会、名古屋大学

2019年5月18日 「カラハリ狩猟採集民における物質文化の変容——狩猟具に注目して」日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学

- 2019年5月25日 「営みにさぐる「ヒトらしさ」」国立科学博物館、千里文化財団主催トークイベント『ヒトってなんだ??——ホモ・サピエンスの誕生から文化の獲得まで』国立科学博物館
- 2019年6月15日 「趣旨説明」味の素食の文化センター・食の文化フォーラム40周年記念I『食の人類史』第1回「食資源の開発」、味の素グループ高輪研修センター
- 2019年6月15日 「狩猟採集民の食」味の素食の文化センター・食の文化フォーラム40周年記念I『食の人類史』第1回「食資源の開発」、味の素グループ高輪研修センター
- 2019年7月30日 (K. Ikeya and S. Kadowaki) 'Adaptive Strategy to Dryland among Paleolithic Hunter-Gatherers: Ethno-Archaeological Approach of Using Water and Animals in Southern Jordan.' INQUA (The International Union for Quaternary Research) 2019, Convention Centre Dublin, Ireland
- 2019年9月12日 「生き物文化誌の今後」生き物文化誌研究会、東京大学総合研究博物館
- 2019年9月21日 (池谷和信・高木 仁)「開会挨拶・趣旨説明」生き物文化誌学会・ウミガメ例会(テーマ:「ウミガメの文化誌」)、神戸市須磨区民センター
- 2019年9月28日 「趣旨説明」味の素食の文化センター・食の文化フォーラム40周年記念I『食の人類史』第2回「食の行動」、味の素グループ高輪研修センター
- 2019年10月19日 (Adi Prasetijo and K. Ikeya) 'Hunter-Gatherers in Indonesia.' Minpaku Workshop "Hunter-Gatherers in Asia: Ecological Adaptation and Social Relationships", National Museum of Ethnology
- 2019年10月19日 'Introduction.' Minpaku Workshop "Hunter-Gatherers in Asia: Ecological Adaptation and Social Relationships", National Museum of Ethnology
- 2019年10月29日 「日本の山村研究の最前線——佐々木高明氏の写真からの展望」北東アジア地域研究プロジェクト・民博拠点月例会、国立民族学博物館
- 2019年11月2日 「1960年の五木村の暮らし——佐々木高明氏の写真から」熊本県五木村伝承館
- 2019年12月4日 「人類は何を食べてきたか?——フィールドワークから探る肉食の30万年」大手町アカデミア・人間文化研究機構コラボ、読売新聞ビル、東京
- 2019年12月7日 (佐藤靖明・池谷和信)「趣旨説明」生き物文化誌学会第77回例会『バナナの文化誌』熱川バナナワニ園
- 2020年12月14日 「東南アジアの狩猟採集民からみた旧石器時代人の環境適応」パレオアジア文化史学第8回研究大会、国立民族学博物館
- 2020年1月11日～11月12日 「アマゾンにおけるベッカーリヤ狩猟活動について」出ユーラシア・プロジェクト第2回全体会議(ポスター発表)、南山大学
- 2020年1月31日 'Hunter-gatherers and culture in Africa: Bow and arrows as an index of foraging behaviors.' The SOKENDAI Advanced Science Synergy Program (SASSP) Minpaku Seminar on the Integrated Anthropology, National Museum of Ethnology
- 2020年2月1日 「世界のハンターと動物」ヒトと動物の関係学会・関西シンポジウム『狩猟採集の現代』国立民族学博物館
- 2020年2月29日 「趣旨説明」味の素食の文化センター・食の文化フォーラム40周年記念I『食の人類史』第3回「食の価値観」、味の素グループ高輪研修センター
- ・研究講演
- 2019年4月27日 「企画展『ビーズ——自然をつなぐ、世界をつなぐ』民博 vs. 科博」講演会、国立科学博物館
- 2019年11月22日 「装いの文化誌——アフリカのビーズに注目して」『国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装』ギャラリートーク、阪急うめだギャラリ
- ・展示活動
- 2019年4月9日～6月16日 国立民族学博物館・国立科学博物館共同企画展「ビーズ——自然をつなぐ、世界をつなぐ」実行委員
- 2019年11月13日～25日 阪急うめだギャラリ 阪急うめだ本店/国立民族学博物館/千里文化財団主催「国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装」実行委員
- ・みんぱくウィークエンド・サロン
- 2019年4月21日 「認知革命とビーズ」第54回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・ 広報・社会連携活動

- 2019年6月4日 「ニワトリと人」兵庫県阪神シニアカレッジ、国際理解学科
- 2019年6月4日 「ラクダの文化誌」兵庫県阪神シニアカレッジ、国際理解学科
- 2019年7月19日 「ブタの文化誌」兵庫県阪神シニアカレッジ、国際理解学科
- 2019年7月19日 「クジラ、イルカの文化誌」兵庫県阪神シニアカレッジ、国際理解学科

◎調査活動

・ 国内調査

- 2019年9月16日—高知県室戸市（日本におけるウミガメと人のかかわりに関する資料収集）
- 2019年10月9日—静岡県東伊豆町熱川（人とバナナに関する資料収集）
- 2019年11月2日～11月4日—熊本県五木村（焼畑に関する調査）
- 2019年12月7日～12月8日—静岡県東伊豆町熱川（人とバナナに関する資料収集）
- 2020年2月7日～2月9日—宮城県気仙沼市（海の生き物文化に関する資料収集）

・ 海外調査

- 2019年6月6日～6月13日—インド、ブータン（家畜資源に関する資料収集）
- 2019年7月28日～8月5日—アイルランド、フランス（INQUA（International Union for Quaternary Research）2019の研究会議出席・発表および研究情報収集・打合せ）
- 2019年8月13日～8月25日—ブータン（家畜資源に関する資料収集）
- 2019年8月28日～9月3日—ヨルダン（先史時代の狩猟採集民の生業に関する資料収集）
- 2019年11月26日～11月29日—マレーシア（食文化の資料収集およびThe 9th Asian Food Study Conferenceに参加）
- 2019年12月8日～12月13日—ラオス（アジアにおける人間と動物の関係に関する調査）
- 2019年12月21日～12月27日—インドネシア（先史時代の狩猟採集民の生業に関する調査）
- 2020年1月21日～1月25日—アメリカ合衆国（人と動物の関係に関する研究資料収集）
- 2020年2月15日～2月23日—ペルー（アマゾンにおける生業複合に関する研究資料収集）

◎大学院教育

・ 指導教員

主任指導教員（3人）、副指導教員（2人）

・ 博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「低生産性品種・形質に向けられる心象の学融合解析と品種継承施策のパラダイム転換」（研究代表者：遠藤秀紀（東京大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「ポスト古代ゲノム解読期における家畜化概念のヒューマンアニマルボンド的学融合刷新」（研究代表者：遠藤秀紀（東京大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」（研究代表者：ピーター J. マシウス）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」拠点代表者

・ 他機関から委嘱された委員など

Nomadic Peoples 編集委員、Studies of Tribes and Tribals (India) 編集委員、Journal of Communication (India) 編集委員、日本アフリカ学会評議員、人文地理学会理事、生き物文化誌学会会長、ヒトと動物の関係学会理事、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、総合地球環境学研究所運営会議員、ピオストーリー編集委員（編集長）、コスモス国際賞選考専門委員会委員、味の素の文化センター企画委員および会員

・ 非常勤講師

東北大学文学部「考古学各論（考古学と狩猟採集民研究）」及び文学研究科「考古学特論III」（集中講義）、広島大学大学院国際協力研究科「途上国農村地域研究」（集中講義）、放送大学「フィールドワークと民族誌」（オンライン）

齋藤 晃 [さいとう あきら]—————教授

【学歴】京都大学文学部フランス語学フランス文学専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第四研究部助手（1996）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2014）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）【学位】学術修士（東京大学大学院総合文化研究科1991）【専攻・専門】文化人類学、ラテンアメリカ研究【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

齋藤 晃

1993 『魂の征服——アンデスにおける改宗の政治学』東京：平凡社。

[共著]

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

齋藤 晃編

2020 『宣教と適応——グローバル・ミッションの近世』名古屋：名古屋大学出版会。

【受賞歴】

2018 大同生命地域研究奨励賞（公益財団法人大同生命国際文化基金）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究

・研究の目的、内容

1570年代、スペイン統治下のアンデスにおいて、世界史上希有な社会工学実験が実施された。第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドの命令により、かつてのインカ帝国の中核地域で約150万の先住民が碁盤目状に整然と区画された1千以上の町に強制移住させられた。総集住化と呼ばれるこの政策は、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれているが、その内実には不明な点が多い。本研究では、地理情報システム等を活用して、副王トレドの総集住化の全体像の解明を目指す。なお、本研究は、科学研究費（基盤研究（A））「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」（2015～2017年度、代表者：齋藤 晃）の一環として実施される。

・成果

6月23日、立教大学文学部人文研究センターの公開講演会で、「ラテンアメリカ史への人文情報学の貢献——植民地期アンデスにおける先住民の総集住化を事例として」と題する講演をおこない、歴史学研究へ人文情報学の道具と方法を応用することの有効性や問題点を論じた。

また、科研費による国際共同研究のメンバーと共著で、大量のデータを処理する人文情報学の能力を副王トレドの総集住化の研究に活用することでもたらされる新たな知見に関して英語論文を執筆し、『Journal of Field Archaeology』に掲載された。

◎出版物による業績

[編著]

齋藤 晃編

2020 『宣教と適応——グローバル・ミッションの近世』名古屋：名古屋大学出版会。

[論文]

齋藤 晃

2020 「宣教師の異文化適応を再考する」齋藤 晃編『宣教と適応——グローバル・ミッションの近世』

pp.1-52, 名古屋：名古屋大学出版会。

2020 「福音以前の祖先と『粗野な人びと』の救済——16世紀の日本とペルー」 齋藤 晃編『宣教と適応——グローバル・ミッションの近世』pp.88-130, 名古屋：名古屋大学出版会。

Wernke, S., P. VanValkenburgh and A. Saito

2020 Interregional Archaeology in the Age of Big Data: Building Online Collaborative Platforms for Virtual Survey in the Andes. *Journal of Field Archaeology* 45(supplement 1): S61-S74. [査読有]

[その他]

齋藤 晃

2019 「アマゾンでゴムと格闘する」『月刊みんぱく』43(11)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月2日 「アマゾンの『文字化された都市』——モホスのイエズス会ミッションの洗礼簿」日本ラテンアメリカ学会第40回定期大会、創価大学

・研究講演

2019年6月23日 「ラテンアメリカ史への人文情報学の貢献——植民地期アンデスにおける先住民の総集住化を事例として」2019年度人文研究センター公開講演会、立教大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年11月10日 「『旧世界』の驚異——キリスト教宣教とアメリカ先住民」第559回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「近代ヒスパニック世界における文書ネットワークの成立・展開・変容（衰退）過程の究明」（研究代表者：吉江貴文（広島市立大学））研究分担者

鈴木 紀 [すずき もとひ]——教授

1959年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）【職歴】国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2013）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2019）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1985）【専攻・専門】開発人類学・ラテンアメリカ文化論 開発援助プロジェクト評価、フェアトレード、マヤ・ユカテコ民族の社会変化、先住民文化の比較展示学【所属学会】日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for Applied Anthropology、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』（みんぱく実践人類学シリーズ8）東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2014 「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84, 東京：東京大学出版会。

2011 「開発人類学の展開」佐藤寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学——冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp.45-66, 東京：明石書店。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代ラテンアメリカ文明の輪郭

・研究の目的、内容

本研究は、文明論の視点から現代のラテンアメリカ地域の特徴を分析することを目的とする。ラテンアメリカ地域は先コロンブス時代にメソアメリカ文明やアンデス文明、その他多くの地域文化を育み、16世紀以降は西洋文明を受容した。したがって文明として現代のラテンアメリカを捉えるためには、先コロンブス時代の文明の継続／再解釈と、西洋およびその他の地域の文明の受容／再解釈、および両者の結果としての現代文明としてのラテンアメリカの固有性／普遍性の検討が必要になる。本研究を推進するための方法論として、ラテンアメリカ地域の先住民族文化を展示する考古学・人類学・歴史博物館および美術館における展示内容の比較を中心におこなう。2019年度は、2014年度から2018年度にかけて実施した科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」（研究代表：鈴木 紀）で収集した資料の分析を継続する。また本研究を次年度以降も発展させるために、2019年度後半には科学研究費、民間の研究助成金などに応募する。

・成果

科学研究費助成事業・新学術領域「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」の成果を『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』（青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀編、京都大学学術出版会、2019年）の第3章「植民地時代から現代の中南米の先住民文化——古代アメリカ文明の資源化」（鈴木 紀、271-280頁）および第3章第9節「時間旅行の楽しみ——博物館で学ぶ古代アメリカ文明」（鈴木 紀、390-402頁）として発表した。

また同科研プロジェクトの研究成果は「博物館の中のアルテ・ポプラル」（第40回日本ラテンアメリカ学会定期大会、創価大学、2019年6月1日）、“Arte popular latinoamericano: un estudio comparativo de museografía”（FIEALC 2019, Szeged 大学、2019年6月26日）として口頭発表した。

さらに中南米各地のアルテ・ポプラル（芸術的な手工芸品）の博物館展示の比較をつうじて、メキシコのアルテ・ポプラルの特徴として先スペイン期に起源をもつこと、先住民と非先住民双方の作品を含むことを確認し、その見解に基づいて国立民族学博物館の企画展「アルテ・ポプラル——メキシコの造形表現のいま」（2019年10月10日～12月24日）を計画、実施した。

◎出版物による業績

[編著]

青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀編

2019 『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』京都：京都大学学術出版会。

[分担執筆]

青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀

2019 「はじめに」青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀編『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』pp.i-xvi, 京都：京都大学学術出版会。

青山和夫・坂井正人・鈴木 紀・米延仁志

2019 「メソアメリカとアンデスの比較文明論」青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀編『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』pp.403-433, 京都：京都大学学術出版会。

鈴木 紀

2019 「植民地時代から現代の中南米の先住民文化——古代アメリカ文明の資源化」青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀編『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』pp.271-280, 京都：京都大学学術出版会。

2019 「時間旅行の楽しみ——博物館で学ぶ古代アメリカ文明」青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀編『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』pp.390-402, 京都：京都大学学術出版会。

2020 「マヤ」信田敏宏編『先住民の宝』pp.75-79, 大阪：国立民族学博物館。

2020 「旅と映画とグアテマラ」信田敏宏編『先住民の宝』p.90, 大阪：国立民族学博物館。

[その他]

鈴木 紀

- 2019 「旅・いろいろ地球人 中南米博物館紀行① プエルトリコ」『毎日新聞』5月11日夕刊。
2019 「旅・いろいろ地球人 中南米博物館紀行② ウシュアエア」『毎日新聞』5月18日夕刊。
2019 「旅・いろいろ地球人 中南米博物館紀行③ ティワナク」『毎日新聞』5月25日夕刊。
2019 「二つの通貨の間で——キューバ」『みんぱく e-news』216：巻頭コラム。
2019 「旅・いろいろ地球人 中南米博物館紀行④ パナマ」『毎日新聞』6月1日夕刊。
2019 「『生命の木』のふるさとを訪ねて——メキシコ」『みんぱく e-news』220：巻頭コラム。
2019 「百花繚乱のアルテ・ポプラルへのいざない」特集「メキシコのアルテ・ポプラル」『月刊みんぱく』43(10)：2-3。
2019 「アルテ・ポプラルを収集した先達たち」特集「メキシコのアルテ・ポプラル」『月刊みんぱく』43(10)：8-9。
2019 「アルテ・ポプラル——メキシコの造形表現のいま」『季刊民族学』170：85-97。

Suzuki, M.

- 2019 Arte Popular: Contemporary Expression of Mexican Crafts. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 49: 12-13.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2019年11月2日 「アルテ・ポプラル展——ラテンアメリカの〈地域知〉を表象する試み」2019年度地域研究コンソーシアム年次集会一般公開シンポジウム『グローバル化時代の文化力——〈地域知〉のマネジメント』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年6月1日 「博物館の中のアルテ・ポプラル」日本ラテンアメリカ学会第40回研究大会、創価大学
2019年6月26日 'Arte Popular Latinoamericano: un Estudio Comparativo de Museografía.' XIX Congreso de la FIEALC, Szeged, Hungary
2019年8月28日 "Fire" in the Museum and the Precarity of Anthropology: a Reflexion from National Museum of Ethnology, Japan.' IUAES 2019 Inter-Congress, Adam Michiewicz University, Poznan, Poland
2020年1月20日 「ブラジル国立博物館の火災に関する IUAES 2019における議論について」文化遺産国際協力コンソーシアム 第13回中南米分科会、東京文化財研究所

・研究講演

- 2019年10月18日 「メキシコの食文化と造形表現の変化」メキシコ・日本アミーゴ会、在日メキシコ大使館
2020年2月2日 「映画で学ぶラテンアメリカの女性たちの挑戦」（女性の暮らしととりまく社会）特定非営利活動法人 one village one earth、西宮市男女共同参画センターウェーブ

・研究公演

- 2019年10月27日 国立民族学博物館研究公演「ソン・ハローチョ——国境を越えるメキシコの歌」国立民族学博物館、本館エントランスホール

・展示

- 2019年10月10日～12月24日 企画展「アルテ・ポプラル——メキシコの造形表現のいま」本館展示場

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2019年11月3日 「ラテンアメリカのアルテ・ポプラル」第558回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

- 2019年6月23日～7月3日—ハンガリー、ルーマニア（2019年国際ラテンアメリカ・カリブ研究連合（FIEALC 2019）における研究発表、ハンガリーの民衆芸術に関する資料閲覧、ルーマニアの民衆芸術に関する資料閲覧）
2019年7月27日～8月8日—メキシコ（メキシコの民族資料収集）
2019年8月26日～9月1日—ポーランド（IUAES（国際人類学民族科学連合）2019中間会議）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（3人）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本ラテンアメリカ学会理事

關 雄二 [せき ゆうじ]—————副館長（企画調整担当）、人類文明誌研究部教授

上羽陽子 [うえば ようこ]—————准教授

1974年生。【学歴】大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士前期課程修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士後期課程修了（2002）【職歴】大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2013）、総合研究大学院大学准教授併任（2014）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）【学位】博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）【専攻・専門】民族芸術学、染織研究、手工芸研究【所属学会】民族芸術学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

上羽陽子

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人びと』京都：昭和堂。

[分担執筆]

Ueba, Y.

2020 Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India. In A. Nakatani (ed.) *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, pp.235-251. Lanham: Lexington Books.

[論文]

Ueba, Y.

2012 「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37(1)：1-51。

【受賞歴】

2010 意匠学会作品賞

2007 第4回木村重信民族芸術学会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、現代インドにおける手工芸品に焦点をあて、つくり手たちが急速に変化する自然環境や社会環境にどのように対応しながら、伝統的な手工芸技術の生産形態を保持あるいは変容させつつ、現代的な要素をいかに選択しているかを明らかにすることが目的である。

研究資金は、科学研究費（基盤研究（B））「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」（2019年度～2023年度）および、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（2016年度～2020年度、代表：野林厚志）を用いる。

・成果

本年度は、共催展「国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装」において現代インドを含む、世界の衣装の状況を紹介し、手工芸技術の変化にともなう衣装の変容を考察した。論文は、上記外部資金をもちいておこなった調査成果として、“Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India” in A. Nakatani (ed.) *Fashionable traditions: Asian handmade textiles in motion*, Lanham: Lexington Books. pp.235-251. を公表した。研究発表は、上記、科研新学術領域主催の研究大会等でおこなった。

◎出版物による業績

[分担執筆]

上羽陽子・中谷文美・金谷美和・山岡拓也

2020 「道具としての植物利用(2)——インドネシア東部 西ティモールを中心に」野林厚志編『パレオアジア文化史学 計画研究B01班2019年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.5-11, 文部科学省学術研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)2016-2020年度計画研究B01班(研究課題番号16H06411)。

上羽陽子

2020 「はじめにヒモありき——『線具』から民族技術を問い直す」民族藝術学会編『民族藝術学会誌 arts/』36: 50-53。

Ueba, Y.

2020 Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India. In A. Nakatani (ed.) *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, pp.235-251. Lanham: Lexington Books.

[その他]

上羽陽子・山岡拓也・中谷文美・金谷美和

2019 「道具資源としての植物利用の多様性——ヤシ科植物の事例から」『パレオアジア文化史学第7回研究大会』pp.20-21。

金谷美和・上羽陽子・中谷文美

2019 「小石刃が卓越しない地域における植物資源の道具利用」『パレオアジア文化史学第8回研究大会』p.10。

上羽陽子

2019 「バスケットリーとものづくり」特集「バスケットリー」『月刊みんぱく』43(7): 2-3。

2019 「編み材・組み材をうみ出す」特集「バスケットリー」『月刊みんぱく』43(7): 8-9。

2019 「共催展『国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装』『みんぱく e-news』221: 巻頭コラム。

2019 「糸での表現、布への表現」『月刊みんぱく』43(11): 16-17。

Ueba, Y., T. Yamaoka, A. Nakatani and M. Kanetani

2019 Variation in Plant Resources Used in Making Implements: the Case of Palmae. *The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, pp.22-23.

Kanetani M., Y. Ueba and A. Nakatani

2019 The Use of Plant Resources for Tools in Regions without the Development of Bladelet Technology. *The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, p.11.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年12月7日 「アッサムにおける植物利用について——タケとヤシを中心に」基盤研究(B)バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究 2019年度第2回研究会、国立民族学博物館第2演習室

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月11日 「道具資源としての植物利用の多様性——ヤシ科植物の事例から」パレオアジア文化史学第7回研究大会、名古屋大学環境総合館レクチャーホール

2019年12月14日 「小石刃が卓越しない地域における植物資源の道具利用」パレオアジア文化史学第8回研究大会、国立民族学博物館

・展示

2019年11月13日～11月25日 「国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装」 阪急うめだ本店

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年5月16日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる①」 川島テキスタイルスクール

2019年5月23日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる②」 川島テキスタイルスクール

2019年6月6日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる③」 川島テキスタイルスクール

2019年6月19日 「バスケットリーとものづくり——人類の『線具』利用」（2019年度 第2回 来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座）国立民族学博物館

2019年6月20日 「手織り絨毯の織技術について」株式会社絨毯ギャラリー主催、クロス・ウェーブ梅田

2019年6月29日 「インドの刺繍文化——ミラー刺繍を中心に」『キャリアデザインゼミナール』奈良女子大学

2019年7月13日 「コメント」シンポジウム『インド・ファッションの世界——素材から考える装い』国際ファッション専門職大学名古屋キャンパス マルチホール

2019年10月23日～10月24日 「インドの西部ラバーリーのミラー刺繍」京都市立芸術大学

2019年11月20日 「インド西部ラバーリーの装いから考える」『国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装』 阪急うめだ本店・国立民族学博物館・千里文化財団主催、阪急うめだ本店

2019年11月30日 「インドの刺繍文化の今——ラバーリーの刺繍布の役割から」沖印友好協会主催、沖縄県立芸術大学

2019年11月30日 「ミラー刺繍に挑戦！インド西部ラバーリーの刺繍に学ぶ」沖印友好協会主催、沖縄県立芸術大学

◎調査活動

・海外調査

2019年8月13日～8月30日—インド（「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」および「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」にかかる調査研究）

2020年2月29日～3月14日—インド（「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」にかかる調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

京都精華大学「制作演習7・クラフト1」、京都精華大学「美術工芸史1・文様史1・版画論」

卯田宗平 [うだ しゅうへい] ————— 准教授

1975年生。【学歴】立命館大学産業社会学部卒（1998）、立命館大学大学院理工学研究科修士課程修了（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了（2003）【職歴】日本学術振興会特別研究員 DC1（総研大、2000-2003）、日本学術振興会海外特別研究員海外PD（中央民族大学、2005-2007）、中央民族大学民族学社会学院外籍講師（2005-2010）、日本学術振興会特別研究員PD（東京大学、2008-2010）、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク機構特任講師（2011-2015）、東京大学東洋文化研究所汎アジア研究部門講師（兼任）（2011-2015）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2015）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017-）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2003）【専攻・専門】環境民俗学・東アジア地域研究【所属学会】日本民俗学会、文化人類学会、生態人類学会、The Society for Human

【主要業績】

[単著]

卯田宗平

2014 『鵜飼いと現代中国——人と動物、国家のエスノグラフィ』東京：東京大学出版会。

[編著]

卯田宗平編

2014 『アジアの環境研究入門——東京大学で学ぶ15講』（古田元夫監修）東京：東京大学出版会。

[論文]

卯田宗平

2015 「ポスト『北方の三位一体』時代の中国エヴェンキ族の生業適応——大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例」『アジアの生態危機と持続可能性——フィールドからのサステナビリティ論』（研究双書 No.616）pp.73-108, 千葉：アジア経済研究所。

【受賞歴】

2010 第5回日本文化人類学会奨励賞

1998 学部長コース賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

鵜飼文化の比較研究

・研究の目的、内容

本年度の研究では、(1)中国雲南省の鵜飼い漁におけるカワウの繁殖技術を明らかにし、日本の鵜匠によるウミウの繁殖技術と比較することで双方の特徴を導きだす。(2)北マケドニア共和国ドイラン湖における鵜飼について、その技術や知識、周辺の魚食文化などをフィールド調査によって明らかにし、アジア地域の鵜飼との比較研究を進める。なお、本研究は科学研究費（基盤研究（C））「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開（代表・卯田宗平）」に基づいておこなう。

・成果

本年度は、北マケドニア共和国ドイラン湖の鵜飼い漁を対象とし、旧ユーゴスラヴィア時代におこなわれていた漁の技術を明らかにした。既存の研究においてドイラン湖の鵜飼技術を取りあげたものはない。北マケドニアにおける調査の結果、ドイラン湖の鵜飼い漁は初冬に捕獲した野生のカワウを漁で利用し、翌春にすべて放鳥すること、仕掛けが定置型であること、一連の操業において複数の漁師が個々の役割を分担することという特徴があることを明らかにした。さらに、本年度はドイラン湖の漁師たちがウ類の生殖に介入しない要因も検討した。その結果、ドイラン湖では毎年初冬に飛来するカワウを確実に捕獲できるため、漁師たちは手間がかかる鳥類の人工繁殖をおこなう必要がなく、毎年初春の漁期終了後にすべてを放つことができることがわかった。こうした成果を「旧ユーゴスラヴィア時代における鵜飼い漁の技術とその存立条件」としてまとめ、国立民族学博物館研究報告に投稿した。くわえて、2014年から実施されているウミウの人工繁殖にかかわる4年間の記録をまとめ、鵜匠たち3名との共同研究の成果として「飼育下のウミウの成長過程と技術の収斂化」の論文を生き物文化誌学会に投稿し、査読後に受理された。以上の研究は、科学研究費（基盤研究（C））「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開（代表・卯田宗平）」に基づいておこなった。なお、年度末に計画していた中国の鵜飼調査に関しては、新型肺炎の影響で延期とした。

◎出版物による業績

[その他]

卯田宗平

2019 「なぜ鵜飼は誕生したのか」『UP』563：26-33。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年11月20日 'Multi Joining Methods among Cormorants, Fishers and Fishing Techniques: the Case

- Study on Regional Similarities and Differences in Cormorant Fishing in China.' American Anthropological Association (AAA) and Canadian Anthropology Society (CASCA) Joint Annual Conference, Vancouver Convention Center West, Vancouver, Canada
- 2019年12月20日 「伝統鷗鵜捕魚方式面臨的挑戰与未来——以岐阜市長良川鷗鵜捕魚為例」 首届東北亜社会文化論壇、中国哈爾濱・黒龍江大学国際文化教育学院、中国
- 2020年2月14日 「脱ドメスティケーション論——民博の共同研究で考えたこと」 京都人類学研究会、京都大学稲盛財団記念館
- ・ **みんなくウィークエンド・サロン**
 - 2020年1月12日 「カワウの雛を同時に孵化させる技術」 第563回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう
- ◎大学院教育
- ・ **大学院ゼミでの活動**
 - 論文ゼミ「地域文化学演習」
- ◎調査活動
- ・ **海外調査**
 - 2019年8月27日～9月4日—イタリア（イタリア・トラジメーノ湖における淡水漁撈と漁具の比較調査）
 - 2020年9月13日～9月27日—北マケドニア共和国（北マケドニア・ドイラン湖における淡水漁撈の比較調査）
 - 2019年11月18日～12月3日—カナダ、アメリカ合衆国（American Anthropological Association (AAA) と Canadian Anthropology Society (CASCA) の共同開催による国際学会における研究発表と国際猛禽類センターにおける資料収集）
 - 2019年12月19日～12月24日—中華人民共和国（黒龍江大学における「東北アジア社会文化シンポジウム」での発表とエクスカージョン）
 - 2020年1月27日～2月5日—北マケドニア共和国（北マケドニア・ドイラン湖における淡水漁撈の比較調査）
- ◎大学院教育
- ・ **指導教員**
 - 主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）
 - ・ **大学院ゼミでの活動**
 - 「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」
 - ・ **博士論文審査委員（総研大に限る）**
 - 博士論文予備審査委員（1件）
- ◎上記以外の研究活動
- ・ **人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**
 - 科学研究費（基盤研究（C））「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員
- ◎社会活動・館外活動
- ・ **他の機関から委嘱された委員など**
 - 生き物文化誌学会学会誌『BIOSTORY』編集委員、生き物文化誌学会評議委員、岐阜県岐阜市長良川鵜飼習俗総合調査専門委員会委員、岐阜県関市小瀬鵜飼習俗総合調査委員会委員、生態人類学会理事

小野林太郎 [おの りんたろう] ————— 准教授

【学歴】上智大学文学部史学科卒業（1998）、上智大学外国語学研究科地域研究専攻前期博士課程修了（2000）、上智大学外国語学研究科地域研究専攻後期博士課程単位取得退学（2003）【職歴】日本学術振興会特別研究員 DC1（2000-2003）、日本学術振興会特別研究員 PD（国立民族学博物館）（2003-2006）、総合地球環境学研究所研究プロジェクト推進支援員（2007-2008）、日本学術振興会海外特別研究員 PD（オーストラリア国立大学）（2008-2010）、東海大学海洋学部海洋文明学科専任講師（2010-2014）、東海大学海洋学部海洋文明学科准教授（2014-2019）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2019）【学位】博士（地域研究）（上智大学 2006）【専攻・専門】海洋考古学、東南アジア・オセアニア研究【所属学会】東南アジア考古学会、インド太平洋先史学会、世界動物考古学会、

日本オセアニア学会、日本人類学会、日本文化人類学会、日本生態人類学会、日本考古学研究会、東南アジア学会、日本動物考古学会、日本考古学協会、日本イコモス国内委員会、日本海洋政策学会

【主要業績】

[単著]

小野林太郎

2018 『海の人類史：東南アジア・オセアニア海域の考古学——増補改訂版』東京：雄山閣。

[編著]

小野林太郎・長津一史・印東道子編

2018 『海民の移動誌——西太平洋のネットワーク社会』京都：昭和堂。

[論文]

Ono, R., A. Oktaviana, M. Ririmasse, M. Takenaka, C. Katagiri, and M. Yoneda

2018 Early Metal Age interactions in Island Southeast Asia and Oceania- jar burials from Aru Manara, northern Moluccas. *Antiquity* 92(364): 1023-1039. <https://doi.org/10.15184/aqy.2018.113>

【受賞歴】

2013 第4回東南アジア考古学会奨励賞

2006 第5回井植アジア太平洋研究賞（佳作）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジア海域を軸とした人類の島嶼移住と海洋適応史の解明

・研究の目的、内容

本研究の目的の一つは、東南アジア島嶼部を中心とするアジア・オセアニアの海域世界へと移住・拡散した人類（主にホモ・サピエンス）が、いつ頃、どのように島嶼環境への移住に成功したのかを考古・人類学的手法により追究するところにある。また移住後の人類による島嶼・海洋適応のプロセスにかかわる人類学的データを、新たな発掘調査や民族考古学的手法により発見・収集していくのが二つ目の目的となる。この研究は、科学研究費（新学術領域研究・国際共同研究強化B）を軸としたインドネシア、およびミクロネシアでの発掘調査と出土遺物の分析調査を進める。またその過程で新たに得られた成果については逐次、国内外の学術誌や学会等にて論文発表するほか、一般書としても公表し、成果の社会還元も目指す。

・成果

テーマにかかわる英語共著論文を国際的な学術誌やモノグラフに3本、和文論文を国内の学術誌に1本公表できたほか、成果の社会還元を第一の目的とした一般書の章論文やコラムとして4本を公表した。このほか、国内の学会や研究集会での発表や講演として、本研究の成果を積極的に公表した。

◎出版物による業績

[論文]

小野林太郎

2020 「環境変化からみた環太平洋圏におけるヒトの移住史——ウォーレシア・オセアニアの事例から」『環太平洋文明研究』4：76-88。[査読有]

Ono, R., S. Hawkins, and S. Bedford

2019 Lapita Maritime Adaptations and the Development of Fishing Technology: A View from Vanuatu. In S. Bedford and M. Spriggs (eds.) *Debating Lapita: Distribution, Chronology, Society and Subsistence* (Terra Australis Series 52), pp.415-438. Canberra: ANU Press. [査読有]

Fuentes, R., R. Ono, N. Nakajima, H. Nishizawa, J. Siswanto, N. Aziz, Sriwigati, H. O. Sofian, T. Miranda, and A. Pawlik

2019 Technological and Behavioural Complexity in Expedient Industries: The Importance of Use-wear Analysis for Understanding Flake Assemblages. *Journal of Archaeological Science* 112. [査読有]

Fuentes, R., R. Ono, N. Nakajima, Siswanto, J. Aziz, N. Sriwigati, S. Octavianus, T. Miranda, and A. Pawlik

2020 Stuck within Notches: Direct Evidence of Plant Processing during the Last Glacial Maximum in North Sulawesi. *Journal of Archaeological Science: Reports* 30. [査読有]

[分担執筆]

小野林太郎

- 2019 「日本への人類移住と南方起源説——その魅力と可能性」石森大知・丹羽典夫編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.21-24, 東京：明石書店。
- 2019 「人類史から見た縄文時代と南太平洋の人々——海を越えた私たちの祖先とその関係性」石森大知・丹羽典夫編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.25-28, 東京：明石書店。
- 2020 「オセアニアへの人類移住と海洋適応」秋道智彌・印東道子編『ヒトはなぜ海を越えたのか——オセアニア考古学の挑戦』pp.70-87, 東京：雄山閣。
- 2020 「オセアニアの釣り針」秋道智彌・印東道子編『ヒトはなぜ海を越えたのか——オセアニア考古学の挑戦』pp.131-138, 東京：雄山閣。

[その他]

小野林太郎

- 2019 「国立民族学博物館の収蔵品⑧ 東南アジアにおける銅鼓」『文部科学 教育通信』463：2。
- 2019 「サンゴの海で漁師になる」『月刊みんぱく』43(9)：10-11。
- 2019 「ラピタ土器と鋸歯印文」『月刊みんぱく』43(10)：16-17。
- 2020 「ゴム時間の危機」『月刊みんぱく』44(1)：20。
- 2020 「サピエンスによる葬送行為を島という視点から探る」『民博通信 Online』1：18-19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2020年2月18日 'Introduction of Maritime Adaptation and Material Culture in Southeast Asia.' International Workshop "Maritime Adaptation and Material Culture in Southeast Asia", National Museum of Ethnology

・共同研究会での報告

2019年11月12日 「島世界における葬送の人類学」『島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較』国立民族学博物館

・民博研究懇談会

2019年11月28日 「海のサピエンス史——海域アジアへ移住した人類の海洋・島嶼適応」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月11日 「東南アジア——オセアニア海域にかけての新人の拡散と文化変化」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第7回研究大会、名古屋大学

2019年10月16日 'Human Migration, Interisland Networks, and Coastal Change in Eastern Micronesia: A Case Study of Lenger Island, Pohnpei, FMS.' The 9th International Lapita Conference, PNG National Museum & Art Gallery, Port Moresby, Papua New Guinea

2019年11月17日 「インドネシアの貝塚遺跡と完新世期における人類の貝利用」『東南アジア考古学会大会』早稲田大学

2019年12月14日 「東南アジアの不定形剥片とその機能——使用痕分析から見てきた人間行動と技術の複雑性」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第8回研究大会、国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2019年12月21日 「『海の人類史——東南アジア・オセアニア考古学の最前線』」第498回みんぱくゼミナール

・研究講演

2019年11月16日 「東海地方と水中の文化遺産」第3回とよはし歴史座『東海地方と水中の文化遺産』豊橋市教育委員会、豊橋市民センター

2019年11月30日 「海からみたアジア・オセアニアの人類史」『古代東北アジアと日本研究会』明治大学博物館 友の会、豊島区民センター

◎調査活動

・海外調査

- 2019年6月7日～7月28日—インドネシア（インドネシアでのフィールド調査（発掘）および分析調査の実施）
2019年8月17日～9月8日—ミクロネシア連邦（マリアナ諸島・ミクロネシア連邦共和国でのフィールド調査（発掘）・資料収集・分析調査の実施）
2020年1月14日～1月20日—マレーシア（マレーシアでの海外プロジェクトメンバー（マレーシア国立博物館・アダット博物館・プトラジャヤ大学）との打ち合わせ、資料収集の実施）
2020年1月27日～2月3日—フィリピン（フィリピンでの海外プロジェクトメンバー（フィリピン国立博物館・フィリピン国立大学）との打ち合わせ、資料収集の実施）
2020年3月1日～3月16日—インドネシア（インドネシアでの考古学的資料の分析と資料収集の実施）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（S））「浅海底地形学を基にした沿岸域の先進的学際研究——三次元海底地形で開くパラダイム」（研究代表者：菅浩伸）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「ホモ・サピエンスのアジア定着期における行動様式の解明」（研究代表者：門脇誠二）研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「オセアニアの人類移住と島嶼間ネットワークに関わる考古学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「琉球列島における西欧沈没船遺跡の実態把握と水中遺跡公園化へ向けた基礎的研究」（研究代表者：片桐千亜紀）研究分担者、国立民族学博物館基幹研究プロジェクト「海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化——東南アジア資料を中心に」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」研究代表者

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

琉球大学島嶼地域科学研究所共同利用・共同研究「南太平洋島嶼地域におけるタバ（樹皮布）の未公表コレクションの調査およびタバ素材植物の樹種と系譜の研究」（研究代表者：矢野健一、立命館大学、教授）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本動物考古学会理事（庶務）、日本オセアニア学会評議員、東南アジア考古学会編集委員、文化遺産国際協力コンソーシアム東南・南アジア分科会委員、立命館大学衣笠リサーチオフィス環太平洋文明研究センター客員協力研究員

寺村裕史 [てらむら ひろふみ] ————— 准教授

1977年生。【学歴】岡山大学文学部歴史文化学科（考古学履修コース）卒（2000）、岡山大学大学院文学研究科歴史文化学専攻修士課程修了（2002）、岡山大学大学院文化科学研究科人間社会文化学専攻博士課程修了（2005）【職歴】同志社大学文化情報学部実習助手（2005）、総合地球環境学研究所研究部プロジェクト研究員（2007）、国際日本文化研究センター研究部機関研究員（2011）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室特任准教授（2013）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2015）、国立民族学博物館人類文明誌研究部助教（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2018）【学位】博士（文学）（岡山大学大学院 2005）、修士（文学）（岡山大学大学院 2002）【専攻・専門】情報考古学、文化情報学【所属学会】考古学研究会、地理情報システム学会、日本情報考古学会

【主要業績】

[単著]

寺村裕史

2014 『景観考古学の方法と実践』東京：同成社。

[共著]

Maekawa, K., E. Matsushima, H. Teramura, and S. Watanabe

2018 *Brick Inscriptions in the National Museum of Iran: A Catalogue*. Edited by K. Maekawa. Kyoto: Kyoto University Press.

【論文】

寺村裕史

2017 「情報考古学的手法を用いた文化資源情報のデジタル化とその活用」『国立民族学博物館研究報告』42(1): 1-47。[査読有]

【受賞歴】

2007 日本情報考古学会優秀賞（日本情報考古学会）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する研究

・研究の目的、内容

本研究は、ユーラシア大陸における東西交流（東洋と西洋）の結節点としての古代シルクロード都市の果たした役割と、それらの都市を介しておこなわれた人や文化の交流の実態を明らかにすることを目的として実施するもので、ウズベキスタン共和国のサマルカンドに所在するウズベキスタン共和国科学アカデミー ヤフヨ・グロモフ考古学研究所（以下、考古学研究所）との国際共同研究のかたちをとる。体的には、考古学研究所と連携して実施するカフィル・カラ遺跡などの都市遺跡の発掘調査や、ザラフシャン川中流域に点在する都市遺跡の分布踏査などを通じて、古代シルクロード都市の形成・発展過程ならびに、人と文化の東西交流の動態について国際的な議論を深め、成果を共同で発信する。

・成果

2019年（令和元年）9月に、ウズベキスタン共和国・サマルカンド市に所在するウズベキスタン共和国科学アカデミー ヤフヨ・グロモフ考古学研究所（以下、考古学研究所）と国立民族学博物館（民博側協定担当責任者：寺村）との間で、学術協力に関する協定を締結し、その協定のもと調査を実施した。

具体的には、サマルカンド近郊に所在する古代のオアシス都市遺跡であるカフィル・カラ遺跡での発掘調査を、考古学研究所と日本隊の協働調査として実施した。報告者は、日本側調査隊の一員としてその調査に参加するとともに、今年度調査に関する成果を共有するため現地研究者とディスカッションをおこなった。なお、上記の協定締結並びに調査は、科学研究費（基盤研究（B））「シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究」[課題番号：19H01350、研究代表者：寺村裕史]にもとづき実施したものである。

発掘調査の成果としては、カフィル・カラ遺跡のシタデル（城塞）の調査区（Room 12）から、火災で焼け落ちたとみられる炭化木材とともに、床面にはほぼ等間隔に並ぶ6個の柱穴を検出した。部屋の二階部分を構成する何らかの建築部材を支えるための柱と考えられる。

さらに、柱穴の周りからは底部が据わった状態の大甕やその破片が大量に出土し、火災層の焼土中からは、ムギヤアワと考えられる穀物類、ニンニクや豆などの炭化物が出土していることから、この部屋は水・油や食物を貯蔵する穀物倉のような機能を持っていたと考えられる。カフィル・カラ遺跡はソグド王の離宮という説があり、これらの出土品は、シルクロードを通じた東西交易に活躍したソグド人の実態を探る上でも貴重な資料として、今後詳細な研究を進めていくことにしている。

こうした成果については、2020年3月に日本西アジア考古学会主催の『第27回西アジア発掘調査報告会』において、「ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査（2019年）——シタデルを覆う火災層とシャフリスタンの調査」という口頭発表を日本隊・ウズベク隊の共同成果として報告する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため開催中止となり、『報告集』のみ刊行されることとなった。

◎出版物による業績

【論文】

村上智見・寺村裕史・宇野隆夫・宇佐美智之・ベグマトフ・アリシェル・ベルディムロドフ・アムリディン・ボゴモロフ・ゲンナディ・サンディボエフ・アリシェル

2020 「シタデルを覆う火災層の調査——ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査（2019年）」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集——令和元年度 考古学が語る古代オリエン特』つくば市：日本西アジア考古学会。

[その他]

寺村裕史

2019 「すごいよな」『月刊みんぱく』43(7):20。

◎映像音響メディアによる業績

- ・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[ビデオテーク]

寺村裕史 監修

2020 『オアシス都市の暮らし——ウズベキスタン・サマルカンドの食文化』（みんぱく映像民族誌）（日本語・57分38秒）

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年10月30日 「地域文化の活用を支援する科学調査の可能性」国際フォーラム『地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割』宜蘭県立蘭陽博物館、宜蘭県、台湾

- ・共同研究会での報告

2019年12月15日 「本研究に関わる考古学の先行研究概要」『感性と制度のつながり——芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える』国立民族学博物館

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年1月27日 「津波の記憶を刻む文化遺産——寺社・石碑データベース」こうちミュージアムネットワークワークショップ、高知県立高知城歴史博物館

- ・展示

2019年3月21日～5月28日 「特別展『子ども／おもちゃの博覧会』」国立民族学博物館

- ・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年7月28日 「バザールの風景——ウズベキスタンの市場事情」第549回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

- ・広報・社会連携活動

2019年7月27日 「みんぱくにおける調査研究と博物館活動」（MMP新規会員養成研修）国立民族学博物館

2019年11月27日 「シルクロードの古代オアシス都市遺跡を掘る」（来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座）みんぱくミュージアムパートナーズ、国立民族学博物館

◎調査活動

- ・海外調査

2019年9月17日～10月5日—ウズベキスタン（ウズベキスタン・カフィルカラ遺跡における発掘調査の実施ならびに現地情報収集）

2019年10月29日～11月2日—台湾（国際フォーラム「地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割」での発表及び意見交換）

2019年12月24日～12月30日—イラン（科研費「古代イランとメソポタミア——歴史地理学的アプローチ」に関する現地調査および研究打合せ）

◎大学院教育

- ・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（基盤研究（B））「古代イランとメソポタミア——歴史地理学的アプローチ」（研究代表者：前川和也（国士舘大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「中央・北アジアの物質文化に関する研究——民博収蔵の標本資料を中心に」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

岡山大学文学部「博物館情報・メディア論 a/b」(集中講義)

藤本透子 [ふじもと とうこ] ————— 准教授

1975年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒(1998)、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士課程修了(2002)、京都大学大学院人間・環境学研究科環境相関研究専攻博士課程指導認定退学(2007)【職歴】京都大学総合人間学部リサーチ・アシスタント(2002)、京都大学大学院人間・環境学研究科ティーチング・アシスタント(2005)、日本学術振興会特別研究員(2006)、京都桂看護専門学校非常勤講師(2006)、関西学院大学経済学部非常勤講師(2008)、京都大学大学院人間・環境学研究科研修員(2008)、神戸松蔭女子学院大学文学部非常勤講師(2010)、国立民族学博物館先端人類科学研究部機関研究員(2010)、国立民族学博物館民族文化研究部助教(2012)、立命館大学国際関係学部非常勤講師(2015)、国立民族学博物館民族文化研究部准教授(2016)、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授(2017)【学位】博士(人間・環境学)(京都大学大学院人間・環境学研究科 2010)、修士(人間・環境学)(京都大学大学院人間・環境学研究科 2002)【専攻・専門】文化人類学、中央アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本中央アジア学会、日本中東学会、日本イスラム協会

【主要業績】

[編著]

Yamada, T. and T. Fujimoto (eds.)

2016 *Migration and the Remaking of Ethnic-Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

藤本透子編

2015 『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』神奈川：春風社。

[単著]

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』東京：風響社。

【受賞歴】

2013 人間文化研究奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カザフスタンにおける社会・宗教・伝統医療の人類学的研究

・研究の目的、内容

社会・宗教・身体の関係性を考察することを目的として、1) 伝統医療とイスラーム、2) 村落社会の形成と変容のメカニズムに関する以下の調査研究を行った。

1) 伝統医療とイスラームの展開

科学研究費(基盤研究(C))「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」に基づき、7月にカザフスタンで調査を実施し、①中央アジアにおける伝統医療の歴史的背景、②伝統医療の再活性化メカニズム、③社会主義を経験した社会の近代医療と伝統医療の関係、④イスラームおよびシャマニズムと伝統医療の布置について検討した。

2) 村落社会の形成と変容のメカニズム

北東アジア地域研究および科研新学術領域「パレオアジア文化史学」B01班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の分担者として、8月にカザフスタンで調査を行い、人の移動にともなう社会の形成および変容のメカニズムを分析した。

・成果

1) 伝統医療とイスラームの展開に関しては、科学研究費(基盤研究(C))(16K02028)に基づく調査をふまえて、「カザフスタンにおける伝統医療とエムシ(治療者)の活動」を執筆し、現在、初校の段階である。ま

た、「聖者になる過程——カザフスタンにおける近代とイスラーム」を論集の一部として投稿した。カザフスタンで7月にロシア語による口頭発表も2回行った。

- 2) 村落社会の形成と変容のメカニズムに関しては、科学研究費(新学術領域研究(研究領域提案型))(16H06411)に基づく調査をふまえて、ポスター発表「中央アジア草原地帯における肉の共食の社会的意味」「移動する集団の行動パターンとその痕跡」を行った。また、「中央アジア草原地帯におけるコミュニティの再編と維持——カザフのアウルに着目して」を論集の一章として刊行した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

藤本透子

2020 「中央アジア草原地帯におけるコミュニティの再編と維持——カザフのアウルに着目して」本村 真編『辺境コミュニティの維持——島嶼、農村、高地のコミュニティを支える「つながり」』pp.179-215, 那覇:ボーダーインク社。

小河久志・川村義治・川本智史・桑野 萌・小磯千尋・小西賢吾・坂井紀公子・藤本透子・本康宏史・山田孝子

2019 「日本における弔いの現状と未来——『死』との断絶を克服する必要性」小西賢吾・山田孝子編『弔いにみる世界の死生観』(比較文化学への誘い5) pp.109-132, 京都:英明企画編集。

小河久志・川村義治・川本智史・桑野 萌・小磯千尋・小西賢吾・坂井紀公子・アヒム・バイヤー・藤本透子・本康宏史・山田孝子

2019 「『死』と『死者』と『死後』のとらえ方——死は悪であり、死者は畏怖の対象なのか」小西賢吾・山田孝子編『弔いにみる世界の死生観』(比較文化学への誘い5) pp.9-37, 京都:英明企画編集。

小河久志・川本智史・小西賢吾・坂井紀公子・桑野 萌・藤本透子・本康宏史・山田孝子

2019 「イスラームとキリスト教の弔いと死生観——葬送、追悼、供養の儀礼にみるその特徴」小西賢吾・山田孝子編『弔いにみる世界の死生観』(比較文化学への誘い5) pp.65-86, 京都:英明企画編集。

[その他]

藤本透子

2020 「ユーラシアの温帯草原における人の行動パターンとその痕跡」野林厚志編『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 計画研究B01班2019年度 研究報告』東京:文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)2016-2020年度計画研究B01班(研究課題番号16H06411)』。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月12日 「中央アジア草原地帯における肉の共食の社会的意味」パレオアジア文化史学第7回研究大会、名古屋大学

2019年7月19日 'Perspektivy etnograficheskogo issledovaniya kazakhov v Yaponii: Altaiskie materialy v Natsional'nom muzee etnologii.' "Altay in History and Culture of the Great Steppe", East-Kazakhstan State Technical University, Ust'-Kamenogorsk, Kazakhstan

2019年7月24日 'Etnologicheskoe issledovanie Bayanaul'skogo regiona s vzglyada yaponskogo issledovatelya.' "History and Culture of the Great Steppe", Pavlodar State Pedagogical Institute, Pavlodar, Kazakhstan

2019年12月15日 「移動する集団の行動パターンとその痕跡——中央アジア草原地帯の事例から」パレオアジア文化史学第8回研究大会、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2019年7月12日～8月9日—カザフスタン(イスラームと伝統医療に関する調査・パレオアジア文化史の調査)

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員(1人)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など
日本中央アジア学会日本中央アジア学会報編集委員
- ・他大学の客員、非常勤講師
甲南大学「死生学」

グローバル現象研究部

三尾 稔 [みお みのる] ————— 部長（併）教授

1962年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1986）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学（1992）【職歴】東京大学教養学部助手（1992）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1999）、東洋英和女学院大学国際社会学部助教授（2001）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2018）、国立民族学博物館グローバル現象研究部研究部長（2019）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1988）【専攻・専門】社会人類学・インドの宗教と社会【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が25年あまりにわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。本年度は昨年度に引き続き、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践やローカリティのあり方をどのように変容させているかという点に注目し、特に地方都市におけるフィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。この調査に必要な経費として、日本学術振興会科学研究費補助金の獲得もめざす。

6年計画で進められている人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究」は今年度で4年目を迎える。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点構成員や研究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。各個研究のテーマは、この地域研究プロジェクトの内容に密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマのもとでの1つの実証的研究として各個研究を遂行する。

・成果

インドの地方都市のサバルタンの宗教実践やローカリティの変容に関する人類学的調査研究のため申請していた日本学術振興会科学研究費補助金は申請が認められた科学研究費（基盤研究（C））「インド西部の地方都市における宗教実践とローカリティ形成に関する人類学的研究」19K01217。この経費による研究は2019年度か

ら4年間の計画で実施される予定であり、その初年度の調査として2019年11月初旬にインド・ラージャスターン州ウダイプル市でカースト・コミュニティ毎に維持されているローカルな寺院の所在に関する悉皆調査を行い、82箇所の寺院について管理形態や寺院での宗教実践の態様を把握した。

このテーマに関連して、2019年4月上旬には「南アジア地域研究」経費により、上記の寺院群で挙行される女神祭礼に関する現地滞在調査も実施し、都市においてカーストごとの集住という形態が大きく変容する中でもこの種の祭礼がローカリティの持続に大きな意義をもつ実態を把握した。

これらは本格的調査のための予備的なものと位置づけられるが、その成果は現在執筆中の著書、また計画中の投稿論文等に反映させる。

宗教実践がインドにおける多様な集団のアイデンティティ形成、また異なる集団間の共存に果たす意義については、自身のフィールド調査に基づき長期にわたり研究を蓄積して来ているが、このことに関連して「現代インドの多様な宗教の共存と葛藤——現地調査からの視点」と題して、依頼に基づく講演を行った（2019年9月28日。「ユタ日報」松本研究会主催講演会。長野県松本市）。

2019年はインド独立運動の主要な指導者であったマハトマ・ガンディーの生誕150周年にあたり、インドのみならず世界各地で記念事業や講演会等が開催された。三尾もこの動きを背景に、特にガンディーの宗教的な信念と社会改革運動の関連という観点から、「ガンディー未完の『実験』」と題する講演を行った（2019年6月15日。朝日カルチャーセンター京都教室。）ほか、みんぱくウィークエンド・サロンで「ガンディーの手紡ぎ車」と題する講演を実施し（2019年10月13日）、南アジア研究の成果の一般社会への発信に努めた。

またインドの宗教文化の多様性に関して、地域や宗教伝統ごとに異なる暦法の多様性と関連させた一般向けの解説的エッセイ「さまざまな暦の大らかな共存」を『季刊民族学』に発表した（2019年4月刊。『季刊民族学』168号、40-49頁）。

◎出版物による業績

[その他]

三尾 稔

2019 「さまざまな暦の大らかな共存」『季刊民族学』168：40-49。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年10月13日 「ガンディーの携帯用手紡ぎ車」第556回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2019年6月15日 「ガンディー 未完の『実験』——宗教融和への道のり」朝日カルチャーセンター京都教室

2019年9月28日 「現代インドの多様な宗教の葛藤と共存——現地調査からの視点」『ユタ日報』松本研究会、松本市中央図書館

2019年12月7日 「糖尿病ライフとインド」大阪府済生会中津病院糖尿病患者会、大阪府済生会中津病院

◎調査活動

・海外調査

2019年10月9日～10月13日—韓国（韓国外国語大学南アジア研究センター主催の国際シンポジウムに出席）

2019年11月1日～11月15日—インド（インドの都市のローカリティ形成と宗教実践に関する現地調査）

2019年11月21日～11月25日—シンガポール（シンガポールにて開催される第3回 ACSAS（アジアにおける南アジア研究センターコンソーシアム）国際シンポジウムに出席）

2020年1月29日～2月3日—インド（インド・コルカタ市における祭礼の変容に関する調査、および関連資料収集）

2020年3月19日～3月31日—インド（グローバル化とインド地方都市の生活実践の変容に関する現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MIND-AS）」拠点代表者

鈴木七美 [すずき ななみ] 教授

【学歴】 東北大学薬学部薬学科卒（1981）、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1992）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了（1996）**【職歴】** 財団法人仙台複素環化学研究所研究員（1981）、中外製薬株式会社国際開発部（1982）、財団法人相模中央化学研究所研究員（1983）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任講師（1997）、京都文教大学人間学部文化人類学科助教授（2000）、京都文教大学大学院文化人類学研究科助教授（2002）、マギル大学文化人類学部客員助教授（2003）、放送大学分担協力講師（2004）、京都文教大学大学院文化人類学研究科教授（2005）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2007）、放送大学客員教授（文化人類学'04 主任講師）（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2009）、総合研究大学院大学比較文化学専攻長（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2014）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）**【学位】** 博士（学術）（お茶の水女子大学 1996）、修士（人文科学）（お茶の水女子大学 1992）学士（薬学）（東北大学 1981）**【専攻・専門】** 文化人類学、エイジング研究、医療社会史**【所属学会】** 日本文化人類学会、アメリカ学会、日本アメリカ史学会 Association for Anthropology and Gerontology (AAGE)

【主要業績】

[単著]

鈴木七美

- 2019 『エイジングフレンドリー・コミュニティ——超高齢社会における人生最終章の暮らし方』東京：新曜社。
- 2002 『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』京都：世界思想社。
- 1997 『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』東京：新曜社。

【受賞歴】

- 1998 第13回女性史青山なを賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

超高齢社会のエイジングフレンドリー・コミュニティ——エイジング・イン・プレイスの重層化にむけて

・研究の目的、内容

超高齢社会において、すべての世代がどのように生活の基盤とウェルビーイングを構想できるのかに関心が集まっている。本研究は、高齢者のニーズを契機として全ての世代の生活環境を再考・開発するエイジング（エイジ）フレンドリー・コミュニティ（AFC）に関する研究蓄積を生かし、語り合いやモノ作りなど多世代が参加する活動実践について、研究調査・成果公開を実施する。

多文化・多世代が認知症者を含む高齢者との交流にどのような経験を紡ぎ意義を見いだしているのか、またそうした場はいかにして実現できるのかについて、現地調査と情報収集を行う（外部資金：科学研究費（基盤研究（C））「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」2018-2021 研究代表者：鈴木七美）。

モノと情報を素材として多世代・多文化に開かれた学びと交流機会開発の一環として企画した企画展（2018年度文化資源プロジェクト「企画展 アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」The World of Amish Quilts: Seeking Ways of living, Weaving the World 企画展プロジェクトリーダー：鈴木七美）の成果にかかわる口頭発表・論考執筆を行う。

・成果

外部資金：科学研究費（基盤研究（C））「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」2018-2021 研究代表者：鈴木七美）に関連する下記の活動を行った。

I 認知機能が低下する過程を含む高齢者のエイジング・イン・プレイス（居場所を得て生活する）に関わる論考をまとめた。

単著

鈴木七美 『エイジングフレンドリー・コミュニティ——超高齢社会における人生最終章の暮らし方』東京：新

曜社、2019年。

II モノと情報を素材として多世代・多文化に開かれた学びと交流機会開発の一環として企画した「企画展 アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」The World of Amish Quilts: Seeking Ways of living, Weaving the World (2018年 8月23日～12月25日 2018年度文化資源プロジェクト プロジェクトリーダー：鈴木七美)に関連する研究成果の発信を国際学会にて行い、論考を執筆した。

論考

Suzuki, Nanami “The World of Amish Quilts: Seeking Ways of Living, Weaving the World - A Thematic Exhibition at the National Museum of Ethnology, Osaka, Japan” *Blanket Statements* (American Quilt Study Group), 143: 11-15, 2020. (2020.3.24)

口頭発表

(国際研究集会)

Suzuki, Nanami “‘Thematic Exhibition: The World of Amish Quilts: Seeking the Way of Living, Weaving the World’ in 2018 at the National Museum of Ethnology (NME) in Osaka and Its Development,” 2019 Amish Conference: Health & Well-Being in Amish Society, June 7, 2019, The Young Center for Anabaptist and Pietist Studies at Elizabethtown College (Elizabethtown, USA)

Suzuki, Nanami “The World of Amish Quilts: Seeking Ways of Living, Weaving the World: A Thematic Exhibition at the National Museum of Ethnology in Osaka, Japan,” AQSG (American Quilt Study Group) 2019 Seminar: Uncovering Together, October 12, 2019, Embassy Suites by Hilton (Lincoln, USA)

(その他)

鈴木七美「アーミッシュキルトの誕生——米国のエスニックグループの交流史から」みんなくウィークエンドサロン (国立民族学博物館 2019年 5月19日)

◎出版物による業績

[単著]

鈴木七美

2019 『エイジングフレンドリー・コミュニティ——超高齢社会における人生最終章の暮らし方』東京：新曜社。

[その他]

Suzuki, N.

2020 The World of Amish Quilts: Seeking Ways of Living, Weaving the World - A Thematic Exhibition at the National Museum of Ethnology, Osaka, Japan. *Blanket Statements* 143: 11-15.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年 6月 7日 “‘Thematic Exhibition: The World of Amish Quilts: Seeking the Way of Living, Weaving the World’ in 2018 at the National Museum of Ethnology (NME) in Osaka and Its Development’ 2019 Amish Conference “Health & Well-Being in Amish Society”, Elizabethtown College, Elizabethtown, Pennsylvania, United States

2019年10月12日 ‘The World of Amish Quilts: Seeking Ways of Living, Weaving the World: A Thematic Exhibition at the National Museum of Ethnology in Osaka, Japan.’ AQSG (American Quilt Study Group) 2019 Seminar “Uncovering Together”, Embassy Suites Hotel by Hilton Lincoln, Nebraska, United States

・みんなくウィークエンド・サロン

2019年 5月19日 「アーミッシュキルトの誕生——米国のエスニックグループの交流史から」第543回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年 4月 1日～2020年 3月31日 「『2019年国立民族学博物館オリジナルカレンダー アーミッシュ・キルトを訪ねて』監修・解説」

◎調査活動

・海外調査

2019年 5月30日～6月17日—アメリカ合衆国（高齢者がかかわるコミュニティ教育の研究調査）

2019年10月 2日～10月22日—アメリカ合衆国（高齢者がかかわる生活文化伝承の研究調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

公益信託澁澤民族学振興基金公益信託澁澤民族学振興基金2019年度事業 第46回澁澤賞選考委員会委員、American Society on Aging (ASA) 2020 Aging in America Conference 発表の査読者 (peer reviewer)、Anthropology & Aging (A&A): The Official Publication of the Association for Anthropology and Gerontology (AAGE) Editorial Advisory Board

- ・他大学の客員、非常勤講師

京都ノートルダム女子大学人間文化研究科「ウェルビーイング研究特論」（集中講義）

西尾哲夫 [にしお てつお] ————— 教授

1958年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程修了（1984）、京都大学大学院文学研究科言語学専攻博士後期課程満期退学（1987）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第二研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部教授・部長（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館副館長（2012）、国立民族学博物館国際学術交流室室長（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部教授・部長（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、国立民族学博物館副館長（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）【学位】文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）【専攻・専門】言語学・アラブ研究 アラブ遊牧民の言語人類学的研究、アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究【所属学会】日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

【主要業績】

[単著]

西尾哲夫

2013 『ヴェニスの商人の異人論——人肉一ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。

2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。

2007 『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

【受賞歴】

2011 第28回田邊尚雄賞（東洋音楽学会）

1992 オリエンツ学会奨励賞

1992 新村出記念財団研究助成賞

1992 流沙海西奨学会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

グローバル化と中東地域の民衆文化

- ・研究の目的、内容

「アラブの春」を主導した新興の都市部中流層が用いた「中間アラビア語」と呼ばれる新生の共通アラビア語は、新たなコミュニケーション空間を創出した。この空間では差異化された社会的アイデンティティ獲得をめぐり、グローバルな動向に感応する社会運動の場が確立しつつある。本研究では、民衆、大衆、地域住民とい

う概念の再構築を通じて彼らがグローバル化されたコミュニケーション空間に感応している状況を具体的に分析することによって、「中間アラビア語」が創出した公共的コミュニケーション空間において民衆文化が資源化されて公共性を獲得するプロセス、および個人が生きるローカルな生活空間とグローバルな社会空間が接合し、個々の人間の社会的動員作用として働くメカニズムを解明する。また「中間アラビア語」による文学的社会的位相の中で成立した、シンドバード航海記に焦点をあてて分析することによって、グローバル化の観点から多元的共創文学の可能性について考察する。

・成果

- ①研究成果として、『ガラン版千一夜物語』（岩波書店、全六巻）を刊行中である。同書は本邦における最初の全訳であるが、多くの新聞や雑誌の文化欄・書評欄で画期的な仕事として高い評価を受け、特に読売新聞書評欄では「2019年の三冊」に選ばれている。アラビアンナイトがイスラミ的な価値観を代表する形で形成されてきただけでなく、その伝承においてはキリスト教徒も重要な役割を果たしてきた可能性が高いことを解明し、アラビアンナイト形成史に関する新たな仮説を提示することができた。
- ②研究発表として、「現代中東地域研究推進事業」の一環でオックスフォード大学中東研究所との国際的共同研究による第三回国際シンポジウム「Neither Near Nor Far: Encounters and Exchanges between Japan and the Middle East」（於・オックスフォード大学）を開催した。「Beyond Orientalism: Studying Belly Dance as a Globalised Cultural Phenomenon」と題した基調講演をおこない、文化的な知識のグローバルな還流経路を探るにあたり、西洋を基点として行われてきた中東と日本の文化交流の様相について検討し、グローバル化論における新たな研究地平の開拓を目指した。
- ③研究発表として、龍谷大学の協力のもとに国際ワークショップ『『シャルギー（東洋人）』上映ワークショップ』を開催し、現在国際的に再評価されている井筒俊彦をテーマとした映画上映とイラン人監督ならびに海外の研究者を招聘した。「井筒俊彦と言語学——言葉・文化・思惟の関係性をめぐって」と題した基調講演をおこない、現代言語学の知見から井筒俊彦の思考を解体し、言語と文化と思惟の関係性にかかる人文科学として再構築する可能性について提言した。
- ④一般向けの研究成果公開として、「世界史の中のアラビアンナイト」朝日カルチャーセンター（中之島教室）、「世界文学としてのアラビアンナイト——新発見資料にもとづく最近の研究から」2019年度芦屋川カレッジ（於・芦屋市立公民館）、「アラビアンナイトとコーヒー」日本コーヒー文化学会第26回総会・記念講演会（於・学士会館・東京）、「物語は極上の嗜好品——女性が愛したアラビアンナイト」阪急生活楽校講演会（於・阪急うめだホール）等の一般向け講演会を数多く開催し、日本人にとって馴染みの薄いアラブ文化や中東世界を紹介する活動も精力的におこなった。
- ⑤科学研究費（基盤研究（B））（特設分野）「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」（代表・西尾哲夫）ならびに科学研究費（基盤研究（B））（一般）「シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究」（代表・西尾哲夫）による海外および国内での調査をおこなった。

◎出版物による業績

[単著]

西尾哲夫

2019 『ガラン版千一夜物語1』東京：岩波書店。

2019 『ガラン版千一夜物語2』東京：岩波書店。

2019 『ガラン版千一夜物語3』東京：岩波書店。

2020 『ガラン版千一夜物語4』東京：岩波書店。

2020 『ガラン版千一夜物語5』東京：岩波書店。

[分担執筆]

西尾哲夫

2019 「『ゆとろぎ』とは」縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』pp.46-47、東京：河出書房新社。

[その他]

西尾哲夫

2019 「『ゆとろぎ』の概念と片倉もとこ」特集「サウジアラビア、女性の暮らしの半世紀」『月刊みんぱく』43(6)：9。

2020 「大修館の一冊 鷺見朗子編著『例文で学ぶアラビア語単語集』」『英語教育』68(11)：92。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年4月27日 「井筒俊彦と言語学——言葉・文化・思惟の関係性をめぐって」『「シャルギー（東洋人）」上映ワークショップ』龍谷大学

2019年5月25日 'Beyond Orientalism: Studying Belly Dance as a Globalised Cultural Phenomenon.' "Neither Near Nor Far: Encounters and Exchanges between Japan and the Middle East", University of Oxford, Oxford, United kingdom

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月11日 「フォーラムとしての現代中東地域研究の可能性」日本中東学会第35回年次大会公開講演会『中東地域における多角的資源観の醸成を目指して』秋田大学

2019年6月2日 「アラビアンナイトとコーヒー」日本コーヒー文化学会第26回総会・記念講演会、学士会館

2019年11月17日 「企画展示『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年』について」『サウジアラビアと日本をつなぐ文化交流のこれから』横浜情報文化センター

・みんぱくゼミナール

2019年6月15日 「物質文化から見た沙漠社会——アラビア半島オアシスの半世紀」第492回みんぱくゼミナール

・研究講演

2019年11月10日 「片倉もともとアラブ・イスラームの文化人類学」『横浜ユーラシア文化館連続講座』横浜ユーラシア文化館

・展示

2019年6月6日～9月10日 企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2019年6月21日 「世界史の中のアラビアンナイト」朝日カルチャーセンター（中之島教室）

2019年7月17日 「世界文学としてのアラビアンナイト——新発見資料にもとづく最近の研究から」芦屋川カレッジ、芦屋市立公民館

2019年8月27日 「物語は極上の嗜好品——女性が愛したアラビアンナイト」阪急生活楽校、阪急うめだホール

2020年1月17日 「西尾哲夫インタビュー（聞き手：二宮敦人） 魅惑の現象アラビアンナイト 『ガラン版 千一夜物語』（岩波書店）刊行を機に」（『週刊読書人』2020年1月17日号（第3323号））株式会社読書人

◎調査活動

・海外調査

2019年5月22日～5月28日—連合王国（オックスフォード大学主催国際シンポジウムでの基調講演）

2019年9月12日～9月24日—フランス（研究成果編集作業および民博図書館所蔵 Villoteau 手稿本校訂作業と情報収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「シンドバード航海記の成立過程と多角的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」拠点代表者

信田敏宏 [のぶた としひろ]——教授

1968年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究所社会人類学専攻修士課程修了（1995）、東京都立大学大学院社会科学研究所社会人類学専攻博士課程単位取得退学（2000）【職歴】東京都立大学人文学部社会学科助手（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2006）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2012）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2014）、国立民族学博物

館文化資源研究センター教授（2014）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部研究部長（2017）【学位】社会人類学博士（東京都立大学 2002）【専攻・専門】社会人類学、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

[単著]

信田敏宏

2013 『ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書1）京都：臨川書店。

2004 『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。

Nobuta, T.

2009 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia*. Subang-Jaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

【受賞歴】

2006 第4回東南アジア史学会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 東南アジアの文化に関する人類学的研究
- 2) インクルーシブ社会に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

- 1) 本研究は、マレーシアを含む東南アジアの文化に関わる諸現象について、グローバルな状況を視野に入れながら、その最新の動向を探ることを目的とする。具体的には、民族状況や親族制度、生業や食文化など、東南アジアにおける文化現象について情報の収集・整理を行ない、その全体像を把握する。
- 2) 本研究は、本館の文化資源プロジェクト「知的障害者の博物館活用モデル構築に関する実践的研究」を中心として、知的障害者やその保護者や介護者などへのアンケートや聞き取りなどの手法を用いて、知的障害者をめぐる教育環境や社会状況の実態を探ることを目的とする。本研究の目的には、インクルーシブ社会実現に関する具体的な提言も含まれている。

・成果

- 1) マレーシアの先住民オラン・アスリの民族状況、親族制度等に関する単著『家族の人類学——マレーシア先住民の親族研究から助け合いの人類史へ』（臨川書店）を刊行した。また、編集委員長として進めてきた『東南アジア文化事典』（丸善出版）も刊行した。さらに、オラン・アスリの彫像や仮面に関するエッセイや論考も刊行した。成果の一部は、特別展「先住民の宝」で展示されている。
- 2) “Minpaku Sama-Sama School: for People with Intellectual Disabilities” と題したエッセイを MINPAKU Anthropology Newsletter にて発表した。また、第2回日本ダウン症会議において、「みんぱく Sama-Sama 塾——博物館を活用した知的障害者対象の学習ワークショップ」と題した口頭発表をおこなった。

◎出版物による業績

[単著]

信田敏宏

2019 『家族の人類学——マレーシア先住民の親族研究から助け合いの人類史へ』京都：臨川書店。

[編著]

信田敏宏編

2020 『特別展 先住民の宝』大阪：国立民族学博物館。

信田敏宏・綾部真雄・岩井美佐紀・加藤 剛・土佐桂子編

2019 『東南アジア文化事典』東京：丸善出版。

[その他]

信田敏宏

2019 「マレーシア」信田敏宏・綾部真雄・岩井美佐紀・加藤 剛・土佐桂子編『東南アジア文化事典』pp.30-31, 東京：丸善出版。

- 2019 「旅・いろいろ地球人 マレーシアふしぎばなし① おばけ」『毎日新聞』12月7日夕刊。
 2019 「旅・いろいろ地球人 マレーシアふしぎばなし② 猿まね」『毎日新聞』12月14日夕刊。
 2019 「旅・いろいろ地球人 マレーシアふしぎばなし③ 神の手」『毎日新聞』12月21日夕刊。
 2019 「旅・いろいろ地球人 マレーシアふしぎばなし④ ねずみ」『毎日新聞』12月28日夕刊。
 2020 「だれが先住民なのか」『季刊民族学』171：12-14。
 2020 「森をとりもどせ——マレーシア、オラン・アスリの闘い」『季刊民族学』171：24-31。
 2020 「特別展『先住民の宝』」『みんぱく e-news』225：巻頭コラム。
 2020 「先住民の思いをのせて」特集「先住民とアート」『月刊みんぱく』44(3)：2-3。
 2020 「はじめに」信田敏宏編『特別展 先住民の宝』pp.6-9, 大阪：国立民族学博物館。
 2020 「マレーシア オラン・アスリ」信田敏宏編『特別展 先住民の宝』pp.29-42, 大阪：国立民族学博物館。

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

文化庁2019年度障害者による文化芸術活動推進事業（文化芸術による共生社会の推進を含む）選定委員

・他大学の客員、非常勤講師

京都女子大学現代社会学部「家族の人類学」

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]——副館長（研究・国際交流・IR 担当）、グローバル現象研究部教授

森 明子 [もり あきこ]——教授

【学歴】 筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程単位取得退学（1989）**【職歴】** 筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2009）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）**【学位】** 文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）**【専攻・専門】** 文化人類学 ヨーロッパ人類学、ドイツ、オーストリアの民族誌研究、民族学・民俗学の歴史的展開**【所属学会】** 日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族——オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

[編著]

森 明子編

2014 『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』京都：世界思想社。

Mori, A. (ed.)

2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81). Osaka: National Museum of Ethnology.**【2019年度の活動報告】**

◎各個研究

・研究課題

社会的なものの意味と通文化的普遍性に関する人類学研究

・研究の目的、内容

近年、人文社会科学の諸分野において、社会的なものを問い直す研究が多く行われるようになった。こうした関心は、グローバル化やネオリベリズムのなかで社会が再編成されているという問題関心と連続しており、人類学の研究対象である他者も、この状況下で同時代を生きる存在として再配置されている。本研究は、このような他者のもとで再編成されつつある社会的なものを、民族誌の接近法によって明らかにしていくもので、社会的なものの再編成を、人類学の比較のパースペクティブと、人間社会の普遍性という命題のもとで、考察していく。

・成果

研究分担者として参加する科学研究費（基盤研究（B））「変動するEU国境地域におけるエスニック集団共生の課題」（研究代表者：加賀美雅弘、東京学芸大学）で、オーストリア/スロヴェニア国境地域の現地調査を進めた。本年はEUの農業政策のもとで農家経営がいかに変化しているか調べた。また、ローカルな次元で展開する文化活動について前年にひきつづいて調査した。その一角をなす住民と難民申請者との活動を、民博で展示できることになった。オーストリアでの調査にもとづいて、6月に開催された日本文化人類学会研究大会（於東北大学）において口頭発表した。

館内研究者として参加しているふたつの共同研究「カネとチカラの民族誌——公共性の生態学にむけて」「心配と係り合いについての人類学的探求」のそれぞれにおいて研究発表を行い、議論と考察をすすめた。このテーマの調査研究をさらに進める目的で、科研申請を行うとともに、翌年から切り口をあらたにした共同研究をたちあげる準備を進めた。

終了した共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」（研究代表者：森 明子）の成果として、論文集『ケアが生まれる場——他者とともに生きる社会のために』（森 明子編、ナカニシヤ出版、323頁）を4月に刊行した。

6月にベルリン国立博物館群・ヨーロッパ諸文化博物館主催で開催された国際シンポジウム‘What’s Missing? Collecting and Exhibiting Europe.’において招待講演を行なった。

公開講演会「ふたつの文化を生きる」を他大学の研究者と組織し準備した（ただし、新型コロナウイルス拡散の影響で開催は中止された）。

◎出版物による業績

[編著]

森 明子編

2019 『ケアが生まれる場 他者とともに生きる社会のために』 京都：ナカニシヤ出版。[査読有]

[分担執筆]

森 明子

2019 「序章 ケアが生まれる場へ」 森 明子編『ケアが生まれる場 他者とともに生きる社会のために』 pp.1-16, 京都：ナカニシヤ出版。[査読有]

2019 「街区のラーデン——1980年代ベルリンの再開とケア」 森 明子編『ケアが生まれる場 他者とともに生きる社会のために』 pp.170-188, 京都：ナカニシヤ出版。

2019 「あとがき」 森 明子編『ケアが生まれる場 他者とともに生きる社会のために』 pp.315-316, 京都：ナカニシヤ出版。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年10月19日 「社会的なものをめぐるプロジェクト——1980年代西ベルリンにおける試みとその後の展開」 『心配と係り合いについての人類学的探求』 国立民族学博物館

2020年1月25日 「EU農業政策とホーフ——オーストリアの事例」 『カネとチカラの民族誌——公共性の生態学にむけて』 国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月2日 「ケア労働者を迎える家族——オーストリア農村の調査から」 日本文化人類学会第53回研究大会、東北大学

2019年6月26日 ‘Exhibiting Europe in an Ethnological Museum in Japan: Rethinking the Opposition between the Self and Others.’ “What’s Missing? Collecting and Exhibiting Europe”, Staatliche Museen zu Berlin, Berlin, Germany (招待)

・研究講演

2020年2月28日 「あるトルコ系ドイツ人の肖像——国境を越える家族の父として」公開講演会『ふたつの文化を生きる——ドイツのトルコ系移民から私たちのこれからを考える』国立民族学博物館、オーバルホール、大阪（新型コロナウイルスのため非開催）

◎調査活動

・海外調査

2019年6月23日～7月1日—ドイツ（ベルリン国立博物館群ヨーロッパ諸文化博物館で行われるシンポジウムでの発表）

2019年11月18日～12月6日—オーストリア（オーストリア・スロヴェニア国境をめぐるプロジェクトに関する調査研究）

◎大学院教育

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「変動する EU 国境地域におけるエスニック集団共生の課題」（研究代表者：加賀美雅弘（東京学芸大学））研究分担者、国立民族学博物館共同研究「カネとチカラの民族誌——公共性の生態学にむけて」（研究代表者：内藤直樹）メンバー、国立民族学博物館共同研究「心配と係り合いについての人類学的探求」（研究代表者：西 真如（京都大学））メンバー、「JSPS 研究拠点形成事業『日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成』」（研究代表者：坂井一成（神戸大学））メンバー

相島葉月 [あいしま はつき] ————— 准教授

【学歴】上智大学比較文化学部比較文化学科卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫性博士課程修士号取得退学（2002）、オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科社会人類学修士課程修了（2005）、オクスフォード大学大学院東洋学研究科イスラーム世界専攻博士課程修了（2011）【職歴】Zentrum Moderner Orient Visiting Research Fellow（2009）、Zentrum Moderner Orient Research Fellow（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、マンチェスター大学人文学部 Lecturer in Modern Islam（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2016）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻准教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】博士（東洋学）（オクスフォード大学大学院東洋学研究科・セントアントニーズカレッジ 2011）、科学修士（社会人類学）（オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科・グリーンカレッジ 2005）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2002）【専攻・専門】社会人類学、イスラーム学、中東研究【所属学会】日本中東学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

Aishima, H.

2016 *Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society*. London: IB Tauris. [査読有]

[分担執筆]

Aishima, H.

2016 Are We All Amr Khaled? Islam and the Facebook Generation of Egypt. In A. Masquelier and B. Soares (eds.) *Muslim Youth and the 9/11 Generation*, pp.105-122. Santa Fe: School for Advanced Research Press. [査読有]

[論文]

Aishima, H.

2017 Consciously Unmodern: Situating Self in Sufi Becoming of Contemporary Egypt. *Culture and Religion: An Interdisciplinary Journal* 18(2): 149-164. [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代エジプトにおける美と身体文化

・研究の目的、内容

本研究の目的は、エジプトの空手家コミュニティ（競技者、指導者、父兄）の事例より、都市中流層的な美的感覚と身体文化の関係性を再考することにある。本研究の出発点は、なぜエジプト中流層の少年・少女にとって、空手道が「ハラール（イスラーム法的に合法、倫理的）」な習い事であるのに対し、同様の身体動作を行うクラシック・バレエが「ハラーム（イスラーム法的に違法、非倫理的）」なのかという問いにある。ハラール／ハラームと言ったイスラーム法的な語彙を援用しているとはいえ、エジプトの空手人気を支える言説を分析するに際し、中流層的な倫理観になぞられた近代主義との関係性において論じる必要がある。空手道に取り組む意義を「目的」と「効果」で説明し、バレエを享乐的な行為と批判する言説は、国際政治経済の周縁に置かれたエジプトの中流層的な倫理観を如実に反映しているからである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、空手道の稽古を、都市中流層的な倫理観と美的感覚が実践される場として考察する。

・成果

4月25日に「人間文化機構ネットワーク型基幹プロジェクト・現代中東地域研究拠点」の事業として、*Wiley Blackwell History of Islam* (2018) の出版を記念し、編著者のアルマンド・サルヴァトーレ（マッギル大学）を招聘して、国内外のイスラーム史の専門家とともに書評会を開催し、イスラーム史を書くための理論的枠組みや方法論について話し合った。本研究会の成果については、アメリカ歴史学会の学会誌にラウンドテーブルとして投稿した。4月26日にイラン人映像作家による井筒俊彦に関するドキュメンタリー『シャルギー（東洋人）』の上映会を開催し、井筒の業績やイランの思想の専門家とともに、本作品の意義について話し合った。本イベントの成果は『月刊みんぱく』で発表した。

5月10・11日に秋田大学で開催された日本中東学会第35回年次大会に実行委員として参加し、現代中東地域研究・秋田大学拠点と協力して年次大会の企画運営に尽力した。また、現代中東地域研究若手共同研究「アラブ世界における近代的メディアとイスラーム——穏健派を中心に」（2017～18年度）の成果である分科会「メディアとイスラーム思想／知の連環」に登壇し、研究発表をおこなった。

5月24・25日は科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化（代表者・西尾哲夫）」より出張旅費を捻出して、オクスフォード大学セントアントニーズカレッジ中東センターで開催された国際ワークショップ *Niether Near nor Far: Encounters and Exchanges between Japan and the Middle East* に参加し、研究発表を行った。本企画は、2016年に始まった国際共同研究の三回目の研究集会であり、論文集として成果発表を行う予定でいる。

10月31日～12月2日は研究代表者をつとめる、科学研究費（若手研究（B））「エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」より出張旅費を捻出して、カイロにおいて隣地調査を実施した。エジプト伝統空手道協会に所属する空手教室や講習会に参加し、聞き取り調査や参与観察を通じて、エジプトの空手家コミュニティについての知見を深めた。成果の一部を発表した論文をSERに投稿中である。

1月14日～2月25日は「現代中東地域研究拠点」の用務としてマンチェスターに滞在し、グローバル化する中東とイギリス人ムスリムの身体文化についての隣地調査を実施した。1月31日にイギリスのEU離脱が始まったことを受け、味の素食文化センターの広報誌『Vesta』に「イギリスの夕食シーンにおける『多文化』をめぐるポリティクス」と題したエッセーを寄稿した。1月22～23日はフロリダ大学グローバルイスラーム研究所の招聘で、国際ワークショップ *Media and "Public" Islam in Africa and Elsewhere* に参加し、研究発表を行った。2月17～18日はルーヴァンカソリック大学とアントワープ大学の招聘でベルギーに出張し、公開講演を行った。

◎出版物による業績

[その他]

相島葉月

2019 「グローバル時代の外国研究」『*Toyro Business*』185: 1。

2020 「神の声に耳をすます」（シネ倶楽部M）『月刊みんぱく』44(2): 18-19。

Aishima, H.

2019 *Review of Religion as Critique: Islamic Critical Thinking from Mecca to the Marketplace* by

Irfan Ahmad. *American Ethnologist* 46(4): 537-538.

2020 Review of *The al-Ghazali Enigma and Why Shari'a is Not Islamic Law* by Haifaa G. Khalafallah. *Journal of Islamic Studies* 31(1): 111-113.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2019年4月26日 'Introduction, Review Roundtable of the *Wiley Blackwell History of Islam*.' 国立民族学博物館

2019年4月27日 "Post-Screening Discussion", 「『シャルギー（東洋人）』京都上映会」人間文化研究機構機関研究プロジェクト現代中東地域研究・国立民族学博物館拠点、龍谷大学深草キャンパス

2019年5月25日 'Introduction.' Workshop "Neither Near Nor Far: Encounters and Exchanges between Japan and the Middle East", Middle East Centre, St Antony's College, Oxford, United Kingdom

・共同研究会での報告

2019年7月27日 「ムスリム知識人像の変容——メディア化するイスラームと都市中流層について」『現代ムスリム知識人の地域横断ネットワークに関する研究』2019年度第2回研究会、東京外国語大学本郷サテライト

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月11日 「エジプト中流層のメディア消費と教養としてのスーフィズムの形成」日本中東学会第35回年次大会、秋田大学手形キャンパス

2020年1月24日 'Branding Sufism for the Middle Class: Mass media and 'Abd al-Halim Mahmud's Sufi Da'wa in Post-Socialist Egypt.' "Media and 'Public' Islam in Africa and Elsewhere", University of Florida, Florida, United States

・研究講演

2019年5月22日 'Escaping the Nafs in Socialist Egypt: 'Abd al-Halim Mahmud's Search for a Sufi Master.' Centre Seminar, Oxford Centre for Islamic Studies, Oxford, United Kingdom

2019年9月26日 「現代エジプトの社会階層とスポーツ実践——ポストスポーツとしての空手道の試論」第171回東北人類学談話会、東北大学大学院文学研究科文化人類学研究室

2020年2月17日 'Orientalising the Orient: Searching for Karate's Budo Roots in Contemporary Egypt.' Arabic and Islamic Studies and Japanese Studies, Faculty of Arts, KU Leuven, Leuven, Belgium

2020年2月18日 'Orientalising the Orient? Searching for Karate's Budo Roots in Contemporary Egypt.' The Centre for Research on Body Cultures in Motion, Ghent University, Ghent, Belgium

・みんなくウィークエンド・サロン

2019年7月14日 「サウジ版『江南スタイル』に見るハラールな若者文化」第547回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2019年5月17日～5月29日—連合王国（オクスフォードでの研究発表および研究会の企画運営）

2019年10月31日～12月3日—エジプト（エジプト人空手家コミュニティに関する調査）

2020年1月14日～2月25日—連合王国、アメリカ合衆国、ベルギー（イギリスにおけるムスリム移民の身体文化についての臨地調査および研究発表）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」（研究代表者：西尾哲夫）研究分担者、科学研究費（若手研究（B））「エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

東北大学「文化人類学各論『中東イスラーム人類学』」(集中講義)

河合洋尚 [かわい ひろなお] ————— 准教授

1977年生。【学歴】関西学院大学社会学部卒(2001)、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了(2003)、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程修了(2009)【職歴】中国嘉応大学客家研究所ビジティング・スカラー(2007)、中国嘉応大学客家研究院民族学分野専任講師(2008)、広東外語外貿大学継続学院非常勤講師(2009)、中国嘉応大学客家研究院客員准教授(2010)、中国国立中山大学社会学与人類学院助理研究員[講師相当](2010)、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員(2011)、流通科学大学総合政策学部非常勤講師(2012)、園田学園女子大学シニア専修コース非常勤講師(2013)、国立民族学博物館研究戦略センター助教(2013)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授(2016)、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授(2017)【学位】博士(社会人類学)(東京都立大学 2009)、修士(社会人類学)(東京都立大学 2003)【専攻・専門】都市人類学、景観人類学、漢族研究【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、日本華南学会、中国広東民族学会

【主要業績】

[単著]

河合洋尚

2020 『〈客家空間〉の生産——梅県における「原郷」創出の民族誌』東京：風響社。

2013 『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

[編著]

河合洋尚編

2013 『日本客家研究の視角与方法——百年の軌跡』北京：社会科学文献出版社。

【受賞歴】

2001 安田三郎賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) ランドスケープおよびフードスケープの人類学的研究
- 2) 環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌

・研究の目的、内容

- ①ランドスケープおよびフードスケープの動向を再整理し、その研究の到達点と今後の課題を再考する。さらに、フードスケープの視点から客家料理の再カテゴリー化についての理解を深めるとともに、客家の人々がそれとは別の食を重視し生態景観を維持してきた動きについて調査を進める。
- ②漢族、特に中国南部から世界各地に移住している客家に焦点を当て、国境を越えた社会文化的ネットワークを明らかにする。具体的には、第一に、環太平洋における客家の移動やネットワークを加味したうえで、中国広東省(梅県など)、オセアニア、中南米の客家に関する研究を進める。第二に、日本に焦点を当て、日本と台湾、広東、福建、東南アジア諸国との歴史的ネットワークについて理解を深める。

・成果

- ①景観人類学の動向を整理し、中国の北京大学、中央民族大学、アモイ大学で講演をおこなった。また、客家の景観とバーチャル世界との関係について、日経新聞社で講演をおこなった。さらに、人類学とその隣接領域におけるフードスケープの研究動向を整理して東アジア人類学研究会で発表し、その成果を研究ノートとして『国立民族学博物館研究報告』に投稿した。
- ②客家の故郷・梅県で2004年から15年間調査してきたデータを整理し、民族誌(『〈客家空間〉の生産——梅県における「原郷」創出の民族誌』)として風響社から刊行した。同時に、2018年12月に国立民族学博物館で開催した国際シンポジウムの成果を整理し、『客家族群与全球現象——華僑華人在「南側地域」的離散与現況』

(客家とグローバル現象——「南側地域」における華僑華人の移住と現在)をSERとして刊行した。さらに、客家の歴史と文化を一般向けに広く紹介する概説書として『客家——歴史・文化・イメージ』を出版した(本書は中国語に翻訳される予定である)。この本では、グローバルな客家の分布と移住、梅県、東南アジア、日本などの項目を担当した。他にも、毎日新聞の「旅いろいろ地球人」の連載で「南太平洋に住む客家」について紹介した。

◎出版物による業績

[単著]

河合洋尚

2020 『〈客家空間〉の生産——梅県における「原郷」創出の民族誌』東京：風響社。

[共著]

飯島典子・河合洋尚・小林宏至

2019 『客家——歴史・文化・イメージ』東京：現代書館。

[編著]

河合洋尚・張 維安編

2020 『客家族群与全球現象——華僑華人在「南側地域」的離散与現状(客家とグローバル現象——「南側地域」における華僑華人の移住と現在)』(国立民族学博物館調査報告 150) 大阪：国立民族学博物館。

[論文]

河合洋尚

2019 「四川省における〈客家空間〉の生成——成都市東山区の都市景観開発を中心として」愛知大学現代中国学会編『中国21』49：189-210。

2020 「民族文化をめぐるジレンマ——中国客家地域における市場経済化と生活実践」愛知大学国際問題研究所編『グローバルな視野とローカルの思考——個性とのバランスを考える』pp.173-190, 名古屋：あるむ。

2020 「序論——客家移民研究の現状と課題(序論——客家海外移民研究の現状と課題)」河合洋尚・張 維安編『客家族群与全球現象——華僑華人在「南側地域」的離散与現状(客家とグローバル現象——「南側地域」における華僑華人の移住と現在)』(国立民族学博物館調査報告150) pp.1-28, 大阪：国立民族学博物館。

2020 「ペルーの客家に関する初歩的報告」河合洋尚・張 維安編『客家族群与全球現象——華僑華人在「南側地域」的離散与現状(客家とグローバル現象——「南側地域」における華僑華人の移住と現在)』(国立民族学博物館調査報告150) pp.319-340, 大阪：国立民族学博物館。

[その他]

飯島典子・河合洋尚

2019 「第29回世界客家大会の会議参加報告」『華南研究』5：89-95。

河合洋尚

2020 「旅・いろいろ地球人 南太平洋に住む客家① 客家の故郷・中国広東省」『毎日新聞』2月1日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 南太平洋に住む客家② タヒチの春節と元宵節」『毎日新聞』2月8日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 南太平洋に住む客家③ タヒチ客家の『中国人』意識」『毎日新聞』2月15日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 南太平洋に住む客家④ ニューカレドニアへの再移住」『毎日新聞』2月22日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 南太平洋に住む客家⑤ ニューカレドニアの『客家文化』」『毎日新聞』2月29日夕刊。

Kawai, H.

2019 Annual Junior Researcher's Seminar. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 48: 3-5.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月13日 「景観人類学在日本的發展与展望」(陳 昭と共同発表) 国際ワークショップ『中日人類学学術交流研討会』中央民族大学、北京市、中国

2019年10月5日 「渡邊欣雄与客家研究」国際シンポジウム『百年往返——台湾与日本客家研究之対話』台湾交通大学、台湾新竹市、台湾

2019年11月2日 「大洋州的『客家人』与『客家菜』——以大溪地為主」第10回客家文化学術高級論壇、贛南師範大学、贛州市、中国(基調講演)

2019年12月8日 「歴史性と景観建設——徐福信仰をめぐる歴史の資源化」日本華南学会研究大会・総会、東北

大学

・研究講演

2019年9月9日 「環太平洋的旅行者」魯東大学招待講演、煙台市、中国

2019年9月11日 「景観人類学——田野科学如何分析景観問題と景観設計？」北京大学建築与設計学院招待講演、北京市、中国

2019年11月8日 「景観人類学的新趨向——現状と展望」アモイ大学人類学部招待講演、厦門市、中国

2019年11月15日 「アニメのある景観——中国地域の客家文化継承をめぐって」日経新聞社・国立民族学博物館講演会『アニメ『聖地』巡礼——サブカルチャー遺産の現在』日経ホール、東京

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年8月4日 「南太平洋・ヴァヌアツの華僑華人」第550回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究「社会・文化人類学における中国研究の理論的的定位——12のテーマをめぐる再検討と再評価」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「中国——南太平洋島嶼国関係の変化と「オセアニアン・チャイニーズ」像の表出」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「民族誌調査に基づくニッチ構築メカニズムの解明」（研究代表者：大西秀之（同志社女子大学））研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

中国嘉応大学客家研究院客員准教授、京都市立芸術大学・非常勤講師「アジア文化史Ⅰ」、大阪経済大学・非常勤講師「民俗学」、関西学院大学非常勤講師「フィールド文化特論A」「死と病の文化史」

廣瀬浩二郎 [ひろせ こうじろう] ————— 准教授

【学歴】 京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校人類学部留学（1995）、京都大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程指導認定退学（1997）【職歴】 京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）、関西学院大学非常勤講師（2010）、東海大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】 文学博士（京都大学大学院文学研究科 2000）、文学修士（京都大学大学院文学研究科 1993）【専攻・専門】 日本宗教史、民俗学（日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究）【所属学会】 日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

廣瀬浩二郎

2009 『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすすめ』京都：世界思想社。

2001 『人間解放の福祉論——出口王仁三郎と近代日本』大阪：解放出版社。

[学位論文]

廣瀬浩二郎

2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」京都大学大学院文学研究科。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

2019年度も館内外で研究講演、ワークショップなどを積極的に担当していきたい。今年度最大の課題は、2018年度末まで取り組んできた共同研究「『障害』概念の再検討」の成果公開を目的として、秋にシンポジウムを開催することである。民博でユニバーサル・ミュージアムを主題とするシンポジウムを行うのは4回目となる。過去10年余の研究活動を総括する有意義なシンポとなるよう、準備を進めたい。

ユニバーサル・ミュージアム研究の国際的発信も、今年度の大きな目標だろう。2018年度から実施している科研プロジェクト「触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究」の内容を欧米の学会、研究会で報告する予定である。昨年度からの懸案である教育現場で活用される「さわる絵本」も、今年度中には刊行したい。2020年度の秋の特別展に向けて、今年度後半からは展示設計等の打ち合わせで多忙となるだろう。「ポストオリパラ」の障害者施策をリードするような展示、民博の存在感を示す学際的な事業展開をめざし、各方面への協力を呼び掛ける。

・成果

今年度は館内外における研究講演を43回、“触”を主題とするワークショップを20回担当した。このうち海外での研究発表は3回、各種シンポジウムでの報告は4回、学会発表（日本特殊教育学会）は1回である。今年度最大の成果は『触常者として生きる』（伏流社、2020年1月）の刊行だろう。ここ数年の既発表論文、新聞コラムなどを集め、「触文化」の学術的な入門書として再編集した。2020年度秋に開催予定の特別展「ユニバーサル・ミュージアム」の理念を解説する書籍として、展覧会の広報にも積極的に活用したい。

2019年11月3日～4日には公開シンポジウム「日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題」を実施した。シンポジウムには両日とも全国の博物館関係者を中心に、140名余が参加し、民博がユニバーサル・ミュージアム研究の拠点であることを館内外に宣言する貴重な機会となった。本シンポジウムの成果は、上記特別展の図録に収録する予定である。

年度後半は特別展の準備に忙殺されたが、ボランティア論をテーマとして、二つの小論文を執筆することができた。また2019年11月には韓国（国立工芸博物館）、2020年3月には米国（ミシガン大学、ミシガン州立大学）で日本のユニバーサル・ミュージアム研究について講演した。

◎出版物による業績

[単著]

廣瀬浩二郎

2020 『触常者として生きる——琵琶を持たない琵琶法師の旅』東京：伏流社。

[分担執筆]

廣瀬浩二郎・渥美公秀・八木絵香

2020 「『できない』を『できる』に変えていく力」八木絵香・水町衣里編『<つながり>を創り出す術 続・対話で創るこれからの「大学」』（大阪大学COデザインセンター監修）pp.143-172, 大阪：大阪大学出版会。

廣瀬浩二郎

2019 「『発建』の喜び——そこにラーメン屋がある！ 座頭市流フィールドワーカー『野生の勘』の勘の戻し方」食品産業新聞社編『おいしいはおもしろい——ニッポンの食をささえる素敵な会社』pp.60-61, 東京：食品産業新聞社。

[論文]

廣瀬浩二郎

2020 「『未開の知』に触れる——2020東京オリパラを迎える前に」『KG人権ブックレット No.26』pp.17-35, 西宮：関西学院大学人権教育研究室。

[その他]

廣瀬浩二郎

2019 「ユニバーサル・ミュージアム」『月刊みんぱく』43(5)：16-17。

2019 「芳一なし“耳”の話」『季刊民族学』170：70-75。

2019 「ぶんかのミカタ ユニバーサルミュージアムの今（上）『感覚の多様性』取り戻す実験」『毎日新

聞』11月16日夕刊。

廣瀬浩二郎・伊藤亜紗

2019 「脱・視覚依存のすすめ『目の見えない人』の世界を体験してみた」『Fole』201:14-17。

廣瀬浩二郎

2020 「『分・結・創』のボランティア論——『世話をする/世話になる』の関係を越えて」『にいがた☆高校生ボランティア2019』pp.13-26, 新潟:新潟県高等学校文化連盟。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年11月3日 「シンポジウム趣旨・概要」公開シンポジウム『日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題——2020オリパラを迎える前に』国立民族学博物館

2019年11月4日 「『合理的配慮』再考」公開シンポジウム『日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題——2020オリパラを迎える前に』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月22日 「『合理的配慮』再考——2020オリパラを迎えるに当たって」日本特殊教育学会第57回大会、広島大学

・研究講演

2019年11月11日 「多様な人々の博物館利用——視覚障害者のアクセシビリティ向上を考える」龍山工芸館、ソウル、韓国

2020年3月10日 「The Universal Museum Makes a World without Borders.」ミシガン大学美術史学部、ミシガン州、アメリカ合衆国

2020年3月12日 「Significance and Methods of the Tactile Culture Exhibition.」ミシガン州立大学博物館、ミシガン州、アメリカ合衆国

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年12月8日 「『健常者』幻想をぶっ壊せ！——琵琶法師、イタコの触角力」第561回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2019年11月11日～11月13日—韓国（龍山工芸館「多様な人々の博物館利用—視覚障害者のアクセシビリティ向上を考える」国際会議に参加（基調講演））

2020年3月9日～3月17日—アメリカ合衆国（米国の大学博物館における障害者サービスの現状の調査および関係者との意見交換）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「共生の技法としてのユニバーサルツーリズムの理論と実践」（研究代表者：石塚裕子（公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「インクルーシブアート教育論及び視覚障害等のためのメディア教材・カリキュラムの開発」（研究代表者：茂木一司（群馬大学）研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究」研究代表者

三島禎子 [みしま ていこ] ————— 准教授

1963年生。【学歴】セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、パリ第5大学大学院社会科学研究所第2課程修了（1992）、津田塾大学大学院国際関係学研究所博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究所第3課程修了（1993）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2003）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】D. E. A. Sci. Soc（パリ第5大学大学院社会科学研究所1993）、M. Soc.（パリ第5大

学大学院社会科学部 1992)【専攻・専門】文化人類学(西アフリカ研究)【所属学会】アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

Charbit, Y. et T. Mishima (éds.)

2014 *Questions de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: LHarmattan.

[論文]

Mishima, T.

2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké: Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima (éds.) *Questions de migrations et de santé en Afrique subsaharienne*. Paris: LHarmattan.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカ商業民の移動と世界経済に関する歴史人類学的研究

・研究の目的、内容

大西洋貿易以降のアフリカ商業民の移動は、従来、もっぱら世界資本主義の観点から取り上げられてきた。経済の中心にある西欧に対して、アフリカが周辺に位置するという構図は、アフリカ商業民の移動の実態を従属や低開発といった分析枠におしとどめてきた。一方、民族文化の継承という観点からは異なる経済倫理が読み取れ、有形・無形の「財」に対する価値観が移動の伝統を支えてきたと考えられる。

このような過去の考察を踏まえ、各時代の経済状況と移動の実態、および語り継がれ世代を経て継承される移動の文化について、歴史的考察と人類学的調査をあわせておこなう。時間軸と空間軸が交差する帰結点に注目することで、ミクロな視点をグローバルな世界に位置づける作業が可能になり、アフリカ商業民がグローバルな経済のなかで演じた役割を問い直すことにつながる。

この研究は今年度申請する予定の共同研究『人類史における移動の「自由」と「不自由」の相克に関する歴史人類学的研究』（代表 鈴木英明）の一環でもあり、これまでの各個研究の総括でもある。

・成果

移動の文化を考察する過程で、対象社会の人びとが民族文化そのものをどのように向き合っているかという点から、かれらが10年以上にわたって継続している「文化週間」についての民族誌的な分析を行い論文を執筆した。これは2017年におこなった映像資料の収集を素材にしたものであり、同じデータを使って『みんなく映像民族誌』も完成した。

また計画に記した共同研究が採択され、歴史学、文化人類学、宗教学、考古学などの分野の研究者が集い、人類史における移動について多角的な視点から今後の共同研究の方向性を議論した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

三島禎子

2019 「商業民ソニンケがつくる経済ネットワーク」永原陽子編『人々がつなぐ世界史』pp.79-82, 京都: ミネルヴァ書房。

[論文]

Mishima, T.

2020 「ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ局——『文化週間』をめぐる民族誌的考察」『国立民族学博物館研究報告』44(4): 683-732。[査読有]

[その他]

三島禎子

2019 「ガラス絵とガラスアイコン」『月刊みんなく』43(6): 16-17。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

三島禎子監修

- 2020 『セネガルを越える人と地域ラジオ』（日本語・118分）
- ・DVD・CD などの制作・監修
 - 三島禎子監修
 - 2020 『みんなく映像民族誌 第34集 セネガルを越える人と地域ラジオ』（日本語・118分）
 - ◎口頭発表・展示・その他の業績
 - ・みんなくウィークエンド・サロン
 - 2019年5月12日 「新ビデオテーク紹介『ただいまオンエアソニケ・ディアスポラをつなぐ地域ラジオ』」
 - 第542回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう
 - ・広報・社会連携活動
 - 「世界の移民の歴史・事情」大阪府高齢者大学校「国際文化交流科」
 - ◎大学院教育
 - ・指導教員
 - 副指導教員（1人）
 - ・大学院ゼミでの活動
 - 「地域文化学基礎演習 I」、「地域文化学基礎演習 II」、「比較文化学基礎演習 I」、「比較文化学基礎演習 II」
 - ◎上記以外の研究活動
 - ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
 - 国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト M331041720 「アフリカ資料の多言語双方データベースの構築」（研究代表者：飯田 卓）メンバー
 - ◎社会活動・館外活動
 - ・他の機関から委嘱された委員など
 - Revue Européenne des Migrations Internationales 編集委員（アジア担当）

鈴木英明 [すざき ひであき]————— 助教

【学歴】 学習院大学文学部史学科卒業（2001年）、慶応義塾大学大学院文学研究科修了（2003年）、東京大学人文社会科学系研究科単位取得退学（2010年）【職歴】 日本学術振興会特別研究員、長崎大学多文化社会学部准教授（2014–2018）を経て現職【学位】 博士（文学 東京大学 2010）【専攻・専門】 歴史学、インド洋海域史、グローバルヒストリー【所属学会】 日本アフリカ学会、日本オリエント学会

【主要業績】

[単著]

Suzuki, H.

2017 *Slave Trade Profiteers in the Western Indian Ocean: Suppression and Resistance in the 19th Century*. New York: Palgrave.

[編著]

鈴木英明編

2019 『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』東京：明石書店。

Suzuki, H. (ed.)

2016 *Abolitions as a Global Experience*. Singapore: NUS Press.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド洋におけるアフリカン・ディアスポラの研究

・研究の目的、内容

本研究は、インド洋におけるアフリカン・ディアスポラの実態解明を目的とし、特に19世紀から20世紀の動向に着目しこの課題に取り組むものである。また、アフリカン・ディアスポラの当事者だけでなく、彼らと共生する人びともに着目する。その理由とは、19世紀から20世紀初頭のインド洋では、現在我々が認識するような

「アフリカ」や「アフリカ人」という概念が同時代において通用していたとは考えられないからである。その一方で、20世紀初頭にはパン・アフリカ主義が大西洋で沸きあがっていた。こうした大西洋を震源とする「アフリカ人」意識がインド洋に伝わったのか、あるいは、伝わらないとすれば、インド洋のアフリカ大陸から離れた場所に生きるアフリカ大陸出身者はいかなる自己意識を有していたのか、この点の解明を試みる。

・成果

本テーマについては、インド洋のアフリカン・ディアスポラを概観した“African Diaspora in Asia,” David Ludden, et al. (eds.), *Oxford Research Encyclopaedia of Asian History*, Oxford: Oxford University Press, 28p. を執筆した。また、2020年2月2日に立教大学で開催された公開シンポジウム「アジアの海を渡る人々：18・19世紀の渡海者」において『アフリカ人』の誕生——19世紀インド洋西海域における救出奴隷の行方」と題する報告を行った。これは救出奴隷がインドに送致され、そこで教育を受け、アフリカに送り返されるという内容で、現在、論文化を進めている。また、京都精華大学で開催された日本アフリカ学会第56回学術大会にて“African Diaspora in the 20th Century Persian Gulf: Preliminary Observations with Slave Narratives”と題する報告を行った。これは、本年度で完了した科学研究費（若手研究（B））「20世紀前半ペルシア湾における「奴隷解放調書」の研究」の成果であり、これについては今後数年をかけ、さらに発展させ、研究書を書く予定である。

◎出版物による業績

[編著]

鈴木英明編

2019 『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』東京：明石書店。[査読有]

[分担執筆]

鈴木英明

2019 「海域史研究の展開とその課題」鈴木英明編『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』pp.11-43, 東京：明石書店。

2019 「海域史研究の可能性——ネットワーク論の課題と展望」鈴木英明編『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』pp.303-313, 東京：明石書店。

デレック・ヘン著、鈴木英明訳

2019 「9世紀の沈船黒石号から見える港・航海・商人・国家」鈴木英明編『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』pp.45-71, 東京：明石書店。

アンゲラ・ショッテンハマー著、鈴木英明訳

2019 「16-18世紀における太平洋を跨ぐ水銀の密貿易」鈴木英明編『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』pp.229-265, 東京：明石書店。

Suzuki, H.

2020 African Diaspora in Asia. In David Ludden, et al (eds.) *Oxford Research Encyclopaedia of Asian History*, pp.1-28. Oxford: Oxford University Press. [査読有]

[論文]

鈴木英明

2020 「海域世界の鼓動に耳を澄ます——19世紀インド洋西海域世界の季節性」『国立民族学博物館研究報告』44(4)：591-623。[査読有]

[その他]

鈴木英明

2019 「ノウルーズは海を渡ったのだろうか——ザンジバルにおける幾つかの謎」『季刊民族学』168：56-63。

2019 「アストロラーベ」『季刊民族学』168：64。

2019 「ルーズ・ナーマ」『季刊民族学』168：64。

2019 「国立民族学博物館の収藏品②世界で一番有名な奴隷船ブルークス号」『文部科学 教育通信』466：2。

2019 「奴隷展示を介した過去、現在、そして未来」特集「奴隷展示は問う」『月刊みんぱく』43(9)：2-3。

2019 「旅・いろいろ地球人 サントメ砂糖紀行① ギニア湾の小島」『毎日新聞』11月2日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人 サントメ砂糖紀行② 燃える水の味」『毎日新聞』11月9日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人 サントメ砂糖紀行③ 世界最低品質の砂糖」『毎日新聞』11月16日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人 サントメ砂糖紀行④ サトウキビを噛む」『毎日新聞』11月30日夕刊。

2020 「みんぱくで大西洋奴隷取引に触れる」『月刊みんぱく』44(2)：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年12月7日 「移動概念の現状と可能性」『人類史における移動概念の再構築——「自由」と「不自由」の相克に注目して』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月18日 'African Diaspora in the 20th Century Persian Gulf: Preliminary Observations with Slave Narratives.' 日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学

2019年6月15日 「西アフリカ調査報告」地中海型奴隷制度の史的展開とその変容研究会、一橋大学

2019年6月22日 「インド洋西海域世界の近代?——奴隷取引を事例にして」インド洋交易圏の統計的研究研究会、総合地球環境学研究所

2019年9月4日 'Borderless World and Global History.' "Why Do We Need Global History?"; The University of Tokyo

2019年10月4日 「ネットワーク、季節性、インド洋西海域世界——19世紀を事例に」近世史フォーラム10月例会、大阪市立北区民センター

2019年10月17日 Network and Kaiiki: Node=Network and Flow=Network, Categories at Work, Warwick University, Warwick, United Kingdom

2019年12月22日 「海を渡りきるの意味——19世紀後半インド洋西海域の救出奴隷を事例に」渡海者研究会岡山大会、岡山大学

2020年2月2日 「『アフリカ人』の誕生——19世紀インド洋西海域における救出奴隷の行方」公開シンポジウム『アジアの海を渡る人々——18・19世紀の渡海者』立教大学

2020年2月17日 'In between Japan and Africa: Or, Indian Ocean world in Japanese Khanga.' "Oceanic Circularities: The Indian Ocean in the Modern World", Georgetown University Qatar, Doha, Qatar

・みんぱくゼミナール

2019年9月21日 「奴隷取引の世界史——サハラ以南アフリカと世界」第495回みんぱくゼミナール

・研究講演

2019年4月14日 「スパイスアイランドに生きる人々——ヒトとモノの移動が作り出す19世紀ザンシバル社会」MMP、国立民族学博物館

2019年9月18日 「インドとアフリカ——インド洋海域世界史の観点から」(2019年度南アジアセミナー) NIHU プログラム「南アジア地域研究」、広島大学

2019年11月2日 「インド洋西海域世界、より深く、その先へ」(地域研究コンソーシアム賞研究作品賞受賞者記念講演) 地域研究コンソーシアム、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2019年11月2日 「マウシムを生きる人びとの歴史——19世紀ペルシア湾の生業、交易、移動」第494回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・その他(「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの)

2019年5月17日 'Short Introduction.' Joint Research Seminar "Special Session on Africa in the Indian Ocean World", 国立民族学博物館

2019年5月18日 オーガナイザー、Forum "African History in Broader Perspective: Some Dimensions in 19th and 20th Century", 第56回日本アフリカ学会学術大会、京都精華大学

◎調査活動

・海外調査

2019年9月9日～9月17日—インド(インドにおける渡海者関連史跡の調査)

2019年10月15日～10月29日—連合王国(ウォーリック大学での会議に出席、バーミンガム大学図書館での調査)

2019年11月10日～11月25日—ケニア(ケニア博物館群と締結のMoUの受け取り、ケニア沿岸部での調査)

2019年12月7日～12月17日—ジブチ共和国(ジブチにおける真珠採取業と港湾史、及び文化遺産に関する調査)

2019年12月22日～2020年1月1日—タイ(東南アジア大陸部における植民地国家建設に関する研究)

2020年1月4日～1月18日—ケニア、タンザニア(モンバサ、ザンジバルでの文化遺産調査、ザンジバルでの季節変動と交易に関する調査)

2020年1月21日～1月31日—インド（インド・ボンベイ管区およびペルシア湾における植民地国家建設に関する研究）

2020年2月14日～2月19日—カタル（Oceanic Circularities: The Indian Ocean in the Modern Worldへの参加と報告）

2020年2月23日～3月1日—クウェート（ペルシア湾における奴隷解放調書の研究）

2020年3月6日～3月18日—連合王国（ロンドンにおけるインド洋交易圏に関する文書館調査）

2020年3月20日～3月30日—ベトナム（ベトナム南部におけるポスト奴隷制の労働力移動に関する調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「地中海型奴隷制度の史的展開とその変容——隷属の多様性をめぐる比較的研究」（研究代表者：清水和裕（九州大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「植民地国家建設の比較研究——国家と情報の関係に焦点を当てて」（研究代表者：鬼丸武士（九州大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「渡海者のアイデンティティと領域国家——21世紀海域学の史的展開」（研究代表者：上田 信（立教大学））研究分担者、国立民族学博物館共同研究「人類史における移動概念の再構築——『自由』と『不自由』の相克に注目して」研究代表者

学術資源研究開発センター

野林厚志 [のばやし あつし] ————— センター長（併）教授

1967年生。【学歴】東京大学理学部生物学科卒（1992）、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了（1994）、東京大学大学院理学系研究科博士課程退学（1996）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2000）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授・センター長（2014）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2015）、国立民族学博物館文化資源研究センターセンター長（2015）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長（2019）【学位】博士（学術）（総合研究大学院大学 2003）、修士（理学）（東京大学大学院理学系研究科 1994）【専攻・専門】フォルモサ研究 原住民族研究、博物資源学、民族考古学 狩猟園芸農耕民研究、通文化モデル研究、人類学 生業研究、先住民族研究、食文化研究【所属学会】日本台湾学会、日本文化人類学会、The American Anthropological Association、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学——台湾原住民の生業文化』東京：御茶の水書房。

[編著]

野林厚志編

2018 『肉食行為の研究』東京：平凡社。

順益台湾原住民研究会・野林厚志主編

2014 『台湾原住民研究の射程——接合される過去と現在』北京：順益台湾原住民博物館。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

生態資源獲得の技術の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、人類が生態資源の獲得に使用してきた技術を、(1)物質文化、(2)人間の行動、(3)環境条件、

という3つの側面から分析し、人類の適応行動の空間的な変異と時間的な変化を明らかにすることである。

このために、(1)台湾、インドネシアで、生業行動、食生活に関する野外調査を、国立民族学博物館をはじめとする内外の博物館で、生業資源の獲得に関連する資料の熟覧調査を行い、生態資源（動物、植物、鉱物、水等）を獲得するための技術インデックスを作成する。同時に民族誌データ（Binford2001等）の定量分析を進め、環境と文化要素との相関に関する考察を行う。以上の結果にもとづき、自然環境への適応、集団接触による文化変容を説明するための生態資源の獲得技術の人類学的モデルを提示する。

なお、本研究は、新学術領域研究「パレオアジア文化史」の計画研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の一環で実施する。

・成果

本年度は当初の計画にしたがい、台湾、インドネシアでの野外調査を実施した。特に、インドネシア・ハルマヘラ島においては、生態資源の獲得手段の新たな技術がある集団に導入された場合の、集団の反応として、(1)既存の生態資源の利用には在来技術と新技術との併存、(2)生態学的適応と無関係の事物の在来社会への定着という知見を、具体的な民族誌事例にもとづき得ることになった。前者ではハルマヘラのガレラ社会では、従来型のカヌーと船外動力機つき漁船が併用されており、この背景には、船外動力機つきの漁船は、必ずしも従来型のカヌーを用いた漁場のすべてに適応的ではなかったが、沿海での漁撈へはより適応的であり、そこでの獲得資源量が、従来、獲得できていた資源量よりも多いということがあった。後者に対応する民族誌的事実はカヌーフロート装着法の組み込みが、間接装着法から直接装着法という単純な構造へ移行する現象が見られたことである。以上の結果は、「パレオアジア文化史」主催の第9回研究大会でポスター発表を行い、成果の速報的公開を行った。民族誌データ（Binford2001等）の定量分析については、オーストロネシア系集団の鳥占いに共伴する文化事象の確率分布について、他の研究機関所属の研究者の協力を得て分析した。この成果は、アメリカ人類学会の年次大会において口頭発表を実施した。

なお、本研究は、新学術領域研究「パレオアジア文化史」の計画研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の一環で実施した。

◎出版物による業績

[編著]

野林厚志編

2020 『パレオアジア文化史学 計画研究 B01班2019年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）。

[分担執筆]

野林厚志

2020 「台湾原住民族の文化の多様性——ビーズにみる過去と現在」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』pp.239-254, 京都：昭和堂。[査読有]

[論文]

野林厚志

2019 「台湾原住民族の生態資源獲得の技術に関する研究——狩猟方法を中心に」『第12回台日原住民族研究論壇』pp.208-225, 台北：国立政治大学原住民族研究中心。[査読有]

2019 「特集『地域の食の形成——日本を中心とした産業化の脈絡のなかで』序」『国立民族学博物館研究報告』44(2)：279-289。[査読有]

2019 「台湾社会における甘味を嗜好した飲食文化の形成——砂糖の歴史生態から考える」『国立民族学博物館研究報告』44(2)：407-437。[査読有]

2019 「服飾織物重製と博物館」『消失與重視——博物館織品重製研討會』pp.8-17, 苗栗：苗栗縣原住民工藝協會。

2020 「台湾原住民族パイワン族のアワ利用——社会関係と物質文化を中心に」『歴史と民俗』（神奈川大学日本常民文化研究所論集）36：121-142。

[その他]

野林厚志

2019 「旅の読書室④ 自分がなにものかを教えてくれる旅」『まほら』99：52-53。

2019 「下顎骨を飾る文化」『BIOSTORY』31：32-33。

2019 「持続可能な地球環境は実現できるか」『こころ』51：6-7。

- 2019 「パイワン族の円形鉄鍋とアワ食」『季刊民族学』170：98-105。
- 2019 「共創のための空間——台湾原住民族と国立民族学博物館」『台湾——黒潮でつながる隣ジマ』pp.24-27, 那覇：沖縄県立博物館・美術館。
- 2019 「生業技術の変化の文化的解釈——ハルマヘラ・ガレラ族の漁船の形態からの考察」『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第8回研究大会』pp.79-80, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究B01班。
- 2020 「台湾・タオ族の原住民運動——海の先住民の選択」『季刊民族学』171：32-3。
- 2020 「タオ（台湾）」『特別展 先住民の宝』pp.43-58, 大阪：国立民族学博物館。
- 2020 「生業技術の変化の文化的解釈——ハルマヘラ・ガレラ族の漁船の形態からの考察」『パレオアジア文化史学 計画研究B01班2019年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.19-23, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究B01班（研究課題番号16H06411）。
- 2020 「共同研究『主食論』をはじめるとあたって」『民博通信 Online』1：24-25。

彭 宇潔・高木 仁・野林厚志

- 2019 「パレオアジア民族誌DBの構築に向けて(2)——スンダーサフル生態圏における狩猟用具の素材と形状に着目して」『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第8回研究大会』pp.83-84, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究B01班。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年5月11日 「ベクトルモデルはデータと比較可能か？」パレオアジア文化史学第7回研究大会、名古屋大学
- 2019年5月12日 「パレオアジア民族誌DBの構築に向けて(1)——狩猟技術データ投影の試行」パレオアジア文化史学第7回研究大会、名古屋大学
- 2019年9月3日 「台湾原住民族の生態資源獲得の技術に関する研究——狩猟方法を中心に」第12回台日原住民族研究論壇、国立政治大学原住民族研究中心、台北市、台湾
- 2019年10月19日 「ハルマヘラ島における生態資源利用」みんぱく国際ワークショップ『アジアにおける狩猟採集民——生態学的適応と社会関係』国立民族学博物館
- 2019年11月20日 'Historical Ecology of Bird Augury in Austronesian Culture, Human-bird Entanglements in the Pacific Anthropocene.' AAA/CASCA Annual Meeting, Vancouver Convention Center, Vancouver, Canada
- 2019年12月14日 「パレオアジア民族誌DBの構築に向けて(2)——スンダーサフル生態圏における狩猟用具の素材と形状に着目して」パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第8回研究大会、国立民族学博物館
- 2019年12月14日 「生業技術の変化の文化的解釈——ハルマヘラ・ガレラ族の漁船の形態からの考察」パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第8回研究大会、国立民族学博物館
- 2020年2月29日 「人類集団の肉食——拡大する消費」食の文化フォーラム40周年記念『食の人類史第3回 食の価値観』味の素食の文化センター、東京

・研究講演

- 2019年12月20日 「肉食行為の人類史」南開大学、天津、中国

・展示

- 2018年10月2日～2019年4月14日 「南方共筆 継承される台南風土描写」国立臺灣歴史博物館

・広報・社会連携活動

- 2019年6月16日 「亥年講演会 イノシシとブタ——愛憎の文化史」日本モンキーセンター、愛知
- 2019年7月11日 「台湾原住民族における動物の生命循環」多摩美術大学
- 2019年7月19日 「日本の食文化」中国南開大学、国立民族学博物館
- 2019年9月14日 「台湾座談会——国立民族学博物館と台湾とのつながり」沖縄県立博物館
- 2019年11月14日 「写真アーカイブスの可能性を探る——内田勤コレクションに刻まれた台湾の風景」『写真よ、語れ！台湾と日本——時代と国を超えた民間写真史研究プロジェクトフォーラム』NPO法人 Art Bridge Institute、台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター、東京

◎調査活動

・海外調査

2019年8月20日～8月30日—インドネシア（インドネシア ハルマヘラでの野外調査）

2019年9月2日～9月6日—台湾（台日原住民族研究フォーラムに参加し、台湾原住民族の狩猟技術の研究
成果発表ならびに議論を行う）

2019年11月8日～11月11日—台湾（フォーラム型情報ミュージアムの成果に関するワークショップと招待講演）

2019年11月19日～11月28日—カナダ、アメリカ合衆国（バンクーバーで開催のアメリカ人類学会に参加、トル
マン大学（アメリカ ミズーリ州カークスビル）で狩猟採集社会の通文化アーカイ
ブスの調査）

2019年12月19日～12月22日—中国（人類の肉食行動の進化論的研究に関する講演と研修）

2020年1月4日～1月6日—台湾（順益台湾原住民族博物館にて研究活動の報告と来年度計画に関する懇談）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（5人）、副指導教員（4人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクト
の代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者、科学研究
費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的
モデル構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

生き物文化誌学会理事、アジア太平洋フォーラム・淡路会議アジア太平洋研究賞選考委員、味の素の文化セ
ンター食の文化フォーラム会員、奈良県文化財保存・活用会議委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文
化研究所フィールド・サイエンス・コロキウム運営委員

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ] ————— 教授

1958年生。【学歴】早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修
了（1983）、マギル大学人類学部人類学科博士課程退学（1989）【職歴】早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育
大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学教育学部函館校助教授（1992）、国立民族学博物館第一研究
部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授
（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2005）、
国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、
国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部部長（2009）、国立民族学博物館研究戦
略センター教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センターセンター長（2012）、国立民族学博物館副館長（2013）、
国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長
（2017）、人間文化研究機構本部理事（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（併任）（2018）【学
位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）【専
攻・専門】文化人類学 カナダ・イヌイットの社会変化、都市在住のイヌイットの民族誌的研究、先住民による海
洋資源の利用と管理、アラスカ先住民イヌピアットとカナダ・イヌイットの捕鯨、環北太平洋先住民文化の比較研
究【所属学会】日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族藝術学会、生き物文化誌学会、
函館人文学会

【主要業績】

[単著]

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。

[編著]

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

2007 第18回カナダ首相出版賞

1998 第9回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北アメリカ北方先住民社会におけるホッキョククジラ鯨とシロイルカ鯨の比較研究——獲物の分配を中心に

・研究の目的、内容

北アメリカのアラスカ先住民イヌピアットとカナダ・イヌイットはホッキョククジラを捕獲している。一方、同じ人びとが小型鯨類であるシロイルカも捕獲している。彼らは、国際的なおよび国家の規制や環境・動物保護団体による反捕鯨運動、温暖化などの地球環境の変化の影響を受けながら、これらの捕鯨を実施している。本研究では、グローバル化時代における捕鯨の社会・文化・経済・政治的意義を解明するために、現在の北アメリカ先住民社会におけるホッキョククジラ鯨とシロイルカ鯨の関する比較研究する。とくに、これらの捕鯨の歴史と現状について、狩猟方法と狩猟技術、狩猟集団、産物の分配、クジラと人間の関係をめぐる世界観、捕鯨の文化・社会・経済的意義などに着目しながら比較研究を行なう。

また、2019年度は、科学研究費（基盤研究（A））「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究——伝統継承と反捕鯨運動の相克」（2015年度～2018年度）及び民博共同研究「捕鯨と環境倫理」（2016年度～2019年度）、国際シンポジウム「Whaling Activities and Issues in the Contemporary World」（2018年11月30日～12月1日）の成果を取りまとめ、出版の準備を進める。

・成果

- (1) 北アメリカ北方先住民社会におけるホッキョククジラ鯨とシロイルカ鯨の分配に関する比較研究を行い、論文執筆の準備を行った。大型鯨類と小型鯨類の違いはあるが、現在でもイヌイットやイヌピアットの鯨肉や脂皮が数次にわたり分配され、家族・親族のネットワークに沿って村全体に流通しており、必要な食料源のひとつであることが判明した。論文は2020年度中に完成させる予定である。
- (2) 科学研究費（基盤研究（A））「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究」（2015年度～2018年度、代表者：岸上伸啓）の成果報告書として『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』（SER149号）（国立民族学博物館、2019）を編集し、出版した。同書において「北アメリカ先住民の捕鯨の現状と課題」および「世界の捕鯨に関する最近の研究動向」の2本の論文を出版した。
- (3) 科学研究費（基盤研究（A））「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究——伝統継承と反捕鯨運動の相克」（2015年度～2018年度、研究代表者：岸上伸啓）および民博共同研究「捕鯨と環境倫理」（2016年度～2019年度、研究代表者：岸上伸啓）、国際シンポジウム「Whaling Activities and Issues in the Contemporary World」（2018年11月30日～12月1日開催）の成果として、『捕鯨と反捕鯨のあいだに』と『World Whaling』を取りまとめ、出版準備を完了させた。2020年度内に刊行する予定である。
- (4) クジラと人間の関係の歴史的变化について2019年6月1日に東北大学で開催された日本文化人類学会第53回研究大会にて口頭発表を行なった。また、アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨と食の安全保障・食の主権について、2019年8月末にポーランド国ボズナンで開催された国際人類・民族学連合の中間研究大会（Inter-Congress of IUAES）で口頭発表を行なった。後者は、科学研究費（基盤研究（A））「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」（2019年度）の成果の一部である。その発表に基づいて、生業としての捕鯨はアラスカ先住民イヌピアットの食料の安全保障と食料の主権の両方に貢献しており、混交経済下で生活を営んでいる彼らにとって重要であることを検証した和文論文（「アラ

スカ先住民社会における食料の安全保障と食料の主権について——2010年代のアラスカ州ウットゥキアグヴィク（旧バロー）のイヌピアットの事例を中心に」を『人文論究』第89号（2020年3月）から出版した。

◎出版物による業績

[編著]

岸上伸啓編

2019 『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』（国立民族学博物館調査報告149）大阪：国立民族学博物館。[査読有]

[分担執筆]

岸上伸啓

2019 「世界の捕鯨と捕鯨に関する最近の研究動向」岸上伸啓編『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』（国立民族学博物館調査報告149）pp.5-30，大阪：国立民族学博物館。[査読有]

2019 「北アメリカ先住民の捕鯨の現状と課題」岸上伸啓編『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』（国立民族学博物館調査報告149）pp.85-104，大阪：国立民族学博物館。[査読有]

2020 「クジラ取りの系譜——生業捕鯨と商業捕鯨」秋道智彌・角南篤編『海はだれのものか』（海とヒトの関係学③）pp.52-65，大阪：西日本出版社。

2020 「北西海岸先住民（カナダ）」信田敏宏編『先住民の宝』pp.107-122，大阪：国立民族学博物館。

[論文]

岸上伸啓

2020 「北米アラスカ・北西海岸研究からみた環北太平洋沿岸諸先住民文化の比較研究の展望」北海道立北方民族博物館編『第34回北方民族文化シンポジウム網走 報告 環北太平洋地域の伝統と文化4 アラスカ・ユーコン地域』pp.1-6，網走：北方文化振興協会。

2020 「アラスカ先住民社会における食料の安全保障と食料の主権について——2010年代のアラスカ州ウットゥキアグヴィク（旧バロー）のイヌピアットの事例を中心に」『人文論究』89：59-71。[査読有]

[その他]

岸上伸啓

2019 「米国アラスカ地域の捕鯨文化における気候変動の諸影響——ウットゥキアグヴィクのイヌピアットの事例を中心に」『アークトス』54：1-4。

2019 「人間とクジラの関係の歴史的变化に関する——考察 アラスカ先住民イヌピアットとホッキョククジラを中心に」『第53回日本文化人類学会研究大会発表要旨集』，東京：日本文化人類学会。[査読有]

2019 「環北太平洋地域における先住民文化の比較研究に関する一考察：歴史、現状、未来」『日本シベリア学会第5回研究大会 プログラム発表要旨』p.7，京都：日本シベリア学会第5回研究大会事務局。

2019 「はじめに」『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』（国立民族学博物館調査報告149）pp.1-2，大阪：国立民族学博物館。

2019 「おわりに」『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』（国立民族学博物館調査報告149）pp.213-214，大阪：国立民族学博物館。

2019 「対談：なぜ人は極北をめざすのか」『中央公論』133(10)：172-184。

2019 「環北太平洋沿岸地域におけるカナダ西海岸先住民文化の位置づけ——新たな地域研究の視座」『日本カナダ学会第44回年次研究大会 プログラム・報告要旨』p.23，鹿児島：鹿児島純心女子大学・日本カナダ学会第44回年次研究大会実行委員会。[査読有]

2019 「カナダ・イヌイット社会の歴史と現状、問題点」『歴史地理教育』899：10-15。

2019 「セッションⅢ『先住民』」『日本カナダ学会ニューズレター』114：7-8。

2020 「贈りものってなんだろう？」『Ace（エース）』266：12-13。

2020 「クジラ取りの系譜——生業捕鯨と商業捕鯨」『Ocean Newsletter』468：4-5。

2020 「捕鯨は結局、文化なの？ GHQが許した歴史、TVドラマによる神格化（インタビュー記事）」『Withnews』。

2020 「カナダ先住民のトーテムポール制作とその地域産業化」特集「先住民とアート」『月刊みんぱく』44(3)：6-7。

2020 「コンピュータがひもとく歴史の世界——デジタル・ヒューマニティーズってなに？ 第38回人文機構シンポジウムについて」『NIHU Magazine』47，3月16日。

Kishigami, N.

- 2019 An Argument for Sustainable Whaling: The Case of Alaska's Indigenous Peoples. *JAPAN Forward: Real Issues, Real Voices, Real JAPAN*. Tokyo: JAPAN Forward Association, Inc.
- 2019 Food Security and Sovereignty Problems among the Inupiat in Utqiagvik, Alaska, USA. *Abstract of IUAES 2019 Inter-Congress "World Solidarities"* pp.95-96. Poznan: The Organizing Committee of the 2019 Inter-Congress "World Solidarities".
- 2020 38th NIHU Symposium, Worlds of History Opened Up by Computers: Considering the Digital Humanities. *NIHU Magazine* 47. Tokyo: National Institutes for the Humanities.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

- 2020年1月25日 「コンピュータで読む人間文化」第38回人間文化研究機構シンポジウム『デジタル・ヒューマニティーズってなに——コンピュータがひもとく歴史の世界』日比谷図書文化館・日比谷コンベンションホール（大ホール）

・共同研究会での報告

- 2020年2月16日 「捕鯨をめぐる世界の動きと諸問題」『捕鯨と環境倫理』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年6月1日 「人間とクジラの関係の歴史的变化に関する一考察——アラスカ先住民イヌピアットとホッキョククジラを中心に」日本文化人類学会第53回研究大会、東北大学
- 2019年6月2日 「分科会『「布施」とは何か』全体へのコメント」日本文化人類学会第53回研究大会、東北大学
- 2019年6月8日 「環北太平洋地域における先住民文化の比較研究に関する一考察——歴史、現状、未来」日本シベリア学会第5回研究大会、同志社女子大学
- 2019年8月29日 'Food Security and Sovereignty Problems among the Inupiat in Utqiagvik, Alaska, USA.' IUAES 2019 Inter-Congress "World Solidarities", Adam Mickiewicz University, Poznan, Poland
- 2019年9月8日 「環北太平洋沿岸地域におけるカナダ西海岸先住民文化の位置づけ——新たな地域研究の視座」日本カナダ学会第44回年次研究大会、鹿児島純心女子大学
- 2019年10月5日 「北米アラスカ・北西海岸研究からみた環北太平洋沿岸諸先住民文化の比較研究の展望」第34回北方民族文化シンポジウム網走『環北太平洋地域の伝統と文化4 アラスカ・ユーコン地域』オホーツク文化交流センター
- ・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）
 - 2019年11月24日 「極北の極寒に耐えるイヌイット——毛皮服の秘密」国立民族学博物館コレクション『世界のかわいい衣装』ギャラリートーク、阪急うめだ本店

◎調査活動

・海外調査

- 2019年8月7日～8月19日—カナダ（カナダ北西海岸先住民クワクワクウとハイダの社会変化に関する現地調査）
- 2019年8月25日～9月1日—ポーランド（ポズナン開催の国際人類学・民族学会中間会議（2019 IUAES Inter-Congress）での研究発表と Adam Mickiewicz University 文化人類学・民族学部での社会変化に関する人類学的研究方法・理論の調査）
- 2020年2月21日～2月24日—カナダ国ブリティッシュ・コロンビア州キャンベルリバー（カナダ・バンクーバー島における先住民によるトーテムポールおよびその制作に関する調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

早稲田大学博士論文審査委員、日本カナダ学会理事・副会長、日本文化人類学会日本文化人類学会第28期評議

員、Journal of Anthropological Research Editorial Board Associate Editor、北極環境研究コンソーシアム (JCAR) 北極環境研究コンソーシアム (JCAR) 第4期運営委員、民族藝術学会理事、ArCS北極域研究推進プロジェクト評議会委員、北海道大学北極域研究センター北極域研究共同推進拠点運営委員会委員

笹原亮二 [ささはら りょうじ] ————— 教授

1959年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒 (1982)、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士後期課程退学 (1995)、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士前期課程修了 (1995) 【職歴】国立民族学博物館第一研究部助手 (1996)、国立民族学博物館民族文化研究部助手 (1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授 (2001)、国立民族学博物館民族文化研究部教授 (2011)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授 (2017) 【学位】博士 (歴史民俗資料学) (神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 2001)、修士 (歴史民俗資料学) (神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 1995) 【専攻・専門】民俗学、民俗芸能研究 日本の獅子舞の民俗学的研究、日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究、民俗学における資料論 【所属学会】日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

[単著]

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

[編著]

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化——文字の民俗学 声の歴史学』京都：思文閣出版。

[論文]

笹原亮二

2005 「用と美——柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司編『柳宗悦と民藝運動』pp.273-294, 京都：思文閣出版。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

地域の歴史文化研究における民俗誌の有効性

・研究の目的、内容

日本列島の各地では、平地・山間・沿岸などの立地、寒冷地・温暖地などの気候、農業・林業・水産業などの生業など、様々な面で多様性に富む数多くの地域社会が存在し、そこでは大勢の人々の多種多様な生活が営まれてきた。そうした地域社会や人々の生活は一朝一夕に形成されたわけではなく、そこに住む人々が、その時々での社会や環境などの変化と密接に関わりながら世代を重ねる間に、人々の暮らしが重層的に蓄積したり、取捨選択されたり、混交したりして形成されてきた歴史文化といえる。

近年、震災や豪雨被害などの大規模災害や急速な少子高齢化による地方の過疎化などにより、高度経済成長を初め、過去の急激な社会の変化の時以上に、地域社会の疲弊や存続の危機が各方面から指摘されるようになった。そんな中で、地域社会を将来的にいかに関係させたり再生させたりしていくか、そのための手がかりや参照点として、慣習的な互助組織、信仰行事、祭礼、民俗芸能などの地域の歴史文化が注目を集めるようになってきた。

民俗学は、明治維新以来の近代化という社会全体の一元的で強力な変化に各地の地域社会が巻き込まれ、人々の生活も様々な面で急激な変化を余儀なくされる状況に直面して、歴史文化としての各地の人々の生活の種々相の詳細な記録、即ち民俗誌の作成を通じ、地域社会のよりよいかたちでの将来的な存続や再生に資することを目標の一つとしてきた。本研究では、従来の民俗学の民俗誌作成の試みについて検討を行い、それが近年の地域社会における歴史文化研究の方法としていかに有効性を持ちうるかを考えてみたい。

本研究の実施にあたっては、申請者が研究代表者の科学研究費（基盤研究（C））「本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究」、及び人間文化研究機構広域連携型機関研究プロジェクト「地域における歴史文化研究拠点の構築」と連携して進める。

・成果

本研究では、新潟県佐渡島に関する柳田国男『北小浦民俗誌』（1947）と福田アジオ他「北小浦の民俗」（『柳田国男の世界 北小浦民俗誌を読む』2001所収）の二つの民俗誌、及び、沖縄県域で盛んに刊行されている字誌（地域誌）について、それぞれの作成の経緯・現地との関係・記述の内容・記述の方法などの特徴を検討し、相互に比較を行い、民俗誌・地域誌の地域社会における歴史文化研究の方法としての有効性の検討を行った。

柳田国男『北小浦民俗誌』は、倉田一郎の現地調査の「採集手帖」や『佐渡海府方言集』などの著作、柳田自身の佐渡での見聞を基に、北小浦という一地域を全国的な視野から記述を試みている。記述の基本は歴史的な視角で、社会や生活の歴史の変遷の提示が試みられ、断定を避けた論述、推論や仮説や課題の提示、柳田が考える民俗学や民俗誌の方法が主張されている。福田アジオ他「北小浦の民俗」は、北小浦の社会や生活の様相を福田らが自らの現地調査の成果を基に記したもので、近年の民俗調査報告書と同様の項目立てで地域の全体像の提示が試みられている。内容は北小浦に関することに限られ、ほとんどが聞き取った過去の様相の再現で、中立的な調査資料の提示に終始している。沖縄県域の字誌は地域の歴史や風俗習慣などについて地域の人々自らが記している。各地の字誌には、地域の歴史や文化の後世への継承やよりよい地域の将来の実現という刊行の目的、移民や米軍基地などの地域の人々の興味関心に関する記述、住民の名簿などの地域の関係者向けの個人情報掲載といった共通点がみられる。

これらの民俗誌や字誌には様々な違いが認められる。特に地域との関係では、地域内外の研究者や地域住民などの誰を読者に想定しているかという点で異なるが、両者の関係は字誌が最も密接である。地域の人々自らの執筆、よりよい地域の実現という刊行の目的といった字誌の特徴は、柳田国男の郷土研究や民俗学の主張に通じる。更に、各地の字誌の刊行に指導的役割を果たした名護市史編纂室の存在も注目される。それらを考慮すると、民俗誌の作成を、地域との関係が密接な字誌のありようを参照しつつ、地域の歴史文化研究の方法として再構成を試みるのが有効ではないかと思われた。

本研究の成果は、「課題としての地域の歴史や文化の記述——二つの民俗誌と字誌を巡る小考（仮題）」として『国立歴史民俗博物館研究報告 特集号』に投稿の予定である。

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（研究代表者：福岡正太）研究分担者

寺田吉孝 [てらだ よしたか] ————— 教授

【学歴】 ワシントン大学総合学部学士課程修了（1979）、ワシントン大学音楽部民族音楽学科修士課程修了（1983）、ワシントン大学音楽部民族音楽学科博士課程修了（1992）【職歴】 ワシントン大学音楽部講師（1994）、ピッツバーグ大学船上大学プログラム講師（1995）、国立民族学博物館第2研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2012）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）【学位】 Ph. D.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1992）、M. A.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1983）【専攻・専門】 民族音楽学【所属学会】 東洋音楽学会、Society for Ethnomusicology、International Council for Traditional Music、British Forum for Ethnomusicology

【主要業績】

[編著]

Terada, Y. (ed.)

2008 *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71). Osaka: National Museum of Ethnology.

2001 *Transcending Boundaries: Asian Musics in North America* (Senri Ethnological Reports 22). Osaka:

National Museum of Ethnology.

【論文】

Terada, Y.

2000 T. N. Rajarattinam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music. *Ethnomusicology* 44(3): 460-490.

【受賞歴】

2000 Jaap Kunst Award (Society for Ethnomusicology, USA)

【2019年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

1. パフォーミング・アーツによる共生社会実現の可能性
2. 映像音響メディアの特質と活用の可能性の再検討

・研究の目的、内容

- 1) 音楽・芸能などに代表されるパフォーミング・アーツは身体を媒体とし実践されるため、視覚中心的な認識体系とは異なる人間の知覚・思考形態に作用すると考えられ、人間の感情に大きな影響を与えることが報告されている。しかし、その一方で、感情に作用するパフォーミング・アーツの力が、偏狭な国家主義、民族主義、性差別主義などに利用されてきたこともまた事実である。そこで、本研究では、パフォーミング・アーツが共生の達成に寄与する枠組みや条件を、具体的な事例の蓄積と比較検討から探りたい。なお、本研究は民博特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」(2017年度～2019年度)と連動させて推進するものである。
- 2) 映像音響メディアは、音や動きなど文字媒体による描写・分析が困難な対象の記録・分析に優れているため、これまでも音楽・芸能の研究だけでなく継承・保存のツールとして頻繁に用いられてきた。また近年は、安価で高性能な映像機器・編集ソフトの登場により、人類学をはじめとする幅広い研究領域で映像番組の制作が活発に行なわれている。また、人類学では制作者と取材対象者の関係が根本的に見直され、それを反映する新しい映像制作手法も開発されつつあるが、概ね映像作品の制作を重視するあまり、その活用に関しての議論は遅れている。研究における映像音響メディアの活用は、様々な形態が考えられる。本研究では、映像の上映と多様なオーディエンスとの議論を積み重ねることから映像音響メディアの活用方法を検討するものである。

・成果

- 1) 特別研究の国際シンポジウムを年度末に行うべく準備を進めた。8月6日に準備研究集会を開き、国際共同研究員であるデボラ・ウォン教授(カリフォルニア大学リヴァーサイド校)を含めシンポジウム出席予定者3名が研究発表を行い、特別研究の研究テーマに関する討論を行った。この準備集会での議論の一部を、*MINPAKU Anthropology Newsletter* (49号, 2019年12月)の特集号で紹介した。エッセイの著者とタイトルは以下の通りである。

1. Terada, Yoshitaka, "Performing arts and conviviality" (1-3)
2. Nakamura, Mia, "Musical conviviality in the otto & orabu ensemble" (3-5)
3. Urbain, Olivier, "Musicking conviviality, solidarity and peacebuilding" (6-8)
4. Wong, Deborah, "Intension, connection and convivencia" (8-11)

新型コロナウイルス感染症の拡散防止のために国際シンポジウムが延期されたため、期待されていた成果は次年度以降に持ち越されたが、準備研究集会や国際研究協力者らとの継続的な議論を通して、シンポジウムで検討すべき論点を整理することができた。

- 2) 民博製作映像番組「アリラン峠を越えていく——在日コリアンの音楽」の上映会を、日本(大阪、東京、福岡など)、韓国(光州、全州、釜山、坡州)、中国(上海)、タイ(バンコク)、カナダ(シドニー)、チェコ(プラハ)の6ヶ国で計16回開催し、アンケートや上映後の討論などから番組の活用方法について理解を深めることができた。また、韓国における4回の上映会では、韓国における在日コリアンについての認識が極めて低いことや、そのような状況を改善するために映像番組が一定の役割を果たしうることが明らかになった。さらに同番組は、韓国の国楽TV(インターネット配信のテレビ放送局)で2020年1月に放映され、個別の上映会よりも幅広い層に観てもらうことができた。

◎出版物による業績

[共編]

Jähnichen, G. and Y. Terada (eds.)

2019 *Double Reeds Along the Great Silk Road*. Berlin: Logos Verlag Berlin. [査読有]

[分担執筆]

Terada, Y.

2019 Charumera and the Representation of the Other in Japan. In G. Jähnichen and Y. Terada (eds.) *Double Reeds Along the Great Silk Road*, pp.185-198. Berlin: Logos Verlag Berlin. [査読有]

[その他]

寺田吉孝

2019 「村人と一緒に演奏する」『月刊みんぱく』43(12)：10-11。

Terada, Y.

2019 Traveling Music: The South Asian String Instruments. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 48: 10-11.

2019 Performing Arts and Conviviality. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 49: 1-3.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・展示

2019年2月21日～5月7日「旅する楽器——南アジア、弦の響き」国立民族学博物館本館企画展示場

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年4月7日「南アジアの弦楽器」第538回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2019年5月12日～5月17日—韓国（全南大学校、全北大学校における民博制作映像番組「アリラン峠を越えてゆく——在日コリアンの音楽」（韓国語字幕版）の上映と討論）

2019年7月8日～7月18日—タイ（国際伝統音楽学会（ICTM）第45回世界大会への出席と民博制作映像番組“Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Music”（76分、2018年）の上映）

2019年8月25日～8月31日—中国（上海音楽学院で開催された1st China Music Ethnographic Film Exhibitionへの参加と、民博制作映像番組Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Musicの上映）

2019年9月20日～9月23日—韓国（京畿道高陽市で開催された第11回「DMZ国際ドキュメンタリー映画祭」での民博制作映像番組 Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Musicの上映）

2019年10月6日～10月14日—カナダ（ケープブレトン大学で開催されたコロキウム Songs and Stories of Migration and Encounterへの参加と、コロキウム前日に開催された映画祭で民博制作映像番組 Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Musicの上映）

2019年10月25日～10月29日—韓国（釜山大学で開催されたシンポジウムへの参加と、民博制作映像番組 Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Musicの上映）

2019年12月26日～2020年1月9日—インド（南インド古典音楽・舞踊における在外タミル人の活動に関する実態調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「南アジアにおける女性芸能者の特質とスティグマに関する文化人類学的研究」（研究代表者：田森雅一（東京大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（研究代表者：福岡正太）研究分担者、国立民族学博物館特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型

基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点 (MINDAS)」(拠点代表者：三尾 稔) 拠点構成員

山中由里子 [やまなか ゆりこ] ————— 教授

1966年生。【学歴】カラマズー大学フランス語美術専攻卒(1988)、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了(1991)、東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学(1993)【職歴】東京大学東洋文化研究所助手(1993)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助手(2004)、国立民族学博物館民族文化研究部准教授(2009)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授(2017)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授(2019)【学位】学術博士(東京大学 2007)、学術修士(東京大学 1991)【専攻・専門】比較文学比較文化 西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究、「驚異」の文化史【所属学会】日本比較文学会、日本中東学会、オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会、International Society for Iranian Studies

【主要業績】

[単著]

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

山中由里子編

2015 『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会。

[共編]

Yamanaka, Y. and T. Nishio (eds.)

2006 *The Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West*. London: I. B. Tauris.

【受賞歴】

2011 第7回日本学士院学術奨励賞

2011 第7回日本学術振興会賞

2010 第15回日本比較文学会賞

2010 島田謹二記念学藝賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

想像界の生きものたちに関する比較研究

・研究の目的、内容

常識や慣習から逸脱した「異」なるもの(異境・異界・異人・異類・異音)をめぐる人間の心理と想像力の働きを「驚異」と「怪異」をキーワードに、比較文明論的な視点から考察する。自然界のどのような現象が「驚異」や「怪異」として認識され、どのような言説や視覚表象物が現れたのか、その背景にはどのような自然観があるのか、知識体系に接点はあるのかといった点に注目し、ユーラシアにおける人間と自然の相関関係の歴史の変遷を多元的視点から究明するとともに、生態系と人間の想像力と表象物の相関関係を、より広い人類史的な視点からも検証する。

・成果

本研究は、科学研究費(基盤研究(A))「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」(代表：山中由里子)の補助金、科学研究費(新学術領域研究(研究領域提案型))「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」(代表：野林厚志)および科学研究費(基盤研究(C))「ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承——中東および古代・近世との関わり」(代表：大沼由布)と関連付けて上記の内容の各個研究を実施した。

研究の成果は、2019年8月29日～11月26日に開催した特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」において一般公開し、世界各地の幻獣表象の地域的特徴や共通性を明らかにした。特別展はNHK日曜美術館のアー

トシーン、BSフジのガリレオXをはじめ、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌・ウェブマガジンなどの多くのメディアで取り上げられ、3ヶ月の会期中に入館者数が78,682人に達した。社会的に多大な反響を呼んだこの展示の図録『驚異と怪異——想像界の生きものたち』（河出書房新社、2019年）は4刷され、第61回全国カタログ展において図録部門の金賞「経済産業省商務情報政策局長賞」を、さらに日本タイポグラフィ年鑑2020のエディトリアル部門で審査員賞を受賞した。

この他、山中由里子・山田仁史共編『この世のキワ——〈自然〉の内と外』（勉誠出版、2019年）を刊行した。

◎出版物による業績

[編著]

山中由里子編

2019 『驚異と怪異——想像界の生きものたち』東京：河出書房新社。

[共編]

山中由里子・山田仁史編

2019 『この世のキワ——〈自然〉の内と外』（アジア遊学239）東京：勉誠出版。

[論文]

山中由里子

2019 「自然界と想像界のあいにある驚異と怪異」山中由里子・山田仁史編『この世のキワ——〈自然〉の内と外』（アジア遊学239）pp.4-16, 東京：勉誠出版。

[その他]

山中由里子

2019 「想像界の生態系」特集「驚異と怪異——想像界の生きものたち」『月刊みんぱく』43(8)：2-3。

2019 「ソフィア 京都新聞文化会議691老いも若きも『怖い』大好き」『京都新聞』12月27日。

◎映像音響メディアによる業績

・TV・ラジオ番組などの制作・監修

山中由里子監修・出演

2019年10月13日 「ガリレオX 驚異と怪異 知的好奇心を生みだした不思議と常ならざるもの」BSフジ

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究公演

2019年9月29日 「能と怪異（あやかし）」（特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」国立民族学博物館、エントランスホール（本館1階）

・展示

2019年8月29日～11月26日 「驚異と怪異——想像界の生きものたち」国立民族学博物館特別展示館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年9月1日 「特別展『驚異と怪異——想像界の生きものたち』第553回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年11月9日 「ワンダーストラック」（みんぱく映画会 みんぱくワールドシネマ）セミナー室

◎調査活動

・海外調査

2019年5月9日～5月27日—ドイツ（REDIM (Dynamiken religiöser Dinge im Museum 博物館における宗教的モノのダイナミクス) プロジェクト)

2019年6月26日～7月2日—フランス（シンポジウム「ペルシア語文化圏における語りの諸相」参加）

2020年3月13日～4月17日—ドイツ（驚異に関する文献および博物館調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「ヨーロッパ中世にお

ける博物学的知識の伝承——中東及び古代・近世との関わり」(研究代表者:大沼由布(同志社大学))研究分担者、科学研究費(基盤研究(B))「日本文化の対話的発展の比較文学的研究——世界のポップ・テキストをめぐって」(研究代表者:平石典子(筑波大学))研究分担者、科学研究費(基盤研究(A))「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」(拠点代表者:西尾哲夫)拠点構成員

伊藤敦規 [いとう あつり] ————— 准教授

1976年生。【学歴】東京都立大学人文学部卒(2000)、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学修士課程修了(2003)、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学(2009)【職歴】国立民族学博物館特別共同利用研究員(2007)、三重大学人文学部非常勤講師(2008)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員(2008)、Visiting Researcher of the A:shiwi A:wam Museum and Heritage Center(2009)、立教大学兼任講師(2009)、日本学術振興会特別研究員PD(2009)、国立民族学博物館外来研究員(2009)、三重大学人文学部非常勤講師(2010)、東北大学東北アジア研究センター共同研究員(2010)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員(2010)、国立民族学博物館平成22年度文化資源プロジェクト共同研究員(2010)、国立民族学博物館若手共同研究員(2010)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教(2011)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員(2012)、国立民族学博物館研究戦略センター助教(2012)、Research Associate of the Museum of Northern Arizona Research Associate(2015)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授(2016)、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授(2016)、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授(2016)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授(2017)、東北大学大学院文学研究科非常勤講師(2019)【学位】博士(社会人類学)(東京都立大学 2011)、修士(社会人類学)(東京都立大学 2003)【専攻・専門】社会人類学、米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族藝術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本知財学会、American Anthropological Association、デジタルアーカイブ学会

【主要業績】

[編著]

伊藤敦規、キャシー・ドーハーティ、ケレイ・ハイズ=ギルピン編

2020 『北アリゾナ博物館収蔵446点の「ホピ製」銀細工および関連資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」4』(国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集4)大阪:国立民族学博物館。[査読有]

伊藤敦規編

2020 『国立民族学博物館収蔵186点の「ホピ製」資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」3』(国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集3)大阪:国立民族学博物館。[査読有]

[論文]

Hays-Gilpin, K., A. Ito, R. Breunig

2020 Decolonizing Museum Catalogs: Defining and Exploring the Problem. *TRAJECTORIA 1*. Osaka: National Museum of Ethnology.

【受賞歴】

2019 座長が推すベスト発表(デジタルアーカイブ学会の優秀学会発表賞制度)2019年3月16日第3回研究大会(京都大学)[A12]伊藤敦規「民族誌資料のデジタルアーカイブ化にかかる諸問題」に対して。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本国内博物館等所蔵アメリカ先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的、内容

本研究は五年計画(2016~2020年度)で実施する。その目的は、第一に日本国内の博物館等が所蔵するアメリカ先住民資料の来歴、情報管理、保存状況を総合的に把握することである。第二の目的は日本国内での調査結果をソースコミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第三の目的

は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館等と共有することによって、今後の資料管理に反映される協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。なお、調査対象機関を、松永はきもの資料館（広島）、柏木博物館（長野）、豊島みみずく資料館（東京）、猪熊源一郎現代美術館（香川）、野外民族博物館リトルワールド（愛知）、天理大学附属天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）などとする。また、資料調査対象とする民族集団はホピを中心とする。

四年度となる2019年度の計画は以下であった。

日本国内での博物館調査研究を継続するとともに、現在リニューアルオープンに向けて休館中の柏木博物館の資料熟覧の受入体制が整い次第、収蔵資料の撮影を行い、ソースコミュニティ（ホピの人びと）と共に資料熟覧を行う。さらに、米国南西部先住民の保留地に赴き、地元の多様な人々との調査成果の共有を図り、今後に向けた資料管理の要望などに関する聞き取り調査を実施する。加えて、米国ニューメキシコ州立大学附属博物館での展示会で成果を発表する（『Living in Sacred Continuum』、2019年4月26日～2019年12月15日）。成果出版に関しては、これまでに実施してきた資料熟覧の記録をまとめ、国立民族学博物館の刊行物としての成果公開を引き続き目指す。

・成果

科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（国際共同研究強化）』（研究課題番号：15KK0069）と連動させて、調査を継続して行った。編著（伊藤敦規編『国立民族学博物館収蔵186点の「ホピ製」資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」3』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集3））や共編著（伊藤敦規、キャシー・ドーハーティ、ケレイ・ハイズ＝ギルピン編『北アリゾナ博物館収蔵446点の「ホピ製」銀細工および関連資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」4』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集4））を刊行した。また、査読付きの国際ジャーナルに特集論文が（*TRAJECTORIA* 創刊号）、国内学会誌のリニューアル創刊号の特集の一部として論文が掲載された（『arts/（民族芸術学会誌リニュアル創刊号）』）。米国ニューメキシコ州立大学附属博物館での展示会（『Living in Sacred Continuum』、2019年4月26日～2019年12月15日）も行い、開幕式を兼ねたシンポジウムにも参加した。民博本館展示場（アメリカ展示場）の展示更新の一部として、成果を公開することもできた。さらに、民博本館展示場（多機能端末室）にて、ソースコミュニティ（ホピの人々）による資料語りの映像を視聴できる環境を整えた。それにより、モノと人との代替不可能なつながりを来館者に提示することができ、ソースコミュニティの立場に立った「フォーラムとしてのミュージアム」の一つの姿を提示することができた。

◎出版物による業績

[編著]

伊藤敦規、キャシー・ドーハーティ、ケレイ・ハイズ＝ギルピン編

2020 『北アリゾナ博物館収蔵446点の「ホピ製」銀細工および関連資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」4』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集4）大阪：国立民族学博物館。[査読有]

伊藤敦規編

2020 『国立民族学博物館収蔵186点の「ホピ製」資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」3』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集3）大阪：国立民族学博物館。[査読有]

[論文]

伊藤敦規

2020 「本著の概要と民博収蔵『ホピ製』資料の来歴」伊藤敦規編『国立民族学博物館収蔵186点の「ホピ製」資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」3』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集3）pp.1-7, 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

2020 「北アリゾナ博物館収蔵『ホピ製』銀細工および関連資料の熟覧調査の概要」伊藤敦規・キャシー・ドーハーティ・ケレイ・ハイズ＝ギルピン編『北アリゾナ博物館収蔵446点の「ホピ製」銀細工および関連資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」4』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集4）p.4, 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

2020 「共有されるアートをめぐる記憶」『民族芸術学会誌 arts/』36(1)：70-73。

Hays-Gilpin, K., A. Ito, and R. Breunig

2020 Decolonizing Museum Catalogs: Defining and Exploring the Problem (Special Theme: An Ap-

proach of the Info-Forum Museum: To Create a Source Community-driven Multivocal Museum Catalog). *TRAJECTORIA* 1. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Ito, A.

- 2020 Outline of This Report and Provenance of Objects Labeled “Hopi” in National Museum of Ethnology. In A. Ito (ed.) *Collections Review on 186 Items Labeled “Hopi” in the National Museum of Ethnology: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 3* (Info-Forum Museum Resources 3), pp.9-17. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2020 Brief Overview of the “Reconnecting Project” on the Silverworks and Related Items Labeled “Hopi” in the Museum of Northern Arizona. In A. Ito, K. Dougherty, and K. Hays-Gilpin (eds.) *Collections Review on 446 Silverworks and Related Items Labeled “Hopi” in the Museum of Northern Arizona: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 4* (Info-Forum Museum Resources 4), pp.21-43. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2020 Introduction (Special Theme: An Approach of the Info-Forum Museum: To Create a Source Community-driven Multivocal Museum Catalog). *TRAJECTORIA* 1. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎映像音響メディアによる業績

・その他、映像メディアによる業績（論文型映像を含む）

Ito, A. (Production)

- 2020 *Demonstrational Lecture of the Collections Review Research by Cynthia Chavez Lamar and Jim Enote* (英語、31: 51)
- 2020 *Denver Museum of Nature & Science, A1713.26, 2017/1/18* (英語、17: 03)
- 2020 *Museum of Northern Arizona, E11060, 2015/7/22* (英語、03: 12)
- 2020 *Museum of Northern Arizona, E11286, 2015/12/10* (英語、14: 27)
- 2020 *National Museum of Ethnology, H0281581, Jerolyn Honwytewa, 2018/11/18*. (英語、01: 02)
- 2020 *Reviewers’ Self-Introduction and Remarks, Gerald Lomaventema, 2015/7/22* (英語、03: 03)
- 2020 *Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project,” Delwyn “Spyder” Tawvaya, 2017/01/16, Denver Art Museum* (英語、04: 11)

伊藤敦規 監修

- 2019 「国立民族学博物館, 027-0162 (D1), 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、0分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, 027-0162 (D18), 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、0分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, 027-0162 (D28), 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、0分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, 027-0162 (D9), 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、0分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0012267, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、12分29秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0012270, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、8分06秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0012289 H0075653～H0075656, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、12分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0012293 H0114976 H0114977, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、6分04秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0012295, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、6分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0033962, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、7分41秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0033963, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、1分51秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0033964, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、1分48秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0033965, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、1分50秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0036155, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、2分26秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074755, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分17秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074756, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、2分27秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074769, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、1分55秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074771, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、3分04秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074772, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、8分57秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074773, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、6分59秒)

- 2019 「国立民族学博物館, H0074785, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、3分11秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074786 H0074787, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、6分21秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074792, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、2分11秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074794 H0074793, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、7分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074797, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、3分49秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074798~H0074803, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分35秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074804, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分56秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074807, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、3分30秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074817, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分02秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074822, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分31秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074849, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、6分57秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074850, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、7分24秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074851, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分48秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074852, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、10分31秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074853, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、5分43秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074854, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、5分43秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074855, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、8分47秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074856, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、5分00秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074857, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分30秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074858, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分16秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074890, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分03秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074901, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分03秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074943~H0074948, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、5分09秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075658 H0075657 H0012288 H0075667 H0083264, 個人コメント, 2015/04/23」
(英語・日本語、14分55秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075659, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、3分20秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075665 H0075021, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、3分29秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075666 H0075751 H0075835 H0075851, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、14分04秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075680 H0036153 H0114988, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、5分20秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075702, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分54秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075702, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、5分55秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075717, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、8分29秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075721, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分21秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075722, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、9分40秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075727 H0075715, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、9分02秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075731, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、8分27秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075772, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、2分55秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0083200, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、5分23秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0083205, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、2分43秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0083229, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、3分29秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0083250, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分24秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0083344~H0083348, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、0分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0085648, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、7分44秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0085649, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、6分23秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0085650, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、6分02秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0114978 H0114979, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、2分32秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0115019, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、4分09秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268549, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、11分25秒)

- 2019 「国立民族学博物館, H0268550, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、10分21秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268551, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、9分58秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268552, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、9分15秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268553, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分24秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268553, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、9分28秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268554, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、11分25秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268555, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、9分34秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268557, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、7分44秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268558, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、7分49秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268559, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、5分41秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268560, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、7分07秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268561, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、10分07秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268562, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、9分04秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268571, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、7分20秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268573, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、9分07秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268574, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、13分39秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268575, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、11分58秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268576, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、6分48秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268577, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、16分49秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268578, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、18分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268579, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、8分26秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268580, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、11分38秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268581, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、6分26秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268582, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、9分04秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268583~H0268630, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、41分56秒)
- 2019 「国立民族学博物館, 自己紹介・『再会』プロジェクトについて ジェロ・ロマベンティマ 2015/11/11」(英語・日本語、1分42秒)
- 2019 「国立民族学博物館, 自己紹介・『再会』プロジェクトについて マール・ナモキ 2015/11/12」(英語・日本語、1分42秒)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年4月18日 'Minpaku Info-Forum Museum Project: Reconnecting Source Community with Museums.' KAKENHI Project meeting (15KK0069), National Museum of Ethnology, Japan
- 2019年7月25日 「国立民族学博物館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト——デジタル化の目的」科 研費研究会 (15KK0069)、国立民族学博物館
- 2019年10月24日 'Revitalization of Hopi Jewelry through the Museums Collections Review.' Hopi Artist Workshops on Living in Sacred Continuum exhibition, New Mexico State University Museum, New Mexico, United States
- 2019年11月27日 「民族誌資料にかかるコンプライアンス——ソースコミュニティへの配慮の重要性和協働の可能性を事例として」『天理大学 研究倫理・コンプライアンス研修』天理大学2号棟

・展示

- 2019年4月26日~12月15日 'Living in Sacred Continuum.' New Mexico State University, American Indian Student Center
- 2020年3月5日 「本館展示場アメリカ展示新構築」国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

- 2019年4月21日~7月2日一アメリカ合衆国(標本資料画像の公衆送信のための著作権者探しと許諾取得の交渉、北アリゾナ博物館などでの資料調査等)

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員、Visiting Researcher of the A:shiwi A:wana Museum and Heritage Center、Research Associate of the Museum of Northern Arizona

齋藤玲子 [さいとう れいこ] ————— 准教授

1966年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1989）【職歴】北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）【専攻・専門】文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸【所属学会】日本文化人類学会、北海道民族学会

【主要業績】

[編著]

齋藤玲子編

2015 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイトおよび北西海岸先住民の版画コレクションをととして』（国立民族学博物館調査報告131）大阪：国立民族学博物館。

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶——イヌイトと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

[論文]

齋藤玲子

2012 「アイヌ工芸の200年——その歴史概観」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート（先住民アート・プロジェクト報告書）』pp.45-60、札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化の継承と社会的背景の研究

・研究の目的、内容

本テーマは、当館の共同研究やフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトなどを関連させながら、2014年度から続けており、2019年度まで継続予定である。アイヌ民族は、江戸時代中ごろから徐々に和人の支配下におかれ、時代を経るにつれて独自の文化の継承は次第に困難になった。しかし、現在も形を変えながらも多くの文化要素が受け継がれている。こうしたアイヌ文化の継承と当時の社会状況との関係について、とくに物質文化に注目し、研究を続けている。最終的に、物質文化が記録の多く残る江戸時代後期からどう変化してきたかを明らかにし、現代のアイヌ文化の位置づけを示すことを目指す。

本年は、近現代の文学や漫画などにおけるアイヌの描かれ方と、アイヌ民族のおかれた社会的立場の変遷等について研究する。

また、引き続き科学研究費（基盤研究（B））「アイヌ民族の衣文化交流——博物館資料から北東アジア史を見直す」（佐々木史郎代表・2017～2019年度）の研究分担者としてアイヌの織物資料の比較研究等をおこなう。

さらに、（公財）アイヌ民族文化財団の研究助成を受け、木彫家・藤戸竹喜氏（1934-2018）の未公開作品等の調査をし、同氏の業績をまとめた追悼集の刊行準備をおこなう。

・成果

物質文化の継承と社会的背景の研究成果の一つとして、池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史』に「現代アイヌのタマサイ」を執筆した。内容は、江戸時代の風俗画などにも頻りに描かれ、女性の宝とされたガラス玉の首飾りが、明治以降に儀式がおこなわれなくなり着用機会が減少するなかで、換金のために手放されるなどして継承されていない場合が多いものの、特別な思い入れをもって受け継いでいる例や、復元の動き

があることなどを報告した。これは、共同研究および北東アジア地域研究の成果でもあり、特別展の図録には書ききれなかった事例も盛り込むことができた。

このほかの研究成果は以下のとおりである。

- ・フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの「民博所蔵アイヌ民族資料データベース」を館内公開した。
- ・特別展「先住民の宝」で「アイヌ」の展示を担当した。また、信田敏宏編『先住民の宝』（同展図録）で「アイヌ（日本）」を執筆した。
- ・佐々木史郎編『アイヌ・北方諸民族の衣文化と織布文化』（科研費報告書）に「オヒョウとシナノキの樹皮繊維製織布に関する覚え書き」を寄稿した。
- ・五十嵐聡美と共編で『木彫家・藤戸竹喜——その人と業績に関する研究』（アイヌ民族文化財団助成研究報告書）を発行した。

◎出版物による業績

[編著]

齋藤玲子・五十嵐聡美編

2020 『木彫家・藤戸竹喜——その人と業績に関する研究』大阪：藤戸竹喜氏業績研究会（代表：齋藤玲子・国立民族学博物館）。

[分担執筆]

齋藤玲子

2020 「現代アイヌのタマサイ——文化のシンボルとしてのビーズ」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史』pp.255-267, 京都：昭和堂。

2020 「アイヌ（日本）」信田敏宏編『先住民の宝』pp.141-172, 大阪：国立民族学博物館。

2020 「オヒョウとシナノキの樹皮繊維製織布に関する覚え書き」佐々木史郎編『アイヌ・北方諸民族の衣文化と織布文化——日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究B「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（2014年度～2016年度）日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究B「アイヌ民族の衣文化交流：博物館資料から北東アジア史を見直す」（2017年度～2019年度）報告書』pp.88-92, 白老：国立アイヌ民族博物館設立準備室・東京：東京国立博物館。

[その他]

齋藤玲子

2019 「千島アイヌの暦」『季刊民族学』168：72。

2019 「泣く子をだまらずアイヌのお化け」『月刊みんぱく』43(6)：14-15。

2020 「公共空間でのアイヌ文化の発信」特集「先住民とアート」『月刊みんぱく』44(3)：8-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年9月15日 「趣旨説明および『民博所蔵アイヌ民族資料データベース』試作版について」国際ワークショップ『民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討——データベースとその活用』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年10月27日 「交流の場をめざして——現代のアイヌ文化を展示する試み」歴博国際シンポジウム『博物館と多文化社会——いかに博物館は多文化社会における対話の場となりうるか』国立歴史民俗博物館

2020年1月26日 「研究成果の還元と博物館活動——収蔵資料のデータベース化を中心に」日本文化人類学会公開シンポジウム『アイヌ民族と博物館——文化人類学からの問いかけ』法政大学

・広報・社会連携活動

2019年5月10日 「朝日小学生新聞取材」

2019年11月26日 「北海道アイヌ協会 工芸者技術研修（外来研究員）受け入れ」

2019年11月28日 「ミンパク オッタ カムイノミ」国立民族学博物館

2019年11月28日 「アイヌ工芸 in みんぱく」国立民族学博物館

2019年12月13日 「講義『アイヌ民族の歴史と文化』」プール学院中学校、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2019年8月23日—東京都豊島区（アイヌ衣類の調査）

- 2019年9月5日～9月7日—釧路市阿寒町（藤戸竹喜氏の業績に関する調査）
 2019年9月25日～9月26日—熊野市（藤戸竹喜氏の作品に関する調査および撮影）
 2019年9月27日～9月29日—大阪市、静岡市、富士市、調布市（藤戸竹喜氏の作品に関する調査および撮影）
 2019年10月20日～10月22日—壮瞥町、札幌市（藤戸竹喜氏作品の調査および撮影）
 2019年11月3日～11月5日—白老町、平取町、浦河町（みんぱく資料に関する聞き取り調査）
 2019年11月16日～11月18日—函館市（アイヌ衣類の調査）
 2019年11月21日～11月23日—釧路市阿寒町（藤戸竹喜氏作品に関する調査および撮影）
 2019年12月2日—天理市（アイヌの衣類および編み袋の製作技法に関する調査）
 2019年12月8日—松阪市（アイヌの衣類および編み袋の製作技法に関する調査）
 2020年1月9日～1月10日—札幌市、旭川市（藤戸竹喜氏業績研究打ち合わせおよびの藤戸作品の撮影と調査）
 2020年2月6日～2月7日—青森市（アイヌ衣服の調査および東北アイヌに関する文献の調査）
 2020年2月12日～2月13日—札幌市、白老町（アイヌ文化伝承の現状等に関する聞き取り調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「アイヌ民族の衣文化交流——博物館資料から北東アジア史を見直す」（研究代表者：佐々木史郎（独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館））研究分担者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討」研究代表者、国立民族学博物館特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」（研究代表者：寺田吉孝）メンバー、国立民族学博物館共同研究「沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討」（研究代表者：大西秀之）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用——日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築」（研究代表者：日高 薫（国立歴史民俗博物館））メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

- ・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

公益財団法人アイヌ民族文化財団研究助成「木彫家・藤戸竹喜——その人と業績に関する研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・その他の社会活動・館外活動

吹田市立博物館協議会委員、公益財団法人アイヌ民族文化財団評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員

丹羽典生 [にわ のりお] ————— 准教授

【学歴】慶應義塾大学文学部卒（1996）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（1999）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学（2005）【職歴】法政大学経済学部教育補助員（2004）、法政大学社会学部兼任教員（2005）、日本学術振興会特別研究員PD（2005）、国立東京工業高等専門学校非常勤講師（2006）、首都大学東京非常勤講師（2006）、ハワイ大学マノア校人類学科客員研究員（2006）、筑波大学非常勤講師（2007）、法政大学非常勤講師（2008）、国際基督教大学非常勤講師（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2008）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2013）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2006）、修士（社会人類学）（東京都立大学 1999）【専攻・専門】社会人類学、オセアニア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences

【主要業績】

[共著]

丹羽典生・石森大知

2013 『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。[査読有]

[単著]

丹羽典生

2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』東京：明石書店。[査読有]

[編著]

丹羽典生

2016 『〈紛争〉の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』横浜：春風社。[査読有]

【受賞歴】

2010 第9回オセアニア学会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

応援の人類学

・研究の目的、内容

本研究は、応援という視角から人類の諸文化を通文化的に比較しながら、文化人類学的に考察することを目的とする。応援の下位項目として、政治、スポーツ、ファン文化をさしあたり設定し、世界の事例を取り上げ検討する。主たる事例としては、日本の大学を中心とする応援団の諸活動を具体的な民族誌的研究の対象とする。

・成果

共同研究「応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」の成果として「応援」に関する論集を編集集中である。共同研究を通じて日本における応援文化の発展には旧制中学や高校の文化の分析が必要であること、またそれは孤立した文化ではなくイギリスのパブリックスクールやアメリカの大学とフラニティやスポーツクラブの中にもみられる文化であることが再度確認できた。そこで関連資料を収集し文献・資料調査を進めることで、編著とは個別の査読付き論文の執筆を進めている。

◎出版物による業績

[共編]

石森大知・丹羽典生編

2019 『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』横浜：春風社。[査読有]

2019 『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』東京：明石書店。

[分担執筆]

石森大知・丹羽典生

2019 「はじめに」石森大知・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.3-6, 東京：明石書店。

丹羽典生

2019 「マングローブ岸の回心とコミットメント——フィジーにおけるダク村落事業からみたオセアニア神学」石森大知・丹羽典生編『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』pp.159-187, 横浜：春風社。[査読有]

2019 「あとがき」石森大知・丹羽典生編『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』pp.431-434, 横浜：春風社。[査読有]

2019 「フィジーへの実験的移民の帰結——宮本常一の著作に刻まれた父親の体験」石森大知・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.58-62, 東京：明石書店。

2019 「朝枝利男の見た太平洋」石森大知・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.127-129, 東京：明石書店。

2019 「フィジーの砲台——戦跡が物語る太平洋戦争」石森大知・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.155-158, 東京：明石書店。

2019 「日系人の音楽活動」石森大知・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.317-318, 東京：明石書店。

[論文]

丹羽典生

2020 「朝枝利男の見たガラパゴス」『季刊民族学』171：86-94。

2020 「1930年代のアメリカにおける私的探検の考察——朝枝利男が参加した探検隊の旅程と経路の分析から」『国立民族学博物館研究報告』44(4)：625-682。

[その他]

丹羽典生

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(4)：21。

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(5)：21。

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(6)：21。

2019 「オセアニア世界に広がるハカ」特集「ラグビーという文化」『月刊みんぱく』43(11)：9。

2019 「太平洋の国々に広がる『ハカ』」『山形新聞』11月20日。

2020 「コレクション展示『朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示』の開催」『みんぱく e-news』223：巻頭コラム。

2020 「1930年代ガラパゴスの旅——写真家朝枝利男の見たもの」特集「朝枝利男とガラパゴス」『月刊みんぱく』44(2)：2-3。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年6月29日 「紛争後におけるフィジー少数民族の歴史実践の比較分析」『オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月22日 「太平洋関係の朝枝利男写真資料の時代的位置づけ及び特色」フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト『民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築』研究会

・展示

2020年1月16日～3月24日 「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」

・広報・社会連携活動

2020年2月1日 「博物学者 朝枝利男の生涯を追う」第497回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2019年8月10日～8月26日—ソロモン諸島、フィジー（フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト『民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築』に関わる情報収集と打ち合わせ及び、科研「紛争後社会のレジリエンス——オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析」に関わる調査）

2019年9月7日～9月14日—オーストラリア（科研「紛争後社会のレジリエンス——オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析」に関わる調査）

2020年2月16日～2月23日—アメリカ合衆国（フォーラム型情報ミュージアムに関する情報収集と意見交換）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「紛争後社会のレジリエンス——オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事

・他大学の客員、非常勤講師

同志社大学「アジア・オセアニア地域の文化16」

◎学会の開催

2019年11月2日 国立民族学博物館、地域研究コンソーシアム「グローバル化時代の文化力——〈地域知〉のマネージメント」国立民族学博物館。

1961年生。【学歴】弘前大学人文学部人文学科卒（1985）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1989）、筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程退学（1991）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター（2019）【学位】学術修士（筑波大学大学院環境科学研究科 1989）【専攻・専門】人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

[共編]

南 真木人・石井 溥編

2015 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）東京：明石書店。

Yamashita, S., M. Minami, D. W. Haines, and J. S. Eades (eds.)

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Minami, M.

2007 From Tika to Kata?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D. N. Gellner, and K. Nawa (eds.) *Social Dynamics in Northern South Asia Vol.1: Nepalis Inside and Outside Nepal*, pp.443-466. New Delhi: Manohar.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ネパール地震から見る移動性の再検討

・研究の目的、内容

本研究の目的は、2015年のネパール地震によって顕在化した、あるいはそれを契機に生じた多様な人口移動を分析し、ネパールにおける移動性（モビリティ）を再検討することである。ネパール地震では、被災地からの避難と帰還／移出、海外からの支援金や多様な人の一時的流入、住宅再建のための技術者（大工）の国内移動、住宅再建資金の蓄積に向けた海外移住労働、若年層の山地からの流出と過疎化の進行など多様な移動が触発的に起こっている。本研究では、これらの物理的な移動を把握し、社会的な移動（ソーシャル・モビリティ）を射程に入れつつ、移動性を再検討する。

・成果

本研究は、昨年度終了した科学研究費（基盤研究（B））（海外学術調査）「2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究」の調査研究の過程で着想したものである。山地という制限のある環境において、生きていくための移動は生存戦略の一つであり続けることが地震後の多様な移動から明らかになった。過疎化の進む地域では都市部や海外で働く若年層からの送金で、非被災地域から来た技術者が住宅再建を請け負うなど、移動が別の移動を生むスパイラルも見て取れる。科研の成果は、代表者である私が編者となり論集として刊行する予定で準備を進めており年度内の出版を目指している。

◎出版物による業績

[その他]

南 真木人

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(7)：21。

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(8)：21。

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(9)：21。

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(10)：21。

- 2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(11)：21。
 2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(12)：21。
 2019 「空飛ぶ神さま——ネパールのアカーシュ・バイラヴ」『みんぱく e-news』222：巻頭コラム。
 2020 「編集後記」『月刊みんぱく』44(1)：21。
 2020 「編集後記」『月刊みんぱく』44(2)：21。
 2020 「編集後記」『月刊みんぱく』44(3)：21。
 2020 「バフンのように笑うな、マガールのように笑え——ネパールの先住民運動」(特集 先住民のいま)『季刊民族学』171：40-47。
 2020 「アーディバシー (ネパール)」信田敏宏編『特別展 先住民の宝』pp.59-74, 大阪：国立民族学博物館

◎映像音響メディアによる業績

- ・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

南 真木人・藤井知昭監修

2019 『みんぱく映像民族誌 第35集 ネパールのサーランギ音楽』(日本語・137分)

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年10月13日 'Opening remarks.' MINDAS 国際セミナー『Beyond the Borders: International Marriages between South Asians and Japanese, and the "Mixed Generation"』国立民族学博物館

- ・広報・社会連携活動

2019年11月16日 「ヒマラヤの吟遊詩人——ガンダルバから見るネパールの変化」青年海外協力隊ネパール会主催『ネパール応援セミナー』あいも文化交流会館

2019年1月11日 「解説」(南 真木人・福岡正太)『バイラヴ仮面舞踊 (みんぱく映像民族誌シアター)』淀川文化創造館シアターセブン

2019年1月25日 「解説」(南 真木人・福岡正太)『ネパールの楽師ガンダルバ (みんぱく映像民族誌シアター)』淀川文化創造館シアターセブン

◎調査活動

- ・海外調査

2019年9月30日～10月11日—ノルウェー (特別展「先住民」に係る現地調査)

◎大学院教育

- ・指導教員

主任指導教員 (1人)、副指導教員 (1人)

- ・博士論文審査委員 (総研大に限る)

博士論文審査委員 (1件)

八木百合子 [やぎ ゆりこ]————— 助教

【学歴】天理大学国際文化学部イスパニア学科卒 (2001)、三重大学大学院人文社会科学研究所修士課程修了 (2004)、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程単位取得退学 (2011) 【職歴】在ペルー日本国大使館専門調査員 (2012)、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員 (2015)、国立民族学博物館助教 (2018) 【学位】博士 (文学) (総合研究大学院大学 2012)、修士 (人文科学) (三重大学 2004) 【専攻・専門】文化人類学、アンデス民族学、ラテンアメリカ地域研究 【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

八木百合子

2015 『アンデスの聖人信仰——人の移動が織りなす文化のダイナミズム』京都：臨川書店。

[論文]

八木百合子

2012 「聖女に捧げられた大聖堂——近代ペルーの都市建設に埋め込まれたコンフリクト」染田秀藤・關 雄二・網野徹哉編『アンデス世界——交渉と創造の力学』pp.243-267, 京都：世界思想社。

2009 「サンタ・ロサ信仰の形成と発展——20世紀ペルー社会における展開を中心に」『総研大文化科学研究』
5:5-28。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代アンデス地域における宗教的なモノの所有と継承に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、宗教的なモノに焦点をあて、現代のアンデス地域における宗教の展開について人類学的に追究するものである。ペルーを中心とするアンデス地域では近年、カトリックの聖像をはじめとする宗教的なモノの商品化が著しい。以前は特定の地域や信仰者のあいだでのみ崇拜あるいは使用されてきた聖なるモノでさえも、その複製品が大量に世に出回り、人びとが容易に入手・所有することが可能になっている。本研究では、こうしたモノの生産・流通・消費の拡大を視野に、それが現代のアンデス地域の人びとの宗教実践に及ぼす影響について検討する。

研究の遂行にあたっては、科学研究費（若手研究（B））「現代アンデス地域における聖人信仰の展開に関する人類学的研究——聖像の所有と継承に注目して」をあてる。

・成果

科研の研究最終年にあたる本年度は、宗教的なモノの継承に関して、これまでの調査データをもとに分析をおこない、ペルー南部地域特有の信仰と結びついた聖像の継承プロセスの一端を明らかにした。その成果をふまえ、2019年9月にクスコ大聖堂付属サグラダファミリア聖堂で開催された文化遺産と歴史に関する国際セミナーにおいて、国内外の研究者等の出席のもと研究報告と意見交換をおこなった。

また、本研究課題に関連して、2年半にわたり代表をつとめてきた共同研究が2020年3月をもって終了した。その成果事業の一環として、『季刊民族学』において新連載企画をスタートさせるべく、第一弾となる論考（2020年夏号）を寄稿したほか、最終成果論集の執筆・編集準備をすすめた。

◎出版物による業績

[監訳]

八木百合子

2019 ロブ・フラワーズ著・北川玲訳『世界一おもしろいお祭りの本』大阪：創元社。

[分担執筆]

八木百合子

2019 「聖母の奉納品にみるアンデスの意匠——クスコのアルムデナ教会の事例から」青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木紀編『古代アメリカの比較文明論』pp.329-340, 京都：京都大学学術出版会。

[その他]

八木百合子

2019 「国立民族学博物館の収蔵品④ 首長人形の軌跡」『文部科学 教育通信』458:2。

2019 「世界中にあらわれるマリア様」『月刊みんぱく』43(7):16-17。

2020 「年初めの珍客」特集「世界の縁起モノ」『月刊みんぱく』44(1):2-3。

2020 「アンデスの文化資源の活用——データベースの構築に向けた取り組み」『日本ペルー交流年における文化遺産保護に係るシンポジウム等実施委託業務報告書』pp.75-76, 大阪：国立民族学博物館。

2020 「メンディビルの首長人形」『月刊みんぱく』44(3):14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年2月15日 「ペルーにおける人の移動と宗教文化の変容——都市祭礼をめぐるヒト・モノ・カネ」『ネオリベラリズムのモラリティ』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月9日 'Las Imágenes Estampado en la Vestimenta de los Santos: Cambio de las Capas de la Virgen de la Natividad del Cusco.' Seminario Internacional Sobre Patrimonio, Historia del Arte Virreinal en Cusco, Catedral del Cusco, Cusco, Peru

2019年11月13日 'Utilización de Recursos Culturales Andinos: Construcción de Base de Datos Interactivos.' Simposio Internacional "50 años de Antropología Japonesa en el Sur de los Andes:

Recorridos, Etnografías y Valoración Cultural”, Museo Histórico Regional de Cusco, Cusco, Peru

2020年1月17日 ‘Base de Datos Interactivos: Colección del Museo Nacional de Etnología del Japón.’ 1º Taller sobre la Artesanía Peruana, ICTYS, Peru

・ **みんなくゼミナール**

2019年7月20日 「アンデスの褐色のキリスト——奉納品をとおしてみる信仰の世界」第493回みんなくゼミナール

・ **みんなくウィークエンド・サロン**

2019年5月26日 「アンデスの悪魔の踊り」第544回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・ **その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）**

2019年11月11日～11月13日 ‘Tradición Andina: Colección Fotográfica de los Antropólogos Japoneses 1960’-1980.’（文化庁受託事業）クスコ市役所、国立民族学博物館、文化庁、Centro de Convenciones de la Municipalidad del Cusco, Cusco, Peru

2020年2月19日 「宗教的なモノをめぐる実践——ペルーにおける聖像の所有・管理・継承」（MMP ステップアップ講座）みんなくミュージアムパートナーズ、国立民族学博物館

◎調査活動

・ **海外調査**

2019年8月16日～9月13日—ペルー（宗教的なモノの保存・管理・継承に関する現地調査および日本・ペルー交流年関連シンポジウムの運営準備）

2019年11月1日～11月29日—ペルー（日ペルー交流年関連の国際シンポジウムと展示イベントの開催および研究発表）

2019年12月31日～2020年1月20日—ペルー（ペルーにおける聖像の所有と継承にかかる調査およびフォーラム型情報ミュージアムにかかるワークショップの開催）

◎上記以外の研究活動

・ **人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費（若手研究（B））「アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究——聖像の所有と継承に注目して」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「ネオリベラリズムのモラルティ」（研究代表者：田沼幸子）メンバー、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「モビリティと物質性的人类学」（研究代表者：古川不可知）メンバー

◎社会活動・館外活動

・ **他大学の客員、非常勤講師**

神戸市外国語大学「中南米文化史2」（集中講義）、神戸市外国語大学「ラテンアメリカ文化特殊講義1」、神戸市外国語大学「中南米文化史1」

国際研究統括室

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]—室長(併)、副館長(研究・国際交流・IR担当)、グローバル現象研究部教授

卯田宗平 [うだ しゅうへい]—兼：人類文明誌研究部准教授

齋藤 晃 [さいとう あきら]—兼：人類文明誌研究部教授

丹羽典生 [にわ のりお]—兼：学術資源研究開発センター准教授

韓 敏 [ハン ミン]—兼：超域フィールド科学研究部教授

鈴木英明 [すずき ひであき]————— 兼：グローバル現象研究部所助教

福岡正太 [ふくおか しょうた]————— 兼：人類基礎理論研究部准教授

IR室

出口正之 [でぐち まさゆき]————— 室長（併）、人類基礎理論研究部教授

森 明子 [もり あきこ]————— 兼：グローバル現象研究部教授

山本泰則 [やまもと やすのり]————— 兼：人類基礎理論研究部准教授

吉岡 乾 [よしおか のぼる]————— 兼：人類基礎理論研究部准教授

梅棹資料室

飯田 卓 [いいだ たく]————— 併：人類文明誌研究部教授

機関研究員

大澤由実 [おおさわ よしみ]————— 機関研究員

【学歴】 ケント大学大学院人類学部修士課程修了（2005）、ケント大学大学院人類学・保全学研究科博士課程修了（2011）【職歴】 欧州大学院大学歴史・文明学研究科研究員（2012）、チェンマイ大学社会科学部・社会科学と持続可能な開発のための地域センター特別研究員（2013）、京都大学学術研究支援室 URA（2014）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）【学位】 Ph.D.（民族生物学）（ケント大学 2012）、M. Sc.（民族植物学）（ケント大学 2005）【専攻・専門】 食の人類学、民族植物学 味の文化的認識と表象、味のグローバル化

【主要業績】

[分担執筆]

Osawa, Y.

2018 “We Can Taste but Others Cannot”: Umami as an Exclusively Japanese Concept. In N. K. Stalker (ed.) *Devouring Japan: Global Perspectives on Japanese Culinary Identity*, pp.118-132. Oxford: Oxford University Press.

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

大澤由実

2019 「現代日本におけるうま味の認識とその構築」『国立民族学博物館研究報告』44(2)：379-405。

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（研究活動スタート支援）「食の認識体系とその変容——タイにおける MSG（グルタミン酸ナトリ

ウム)の消費と拒絶」研究代表者

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

ロッテ財団奨励研究助成 (B)「北タイにおける食の伝統性に関する人類学的研究——伝統食のあり方とその変容」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

龍谷大学「栽培植物と農耕の起源」

神野知恵 [かみの ちえ]————機関研究員

【学歴】国際基督教大学教養学部人文科学科卒 (2008)、東京藝術大学大学院音楽文化研究科音楽学専攻修士課程修了 (2011)、東京藝術大学大学院音楽研究科音楽学専攻博士課程修了 (2016) 【職歴】東京藝術大学音楽学部楽理科教育研究助手 (2016)、東京文化財研究所無形文化遺産部客員研究員 (2017)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員 (2018) 【学位】博士 (音楽学) (東京藝術大学大学院音楽研究科 2016)、修士 (音楽学) (東京藝術大学大学院音楽文化研究科 2011) 【専攻・専門】音楽学 (民族音楽学)、民俗学 近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷——伊勢大神楽と韓国農楽を中心に 【所属学会】東洋音楽学会、民俗芸能学会、韓国朝鮮文化研究会、映像民俗学の会、南道民俗研究会 (韓国)

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[共著]

金子亜美・小倉志保穂・神野知恵・田中有紀・井上さゆり

2019 『音楽を研究する愉しみ——出会う、はまる、見えてくる』(ブックレット《アジアを学ぼう》) 東京：風響社。

藤田瑞穂・矢野原佑史編・藤田瑞穂・佐藤知久・村津 蘭・川瀬 慈・神野知恵・ふくだぺろ・矢野原佑史

2019 『im/pulse』京都：京都市立芸術大学。

[分担執筆]

神野知恵

2019 「이세다이카구라의 걸립을 통해서 본 세토나िका이 쇼도시 마의 생활과 민속 (伊勢大神楽の回禮を通じて見た小豆島の生活と民俗)」ナ スンマン編『섬과 바다의 민속 연구 그 행로와 전망 (島と海の民俗研究その行路と展望)』pp.80-116, ソウル：民俗苑。

金子亜美・小倉志保穂・神野知恵・田中有紀・井上さゆり

2019 「人に出会うための民族音楽学——韓国、日本、そして世界へ」『音楽を研究する愉しみ——出会う、はまる、見えてくる』(ブックレット《アジアを学ぼう》) pp.40-55, 東京：風響社。

藤田瑞穂・矢野原佑史編・藤田瑞穂・佐藤知久・村津 蘭・川瀬 慈・神野知恵・ふくだぺろ・矢野原佑史

2019 「韓国芸能と食文化の深い関係」『im/pulse』pp.193-224, 京都：京都市立芸術大学。

[論文]

神野知恵

2019 「이보형이 수집한 호남우도농악 녹음자료의 역사적 의미——1970대말부터 1980년까지 이루어진 공연녹음자료들을 중심으로 (李輔亨が収集した湖南右道農樂錄音資料の歴史的意味——1970年代末から1980年の公演錄音資料を中心に)」『南道民俗研究』38：321-369。

2020 「滋賀県の市町村誌に見られる伊勢大神楽関連記事の傾向」東京文化財研究所無形文化遺産部編『無形文化遺産研究報告』14：139-177。[査読有]

[翻訳]

神野知恵

2019 全 京秀著「民具研究の可能性の遠心力と求心力」『民具マンスリー』51(12)：12896-12898。

[その他]

神野知恵

2020 「日韓民俗文化の底流を探る (上)」『京都新聞』3月25日。

2020 「日韓民俗文化の底流を探る (下)」『京都新聞』3月26日。

2020 イギリスにおける民族音楽学の研究動向——学際的共同研究の取り組みを中心に」『民博通信Online』1:34-35。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年5月22日～26日 「일본의 동물가면 걸립의 역사와 연행방식 이세다이카구라를 중심으로 (日本の動物仮面による門付けの歴史と芸能の上演形式——伊勢大神楽を中心に)」晋州世界民俗芸術ビエンナーレ仮面劇シンポジウム、招聘講演、慶尚南道晋州市、韓国
- 2019年7月16日 'A Documentary Film on Ise-daikagura: A Lion Dance Driving Evil Power from Houses in Japan.' (悪魔を祓う獅子——伊勢大神楽の映像発表) 国際伝統音楽学会 (ICTM)、チュラロンコン大学、タイ
- 2019年9月28日 「집집을 찾아가는 가면예능과 지역사회 공동체의 관계성——일본 동북지방에 전해지는 우라하마 엄불검무를 중심으로 (家々を訪ねる仮面芸能と地域社会——日本の東北地方に伝わる浦浜念仏剣舞を中心に)」安東仮面劇フェスティバル仮面劇シンポジウム、招聘講演、慶尚北道安東市、韓国
- 2019年10月11日 「くらしと祈りと芸能——家を廻る民俗芸能から学んだこと」国際基督教大学宗教音楽センター公開講演会、招聘講演、国際基督教大学
- 2019年10月26日 「고창농악보존회가 고창의 지역농악과 함께 걸어온 길——보름굿 전수를 중심으로 (高敞農樂保存会が高敞の地域農樂と歩んできた道——旧正月行事の伝承教育を中心に)」高敞農樂シンポジウム、全羅北道高敞郡、韓国
- 2019年11月2日 「家廻り行事を通じて伝達される<地域知>——日本と韓国の事例より」地域研究コンソーシアム年次大会、国立民族学博物館
- 2019年11月17日 「伊勢大神楽の回檀における笛の機能」東洋音楽学会大会、京都市立芸術大学
- 2019年12月1日 「伊勢大神楽の回檀における笛の機能」民俗芸能学会大会、新潟県立歴史博物館
- 2019年12月12日 「伊勢大神楽と地域環境が生み出すサウンドスケープ」カワイサウンド技術・音楽振興財団第37回研究助成講演会、招聘講演、アクトシティ浜松研修交流センター

・広報・社会連携活動

- 2019年6月30日 「身体を通して研究する——韓国打楽器音楽の世界」国立民族学博物館・大阪大学主催『みんなばくディスカバリーツアー』太鼓の実演、国立民族学博物館
- 2019年11月2日～11月3日 「ゴミから生まれる異音獣！ 不思議なケモノはどんな音？ 不思議な音は何に見える？」みんなばくワークショップ、企画・運営補助、国立民族学博物館
- 2019年12月19日 「みんなばく村に神楽がやって来る！ 伊勢大神楽実演とおはなし」みんなばくワークショップ、企画・司会・解説、国立民族学博物館

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

- 2019年5月22日～5月26日 韓国晋州世界民俗芸術ビエンナーレ『伊勢大神楽講社山本勘太夫社中公演』晋州市主催、コーディネーター・通翻訳、慶尚南道晋州市、韓国
- 2019年6月28日 第23回 大阪大学コレギウム・ムジクム「音楽と身体」特別公開講座・ワークショップ『韓国の打楽器芸能 農樂の身体性——叩いて、踏んで、結んで、ほどく』企画・演奏、大阪大学
- 2019年11月28日～11月29日 2019年みんなばく若手研究者奨励セミナー『ゆらぐマジョリティ／マイノリティ』運営管理

◎調査活動

・海外調査

- 2019年5月22日～5月27日—韓国（晋州国際芸術ビエンナーレにおける伊勢大神楽山本勘太夫組の出演の同行調査、および晋州仮面劇シンポジウム登壇）
- 2019年6月8日～6月10日—韓国（羅錦秋（女流農樂名人）の追悼公演における記録映像上映）
- 2019年7月9日～7月18日—タイ（ICTM（国際伝統音楽学会）タイ大会への参加）
- 2019年7月24日～7月30日—韓国（農樂演奏者イ・ブサンの取材）
- 2019年9月25日～10月2日—韓国（安東仮面劇国際シンポジウム登壇、ソウル大学校講義、国立民俗博物館日韓交流特別展示開幕式参加）
- 2019年10月23日～10月29日—韓国（高敞農樂學術シンポジウム登壇、国立中央図書館農樂関連資料調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷——伊勢大神楽と韓国農楽を中心に」
研究代表者

末森 薫 [すえもり かおる]————機関研究員

1980年生。【学歴】国際基督教大学教養学部人文科学科卒（2004）、筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻修士課程修了（2006）、筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻博士課程単位取得退学（2009）【職歴】国立文化財機構 東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター客員研究員（2009）、国際協力機構 大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト専門家（保存修復研修計画）（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部外来研究員（2017）、関西大学国際文化財・文化研究センターポスト・ドクトラル・フェロー（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）【学位】博士（学術）（筑波大学大学院人間総合科学研究科 2018）、修士（学術）（筑波大学大学院 2006）【専攻・専門】文化財保存科学、中国仏教美術史、文化遺産学【所属学会】文化財保存修復学会、日本中国考古学会、日本文化財科学科、東アジア文化遺産保存学会、国際文化財保存学会（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[単著]

末森 薫

2020 『敦煌莫高窟と千仏図——規則性がつくる宗教空間』京都：法蔵館。

[分担執筆]

末森 薫

2020 「中国文明の宗教芸術にみるビーズ——敦煌莫高窟の菩薩装身具」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史』pp.147-159, 京都：昭和堂。

[論文]

末森 薫・岳 永強・李 天銘・馬 千・董 広強・松井敏也・八木春生・河村友佳子

2019 「CTを用いた麦積山石窟壁画片の非破壊構造調査」『The Proceedings of 2019 Daejeon International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia, Daejeon』pp.276-279。

西浦忠輝・吹田 浩・吹田真里子・岡岩太郎・末森 薫・沢田正昭・アフマド・シュエイブ

2019 「古代壁画の剥ぎ取り保存——布海苔を用いた伝統的表打ち技法の応用」『The Proceedings of 2019 Daejeon International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia, Daejeon』pp.92-95。

Mori, N., T. Higo, K. Suemori, H. Suita, and Y. Yasumuro

2019 Visualization of the Past-to-Recent Changes in Archaeological Heritage based on 3D Digitization. In W. Börner and S. Uhlirz(eds.) *Proceedings of the 23rd International Conference on Cultural Heritage and New Technologies 2018. CHNT 23, 2018 (Vienna 2019)*.

[その他]

末森 薫・劉 成・王 飛・孫 劍・松井敏也

2019 「中国遼寧省義県・奉国寺大雄殿に描かれた壁画の光学撮影調査」日本文化財科学会編『日本文化財科学会第36回大会 研究発表要旨集』pp.92-93。

末森 薫・園田直子・日高真吾

2019 「オランダにおける資料管理・収蔵施設の動向——持続可能な共有型収蔵施設の建設」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.272-273。

園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸絵・和高智美

2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会 研究発表要旨集』pp.206-207。

日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸絵・和高智美
2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.208-209。

橋本沙知・日高真吾・園田直子・河村友佳子・末森薫・西澤昌樹
2019 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会 研究発表要旨集』pp.218-219。

末森 薫

2019 「外から見える収蔵庫」特集「みんぱくの収蔵庫」『月刊みんぱく』43(4)：8。

2019 「文化財を対象とした光学撮影・画像処理の方法：壁画や博物館資料への活用事例」『システム制御情報学会研究発表講演会講演論文集』63：591-594。

2019 「みんぱくレプリカめぐり」『月刊みんぱく』43(9)：16-17。

2019 「旅・いろいろ地球人 河西回廊・石窟寺紀行① 武威・天梯山石窟」『毎日新聞』9月7日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人 河西回廊・石窟寺紀行② 張掖・金塔寺石窟」『毎日新聞』9月14日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人 河西回廊・石窟寺紀行③ 酒泉・文殊山石窟」『毎日新聞』9月21日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人 河西回廊・石窟寺紀行④ 敦煌・莫高窟」『毎日新聞』9月28日夕刊。

2020 「エジプトのIBM」『月刊 みんぱく』44(2)：20。

2020 「オランダにおける資料管理等に関する研究動向調査報告」『民博通信 Online』1：36-37。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2019年11月14日 「色・光の再現から、敦煌莫高窟につくられた宗教的空間を再考する」特別研究「デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ」第3回研究会、国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2019年7月19日 「オランダ・デンマークに建設された低エネルギー・共有型収蔵施設」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月22日 「文化財を対象とした光学撮影・画像処理の方法——壁画や博物館資料への活用事例」第63回システム制御情報学会研究発表講演会、中央電気倶楽部

2019年6月1日 「中国遼寧省義県・奉国寺大雄殿に描かれた壁画の光学撮影調査」日本文化財科学会第36回大会、東京藝術大学

2019年6月22日 「オランダにおける資料管理・収蔵施設の動向——持続可能な共有型収蔵施設の建設」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月22日 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月22日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月22日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年8月29日 「CTを用いた麦積山石窟壁画片の非破壊構造調査」2019 Daejeon International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia、大田、韓国

2019年8月29日 「古代壁画の剥ぎ取り保存——布海苔を用いた伝統的表打ち技法の応用」2019 Daejeon International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia、大田、韓国

2019年10月25日 「関于敦煌莫高窟千仏図有規律性絵制的多角度考察——再現模写と仮想空間的思考」敦煌唐代芸術研究会、敦煌研究院、中国

2019年10月30日 「新潟県十日町市で発見された越後縮『御召縮』関連資料の解説支援」国際フォーラム『地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割』宜蘭県立蘭陽博物館、台湾

2019年11月4日 'Quantitative Visualization of Secular Changes based on 3D Viewpoint Estimation for archaeological heritage maintenance: A Case Study at Barber Temple Ruins in Bahrain.' Conference on CHNT (Cultural Heritage and New Technologies) 24, Vienna City Hall, Taiwan

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する規則的描写の複合的評価」研究代表者、科学研究費（研究成果公開促進費（学術図書））「敦煌莫高窟と千仏図」研究代表者、鹿島美術財団・美術に関する調査研究の助成「敦煌莫高窟初唐窟に描かれた千仏図の研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（研究代表者：日高真吾）研究分担者、人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」メンバー

古川不可知 [ふるかわ ふかち]————機関研究員

【学歴】 埼玉大学教養学部人類学コース卒（2006）、大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了（2012）、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了（2018）**【職歴】** 一般企業SE（2006）、ネパール・トリブバン大学社会学／人類学部客員研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員（DC2）（2014）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）、関西大学社会学部非常勤講師（2018）、関西学院大学文学部非常勤講師（2018）、神戸女学院大学文学部非常勤講師（2018）**【学位】** 博士（人間科学）（大阪大学 2018）、修士（人間科学）（大阪大学 2012）**【専攻・専門】** 文化人類学、ヒマラヤ地域研究 ネパール・ソルクンプ郡における山岳観光と「道」に関する人類学的研究**【所属学会】** 日本文化人類学会、日本南アジア学会、観光学術学会、日本山岳文化学会

【主要業績】

[単著]

古川不可知

2020 『「シェルパ」と道の人類学』東京：亜紀書房。

[共訳]

奥野克巳・近藤祉秋・古川不可知

2018 レーン・ウィラースレフ著 『ソウル・ハンターズ——シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学』東京：亜紀書房。

[論文]

古川不可知

2018 「インフラストラクチャーとしての山道——ネパール・ソルクンプ郡クンプ地方、山岳観光地域における『道』と発展をめぐる」『文化人類学』83(3)：423-440。

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[単著]

古川不可知

2020 『「シェルパ」と道の人類学』東京：亜紀書房。

[その他]

古川不可知

2019 「ネパールの背負いかご」『文部科学 教育通信』459：2。

2020 「モビリティと物質性の人類学——移動の物質的側面を追って」『民博通信Online』1：30-31。

2020 「英国のセミナー文化に見る人類学的な知のありかた」『民博通信Online』1：38-39。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2019年8月3日 「ネパール・ソルクンプ郡ソル地方における車道建設——移動インフラとトレッキング観光の相克」2019年度MINDAS「移民・移動」班第1回研究会、国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2019年11月2日 「趣旨説明と研究動向紹介」国立民族学博物館若手共同研究『モビリティと物質性の人類学』

国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月1日 「土砂崩れとぬかるみ——ヒマラヤ山間部を運転することについての試論」日本文化人類学会第53回研究大会、東北大学

2019年8月29日 Mountain Trails as Infrastructure: Trekking Tourism and Development in Solukhumbu, Nepal, UAES 2019 Inter-Congress

2019年12月16日 「山道を歩くこと、山間部を運転すること——ネパール・ソルクンブ郡、山岳観光地域における車道建設をめぐる」白山人類学研究会、東洋大学

・広報・社会連携活動

2019年9月6日 「エベレストの麓に生きる人びと——シェルパとヒマラヤ観光の現在」第492回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年6月18日 「歩く身体／道としての身体——ネパール・エベレスト地域を移動することについて」（慶應義塾大学 文学部総合教育科目「アナログ、アナクロ、アナロジーⅠ」（オムニバス講義・第9回担当）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（研究活動スタート支援）「ヒマラヤ東部地域における輸送インフラの発展と移動する身体に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（研究成果公開促進費（学術図書））「『シェルパ』と道の人類学」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「モビリティと物質性の人類学」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

プロジェクト研究員

石原 和 [いしはら やまと]——プロジェクト研究員

【学歴】立命館大学文学部人文学科日本史学専攻卒（2011）、立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程前期課程修了（2012）、立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程後期課程修了（2017）【職歴】日本学術振興会特別研究員 DC 2（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部プロジェクト研究員（2017）、立命館大学授業担当講師（2018）【学位】博士（文学）（立命館大学大学院 2017）【専攻・専門】日本史学 思想史、宗教史、宗教学【所属学会】日本歴史学会、日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本思想史学会、日本宗教学会、RA 協議会

【主要業績】

[単著]

石原 和

2020 『「ぞめき」の時空間と如来教 近世後期の救済論的転回』京都：法藏館。

[編著]

石原 和・吉永進一・並木英子編

2020 『月見里神社史料・宮城島家史料目録——近代清水の神職たちと鎮魂婦神「日本新宗教史像の再構築：アーカイブと研究者ネットワーク整備」調査・研究成果報告書』。

[論文]

石原 和

2018 「民衆宗教」大谷栄一・菊地暁・永岡崇編『日本宗教史のキーワード 近代主義を超えて』pp.229-235, 東京：慶應義塾大学出版会。

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

石原 和

2019 「一八〇〇年前後における救済論の質的転回——三業惑乱、尾州五人男、如来教から」前田勉・高山大毅編『季刊日本思想史』83：103-123。

2019 「一九二〇年代後半における「如来教」の“創出”——石橋智信の研究から」桂島宣弘編『東アジア遭遇する知と日本——トランスナショナルな思想史の試み』pp.280-297, 京都：文理閣。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年8月26日 「1800年前後の救済論の展開——「身」「心」をめぐる」宗教史懇話会サマーセミナー、奈良万葉若草の宿 三笠

2019年9月15日 「稲荷講社と出口王仁三郎——講社所管教会という視点から」日本宗教学会第78回学術大会、パネル「近代宗教政策下における「教団」未満の宗教者たち」（代表者：石原 和／報告者：井上智勝、石原 和、並木英子／コメント：永岡 崇の一部）、帝京科学大学

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「日本新宗教史像の再構築——アーカイブと研究者ネットワーク整備による基盤形成」（研究代表者：菊池 暁（京都大学））新宗教班として、近代清水の民間宗教者調査。

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

立命館大学「キャンパスアジア日本研究Ⅲ（LA）」、立命館大学「キャンパスアジア日本研究Ⅲ（LB）」「日本史Ⅱ（L）」、大阪大学「手話の世界と世界の手話言語☆入門（リレー講義）」

石山 俊 [いしやま しゅん]————— プロジェクト研究員

【学歴】名古屋大学大学院文学研究科満期退学（2006）【職歴】大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2008）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所外来研究員（2014）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2015）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所外来研究員（2017）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2017）【学位】博士（文学）（名古屋大学大学院 2015）【専攻・専門】文化人類学、環境人類学、アフリカ、中東乾燥地文化研究、農耕社会研究【所属学会】日本アフリカ学会、日本中東学会、日本文化人類学会、日本沙漠学会

【主要業績】

[編著]

石山 俊編

2017 『サーヘル内陸国チャドの環境人類学——貧困・紛争・「砂漠化」の構造』名古屋：名古屋大学大学院。

[共編]

石山 俊・縄田浩志編

2013 『ポスト石油時代の人づくり・モノづくり——日本と産油国の未来像を求めて 地球研叢書16』京都：昭和堂。

2013 『ナツメヤシ アラブなりわい生態系シリーズ2』京都：臨川書店。

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

石山 俊

2019 「サハラ・オアシスにおける灌漑水供給システムとナツメヤシ栽培」『沙漠研究』29(1)：21-29。

[分担執筆]

石山 俊・縄田浩志

2019 「ナツメヤシを育てる——オアシスの農業」縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「見られる私」より「見る私』』 pp.124-125, 東京：河出書房新社。

縄田浩志・石山 俊

2019 「ナツメヤシからつくる——多様な利用法」縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「見られる私」より「見る私』』 pp.126-127, 東京：河出書房新社。

石山 俊

2020 「『農と食』をささえるいとなみ」石井 潤・中村 亮編『若者と研究者が見た北潟湖——その生物文化多様性の魅力』 pp.81-84, 福井：福井県里山里海湖研究所。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年 5月12日 「ワーディ・ファータマにおける土地利用・農業の変容」日本中東学会第35回年次大会、秋田大学

2019年 5月25日 「地域研究写真のデジタル化・データベース化と研究への活用——DiPLASプロジェクトの経験」シンポジウム『地域コミュニティのメディアテーク』国立情報学研究所

2019年10月20日 「土地利用と農業の変容——現地調査による景観変遷の復元」日本沙漠学会秋季シンポジウム、横浜情報文化センター

2019年11月10日 「アフリカ内陸サハラ・サーヘル文化」国際シンポジウム『「一带一路 One Belt, One Road」アフロ・ユーラシア文明論から考える』中部大学

・展示

2019年10月 5日～12月22日 「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『見られる私』より『見る私』』横浜ユーラシア文化館

◎調査活動

・海外調査

2019年 9月11日～9月21日—サウジアラビア（科学研究費（基盤研究（A））「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態分析—「近代世界システム」との相克」にかかる現地調査および打ち合わせ）

2019年12月23日～2020年 1月 7日—アルジェリア（科学研究費（基盤研究（B））にかかる現地調査および打ち合わせ）

2020年 2月19日～2020年 2月28日—タイ、ラオス（人間文化研究機構エコヘルズプロジェクトにかかる現地調査（ラオス山岳少数民族居住地域における生業と生計に関する聞き取り調査））

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」（研究代表者：縄田浩志（秋田大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態分析——『近代世界システム』との相克」（研究代表者：嶋田義仁（中部大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「アフリカ食文化研究の新展開——食料主権論のために」（研究代表者：藤本 武（富山大学））研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・社会活動

日本沙漠学会沙漠誌分科会運営委員、一般財団法人片倉もとこ記念沙漠文化財団理事、特定非営利活動法人緑のサヘル理事、特定非営利活動法人森のエネルギーフォーラム理事

河村友佳子 [かわむら ゆかこ]——プロジェクト研究員

【学歴】京都造形芸術大学芸術学部卒（2003）【職歴】国立民族学博物館情報管理施設 情報企画課技術補佐員（2003）、財団法人元興寺文化財研究所伝世資料修復室研究補佐員（2007）、国立民族学博物館情報管理施設 共同利用型科学分析室プロジェクト研究員（2018）【専攻・専門】保存科学【所属学会】文化財保存修復学会、日本文化財

科学会、日本民具学会

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[その他]

河村友佳子・園田直子・日高真吾・末森 薫・橋本沙知・和高智美・川越和四・富岡康浩

2019 「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」
文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.290-291。[査読有]

河村友佳子

2019 「重要文化財『涅槃釈迦像』の3D複製品の取り組み事例」『国際フォーラム「地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割」要旨集』pp.36-38。

橋本沙知・日高真吾・園田直子・河村友佳子・末森 薫・西澤昌樹

2019 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.218-219。[査読有]

日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸絵

2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.206-207。[査読有]

園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸絵・和高智美

2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.208-209。[査読有]

和高智美・日高真吾・河村友佳子・橋本沙知

2019 「3Dスキャナーによる判読困難な津波碑の文字情報取得の可能性」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.204-205。[査読有]

Suemori, K., Y. Yue, T. Li, Q. Ma, G. Dong, T. Matsui, H. Yagi, Y. Kawamura

2019 Nondestructive Structural Survey applying CT on Mural Fragments of Maijishan Grottoes, Tianshui, China (CTを用いた麦積山石窟壁画片の非破壊構造調査). *Proceedings of 2019 Daejeon International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia, Daejeon*, pp.276-279。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年7月19日 「太陽熱を用いた高温処理の条件確立——今後の進めかた」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館

2019年12月12日 「国立民族学博物館における温湿度に関する調査と分析手法」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月23日 「3Dスキャナーによる判読困難な津波碑の文字情報取得の可能性」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月23日 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月23日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月23日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月23日 「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年8月29日 'Nondestructive Structural Survey applying CT on Mural Fragments of Maijishan Grottoes, Tianshui, China (CTを用いた麦積山石窟壁画片の非破壊構造調査). 2019 Daejeon International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia, Daejeon, South Korea

2019年10月30日 「重要文化財『涅槃釈迦像』の3D複製品の取り組み事例」国際フォーラム『地域文化を活用

する——地域振興/地域活性に果たす役割』蘭陽博物館、台湾

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年7月27日 「博物館の実例Ⅰ 展示室・収蔵庫の温度湿度コントロールについて」公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター、国立民族学博物館

2019年11月28日 「民博の空調管理について」独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、国立民族学博物館

小林直明 [こばやし なおあき]————— プロジェクト研究員

1971年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部日本語学科卒（1994）、大阪外国語大学大学院外国語学研究科西アジア語学専攻修士課程修了（1998）、東京外国語大学大学院地域文化研究科地域文化専攻博士後期課程単位取得退学（2002）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所日本学術振興会特別研究員（PD・文化人類学）（2002）、国立民族学博物館文化資源研究センター外来研究員/日本学術振興会特別研究員（PD・文化人類学）（2003）、大阪大学世界言語研究センター特任研究員（2008）、龍谷大学社会学部実習助手（2011）、国立民族学博物館人類文明誌研究部プロジェクト研究員（2016）【学位】修士（大阪外国語大学大学院 1998）【専攻・専門】文化人類学・民俗学 民族誌映像、図書館情報学・人文社会情報学 デジタルアーカイブ、地域研究 アフリカ【所属学会】日本アフリカ学会、日本映像民俗学の会、デジタルアーカイブ学会

【2019年度の活動報告】

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究支援代表者：吉田憲司）において技術支援員として写真資料のデジタルアーカイブ化（フィルムの整理やデジタル化・データベース化、権利処理などの諸業務）を効果的・効率的にすすめる手法を研究・考案し、実践した。

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

近畿大学非常勤講師「博物館情報・メディア論」「情報処理専門演習Ⅰ・Ⅱ」、龍谷大学非常勤講師「異文化研究B」、同志社女子大学嘱託講師「デジタルアーカイブス」、同志社女子大学大学院嘱託講師「メディアリテラシー特論」

橋本沙知 [はしもと さち]————— プロジェクト研究員

【学歴】同志社大学文学部文化学科・美学及び芸術学専攻卒（2004）【職歴】国立民族学博物館情報管理施設情報企画課技術補佐員（2004）、公益財団法人元興寺文化財研究所伝世資料修復室研究補佐員（2007）、国立民族学博物館情報管理施設共同利用型科学分析室プロジェクト研究員（2018）【専攻・専門】保存科学【所属学会】文化財保存修復学会、日本文化財科学会

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[その他]

河村友佳子・園田直子・日高真吾・末森 薫・橋本沙知・和高智美・川越和四・富岡康浩

2019 「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.290-291。[査読有]

橋本沙知・日高真吾・園田直子・河村友佳子・末森 薫・西澤昌樹

2019 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.218-219。[査読有]

日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸絵

2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.206-207。[査読有]

- 園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸絵・和高智美
 2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.208-209。[査読有]
- 和高智美・日高真吾・河村友佳子・橋本沙知
 2019 「3Dスキャナーによる判読困難な津波碑の文字情報取得の可能性」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.204-205。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2019年7月19日 「多機能保管庫におけるカビの発生資料と空気の対流調査——今後の進めかた」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館
- 2019年7月19日 「窒素雰囲気での密封実験——今後の進めかた」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館
- 2019年12月12日 「2019年特別展『驚異と怪異——想像界の生きものたち』調湿展示ケース内の温湿度制御事例」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年6月23日 「3Dスキャナーによる判読困難な津波碑の文字情報取得の可能性」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学
- 2019年6月23日 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学
- 2019年6月23日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学
- 2019年6月23日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学
- 2019年6月23日 「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

- 2019年7月27日 「博物館の実例Ⅰ 民博におけるLED照明の考え方」(Thematic Training Course for Mid-career Professionals on Cultural Heritage Protection in the Asia-Pacific Region 2019) 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所、国立民族学博物館
- 2019年11月28日 「民博の収蔵庫で使用している包材について」2019年度博物館の環境管理に関するイラン人専門家研修、東京文化財研究所、国立民族学博物館

彭 宇潔 [ホウ ウケツ]————プロジェクト研究員

【学歴】北京外国語大学日本語学部卒（2008）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻5年一貫制博士課程修了（2016）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科2016）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科2012）【専攻・専門】文化人類学、狩猟採集民研究、アフリカ地域研究【所属学会】日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際狩猟採集民学会、英国王立人類学協会、国際民族生物学会

【主要業績】

[単著]

彭 宇潔

2017 *Inscribing the Body: An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter Gatherers in Southeastern Cameroon*. Kyoto: Shokado.

[論文]

彭 宇潔

2016 Transmission of Body Decoration among the Baka Hunter-Gatherers. In H. Terashima and Barry S. Hewlett (eds.) *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary*

and *Ethnographic Perspectives*, pp.83-93. Tokyo: Springer.

2016 The Evidence of Proximity: Tattoo Practices of the Baka in Southeastern Cameroon. *Hunter Gatherer Research* 2(1): 63-95.

【受賞歴】

2017 中国民族生態学会第2回全国大会「優秀論文賞」

2012 英国王立人類学協会主催 Body Canvas Photography Competition「Runner-up賞」

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[単著]

彭宇潔

2020 「小規模居住集団の生活様式——アフリカ熱帯林のバカ・ピグミーと中国雲南のドゥーロン族（独龍族）を事例に」『パレオアジア文化史学 計画研究 B01班2019年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』 pp.39-43, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年2月29日 'Residence Styles among Small-Scale Societies: Cases from Central Africa and Southeastern Asia.' Society for Cross-Cultural Research Conference 2020, Seattle, United States.

◎調査活動

・海外調査

2019年8月9日～9月4日—カメルーン（アフリカ熱帯雨林狩猟採集民の資源獲得行動に関する現地調査）

2019年10月9日～10月20日—中国（パレオアジア文化史学プロジェクトのための資料収集及び現地調査）

2020年2月24日～3月2日—アメリカ合衆国（2020年通文化研究学会（SCCR2020）への参加と研究発表）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「アフリカ熱帯雨林における狩猟採集民の生態資源獲得の行動に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究協力者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「トイレを必要とする条件とは——狩猟採集民、農耕民、都市生活者の排泄と衛生条件の比較」（研究代表者：山内太郎（総合地球環境学研究所））研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

京都外国語大学外国語学部非常勤講師「民俗学から見た衣食住」、龍谷大学経済学部非常勤講師「入門演習」「基礎演習Ⅰ」

拠点研究員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「北東アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

辛嶋博善 [からしま ひろよし]——特任助教

1974年生。【学歴】慶應義塾大学文学部史学科民族学考古学専攻卒業（1998）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程アジア第一専攻地域研究コース修了（2001）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2008）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー（2008-2013）、北海道大学スラブ研究センター非常勤研究員（2013-2014）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究員（2014-2015）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター地域比較共同研究員（2015-）【学位】博士（学術）

(東京外国語大学 2011)【専攻・専門】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、生き物文化誌学会、IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences)

【主要業績】

[論文]

辛嶋博善

2017 「家業を起業する——モンゴル牧畜社会における牧夫の自立」(特集：市場化・脱生業化時代の生業論——
牧畜戦略の多様化を例に)『文化人類学』82(1)：35-49。

2016 「拡張する柔軟性——モンゴル国現代牧畜社会における居住単位のサイズと構成の変遷」『文化人類学』
81(1)：44-61。

[学位論文]

辛嶋博善

2010 「衝突する未来——ポスト社会主義期におけるモンゴル国ヘンティール県ムルン郡の牧畜社会を事例とし
て」東京外国語大学。

【2019年度の活動報告】

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年7月18日 'Herdsmen as Entrepreneurs: Pastoralism and Family Business in Modern Mongolia.' "The
11th International Convention of Asia Scholars (ICAS11)", Leiden University, Nether-
lands

2019年8月20日 'From Herdsmen to Householders: Social changes in Modern Mongolia.' "International
Altay Communities Symposium - VIII", Isik K l, Kyrgyzstan

◎調査活動

・海外調査

2019年7月15日～7月21日—オランダ (国際会議出席・発表 (ICAS11, the 11th International Convention of
Asia Scholars))

2019年8月17日～8月25日—キルギス共和国 (国際会議 (第8回アルタイ会議シンポジウム) 出席・発表)

2019年11月27日～12月1日—デンマーク (Analyzing the Historic Photographs of Mongolia (第3回プロジェ
クトワークショップ) への参加)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクト の代表者・分担者など

科学研究費 (基盤研究 (A)) 「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」(研究代表者：小長谷有紀)
研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」(拠点代表
者：池谷和信) 拠点構成員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点

黒田賢治 [くろだ けんじ] ————— 特任助教

1982年生。【学歴】北海道大学文学部人文科学科卒 (2005)、北海道大学文学研究科修士課程退学 (2006)、京都大学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程 (五年一貫制) 修了 (2011) 【職歴】日本学術振興会特別研究員
(DC) (2008-2011)、京都大学科学研究員 (2011-2012)、京都大学東南アジア研究所特別研究員 (2011-2012)、カリ
フォルニア大学中近東研究所客員研究員 (2011-2012)、日本学術振興会特別研究員 (PD) (2012-2015)、広島大学
総合科学研究科研究員 (2015-2016)、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員 (2016) 【学位】博士
(地域研究) (京都大学大学院 2011) 【専攻・専門】中東地域研究、イスラーム研究 【所属学会】宗教と社会学会、
日本文化人類学会、日本中東学会、IUAES

【主要業績】

[単著]

黒田賢治

2015 『イランにおける宗教と国家——現代シーア派の実相』 京都：ナカニシヤ出版。

[論文]

黒田賢治

2017 Pioneering Iranian Studies in Meiji Japan: Between Modern Academia and International Strategy. *Iranian Studies* 50(5): 651-670.

[学位論文]

黒田賢治

2011 『現代イランにおけるイスラーム国家と法学界の研究——イスラーム指導体制下の宗教と政治をめぐって』 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科。

【2019年度の活動報告】

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月2日 「情動の政治と個人の変容——イランにおける帰還民兵の事例から」 第53回日本文化人類学会研究大会、東北大学川内キャンパス

・研究講演

2020年1月30日 「現代イランにおける40年の殉教物語——死の社会化と国家の『神話』形成」 第300回民博研究懇談会、国立民族学博物館

2020年2月16日 「アメリカ・イラン関係の現代的展開——立憲革命からトランプと知の『内方浸透』から考える」 研究ワークショップ『ポスト・オリエンタリズムから考えるイランと日本』 上智大学四谷キャンパス

・展示

2019年6月6日～9月10日 企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」

◎調査活動

・国内調査

2019年10月6日～10月8日—鹿児島県（戦争の記憶保存と博物館展示をめぐるイランとの比較調査）

2020年3月16日～3月18日—佐賀県（明治・大正期の日本の巡礼船事業に関する資料調査）

・海外調査

2019年12月14日～30日——イラン（テヘラン市、アーモル市、エスファハーン市にて科研課題についての調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学非常勤講師

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

菅野美佐子 [かんの みさこ]——特任助教

【学歴】 総合研究大学院大学博士後期課程修了（2007）【職歴】 国立民族学博物館外来研究員（2007-2010）、日本学術振興会・特別研究員（RPD）（2010-2013）、青山学院女子短期大学・非常勤講師（2012-2016）、東京福祉大学講師（2016-2017）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員（2017-

2020)【専攻・専門】文化人類学、南アジア地域研究、ジェンダー

【主要業績】

[論文]

Kanno M.

2017 Dynamics of working Housewives in Contemporary Rural Uttar Pradesh. In T. Awaya and M. Muzuki (eds.) *Women's Work in South Asia in the Age of Neo-Liberalism*, pp.9-23. Tokyo: The Center for South Asian Studies and Tokyo University of Foreign Studies.

菅野美佐子

2017 「親密圏と公共圏のはざまにある仕事——北インド農村の女性の暮らしと福祉事業」『多民族社会における宗教と文化』20：3-15.

【2019年度の活動報告】

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「グローバルなアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究」（研究代表者：杉田映理（大阪大学））研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

田中鉄也 [たなか てつや]————— 特任助教

1979年生。【学歴】関西大学文学部哲学科卒業（2004）、関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了（2006）、関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了（2014）【職歴】関西大学マイノリティ研究センターリサーチアシスタント（2009-2010, 2012-2013）、日本学術振興会特別研究員（DC）（2013-2014）、日本学術振興会（PD）（2014-2016）、アジア太平洋無形文化遺産研究センターアソシエイトフェロー（2016-2017）、日本学術振興会海外特別研究員（2017-2018）、デリー大学社会科学科臨時研究員（2017-2018）、ロンドン大学東洋アフリカ研究所客員研究員（2018）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員／国立民族学博物館南アジア研究拠点特任助教（2018-）【専攻・専門】博士（文学）（関西大学大学院 2014）

【主要業績】

[単著]

田中鉄也

2014 『インド人ビジネスマンとヒンドゥー寺院運営——マールワリーーにとっての慈善・喜捨・実利』東京：風響社。

[論文]

田中鉄也

2018 「コミュニティの実体化と女神巡行——インド・カルカッタのカースト団体を事例に」『宗教と社会』24：33-47。

2016 The State and the Transformation of Religion: Marwari Merchants and Hindu Temple Management. *FINDAS Research Paper* 4: 1-33.

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

田中鉄也

2019 「女神に付与された複数の公共性——北インドの宗教的な慈善団体とヒンドゥー寺院」石森大知・二羽典之編『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』pp.391-430, 横浜：春風社。

2020 Trustee, State and Stakeholder: Hindu Temple Management in Contemporary India, 1957 - 2012.

[その他]

田中铁也

2020 「コメント：娯楽メディアと宗教表象——インド映画に現れた宗教世界を中心に」『宗教研究』93：132-134。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年3月7日 「インド司法が描く『宗教』——ラーニー・サティール寺院をめぐる裁判を事例に」2019年度第4回研究会、京都大学稲盛財団記念館

2019年10月13日 「18～19世紀におけるマールワリー商人の北インド内陸交易の諸相」第2回「僧院の政治経済」研究会、龍谷大学大宮キャンパス

◎調査活動

・海外調査

2019年8月9日～8月26日—インド（科研プロジェクト「宗教組織の経営プロセスについての文化人類学的研究」に係る現地調査（デリー、コルカタ、ヒサル他））

2019年10月2日～10月8日—インド（南アジア地域研究打ち合わせ（デリー大学）、資料調査（NMML）、現地調査（Devasar Hindu Temple））

2020年1月29日～2月15日—インド（コルカタ市における祭礼の変容に関する調査（コルカタ）、資料調査（National Library, NMML）、現地調査（New Market, Devasar Hindu Temple））

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「宗教組織の経営プロセスについての文化人類学的研究」（研究代表者：藏本龍介（東京大学）研究分担者、関西大学研究拠点形成支援経費「法の支配と法多元主義」（研究代表者：西澤希久男（関西大学）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学非常勤講師

・アウトリーチ

2019年12月21日 「インド都市社会における家族と宗教の今」『今月の主人公』天正寺。

2019年8月3日 「インド人ビジネスマンによつてのカーストと宗教」『今月の主人公』天正寺。

■人間文化研究機構総合情報発信センター・「人文知コミュニケーター」

大石侑香 [おおいし ゆか]———特任助教

【学歴】 首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻社会人類学教室博士前期課程修了（2009）、首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻社会人類学教室博士後期課程単位取得退学（2016）【職歴】 日本学術振興会—特別研究員DC1（2009）、日本学術振興会—特別研究員PD（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター特任助教（2018）、人間文化研究機構総合情報発信センター特任研究員（2018）【学位】 博士（社会人類学）（首都大学東京大学院 2018）【専攻・専門】 社会人類学、文化人類学 シベリア北方少数民族の生業文化、社会・文化変容、北極域研究、毛皮のグローバルヒストリー【所属学会】 日本文化人類学会、日本シベリア学会、東京都立大学・首都大学東京社会人類学会、生態人類学会、北極環境研究コンソーシアム、ヒトと動物の関係学会

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[分担執筆]

Юка Оиси

2019 Глава3 История человека в Арктике. In Хироки Такакура, Ёсихиро Иидзима, Ванда Игнатъева,

Александр Фёдоров, Масанори Гото and Тосикадзу Танака (eds.) *Вечная мерзлота и культура: Глобальное потепление и Республика Саха (Якутия), Российская Федерация* (Center for Northeast Asian Studies report 24) pp.18-19. Sendai: Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University.

[論文]

藤岡悠一郎・大石侑香・田中利和・ヴィノクロヴァ・N

2020 「サハ共和国・ゴルヌイ郡におけるサハの野生ベリー類採集」『北海道立北方民族博物館研究紀要』29: 31-51。[査読有]

Д. Бйамбаджав, Т. В.Литвиненко, Ю. Ойши, М. Сиотани and Х. Такакура

2019 Трансформация горнодобывающего предприятия и ее влияние на окружающую территорию: опыт Японии и уроки для России. *Староосвоенные районы: генезис, исторические судьбы, современные тренды развития. Отв. редактор В.Н. Стрелецкий. Материалы сессий экономико-географической секции* 35: 280-290。[査読有]

[その他]

大石侑香

2019 「トナカイと生きる——西シベリア・ハンティの生業研究」『Wendy (全国版)』364: 11。

2019 「厳粛で、愉しげな、ハンティのクマ遊び」『月刊みんぱく』43(10): 10-11。

2019 「西シベリアの牧畜犬」『BIOSTORY』32: 72-73。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月15日 'Flexibility and Adaptability of Freshwater Fishing in the Inland Forest Area of Siberia.' 3d International and interdisciplinary Conference on Tungus Studies "Social Interactions, Language, Landscape in Siberia and China", Blagoveshchensk, Russia

2019年6月8日 「移りゆくハンティのアイデンティティと階層性」第5回日本シベリア学会研究大会、同志社女子大学

2019年6月28日 'Perception Gaps between Local Inhabitants and Scientists on the Decrease in Population of Fish in Western Siberia.' UArctic workshop "The Experience - Exchange Workshop on 'Thematic Network on Collaborative Resource Management and Monitoring'", Hokkaido University

2019年10月24日 'History of fresh water fishery in Ob' River system from the viewpoint of Khanty.' "The Fifth Biennial Conference of East Asian Environmental History (EAEH 2019)", National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan

・広報・社会連携活動

2019年6月30日 「地の果てへ（講演）」国立民族学博物館・大阪大学主催『みんぱくディスカバリー・ツアー』国立民族学博物館

2019年7月28日 「フィールドワークに挑戦！——マイナス40℃の暮らし」みんぱく夏やすみ子どもワークショップ、国立民族学博物館

2019年8月12日 「だれのぼうし？ どんなぼうし？」みんぱくワークショップ、国立民族学博物館

2019年11月7日 「つくって かぶって みんぱく・ぼうし工房」『ミュージアムキッズ！全国フェア2019』国立淡路青少年交流の家

2020年1月19日 「ハンティの文様の世界——フェルトのコースターづくり」みんぱくワークショップ、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2019年5月23日～5月28日—ロシア（Arctic Science Summit Week 2019に参加）

2019年6月11日～6月17日—ロシア（人間文化研究機構「北東アジア地域研究」の活動の一環として、第3回国際学際ツングース会議に参加し、研究発表を行う）

2019年8月27日～9月3日—ロシア（サハ共和国マガラス村にて採集活動と毛皮生産・流通の調査）

2019年10月23日～10月28日—ロシア（National Cheng Kung University で開催される The Fifth Biennial Conference of East Asian Environmental History (EAEH 2019) に参加し研究

発表を行う)

2020年2月9日～2月21日—ロシア(サハ共和国ヤクーツクおよびマガラス村にてヤクーチヤの毛皮産業の歴史と技術に関する調査)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(若手研究)「肉食性動物のドメスティケーション——毛皮産業近代化における人と動物の関係の変化」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業:東北大学東北アジア研究センター拠点『東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット』」(研究代表者:高倉浩樹(東北大学))メンバー、北極域研究推進プロジェクト「ArCS: Arctic Challenge for Sustainability」(研究代表者:深澤理郎(国立極地研究所/海洋研究開発機構))メンバー

客員教員

■人類基礎理論研究部

宇陀則彦 [うだ のりひこ] ————— 教授

【学歴】図書館情報大学図書館情報学部卒(1989)、図書館情報大学大学院図書館情報学研究科修士課程修了(1991)、筑波大学大学院博士後期課程工学研究科修了(1994)【職歴】図書館情報大学図書館情報学部助手(1994)、図書館情報大学総合情報処理センター講師(1999)、図書館情報大学図書館情報学部助教授(2001)、筑波大学図書館情報学系助教授(2002)、筑波大学図書館情報メディア系准教授(2011)【学位】博士(工学)(筑波大学 1994)【専攻・専門】図書館情報学・知識情報学【所属学会】情報処理学会、情報知識学会

【主要業績】

[共著]

宇陀則彦

2017 「世界の知識に到達するシステム」逸村 裕・田窪直規・原田隆史編『図書館情報学を学ぶ人のために』pp.214-224, 京都:世界思想社。

[論文]

森 彩乃・松村 敦・宇陀則彦

2019 「分類動作を取り入れたウェブ検索支援システムの構築」『情報処理学会第81回全国大会講演論文集』pp.419-420, 東京:情報処理学会。

Uda, N., C. Mizoue, S. Donkai and S. Ishimura

2018 Information Seeking Behaviors of Older Adults in a Public Library in Japan. *LIBRES* 28(1): 1-12.

【受賞歴】

2007 情報知識学会論文賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化資源の人文社会情報学的研究——高度情報化とデータベースの連携

・研究の目的、内容

今年度はドキュメント展示のための博物館資料を選択するため、国立民族学博物館のデータベースと他機関のデータベースを横断的に利用し、展示文脈の形成可能性について考察する。近年、ヨーロッパに代表されるように、文化資源の情報を大規模な範囲で集約し、提供する動きが加速している。日本でも2019年2月に日本が保有する書籍、文化財、メディア芸術等の様々なコンテンツをまとめて検索できるジャパンサーチ(試験版)が公開された。人間文化機構も2008年より nihuINT という横断検索システムを提供しているが、ジャパンサー

チより一世代前のシステムであり、国立民族学博物館のデータ提供の在り方を再考する必要がある。そこで、展示文脈を形成するという視点から nihuINT とジャパンサーチを利用し、国立民族学博物館データベースの特長と課題について考察する。

・成果

国立民族学博物館は設立当初から情報化に取り組み、データベース提供の先進性は世界的にみても評価が高い。データベースの提供は情報技術の発展に伴って変化させる必要があり、一度作成すれば終わりというわけではない。時間軸としてみると、構築の時代、共有の時代、集約の時代と進んできた。構築の時代は博物館ローカルでデータベースを提供した時代、共有の時代は nihuINT に見られるように複数機関で横断検索できるようにした時代、そして現在は Europeana や Japan Search など巨大ポータルサイトに集約する時代であるといえる。国立民族学博物館はどの時代においても常に最前線にあり、時代ごとの問題を率先して解決してきた。最も大きな成果は多様な資料のメタデータを共通メタデータとしてマッピングし、提供してきたことである。これは主に共有の時代の成果であるが、集約の時代においてもより洗練された形で Japan Search に提供している。今後の課題は、短期的にはトリプルアイエフ (IIIF: International Image Interoperability) への対応、中長期的にはデータベースの多様性と集約のバランスをどうとるかであろう。

■人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

原 大介 [はら だいすけ] 教授

1965年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒業（1989）、国際基督教大学大学院教育学研究科修了（1991）、シカゴ大学大学院言語学科修了（2003）【職歴】愛知医科大学看護学部専任講師（2000）、愛知医科大学看護学部助教授（2004）、愛知医科大学看護学部教授（2007）、豊田工業大学工学部教授（2010）【学位】博士（言語学）（シカゴ大学大学院、2003）【専攻・専門】音韻論、形態論、手話言語学 【所属学会】日本言語学会、日本手話学会、日本特殊教育学会、日本英語学会

【主要業績】

[論文]

Hara, D.

2016 An Information-based Approach to the Syllable Formation of Japanese Sign Language. In M. Minami (ed.) *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, pp.457-482. Boston, MA: GRUYTER MOUTON.

原 大介

2010 「手話言語研究はどうあるべきか——捨象と抽象」『手話学研究』19：29-41。

2009 「手話」中島平三監修・今井邦彦編『言語学の領域II』（シリーズ朝倉「言語の可能性」2）pp.72-98, 東京：朝倉書店。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語における音節構造の成り立ちとその適格性条件に関する研究

・研究の目的、内容

日本手話は、「手型」、「手の位置」、「手の動き」の3つのカテゴリに属する要素と「掌の向き」、「指先の方向」、「利き手の接触」等のいくつかのマイナーな要素が音節構成素として関与している。各カテゴリにはそれぞれ有限個の要素が存在するが、カテゴリ間の要素結合は自由ではなく数学的に可能な組み合わせの多くが不適格な音節と判定される。本研究では、どのような要素結合が適格な日本手話音節形成を可能にし、どのような要素結合が日本手話音節の不適格性の原因となるのかを明らかにすることを目的とする。目的達成のため、適格音節・不適格音節のそれぞれを収録したデータベース（以下DB）を作成している。2019年度は、(1)適格音節および不適格音節の両DBの精緻化・拡充化作業、(2)両DBのデータをインプットとして機械学習を行い、その結果を援用しながら日本手話音節の音素配列論の検討を行った。

・成果

1) 適格音節および不適格音節の両DBの精緻化・拡充化作業

適格音節 DB、不適格音節 DBに登録する音節は、複数の日本手話母語話者に適格性を判定してもらっている。2019年度は、その前年度に新たに協力を求めた日本手話母語話者が行った適格性判定結果を、それ以前の日本手話母語話者が行った判定結果に加え、あらためて適格性判定作業を行った。その結果、適格音節 DBに約3000個、不適格音節 DBに約250個が登録された。

2) 日本手話音素配列論の検討

日本手話音節は、片手のみが関与する音節と両手が関与する音節が存在する。両手が関与するものには、両手手話が同じ音節（タイプ1、タイプ2）と両手手型が異なる音節（タイプ3）が存在する。タイプ3は利き手・非利き手の手型が異なり、利き手のみが動くという特徴がある。本研究ではタイプ3音節に焦点をしぼり、その音素配列論をいくつかの方向から検討した。

- (1) 適格音節 DB を利用して、タイプ3の利き手・非利き手に現れる手型と頻度を求め、それをもとに各手型の情報量およびタイプ3に現れる両手組み合わせの情報量を求めた。またタイプ3に現れる左右の手の接触の有無も記録した。情報量の高い手型同士の組み合わせは存在しないことは本研究者の過去の研究により明らかになっているが、一定数の音節を収録したDBの情報を利用し再調査した結果、タイプ3の両手手型の組み合わせの可否は情報量により規定されていることが確認できた。また新たに、利き手・非利き手の手型の伸ばされている指の本数が両手手型の組み合わせの可否に関与していることが分かった。すなわち、1手型（人差し指のみが伸びている手型）、I手型（小指だけが伸びている手型）等の1本指手型同士の組み合わせは存在しない。L手型（親指と人差し指のみが伸びている手型）、U手型（人差し指と中指のみが伸び、指と指の間を閉じている手型）、V手型（人差し指と中指のみが伸び、指と指の間を開いている手型）、Y手型（親指と小指のみが伸びている手型）等の2本指手型同士の組み合わせは、極わずかの例外を除いて存在しないことが分かった。
- (2) 掌の向き、中手骨の方向が組み合わさったものを「手の構え」と規定し、タイプ3の利き手すべてと非利き手に現れる主要な手型がかかわる手の構えを調査した。その結果、手の構えとして可能なものは、1つの手型に対して利き手の場合最大90通り、非利き手の場合は最大72通りあるが、実際には非利き手に現れる手の構えは、B手型（5指を伸ばし指と指の間を閉じた手型）を除いて、3～4通りしか存在しないことが分かった。利き手に現れる手の構えは非利き手と比較しバラエティに富んでいる。1手型やB手型のように10余通りの手の構えを持つものがある一方で、タイプ3に現れる利き手手型の3/4は、手の構えが3通り以下であった。
- (3) タイプ3音節の中には調動中に利き手の手型が変化するものがある（手型変化音節）。本研究では、手型変化音節の変化前の手型と変化後の手型を抽出し2つの手型の間にどのような関係があるかを検討し始めた。
- (4) 前年度に行った調査により、タイプ3音節は顎よりも下の位置で表されなければならないことが分かっている（例外は複数形態素を含む音節または身振り等で表される模倣による音節）。日本手話では、顎から下で利用可能な位置は、身体前面のニュートラルスペース（NS）と胴体（TK）の2つだけである。しかし、これら2つの位置と利き手と非利き手の2つの手を組み合わせた4通りの可能性のすべてが許されているかどうかは分かっていなかった。今年度の研究では、顎の下から腰までの位置をA-zoneと定め、A-zone内で存在できる利き手・非利き手の位置を調べた。その結果、以下のことが明らかになった。
 - ・両手はともにNSに位置することができる
 - ・両手はともにTKに位置することができる。ただし、その場合、それぞれの手はTKに直接接触するか、非利き手がTKに接触し、利き手はTKに接触した非利き手に接触しなければならない（＝利き手・非利き手は、TKに直接的または間接的に接触しなければならない）。
 - ・利き手がNS、非利き手がTKに位置することができる。
 - ・利き手がTK、非利き手がNSに位置するものは存在しない。
- (5) 適格音節 DB と不適格音節 DB をインプットとして機械学習を行い、音素配列論検討の一助とした。具体的には畳み込みニューラルネットワークおよび決定木を利用した。決定木は5層、10層、15層、20層、25層、30層の各パターンの機械学習を行った。そのうち、タイプ3の5層と10層の結果を分析し音素配列論の検討に取り入れ、以下の知見を得た。
 - ・非利き手U手型の中手骨上方向は許されない。
 - ・利き手O手型（5指のそれぞれの関節を中程度に曲げ各指先をお互いに接触させた手型）は手型変化音節にしか現れない。
 - ・非利き手B手型は掌後ろ向き・中手骨下方向の構えは許されない（例外は「大分」のみ）。

上記の研究成果（またはその一部）は、以下の研究費助成を受けている。

1. 科学研究費（基盤研究（B））2018年度～2021年度（予定）「音節構成要素の組み合わせに基づいた日本手話音節の適格性について」（課題番号：18H00671：研究代表者：原 大介）
2. 科学研究費（基盤研究（S））2017年度～2020年度「多用途型日本手話言語データベース構築に関する研究」（課題番号17H06114：研究代表者 工学院大学・長嶋祐二教授）
3. 科学研究費（基盤研究（C））2017年度～2019年度「日本手話における文末指さしの指示対象に関する統語研究」（課題番号17K02691：研究代表者 日本大学・内堀朝子教授）
4. 科学研究費（挑戦的研究（萌芽））2019年度～2021年度（予定）「手話言語版 MLAT（現代言語適正テスト）の開発と活用」（課題番号19K21764：研究代表者 大阪大学・中野聡子講師）
5. 科学研究費（基盤研究（C））2019年度～2022年度（予定）「日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明」（課題番号19K00592：研究代表者 国立民族学博物館・相良啓子特任助教）
6. 科学研究費（基盤研究（B））2019年度～2023年度（予定）「学術手話通訳者を対象とした日本手話習得再教育プログラムの開発」（課題番号19H01702：研究代表者 大阪大学・中野聡子講師）

◎出版物による業績

[論文]

- Watanabe, K., Y. Nagashima, D. Hara, Y. Horiuchi, S. Sako and A. Ichikawa
2019 Construction of Japanese Sign Language Database with Various Data Types. *HCI International 2019-Posters*, pp.317-322.
- 市川 薫・長嶋祐二・堀内靖雄・原 大介
2019 「『一体的リズム』と『分析的リズム』——実時間対話機能に関する試論（ヒューマンコミュニケーション基礎）」『電子情報通信学会技術研究報告 = IEICE technical report: 信学技報』119(179)：7-12。
- 市川 薫・長嶋祐二・堀内靖雄・原 大介・酒向慎司
2019 「超高齢化時代が対話システムに求める物理層の基礎的特性（第10回対話システムシンポジウム）」『言語・音声理解と対話処理研究会』87：80-85。
- 高藤朋史・三輪 誠・佐々木 裕・原 大介
2020 「コーディングと動画を併用した日本手話音節の適格性予測」『言語処理学会第26回年次大会発表論文集』pp.259-262。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年5月16日 (Hara, D. and M. Miwa) 'The Well-Formedness and the Ill-Formedness of JSL Type-III Syllables', The Chicago Linguistic Society 55th Annual Meeting, The University of Chicago
- 2019年9月26日 (Hara, D. and M. Miwa) 'The Phonotactics of Type-III Syllables of Japanese Sign Language', Theoretical Issues in Sign Language Research 13 (TISLR13), The University of Hamburg Germany

・研究講演

2019年12月17日 「手話音韻論研究の視点から」早稲田大学

・広報・社会連携活動

- 2019年9月15日 「講座3 手話言語学の始まり1（二重分節性、音素の抽出）」「講座4 手話言語学の始まり2（手話言語の音素と異音）」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！」』 国立民族博物館
- 2019年12月22日 「講座9 手話言語の音素とその組み合わせ（音素配列論）」「講座10 手話言語の形態素とその組み合わせ」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！」』 国立民族博物館
- 2020年1月26日 「講座11 手話言語の動詞の種類とその成り立ち」「講座12 手話言語の文のつくり&まとめ」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！」』 国立民族博物館
- 2020年1月14日 「手話とはどのような言語か」同志社大学

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

大阪大学文学研究科「国語学講義 手話の世界と世界の手話言語☆入門」、関西学院大学「手話言語学基礎」、

■人類文明誌研究部

小長谷有紀 [こながや ゆき] ————— 教授

1957年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒(1981)、京都大学大学院文学研究科修士課程修了(1983)、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学(1986)【職歴】京都大学文学部助手(1986)、国立民族学博物館第1研究部助手(1987)、国立民族学博物館第1研究部助教授(1993)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(1993)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(1998)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授(2000)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(2003)、国立民族学博物館研究戦略センター教授(2004)、総合研究大学院大学地域文化学専攻長(2005)、国立民族学博物館研究戦略センター長(2007)、国立民族学博物館民族社会研究部長(2009-2011)、人間文化研究機構理事(2014)【学位】文学修士(京都大学大学院文学研究科1983)【専攻・専門】文化人類学【所属学会】国際モンゴル学会、日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

小長谷有紀

2014 『人類学者は草原に育つ——変貌するモンゴルとともに』(フィールドワーク選書9) 京都:臨川書店。

[共編]

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005 『中国の環境政策「生態移民」——緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか?』 京都:昭和堂。

[編著]

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義を生きた人びとの証言』(中公叢書) 東京:中央公論新社。

【受賞歴】

2016 第3回ゆとろぎ賞

2015 モンゴル国科学アカデミー 名誉博士

2013 紫綬褒章

2013 教育研究に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章(モンゴル国教育文化科学省)

2009 大同生命地域研究奨励賞

2007 モンゴル国ナイラムダルメダル(友好勲章)

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴル、中央・北アジアの遊牧文化の人類学的研究

・研究の目的、内容

〈目的〉これまで「社会主義的近代化とはなんであったか?」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化」以前の映像記録を用いて、グローバルな関係性の束を復元し、より多角的に地域像を描く。

〈内容〉19世紀から20世紀にかけて実施された、布教・軍事・商業・学術など多様なエクスペディションの記録写真を用いて、社会変容を分析する。

分析にあたっては、科学研究費(基盤研究(A))17H00897「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」により、ハンガリー、ポーランド、ロシア、モンゴル、スウェーデン、など資料整備にあたっている研究者たちと協業した。

・成果

①多様なエクスペディションの記録について整備する国際的なこれまでのチームメンバーに、イギリスおよびデンマークの研究者を加え、ロンドンおよびパリで資料調査を行い、コペンハーゲンでワークショップを実

施した。

海外での調査研究は、科学研究費（基盤研究（A））17H00897「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」による。

- ②多様なエクスペディションの記録について共有するため、スウェーデンのモンゴルミッションナリーの情報を大幅に加えて、HPを更新した。

HPの更新は、科学研究費（基盤研究（C））818K000801「スウェーデンモンゴルミッションの研究」による。

- ③多様なエクスペディションについての事典を作成するため、おおよその構成をきめ、執筆を依頼した。

◎出版物による業績

[論文]

小長谷有紀

2019 「モンゴルにおけるウマと人」『生物の科学 遺伝』75(3)：244-250。

2019 「モンゴルにおける宿营地集団の研究（3）」『沙漠研究』29(1)：11-19。

Konagaya, Y.

2019 Natural environment, social context and historical background in Mongolia. In H. Fujita and C. Guth (eds.) *Encyclopedia of East Asian Design*. London, Oxford, New York, New Delhi, and Sydney: Bloomsbury.

[その他]

小長谷有紀

2019 「みんぱく、こぼれ話^㉕ ストックホルム・ノーベル週間の悲喜劇」『TOYRO BUSINESS』184：30。

2019 「みんぱく、こぼれ話^㉖ 弾丸出張『台湾』と『ハンガリー』」『TOYRO BUSINESS』185：30。

2019 「みんぱく、こぼれ話^㉗ フィールドワークがやめられないワケ」『TOYRO BUSINESS』186：30。

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「モンゴル仏教のグローバル実践に関する学際・国際的地域研究」（研究代表者：島村一平（滋賀県立大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「スウェーデンモンゴルミッションの研究」（研究代表者：都馬バイカル（桜美林大学））研究分担者

特別客員教員

■人類基礎理論研究部

下道基行 [したみち もとゆき] ————— 准教授

【学歴】武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業（2001）、東京総合写真専門学校研究科（2003）【職歴】テレビ番組制作リサーチ会社オフィスHIT（2001-2007）、美術研究所アトリエフラン裸婦絵画コース／陶芸コース講師（2001-2005）、東北芸術東北芸術工科大学ゲスト講師（2012-2016）【学位】学士【専攻・専門】写真映像、平面表現、現代美術

【受賞歴】

2019 Tokyo Contemporary Art Award

2015 さがみはら写真新人奨励賞

2014 第1回鉄犬ヘテロトピア文学賞

2013 第6回岡山県新進美術家育成『I氏賞』大賞

2012 韓国・光州ビエンナーレ2012 NOON 芸術賞（新人賞）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

写真、動画資料の創造的な活用とアーカイブに関する研究

・研究の目的、内容

写真家／美術家の視点から、国立民族学博物館（以下、民博）が所蔵する写真や動画資料の創造的な活用法やアーカイブのありかたについて、民博に所属する研究者との議論をベースに考案し、提案を行う。

また近年、アートと人類学の協働による人文学の新地平の開拓がさげられるが、人類学における、非言語メディアを用いた研究とアートのフィールドワークのあり方を比較検討し、互いの方法論の援用や建設的な交流のありかたについての可能性を探る。

・成果

2019年度の成果としては、1月12日に国立国際美術館において開催された『民族藝術学会誌 arts/』リニューアル創刊記念・公開シンポジウム『Cosmo-Eggs・宇宙の卵（ヴェネツィア・ビエンナーレ2019日本館）：アートと人類学の交点から考える』での発表があげられる。本企画において報告者は、民博の川瀬慈准教授、秋田公立美術大学の石倉敏明准教授、愛知県美術館学芸員の中村史子等とともに、企画考案、シンポジウムでの報告・討論に関わった。シンポジウム当日は、アートと人類学のフィールドワークにおける方法論の類似点や差異、さらには協働の可能性について、自身のフィールドワーク、ならびに人類学者とのヴェネツィア・ビエンナーレ2019でのコラボレーションの経験に立脚し報告した。報告内容は、3月に発刊された『民族藝術学会誌 arts/』リニューアル創刊号に掲載された。

辻 邦浩 [つじ くにひろ]————— 教授

1965年生【学歴】 京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了（1994）【職歴】 Kunihito Tsuji Design 代表（1996-現在）、未来社会をデザインする会（2025年万国博を考える会）代表（2018-現在）、東京大学空間情報科学研究センター協力研究員（2018-現在）、国立民族学博物館特別客員教授（2018-現在）【学位】 博士（理学）【専攻・専門】 サービスデザイン、音響空間デザイン、環境デザイン、デザイン人類学【所属学会】 ヒューマンインターフェイス学会

【主要業績】

- 2010 上海万博大阪館（Water Speaker 展示）
- 2008 スペイン・サラゴサ万博日本政府館（音響デザイン・Water Speaker 展示）
- 2007 ミラノサローネ Water Speaker 個展
- 2006 ミラノサローネ MODAL Speaker 個展
- 2002 フランス・ビエンナーレ「Biennale Internationale Design Saint-Etienne」（日本代表選出）

【受賞歴】

- 2016 ヒューマンインターフェイス学会研究会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

次世代型展示案内システムの構築

・研究の目的、内容

現状の電子ガイドシステム及びビデオテークを全面改訂するための、次世代型展示案内システムの構築を行う。プロトタイプをベースに実際の運用に向けて問題点を分析・改善点をフィードバックして、来館者視点からの多様なニーズ（常設展示物及びその背景をより能動的に深く知ることや、各地域展示間の関連づけ、観覧履歴の取得によるビデオテークゾーンとの関連づけ、多言語化、シームレスな障害者誘導など）に対応できるよう運用上も踏まえたユーザーインターフェイス設計とサービスデザインを行う。

9月に開催されたICOM京都大会での民博展示ブースに於いて、プロトタイプのデモンストレーションを実施し、体験者の意見を分析しフィードバックを行う。

更にコンテンツとの有効なインタラクションを実現するための、基本要素技術に加えて応用技術を検証しそれらを技術統合して総合的なサービスブラッシュアップの検討を行う。

・成果

- 4月～7月 ・次世代電子ガイドサービスのプロトタイプ検証を踏まえての実際の運用に向けての基礎要素技術に基づくサービス項目の再検証と動作安定化の検証を行った。
- ・前年度にプロトタイプ化した基礎要素技術に加えて、ICOM 京都大会に向けて応用技術を加えたサービス実現のための統合検討を行った。
- 8月 ・ICOM 京都大会でのデモンストレーションサービスの仕様決定を行った。
- 8月末～9月 ・ICOM 京都大会での民博展示ブースに於いてデモンストレーションを実施し、体験者の意見を収集しフィードバックを行った。
- 9月～12月 ・実際の運用に向けた、電子ガイドのユーザーインターフェイス修正を行い、ビデオテークの工事に向けての仕様（素材や設計上の微修正など）の決定を行った。
- 1月～3月 ・ビデオテーク1期工事、電子ガイド運用開始前の確認や修正を行った。

■人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

武居 渡 [たけい わたる] 教授

1971年生【学歴】筑波大学第二学群人間学類卒業（1994）、筑波大学大学院心身障害学研究科中途退学（1999）【職歴】金沢大学教育学部講師（1999）、金沢大学教育学部助教授（2002）、金沢大学教育学部准教授（2007）、金沢大学人間社会研究域学校教育系准教授（2008）、金沢大学人間社会研究域学校教育系（2014-現在）、国立民族学博物館特別客員教授（2017-現在）【学位】博士（心身障害学）（筑波大学2004年）【専攻・専門】発達心理学・聴覚障害心理学【所属学会】日本特殊教育学会、日本発達心理学会、日本手話学会、日本コミュニケーション障害学会、日本聴覚言語障害学会

【主要業績】

[論文]

武居 渡

- 2016 「聴覚障害児教育をめぐる環境の変化とろう学校の課題（特集 特別支援学校における現状と教育要求）」『障害者問題研究』44(1)：26-31。
- 2012 「言語を作り出す力——ホームサイン研究・手話研究を通じて見えてくるもの」『ENERGEIA』37：1-15。
- 2008 「手話研究の現状と展望——手話研究が言語獲得研究に貢献できること」『認知科学』15(2)：289-301。

【受賞歴】

- 2010 博報児童教育振興会第4回ことばと教育 研究助成事業 優秀賞
- 2002 日本発達心理学会第11回論文賞
- 2001 日本特殊教育学会研究奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

高等教育機関・学術機関における学術手話通訳者養成のしくみの研究

・研究の目的、内容

本研究は、学会や大学の講義など高度な専門的知識を日本語から手話、または手話から日本語へと通訳できる手話通訳者の養成プログラムを開発し、実施することを通してそのプログラムの妥当性を検証するものである。その中でも、通訳者の手話能力を客観的に測定するテストは現在我が国に存在していない。そこで、今年度は、学術手話通訳者養成のスクリーニングや手話学習者の手話能力を客観的に測定できる方法を開発するための基礎資料を得ることを目的とし、手話語彙力を評価する日本手話版 WFT 課題について、ネイティブサイナーに実施し、おおよその標準値を得ることとした。

・成果

日本手話を日常的に使用している成人ろう者7名に対し、研究実施者が作成した日本手話版 WFT 課題を実施した。カテゴリー流暢性課題が5問と音韻流暢性課題5問を7名の被験者に実施し、各問1分間に表出できた手話語彙数をカウントし、その合計をその被験者の語彙力得点とした。その結果、最もスコアが高い被験者と低い被験者では2倍のスコアの差があり、成人ろう者の表出性語彙力には大きな個人差があることが明らかになった。そのため、当初標準値を得ることを目的としたが、被験者の言語的バックグラウンドが大きく異なるため、より多くの被験者で実施する必要性が明らかになった。しかし一方で、個人による成績の違いが出たことから、手話語彙力を測定するテストバッテリーとして、使用可能なものであることも明らかになった。今後改善すべき点として、音韻流暢性課題の教示を被験者に理解してもらうのに時間と手間がかかったため、より簡易に被験者が理解できる教示を考え、動画として準備することが求められた。

本研究で得られた研究成果について、日本特殊教育学会第57回大会で発表を行った。また2020年7月にオーストラリア・ブリスベンで行われる International Congress on the Education of the Deaf においても発表を行う予定である。

なお、本研究は、科学研究費（基盤研究（C））聴覚障害児の手話力を評価する総合的アセスメントパッケージの開発（課題番号17K04930 代表者：武居 渡）の助成を得て行われた。

◎出版物による業績

[論文]

武居 渡

2019 「第3章 手話言語を獲得する」全日本ろうあ連盟編『手話言語白書——多様な言語の共生社会をめざして』pp.44-57, 東京：明石書店。

2019 「第3章 手話言語を獲得する」全日本ろうあ連盟編『手話言語白書——多様な言語の共生社会をめざして』pp.60-63, 東京：明石書店。

2019 「第3章 手話言語を獲得する」全日本ろうあ連盟編『手話言語白書——多様な言語の共生社会をめざして』pp.66-69, 東京：明石書店。

[その他]

武居 渡

2019 「書評：中島武史著『ろう教育と「ことば」の社会言語学——手話・英語・日本語リテラシー』』『ことばと社会——多言語社会研究』21：136-140。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月21日 「日本手話版語彙流暢性検査の開発②——成人ろう者の基礎データから」日本特殊教育学会第57回大会、広島大学

2019年8月25日 「講座1 ろう児の手話獲得過程」「講座2 手話と認知科学」『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう!』』国立民族博物館

2019年9月6日 「講座5 ろう教育の現状と課題」「講座6 手話を活用した日本語指導」『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう!』』国立民族博物館

・研究講演

2019年8月8日 2019年度東日本地区国語問題研究協議会（石川大会）話題提供者、ホテル金沢

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「聴覚障害児の手話力を評価する総合的アセスメントパッケージの開発（課題番号17K04930）」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

群馬大学教育学部客員教授

■グローバル現象研究部

縄田浩志 [なわた ひろし] 教授

1968年生。【学歴】早稲田大学第一文学部史学科東洋史学専攻卒業（1992）、ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所民俗学科ディプロマ課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士課程修了（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻博士課程修了（2003）【職歴】鳥取大学乾燥地研究センター講師（2004）、国立民族学博物館特別客員准教授（2007）、総合地球環境学研究所客員准教授（2007）、鳥取大学乾燥地研究センター准教授（2007）、総合地球環境学研究所准教授（2008）、秋田大学新学部創設準備担当教授（2013）、秋田大学国際資源学部教授（2014）、秋田大学大学院国際資源学研究科教授（2016）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学 2003）【専攻・専門】資源管理学、文化人類学、社会生態学、地域研究（中東・アフリカ）、乾燥地研究、環境影響評価、村落開発、人間・家畜関係論【所属学会】日本沙漠学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本中東学会、日本ナイル・エチオピア学会、国際社会・自然資源学会（The International Association for Society and Natural Resources、アメリカ）

【主要業績】

[共編著]

縄田浩志・篠田謙一

2014 『砂漠誌——人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』神奈川：東海大学出版部。

[編著]

Nawata, H. (ed.)

2015 *Human Resources and Engineering in the Post-oil Era: A Search for Viable Future Societies in Japan and Oil-rich Countries of the Middle East.* (Arab Subsistence Monograph Series 3) Kyoto: Shokado.

2013 *Dryland Mangroves: Frontier Research and Conservation.* (Arab Subsistence Monograph Series 2) Kyoto: Shokado.

【受賞歴】

2015 大同生命地域研究奨励賞

2003 日本沙漠学会奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中東における自然資源の管理と物質文化の変容に関する研究

・研究の目的、内容

本研究では、アフロ・ユーラシア乾燥地全域を対象としつつ、とりわけサハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、アラビア半島、イランに位置する5つの異なるオアシスにおける生活の持続と変容について、物質文化に焦点をあてて検証することにより、沙漠社会の移動戦略の比較研究を推進する。注目する物質文化は、(1)ラクダと船に関わるモノ（陸域と海域の連続性）、(2)飲料と食料に関わるモノ（食品保存と運搬性）、(3)衣装と住居に関わるモノ（熱帯と温帯・寒帯の対称性）である。これらの物質文化の検討をもとに、人類の進化と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という3つの観点から沙漠社会の移動戦略を解明する。並行して、片倉もとこ（文化人類学者／地理学者）によるアラビア半島に関する現地調査資料（1968-2008）、小堀巖（地理学者）によるアルジェリア・サハラ沙漠に関する現地調査資料（1968-2010）といったおよそ半世紀前に記録・収集された学術資料を活用して、生活空間・物質文化・移動戦略の関係性とその変化についても検証していく。

・成果

最終年度4年度は、中心研究テーマごとに議論を深化させていった。

主な研究成果は、以下の3点にまとめられる。(1)本研究会の成果をもととして、企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」(2019年6月6日～9月10日)また同巡回展(横浜ユーラシア文化館、2019年10月5日～12月22日)を開催。(2)本研究会の主要な成果として書籍『サウジ

アラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』（河出書房新社、縄田浩志編、2019年6月6日）を出版。(3)本研究会メンバーが中心的役割を担って、国際シンポジウム「サウジアラビアと日本をつなぐ文化交流のこれから」（横浜情文ホール、2019年11月17日）を開催。なお、外部資金との関わりにおいては、企画展は片倉もとこ記念沙漠文化財団、横浜ユーラシア文化館との共催、書籍発行は片倉もとこ記念沙漠文化財団、国際シンポジウムは片倉もとこ記念沙漠文化財団、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」秋田大学拠点、サウジアラビア遺産観光庁を主催として、本研究会と日本学術振興会科学研究費助成事業「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」等との共催において実施した。

◎出版物による業績

[編著]

縄田浩志編

2019 『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 東京：河出書房新社。

[その他]

縄田浩志

2019 「ワーディ・ファーティマの人びと——半世紀の変化をおって」特集「サウジアラビア、女性の暮らしの半世紀」『月刊みんぱく』43(6)：2-3。

2019 「アラビア半島のオアシスに生きる女性たちの50年——文化人類学者、片倉もとこ現地調査資料から」『横浜ユーラシア文化館ニュース』32：4-5。

2019 「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——5 写真」『毎日新聞』12月4日。

2019 「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——6 水くみ」『毎日新聞』12月14日。

2020 「企画展『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年』関連イベントを通じて——大学生が伝える、現地で学んだ中東文化のいま」『きざし』4：16。

2020 「銀と金からみるアラビア衣装」『鉱業博物館だより』17：2-4。

Nawata, H.

2019 Exploring 50 Years of Livelihood and Landscape Change in Wadi Fatima, Saudi Arabia: Ethnographic Collections of Motoko Katakura, a Japanese Female Cultural Anthropologist. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 49: 11-12.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年11月17日 「ワーディ・ファーティマ地域の景観、物質文化、社会の変化をたどる」国際シンポジウム『サウジアラビアと日本をつなぐ文化交流のこれから』横浜情報文化センター

2019年11月17日 「企画展示『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年』について」（西尾哲夫、竹田多麻子との共同発表）国際シンポジウム『サウジアラビアと日本をつなぐ文化交流のこれから』横浜情報文化センター

・共同研究会

2019年7月20日 「モロッコの自然環境、農業、物質文化——ナイル河岸、アラビア半島との比較の視点から」『物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究』国立民族学博物館

2020年1月25日 「アフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略」『物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究』国立民族学博物館

2020年1月25日 「企画展示『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年』に対する一般来館者の反応」（西尾哲夫、竹田多麻子、藤本悠子との共同発表）『物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月1日 「文理融合／異分野連携の中東地域研究——人文学がつなぐ研究と実践の事例より」日本中東学会第35回年次大会公開講演会『中東地域における多元的資源観の醸成を目指して』秋田市にぎわい交流館 AU

2019年5月25日 「サウディ・アラビア、ワーディ・ファーティマ地域の景観変遷復元を目的とした古写真の利用について——片倉もとこ調査写真の追跡調査（2018年12月～2019年1月）から」（渡邊三津

子、遠藤仁、石山俊、Anas Mohammed Melihとの共同発表) 日本沙漠学会第30回学術大会、東京農業大学世田谷キャンパス

2019年6月3日 'Management Methods of the Alien Invasive Species Mesquites (*Prosopis* Spp.) in Regional Socio-Ecological Zones in Eastern Sudan.' The 25th International Symposium on Society and Resource Management (ISSRM) "Sustainability and the Land Ethic in the Anthropocene" June 2-7, 2019, University of Wisconsin Oshkosh, Oshkosh, United States

2019年9月25日 'Exploring 50 Years of Livelihood and Landscape Change in Wadi Fatima, Saudi Arabia: Ethnographic Collections of Motoko Katakura, a Japanese Female Anthropologist.' The National Museum, Riyadh, Kingdom of Saudi Arabia

2019年10月20日 「西アジア・北アフリカ乾燥地における半世紀前のフィールド調査資料を活かす」日本沙漠学会2019年度秋季シンポジウム『半世紀前の写真資料の研究活用——サウディ・アラビア、ワーディ・ファーティマ地域における再調査から』横浜情報文化センター

・みんぱくゼミナール

2019年6月15日 「物質文化から見た沙漠社会——アラビア半島オアシスの半世紀」(西尾哲夫、遠藤仁との共同発表) 第492回みんぱくゼミナール

・展示

2019年6月6日～9月10日 企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」

2019年10月5日～12月22日 巡回展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」横浜ユーラシア文化館

・広報・社会連携活動

2019年11月3日 「サウジアラビアのコーヒー文化」イベント『遊牧民のテントでアラビア文化を体験!』コーヒー体験講座、横浜情報文化センター

2019年12月1日 「オアシスを生き抜く知恵」企画展示『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年』について』(坂田隆との共同発表) 調査関係者による連続講座第1、横浜ユーラシア文化館、横浜市

2020年2月25日 「イスラーム世界の香りの文化」香り体験講座(竹田多麻子との共同発表)『LABTALK SESSION 22』石巻IRORI

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年6月9日 「物質文化から見た沙漠社会——アラビア半島オアシスの半世紀」(西尾哲夫との共同発表) 第545回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究「現代中東地域研究推進事業」秋田大学国際資源学部拠点研究代表者、科学研究費(基盤研究(B))(海外学術調査)「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」研究代表者、科学研究費(新学術領域研究(研究領域提案型)『学術研究支援基盤形成』)研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」(課題番号16H06281、中核機関:国立民族学博物館)の支援による資料整理「地域研究画像デジタルライブラリ(略称DiPLAS)採択プロジェクト研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本沙漠学会沙漠誌分科会会長、日本沙漠学会評議員、日本沙漠学会編集委員、日本ナイル・エチオピア学会評議員、片倉もところ記念沙漠文化財団代表理事、国連砂漠化対処条約専門家(日本、人類学・社会学分野)、秋田市環境審議会委員

■学術資源研究開発センター

大坂 拓 [おおさか たく] ————— 教授

1983年生。【学歴】明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業（2006）、明治大学大学院文学研究科博士前期課程修了（2008）、明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学（2011）【職歴】宮城県教育庁文化財保護課（2011）、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究職員（2015）【学位】修士（考古学）（明治大学大学院 2008）【専攻・専門】考古学【所属学会】日本考古学協会、考古学研究会、北海道考古学会

【主要業績】

〔論文〕

大坂 拓

- 2019 「浜益地域のアイヌ民具資料に関する基礎的検討——1930年代の研究動向と工芸家山下三五郎の活動」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』4：1-24。
- 2019 「アイヌ民族の編袋——地域差と年代差、及び『土産物』・『伝統工芸品』としての継承」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』4：25-60。
- 2018 「北海道アイヌの「死者用靴」——日高東部地域の東方系出自集団に固有の死装束とその周辺」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』3：51-72。

【受賞歴】

2015 北海道考古学会奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

近現代におけるアイヌの物質文化の変容に関する研究

・研究の目的、内容

日本国内の博物館等に収蔵されるアイヌ民族の民具資料について、地域単位の組成比を検討することによって、和人の急速な流入の中で生じた文化変容の地域差を明らかにできるとの見通しを持っている。本年度は、文化変容の中で保守的な反応を示す可能性が想定できる葬送儀礼用品の中から、特に遺体包装用紐及び葬儀用品結束用紐に着目し、網羅的な資料集成と分類によって、基本的な地域差の枠組みを明らかにするとともに収集地の通時的な変化を明らかにすることを目指した。

・成果

現存する遺体包装用紐のうち、背景情報が伴う国内所在資料約400点を調査し、その成果を研究論文「北海道アイヌの葬送用広紐に関する基礎的検討——製作技術の地域差と日高東部地域における東方系・西方系出自集団との関係」（『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』5号）として発表した。編みの技術に着目した分類を行った結果、日高地方東部では10本編みの特定のタイプが卓越し、一部、15本編みが僅かに混在することが確かめられた。これは従来、同地域で実施された民族調査の中に、menasunkur（東方系出自集団）が10本編みを用い、sumunkur（西方系出自集団）が15本編みを用いるとする記録が存在することと整合的な結果である。一方で、隣接する胆振地方では、8本編み、10本編み、12本編み等、多様なタイプが存在しており、日高東部に存在した規範意識は共有されていないことが明らかになった。従来の研究では menasunkur/sumunkur を、北海道を二分する地域集団と見なし、様々な文化的境界が日高地方に位置すると見る見解があったが、遺体包装用紐に関しては、それぞれの出自集団に特徴的とされるタイプの分布は日高地方東部の狭い範囲に留まっている。今後、その他の文化要素と比較することで、更なる議論の深化が期待される。

関連資料の調査にあたっては、科学研究費（若手研究）（18K12558）「考古学的分析手法を導入した博物館収蔵アイヌ民具資料の基礎的研究」を使用した。

◎出版物による業績

〔論文〕

大坂 拓

2020 「渡島半島のアイヌ社会と民具資料収集者の視野——旧開拓使函館支庁管轄地域を中心として」『北

海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』5：47-80。〔査読有〕

- 2020 「北海道アイヌの葬送用広紐に関する基礎的検討——製作技術の地域差と日高東部地域における東方系・西方系出自集団との関係」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』5：23-46。〔査読有〕

〔その他〕

大坂 拓

- 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 捕鯨用の銛先」『朝日新聞』9月4日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 樹皮衣」『朝日新聞』9月11日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 葬送儀礼用の紐」『朝日新聞』9月18日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 儀礼用の冠」『朝日新聞』9月25日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 木のクジラ」『朝日新聞』12月4日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ キツネ神の舟」『朝日新聞』12月11日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 脚絆」『朝日新聞』12月18日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 死後の世界に携える鞆」『朝日新聞』12月25日。
 2020 「アイヌの美 アンカナルピリカ サクリ・セトゥル」『朝日新聞』2月5日。
 2020 「アイヌの美 アンカナルピリカ 前掛け」『朝日新聞』2月19日。
 2020 「アイヌの美 アンカナルピリカ 手直しされた着物」『朝日新聞』2月26日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年7月4～5日「民具資料観察の方法」アイヌ民族文化財団担い手育成事業講師

◎調査活動

- ・国内調査

- 2019年5月22～23日—北海道稚内市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年6月4～5日—北海道標津町・同根室市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年6月7日—北海道小樽市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年6月11日—北海道別海町（アイヌ民具資料の調査）
 2019年6月18～19日—北海道浦河町・同新ひだか町（アイヌ民具資料の調査）
 2019年6月25日—北海道留萌市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年6月27～28日—北海道函館市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年7月25～26日—秋田県にかほ市・同秋田市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年7月30～31日—北海道札幌市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年8月2日—北海道乙部町（アイヌ民具資料の調査）
 2019年8月6～7日—北海道木古内町・同知内町（アイヌ民具資料の調査）
 2019年8月19～20日—青森県青森市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年8月31日—北海道旭川市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年9月5～6日—東京都台東区（アイヌ民具資料の調査）
 2019年9月13日—北海道松前町（アイヌ民具資料の調査）
 2019年10月1～2日—東京都台東区（アイヌ民具資料の調査）
 2019年11月21日—北海道平取町（アイヌ民具資料の調査）
 2020年1月29日—北海道森町（アイヌ民具資料の調査）

■学術資源研究開発センター

田森雅一〔たもり まさかず〕——— 准教授

【学歴】 東京大学大学院総合文化研究科後期博士課程・単位取得満了（2005年3月）【職歴】 東洋英和女学院大学（1999年4月～現在）、埼玉大学（2000年4月～現在）、慶應義塾大学（2012年4月～2015年3月）、千葉大学（2012年4月～2014年3月）、東洋大学（2014年4月～現在）、埼玉学園大学（2014年4月～2017年3月）、東京外国語大学（2015年4月～現在）などの非常勤講師を兼任。現在、東京大学大学院総合文化研究科・学術研究員（2012年4月～現在）および国立民族学博物館・特別客員教員（2016年4月～現在）【学位】 博士（学術）（東京大学大学院総合文

化研究科 2011)【専攻・専門】社会人類学・比較文化論・南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本口承文藝学会、東洋音楽学会

【主要業績】

[単著]

田森雅一

2015 『近代インドにおける古典音楽の社会的世界とその変容——「音楽すること」の人類学的研究』東京：三元社。

[論文]

Tamori, T.

2008 The Transformation of *Sarod Gharānā*: Transmitting Musical Property in Hindustani Music. In Y. Terada (ed.) *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71), pp.169-202. Osaka: National Museum of Ethnology.

田森雅一

1998 「都市ヒンドゥー命名儀礼における主体構築と命名慣習の変容」『民族学研究』63(3)：302-325。

【2019年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

グローバル化と南アジア音楽文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、グローバル化された“地続きの世界”における南アジアと欧米・日本という、より拡大された空間における「音楽文化と宗教・社会関係・ジェンダー」の動態について検討することにある。より具体的には、ヒンドゥーとイスラームが共生する南アジア社会、特にインドとパキスタンの国境の砂漠地帯のラージャスターンをルーツとする音楽芸能カーストのローカルな社会関係と、音楽家たちのトランス・ローカルな活動・ネットワーク形成を調査・検討することで、近代における音楽伝統・社会組織の再生産およびグローバル化のあり方について明らかにすることにある。

・成果

ラージャスターン地方の村落に生活の基盤を置き、支配カーストの人生儀礼や村落の祭礼において音楽演奏を生業としてきた世襲楽師たちは、インド独立にともなう藩王制度の廃止とともにパトロンとの間に築き上げてきた持続的な関係を失った。彼らの多くは演奏機会を求めて都市に移住し、その技芸を存続させてきたが、音楽教師やラジオ局付音楽家といった職業のポストは限られ、一回限りのコンサートやホテルでの観光客相手のイベントへの出演で安定した生計を立てるのは困難であった。そのような状況が変化したのは、1980年代からのインドの経済開放というグローバル化の流れのなか、個人的なネットワークを頼って海外に演奏機会を求める者たちが増加してからである。

本研究ではこのような実態をとらえるために、ラージャスターン州の州都ジャイプルからフランスに渡って成功をおさめた伝統的楽師一族に対する継続的な調査を行ってきた。この一連の調査は、「南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点MINDAS(拠点代表：三尾 稔)」の海外調査資金援助によって2014年から継続されているもので、複数のインフォーマントへのインタビューにより、インドのグローバル化の流れの中で、彼らがどのようなネットワークを築き上げ、音楽演奏の機会を見い出してインドとヨーロッパを往来して今日に至っているのかという課題のもと、本年度も継続調査を行った。

これらの調査結果の一部は、2019年度MINDAS合同研究会において、「グローバル化とローカルポリティクス——ラージャスターンのムスリム楽師カーストを事例として」のタイトルのもとに発表した。

さらに、インドにおける音楽芸能カーストの形成に、大きな影響を与えたと考えられる英領インド帝国期の民族誌や国勢調整について検討し、「日本文化人類学会・第53回研究大会」で発表した。また、「東洋音楽学会・第70回大会」において、インド独立前後に活躍した女性芸能者の再評価を行い発表した。この二つの発表は、当方が研究代表を務める科学研究費(基盤研究(C))「南アジアにおける女性芸能者の特質とスティグマに関する文化人類学的研究」(課題番号：18K01165)の成果の一部である。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月1日 「英領インド帝国期の民族誌における音楽芸能カーストの結晶化とその余波——北インドの女性芸能者を中心に」日本文化人類学会第53回研究大会、東北大学

2019年7月27日 「グローバリゼーションとローカルポリティクス——ラージャスターンのムスリム楽師カーストを事例として」MINDAS 合同研究会、国立民族学博物館

2019年11月17日 「時代を駆け抜けた二人のインド女性芸能者——ゴウハル・ジャンとマダム・メナカ」東洋音楽学会・第70回大会、京都市立芸術大学

◎調査活動

・海外調査

2019年8月30日～9月6日—フランス（パリ市にて、インドのラージャスターン州ジャイプル市出身で音楽芸能グループを率いてフランスなどヨーロッパで活動する代表者3名及歌手・楽器奏者などにインタビューを行い、彼らのネットワークや出身地域における親族関係・社会組織等に関する聞き取り調査を実施した）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MIND-AS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

平井康之 [ひらい やすゆき] ————— 教授

1961年生。【学歴】京都市立芸術大学デザインコース卒（1983）、英国王立芸術大学院修士課程修了（1992）【職歴】コクヨ株式会社本社設計部（1983）、コクヨ株式会社家具事業本部オフィス家具部商品開発課（1988）、コクヨ株式会社人事部長（1990）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品開発室主任（1992）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長補佐（1995）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長（1997）、IDEO Product Development Senior Designer（1997）、IDEO Product Development Grand Rapids Studio（米国）Senior Designer（1998）、九州芸術工科大学芸術工学部助教授（2000）、九州大学大学院芸術工学研究院助教授（2003）、九州大学大学院芸術工学研究院准教授（2007）【学位】博士（芸術工学）（九州大学 2016）、修士（英国王立芸術大学院 1992）【専攻・専門】デザイン専攻【所属学会】日本インテリア学会、日本デザイン学会、芸術工学会

【主要業績】

[共著]

平井康之・藤 智亮・野林厚志・真鍋 徹・川窪伸光・三島美佐子

2014 『知覚を刺激するミュージアム——見て、触って、感じる博物館のつくりかた』東京：学芸出版社。

ジュリア・カセム・塩瀬隆之・森下静香・水野大二郎・小島清樹・荒井利春・岡崎智美・梅田亜由美・小池 禎・田邊友香・木下洋二郎・家成俊勝・桑原あきら

2014 『インクルーシブデザイン』京都：学芸出版社。

朝廣和夫・尾方義人・古賀 徹・近藤加代子・谷 正和・田上健一・富板 崇・平井康之

2012 『デザイン教育のススメ——体験・実践型コミュニケーションを学ぶ』東京：花書院。

【受賞歴】

2014 2014年度グッドデザイン賞（研究活動・研究手法カテゴリー）

2014 第8回キッズデザイン賞（子ども視点の安全安心デザイン 子ども部門）

2013 「ユニバーサル都市・福岡賞 みんなにやさしい部門」最優秀賞（こども×くすり×デザイン実行委員会）

2013 The Include Asia Conference Awards「Champion of Inclusive Design」賞

2013 IAUD アワード2013 入賞「みんなの美術的プロジェクト」

2010 第4回キッズデザイン賞（ソーシャルキッズサポート部門）

2009 2009年度グッドデザイン賞（パブリックコミュニケーションデザイン部門）

- 2009 第3回キッズデザイン賞（コミュニケーションデザイン部門）
- 2008 2008年度グッドデザイン賞（子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
- 2008 第2回キッズデザイン賞（リサーチ部門、子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
- 2003 三菱オスラム LED デザインコンテスト審査員奨励賞
- 2002 富山プロダクトデザインコンペティション入選
- 2002 2002年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Full Metal Jacket Chair）
- 1996 1996年度グッドデザイン賞（シナジアシリーズ）
- 1996 海南デザインコンペティション大賞（健康器具バンボレオ）
- 1996 1996年度レッド・ドット賞〈ドイツ・エッセンデザインセンター〉（インタープレイスシリーズ）
- 1994 1994年度グッドデザイン賞（インタープレイスシリーズ）
- 1993 第2回旭川国際家具デザインコンペティション入選（インタープレイスシリーズ）
- 1993 コクヨ株式会社功労賞（インタープレイスシリーズ）
- 1992 1992年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Perch Chair, Stacking Table）
- 1991 1991 Office Design Competition, EIMU, Milano, Italy 入選

【2019年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

ユニバーサルミュージアム構築の理論と実践

Theory and Practice for Universal Museum Planning

・研究の目的、内容

本研究では、民博が目指すユニバーサルミュージアム構築にむけて、障がい者をはじめ、外国人や高齢者、その他鑑賞が難しい多様な来館者を対象に研究を進める。具体的には情報部会と共同で、「来館者視点からの情報化」をテーマにデジタル触地図の展示室への設置を昨年度に引き続き進める。

・成果

デジタル触地図の展示室への設置計画を進めた。これまで取り組んでいたFLASHの改修版からHTML5へ基本システムの根本的見直しによるシステム改修を完了した。さらに2階展示場の南アジア地域展示入口へ2号機の設置を行った。

これまで本プロジェクトは、研究活動として成果の公表を行ってきた。これまでの来館者調査プロセスは、「博物館情報学シリーズ5 ミュージアム・コミュニケーションと教育活動、2018年」、「知覚を刺激するミュージアム——見て、触って、感じる博物館のつくりかた、学芸出版社2014年」の著書に紹介している。

また、触知案内板に関しては、「案内装置」として昨年度、特許取得が完了した。

特許庁のアブストラクトには、「デジタルを活用した新たな触地図デザインで、「国立民族学博物館文化資源プロジェクト「次世代ユニバーサルミュージアム展示空間における多様な来館者の知覚鑑賞開発と評価研究」の成果を元にしたものである。発明の名称は、案内装置で、特許番号は、特許第6528306号、特許権者は、大学共同利用法人人間文化研究機構である。発明者として平井康之を筆頭に富本浩一郎、吉田憲司、日高真吾、山中由里子と共同開発したものである」と記述されている。学会発表も「富本浩一郎、平井康之、博物館におけるインタラクティブな触地図の開発の研究、Museum 2015, 2015年」を行い、現在デザイン学会作品集（論文と同等の扱い）に申請中である。

外国人研究員

ADI, Prasetijo [アディ プラセティージョ] ————— 准教授

任期：2019年9月1日～2019年10月31日

研究課題：森林資源の変化と狩猟採集民の社会的レジリエンス—インドネシアの事例

【学歴】 B. A., Archaeology, University of Gadjjar Mada, Indonesia (1997), M. A., Anthropology, University of Indonesia, Indonesia (2005), Ph.D, Anthropology, Universiti Sains Malaysia, Malaysia (2014) 【職歴】 Senior Lec-

turer, Faculty of Humanities, Diponegoro University, Indonesia (2016) 【専攻・専門】 人類学

【主要業績】

[単著]

Adi, P.

2015 *Orang Rimba, True Custodian of the Forest*. Kota Jambi: ICSD and KKI WARSI.

[論文]

Adi, P.

2017 Living Without the Forest: Adaptive Strategy of Orang Rimba. In K. Ikeya (ed.) *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa*(Senri Ethnological Studies 95), pp.255-278. Osaka: National Museum of Ethnology.

2017 Livelihood Transformation of the Orang Rimba as Tacit Resistance in the Context of Deforestation. *Endogami: Journal Ilmiah Kajian Antropologi* 1(1): 1-13.

2015 Pergerakan Sosial: Antara Marxian dan Non Marxian. *Jurnal Antropologi: Isu-Isu Sosial Budaya* 17 (1): 65-70.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

森林資源の変化と狩猟採集民の社会的レジリエンス—インドネシアの事例

・研究の目的、内容

外国人研究員 Adi Prasetijo の2ヵ月の滞在において、以下のような研究活動を行った。

- ・ 日常の研究においては、受け入れ教員は今回の研究テーマである「森林環境の変化と狩猟採集民・ポスト狩猟採集民の対応」に関する議論を行った。
- ・ 外国人研究員は、滞在中に3回の研究報告を行った。①民博の研究懇談会（9月25日）、②民博でのアジアの狩猟採集民に関する国際ワークショップ（10月19日）、そして③総合地球環境学研究所での泥炭湿地プロジェクトのなかでの研究会（10月21日）である。
- ・ 受け入れ教員は、とりわけ②の国際ワークショップを企画しており、外国人研究員の報告では研究枠組みの提示と基礎文献の追加などの点から連盟の形で報告することができた。

・成果

1) 民博にとっての研究成果の意義

- ・ 民博は、近現代の狩猟採集民を対象にした研究の世界的なセンターの一つになっている。過去40年間において合計で20冊の狩猟採集民研究論集を刊行している組織は質と量において世界ではみられない。しかしながら、これまでインドネシアの狩猟採集民の研究は皆無であった。今回は、現在進行している科研のパレオアジアプロジェクト（代表：野林厚志）との共同研究のもとに、民博の研究基盤のさらなる強化につながった。
- ・ 現在、民博で進行している北東アジア地域研究プロジェクトへの貢献である。今回の研究員は東南アジアの専門家であったが、「森林環境の変化と狩猟採集民・ポスト狩猟採集民の対応」は、北東アジア地域の沿海州、シベリアのタイガ、北海道の森林などでの事例と共通の論点を提供する。そして、2つの地域を比較することで初めて北東アジア地域の特色を理解することができた。
- ・ 国内においては、民博と他の研究機関とのネットワーク形成にも有効であった。②の研究会では、清水展（日本文化人類学会会長）や加藤真二（奈良文化財研究所・研究員）、大澤隆将（総合地球環境学研究所・研究員）などが参加している。同じ人間文化機構内の地球研での研究報告も同様な成果となっている。
- ・ 総合研究大学院大学の院生が、①および②の研究会に参加をしていた。このことは、彼らに国際的な視野を広げる機会になった。

2) 今後の展開

- ・ 国際共同研究：北東アジアや東南アジアなどの地域研究のなかではなく、世界のなかでアジアを位置づけるような国際共同研究を展開していくことを計画している。これまで、今回の研究テーマにおいては、欧米の研究者が中心となり研究が展開してきたが、アジアの研究者が自らの国内のフィールド経験から世界を語る時代になっている。2021年7月に国際狩猟採集社会会議（ダブリンにて）が開催される予定である。その際には、アジアから世界を展望するようなセッションを受け入れ教員は設ける予定である。このことは、今回

の分野における国際的研究センターとしての民博の存在をさらに高めることにつながるであろう。

GOPALAN, Ravindran [ゴーパーラン ラヴィンドラン]——教授

任期：2020年1月31日～2020年4月15日

研究課題：民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

【学歴】 パッチャイヤッパ大学植物学部卒（1980）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部修士課程終了（1982）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部哲学修士課程終了（1984）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部博士課程終了（1991）【職歴】 マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部講師（1984）、名古屋大学大学院国際開発研究科外国人客員研究員（1993）、マノンマニヤム・スンドラナル大学コミュニケーション学部准教授（1995）、マレーシア大学コミュニケーション学部講師（2002）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部教授（2008）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部学部長（2008）【学位】 博士（マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部 1991）、哲学修士（マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部 1984）、修士（マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部 1982）【専攻・専門】 コミュニケーション学

【主要業績】

[論文]

Gopalan, R.

2018 Human Rights and Contemporary Indian Journalism: Towards a “Journalism for People.” *Human Rights Education in Asia-Pacific* 8(1): 181-196.

2017 Philosophical and Anthropological Explorations of Digital/New Media Materialities, *Mizoram University Journal of Humanities and Social Sciences* 3(2): 1-7.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

・研究の目的、内容

ゴーパーラン・ラヴィンドラン教授は、「民衆のためのジャーナリズム」journalism for the peopleの取組みの一つとして、ダリット（不可触民）の伝統的な太鼓をもとに創られた新しい音楽ジャンル（タッパータム）の調査研究を進めるとともに、この演奏を学生パフォーマンスグループの活動に取り入れ、カーストによるインド社会の分断を乗り越えるための挑戦的な活動を継続している。民博での招聘期間中、比較研究を目的として、大阪の被差別部落で結成された和太鼓集団の活動の調査を行った。両者は、偏見や差別の対象となった楽器を戦略的に用いて創られた新しい表現形式である点や、解放に向けた政治運動と一定の距離を保ちながらも、音楽を媒介とした新しい社会運動の形を模索している点などで共通している。ラヴィンドラン教授は両者の類似点と差異を、コミュニケーション学の観点から検討し、その成果を延期となった特別研究の国際シンポジウムに反映させる計画である。なお、新型コロナウイルスの流行にともなうインドのロックダウンにより、当初の予定通りに帰国することができず、2020年6月22日まで日本に滞在した。

JOHNSON, Robert Erik [ジョンソン ロバート エリック]——講師

任期：2019年5月18日～2019年7月13日

研究課題：日本手話の音声学的研究——「動き」の諸類型

【学歴】 スタンフォード大学心理学部卒（1967）ワシントン州立大学人類学研究科言語学専攻博士課程終了（1975）

【職歴】 ギャローデット大学名誉教授（2014）【学位】 博士（人類学）（ワシントン州立大学 1975）【専攻・専門】 言語学

【主要業績】

[共著]

Patrie, C. J. and R. E. Johnson

2011 *Fingerspelled Word Recognition: A Rapid Serial Visual Processing Approach*. San Diego: Dawn Sign Press.

[論文]

Johnson, R. E.

2015 El Bilingüismo y el aprendizaje: Sobre las bases culturales en modelos educacionales basados en el habla para chicos sordos con implantes cocleares que impiden la discusión acerca de la variabilidad. In Ruggiero, F. (coordinadora) *Una mirada transversal de la sordera*, pp.109-148. Buenos Aires: COPIDIS.

Johnson, R. E. and S. K. Liddell

2012 Towards a Phonetic Representation of Hand Configuration: The Thumb. *Sign Language Studies* 12 (2): 316-333. [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話の音声学的研究——「動き」の諸類型

・研究の目的、内容

民博における研究環境の提供および国内の諸研究者とのハブの役割を担った。とくに、他大学・機関等での講演につないだり、部門のメンバーによる日本手話に関する情報の提供を行った。また、現在進行中の部門メンバーの研究内容を紹介することにより、氏が構築しつつある手話言語分析のための新たな分析理論への情報を提供した。

・成果

ジョンソン氏は退職後も手話言語学研究的国際的な拠点であるギャローデット大学と連絡をとりつつ、在職中に構築された手話言語の音韻に関する理論を見なおし、記述のための新しい枠組みを構築されつつある。まだ形が固まっていない発展中の理論を理解するには、構築している研究者自身の説明を聞く必要があり、かつ、それがその研究者へのフィードバックにもなる。民博在任中、手話言語の音韻の記述方法に関する考え方を適宜伺ったり、手話言語学部門関係者および外部の研究者と一緒にジョンソン氏による3日間のセミナーに参加し、最新の音韻理論に関する講義を聞く機会ができたことは、民博の各個人にとっても、部門としても、今後、記述的な側面に重点をおきつつ、手話言語研究を進めてゆく上で大変有意義であった。また、受け入れ担当者個人的には、在任中を通じて、部門代表者としての立場で、日本における手話言語研究の動向と部門としてのアプローチに関する状況について、国際的な手話言語研究の動向を踏まえつつコメントをいただくことができた。これを踏まえて、民博における今後の研究の進め方や部門の在り方の展開を考えてゆくために、大変参考になった。

MOROZOVA, Irina [イリーナ モロゾフ]————— 教授

任期：2019年9月1日～2019年11月29日

研究課題：中央・北アジアにおける社会主義的近代化

【学歴】 ロモノソフ記念モスクワ国立大学アジアアフリカ研究所（1997）、ロモノソフ記念モスクワ国立大学アジアアフリカ研究所修士課程終了（1999）、ロモノソフ記念モスクワ国立大学アジアアフリカ研究所博士課程終了（2002）【職歴】 IIAS 国際アジア研究所研究員（2003）、ライデン大学研究員（2004）、IIAS 国際アジア研究所講師（2006）、ロモノソフ記念モスクワ国立大学アジアアフリカ学研究所講師（2006）、ベルリン・フンボルト大学アジアアフリカ学研究所 PI（2010）、ライブニッツ記念南および南東ヨーロッパ地域研究所研究員（2014）レーゲンスブルグ大学南東および東ヨーロッパ史部門研究員（2015）【学位】 博士（ロモノソフ記念モスクワ国立大学 2002）、修士（ロモノソフ記念モスクワ国立大学 1999）【専攻・専門】 歴史学

【主要業績】

[単著]

Morozova, I.

2009 *Socialist Revolutions in Asia: The Social History of Mongolia in the Twentieth Century*. London and New York: Routledge.

[論文]

Morozova, I.

2019 Post-Colonialism, 'Kazakh Autocracy' and International Oil Companies' Representation in Atyrau. In P. Rabé and W. Vogelsang (eds.) *Spatial Dynamics in Infrastructural Investment in Central Asia: Revival, Decline, Centers and Periphery*. Amsterdam: Amsterdam University [査読有]

2018 Review on "Collectivization and Social Engineering, Soviet Administration and the Jews of Uzbekistan, 1917-1939" by Zeev Levin in *Jahrbuecher fuer Geschichte Osteuropas. Jgo.e-reviews* 8: 31-33 [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中央・北アジアにおける社会主義的近代化

・研究の目的、内容

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの一環として実施している「中央・北アジアの物質文化に関する研究——民博の標本資料を中心に」に即して、以下のような研究活動を行った。

1) 休館日に展示場に赴き、展示ケースを開け、標本資料の内部や裏面などを熟覧した。

2) 民博のデータベース（標本資料目録、標本資料詳細情報）をチェックし、記載情報の確認ならびに修正点等のリストアップをおこなった。

3) 収蔵庫に入り、中央・北アジアの社会主義に関わる標本資料を熟覧した。

データベースを活用することにより、精細なデジタル画像のおかげで暗い収蔵庫内での総覧よりも精密な観察・分析が可能になったことは特筆に値する。これらの活動に基づいて、すでに論文を執筆しており、年内に本館の研究報告に投稿する予定である。

また、本館と北東アジア地域研究のネットワーク先である北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの招きにより同センターを訪問し、社会主義時代におけるカザフスタンの石油開発について学術報告をおこない、それらの成果を含めて論文にまとめた。

・成果

社会主義時代の政治・経済・文化、とりわけ民博が標本資料を収集した時代の専門家として、民博の所蔵・展示する標本資料を熟覧し、それらの具体的な資料に基づき、物質文化の観点から、社会主義という普遍的な政治的影響のもとでローカライズされた社会主義文化の実態について学術的論文を執筆した。その論文は、'Normativity against uniformity in late- and post-socialist Central Asia and Mongolia' という題目で、『国立民族学博物館研究報告』に投稿予定である。

同論文の刊行により、本館における資料収集という営為の学術的価値がより一層深まると考えられる。

ARAUJO, Samuel [アラウジョ サミュエル]——教授

任期：2020年2月24日～2020年3月12日

研究課題：音楽実践、公益、社会的共存

【学歴】 パライバ連邦大学（ブラジル）音楽学部卒（1981）、イリノイ大学ウルバナ・シャンペイン校音楽学部修士課程修了（1987）、イリノイ大学ウルバナ・シャンペイン校音楽学部博士課程修了（1992）【職歴】 リオデジャネイロ連邦大学音楽学・音楽教育学部講師（1995）、リオデジャネイロ連邦大学音楽学・音楽教育学部助教授（2003）、リオデジャネイロ連邦大学音楽学・音楽教育学部准教授（2011）、シカゴ大学音楽学部客員教授（2014）、リオデジャネイロ連邦大学音楽学・音楽教育学部教授（2016）【学位】 博士（イリノイ大学 1992）【専攻・専門】 民族音楽学

【主要業績】

[論文]

Araujo, S.

- 2019 Music, Research and Public Interest: A Dialogical Praxis for Social Justice. In U. Hemetek and M. Kölbl (eds.) *Ethnomusicology Matters: Influencing Social and Political Realities*, pp.77-92. Wien: Böhlau Verlag. [査読有]
- 2017 From Neutrality to Praxis; The Shifting Politics of Applied Ethnomusicology in the Contemporary World. In J. C. Post. (ed.) *Ethnomusicology: A Contemporary Reader Vol. II*, pp.67-79. New York/London: Routledge. [査読無]
- 2009 Ethnomusicologists Researching Towns They Live in: Theoretical and Methodological Queries for a Renewed Discipline. *Музикологија* (Musicology) 9: 33-50. [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

音楽実践、公益、社会的共存

・研究の目的、内容

サミュエル・アラウジョ教授は、出身国のブラジルを主なフィールドとして、コンフリクトの緩和、解消における音楽の役割について長年研究を続けてきた民族音楽学者である。同教授は、受入担当教員が2018年度から代表を務める民博特別研究「パフォーマンス・アーツと積極的共生」の国際研究協力者であり、2020年3月開催の国際シンポジウム *Performing Arts and Conviviality* で基調講演を行う予定であった。民博滞在中は、受入教員および同特別研究の国際研究協力者であるゴーパーラン・ラヴィンドラン教授（マドラス大学、民博外国人研究員）とともに、特別研究プロジェクトのテーマや研究の進め方について議論を重ねた。

・成果

アラウジョ教授は、特別研究プロジェクトに関連する国内外の研究や民博での研究活動を、文献や映像番組の精査を通して把握し、自らの研究との接点や共通性を確認した。特に、特別研究のキーワードである *conviviality* の有効性や射程について、ラヴィンドラン教授や受入教員と議論を重ね、シンポジウムにおける議論の方向性を明確化することができた。残念ながら、新型コロナウイルス拡散防止のために国際シンポジウムが延期され、同教授もこれを受けて時期を早めて帰国したため、基調講演の形で成果の公開はかなわなかったが、今回の滞在経験は、2020年度に延期された国際シンポジウムで生かされるはずである。

SOMFAI, David Istvan [ショムファイ デイビッド イシュトヴァン]——講師

任期：2018年11月1日～2019年9月30日

研究課題：モンゴルと北東アジアのシャーマニズムに関する博物館フィールドワーク——過去と現在

【学歴・学位】 B. A., Mongolic Studies and Turkic Studies, ELTE Budapest University, Hungary (1999)、M. A., Mongolic Studies and Turkic Studies, ELTE Budapest University, Hungary (2000)、Ph. D., Altaic Linguistics, ELTE Budapest University, Hungary (2007) 【職歴】 Assistant Researcher, Institute of Ethnology, Hungarian Academy of Sciences, Hungary (2007)、Lecturer, Department of Inner Asia, ELTE Budapest University, Hungary (2009)、Researcher, Institute of Ethnology, Hungarian Academy of Sciences, Hungary (2009)、Visiting scholar, Department of Central Eurasia Studies, Indiana University, USA (2010)、Researcher, Institute of Ethnology, Hungarian Academy of Sciences, Hungary (2010-) 【専攻・専門】 Turkic and Mongolic Philology, Inner Asian Folklore, Shamanism

【主要業績】

[論文]

Somfai, D. I.

- 2019 Museum and Exhibition Reviews. *Shaman* 27: 161-176.
- 2017 The Swan Dance: a Kazakh Healing Ritual from the Syr-Darya Region (field report). *Shaman* 25: 197-206.

2017 The Tree of Life according to an Altay-kizhi (Telengit) Epic Song. In A. Mátéffy and G. Szabados (eds.) *Shamanhood and Mythology*, pp.405-412. Budapest: Hungarian Association for the Academic Study of Religion.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴルと北東アジアのシャーマニズムに関する博物館フィールドワーク——過去と現在

・研究の目的、内容

シャーマニズム研究にとって北東アジアは中核的地域であり、また北東アジアにとってもシャーマニズムは重要な要素である。そのため本館でも中央アジア・北アジア展示においてシャーマニズム関係資料は点数も多く、かなりの面積を占めている。一方、ハンガリーはヨーロッパにおいて独特の言語を有することからアジア研究とりわけミハイ・ホッパールに代表されるようにシャーマニズム研究が盛んであり、現在でも学術誌“Shaman”が刊行されている。そこで、民博に収蔵・展示されている中央アジア・北アジア・東アジア（アイヌ）などの地域に関連する民博のシャーマニズム関連資料について、ハンガリー人研究者バラートシらによる調査資料と照合することによって、詳細な学術情報を付加するという国際共同研究を行った。

受け入れ教員と協働して、本館該当資料のリストアップ、標本資料の熟覧、バラートシによる調査（1908-1914）を確認するための現地調査、北東アジア地域研究やフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト（中央・北アジア、アイヌ資料関連）との連携などを進めながら、2つの国際ワークショップ（2019年9月14日〔中央・北アジア〕、15日〔アイヌ資料関連〕）の実施に際しては、両日研究活動成果を発表した。

・成果

本館所蔵のシャーマニズム資料約96点について、20世紀初頭の現地調査に関するハンガリー語旅行記（本館所蔵）と照合することにより、データベース用として詳細な学術情報を付加したリストが作成された。同時に、従来の記載の誤りが訂正された。また、詳細不明だったモンゴル資料を中心に、本館コレクションの重要性が上述誌で紹介された。

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトにとって、シベリア少数民族のように危機言語の場合は、ソースコミュニティそのものが消滅の危機にあるため、過去の学術調査記録が極めて有益である。過去の学術調査記録を活用して情報を得るばかりでなく、ソースコミュニティへの還元も果たすことができた。

WONG, Deborah Anne [ウォン デボラ アン]——教授

任期：2019年7月9日～2019年8月17日

研究課題：民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

【学歴】 ペンシルヴァニア大学音楽学部卒（1982）、ミシガン大学音楽学部修士、博士一貫課程修了（1991）【職歴】 ポモナ大学音楽学部助教（1991）、ペンシルヴァニア大学音楽学部助教（1993）、プリンストン大学音楽学部客員助教（1994）、カリフォルニア大学リヴァーサイド校音楽学部助教（1996年）、カリフォルニア大学リヴァーサイド校音楽学部准教授（1999）、シカゴ大学音楽学部客員准教授（2002）、カリフォルニア大学リヴァーサイド校音楽学部教授（2004）【学位】 博士（ミシガン大学 1991）【専攻・専門】 民族音楽学

【主要業績】

[単著]

Wong, D.

2019 *Louder and Faster: Pain, Joy, and the Body Politic in Asian American Taiko* (American Crossroads series). Los Angeles: University of California Press. [査読有]

2004 *Speak It Louder: Asian Americans Making Music*. New York: Routledge. [査読有]

2001 *Sounding the Center: History and Aesthetics in Thai Buddhist Ritual*. Chicago: University of Chicago Press. [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

・研究の目的、内容

受入担当教員が代表を務める特別研究プロジェクト「パフォーミング・アーツと積極的共生」では、2020年3月19日～22日に国際シンポジウムを開催すべく準備を進めている。デボラ・ウォン教授は、これまでも本プロジェクトの国際共同研究員として基本方針の策定に参加しており、プロジェクト期間を通してその推進、運営に携わることを内諾している。受入期間中には、シンポジウムの内容・構成について受入担当教員とともに検討し、シンポジウムに向けた準備研究集会（8月6日開催）では、特別研究のテーマに関する理論的背景と北米南カリフォルニア州における事例についての発表を行った。さらに、受入担当教員とともにマイノリティ集団の集住地域2箇所（大阪市大正区の沖縄人コミュニティ、同生野区の在日コリアン・コミュニティ）を訪れ、シンポジウムの第4日目に予定しているエクスカージョンの可能性を地元関係者と協議した。

・成果

ウォン教授は、受入担当教員と共同で、シンポジウムの基本概念である「積極的共生」に関する関連業績を整理し、シンポジウムの構成の策定と招聘者の選定を行った。特に、招聘候補者の業績を精査し、シンポジウムのテーマとの整合性を検討する作業に大きく貢献した。この結果、基調講演者を含む招聘候補者の選定を完了することができた。ウォン教授は、今後もシンポジウムの企画・運営に継続的に関わり、シンポジウム終了後も成果論集の編集に携わることを内諾している。

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は「特別研究」「共同研究」「各個研究」という3種類の研究を柱としている。

「特別研究」は、2016年度から始まった第3期中期計画・中期目標期間の6年間を通じて、「現代文明と人類の未来——環境・文化・人間」を統一テーマに、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究である。

「共同研究」は、ある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究をおこなう活動で、本館の研究活動の柱の1つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。特別研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導でおこなうのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募もおこなっている。応募された共同研究の提案は、館内募集、公募の区別なく共同利用委員会で審査され、採択される。共同研究会（一般）には、文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む幅広いテーマを対象とし、挑戦的で、新領域開拓につながる研究である「新領域開拓型」と、本館の所蔵する資料（標本資料、文献資料、映像音響資料等）に関する研究である「学術資料共同利用型」の2つのカテゴリーがある。また、若手研究者の育成・支援を目的として、39歳以下の若手研究者を代表者とする共同研究（若手）も同様に公募している。

「各個研究」は、教員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究であるが、館の公的な研究活動の一環に組み入れられている。

2014年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革をおこなった結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けており、若手研究者の育成支援もおこなっている。

館の研究活動である「特別研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが、館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者には「研究成果公開プログラム」という枠組みがあり、特別研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、特別研究プロジェクト、26件の共同研究、約70件の各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。研究に客観性を担保していくためにも、科学研究費助成事業などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体等による奨学寄付金なども積極的に受け入れている。これら外部資金に付随する間接経費は貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

本館における研究成果公開の主軸のひとつである刊行物に関しては、2019年度には『国立民族学博物館研究報告』44巻1号～4号が刊行されるとともに、SES (Senri Ethnological Studies) No. 101, 102、SER (『国立民族学博物館調査報告』または Senri Ethnological Reports) No. 149, 150、TRAJECTORIA Vol. 1、『民博通信 Online』No. 1が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会を、東京と大阪で開催している。

本館は開設以来40余年にわたり世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきた。それらの資料と情報を「人類の文化資源」と位置づけ、同時代の人々と共有しかつ後世に伝えるため、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら研究を推進している。特に2014年度より、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図る「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えている。初年度の2014年度は、北米先住民や韓国の文化資源等に関する4件の研究プロジェクトの活動やシステムの基本設計を開始した。2015年度は、台湾先住民や北米北方先住民に関する2件のプロジェクトが加わり、合わせて6件のプロジェクトを実施するとともに、パイロット版のデータベースを作成した。3年目となる2016年度から人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクトとして位置づけられ、3件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト4件、強化型プロジェクト7件、合計11件のプロジェクトを実施した。2018年度は、4件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト4件、強化型プロジェクト5件、合計9件のプロジェクトを実施した。2019年度は、3件の新規プロジェクトが加わり、

開発型プロジェクト4件、強化型プロジェクト6件、合計10件のプロジェクトを実施した。各プロジェクトが本館の収蔵資料のソースコミュニティなどと協働してデジタル博物館の構築を促進する取り組みを実施したことにより、本事業によって構築されたデータベース・コンテンツの格納件数が、50,142件（936,597レコード）となった。研究成果の公開促進を目的として、2018年度より新設した国際発信プログラムにより、『国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集』を2冊刊行した。開発型プロジェクトでは、ソースコミュニティの人びとや研究者を招聘した国際ワークショップを開催した。また、構築した5つのデータベースの公開を進め、プロジェクト全体の成果の国際発信と一般社会への発信に尽力した。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく4分類されている。それぞれの整備および利用状況をみると、まず標本資料は海外直接収集資料としてメキシコの民族芸術、大韓民国の衣類関連資料、国内購入資料として日本のバードカービング、漆器、ウミウの捕獲道具、アイヌの工芸品資料を収蔵した。また、北米先住民の銀製宝飾品、モンゴルの生活関連資料、メキシコの生命の木、日本の水車、神事関連資料、アイヌの人形等を寄贈受入した。

本館は、民族資料や文化財、博物館資料を対象に、一時的な非破壊分析や材質分析がおこなえる非破壊分析・材質分析装置システムを所有している。このシステムを文化人類学やその周辺領域の学問分野において、さまざまな組織や研究者がより積極的に活用でき、科学的研究に基づいた共同利用の促進に資することを目的として、共同利用科学分析室を運用している。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所 NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2019年度は、マイクロ資料2,748件（図書2,607件、新聞雑誌2タイトル141件）を登録した。週及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、Internetを介して広く公開・利用されており、2019年度は、図書館間相互利用での現物貸借受付が496件、文献複写受付は4,211件と、大学間の共同利用に貢献している。また、一般利用者への貸出冊数は1,465冊であった。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、民族学資料（標本資料、文献図書資料、オリジナル映像・音響資料、研究アーカイブズ資料）の利用に関する問合せを1つの窓口で対応することで、サービス向上を図っている。2019年度には283件の問合せに対応した。

また、蔵書点検3カ年計画の2年度目として、約22万冊の蔵書の点検を行った。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録等を公開してきた。2019年度は引き続き資料の整理作業を行い西北ネパール学術探検隊1958年データカード、木内信敬、石毛直道アーカイブの目録をWeb公開した。また、アーカイブズ文書資料の特殊性に鑑み、複写にあたっては申請者の研究内容との関連性等を総合的に判断した上で許可することや、複写の申請は原則として来館時に限ること等を明記することなど、利用方法について再検討を行い、規程改正の準備を進めた。また、近年国外からの来館者の利用申請が増加傾向にあることを踏まえ、利用申請書の英語版作成のための翻訳案検討を行った。

2-1 みんぱくの研究

特別研究

●特別研究の意義

特別研究は、2016年度から始まった第3期中期計画・中期目標期間の6年間を通じて、「現代文明と人類の未来——環境・文化・人間」を統一テーマに、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究である。

近現代のヨーロッパに発する科学・技術、政治・経済制度、社会組織、思想などからなる西欧文明は、世界の多くの国と地域に影響を与え、科学・技術の発展は、人類の生活と社会を豊かにすると信じられてきた。しかし、人口増加、環境破壊、戦争、資源枯渇、水不足、大気汚染など、大きな負の代償を人類社会にもたらしているとも言える。特に環境問題と人口増加は、解決を要する大きな課題である。このような状況において、文明に対応してきた現地社会の「知」から現代文明を問い直し、現代の人類社会が直面する諸課題の分析と解決を志向する研究として特別研究を発足させた。この特別研究は、グローバル空間・地域空間・社会空間が構成する多層的生活空間における現代的問題系として環境問題や人口をめぐる地球規模の変動をとらえ、それにアプローチすることで、旧来の（伝統的な）価値から、いかに多元的価値の共存を保障する社会を創成することができるかを解明し、人類社会にとって選択可能な問題解決を志向する未来ビジョンを提出することをめざすものである。

2019年度は、プロジェクト「食料生産システムの文明論」において、2019年3月に実施した国際シンポジウム

「Making Food in Human and Natural History」の成果刊行準備を進めた。また、プロジェクト「パフォーミング・アーツと積極的共生」において、2020年3月に国際シンポジウム「Performing Arts and Conviviality」を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から延期とし、次年度に開催することとした。そして新たに、プロジェクト「デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ」を開始し、2019年11月にみんなく公開講演会「アニメ『聖地』巡礼——サブカルチャー遺産の現在」を開催した。

2019年度特別研究一覧

プロジェクトリーダー	プロジェクト名	テーマ区分	研究年度
野林厚志	食料生産システムの文明論	食料問題とエコシステム	2017-2019
寺田吉孝	パフォーミング・アーツと積極的共生	マイノリティと多民族共存	2018-2020
飯田 卓	デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ	文化遺産とコミュニティ	2019-2021

●特別研究のテーマ区分とプロジェクト

1 テーマ区分：②食料問題とエコシステム

プロジェクトリーダー：学術資源研究開発センター 野林厚志

研究課題：食料生産システムの文明論

研究目的

人類にとって食とは生態学的、栄養学的充足を満たす以上の役割がある。すなわち、食とは最も原初的な富の形態であり、生産（採集や狩猟も含む）、貯蔵、交換といった諸行為を通じて、より大きな経済活動を構築する端緒を与えた。同時に、地域の環境と密接にむすびついた食は、土地の人々にとって社会的、文化的アイデンティティの表明となり、同時に共食や贈与交換に代表されるコミュニケーション手段の役割も果たしてきた。これらはその範囲を広げることにより、国家や共同体の統合原理を構成する要素ともなり、近年では「ガストロディプロマシー（美食外交）」に見られる国家間の経済的、政治的関係を深めるための外交手段としても注目されている。

本来、食とは個体が生命を維持するための要素であり、地球の生態循環のなかで機能するものである。したがって、現代社会における大量生産、大量廃棄という食糧資源のあつかわれかたは、これまで人類社会が経験してこなかった文明の新たな暗部ともいえる。政治経済的な脈絡の中で生態学的適応に乖離している現代社会の食の実相が生成されるメカニズムを、従来のマクロな食糧問題へのアプローチに対し、文化人類学的な切口でとらえることが本研究の主要な目的である。

本研究課題では人類が食を操作してきた営みを批判的に検討する。具体的には、食料生産のシステムが、家庭、地域社会、国家、経済地域圏をどのように接合しているのか、個々のレベルで生じる格差と食料生産、供給、消費との関係、伝統文化、食文化の維持と食料生産システムとの矛盾等を核となるテーマとして設定し、文明社会を支えてきた文化的装置として食料の生産の将来におけるありかたを見直そうとするものである。

実施状況

・国際シンポジウムの準備会合

2017年度に全体の構成を計画し、翌年度それぞれの内容に適切な内外の招聘研究者の人選を検討し、最終的な構成と内容を決定した。

・MINPAKU Anthropology Newsletterの特集編集

MINPAKU Anthropology Newsletter 47号に、「Food Culture」のタイトルでの特集を編集、刊行し、国際シンポジウム報告者への事前送付を行った。

・国際シンポジウムの開催

2019年3月17日～20日の日程で、国際シンポジウム「Making Food in Human and Natural History」を開催した。17日は、事前準備の会合と民博の見学会を、18日、19日は、国立民族学博物館において研究発表と討論を、20日は発表者、討論者による滋賀県琵琶湖東岸地域の巡見とワークショップを実施した。

この他、2019年度は出版準備をおこなった。
タイトル、内容については以下のものを想定している。

論文集タイトル

Anthropological Perspective of Making Food in Local and Global Contexts (仮)

目次

Introduction

Atsushi Nobayashi

Chapter 1. Ecology and Food

Gastronomical Goods as a Biocultural Value of Wood Pastures in Eastern Europe

Anna Varga, Nikolett Darányi, Krisztina Molnár, Noémi Ujházy

Merroir in the Making: Translation and Territorialization of Taste in Japanese Seafood Culture

Shingo Hamada

The Socio-Cultural Reception of MSG (Monosodium Glutamate) in Thailand

Yoshimi Osawa

Chapter 2. Social Context of Food

Sharing Food and Conviviality in the Mediterranean Diet. Some Ethnographic Examples

Elisabetta Moro and Rossella Galletti

Rethinking a Complex Connection between Commensality and Family: Through Japanese Cases and Italian ones.

Taeko Udagawa

Rethinking Foodscapes. Does it Matter how Food Reaches My Plate?

Cristina Grasseni

Chapter 3. Ethnicity in Foodscape

The “Making” of Hakka Cuisine: A Case Study for the Formation of Ethnic Food and its Foodscapes in Southeast China

Hironao Kawai

Tubawan and the Play of Authorial Slippage: The Sani Yi People’s Practice of Hospitality Business and the Making of Indigenous Foodscape

Rongling Ge

Translocal Foodscapes: Gastronomic Creativity in Mérida, Mexico, and Seville, Spain

Steffan Igor Ayora Diaz

Chapter 4. Food as Representation of Publicity

On the Formation of Chinese National Cuisine: Historical and Anthropological Perspectives

Haruhiko Nishizawa

The Tea Industry in Modern China and Public Demand for Tea

Jianping Guan

研究成果の概要

初年度（2017年度）は、次年度に開催する国際シンポジウムのための準備作業、ならびにそれにとまなう基礎資料の収集を実施したうえで、みんなく公開講演会「料理と人間——食から成熟社会を問いなおす」（日経ホール、2017.11.17）を開催し、外部の研究者の協力を得ながら、本研究の課題に関する論点の深化をはかった。特にグローバルスケールでの食糧の移動と地域社会における食品の流通の対照性を歴史的にとらえることが検討すべき課題として抽出された。

第二年度（2018年度）は、国際シンポジウム ‘Making Food in Human and Natural History’ を開催した（国立民族学博物館、2019.3.17～20）。海外から6名の研究者（イタリア1名、オランダ1名、メキシコ1名、ハン

ガリー 1 名、中国 2 名)、国内から 2 名の研究者を発表者として招聘し、以下の 4 つのパネルで実施した。1) Food and Ecology (野林担当)、2) Categorization of Food (河合担当)、3) Community, Sociality and Food (宇田川担当)、4) Strategy and Governance of Cuisine (韓担当)。

国際シンポジウムに先立ち、Minpaku Anthropology Newsletter 47号に、'Food Culture' のタイトルでの特集を編集、刊行し、国際シンポジウム参加者への事前送付を行い、問題意識の共有をはかった。

最終年度(2019年度)は、前年度に実施した国際シンポジウムの成果論集の刊行のための編集作業を進めた。参加者に当日の議論をふまえたうえで、発表論文の加筆、修正を行なってもらい、出版用の原稿を再提出してもらったうえで、英文の校閲、校閲内容にしたがった修正稿の作成を完了した。これらの内容にもとづき内容の再構成を行った論文集の提出用原稿の準備を完了した。

特別研究に関連した成果の公表実績

出版

MINPAKU Anthropology Newsletter No. 47, 2018

公開シンポジウム

International Symposium 'Making Food in Human and Natural History'

18-20 March 2019, National Museum of Ethnology

2 テーマ区分：③ マイノリティと多民族共存

プロジェクトリーダー：学術資源研究開発センター 寺田吉孝

研究課題：パフォーマンス・アーツと積極的共生

研究目的

共生は、可視的な差別は概ね解消されているが、集団間の忌避感や偏見が残る「消極的な共生」と、お互いの文化的特性・差異を認め、尊敬の念を抱けるような「積極的な共生」に分けることができる。本プロジェクトは、音楽・芸能などに代表されるパフォーマンス・アーツが「積極的な共生」を実現するために果たする役割と可能性を探ることを目的とする。ここで言うパフォーマンス・アーツとは、音楽、舞踊、芸能、演劇はもとより博物館・美術館における体験型インスタレーションなど、身体を活動の基盤とする幅広い活動をさす。元来、パフォーマンス・アーツは、身体を媒体とし視覚中心的な認識体系を超える(とは異なる)人間の知覚・思考形態に作用すると考えられ、人間の感情に大きな影響を与えることが報告されている。しかし、その一方で、パフォーマンス・アーツのもつ感情に作用する力が、偏狭な国家主義、民族主義、性差別主義などの表現として利用されてきたことも事実である。そこで、本プロジェクトでは、パフォーマンス・アーツが「積極的な共生」の達成に寄与する枠組みや条件を、具体的な事例の蓄積とそれらの比較検討から探りたい。

人間の集団は、その規模や地域に関わらず、民族、宗教、言語、政治的信条、経済階層、年齢、ジェンダー、セクシュアリティなど様々な指標(徴)により区別されており、そのように区別される集団間には、力の不均衡が存在することが多い。この中で劣位におかれた集団(マイノリティ)の文化や歴史は、彼らが居住する国家や地域などの公的な文化表象や教育から排除される傾向がある。そのため、マイノリティが音楽や芸能に自己表現や主張の場を求める例がこれまでに数多く報告されてきたが、パフォーマンス・アーツと共生の関係をテーマにした研究は数少なく、また地域的にも限定的であった。本プロジェクトでは、世界各地で関連するプロジェクトを展開する研究者や活動家の参加をつのり、パフォーマンス・アーツを「積極的な共生」実現に向けた具体的な方策としてとらえる総合的な研究を目指す。

実施状況

年度末に開催予定だった国際シンポジウム(3月19日~22日)を行うべく準備を進めた。7月から8月にかけて国際共同研究員であるデボラ・ウォン教授(カリフォルニア大学リヴァーサイド校)を外国人研究員として一ヶ月間招聘し、8月6日に準備研究集会を開催した。ウォン教授を含めシンポジウム参加予定者3名が研究発表を行い、特別研究の研究課題に関する討論を行った。さらに、外国人研究員としてシンポジウムに先立って来日した国際研究協力者ゴーパーラン・ラヴィンドラン教授(マドラス大学)、サミュエル・アラウジョ教授(リオデジャネイロ連邦大学)の2名と継続的に議論を深めた。順調に準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染症の拡散防止のために国際シンポジウムの延期が決定されたため、今年度の準備は次年度のシンポジウムで生かさ

れることになった。

研究成果の概要

年度末に予定されていた国際シンポジウムが延期されたため、期待されていた成果は次年度以降に持ち越されたが、準備研究会や国際研究協力者らとの継続的な議論を通して、シンポジウムで検討すべき論点を整理することができた。それらの論点はシンポジウム参加予定者に共有され、発表の概要に反映された。

特別研究に関連した成果の公表実績

MINPAKU Anthropology Newsletter (49号, 2019年12月) に特別研究プロジェクトの特集が生まれ、シンポジウムにおける発表予定者4名がエッセイを寄稿した。タイトルは以下の通りである。

Terada, Yoshitaka, "Performing Arts and Conviviality" (pp. 1-3)

Nakamura, Mia, "Musical Conviviality in the otto & orabu Ensemble" (pp. 3-5)

Urbain, Olivier, "Musicking Conviviality, Solidarity and Peacebuilding" (pp. 6-8)

Wong, Deborah, "Intention, Connection and Convivência" (pp. 8-11)

3 テーマ区分：④文化遺産とコミュニティ

プロジェクトリーダー：人類文明誌研究部 飯田 卓

研究課題：デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ

研究目的

文化をめぐる第三の波が到来しつつある。第一の波は、ナショナリズムと結びついたかたちで文化遺産に関する枠組みができあがった19世紀末から20世紀初頭。第二の波は、産業資本主義への懐疑とともに文化の政治性が浮きぼりになった1970年代から1990年代。そして現在、ヒューマニティ（人間性）の概念をラディカルに問いなおすAIが登場し、ヒューマニティの最後の砦として文化が見直されはじめている。

これら3つの波は、一定時期を過ぎれば鳴りをひそめるといった類いのものではない。現にこんにち、第一の波によって問題化されたナショナリズムや、第二の波によって問題化されたアイデンティティ政治と文化との関係などが、なおも余韻を残しつつ第三の波と干渉し合っている。言い換えれば現代は、ナショナリティとローカル・アイデンティティ、ヒューマニティといった異なる価値に駆動されながら文化が躍動する時代だといってよい。

いっぽうで、文化が意味する範囲は相変わらず多様である。文化が時代を読み解く鍵になるとしても、その定義について合意がなされることは、当分のあいだないだろう。文学や美学が扱ってきた貴族趣味の芸術文化や、ロマン主義や文化人類学が扱ってきた生活様式としての文化、ならびにカルチュラルスタディーズが扱ってきた産業資本主義的なポピュラーカルチャー（文化）は、互いに響きあいながらそれぞれにリアリティを帯びている。ただし、第三の波を受けた現代においては、生活場面全般の行動様式という意味での文化は、相対的に存在感を弱めている。代わって存在感を強めているのが、さまざまな複製技術（VR技術など、デジタル技術に含まれないさまざまな技術も含む）によってパッケージ化され、アイコンとして流通しうる芸術文化やポピュラーカルチャーである。アイコン化になじみにくい行動様式としての文化は、現代では、無形文化遺産という名でパッケージ化されて流通する。このため文化人類学において議論されてきた生活文化は、文化遺産やそれを収める博物館といったテーマにおいてとりわけ先鋭的に問題化され、芸術文化やポピュラーカルチャーの問題に関わっているのである。

本研究では、文化遺産の価値をめぐるくり上げられる社会関係からその特殊性や政治性を明らかにするとともに、それら文化遺産が現代的価値であるヒューマニティの代理／表象たりうるかどうか、言い換えれば、ローカルな文脈において生まれたはずの文化遺産が普遍性を持ちうるかどうかを議論する。ここでいう文化遺産は、ユネスコなどによって公的に認定されたものだけを指すのではなく、人間的な無形の営みを蓄積・反映した五感的表現は便宜的にすべて文化遺産とみなす。こうした文化遺産が、ナショナリティやローカル・アイデンティティのみならず、ヒューマニティをめぐる議論にも影響されながらいかなるふるまいを示すかを実証的に明らかにしていく。

実施状況

第1回研究会（国立民族学博物館4階特別研究室）発表者1名、聴衆23名

日 時：2019年6月27日（木）15時～17時

- 発表者：川村清志（国立歴史民俗博物館）
 発表題目：聖地巡礼のラビリンス——現代日本における旅・キャラクター・物語
- 第2回研究会**（国立民族学博物館4階特別研究室）発表者1名、聴衆14名
 日時：2019年10月7日（月）15時～17時
 発表者：久保明教（一橋大学）
 発表題目：文化と数値化——将棋界における情報技術導入の軌跡
- 第3回研究会**（国立民族学博物館4階特別研究室）発表者1名、聴衆18名
 日時：2019年11月14日（木）15時～17時
 発表者：末森 薫（国立民族学博物館機関研究員）
 発表題目：色・光の再現から、敦煌莫高窟につくられた宗教的空間を再考する
- 日経講演会**（日経ホール）発表者3名、聴衆311名
 日時：2019年11月15日（金）18時30分～20時40分
 発表者：川村清志（国立歴史民俗博物館）、河合洋尚（国立民族学博物館）、飯田 卓（国立民族学博物館）
 講演会題目：「アニメ『聖地』巡礼——サブカルチャー遺産の現在」
- 第4回研究会**（国立民族学博物館4階特別研究室）発表者1名、聴衆16名
 日時：2019年12月11日（水）15時～17時
 発表者：飯田 卓（国立民族学博物館）
 発表題目：コミュニティとデジタル技術が文化遺産研究に深く関わる（matter）理由

研究成果の概要

メンバー各人の関心から発表をおこなうとともに、デジタル技術と文化に関わる特別講師を招いて研究会を開催した。同時に、メンバーの関心の最大公約数となるようなシンポジウム題目を討議した。その結果、2020年度（第2年度）におこなうシンポジウムは、現代的状況における異なる世代のあいだでの文化のうけ渡し（コミュニケーション）をテーマとする方向性が見いだされた。ここでいう現代的状況とは、都市部への人口集中（＝村落部での過疎）や家族や地域社会の変化、IT技術の整備、物流機構の整備、地球環境の不安定化、そして感染症リスクの増大（後述）など、前近代では考慮する必要のなかったさまざまな条件の不安定化をあげることができる。これらのさまざまな現代的問題と文化のうけ渡しとの関連を論ずるとというのがシンポジウムの課題である。

上記のテーマは、イギリスとフランスに渡航したさいにパネリスト候補者にも話し、賛同を得た。研究会を重ねたうえで第2年度のシンポジウムの準備をおこなうという意味では、研究目的を達成したといえる。

特別研究に関連した成果の公表実績

【出版】

Iida, T.

- 2019 DiPLAS: Academic Image Platform for Twentieth-Century Photographs. In N. Sonoda (ed.) Conservation of Cultural Heritage in a Changing World (Senri Ethnological Studies 102), pp. 165-174. Osaka: National Museum of Ethnology.

河合洋尚

- 2020 『＜客家空間＞の生産——梅県における「原郷」創出の民族誌』東京：風響社。

河合洋尚・張維安編

- 2020 『客家族群與全球現象——華僑華人在「南側地域」的離散與現況』（国立民族学博物館調査報告150）大阪：国立民族学博物館。

松田 陽

- 2020 「『文化財の活用』の曖昧さと柔軟さ」國學院大學研究開発推進機構学術資料センター編『文化財の活用とは何か』pp. 115-125, 東京：六一書房。
 2020 「考古学と文化財」『季刊考古学』150：34-37。

田中英資

- 2019 「現代セルチュクにおけるエフェソスの位置づけ」阿部拓児・田中英資・守田正志編『トルコ・アナトリアの「歴史的重層性」と文化遺産（京都府立大学文化遺産叢書第17集）』pp. 23-42, 京都：京都府立大学。
 2019 「パターラ遺跡とゲレミシュ村の人々」阿部拓児・田中英資・守田正志編『トルコ・アナトリアの「歴

史的重層性」と文化遺産（京都府立大学文化遺産叢書第17集）』 pp.105-126, 京都：京都府立大学。

川瀬 慈編

2019 『あふりこ——フィクションの重奏／遍在するアフリカ』 東京：新曜社。

Kawase, I.

2019 Exploring the Creative Use of Germany's Encyclopedia Cinematographica. In N. Sonoda (ed.) Conservation of Cultural Heritage in a Changing World (Senri Ethnological Studies 102), pp. 157-164. Osaka: National Museum of Ethnology.

川瀬 慈

2019 「神々との終わりになきインプロヴィゼーション」千葉文夫・金子遊編『ジャン・ルーシュ——映像人類学の越境者』 pp.165-182, 東京：森話社。

末森 薫

2019 「文化財を対象とした光学撮影・画像処理の方法——壁画や博物館資料への活用事例」『第63回システム制御情報学会研究発表講演会 予稿集』 pp.591-594, 京都：システム制御情報学会。

2020 『敦煌莫高窟と千仏図 規則性がつくる宗教空間』 京都：法蔵館。

2020 「中国文明の宗教芸術にみるビーズ——敦煌莫高窟の菩薩装身具」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——人類にとって美とは何か』 pp.147-159, 京都：昭和堂。

【映像作品】

川瀬 慈（監修・監督）

2020 『アシェンダ！ エチオピア北部地域社会の女性のお祭り』 日本語・38分、HD、みんなく映像民族誌。

【口頭発表】

飯田 卓

2019年5月19日 「くらしのなかの文化遺産——物質文化研究と博物館活動、そして文化継承支援を統合する試み」日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学、京都

2019年6月10日 「日常生活的文化遺産化——馬達加斯加木彫商品化事例（日常生活の文化遺産化——マダガスカルの木彫り商品化を例に）」国立臺北藝術大學博班實驗室系列講座「時空移轉・文化續存」国立臺北藝術大學、台北

2019年11月15日 「遺産観光におけるバーチャリティ」第20回みんなく公開講演会「アニメ『聖地』巡礼——サブカルチャー遺産の現在」日経ホール、東京

川村清志

2019年11月15日 「聖地巡礼のラビリンス——現代日本における旅・キャラクター・物語」第20回みんなく公開講演会「アニメ『聖地』巡礼——サブカルチャー遺産の現在」日経ホール、東京

河合洋尚

2019年9月11日 「景観人類学——田野科学如何分析景観問題与景観設計？」北京大学建築与設計学院招待講演、北京大学、北京

2019年11月8日 「景観人類学的新趨向——現状与展望」アモイ大学人類学部招待講演、アモイ大学、アモイ

2019年11月15日 「アニメのある景観——中国地域の客家文化継承をめぐる」第20回みんなく公開講演会「アニメ『聖地』巡礼——サブカルチャー遺産の現在」日経ホール、東京

Seki, Y.

2019年6月28日 'Relacionando el patrimonio cultural material e inmaterial par su uso y protección en la sierra norte del Perú.' XIX Congreso de la Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe, Universidad de Szeged, Szeged, Hungaria

關 雄二／ダニエル・モラーレス

2019年12月14日 「パコバンパ遺跡——金製品の発見と地域文化遺産の保護」ペルー日本人移住120周年・日本ペルー交流年記念シンポジウム「ペルーの文化遺産保護の最前線——アンデスの黄金、ナスカの地上絵、インカのミイラ」東京文化財研究所、東京

Tanaka, E.

2019年8月20日 'Ancient Lycia and the Nomadic Past: Heritage and Tourism in Gelemis, south Turkey.' International Seminar on Heritage and Tourism, Hokkaido University, Sapporo

末森 薫

2019年10月25日 「関于敦煌莫高窟千仏図有規律性繪制的多角度考察——再現模写和虚拟空間的思考」敦煌唐代芸術研討会、敦煌研究院、敦煌

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

2014年度から、本館が所蔵する様々な人類の文化資源をもとに国際共同研究を実施し、情報生成型で多方向的なマルチメディア・データベースの構築を行う、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を行っている。初年度は、プロジェクトに係る基盤構築として、フォーラム型情報ミュージアム委員会のもとにシステム開発WGを置き、資料データ整備やデータベース間の総合連携、公開方法等について検討を進めた。

また、「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、「『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築」、「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」及び「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」の4つの研究プロジェクトを開始し、ソースコミュニティとの共同作業、北アリゾナ博物館（米国）、アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）及び国立民俗博物館（韓国）との国際学術協定に基づく国際共同研究等を通じて、情報の多層化、多言語化を推進した。

2019年度は、「開発型プロジェクト」4件、「強化型プロジェクト」6件を実施し、5つのデータベースの公開をすすめ、標本資料8,486件（267,201レコード）の新たな文化資源情報を公開した。また、開発型プロジェクト3件においては、それぞれ国際ワークショップをソースコミュニティの人びとや研究者を招いて本館で開催した。さらに、本プロジェクトで得られた研究成果の国際発信を支援する国際発信プログラムとして、「フォーラム型情報ミュージアム資料集」を新たに2点刊行した。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者*	プロジェクト課題名	区分	期間**
齋藤玲子	民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	開発型	2016年4月～2020年3月
飯田 卓	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	開発型	2017年4月～2021年3月
寺村裕史	中央・北アジアの物質文化に関する研究 ——民博収蔵の標本資料を中心に	開発型	2018年4月～2022年3月
小野林太郎	海城アジアにおける人類の海洋適応と物質文化 ——東南アジア資料を中心に	開発型	2019年4月～2021年3月
太田心平	朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究	強化型	2017年4月～2020年3月
八木百合子	中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築	強化型	2018年4月～2020年3月
丹羽典生	民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築 ——オセアニア資料を中心に	強化型	2018年4月～2020年3月
南 真木人	ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築	強化型	2018年4月～2020年3月
日高真吾	時代玩具コレクションの公開プロジェクト	開発型	2019年4月～2021年3月
林 勲男	ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築 ——20世紀前半収集資料を中心として	強化型	2019年4月～2021年3月

*2019年度実施分

**開発型は4年以内、強化型は2年以内

民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討

代表者：齋藤玲子 2016年4月～2020年3月

実施状況

モデル版のデータベースを運用しながら、民博が所蔵しているすべてのアイヌ資料について、関連文献等を探してつきあわせ、データの入力・修正作業を進めた。資料名についても整理を進め、その表記を統一するとともに、アイヌ語と英語および新たにロシア語を付す作業を終えた。ロシア語については、リサーチ・アシスタントの留学生が、既刊のロシア博物館所蔵アイヌ民族資料目録を参考に資料名を付した。さらに検索の精度を上げるために項目の確認や修正も進めた。あわせて、データベース画面表示や操作について改善をおこなった。

また、2019年9月15日にアイヌ関連資料を所蔵するロシアの博物館の研究者らを招聘し、国際ワークショップ「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討——データベースとその活用」を開催し、一般にも公開した。アイヌ関連資料のデータに関する研究や公開の状況について、国内の大学、博物館、アイヌ関係団体等の研究者・職員ら共同研究員とともに、情報を交換しあい、より有用なデータベースにするための議論をおこなった。なお、同ワークショップでは、本館の外国人客員研究員と協力し、およそ100年前にアイヌ民族の調査と資料収集をおこなったハンガリー人研究者バラートシ・パログ・ベネデクの足跡をたどる調査報告もおこなった。

成果

上記の実施状況のとおり、データベース公開に向けた情報の確認調査と修正ができ、アイヌ文化に関心がある国内外の研究者や学生、アイヌ文化伝承者らと、情報交換や討論をとおして、アイヌ資料の情報のあり方について検討することができた。近年、アイヌの物質文化の研究は、地域的な分布や時代による変化を追うべく進められており、所蔵資料の情報を開示することが不可欠になってきている。また、そうした研究の成果により、地域や時代が不詳だった資料も推定が可能になる。国際ワークショップでも、100年以上前など古くに収集された資料について、収集の背景や収集者（旧蔵者）に関する情報の重要性が確認されたところであり、そうした情報が引き出せるデータベースとして、アイヌ研究史の一部としても活用されることが期待できる。

成果の公表実績

< MISC >

齋藤玲子

2020 「アイヌ（日本）」信田敏宏編『先住民の宝』pp.141-172, 大阪：国立民族学博物館。

< 口頭発表 >

齋藤玲子

2019年9月15日 国際ワークショップ「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討——データベースとその活用」開催（一般にも公開）国立民族学博物館第4セミナー室

2020年1月26日 日本文化人類学会公開シンポジウム「アイヌ民族と博物館——文化人類学からの問いかけ」において「研究成果の還元と博物館活動——収蔵資料のデータベース化を中心に」発表（齋藤玲子）法政大学市ヶ谷キャンパス富士見ゲート G401教室

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：5,375件

レコード数：220,375件

アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築

代表者：飯田 卓 2017年4月～2021年3月

実施状況

昨年度に構築された英語-日本語データベースを駆使して、以下の作業を継続して実施した。

1. 英語および日本語による標本名、地名、民族名の見なおし
2. 英語および日本語による収集者名の公開可否の精査（プライバシーの尊重など）
3. フランス語その他の言語での表示項目の準備
4. 英語またはフランス語による詳細情報の付加

1.～3. に関してはもっぱら飯田が検討を進めた。以上は、本プロジェクトに関する本年度（令和元年度）のエントリーシートに記した「データベース構築」に関する作業であり、ほぼ計画どおりに遂行することができた。

4. もまた、エントリーシートの「データベース構築」に関連するものではある。しかし、フォーラム型情報プロ

プロジェクトの趣旨に照らして、この作業は本館館員とソースコミュニティ（本プロジェクトの場合はアフリカ）の人びとと協力しておこなうのがよい。このため本年度は、この分野を直接に進めるよりも本プロジェクトのもうひとつの柱である「ネットワーク構築」を進めることによって、4.に述べた情報付加の準備を整え、間接的な進展をはかった。

具体的には、作業がもっとも進んでいるカメルーン資料の今後の整理作業を検討するため、2019年8月30日から9月1日にかけてワークショップ「Reactivation of African Ethnographic Objects in Japan」を開催した。これは、エントリー書類に述べられている「民族誌的情報の精緻化」に相当する。参加者の所属機関は、カメルーン国立大学とヤウンデ第一大学およびマルア大学である。ワークショップでは、カメルーン側の協力者が収集してきたデータを整理し、データベースに反映できるよう表計算ソフトに入力したほか、今後の作業の段取りを話しあった。また、カメルーン資料ほどには整理が進んでいないケニア資料の整理を進めるため、ケニア国立博物館群に所属する協力者にも参加してもらい、今後の協力関係を話しあった。両国の参加者はさらに、自国の本務にさしつかえない範囲において、2019年9月2日から10日にかけて京都その他の場所で開催されたICOM（国際博物館会議）大会に参加した。これにより、自国の文化行政事情に制約されない国際的な博物館事情を共有し、本プロジェクトの意義と展望をさらに深める話しあいをおこなった。

以上のほかに、プロジェクトメンバーの鈴木がケニアに渡航して学術交流協定を結び、今後の共同調査の基礎を整えた。同じく飯田はマダガスカルに、池谷はボツワナに渡航し、実際のデータベース共有についての具体的な打ち合わせをおこなった。

成果

1.～3.については、年度末に近づいた現在も作業を継続中である。プロジェクト最終年度にあたる2020年度後半までに作業を完了し、現在の暫定的データベースをバージョンアップして公開用データベースとする予定である。

4.については、詳細情報の項目をワークショップで討議する過程で、次のような案が提案された。すなわち、公開用データベースに非公開の領域を設け、各インフォーマントが有するモノ（標本資料）についての記憶を長期的に付加していく案である。この案にしたがえば、ひとつの標本資料に対して聞きとりをおこなった場合、インフォーマントと同じ数の「記憶カード」が生成され、研究協力者間で共有できるようになる。本プロジェクトが終了し、公開用データベースの運用が始まってからは、この「記憶カード蓄積機能」を活用することで、プロジェクト期間内に着手できなかった計画を（別途資金によって）展開させることが可能となった。

成果の公表実績

< MISC >

三島禎子監修

2019 『ただいまオンエア——ソニンケ民族による文化運動と地域ラジオ』（日本語・39分50秒）国立民族学博物館ビデオテーク番組（長編）。

2019 『ただいまオンエア——ソニンケ民族による文化運動と地域ラジオ』（日本語・10分46秒）国立民族学博物館ビデオテーク番組（短編）。

2019 『私たちが主役——ソニンケの文化週間を支える女性たち』（日本語・7分）国立民族学博物館ビデオテーク番組。

2020 『セネガルを越える人と地域ラジオ』（日本語・118分）みんぱく映像民族誌 第34集。

< 口頭発表 >

飯田 卓

2019年5月19日 日本アフリカ学会第56回学術大会 「くらしのなかの文化遺産——物質文化研究と博物館活動、そして文化継承支援を統合する試み」京都精華大学

2019年7月13日 TICAD7パートナー事業シンポジウム「日本のアフリカ研究を総攬する」「国立民族学博物館のアフリカ研究」上智大学四谷キャンパス

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：20,651件

レコード数：20,651点×44項目（写真を除く）=908,644件

中央・北アジアの物質文化に関する研究——民博収蔵の標本資料を中心に——

代表者：寺村裕史 2018年4月～2022年3月

実施状況

本プロジェクトでは、広大な地域をロシア、モンゴル、中央アジアの3地域に分け、民博の中央・北アジア展示場で公開されている文化資源情報を核として、民博が収蔵している当該地域の標本資料に関する情報を高度化し、その成果をもとに中央・北アジア文化資源情報データベースを構築することを目的としている。今年度は、主に下記の調査・研究を実施した。

- 1) 2019年9月14日(土)に、国際ワークショップ「バラートシ・バログによる1908-1914年のアムール・サハリン地域におけるツングース系諸民族の調査と民博のコレクションとの関係」(Barathosi Balogh's fieldwork (1908-1914) among the Tungusic peoples of Amur and Sakhalin and its connection to Minpaku's collection.)を民博館内(第4セミナー室)で開催した。(参加者数26名)
- 2) 民博外国人研究員のダヴィド・シヨムファイ氏は、民博収蔵のモンゴル・北東アジアを中心としたシャーマニズム関連資料の、英語訳・現地語(モンゴル語)訳ならびにアノテーション作業を実施した。(標本資料件数:96件、レコード数:96×5=480レコード)
- 3) 上記ワークショップに関連して、シヨムファイ氏に加え、イストヴァン・サンタ氏[ハンガリー科学アカデミー民族学研究所 研究員]を招へいし、両者がロシア(ウラジオストック・サハリン等)においてフィールドワークを実施するとともに、その調査で得られた研究成果を、1)の国際ワークショップで発表した。
- 4) 9月1日より外国人研究員として民博に着任(3ヶ月間の滞在)したイリーナ・モロゾワ氏[レーゲンスブルグ大学(ドイツ)南東および東ヨーロッパ史部門・研究員]が、専門の東洋史学・歴史学の知識を活かし、中央・北アジア展示場の共通テーマ「社会主義の時代」に関して、関連資料の目録を作成し、専門的な知見を付した。
- 5) ウズベキスタン資料を中心に、標本資料データベースから詳細情報を抽出しデータ整理を進めるとともに、現地(ウズベキスタン共和国・サマルカンド)に赴いて、連携機関や現地社会とのネットワーク作りのための調査・打合せを実施し、英語・ロシア語翻訳を研究協力者の協力を得ながら進めている。(標本資料件数:762件、レコード数:762×5=3810レコード)

また上記に関連して、中央・北アジア展示場に展示されている「タシュケントの民家の台所」・「タシュケントの民家(ハウリ)」を対象に、現地社会とのフォーラム実践の試験的作業として、モデルとなったタシュケントの民家の現在の姿を映像として記録するため、映像取材の交渉を家主と進めた。その結果、家主の了承を得られたため、家人へのインタビュー並びに、民家の現状を映像で記録する作業を実施した。

成果

今年度は研究計画にもとづき、国際ワークショップを実施し、日本・ロシアを含め26名の参加者を得て、活発な議論が交わされた。また、そのワークショップでの発表に関連して、ロシアにおいて現地フィールド調査を実施することで、民博収蔵のモンゴル・北東アジアを中心としたシャーマニズム関連資料の情報の高度化、多言語化を進めることができた。そうしたフィールド調査は、シヨムファイ氏とサンタ氏による国際ワークショップでの成果発表につながり、さらにシヨムファイ氏がレビューを学術雑誌のSHAMAN (Volume 27 Numbers 1 and 2, Spring and Autumn 2019)に投稿し掲載されたことは、本プロジェクトにとっても大きな成果である。さらに、シヨムファイ氏による英語訳・現地語(モンゴル語)訳ならびにアノテーション作業は、標本資料件数:96件、レコード数:96×5=480レコードと、資料点数としての数は少ないが、将来的に本プロジェクトで構築するデータベースに反映させる予定である。

モロゾワ氏による、中央・北アジア展示場「社会主義の時代」関連資料の目録作成およびアノテーション作業は、民博の文化資源情報の高度化にもつながる成果である。民博の所蔵・展示する標本資料を熟覧し、それらの具体的な資料に基づいた研究であり、物質文化の観点から社会主義という普遍的な政治的影響のもとでローカライズされた社会主義文化の実態について学術的論文にまとめられた。その論文は、「Normativity against uniformity in late- and post-socialist Central Asia and Mongolia」という題目で、『国立民族学博物館研究報告』に投稿予定である。

ウズベキスタンでの現地調査においては、現在の家主の許可が得られたため、民博の展示場の標本資料と直結した「タシュケントの民家」に関わる映像取材と、民家内部の360°写真撮影も実施し、民博所蔵の標本資料と実際に現地でモノ(民家そのもの)が使われている様子(物質文化)とを繋ぐ貴重な情報を得ることができた。展示場に

ある民家模型を作製した30年前の事情を知るインフォーマント（家主）からインタビューできたことに加え、30年後の現在の民家（と居住する人々）の姿を映像として記録できたことは、本プロジェクトにとっても現地社会との双方向の情報のやり取りを目的のひとつとするフォーラム型の実践例として大きな成果である。また、都市開発の波にさらされ、住人が立ち退きを要求され民家そのものも壊される可能性があることが、インタビューの結果判明し、30年前と現在の現地での暮らしの様子を伝える貴重な資料として、今回の映像および展示場の資料をフォーラム型で構築するデータベースにどのように活かすのかの検討を進めている。

なお、モンゴル資料、中央アジア資料についてはデータ整理を進めることができた一方で、シベリア・極北の資料に関しては、どのようにデータ整理ならびに研究を実施していくのかについて、今後の検討課題である。

成果の公表実績

<論文>

寺村裕史

2020 「オアシス都市の暮らし——ウズベキスタン・サマルカンドの食文化」 みんなく映像民族誌。

< MISC >

Somfai, D.K.

2019 Museum and Exhibition Reviews. *SHAMAN*, pp.161-176. Athens: International Society for Academic Research on Shamanism.

寺村裕史

2019 「すごいよな」『月刊みんなく』43(7): 7-20。

<口頭発表>

Somfai, D.K.

2019年9月14日 'Barathosi Balogh's collection and its connection to Minpaku's collection.' "Barathosi Balogh's fieldwork (1908-1914) among the Tungusic peoples of Amur and Sakhalin and its connection to Minpaku's collection" National Museum of Ethnology, Osaka

Santha, I.

2019年9月14日 'About Barathosi Balogh's fieldwork (1908-1914).' "Barathosi Balogh's fieldwork (1908-1914) among the Tungusic peoples of Amur and Sakhalin and its connection to Minpaku's collection" National Museum of Ethnology, Osaka

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：858件

レコード数：4,290件

海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化——東南アジア資料を中心に——

代表者：小野林太郎 2019年4月～2021年3月

実施状況

本プロジェクトの目的は、東南アジア島嶼部を中心とする海域アジアとその周辺海域を対象とし、本館が所有する人類の海洋適応に関わる物質文化のデータベース化、およびこのデータベースを用いた関係諸国の専門家との海洋文化研究の発展、ネットワーク連携の強化となる。この目的達成の下、今年度はまず(1)海域アジアとその周辺島嶼域の海洋文化（漁撈・航海・船舶技術）に関する本館の資料を総チェックし、日本語と英語による資料台帳の作成を進めた。その結果、インドネシア、マレーシア、フィリピンで収集された800点以上の資料を台帳化できた。さらに東南アジア大陸部における類似性の高い資料についても台帳化を進めた。

一方、国内外における海洋文化の専門家による本館資料とそのデータベース化に関しては、国立科学博物館、沖縄県立博物館・美術館、沖縄海洋文化館、南山大学人類学博物館に所属する専門家を招き、様々な有益となるアドバイスをもらったほか、海洋文化に関わる国内研究者ネットワークの強化を行った。そのうえで、2020年1月からはマレーシアの国立博物館、アダット博物館、マレーシアプトラ大学、フィリピンのフィリピン国立博物館、フィリピン大学を訪ね各国の代表的な海洋文化研究の専門家と作成したデータベースも使用しつつ協議したほか、各機関と連携強化を進めた。さらに2020年2月18から22日にかけて国立民族学博物館にてマレーシア、インドネシア、フィリピンの海洋文化に関わる専門家、および日本国内の専門家を招聘した国際ワークショップ「Maritime

Adaptation and Material Culture in Southeast Asia」を開催し、東南アジアの海洋文化を専門とする研究者や研究機関のネットワーク構築を目的とした発表や情報交換を行ったほか、本プロジェクトで対象としている本館の所蔵資料を実見してもらい、直接的な意見や関連情報の提供を受けた。これにより現時点のデータベースをアップデートすることが可能となったほか、今年度中に完成したデータベースの検討とそのさらなる発展を目的とした相互的な意見・情報交換も実施できた。

成果

今年度における研究成果には、まず(1)国立民族学博物館が所有する、東南アジア島嶼部における海洋文化関連の資料（漁具・船関連）をほぼすべて英語化し、データベースのウェブ版デモまで作成できた点があげられる。マレー語を含めた現地語の使用に関しては、資料の現地名の項目において反映させることができた。さらに(2)このデータベースを軸にインドネシア、マレーシア、フィリピンの専門家を交え、資料の実見に基づく検討と海洋文化研究の推進も目的とした国際ワークショップを2020年2月に開催し、データベースおよび研究の両方をさらに発展できた点があげられる。特に資料の現地語名や素材のチェックという点で、現時点でのデータベースに掲載されていた現地語名で修正すべき資料の存在や、現地語名が新たに判明した資料を確認することができた。また素材については、データベースには記載なしの資料が多かったが、今回のワークショップによりほぼすべての資料の素材同定を行うことができた。そのほか本館が所蔵するマレーシアで収集された舟標本が現地国においても希少で極めて価値の高いものであることも確認することができた。関連性の高い舟標本はマレーシア国立博物館にも所蔵されていることを2020年1月に小野がマレーシアを訪問した際にも確認したが、両資料は今後の比較研究の上でも貴重な資料となる可能性が高い。この新たな知見を踏まえ、マレーシアの専門家とは共同研究を進め、本プロジェクトの期間中、あるいは終了後に関連標本を軸とした展示の開催も検討中である。フィリピン関連資料についても、2020年1月に現地を訪問し、専門家を多く擁するフィリピン国立博物館およびフィリピン大学との連携強化を進めることができたほか、両機関の専門家が2月に開催した国際ワークショップに参加し、本館のデータベースのアップデートに貢献してくれた。一方、本館においてフィリピンで収集された海洋文化関連の標本数は他地域に比べかなり少なく、まだ限定的であることも確認できた。これを踏まえ、今後どのような民族誌資料を標本として収集する必要があるかについて協議し、現地専門家の協力を得つつ、新たな標本の収集についても計画していく予定である。インドネシアに関しても2月の国際ワークショップ後、2020年3月初旬にジャカルタ市内にある2つの海洋博物館を訪問し、館長を交えた協議を行うことができた。本館におけるインドネシアで収集された海洋文化関連の標本は少なくないが、舟標本に関してはかなり限定的である。これに対し、インドネシアにおける両博物館は豊富な舟標本を所蔵しているほか、専門家もおり、両機関との連携を強化しつつ、新たな舟標本の収集も視野にいたれた共同研究を予定している。なお当初の予定では、今年度の研究目的は(1)までを目安としていたため、(2)まで達成できたことで、研究目的は十二分に達成できたと考えている。また前倒しで最初の国際ワークショップを本年度中に開催できたことで、次年度はより多角的な検討を展開できる。さらに対象地域も東南アジア島嶼部から大陸部、また海洋文化の点では密接に関連するオセアニア域における資料も対象とできる十分な余地があり、さらなる発展とプロジェクトの拡大を期待できる。

成果の公表実績

<論文>

Fuentes, R., R. Ono, N. Nakajima, et.al.

2019 Technological and Behavioural Complexity in Expedient Industries: The Importance of Use-wear Analysis for Understanding Flake Assemblages. *Journal of Archaeological Science* 112 (doi.org/10.1016/j.jas.2019). [査読有]

Fuentes, R., R. Ono, N. Nakajima, et.al.

2020 Stuck within Notches: Direct Evidence of Plant Processing during the Last Glacial Maximum in North Sulawesi. *Journal of Archaeological Science: Report* 30 (doi.org/10.1016/j.jasrep.2020.102207). [査読有]

小野林太郎

2020 「環境変化からみた環太平洋圏におけるヒトの移住史——ウォーレシア・オセアニアの事例から」『環太平洋文明研究』4: 76-88。 [査読有]

<分担執筆>

Ono, R. S. Hawkins, and S. Bedford.

2019 Lapita Maritime Adaptations and the Development of Fishing Technology: A View from Vanuatu

Bedford, S. and M. Spriggs eds, *Debating Lapita: Chronology, Society and Subsistence*, pp.415-438.
Canberra: ANU Press [査読有]

小野林太郎

- 2019 「日本への人類移住と南方起源説——その魅力と可能性」石森大知・丹羽典夫編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.21-24, 東京：明石書店。
- 2020 「オセアニアへの人類移住と海洋適応」秋道智彌・印東道子編『ヒトはなぜ海を越えたのか——オセアニア考古学の挑戦』pp.70-87, 加賀：雄山閣。
- 2020 「オセアニアの釣り針」秋道智彌・印東道子編『ヒトはなぜ海を越えたのか——オセアニア考古学の挑戦』pp.131-138, 加賀：雄山閣。

<口頭発表>

- 2019年11月16日 「東海地方と水中の文化遺産」『第3回とよはし歴史座』豊橋市民センター
- 2019年11月17日 「インドネシアの貝塚遺跡と完新世期における人類の貝利用」『東南アジア考古学会大会』早稲田大学
- 2019年11月30日 「海からみたアジア・オセアニアの人類史」『明治大学博物館友の会・古代東北アジアと日本研究会』豊島区民センター
- 2019年12月14日 「東南アジアの不定形剥片とその機能——使用痕分析から見てきた人間行動と技術の複雑性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第8回研究大会』国立民族学博物館
- 2019年12月21日 「海の人類史——東南アジア・オセアニア考古学の最前線」『第498回みんなくゼミナール』国立民族学博物館
- 2020年02月18日 'Introduction of Maritime Adaptation and Material Culture in Southeast Asia.' International Workshop "Maritime Adaptation and Material Culture in Southeast Asia", National Museum of Ethnology, Osaka

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：800件
レコード数：8,000件

朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究

代表者：太田心平 2017年4月～2020年3月

実施状況

今年度は、前年度までに修正し、カテゴリー分けを追加した標本資料のメタデータを、ウェブブラウザ上で閲覧できるデータベースとするために、プログラミング作業にまわしつつ、両博物館の技術者チームや事務職チームと、主に2種類の議論を重ねた。

第1に、メタデータとデータベースの運営体制について、両博物館の事務職チームと議論を重ねた。特に慎重さを要したのは、他の博物館が所管するメタデータを公開しつづけるための体制であり、もっとも重要だと明らかになった点は、データベースが運用に移ったあと、内容やサイバー・セキュリティについての責任を、誰がとっていくかであった。

第2に、研究者が求めるデータベースの質と、技術者が実現可能なプログラミングの量を調整するため、両博物館の技術者チームと一連の議論を重ねる必要が生じた。特に、プロジェクトチームが作成して標本資料のメタデータに適用してきたカテゴリー分けは、技術者チームにとってプログラミングが煩雑すぎると明らかになった。このため、カテゴリー数を減らしつつ再構築するとともに、全部のメタデータを作成しなおすこととした。

また、第4四半期に計画していた国際的な活動は、諸事情によりキャンセルせざるをえなかった。

成果

運営体制の問題は解決された。プロジェクトチームの当初計画では、両博物館がすべてのメタデータとプログラミングを共有し、それぞれに管理運営するというものだったが、それは断念することとなった。理由は、他の博物館のメタデータに関する内容に関する責任を、どちらの博物館も取れないからであり、かつメタデータに含まれる日本語の内容はアメリカ自然史博物館（以下「AMNH」）で管理できないからである。これらの課題への対策は以

下のとおりを決まった。

- (1) まず本館がデータベースを開発して本館のサーバーで公開し、AMNHは状況を見る。
- (2) メタデータはつねに暫時的な研究成果であるという認識のもと、修正したメタデータは両博物館のあいだで交換する。
- (3) AMNHは日本語のメタデータを所管することも使用することもしない。
 なお、この解決策にいたる過程では、以下に示す他の3つの方式も熟考し、討議した。
 - 英語のデータベースはAMNHが、日本語のデータベースは本館が運営し、韓国語のデータベースは暫定的にどちらか、ないし両方の博物館が運営する。
 (→メタデータの内容に関する責任の所在が不明確になるため、不適切と判断された。)
 - データベースを検索するたびに、それぞれの博物館のサーバーに保存されたメタデータを読み込み、統合して表示するように、プログラミングを開発、運営する。
 (→サイバー・セキュリティを脆弱にするリスクがあると判明し、許可されなかった。)
 - それぞれの博物館がクラウド機能を使って同じメタデータを使用できるよう、メタデータを修正する権限をもつユーザーアカウントを作り、その修正ログも共有する。
 (→法的に有効なアカウント約款を定める必要が生じることがわかり、回避した。)

以上のとおり精緻に検討したうえで採用した方式に沿って、改めてプログラミングに関する検討をプログラムチームと重ねた。本プロジェクトチームは、両博物館の標本資料を4階層の入子構造によりカテゴリー分類することを考え、合計6,000件以上にのぼる標本資料にタグづけをおこなってきたが、プログラムチームが作業可能と判断した入子構造は3階層であった。このため、(1)カテゴリー全体を3階層のものに作り替える作業、(2)従来のカテゴリーに準拠して標本資料ごとにタグ付けしたデータを消し、新しい3階層のタグをつけ直す作業の2種類の作業が必要となった。

成果の公表実績

太田心平

2020 「改良韓服は語る」『みんぱく e-news』224：巻頭コラム。

Ota, S. and M. Petersen

2019 Rethinking the Relationships between Real Societies and Cyberspaces. In IUAES 2019 Inter-Congress "World Solidarities" Proceedings. Poznan: Adam Michiewicz University.

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：114件

レコード数：3,630件

中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築

代表者：八木百合子 2018年4月～2020年3月

実施状況

プロジェクト最終年度にあたる本年度は、以下の作業をすすめた。

- (1) 昨年度から進めてきたアメリカ展示場の中南米関連の標本資料を中心にした400点の資料のデータベースに、追加資料としてアンデスの民族資料395点の情報を加えた。
- (2) 情報の高度化の一環としておこなっている制作者による資料情報の付加作業として、新たに35点のコメント情報を追加した（中米9点、南米26点）。
- (3) 南山大学および民博に所蔵されているアンデス民族学関連の画像コレクションのなかから選別した、各資料にまつわる地域や制作に関する画像を紐づけることで、背景情報を強化した。
- (4) 資料の基本情報等については、日本語のほかに、英語とスペイン語への翻訳をおこない、3言語対応のデータベースを構築した。
- (5) アクセシビリティを強化するために、データベースには、資料名や地域、民族での検索のほかに、制作者名とその関連する家系による検索等、本データベース内容に特化した検索機能を追加するなどの工夫を加えた。
- (6) 試験版のデータベースをもとに、民芸資料の制作にたずさわる現地コミュニティの人びとを集め「ワークショップ：ペルーの民衆芸術（Taller sobre la Artesanía Peruana）」（2020年1月13日）を、カウンターパー

ト機関である文化芸術社会協会（Instituto Cultural Teatral y Social）の関係者の協力のもとパルーで実施した（参加者：職人32名、関係者6名）。その際、現地の人びとの活用を促すために、操作性・利便性等について確認をおこなったほか、資料に関する新たなコメント等も聴取した。

これらの結果を踏まえ、試験版データベースの修正と補填作業をおこない、正式な公開・運用に向けたデータベースの構築を実現した。最終年度は、資料の整理や画像の取り込みに加えて、多言語に及ぶ内容の整合性のチェックなど膨大な作業があり、多くの手が必要となるため、RA やアルバイトが常時つくことで作業の効率化につながった。特に語学堪能な留学生や若手の研究者に作業に加わってもらうことで機動力が高まった。

成果

- (1) 本プロジェクトでは、当初予定していた展示場の関連資料のほかに、アンデス関連の民族資料の情報も追加し、目標を上回る点数の作業を完了した。特に、アンデスの情報については、現地のコミュニティとの協働により、資料の制作者である職人たちから資料の情報のみならず、制作や使用、モノに込められた世界観等に関する情報を集め、民族誌的に厚みのあるデータベースの構築を実現した。また、日本語と英語のほかに、現地の公用語であるスペイン語にも対応した多言語型のデータベースの構築を実現した。
- (2) 本プロジェクトと同時期に「地域研究画像デジタルライブラリ」プロジェクトで整理した画像資料（本館の名誉教授が1960年代～2000年代に撮影したアンデスの民族学調査の画像コレクション）を活用し、収集当時の情報、使用、制作に関する画像を背景情報として加えることで、アンデス地域の民族学研究のさまざまな資料を集約するプラットフォームを築きあげた。また、画像を多用することで、一般のユーザーの理解促進に向けたさまざまな情報も取り込み、初学者にも現地の状況や制作状況などが分かるように仕上げ、今後、学生のアクティブラーニング等でも活用してもらうことを想定して文献情報等も可能なかぎり加えた。
- (3) プロジェクト期間内には、資料の制作にたずさわる種々の職人を集めたワークショップを現地機関の協力のもと実施した。その際、実際にデータベースを試験的に活用してもらい、意見等を聴取することで機能強化をおこない、フォーラム型情報データベースとしての基盤を整備することができた。
- (4) 上記の作業によって、当初の計画で予定していた、情報の高度化、多言語化、アクセシビリティの強化、フォーラム化についてすべて達成することができた。また、特に、フォーラム型の観点からは、研究機関だけでなく、ソースコミュニティの人びとや実際の資料の制作者である民衆芸術家たちから積極的な支援も得ることができたことは大きな成果である。今後、資料（作品）に関する一次情報の提供者でもある彼らから、コメント機能を活用してさらなる情報を得るだけでなく、ワークショップなど相互交流の機会を通じて、彼らの実際の語りや制作場面について、映像撮影等を視野に、新たな情報も追加していくことが可能になると期待できる。

成果の公表実績

<口頭発表>

八木百合子

2019年11月13日 ‘Utilización del Recursos Culturales Andinos: Construcción de Base de Datos Interactivos.’
Simposio Internacional “50 años de Antropología Japonesa en el Sur de los Andes:
Recorridos, Etnografías y Valoración Cultural”, Museo Histórico Regional del Cusco, Peru

2020年1月17日 ‘Base de Datos Interactivos: Colección del Museo Nacional de Etnología del Japón.’ “5 Taller
sobre la Artesanía Peruana”, Instituto Cultural Teatral y Social, Peru

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：795件

レコード数：25,300件（推計）

民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築——オセアニア資料を中心に——

代表者：丹羽典生 2018年4月～2020年3月

実施状況

本館所蔵の朝枝利男コレクションにおける写真資料の地域ごとの分類を行った。具体的なデータとしては、前年度に十分対応していなかったトンガ、キリバス、ソロモン諸島のレンネル・パロナ州及びマライタ州のそれぞれに

ついで当該地域に研究する専門家に依頼して情報の精査と追加を行った。とくにレンネル・ペロナ州については、本館朝枝コレクションと重なるハワイのビショップ博物館の朝枝撮影写真を持参して、1960年代から70年代のレンネル・ペロナ州にて考古学的調査を行っていた方に精査して頂いた。

コレクション作成者である朝枝利男に関する基本情報の調査を行った。朝枝利男コレクションに収蔵されている4冊の手書きの日記について、読解とタイプに起こす作業を行った。また、朝枝利男という人物に関する情報を探るべく、長崎県立図書館での調査を1月に行った。

世界の他の博物館及びソースコミュニティとの関係としては、2月にはカリフォルニア科学アカデミーに所蔵されている朝枝利男コレクションの資料の精査を行った。共同で開催予定のシンポジウムの打ち合わせと、両博物館の収蔵資料を合わせて「朝枝利男の生涯と芸術」に関する画集として公開できないかも検討した。太平洋地域の博物館であるフィジー国立博物館にて本館朝枝利男コレクションに混在しているポストカード資料を同定するための情報収集を、ソロモン諸島国立博物館で2020年に開催予定としている同博物館での展示内容の検討、展示場の確認、協定書の作成などの作業を進めた。

成果

データベースとしては、サモアの日系人、ソロモン諸島レンネル・ペロナ州の文化と儀礼の詳細、クック諸島の探検の経路と撮影場所の詳細情報を収集した。展示として、国立民族学博物館コレクション展示「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」の開催、第352回企画展示「出会い、さまざまなカタチ」（慶応義塾大学図書館）にても資料の一部を展示した。本プロジェクトで精査された資料は、刊行物として『月刊みんぱく』2月号の特集、「みんぱく e-news」223及び「MINPAKU Anthropology Newsletter」49の記事、『季刊民族学』の関連論考、国立民族学博物館研究報告』44巻4号にて論文を掲載した。またソロモン諸島国立博物館での展示を引き続き準備している。

本プロジェクトを通じて、デジタル技術の高度化やウェブ上での情報公開の進展で可能となった資料の収集・閲覧によって、本コレクションに対する基礎的情報を広く付加した。それにより、いまでは現地社会の人々にさえ忘れられていた文化の復元が一部可能となった。ソロモン諸島の刺青や儀礼、クック諸島の伝統的遊戯などは、世界各地の博物館資料や学術書の片隅にあったデータをつなぎ合わせることで、過去の姿をある程度理解できるようになった。これらの点については、展示や本プロジェクトの共同研究員との論集の執筆などを通じて今後公開を検討していきたい。

調査技術的な可能性の側面を2点指摘したい。まず、博物館資料のなかの生物学的資料の活用である。朝枝利男コレクションの生物関係の写真や水彩画には採集日時・場所が明記されているものが多い。それらの情報をもとに地図を作成すれば、過去の生物の形態や生態学的分布を示す興味深い資料ともなり得よう。こうした研究は他の博物館の同様な資料からも試す価値があると思われる。カリフォルニア科学アカデミーと魚類画を中心とする図録の刊行を計画している。

もうひとつは、風景写真資料に写り込まれている風景をデジタルカメラで再度撮影する調査手法である。こうして過去の写真資料にGPS情報を付加することは、興味深い調査手法になる可能性がある。調査撮影者の移動経路を具体的に同定し地図に落とせるのみならず、画像に収められた資料を景観史、生態学資料として再利用する際にも格段に役立つ基礎的情報となりえる。この点については、先に言及した共同研究員との論集のなかの成果として反映できたらと考えている。

成果の公表実績

<分担執筆>

石森大知・丹羽典生

2019 「朝枝利男の見た太平洋」『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp. 127-129, 東京：明石書店。

<論文>

丹羽典生

2020 「朝枝利男の見たガラパゴス」『季刊民族学』171：86-94。

2020 「1930年代のアメリカにおける私的探検の考察——朝枝利男が参加した探検隊の旅程と経路の分析から」『国立民族学博物館研究報告』44(4)：625-682。

< MISC >

丹羽典生

2020年 「朝枝利男とガラパゴス」『月刊みんぱく』44(2): 1-2。

2020年 「コレクション展示『朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示』の開催」『みんぱく e-news』223: 巻頭コラム。

<口頭発表>

丹羽典生

2019年6月22日 「太平洋関係の朝枝利男写真資料の時代的位置づけ及び特色」フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト『民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築』研究会、国立民族学博物館

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：2,259件

レコード数：5,212件

ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築

代表者：南 真木人 2018年4月～2020年3月

実施状況

- 1) 第2回研究会を民博で開催し（2019年3月31日）、森本泉「ガンダルバの『伝統文化』再考」と南 真木人「ツーリズムとの接続と離陸」の発表、企画展『旅する楽器 南アジア、弦の響き』見学と寺田吉孝による解説、2019年に制作した民族誌映画『カトマンドゥのサーランギ奏者たち』（76分42秒）の試写を行い、ガンダルバ研究の最新の知見に関して議論した。
- 2) 民博で開催した「音楽の祭日」（2019年6月23日）に出演したバンチャ・パリワールのサーランギ演奏をデータベースのコンテンツ素材用に映像取材した。あわせて同日、バンチャ・パリワールのメンバーに上述の映画を観てもらい意見交換をした。
- 3) 調査対象地バトゥレチョールの3名の演奏家が来日し、長野県駒ヶ根市の「みなこいワールドフェスタ」（2019年10月21日）で公演したのを受け、調査と映像取材を実施した。
- 4) 藤井知昭名誉教授を隊長とする民族音楽調査隊が1980年と1982年にネパールで採録したサーランギ演奏のカセットテープ複製が、民博に所蔵されていたことが「音響資料目録データベース」の検索から判明した。それらのデジタル化を実施し、演奏者・曲目ごとに整理しコンテンツを作る作業を進めた。並行して、藤井名誉教授の国際文化研究所を寺田吉孝と伴に訪問し、デジタル化した音源データ、整理表を提供したうえで、それらをデータベースに利用し公開する許諾を得た。データベースは現在も作成中である。
- 5) 『季刊民族学』163号の特集「ヒマラヤの吟遊詩人——ガンダルバの現在」の論稿を基に英語での出版に向けて、外注して翻訳した原稿を各執筆者が加筆修正している。

成果

諸般の事情でデータベースの主要なコンテンツとなる過去の音源と写真の入手が能わず、作業は滞っていた。2019年11月に、共同研究員からの指摘で、1980年と1982年にネパールで藤井名誉教授等が採録したサーランギ演奏のカセットテープ複製が民博に所蔵されていたことが判明し、資料のデジタル化と整理を開始できた。1982年の音源を主として、約50人の演奏家によるのべ約190曲のコンテンツを持つデータベースを作成し、公開できる見込みである。

成果の公表実績

<映像制作>

南 真木人監修

2019 『カトマンドゥのサーランギ奏者たち』（日本語・76分42秒）みんぱく映像民族誌 第35集。

南 真木人・藤井知昭監修

2020 『みんぱく映像民族誌 第35集 ネパールのサーランギ音楽』（2019「カトマンドゥのサーランギ奏者たち」約77分、1984「サーランギを追って」60分所収）

<口頭発表>

南 真木人

- 2019年11月16日 「ヒマラヤの吟遊詩人——ガンダルバから見るネパールの変化」協力隊ネパール会主催『公開ネパール応援セミナー』あいも文化交流会館
- 2020年1月15日 みんなく映像民族誌シアター「ネパールの楽師ガンダルバ」において『ネパール 楽師の村 バトゥレチョールの現在』91分31秒上映・解説、シアターセブン
- 2020年3月7日～8日 国際シンポジウム「学際研究とフォーラム型情報ミュージアム」に、バトゥレチョールから2名の当事者および同地において研究してきたトリブバン大学PNキャンパスの研究者を招へいし、二つのセッションを担当し口頭発表した。

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：楽曲約190点、映像約10点、写真約100点
レコード数：約300点

時代玩具コレクションの公開プロジェクト

代表者：日高真吾 2019年4月～2021年3月

実施状況

今年度は、時代玩具コレクションのデータベース作成にあたり、研究協力者との研究会を開催し、データベースの表記項目と玩具の形態分類をおこなうとともに、時代玩具コレクションの分類作業を進めた。これらの分類作業に伴う研究会は、基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システム」と連携しながら実施した。また、玩具の遊び方に関する現地調査をおこない、玩具データベースに必要な表記項目の与件として、主な使用者と遊び方の要素を加える必要があることを確認した。今年度に整理した表記項目と形態分類について以下に示す。

1. 玩具の形態

- (1) 人形玩具：人を模した玩具。
- (2) 戦争玩具：戦争に関する玩具。
- (3) 乗物玩具：乗物に関する玩具。
- (4) 動力玩具：動力を利用して遊ぶ玩具。
- (5) マスコミ玩具：マスメディアに登場し、人気となったキャラクターやそれに関する玩具
- (6) 紙製玩具：紙を素材としたさまざまな玩具。
- (7) めんこ：めんこには素材により、泥めんこ、鉛めんこ、紙めんこがあり、もっともよく知られたものは紙めんこである。遊び方は地面に掘った小さな穴に投げ入れる穴一、対戦相手のめんこをひっくり返す「起こし」といった遊びとともに、めんこ自体をコレクションしていくという遊び方がある玩具。
- (8) カルタ：絵や歌の文字を書いた長方形の札、絵や歌に合わせて取り合うカード遊びのひとつの玩具。
- (9) 双六：さいころを互いに振り出し、自身が出した采の目にしたがってコマを進め、最初に駒を進め終わった方が勝ちとなる玩具。
- (10) 着せ替え：人形に紙や布の衣装などを着せ替えて遊ぶ玩具。
- (11) ぬり絵：輪郭が描かれた台紙に好きな色を塗って遊ぶ玩具。
- (12) ビー玉・おはじき玩具：ガラス製の玉で、遊戯や観賞に用いる玩具。
- (13) 光学玩具：光の性質を利用して遊ぶ玩具。
- (14) 水遊び玩具：水を用いて遊ぶ玩具。
- (15) お面の玩具：顔にかぶって遊ぶ玩具。
- (16) ボード（盤上）玩具：ボード（盤）の上に置いたコマやカードを動かしたり、取り除いたりする玩具。
- (17) ものづくり玩具：玩具を構成する部品を組み立てたり、作ったりして遊ぶ玩具。
- (18) ごっこ玩具：ごっこ遊びで用いる玩具。
- (19) スポーツ玩具：一定のルールにのっとって身体を動かし、勝敗を競ったり、楽しんだりする玩具。
- (20) お土産玩具：お土産品の玩具
- (21) 教育玩具：子どもの学習の助けになる玩具。
- (22) 駄菓子屋玩具：駄菓子屋で売られている玩具。
- (23) 楽器玩具：楽器を模したり、音が鳴ったりする玩具。
- (24) 玩具関連資料Ⅰ（子ども服・装身具）：子どもの好きなキャラクター等が描かれた子ども用の服や関連する装身具。

- (25) 玩具関連資料Ⅱ（文献・写真等）：時代玩具コレクションの文化財的価値を示す歴史資料。
- (26) その他：上記以外の玩具等。

2. 主な使用者

- (1) 男子
- (2) 女子
- (3) 男女共用

3. 遊び方

- (1) 対戦：相対して競い合う遊び方。
- (2) ごっこ遊び：何かになったつもりになる遊び方。
- (3) 鑑賞：玩具を飾って楽しむ遊び方。
- (4) 一人遊び：一人で楽しむ遊び方。
- (5) ものづくり遊び：ものを作る遊び方。

4. 主に遊ばれる季節

- (1) 正月
- (2) ひな祭り
- (3) 端午の節句
- (4) クリスマス
- (5) 通年

5. 製造年代

製造された年代

6. 主要素材

- (1) 植物由来：木製、木の実、漆器、竹製、紙製、カーボン紙、ゴム、その他植物
- (2) 皮革由来：皮製、革製
- (3) 金属由来：ブリキ、銅、鉄、アルミ、錫、アンチモニー、ダイキャスト（超合金）、その他金属
- (4) 土由来：土、素焼き、陶器、磁器、粘土、
- (5) 貝由来：貝、胡粉
- (6) 石由来：石、石膏、磁石
- (7) ガラス由来：ガラス、色ガラス、鏡
- (8) 人工素材由来：合皮、化学繊維、セルロイド、プラスチック、ビニール、塩化ビニール、ソフトビニール、写真、フィルム、セロファン、火薬
- (9) 布由来：綿、麻、絹、毛糸

7. サイズ

8. 備考

補足情報

成果

現在、上記の項目について各玩具の分類作業を進めるとともに、各項目の説明文について研究協力者と最終確認をおこない、英訳に向けた準備をおこなっている。この点は、おおむね計画通りに作業が進んでいると判断している。また、2019年12月22日に大東市歴史民俗資料館で開催された「近畿民具学会2019年度大会」において、「フォーラム型情報ミュージアム『時代玩具コレクションデータベース』について」と題し、本プロジェクトについて研究発表をおこない、表記項目等の内容について意見交換をおこなった。この際、時代玩具コレクションの分類については、収集者である多田敏捷氏の分類基準のみに準じた場合、女子の玩具が埋没してしまう課題があり、今回の資料分類はその点を解決できる分類になっているのではないかという評価を得た。ただし、時代玩具コレクションそのものが男子向けのものが多いことは事実であり、今後の課題として女子用玩具の収集も視野に入れ、時代玩具コレクションの拡充を図ってはとの意見がだされた。この点については、今後の玩具研究の進展において検討を進めていく課題とした。

成果の公表実績

<口頭発表>

日高真吾

2019年12月22日 「フォーラム型情報ミュージアム『時代玩具コレクションデータベース』について」大東市立歴史民俗資料館

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：3,155件

レコード数：31,550件

ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築——20世紀前半収集資料を中心として——

代表者：林 勲男 2019年4月～2021年3月

実施状況

- 1) 国内共同研究員4名に対してフォーラム型情報ミュージアムの概要説明と既に公開されているデータベースを紹介した後、プロジェクト遂行上の役割分担と、標本資料およびアーカイブ資料の確認作業をおこなった（2019年6月28日）。
- 2) 共同研究員2名が、パラオ共和国にて標本資料に関する情報の精査と13名からの聞き取りによる情報収集をおこなった（2019年8月13日～22日）。
- 3) 共同研究員1名が、マーシャル諸島関連の標本資料について情報の精査をおこなった。
- 4) 対象とするミクロネシア標本資料に関して、染木煦著『ミクロネシアの風土と民具』、東大情報カード、『内外土俗品圖集』から関連情報を抜粋して整理した。
- 5) 染木煦アトリエ（立川市）にて、1934年の南洋群島旅行時のスケッチブックと写真アルバムの撮影をおこなった（2019年7月28日～31日）。
- 6) 染木煦ご遺族のご厚意により、アルバムに張られた絵はがきを民博にて撮影し、染木が各絵はがき裏面に残したメモを記録した。
- 7) パラオ共和国のPalau Conservation Societyより1名を招へいし、標本資料の熟覧を実施した（2020年2月中旬予定）。

成果

本年度は、ミクロネシア標本資料のデータの精査と新たな情報の収集とその整理をおこなった。先ず共同研究員2名がパラオ共和国にて、本プロジェクトのための人的ネットワークを構築するとともに、民博のミクロネシア・コレクションに関する現地名を含めた情報を収集した。ミクロネシア・コレクションの情報収集に関しては、コロール州、アイライ州、ガムヌグイ州、およびソンソロール州（在コロール事務所）にて、13名の人びとに聞き取りを行った。

資料の中には、写真は残っていても物自体は失われたという例もあり、民博所蔵のコレクションの重要性が浮かび上がった。ペラウ（パラオ）国立博物館の館長を長年勤め、現在国務大臣である Faustina Rehuher-Marug 氏からは、ドイツの博物館にもドイツ統治下に収集されたパラオの物質資料があることをふまえ、「私たちとしては、ドイツや日本の博物館にどんなパラオの資料があるかを具体的に知りたい。そして、それらに私たちがいかにアクセスでき、将来的にどのようなプロジェクトができるか、共に考えたい」という意見が出され、本プロジェクトへの大きな期待が示された。

また、本プロジェクト国外協力者の Bernie Ngiralmu 氏（2020年2月に招聘予定）は、パラオの文化遺産について若い世代が学ぶことの重要性和楽しさを深く認識しており、本プロジェクトにおいてミクロネシアの他の島の人々とともに民博の資料に触れ、そこから新たな学びの可能性をミクロネシア社会に開いていくことに意欲的であることが示された。以上のようにパラオでは、本プロジェクトへの期待が示され、研究および社会還元への協力を得られる体制を作ることができた。

ミクロネシア標本資料のうち325点は、画家の染木煦が1934年の巡遊の際に収集したものであり、染木の関連資料をアトリエでの調査によって発掘すると共に、著作物から関連情報を抜粋・整理し、標本資料との照合作業をおこなった。1930年代には、当時の南洋群島を訪れる若手芸術家が少なくなく、相互の交流だけでなく、土方久功や学者の杉浦健一らとも親交があったことがわかった。さらに民博が所蔵する東大情報カード、『内外土俗品圖集』からミクロネシアの資料に関する情報を抜粋し、整理した。

成果の公表実績

本年度は研究協力体制を作ることと、民博所蔵マイクロネシア標本資料の情報の精査、そして関連情報の収集と整理をおこない、未だ公開までには至っていない。

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：標本資料567件

レコード数：1,268件

共同研究

2019年度の応募・採択状況

課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分		2019年度				
研究代表者	課題区分	申請	採択	継続	合計	
一般	館内	課題1	5	4	2	7
		課題2	0	0	1	
	客員	課題1	0	0	1	2
		課題2	0	0	1	
	公募	課題1	3	1	10	12
		課題2	2	1	0	
若手	課題1	3	2	3	5	
	課題2	0	0	0		
計		13	8	18	26	

共同研究課題一覧

○印は公募による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究期間
グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	松尾瑞穂	1	2015-2020
捕鯨と環境倫理	岸上伸啓	1	2016-2020
物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	縄田浩志	2	2016-2020
音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究	野澤豊一	1	2016-2020
現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	浮ヶ谷幸代	1	2016-2020
●テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平田晶子	1	2016-2020
博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から	園田直子	2	2017-2021
○人類学／民俗学の学知と国民国家の関係——20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生勝美	1	2017-2021
○文化人類学を自然化する	中川 敏	1	2017-2021
○ネオリベラリズムのモラルティ	田沼幸子	1	2017-2021
●モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相	八木百合子	1	2017-2020
○オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	風間計博	1	2018-2022
○伝統染織品の生産と消費——文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって	中谷文美	1	2018-2022
○心配と係り合いについての人類学的探求	西 真如	1	2018-2022
○統治のフロンティア空間をめぐる人類学——国家・資本・住民の関係を考察する	佐川 徹	1	2018-2022
○グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティブ・ポリティクス	山 泰幸	1	2018-2022
○カネとチカラの民族誌——公共性の生態学にむけて	内藤直樹	1	2018-2022

●拡張された場における映像実験プロジェクト	藤田瑞穂	1	2018-2021
沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討	大西秀之	2	2019-2022
○グローバル化時代における「観光化／脱-観光化」のダイナミズムに関する研究	東 賢太郎	1	2019-2022
○食生活から考える持続可能な社会——「主食」の形成と展開	野林厚志	1	2019-2022
○社会・文化人類学における中国研究の理論的的定位——12のテーマをめぐる再検討と再評価	河合洋尚	1	2019-2022
○人類史における移動概念の再構築——「自由」と「不自由」の相克に注目して	鈴木英明	1	2019-2022
○島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較	小野林太郎	1	2019-2022
●感性と制度のつながり——芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える	緒方しらべ	1	2019-2022
●モビリティと物質性の人類学	古川不可知	1	2019-2022

「グローバル化時代のサブスタンスの社会的配置に関する比較研究」

人類学においてサブスタンス（身体構成物質）に関する研究は、主に親族研究のなかで行われてきた。特に、生殖の観念の文化的多様性に関する民俗生殖理論や、生物学的生殖に限定されない人の関係性についての議論は、自然／文化、生物学的／社会的次元の二元論を前提とする親族（研究）を批判的に乗り越えようとするものである。ところが、今日、サブスタンスは、科学技術や医学の発展、グローバルな経済市場やトランスナショナルな移動の増加という現象の最前線で、資源として取引され、流通されるようになっており、従来の親族研究の射程を超えた新たな重要性を帯びるに至っている。遺伝子やゲノムといった新たなサブスタンスが、個や家族、集団のアイデンティティ形成や社会化のあり方に影響を及ぼすさまは、医療人類学を中心に生社会性（biosociality）という点から議論されている。

本研究の目的は、オセアニア、アジア、ヨーロッパにおけるサブスタンスの社会的配置に関する比較研究を通して、グローバル化時代のサブスタンスをめぐる社会動態の包括的な理解をはかるとともに、親族研究と医療人類学で二極化されているサブスタンス研究を架橋するアプローチを提示することである。

研究代表者 松尾瑞穂

班員（館内） 宇田川妙子

（館外） 澤田佳世、島藪洋介、白川千尋、新ヶ江章友、田所聖志、深川宏樹、深田淳太郎、洪 賢秀、松岡悦子、松嶋 健、山崎浩平

研究会

2019年7月13日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館 第1演習室）

松尾瑞穂（国立民族学博物館）「サブスタンスの人類学に向けて——序論検討」

全員「成果論集に向けた論文概要報告」

全員 総合討論今後の予定について

2019年12月21日（土）13：30～18：00（国立民族学博物館 第1演習室）

全員「成果論集の草稿発表」

2019年12月22日（日）10：00～12：30（国立民族学博物館 第1演習室）

全員「成果論集の草稿発表」

全員 総合討論

成果

最終年度にあたる今年度は、2回の研究会を開催した。各回とも、これまでの議論を総括し、今後の成果公開に向けた討論と各論の草稿の検討作業に注力した。代表者である松尾による論集の趣旨と序論、およびメンバーによる各章の草稿の発表を通して、サブスタンス概念の射程が明らかになるとともに、サブスタンスというものに立脚すると見えてくる、身体や社会関係のリアリティについても、ある程度の見通しをつけることができた。

また、各自の研究報告や論文執筆に加えて、中部人類学談話会にて本共同研究会を主体とした分科会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的配置」（2020年1月25日、名古屋大学）を開催し、メンバーからは松尾、山崎、深田が参加した。そこでのコメンテーターおよび参加者との議論を通して、共同研究で得られた知見を公開するとともに、サブスタンス概念の通地域性、通文化性についてより理解を深めることが出来た。共同研究会としては終了

したが、成果論集の刊行や学会での分科会の組織、科研への申請などを計画し、今後も研究を発展的に継続していくための素地を構築した。

「捕鯨と環境倫理」

人類は5000年以上にわたり鯨類を食料や原材料として持続的に利用してきたが、1982年に国際捕鯨委員会（IWC）において大型鯨類13種の商業捕鯨の一時的な捕獲禁止が決定された。その後、現在に至るまで同捕鯨は再開できないままである。この捕鯨をめぐる動きは、動物福祉・動物保護・環境保護団体による反捕鯨運動と連動し、反捕鯨を支持する人びとや政府が増加し、世界各地の捕鯨や捕鯨文化は存続の危機に直面している。反捕鯨運動の背後には、世界各地におけるクジラと人間の関係やクジラ観、環境観の歴史的变化が存在している。

この共同研究では、世界各地の捕鯨の現状および欧米に端を発する反捕鯨運動について把握したうえで、世界各地の反捕鯨運動とその背後にあるクジラ観や環境・動物倫理がどのように形成され、世界各地に広がり、世界各地の捕鯨文化に及ぼしているのかについて検討を加える。より具体的には、アラスカやカナダ、グリーンランド、カリブ海地域等の先住民等による捕鯨、日本の調査捕鯨と小型沿岸捕鯨、ノルウェーとアイスランドの商業捕鯨等の現状と、動物福祉・動物保護・環境保護団体による国際的な反捕鯨運動およびその諸影響について比較するとともに、その背後にあるクジラ観や環境観、捕鯨政策を学際的に検討する。

研究代表者 岸上伸啓

班員（館内） 出口正之

（館外） 赤嶺 淳、李 善愛、生田博子、石井 敦、石川 創、伊勢田哲治、白田乃里子、河島基弘、倉澤七生、佐久間淳子、真田康弘、高橋美野梨、浜口 尚、本多俊和、吉村健司、若松文貴

研究会

2019年6月16日（日）13：00～17：00（国立民族学博物館 大演習室）

若松文貴（京都大学）「日本の捕鯨政策における捕鯨推進派の紐帯」

石川 創（下関海洋科学アカデミー）「コメント」全体討論

2019年12月7日（土）13：30～19：00（国立民族学博物館 大演習室）

是恒さくら（東北大学東北アジア研究センター）「クジラとの係わり——アート実践『ありふれたくじら』プロジェクトを中心に」

全員「共同研究会の成果と今後の課題に関する全体討論」

全員「成果出版の打ち合わせと今後の計画の検討」

2020年2月16日（日）13：30～16：40（国立民族学博物館 第5セミナー室）

岸上伸啓（国立民族学博物館・人間文化研究機構）「趣旨説明」

岸上伸啓（国立民族学博物館・人間文化研究機構）「捕鯨をめぐる世界の動きと諸問題」

浜口 尚（園田女子大学短期大学部）「世界の捕鯨の現状と将来——アイスランドの事例を中心に」

石川 創（下関海洋科学アカデミー）「日本の捕鯨の現状と将来」

「ディスカッションと質疑応答」司会+コメンテーター：若松文貴（京都大学）

検討は全員「まとめ」

成果

日本政府は2018年12月に商業捕鯨の再開を決定し、2019年7月より排他的経済水域内でのミンククジラ、イワシクジラ、ナガスクジラの捕獲を再開した。これは、国際捕鯨取締条約からの離脱（国際捕鯨委員会 [IWC] からの脱退）と南極海・北太平洋北西海域での調査捕鯨の中止を意味している。日本の調査捕鯨は、共通の利権を持つ政-官-民の「エリート層が動員する社会運動であり、その「捕鯨トライアングル」が権力基盤を維持する目的で捕鯨政策を推進していると言われている。第1回共同研究会では、若松文貴が2007-2008年に共同船舶広報部（日本捕鯨協会）で実施したフィールドワークをもとに、政・官・民の三者が日常的にどのように接触・連携し合い、捕鯨政策を維持しているかについて報告した。

第2回研究会では、日常生活において一般の人々や漁民がクジラとどのような関係を持ってきたかを当事者の視点から報告した。特に、是恒さくら氏は自身のクジラに関するアート実践について報告した。

第3回研究会では、これまでの共同研究の成果の一部を一般公開し、検討を加えた。岸上伸啓は捕鯨をめぐる現代の動きと諸問題について、浜口尚はアイスランドを事例として商業捕鯨（致命的利用）とホエールウォッチング

(非致命的利用)の両立可能性について、石川創は日本における捕鯨の現状と将来について、報告した。

本年度の共同研究によって国内外の捕鯨の現状や問題点を整理・検討し、総括することができた。

「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」

本研究では、アフロ・ユーラシア乾燥地全域を対象としつつ、とりわけサハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、アラビア半島、イランに位置する5つの異なるオアシスにおける生活の持続と変容について、物質文化に焦点をあてて検証することにより、沙漠社会の移動戦略の比較研究を推進する。注目する物質文化は、(1)ラクダと船に関わるモノ(陸域と海域の連続性)、(2)飲料と食料に関わるモノ(食品保存と運搬性)、(3)衣装と住居に関わるモノ(熱帯と温帯・寒帯の対称性)である。これらの物質文化の検討をもとに、人類の進化と適応、社会組織の変容性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という3つの観点から沙漠社会の移動戦略を解明する。並行して、片倉もところ(文化人類学者/地理学者)によるアラビア半島に関する現地調査資料(1968-2008)、小堀巖(地理学者)によるアルジェリア・サハラ沙漠に関する現地調査資料(1968-2010)といったおよそ半世紀前に記録・収集された学術資料を活用して、生活空間・物質文化・移動戦略の関係性とその変化についても検証していく。

研究代表者 縄田浩志

班員(館内) 石山 俊、西尾哲夫

(館外) 遠藤 仁、片倉邦雄、河田尚子、郡司みさお、児玉香菜子、坂田 隆、中村 亮、西本真一、原 隆一、藤本悠子、古澤 文、渡邊三津子

研究会

2019年7月20日(土) 13:00~17:30 (国立民族学博物館 第1演習室)

石山 俊(国立民族学博物館)「サハラ・オアシスにおけるナツメヤシ灌漑農業の現代的変容」

質疑応答企画展示内容見学、展示ギャラリートーク:縄田ほか

縄田浩志(秋田大学)「モロッコの自然環境、農業、物質文化——ナイル河岸、アラビア半島との比較の視点から」

コメント:齋藤 剛(神戸大学)

質疑応答

2019年7月21日(日) 10:00~16:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

西川優花(大阪大学大学院)「イラン・ザンデルド下流域における河川の重層的利用と生業の弾力性」

コメント:原 隆一(大東文化大学)

質疑応答

賀川恵理香(京都大学大学院)「現代パキスタンにおけるヴェール着用実践——都市部の女子大生を事例として」

コメント:竹田多麻子(横浜ユーラシア文化館)

総合討論「土地利用と物質文化の地域間比較——マダガスカル、アラビア半島、イラン」

打ち合わせ:研究成果のまとめについて

2019年11月17日(日) 12:45~17:00 (横浜情報文化センター情文ホール)

サウジアラビアの歴史文化遺産と観光資源 サウジアラビアの歴史文化遺産の新たな価値を求めて——日サ合同調査隊の取り組み

2020年1月25日(土) 13:30~17:30 (国立民族学博物館 第4演習室)

縄田浩志(秋田大学)「アフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略」

質疑応答

坂田 隆(石巻専修大学)「ヒトは暑さに強いのか——ヒトの暑熱対応と水消費」

コメント:佐藤麻理絵(京都大学)

質疑応答

2020年1月26日(日) 10:00~15:30 (国立民族学博物館 第4演習室)

西尾哲夫(国立民族学博物館)・竹田多麻子(横浜ユーラシア文化館)・藤本悠子(片倉もところ記念沙漠文化財団)・縄田浩志「企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年」に対する一般来館者の反応」

コメント:原 隆一(大東文化大学)

総合討論「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略」

打ち合わせ:学会発表準備(中東学会、文化人類学会、ロンドン国際会議)、成果出版(沙漠研究、中東学会年報、国立民族学博物館調査報告)ほか、研究成果のまとめについて

成果

最終年度4年度は、対象としてきた物質文化について、アラビア半島とマグレブ、イラン地域とを比較することにより、各地域の物質文化の特質を、人類の進化と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という3つの観点から再定置した。その上で、中心テーマ「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略」に関する議論を深化させていった。

主な研究成果は、以下の3点にまとめられる。(1)本研究会の成果をもととして、企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」(2019年6月6日～9月10日)また同巡回展(横浜ユーラシア文化館、2019年10月5日～12月22日)を開催した。(2)本研究会の主要な成果として書籍『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』(河出書房新社、縄田浩志編、2019年6月6日)を出版した。(3)本研究会メンバーが中心的役割を担って、国際シンポジウム「サウジアラビアと日本をつなぐ文化交流のこれから」(横浜情文ホール、2019年11月17日)を開催した。

「音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究」

音楽の人類学的研究は半世紀ほどの歴史をもつが、従来の研究の多くは、音楽の意味を音(テキスト)に求める「音楽学」寄りの研究と、音の文化的背景(コンテクスト)に音楽の存在意義を求める「人類学」寄りの研究とに分かれる傾向にあった。また、両者の学術的対話の困難さもこれまで指摘されてきた。

他方で近年では、人類学と音楽学とを架橋する研究者らが、人間の音楽的な営みを“音楽すること musicking”として理解することを提唱している。musicの動名詞型にあたる「ミュージッキング」には、歌い・奏し・踊ることだけでなく、手拍子や聴取といった行為までも含まれる。これは、音楽的实践における身体性に着目することで、“音楽”という近代のかつ抽象的な概念を根本から再考するために提案された鍵概念である。

本研究は、記述・分析の対象を「音楽」から「ミュージッキング」へとずらし、パフォーマンスのさなかにある身体同士のやりとりを音楽的出来事に不可欠な一部分として語るための方法論を確立することを目的とする。

研究代表者 野澤豊一

班員(館内) 川瀬 慈、寺田吉孝、福岡正太

(館外) 青木 深、井手口彰典、岡崎 彰、梶丸 岳、大門 碧、武田俊輔、谷口文和、西島千尋、伏木香織、増野亜子、松平勇二、矢野原佑史、輪島裕介

研究会

2019年5月12日(日) 13:30～18:00 (国立民族学博物館 第4セミナー室)

福岡正太(国立民族学博物館)「ミュージッキングとしての映像記録作成——フォーラム型情報ミュージアム『徳之島の唄と踊り』」

竹村嘉晃(シンガポール国立大学/国立民族学博物館)「インド芸能から考える舞踊民族誌の視角」

全員・成果の取りまとめにむけて

2019年7月6日(土) 13:30～18:30 (国立民族学博物館 大演習室)

井上淳生(北海道地域農業研究所)「音楽と格闘する踊り手——社交ダンスを素材に動きと音楽の関係を描く」

全員・成果の取りまとめにむけて

2020年2月22日(土) 9:30～18:00 (国立民族学博物館 第4セミナー室)

全員・成果論集の原稿読み合わせ

成果

2019年度は3回の共同研究会を実施した。最終年度ということもあり、口頭発表の数をこれまでよりも少なくして、成果発表のための話し合いに多くの時間を割いた。発表では、2018年度までに議論を尽くしきれなかった「映像」と「ダンス」に関わる報告を、3名の研究者(うち2名がゲストスピーカー)が行った。それぞれの内容は、人々の音楽実践を映像として記録したり現地の人々と共有する営み自体をミュージッキングとして記述する可能性について、舞踊研究におけるテキスト主義とコンテクスト主義の限界、現代日本の社交ダンス実践者における「音楽」と「ダンス」の分離状況について、というものである。成果発表のための準備としては、まず代表者である野澤が論集全体の方針を共同研究のメンバーに伝えたうえで(2019年5月12日)、各人の担当するチャプターの案を集めた(2019年7月6日)。それをふまえて各人が草稿を持ち寄り、相互にコメント・批判を行った(2020年2月22日)。

「現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究」

本研究は、現代日本の超高齢社会における地域包括ケアシステムとそこに通底する死生観や人格観、家族観を明らかにしながら、「医療の生活化」という概念を手掛かりに、地域社会での「看取り文化」を新たに構想することを目指す。

日本は世界に類を見ないスピードで高齢多死社会に突入しつつある。病院死がおよそ80%占める一方、「終活」の展開や葬儀の多様化が進み、「その人らしい死」「死の自己決定」という死の文化的、社会的変容が起こっている。また「独居老人」や「孤独死」という言葉に見られるように家族観の変容と地域社会の変貌が指摘されている。近年、厚生労働省は高齢多死社会を見据えて病院医療から在宅医療への転換を打ち出し、終末期医療の再検討を始めた。これにより日本各地で在宅（施設を含む）での「看取り」のあり方が模索され始めている。今日、在宅の「看取り」には医療福祉制度の充実や多職種連携は不可欠であるが、そこには実践的課題と学術的課題がある。前者は、既存の地域包括ケアシステムが抱える問題、公的介護と家族介護とのバランスという課題である。後者は、死の医療化論、死生観と家族観の変容、死の個人化を促す地域社会の再検討という理論的課題である。本研究では、国外の「看取り」実践を参照点とし、上記の二つの課題を横断的に捉えつつ、現代日本における「看取り文化」の再構築への道筋を提示する。

研究代表者 浮ヶ谷幸代

班員（館内）鈴木七美

（館外）相澤 出、渥美一弥、鈴木勝己、田代志門、田中大介、松繁卓哉、山田慎也

研究会

2019年4月20日(土) 14:00~18:00 (国立民族学博物館 第3演習室)

加賀谷真梨 (新潟大学) 「分化する『看取り』——沖縄離島の小規模多機能型介護施設の実践から考える」

福井栄二郎 (島根大学) 「ヴァヌアツ・アネイチウム社会における高齢者の生・病・死、その変化について」

2019年4月21日(日) 10:00~12:00 (国立民族学博物館 第3演習室)

浮ヶ谷幸代 (相模女子大学) 「ルームシェアで最期を迎える——神奈川県藤沢市UR住宅における小規模多機能ホーム〈ぐるんとびー〉の取り組みから」

2019年5月11日(土) 14:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

○日本文化人類学会第53回研究大会分科会のためのプレ発表

浮ヶ谷幸代 (相模女子大学、趣旨説明) 「コミュニティ（地域）による看取りの力」

相澤 出 (岩手保健医療大学) 「地元へ投じる一石としての『安心ノート』——二ツ井ふくし会による在宅での看取り事例集は地元になにをもたらすか？」

浮ヶ谷幸代 (相模女子大学) 「『小さな移住』と『大きな移住』——日本版CCRCとUR団地小規模多機能ホームとの比較から」

山田慎也 (国立歴史民俗学博物館) 「看取りから葬送へのコミュニティは形成されるか？——無縁化への予防と自己決定をめぐる実践を通して」

松繁卓哉 (国立保健医療科学院) 「地域包括ケアシステム（保健・医療・福祉）への『住民参加』——システムにおける互助の問題」

渥美一弥 (自治医科大学) 「サーニッチが居留地で看取ること——地域の看取りとしてのカナダ先住民保留地」

2019年5月12日(日) 10:00~12:00 (国立民族学博物館 大演習室)

山田千香子 (聖徳大学) 「住み慣れた地域を終の棲家とするために——長崎県の島の取り組みを事例として」

成果

本年度は、共同研究の最終年度であり、共同研究の成果の一部として日本文化人類学会の分科会の準備にあてた。加えて、看取りに関する調査研究に取り組んでいる特別講師を3人招聘し、「死」「看取り」「地域」について検討した。分科会のテーマは「コミュニティ（地域）における看取りの力」であるが、80%近くが病院で最期を迎えている現代日本で、コミュニティに看取りの力を想定することは可能か、という課題が議論された。家族や地域住民における「おたがいさま」という機能が消失した現在、無縁者や独居高齢者が最後を迎える際に行政や企業がイニシアチブをとらざるを得ない現実があった（山田慎也）。他方、医療・福祉制度（松繁）を背景として、最期を迎える人を含めた専門家と家族、住民とのかかわり方から「看取り文化」の可能性について論じる報告があった（加賀谷、浮ヶ谷、相澤、山田千香子）。海外の報告（福井、渥美）を参照しつつ、これらの結果を踏まえて「看取り文化」の

構想には医療・福祉の専門家やその実践と、「死にゆく人」とその「死」をめぐる関係者の思いや行為とが交叉する、政治的、経済的、社会的プロセスを明らかにすることが重要であることを確認できた。(括弧内は報告者)

「テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究」

IT化や科学技術の発展に伴い、直接的なコミュニケーションが減少している現代社会において、今改めて身体的相互行為の価値が問われている。本共同研究では、科学技術が介在する際に知識や情報の伝達をも含んだ身体技法が如何に変化し再構築されるのかについて、世界各地の事例に基づいて比較検討を行う。身体を通じて伝えられる技芸や知識等は、これまで口伝や観察による自得によって享受されてきた。しかし近年では、科学技術によって技芸をデジタル化しようとする傾向が顕著であり、さらには身体技法がメディアを通じてより拡大された社会関係のなかで共有されはじめていく。だが他方で、身体技法の習得及び伝承の過程では、科学をもってしても可視化・言語化・定量化ができない身体知——感覚、感情——があり、テクノロジーとの融合において常にジレンマがつきまわっていることもまた事実である。本研究では、身体技法をめぐるテクノロジー利用に着目し、新しい身体的相互行為、およびコミュニケーションの在り方を明らかにする。

研究代表者 平田晶子

班員(館内) 伊藤 悟、廣瀬浩二郎

(館外) 岩瀬裕子、阪田真己子、谷岡優子、日比野愛子、柳沢英輔、吉川侑輝

研究会

2019年7月27日(土) 10:30~18:00 (国立民族学博物館 第6セミナー室)

- ①菅原和孝(京都大学)「人類学分野における身体技法研究」質疑応答
 - ②市野澤順平(宮城学院女子大学)「ダイブ・コンピューターと減圧症リスク——観光ダイビングにおける身体感覚/能力の増強とリスク認知」
- 各共同研究員による成果報告質疑応答、総合討論質疑応答、総合討論

2020年2月16日(日) 10:00~18:00 (国立民族学博物館 第3セミナー室)

- ①大西秀之(同志社女子大学)「技術研究をめぐる民族誌フィールドの可能性」
- ②佐本英規(広島大学)「竹とラジオとスマートフォン——ソロモン諸島アレアレの在来楽器をめぐる技法と技法論の変遷にみる物と身体、人格の関係性」
- ③三津島一樹(京都大学大学院)「身ぶりテクノロジーの相互作用——西アフリカ・ガーナの自動車修理を事例に」
- ④市野澤潤平(宮城女子学院大学)「水中における身体感覚の民族誌的記述」総括

成果

最終年度となった2019年度は、国内の人類学分野で身体に関する研究を継続されてきた菅原和孝氏(京都大学)や『技術と身体民族誌』を上梓された大西秀之氏(同志社女子大学)などを特別講師として招聘し、身体を研究対象とする際の可能性や課題について検討してきた。とりわけ、最終回の大西氏からは、シェーンオペラトワールの技術論から発展させたかたちで、産業化・近代化する各自の対象社会に生きる人びとの営みの中で発見できる「技術」を技能と知識に分解しながらみることで、近代と伝統の二文法を克服する視座を提示していただいた。佐本氏は、ソロモン諸島マライタ島アレアレの竹製パンパイプ・アウにみるチューニングの身体活動が極めて技術的实践であるとし、チューニングの技術的活動をめぐって人びとが商業化・グローバル化と向き合う葛藤や軋轢などの視点を提起した。三津島氏は、西アフリカ・ガーナの自動車修理工場にみる修理技術の民族誌に取り組み、修理実践における道具や身振りを事例に、不確実な行為の条件のもとで行われている、動作連鎖という観点から詳細な一次資料を基に報告した。

こうした特別講師による話題提供により、用語としての身体と肉体の問題を再考したり、これまでICTに敢えて特化して科学技術を扱ってきた本共同研究において「技術」を再定義したりするきっかけとなった。今後、本共同研究では深化させることができなかつた、われわれの身体活動に関わる技術的实践において技能と知識がいかに関係しているかなどについて議論を深めることを各自の課題として、本共同研究会を閉会した。

「博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から」

本館における保存科学研究では、博物館機能をもつ研究所という特色を生かし、基礎的な研究と、それを発展さ

せた実践的な研究に取り組んでいる。その内容は、モノ資料を主たる対象に、生物生息調査や温度・湿度モニタリングなどの保存環境データを効率的に分析するプログラムの開発、データの分析結果をもとにした展示・収蔵環境の整備とその検証、化学薬剤を用いない殺虫処理法の開発および条件改良、収蔵スペースの狭隘化対策と収蔵改善を目的とした収蔵庫の再編成、被災文化財への応急措置を含めた保存修復法の開発など、多岐にわたる。

本研究では、これまでの研究をさらに深化させ、環境への配慮が一層求められる21世紀の社会状況に適合する持続可能な資料管理および保存環境の基盤整備を目的とする。ここでは、研究対象をモノ資料だけでなく、映像資料にひろげるとともに、大規模な博物館等の施設のみならず、設備、人手、経費が限られる小規模な博物館等の施設や個人所蔵者でも応用・実践が可能な保存の条件や指針を提示するという新たな軸を設定して研究を進める。その上で、保存科学の基礎的・実践的研究にくわえて、21世紀の社会状況のもとでの資料の保存と活用について、その意義を整理し再考する。

研究代表者 園田直子

班員 (館内) 大森康宏、森田恒之、河村友佳子、末森 薫、橋本沙知、日高真吾、平井京之介、吉田憲司
(館外) 大関勝久、木川りか、佐藤嘉則、高畑 誠、鳥越俊行、馬場幸栄、山口孝子、和田 浩、
和高智美研究会

2019年7月19日(金) 13:30~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

和高智美「国立民族学博物館における生物生息調査と分析手法」
木川りか「九州国立博物館における生物生息調査と分析手法」
馬場幸栄「一橋大学社会科学古典資料センターにおける生物生息調査と分析手法」
佐藤嘉則「東京文化財研究所における生物生息調査と分析手法」
大関勝久「国立映画アーカイブにおける生物生息調査と分析手法」
高畑 誠「宮内庁正倉院事務所における生物生息調査と分析手法」
山口孝子「東京都写真美術館における生物生息調査と分析手法」
和田 浩「東京国立博物館における生物生息調査と分析手法」
全員：分析手法の検証およびディスカッション
河村友佳子「太陽熱を用いた高温処理の条件確立——今後の進めかた」
橋本沙知「窒素雰囲気での密封実験——今後の進めかた」
橋本沙知「多機能資料保管庫におけるカビの発生資料と空気の対流調査——今後の進めかた」
馬場幸栄「西洋貴重書保存インデックスについて」
末森 薫「オランダ・デンマークに建設された低エネルギー・共有型収蔵施設」

2019年12月12日(木) 13:30~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

河村友佳子「国立民族学博物館における温湿度に関する調査と分析手法」
橋本沙知「2019年特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」調湿展示ケース内の温湿度制御事例」
高畑 誠「宮内庁正倉院事務所における温湿度に関する調査と分析手法」
山口孝子「東京都写真美術館における温湿度に関する調査と分析手法」
大関勝久「国立映画アーカイブにおける温湿度に関する調査と分析手法」
渡辺祐基「九州国立博物館における温湿度に関する調査と分析手法」
和田 浩「東京国立博物館における温湿度に関する調査と分析手法」
全員：分析手法の検証およびディスカッション

2020年2月6日(木) 14:00~17:00 (宮内庁正倉院事務所)

高畑 誠「正倉(外観)・校倉、保存科学室における資料保存」
全員：奈良時代より文化財が保存されてきた管理体制や施設環境に関するディスカッション

2020年2月7日(金) 10:00~16:00 (奈良国立博物館)

鳥越俊行「奈良国立博物館における資料保存」
全員：奈良国立博物館における資料保存に関するディスカッション

成果

第1回研究会では生物生息調査、第2回研究会は温度・湿度モニタリングという、各機関が共通して実施している予防保存活動を課題としてとりあげた。生物生息調査および温度・湿度モニタリングの調査方法と分析手法の最適化と効率化を目的に、それぞれの機関での調査方法およびデータの解析法を議論した。また、本館が実施してい

る研究開発（高温殺虫処理、低酸素濃度環境下での資料保管）の進捗状況をもとに、結果の検証と評価をおこなった。第3回研究会（2020年2月6日、7日）では、宮内庁正倉院事務所および奈良国立博物館における資料保存について意見交換をおこなった。昨年度にひきつづき、共同研究員の所属先で館外研究会を開催することで、現場での実態調査をおこない、保存科学研究の遂行上、不可欠となる共通基盤の形成につとめた。

「人類学／民俗学の学知と国民国家の関係——20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」

日本の人類学は、欧米の理論を導入して移植して学知として定着していった一方で、植民地経営への応用、ナショナリズムの勃興と民族意識の高揚、戦闘地域での情報活動など、人類学を取り巻く国内外の政治的状況で展開、発展してきたのは、欧米と同じである。そこで、単に学術活動や理論の受容を祖述するだけではなく、人類学／民俗学を取り巻く社会的状況を踏まえ、隣接諸領域を視野に含めた歴史の再構築をすることで、人類学の果たした社会的役割を明確にすることが、この研究の目的である。具体的にこの研究では、1920年代から40年代にかけての戦間期における欧米と日本の人類学／民俗学を比較対照することで、日本への影響のルーツを探り、学知として成立する人類学／民俗学を歴史のコンテキストで理解する基礎研究を目指したい。

研究代表者 中勝勝美

班員（館内） 飯田 卓、宇田川妙子

（館外） 飯嶋秀治、池田光穂、白杵 陽、江川純一、及川祥平、加賀谷真梨、栗本英世、佐藤若菜、角南聡一郎、泉水英計、田中雅一、Damien KUNIK、山田仁史

研究会

2019年4月21日（日）10：00～18：00（国立民族学博物館 第1演習室）

中勝勝美（桜美林大学）事務連絡各自の研究進捗状況1 各自の研究進捗状況2

中勝勝美（桜美林大学）「松島泰勝『琉球 奪われた骨——遺骨に刻まれた植民地主義』の書評」

泉水英計（神奈川大学）「琉球列島米民政府の宣伝番組——社会保障および医療を中心に」

2019年12月24日（火）10：00～17：30（国立民族学博物館 第1演習室）

中勝勝美（桜美林大学）「研究会経過報告」参加者の今年度の研究成果報告（1人20～30分）

栗本英世（大阪大学）「エヴァンズ＝プリチャードの軍役経験——軍将校としての人類学者を考える」
総合討論、今後の研究会の打ち合わせ

2020年1月30日（木）10：00～18：00（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館見学

中勝勝美（桜美林大学）「鳥居龍蔵の蒙古調査」

佐藤若菜（新潟国際情報大学）「鳥居龍蔵の蒙古調査」

総合

2020年1月31日（金）9：00～12：00（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館）

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵写真資料閲覧、文献調査

成果

本年度は、この研究会のメンバーを共同研究者として申請した科学研究費（基盤研究（B））（一般）「ファシズム期における日独伊のナショナリズムとインテリジェンスに関する人類学史」が採択され、第1回の研究会で、科研費獲得による研究計画の見直しをした。さっそく夏にイギリスに出張した栗本英世より、ピット・リバーズ博物館のアーカイブ調査の成果を発表してもらった。今年度は、この科研で中勝はドイツ、スイス、オーストリアへ、山田はドイツ、飯嶋はアメリカ、泉水はアメリカ、池田はアルゼンチン、江川はイタリアへ赴き、現地調査を実施し、非常に研究が進展した。

また徳島県立鳥居龍蔵記念博物館では、鳥居龍蔵関連を発表して当該館との交流をすすめ、貴重な収蔵資料を内覧できた。当該館より、戦前に鳥居龍蔵をモデルにした映画が、満洲でのロケで制作されている情報をもらい、次年度は、その閲覧を研究会として考えたい。

「文化人類学を自然化する」

文化人類学を自然科学の一部とすることを最終目標として、そのための方法を模索する。自然科学を人類学の研究対象にするのではない。人類学を他の自然科学（とりわけ心理学と生物学）と横にならぶ自然科学の一つの部門

として成立させるのである。具体的には、人類学独自のことば遣いを自然科学のある部門の言葉へと翻訳する可能性を考えることから始める。すなわち還元がその方法論である。還元先の部門としては、とりあえず、心理学（認知心理学、社会心理学）そして生物学（進化生物学、疫学）を考えている。また積極的に自然化を推し進めている一部の哲学にも範を求めたい。消極的には「人類学の解消」に繋る動きととらえることもできようが、わたしは、より積極的に、文化人類学の自然化は自然科学というものを変化・発展させる契機になり得ると信じている。

研究代表者 中川 敏

班員（館内）飯田 卓、松尾瑞穂

（館外）唐沢かおり、高田 明、戸田山和久、中川 理、中空 萌、中村 潔、浜本 満、山田一憲

研究会

2019年6月8日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

菅原和孝 (京都大学) 「自然誌的態度にとって種とは何か? ——分類・本質主義批判・身体化」

全体討論

内堀基光 (一橋大学) 「カミノリと鈍、斧のあいだ——文化の細部の説明をどれだけ自然化するか、自然化できるのか」

全体討論

2019年9月28日(土) 9:00~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

中川 敏 (大阪大学) 「人類学を自然化するいつかの方法——研究会の前半を終えて」

全体討論

中村 潔 (新潟大学) 「社会的諸力とは」

全体討論

浜本 満 (九州大学) 「シンボル記号の条件——類人猿の言語習得実験についてのど素人的考察」

全体討論

2019年11月24日(日) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

高田 明 (京都大学) 「言語の自然化——サンの養育者=幼児間相互行為の分析から」

全体討論

山田一憲 (大阪大学) 「授乳をめぐるニホンザルの母子相互交渉」

全体討論

2020年2月2日(日) 9:00~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

飯田 卓 (国立民族学博物館) 「読むことの現象学」

松尾瑞穂 (国立民族学博物館) 「サブスタンス、人格、情報のネクサス」

全体討論

中川 理 (立教大学) 「現代版不平等起源論とその批判」

全体討論

成果

第1回目の特別講師二名（内堀、菅原）による発表、そして直前の（前年度最後の）文化人類学の外部の「自然化」の専門家（戸田山、唐沢）の発表を経て、研究会の方向が徐々に明らかになってきた。すなわち、自然主義の基礎論（とりわけ記号の恣意性の起源論）と自然主義の応用（自然主義をいかにして人類学のフィールドワークに適用するか）という二つの流れである。2回目以降は文化人類学プロパーの研究者による二度目の発表となる。すべて上記の二つの流れを念頭においての発表となった。これらの発表をつうじて、上記二つの流れがさらに明確化した。基礎論においてはミリカンの議論などが参照されたが、パースの提唱するアブダクションという推論が恣意性の起源の解明の一つのキーとなることが示差された。応用編においては、（自然主義としての）社会心理学の方法、プラグマティズムの方法などが検討された。

「ネオリベラリズムのモラリティ」

本研究の目的は、ネオリベラリズムの現れ方の多様性、特にモラリティの意味付けと実践を現地の文脈や当事者の視点から解き明かすことによって、今日の世界における生を民族誌的現実即して知らしめ、具体的な課題を明らかにしつつ、ありうべき社会の可能性を探るための議論に貢献することにある。

ネオリベラリズムは、その言葉を知ろうと知るまいと、関心があろうとなかろうと、私たちの生活を覆いつくしつつある。しかしその現れ方は、場や受け取る側の歴史や政治経済的状况、及び文化によって様々である。本共同研究では、世界各地で長期フィールドワークを行ってきた30～40代の研究者たちが、それぞれの地域と対象の人々の詳細な事例に関する情報と知見を交換し、ネオリベラリズムの世界におけるモラルティを具体的な事例を通じて理解することを試みる。

研究代表者 田沼幸子

班員（館内） 相島葉月、八木百合子

（館外） 伊東未来、猪瀬浩平、酒井朋子、佐川 徹、佐久間寛、佐々木祐、中川 理、深澤晴奈、宮本万里

研究会

2019年7月13日(土) 13:00～18:30 (国立民族学博物館 第2演習室)

佐久間寛(明治大学)「『テントを切り裂けばバターがある。放っておく?』——現代ニジェールにおける恋愛、移動、自由」

宮本万里(慶應義塾大学)「コンニェル(寺守り)からゲロン(出家僧)へ——民主化期ブータンにおける村寺の包摂と『解放』」

参加者全員「今後の研究会展望」

2019年11月9日(土) 12:30～18:00 (国立民族学博物館 第2演習室)

参加者全員 今後の研究会展望

酒井朋子(神戸大学)「国境、パスポート、利便性——ブレクジットと北アイルランドのコスモポリタニズム」

中川 理(立教大学)「エスノリベラリズム・リベラリズム・ネオリベラリズム(そしてホームランド・ビューティとグローバル・ギャップ)」

全体討論

2020年2月15日(土) 12:30～18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

参加者全員 今後の研究会展望

八木百合子(国立民族学博物館)「バルーにおける人の移動と宗教文化の変容——都市祭礼をめぐるヒト・モノ・カネ」

田沼幸子(首都大学東京)「怒って済むなら人類学者は要らない。ではどうするか」

富山一郎(同志社大学) コメント参加者全員

総合討論

成果

それぞれの民族誌的報告は、ますます濃密で複雑なものとなっており、地域的歴史的背景を踏まえてネオリベラリズムを理解することの重要性を再認識させられる。

佐久間は20年前のフィールドにおける悲恋を扱った。微細な会話とやり取りを、伝統的コンテクストとその時点でのコンテクストを通じて描くことによって、なぜそのようなやりきれない展開になってしまったのかを掘り下げた。宮本は、従来は村の男性が交代で務めてきた寺の世話が、各地の大僧院から派遣された出家僧に置き換えられていった背景を明らかにする。僧侶の統治から王政へ、隣国が関わる経済政策、グローバル化する布教活動など、大きな力が小さな村に変化をもたらしている。中川は、フランスのモン難民が工場労働から農民になった背景に「エスノリベラリズム」があり、それが国の管理などへの抵抗としての価値を具現化するリベラリズムに接合されていったことを示す。一方でそれは不平等なジェンダー関係によって成立し、彼らの自由もネオリベラリズム・ガバナンスによって緊張にさらされている。八木は、村から都市へ移動した人々によって、祭礼が経済的に大規模になっただけでなく、祀られる聖人にも変化が起きたことを示す。経済的な力が、政治的な力を凌駕して、宗教的な祭礼に影響を及ぼしているのだ。ただし村から都市への移動は、経済的利益を求めてではなく、政情不安による危険を回避してのものだった。田沼は「ネオリベ」への人類学者の怒りは学生に受け入れられず分析が単純化しがちだと指摘する一方で、外部に理解しがたい難解な人類学は、「私たちの仕事を失ってしまう」ことにつながるというシドニー・ミンツの危惧が現実にも迫っていることを示す。改めて何か共有できるとしたら、私たち自身もネオリベラリズムに巻き込まれていること、そして解決策を知らず、間違っていることを自覚して、古いものを捨てていくのではなく、円環的時間・直線的时间が併存する「revolution」のように、過去を振り返り、「循環」しながら、人類学/民族誌することを続けていくべきではないか。

「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」

産業化やグローバル化の加速を背景に近年、宗教的な領域における商品化もかつてないほど急速に進んでいる。以前は特定の地域や信仰者のあいだでのみ崇拝あるいは使用されてきた聖なるモノでさえも、その複製品が大量に世に出回り、時には信仰を異にする人びとの手にまで拡散している。こうしたモノの新たな受容をとおして、それまで見られなかったスタイルの信仰や実践が生み出されるなど、宗教的な領域におけるモノの存在やその動向は、現代の宗教的世界のあり方を理解するうえで看過できない。ところが、宗教的文脈においては教義上、物質より精神を重視する傾向が強いためか、これまでモノは副次的な存在でしかなく、1980年代以降の人類学のモノ研究の展開においても、儀礼や宗教空間を構成する多様なモノの現代的な生産流通消費の諸相が見過ごされる傾向にある。

本研究では、宗教的なモノに焦点をあて、今日の宗教の展開について比較検討を行うことを目的とする。とくに近年拡大するモノの生産や流通の局面を見据え、それが各地に及ぼすさまざまな影響を浮かび上げさせ、宗教的領域におけるモノの役割、モノを介した信仰の現代的諸相について考える。

研究代表者 八木百合子

班員（館外） 笠井みぎわ、小西賢吾、田村うらら、鳥谷武史、中川千草、長嶺亮子、丹羽朋子、野上恵美、福内千絵、二ツ山達朗、古沢ゆりあ

研究会

2019年5月25日(土) 13:30~18:30 (国立民族学博物館 第1演習室)

丹羽朋子 (国際ファッション専門職大学)

「紙にうつされた不可視／不在のかたち——中国剪纸の事例から」

山越英嗣 (早稲田大学)

「聖像がつむぐ抗議運動の記憶——オアハカのストリートアートとアクチュアリティの共鳴」

全体討論

2019年6月29日(土) 13:30~18:30 (国立民族学博物館 第1演習室)

中川千草 (龍谷大学)

「呪いと祈りのバリエーション——ギニア共和国・沿岸地域における『災因論』を例に」

全員報告・討論「呪術的な力とモノ」

全員 「今後の研究会のすすめ方について」

2019年10月5日(土) 13:30~18:30 (国立民族学博物館 大演習室)

全員 研究成果公開に向けた打合せ

小倉美恵子 (ささらプロダクション) 「うつし世の静寂 (しじま) に」 上映・作品解説全員

全体討論

2019年10月6日(日) 10:30~16:00 (国立民族学博物館 第4セミナー室)

◇公開研究会◇

八木百合子 (国立民族学博物館) 「趣旨説明」

鳥谷武史 (金沢大学) 「日本のまじないについて」

小倉美恵子・由井 英 (ささらプロダクション)

「オオカミの護符——里びとと山びとのあわいに」 上映・作品解説

総合討論

2019年12月7日(土) 13:30~18:30 (国立民族学博物館 第3演習室)

全員 研究成果公開に向けた打合せ

全員 今後の予定について

2020年1月25日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

全員 成果出版の構想についての討議

成果

本年度は、通常の研究会の開催と並行して研究成果公開についての打合せをおこなった。また、関連分野の外部の講師を2名を招聘し、研究課題に関する議論を深めた。10月には、公開研究会を催し、日本の宗教的なモノをめぐる動向について、関連する映像作品の視聴をおこなうとともに、撮影者による報告や一般参加者の意見も交えて検討をおこなった。

研究成果に関する討議では、代表者が提示した論集の構想案にもとづき、目次の枠組みをつくった。それに従い、これまでの報告や議論を踏まえながら、各自の論考の方向性について調整をおこなった。とくに、研究期間をつうじて見出された論点を整理していくなかで、モノの複製化にまつわる問題（神々のイメージの現地化、ポピュラー化、商品化、モノの蓄積と転生）や物質性の変化にかかわる問題（代替メディアの役割、視覚以外の感覚への働きかけ等）など、宗教的なモノをめぐる世界各地で生起している現代的な諸課題が浮き彫りになった。これらの点は各地の事例をもとに成果論集のなかで考察を深める予定である。

「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」

本研究の目的は、虚実入り混じる電子情報が飛び交う現代世界において、他者接触に関する歴史経験の記憶がいかに「史実性」を獲得するのか、想起の場や感情と関連づけて追究することである。

近現代のオセアニアおよび東南アジア島嶼部では、欧米諸国や日本による植民地統治や第二次世界大戦を経て、多くの新興国が独立した。今日に至る歴史動態のなかで、当該地域の人々は、移動して多様な他者と遭遇し、軋轢や戦争に巻き込まれ、また他者との平和的協働を経験してきた。このような他者接触の歴史記憶を焦点化するにあたり、便宜上、1) 国民やエスニック集団を統合する公的な集合的記憶、2) 個々人の日常生活に根差したヴァナキュラーな記憶の二極を措定しておく。

そして、第一に、2つの歴史記憶の相互関係を見据えながら、人々が感情を伴っていかに集合的記憶および個別経験の記憶を生成、継承し、あるいは忘却していくのかを考察する。さらに、遺物や文書、語りを通して想起された歴史記憶は、静態的な情報に留まることなく、人々の感情を揺さぶり、ときに過激な行動を引き起こす潜在力を有する。そこで第二に、今を生きる人々の歴史記憶が立ち現れる場を射程に入れ、想起が内包する感情および身体的な特性の把握を目指したい。

研究代表者 風間計博

班員（館内） 藤井真一、丹羽典生

（館外） 金子正徳、河野正治、北村 毅、桑原牧子、小杉 世、長坂 格、西村一之、比嘉夏子、深川宏樹、深田淳太郎、森亜紀子、山口裕子、吉田匡興

研究会

2019年6月29日(土) 13:30~19:00 (国立民族学博物館 第4演習室)

深田淳太郎 (三重大大学) 「遺骨収容活動における模倣的振る舞いと死者との接続」

質疑応答

丹羽典生 (国立民族学博物館) 「紛争後におけるフィジー少数民族の歴史実践の比較分析」

質疑応答

全員「全体討論」

2019年7月20日(土) 13:30~19:00 (国立民族学博物館 第4演習室)

酒井朋子 (神戸大学) 「長期紛争体験の語りにおけるユーモア——北アイルランド紛争の常態化、倫理的試行としての笑い」

質疑応答

神原ゆうこ (北九州市立大学) 「スロヴァキアの民族混住地における対立の外在化と共生の語り——多様化するハンガリー系マイノリティが語る不満と語らない不満」

質疑応答

全体討論

2019年10月26日(土) 13:30~19:00 (国立民族学博物館 第2演習室)

下田健太郎 (慶應義塾大学) 「想起される水俣病経験——移ろいゆく行為者への視点」

質疑応答

飯高伸五 (高知県立大学) 「慰霊と観光の狭間で——ペリリュー島における戦争の記憶をめぐるエイジェンシー」

質疑応答

全体討論

2019年11月30日(土) 13:30~19:00 (国立民族学博物館 第4演習室)

伊地知紀子 (大阪市立大学) 「済州4・3をめぐる経験と感覚——朝鮮半島と日本の近現代と他者」

質疑応答

小杉 世 (大阪大学)「クリスマス島における英米核実験——キリバス民間人の視点から」
質疑応答
全体討論

成果

本年度は、共同研究会を4回開催した。特別講師3人を含む8人が発表を行い、総合的に討論した。

ソロモン諸島で戦死した日本兵の遺骨収容活動(深田)、パラオの戦跡観光をめぐる現地日系人を含む多様なアクターの実践(飯高)において、太平洋戦争後70年以上経た現在でも、遺骨や遺物が現在の人々を突き動かす状況が明らかになった。モノに着眼して水俣病の現状をみると(下田)、苦難の記憶が石像を生み出し、モノと記憶が絡み合う様相が看取された。一方、クリスマス島住民は、英米核実験の危険性を感じていなかったが、外部者が知識を導入して放射線への不安が喚起され、被曝の記憶は再編された(小杉)。

紛争後フィジーでは、先住系住民の優遇法制の下、父系社会における母系親族への権利(ヴァス権)が移民子孫の言説に流用され、相互関係が探られていた(丹羽)。「済州4・3」事件以降、分断された住民は、凄惨な経験の語りえない感覚や感情を生起させながら、共存し続けていた(伊地知)。北アイルランド紛争の語りには、悲惨な恐怖体験にもかかわらず、自虐的「笑い」が付随していた(酒井)。スロヴァキアのハンガリー系住民と主流社会の住民は、歴史と言語を巡る微妙な軋轢のなか、日常的平穏を保っていた(神原)。

このように、戦争の痕跡、病いや放射線被曝、エスニックな対立や紛争に関わる他者接触の多様な事例において、歴史記憶と物質性、語りと沈黙、感覚や感情が複合的に絡み合いながら、矛盾を含む複雑な人々の相互行為が生起される様態を明示した。研究発表と討議を通じて、個別の歴史や地域による特異性が明らかにされただけでなく、差異を超えた共通事象を見出す可能性を把握することができた。

「伝統染織品の生産と消費——文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐる」

本研究では、ローカルな生活世界において一定の社会的・文化的意味と機能を持ち、使用されてきた伝統染織品が商品化され、従来の生産と使用の文脈を離れた市場に流通するようになった過程を考察対象とする。とくに、ローカルな文脈に根付いた文化実践を国単位のものとしてグローバルな文脈に引き上げ、可視化する無形文化遺産の認定や、商品としての販路開発と結びつくと同時に外部者からの評価を強化する観光化が、アジア地域を中心とする各地の伝統染織品の生産と消費にどのような効果や影響をもたらすのかという点を議論の軸とする。具体的には、1) 個別の伝統染織品に対してどのような価値づけが行われるようになったか、2) 個別の伝統染織品が生産者および生産者を取り巻く社会において保持してきたローカルな意味がどのように変容してきたか、3) そこに生じる変容は、伝統染織生産に用いられる技法や素材の選択にも影響を及ぼしているかといった課題に取り組む。

研究代表者 中谷文美

班員(館内) 上羽陽子

(館外) 青木恵理子、五十嵐理奈、今堀恵美、落合雪野、金谷美和、窪田幸子、佐藤若菜、杉本星子、田村うらら、松井 健、宮脇千絵

研究会

2019年5月25日(土) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 第6セミナー室)

佐藤若菜(新潟国際情報大学)「収集・分析・撮影・展示される民族衣装——日本が中国少数民族文化に与えた影響に着目して」

今堀恵美(東海大学)「ウズベキスタンのシルクロード観光イメージとウズベク刺繍のローカルな意味の変容」モノ語り Part III 「バリ農村における<伝統染織>の生産」中谷文美(岡山大学)

2019年5月26日(日) 10:00~16:30 (国立民族学博物館 第6セミナー室)

落合雪野(龍谷大学)「手織り布をめぐるアグリツーリズムの展開——ラオス北部のタイ系コミュニティから」日下部啓子(首都大学東京)「語られる織布——トラジャの慣習復興におけるアイデンティティの在り処としての機織りをめぐって」

総合討論

2019年7月7日(日) 10:00~17:00 (石川県政記念しいのき迎賓館 [石川県金沢市])

松村恵里(金沢大学)「加賀友禅の成立背景と現在——加賀の友禅のつくり手とはだれか」

モノ語り Part IV「絨毯と出会う、織り手と出会う」田村うらら(金沢大学)

総合討論

2019年12月8日(日) 10:00~18:00 (国立民族学博物館 第4セミナー室)

丹羽朋子 (国際ファッション専門職大学) 「EC フィルムとは何か? <紡ぐ・織る・編む・織る> 映像の活用をめぐる」

EC フィルム上映+ディスカッション

総合討論

2020年2月16日(日) 10:00~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

松井 健 (東京大学) 「現在のキモノの生産・流通・消費について——『キモノストック』という視点」

中谷文美 (岡山大学) 「布とバスターリー——線具としての『ヒモ』への注目から見えること」

モノ語り Part V 「中国雲南省モン衣装の変化」 宮脇千絵 (南山大学)

総合討論と次年度の計画策定

成果

今年度は4回の研究会を開催した。第1回は、まだ1巡目が終わっていないメンバーがそれぞれの調査地域に関する研究報告を行ったほか、特別講師として織物の実作者でもある日下部啓子氏を招いた。第2回は、金沢での館外開催とし、加賀友禅作家でもある松村恵里氏を特別講師としたほか、加賀友禅及び能登上布の製作現場を訪問した。第3回は、国立民族学博物館が所蔵するエンサイクロペディア・シネマトグラフィカ (EC) 映像のうち、「紡ぐ・織る・編む・織る」行為を取り上げたものを素材別・技法別に上映し、特別講師の丹羽朋子氏とともにディスカッションを行った。第4回からは、メンバー報告の2巡目を開始した。各回を通じて「モノ語り」Part III~Vも実施し、実際に布製品を持ち寄って全員で熟覧しつつ、収集の背景や時代の変遷による生産形態、素材、技法、用途などの変化についてのプレゼンテーションとディスカッションを行った。個別の調査地における現況の詳細な理解に加え、メンバーによる布生産地でのインタビューやフィルム視聴といった経験を共有することで、知見を深めた。

また、今年度はメンバーの大半が参加する英文論文集 (Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion) を刊行することができた。

「心配と係り合いについての人類学的探求」

ケアの実践と社会の制度や規範との関係を扱った従来の研究においては、それらの実践が当該社会に所与の価値規範をどのように実現しているか、あるいはその実現に失敗しているかが問題となることが多い。それに対して本研究では、人々が日常的に経験する心配や係り合いが、いかなる価値や秩序の産出に寄与しているのかを問うものである。本研究ではそのような価値を産出する関係性、およびそこに動員される知識や資源の総体に関する探求をケアの生態学と呼ぶ。本研究の枠組みは、いわゆる高福祉国家とそうでない国家とを隔てる制度的差異や、地域によって異なるケアの規範と実践の差異による制約を受けることなく、世界におけるケア実践の多様性を分析・考察の対象とすることを可能にするものである。本研究に参加する研究者は、医療人類学、政治人類学、地域研究および隣接する研究領域で蓄積されてきた方法や知見を持ち寄ることで、ケア実践を包括的に分析する枠組みづくりに貢献すると同時に、その成果を自らの民族誌的記述に反映することができる。

研究代表者 西 真如

班員 (館内) 森 明子

(館外) 有井晴香、池見真由、大北全俊、加藤敦典、佐藤奈穂、内藤直樹、中村沙絵、馬場 淳、浜田明範、モハーチ ゲルゲイ、森口 岳

研究会

2019年6月8日(土) 14:30~16:00 (国立民族学博物館 大演習室)

桑島 薫 (名城大学) 「『ヴィータ——遺棄された者たちの生』合評会」

2019年6月9日(日) 10:30~13:00 (国立民族学博物館 大演習室)

内藤直樹 (徳島大学) 「『管理の場』における心配と係り合い——メガキャンプにおける難民とホストによる市場の形成」

森口 岳 (東京農業大学) 「家族の政治学——ウガンダのスラムの一家族を事例に、ケアと葛藤をめぐる」

総合討論

2019年10月19日(土) 13:30~17:30 (国立民族学博物館 大演習室)

馬場 淳 (和光大学) 「『逃走』する男をめぐるケアの生態学」

森 明子 (国立民族学博物館) 「社会的なものをめぐるプロジェクト——1980年代西ベルリンにおける試みとその後の展開」

討論

2019年10月20日(日) 9:30~13:00 (国立民族学博物館 大演習室)

佐藤奈穂 (金城学院大学) 「脱経済成長時代における“幸福”の実証研究に向けて——所得・資産・ケアの視点」

モハーチ ゲルゲイ (大阪大学) 「毒性の治療薬——どん底における薬草栽培をめぐる」

討論

2020年2月8日(土) 13:30~17:30 (国立民族学博物館 大演習室)

野村亜由美 (首都大学東京) 「『こころが強い』ひと——津波被災後のスリランカで生きる老人たち」

大北全俊 (東北大学) 「日本のHPV ワクチン副反応報告をめぐる論点」

討論

2020年2月9日(日) 9:30~13:00 (国立民族学博物館 大演習室)

加藤敦典 (京都産業大学) 「ベトナム語におけるかわいい／かわいそうをめぐる情動と規範の文化論」

西 真如 (京都大学) 「ケアの生態学について」

討論

成果

2019年6月の研究会では、ケニアとタンザニアの難民キャンプにおける市場形成(内藤)およびウガンダのスラムで生活する家族の葛藤(森口)に関する報告を踏まえ、統治とケア実践との関わりについて検討した。10月の研究会では、日本の都市で断片的な関係性を生きる男性(馬場)、ドイツの都市で生活するトランスナショナル家族とケア関係の創出(森)、カンボジア農村における多様なケア実践を可視化する実証的研究のメソッド(佐藤)、ベトナムにおける環境と健康の相互作用の場としての薬草園(モハーチ)に関する報告を踏まえ、従来の規範や制度に回収されない社会的・生態学的ケアの実践について議論した。2020年2月の研究会では、スリランカで認知症や精神疾患を抱えて生活する高齢者(野村)、日本の予防接種行政における「公的責任の縮小」とHPVワクチンの副反応問題(大北)、ベトナムの農村における道徳、情動、および生きづらさ(加藤)に関する報告を踏まえ、ケア実践に関わる統治性と道徳性についての議論をおこなった。

「統治のフロンティア空間をめぐる人類学——国家・資本・住民の関係を考察する」

本研究では、統治のフロンティア空間、つまり国家の中心部から隔たれ、統治の遂行が希薄である空間の動態に着目する。J・スコットやI・コピトフ、P・クラストルは、国家と国家に捕捉されざる住民との関係を各地域レベルで論じた。だが、近代国家による統治は普遍的な特徴を持つため、国家の進出と人びとの生活の変容との関係には、特定地域を超えた共通性が存在すると考えられる。本研究ではアフリカ・東南アジア・中南米地域の研究者が集まり、各地域の事例を報告・比較することで、この共通性の抽出を試みる。また上記の研究では、国家と住民との関係を焦点化しているものの、資本の流入に対する関心が低い。そこで本研究では、入植民や商人、企業の進出が、国家と住民の関係にいかなる影響を与えているのかにも目を向ける。それらの作業をとおして、国家による統治と資本主義への接合から完全には逃れられない現代世界で、フロンティア空間の住民がいかに生活の再編を試みているのかを示すことが、本研究の目的である。

研究代表者 佐川 徹

班員(館内) 池谷和信、南 真木人

(館外) 王 柳蘭、大澤隆将、岡野英之、桐越仁美、日下部尚徳、久保忠行、後藤健志、近藤 宏、鈴木佑記、武内進一、二文字屋脩

研究会

2019年10月27日(日) 12:30~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

佐川 徹 (慶應義塾大学) 趣旨説明

二文字屋脩 (早稲田大学) 「タイ北部地域にみるフロンティア空間の動態——(ポスト)遊動狩猟採集民ムラブリを事例に」

大澤隆将 (総合地球環境学研究所) 「空間認識の錯綜——開発、オラン・アスリ、泥炭」

佐川 徹 (慶應義塾大学) 「漁労を始めた牧畜民——東アフリカ牧畜社会における国家-資本-住民関係」

総合討論

2019年12月8日(日) 12:30~18:00 (国立民族学博物館 第2演習室)

佐川 徹 (慶應義塾大学) 趣旨説明

近藤 宏 (早稲田大学) 「難民となった都市先住民の『フロンティア』と『多文化共生』——南米・コロンビア太平洋岸の事例」

久保忠行 (大妻女子大学) 「観光資源としてのフロンティア——ミャンマーのコミュニティ・ベースド・ツーリズム」

鈴木佑記 (国士舘大学) 「二つのフロンティア——タイ領アンダマン海域における国家・資本・海民モーケンの関係性を探る」

総合討論

成果

今年度第1回目の研究会では、国家や企業からフロンティアとして同定される国家の周縁地域(タイ、インドネシア、エチオピア)の住民の対応に焦点をあてた。その結果、移動性の確保やアナーキーな生活実践など、フロンティア空間に生きる人びとによる国家や資本の進出への対応の特徴が明らかとなった。第2回目の研究会では、紛争や政治的抑圧、災害により故地を追われたり、故地へ帰還した人たちがつくるフロンティア空間(コロンビア、ミャンマー、タイ)に焦点をあて、国家、資本、住民の三者関係の多様なあり方が示された。次年度は、経済的利益の獲得を求めて外部からフロンティア空間に参入してくる企業や商人、入植者の観点から、またフロンティア空間への統治の貫徹を目指す国家の観点から調査研究を進めているメンバーが発表をおこない、フロンティア空間の全体的把握を目指すことになる。

「グローバル時代における『寛容性/非寛容性』をめぐるナラティブ・ポリティクス」

急激にグローバル化が進展し、人間の移動が激しさを増すとともに、多文化的状況が今後さらに進展することが予想される。西欧の列強と呼ばれた国々では、かつての植民地から大量の移民が流れ込み、逆植民地化とも呼ぶべき、ある意味では予想外の、だが、ある意味では、必然の結果とも言うべき、皮肉な現象が起きている。こうした地球規模の社会環境の変容に加えて、従来の口承性や書承性を超越するメディア環境の変容の影響下で、文化的他者認識としての「異人」を迎える側の経験は、その質と量において、かつての「異人論」が想定していた状況とは比べものにならない規模となっている。さらに、この大量移動の時代は、程度の差こそあれ、誰もが自らも異人となる経験を持つことが当たりとなっている。問題は、こうした状況において、大小さまざまなコンフリクトが発生し、「不寛容」社会が出現しつつある点である。

本研究では、こうした状況を解明し、これに回答するために手がかりとするのが、「異人論」である。文化人類学及び民俗学の学問的伝統においては、外部から訪れる他者、すなわち「異人」に対する歓待や排除、蔑視あるいは畏怖や憧れなどの観念や行動をめぐって、「異人論」と称される研究の蓄積がある。本研究では、「異人論」という視点や方法を再考し、鍛えなおすことで、人文科学の立場から現代的問題の解決の糸口を探ることを目的とする。

研究代表者 山 泰幸

班員(館内) 河合洋尚、韓 敏、西尾哲夫

(館外) 岩本通弥、鶴野祐介、及川祥平、小川伸彦、カルディ ルチャーナ、川島秀一、川松あかり、君野隆久、國弘暁子、小長谷有紀、小松和彦、竹原 新、村井まや子、横道 誠

研究会

2019年6月8日(土) 13:00~17:00 (国立民族学博物館 第2演習室)

郭 莉萍 (北京大学) 「中国におけるナラティブ・メディスン研究」

関谷雄一 (東京大学) 「震災復興の公共人類学——災害と向き合う協働研究」

2019年6月9日(日) 9:00~13:00 (国立民族学博物館 第2演習室)

川島秀一 (東北大学) 「『寄りもの』と災害伝承」

王 鑫 (北京大学) 「中国の天狗伝承」

2019年11月2日(土) 14:00~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

- 國弘暁子（早稲田大学）「現代インドにおける異人のゆくえ——グジャラートのヒジュラとサバルタン問題に関する考察の事例から」
- 岩本通弥（東京大学）「『迷惑』と非寛容——家族に異人が入ること」
- 2019年11月3日（日）10：00～13：00（国立民族学博物館 第1演習室）
- 周 星（愛知大学）「異人としての留学生グループ——寛容性／非寛容性の観点から」
- 今後のスケジュールと進め方
- 2019年12月7日（土）13：00～17：00（国立民族学博物館 第1演習室）
- 館内展示の見学
- 島村恭則（関西学院大学）「民俗学・ヴァナキュラー・ナラティヴの権利——民俗学的視角とはいかなるものか」
- Kim Jinah (Université Sorbonne Nouvelle-Paris 3)
- 2019年12月8日（日）10：00～13：00（国立民族学博物館 第1演習室）
- 及川祥平（成城大学）「末裔の組織における差異化と排除」
- 鵜野祐介（立命館大学）「在日コリアンの説話伝承とパンソリ」
- 2020年1月25日（土）13：00～17：00（国立民族学博物館 第3演習室）
- 足立重和（追手門学院大学）「語りはなぜ社会学の問題になるのか」
- 川松あかり（東京大学）「『異人による町』としての炭鉱町とその『記憶』——旧産炭地筑豊における調査事例から」
- 2020年1月26日（日）10：00～13：00（国立民族学博物館 第3演習室）
- 竹原 新（大阪大学）「現代イランの祭り」
- 君野隆久（京都造形芸術大学）「『捨身の仏教——日本における菩薩本生譚』をめぐる」

成果

2019年度は、異人論を構成する基本概念である「異人」、「異類」、「他者」などをめぐり、これらに関連する説話・民話を取り上げて、それらの物語が語られている社会状況を視野に入れて、各地の文化人類学的・民俗学的研究調査の成果と関連づけながら検討した。「異人」をめぐる排除、あるいは歓待や包摂をめぐる物語の構造・論理を析出し、さらにそれを支える社会的状況に着目しながら検討を加えていくことは、説話・民話などの物語のテキスト内部の分析に終始することなく、つねに社会との関わりのなかで、物語を捉えていくという本研究の基本的な立場であり、研究メンバーに共通の認識として周知を試みた。持ち回りで、各メンバーの調査研究対象である事例の発表を実施した。海外から「ナラティブ・メディスン」の研究者を迎えて際研究会を実施したのが特筆すべき成果である。「語り」に関する社会学理論、「ナラティヴの権利」に関する民俗学の最新の研究などについてもゲストを迎えて研究会を実施し、従来の説話・民話にとどまらず、新たなメディア環境・物語表現のなかでの異人をめぐる表象や、大量の難民や移民と受け入れ先の社会との間で発生している現代的な「異人問題」との関係性も視野に入れて検討をした。

「カネとチカラの民族誌：公共性の生態学にむけて」

本共同研究の目的は、「利己性」と「経済」という視点から、公共性概念に関する人類学的な考察を深めることにある。そのために、近年の情報通信技術の発展のもとで営利を追求する諸主体（企業・NGO・個人・コミュニティ等）による実践に焦点をあてる。そして利己的な主体による、生存上の必要（食・住居・教育・医療・福祉等）の充足に関わるやりとりが、公的な領域やネットワークを創発する事例に関する民族誌を比較検討する。これらの検討を通じて、グローバルな政治経済的状况における公共性をめぐる諸問題に対する人類学的な応答の方途を構想する。それは、社会が成立する保証が無い状況から、社会がいかに立ち上がるか考察することでもある。そのために本共同研究では、市民社会やその規範的価値の存在を前提視しえない状況における、①それぞれの生存を追求しようとする多様な主体による利己的な行為に焦点をあて、②物質やエネルギーの移動をとまう相互行為としての経済に注目し、③それが特定の価値や倫理を帯びた場所やネットワークを産出する事態を社会的なものの創発として捉え、その機序を検討することを通じて「公共性の生態学」を構想する。

研究代表者 内藤直樹

班員（館内） 工藤由美、森 明子

（館外） 飯嶋秀治、岩佐光広、岡部真由美、北川由紀彦、木村周平、久保忠行、沢山美果子、高橋絵里香、内藤直樹、中野智世、藤原辰史、丸山淳子、三上 修、モハーチ ゲルゲイ、山北輝裕

研究会

2019年7月20日(土) 13:30~19:00 (国立民族学博物館 大演習室)

北村光二 (岡山大学) 「相互行為システムのコミュニケーションの再生産を支える『社会』の自己生成——トゥルカナのコミュニケーションを事例として」

菅原和孝 (京都大学) 「カラハリ狩猟採集民グイ／ガナの安寧 (well-being) と受苦 (suffering)」

丸山淳子 (津田塾大学) 「サン社会における『分かち合うこと』と『疲れること』——台頭する『シェアリング経済』を参照に」

討論

2019年7月21日(日) 9:00~13:00 (国立民族学博物館 大演習室)

岩佐光広・赤池慎吾 (高知大学) 「魚梁瀬森林鉄道と生をめぐる営み——女性のライフヒストリーを手がかりに」

総合討論

2019年11月9日(土) 13:30~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

藤原辰史 (京都大学) 「『分解の哲学』について」中野智世 (成城大学) 「近代ドイツにおけるケアの空間——カトリック系慈善施設の事例から」

全員討論

2019年11月10日(日) 9:30~15:00 (国立民族学博物館 大演習室)

工藤由美 (国立民族学博物館) 「マプーチェ医療をめぐる国家・先住民関係」

高橋絵里香 (千葉大学) 「民営化／私事化する福祉国家——フィンランドの高齢者ケア制度にみる私的領域間の対立と共謀」

総合討論

2020年1月25日(土) 13:30~19:00 (国立民族学博物館 大演習室)

森 明子 (国立民族学博物館) 「EU 農業政策とホーフ——オーストリアの事例」

沢山美果子 (岡山大学) 「カネと公共圏から見た日本近世の捨て子たち」

久保忠行 (大妻女子大学) 「境界的 (liminal) なものがつくる公共空間の可能性——観光客と難民」

討論 (全員)

2020年1月26日(日) 10:00~14:30 (国立民族学博物館 大演習室)

北川由紀彦 (放送大学) 「『新宿段ボール村』再考」

山北輝宏 (日本大学) 「新しい物質主義的社会学とハウジング・ファースト」

総合討論 (全員)

成果

- ① 社会の創発と衰退／崩壊／転換に関する動態の記述：たとえば過疎化という人口減少は、しばしば「社会そのものの崩壊」であるかのように語られる。また、難民キャンプのような庇護の空間は一時的なものとして設置され、問題が解決された際には閉鎖される。本共同研究会では、社会の創発だけでなく、その衰退／崩壊／転換に関する諸アクターによる連関の動態に注目することの意義について検討した。
- ② 危険な存在としての他者との連関の創発：他者との共存とをめぐり困難に注目する視点の重要性について確認した。ここで言う「他者」とは、理解や制御の外部に存在する対象のことを意味する。それは慣習や制度による「理解」の直下に存在し続ける、理解や制御の外部としての他者との連関を我々はどのようにおこなっているのかという問いである。
- ③ アクター間の「もつれ」の創発／消滅に関する民族誌的記述：この世界はヒト以外の生物や物質を含めた諸アクターによる連関によって形づくられている。今年度はアクター間に「もつれ (tangle)」が形成される動態に注目することの重要性を確認した。本共同研究では、そうした「もつれ」をサルベージして道徳的な価値付けをおこなうというよりは、その創発や消滅に関する民族誌的な記述を志向する。

「拡張された場における映像実験プロジェクト」

現場での観察や実測に基づくフィールドワークなど人類学的手法が、美術、特に映像表現を含むものにおいて随分多く見られるようになり、また人文科学においても写真、映像、音楽など芸術の手法を活用した研究の必要性を論じるアートベースド・リサーチという考え方が広まりつつある。このように、従来の学問領域を超えたアプローチが日々更新されているという傾向を踏まえ、本研究では、映像人類学者・文化人類学者とキュレーター、アートコーディネーター、美術家といった芸術に関する専門職に携わる者からなるチームを結成し、多様な領域の理論と

現実社会とを芸術を媒介に結びつけることを目指す。異なる領域での活動を行う者が互いにその活動にふれ、交流や協働作業を通してそれぞれの知と技術との交換を可能とする領域横断的な研究活動の基盤作りを推進するとともに、従来の学問それぞれのアーキテクチャー（枠組み、構造）自体を拡張、発展へとつなげていくことを目的とする。

研究代表者 藤田瑞穂

班員（館内） 下道基行、川瀬 慈

（館外） 奥脇嵩大、岸本光大、佐藤知久、西尾咲子、西尾美也、福田浩久、村津 蘭、矢野原佑史

研究会

2019年6月9日（日）10：00～15：30（国立民族学博物館 第7セミナー室）

田中みゆき「全盲者による映像の可能性／不可能性について」

奥脇嵩大（青森県立美術館）「百姓の眼」

藤田瑞穂（京都市立芸術大学）「変わりゆく街における芸術とアクティビズム」

全体討論

2019年9月15日（日）13：00～17：30（国立民族学博物館 第7セミナー室）

山内政夫（柳原銀行記念資料館）「自主映画『東九条』とその時代」

満若勇咲（映像作家）「制作現場から見たドキュメンタリーについて」

全体討論

2019年11月17日（日）10：00～15：00（国立民族学博物館 大演習室）

小川翔太（名古屋大学大学院）「期待の地平としての映像アーカイブ——帝国観光の映像が露呈する問題」

佐藤知久（京都市立芸術大学）「映像／拡張された場／震災の前と後／現在」

全体討論

2020年2月9日（日）13：00～17：00（国立民族学博物館 映像実験室）

川瀬 慈（国立民族学博物館）、村津 蘭（京都大学）、矢野原佑史（京都大学）「あふりこ——フィクションの重奏／遍在するアフリカ」

金子 遊（多摩美術大学）「ゾミアの遊動民——映画『森のムラブリ』の企画・撮影・上映について」

全体討論

成果

2019年度の研究会では共同研究員ならびに5名の特別講師による研究発表を9本実施した。この全4回の研究会と毎回の全体討論によって、昨年度と比較してより広い専門分野での実践・研究について検証することができた。また本年度には、メンバーの研究成果として2冊の書籍が刊行された。1冊目は、芸術・映像人類学の革新的試みとして、新たなストーリーテリングと問題提起のあり方を目指した「あふりこ——フィクションの重奏／遍在するアフリカ」（新曜社）である。刊行後、本研究会においてその取り組みについての発表ならびに、この書籍が人類学においてどのように評価され得るかなどの意見交換も行った。2冊目は、芸術・映像人類学のコラボレーションとしての研究実践を、映像で捉えた脈動、感覚、時間を書籍の形で収録し、いかに拡張することができるかに挑戦した「im/pulse」（京都市立芸術大学）で、この冊子にはメンバーのうち7名が関わった。これらの本年度の取り組みを経て、最終年度に向けてどのように研究成果発表の形が可能かを検討中である。

「沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討」

本研究では、国立民族学博物館所蔵の「泉靖一アーカイブ」を対象として、泉によって提示されたアイヌ社会像の再検討を試みる。具体的には、泉靖一が「イオル論」をはじめとするアイヌ社会モデルの構築に至った沙流川流域での調査資料を中心とする基礎データを、今日的な研究成果や社会意義などから改めて読み解くことにより、その新たな学術的・社会的活用の可能性を追究する。

このような目的の下、本研究では、まず①アイヌ研究に関連する文化／社会人類学・歴史学・考古学などの現在までの成果と、②アイヌ文化振興にかかわる諸政策・事業活動の成果を踏まえ、多角的に泉靖一の調査資料・データの再検討を行うことにより、単なる政治・政策的な批判や歴史的事実関係の正否の検証にとどまらない新たな評価や解釈の可能性を追究する。その上で、現在平取町を含む北海道各地で推進されている、「伝統的生活空間（イオル）」の再生事業をはじめとするアイヌ文化の継承や振興に対して、泉靖一の調査資料が果たしうる貢献や役割を検討する。

研究代表者 大西秀之

班員（館内）大塚和義、河合洋尚、齋藤玲子

（館外）石村 智、大塚和義、大西秀之、貝澤太一、萱野公裕、木村弘美、佐々木史郎、長野 環、森岡健治、吉原秀喜

研究会

2019年11月24日（日）13：30～17：30（国立民族学博物館 第3演習室）

大西秀之（同志社女子大学）「共同研究趣旨説明——沙流川流域における泉靖一資料の再検討」
共同研究員自己紹介・研究計画2

2019年11月25日（月）9：30～15：00（国立民族学博物館 図書室・第3演習室）

沙流川流域調査を中心とする「泉靖一アーカイブ」資料の実見
次回研究計画に向けての総合討論

2020年2月10日（月）14：00～17：30（国立民族学博物館 大演習室）

前回確認と趣旨説明
吉原秀喜（平取町役場アイヌ施策推進課）「沙流川流域IWOR構想の経緯・成果展望」
木村弘美（平取町役場アイヌ施策推進課）「イオル事業と『ライブラリー』の可能性」

2020年2月11日（火）10：00～15：00（国立民族学博物館 大演習室）

萱野公裕（萱野茂二風谷アイヌ資料館）「民博と泉靖一資料調査への期待」
長野 環（平取町役場アイヌ施策推進課）「アイヌ文化環境保全対策とIWOR」
総合討論と次回計画

成果

初年度となる2019年度は、まず第1回目に本共同研究の目的を共有するとともに、各メンバーの役割や貢献などを確認した上で、第2回目に沙流川流域調査を中心とするアーカイブ資料の閲覧を行いその検討と活用について意見交換を行った。その結果、本研究会の方向性及び各メンバーの関心は、①泉靖一の調査研究のあり方の検討、②既存のアイヌ調査研究との比較検討・活用、③泉靖一のデータの特にアイヌ民族への還元、という三つにまとめられることを確認した。

次いで開催した第3回目には、二風谷地区を中心とする平取町でアイヌ文化振興事業に取り組んでいる4名のメンバーが、それぞれの活動に関する報告を行い泉靖一アーカイブの活用の可能性を提示した。また第4回目には、過去3回の議論を踏まえ改めて沙流川流域調査の資料検討を行い、同資料を内容・トピックごとに分類し異なる資料を関連づける作業に着手することを決定した。この作業により、泉靖一アーカイブの資料を新たに整理し、具体的に活用する方法を追究することを確認した。

「グローバル化時代における『観光化／脱-観光化』のダイナミズムに関する研究」

本研究は、多様化し拡大する観光現象を文化人類学的に捉え、新たな理論的転回を図ることを目的とする。

1980年代以降、文化人類学は観光という現象に着目するようになった。しかし、観光社会学ではJ.アーリやS.ラッシュラのグローバル論と関連付けながら新たな理論的展開を遂げたのに対し、人類学内部ではその現状をうまく捉えきれず、2000年代以降、観光研究は停滞しつつある。

そして現在、観光の形態はさらに多様化している。それは戦争など負の歴史を次世代へと伝え（ダークツーリズム）、移住を検討させ（移住観光）、自然と人間の共存を教育し（エコツーリズム）、アニメ作品などのファンと交流を図り（コンテンツツーリズム）、衰退した地域社会を再興させるものである（地域文化観光）。つまりこれまでまったく別々の文化現象だったものが、「観光」という文脈に包含されつつあるといえる。

他方、これまで観光の文脈で語られてきたものが、環境破壊や地域住民と観光客とのコンフリクトの増加などにより、制限され、文脈をずらされるという現象も起きている。

本研究ではこれらの過程を「観光化」「脱-観光化」と概念化し、考察を深める。具体的には、①国内外の諸事例がいかにして「観光」の文脈に包含され／「観光」の文脈からずらされていったのか、その詳細を実証的に検討し、②グローバル化の議論を批判的に参照しつつ、人類学全体を見据えた新たな視座の構築を目指す。

研究代表者 東 賢太郎

班員（館内）奈良雅史

(館外) 岡本 健、越智郁乃、紺屋あかり、鈴木佑記、中村香子、福井栄二郎、藤野陽平

研究会

2019年12月14日(土) 13:30~18:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

東 賢太郎 (名古屋大学)「共同研究の概要と枠組みに関するプレゼン」

全員「各メンバーの研究紹介と共同研究会での役割」

2019年12月15日(日) 10:00~12:00 (国立民族学博物館 第1演習室)

全員「今後のスケジュールと進め方、特別講師招聘について」

2020年2月1日(土) 13:30~18:00 (国立民族学博物館 第3演習室)

遠藤英樹 (立命館大学)「モバイル=デジタル時代の観光——観光を「脱構築」する研究へ」

須藤 廣 (跡見学園女子大学)「観光学の近代・ポスト近代」

2020年2月2日(日) 10:30~12:00 (国立民族学博物館 第3演習室)

全員「招聘講師発表の振り返りと次年度に向けての計画打ち合わせ」

成果

初年度は、2回の共同研究会を開催した。第1回研究会では、メンバー全員が各自のこれまでの研究の紹介と本共同研究内での役割について報告を行った。また、本共同研究の鍵概念である「観光化」と「脱-観光化」について、メンバー間での理解を深め共有するために各自の事例をもとに議論を行った。課題として、観光社会学の知見をどのように取り入れ、またどのように差異化すべきかという点が明らかになった。

その課題をふまえ、第2回研究会では観光社会学の研究者2名を特別講師として招いた。モビリティ社会とポスト近代における観光に関する発表をもとに、近年の観光社会学の研究動向について議論を行った。また「観光化」と「脱-観光化」概念についても、それらの動向に位置付け直し再検討した。その結果、両概念は相反するものではなく、双方が現代社会における観光の変容を反映した動きであることが明らかになった。

「食生活から考える持続可能な社会——『主食』の形成と展開——

本研究の目的は、人類の食生活を生態、文化、社会、歴史の観点から検証し、持続可能な社会を実現するための食生活のありかたを探究することである。そのための作業概念として「主食」を採用する。「主食」に相当する語彙や概念は普遍的ではなく、時代や地域によって多様であるが、「人を肉体的・精神的に養ううえで、中心的役割を果たす食べ物」という一定の定義を与えることで、具体的な食生活中の「主食」の諸相から、対象とする社会や集団における食のあり方とその背景をより端的に浮かび上がらせることが可能となる。

食生活とは、食品の生産、加工、流通、消費、調理、廃棄の過程であり、自然環境、価値観、教条、法律や制度、経済条件、身体的な欲求や生理的条件、個人的な嗜好などが、人間の営みを通して密接に関連しあっている。それらの関連性を「主食」という作業概念にそって整理し、考察することにより、地球規模で人間が引き起こしている食の問題を明らかにする。そのうえで、人類学を中心に、歴史学、調理学、体育学などの食生活を理解するうえで核となる諸分野による学際的な議論を通して、人類の食生活のあるべき姿を検証したい。

研究代表者 野林厚志

班員(館内) 池谷和信、宇田川妙子、大石侑香、菅瀬晶子

(館外) 梅崎昌裕、木内敦詞、佐藤廉也、中澤弥子、那須浩郎、濱田信吾

研究会

2019年10月14日(月) 10:00~16:00 (国立民族学博物館 第4演習室)

野林厚志 (国立民族学博物館)「主食研究の趣旨と全体の構想」

参加者の研究の構想

2020年1月13日(月・祝) 10:00~18:00 (国立民族学博物館 第3演習室)

次年度発表に関する懇談(次年度発表予定者)

先住民族の生活文化に関する展示見学(全員)

野林厚志 (国立民族学博物館)「第2回研究会の趣旨説明」

那須浩郎 (岡山理科大学)「農耕のはじまりと主食の形成」

佐藤廉也 (大阪大学)「根栽農耕とイモ食」

総合討論

成果

本年度は当初の研究計画にしたがい、代表者からの研究全体の見通しと構想、共同研究員による研究の展望と貢献の計画について議論を行ったうえで（第1回目）、人間が主食としてきた主要な作物である穀類、豆類、根菜類について、人類史的なスケールもあわせた利用の歴史や社会的な位置づけに関する発表をえた。発表を受けての総合議論では、主食という存在が農耕と不可分の関係にあるのか、穀物と根菜の属性の違い（植物としての性質——保存性、生産量、キャリング・キャパシティ、季節性、自然環境との調和性、文化的観点からの性質——小象徴生、料理への適用、副菜との組み合わせ、歴史的観点からの性質——ドメスティケーションの過程、税）といった諸点について検討を行なった（第2回目）。主食という概念が通文化的に適用できるかどうか、また、その概念がさす具体象の多様性や時代変化等、次年度以降の研究発表や議論に組み込んでいく内容について深化させた。

「社会・文化人類学における中国研究の理論的定位——12のテーマをめぐる再検討と再評価」

中国社会を対象とする人類学的研究は20世紀前半より本格的にはじまり、日本、欧米、中国国内の研究者によりさまざまな研究が展開されてきた。早期には「未開」社会とは異なる複合社会の研究を推進する舞台として期待され、1960年代になるとアフリカ研究との比較の対象として民族誌が著された。ところが、その後の中国研究は「独自」の路線で議論を進めるようになったため、同じ東アジア研究ですら対話が難しくなり、人類学において半ば「孤立」した立ち位置に置かれるようになっていく。だが、中国をめぐる人類学的研究を振り返ると、国家-社会関係論、ポリティカル・エコノミー論、個-全体論、存在論など、現代人類学の先駆けともいえる議論が早期から展開されてきたことに気づかされる。本研究は、中国研究で多くの蓄積がなされてきた12のテーマ（親族、ジェンダー、コミュニティ、エスニシティ、宗教、風水、生態、食、芸術、観光、メディア、都市）をとりあげ、その理論史を整理することで、人類学一般の理論と対話をなすことを目的とする。

研究代表者 河合洋尚

班員（館内）横田浩一、韓 敏、奈良雅史

（館外）阿部朋恒、稲澤 努、川口幸大、川瀬由高、小林宏至、櫻田涼子、田中孝枝、中生勝美、丹羽朋子、藤野陽平、堀江未央

研究会

2019年11月30日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館 第1演習室）

河合洋尚（国立民族学博物館）「趣旨説明」

参加者全員「共同研究員自己紹介・研究計画」

2019年12月1日（日）10：00～15：00（国立民族学博物館 第1演習室）

中生勝美（桜美林大学）「中国の人類学展望——学史と現状から」

河合洋尚（国立民族学博物館）「中国都市の人類学——都市性と都市景観をめぐる研究動向」

成果

※原稿に記述がありません

「人類史における移動概念の再構築——『自由』と『不自由』の相克に注目して」

本研究は、人類史における移動概念を、特に「自由」と「不自由」の相克に注目して再検討し、移動研究の新たな地平を築こうとするものである。人が移動する要因には、迫害や紛争、あるいは天災など生存に関わる現象からの「避難」、特定の集団や個人に対する「強制」、自由意志が先立つ「移住」などさまざまな位相がある。このなかで「強制」については、とりわけ移動者の不自由性や被害的側面、悲劇性ばかりが強調され、移動者は主体性のない存在として理解されてきた。これに対して、本研究では、「強制」に含まれる移動現象（たとえば、奴隷貿易、強制移住、契約労働、政治難民）を軸に、時間軸と空間軸との結節点が異なる事例を研究対象として取り上げ、それぞれの事例において、不自由と自由がどのように相克しているのかを検討し、事例間の比較を試みながら、人類史における移動概念について再検討する。具体的には、移動を生じさせた政治的、宗教的、経済的、あるいは文化的、自然環境的な要因を踏まえながら、他方で、移動する人や集団の立場から移動現象を捉えなおす。このようにマクロな視点とミクロな視点とを交錯させ、「自由」と「不自由」の相克に着目しながら、コンテクストの異なる多様な

移動を比較・連関させることで、人類史における移動研究の新たな展開に資する概念の再構築を目指す。

研究代表者 鈴木英明

班員 (館内) 杉本 敦、池谷和信、新免光比呂、寺村裕史、三島禎子

(館外) 小林和夫、左地亮子、薩摩真介、園田節子、田中铁也、馬場多聞、向 正樹

研究会

2019年12月7日(土) 14:00~18:00 (国立民族学博物館 第4演習室)

鈴木英明 (国立民族学博物館) 開会のあいさつ

自己紹介 (参加者全員)

鈴木英明 (国立民族学博物館) 「移動概念の現状と可能性」

総合討論

成果

本年度は、2019年12月7日に第一回研究会を行った。その場では、まず、研究代表者から趣旨説明を行い、続いて、ブレインストーミングとして参加者全員による自己紹介を行い、各自の問題関心を確認しあった。その後、再び研究代表者による「移動概念の現状と可能性」と題する報告が行われ、その後、質疑応答を経て、本研究会の問題関心を共有した。

「島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」

アフリカ大陸で誕生した私たち現生人類=ホモ・サピエンスは、約5万年前頃までにはアジアやオセアニアの島嶼域への移住を開始した。一方、人類による葬送行為も私たちホモ・サピエンス以降に活発化し、発展してきたと考えられている。その萌芽的な痕跡はアフリカ大陸や西アジアで確認されているが、アジア・オセアニアへの島世界へと移住した人類集団も、その初期から墓葬や埋葬行為を行っていた痕跡が、各地で発見されつつある。本研究の目的の一つは、人類史的には大陸部で誕生したと考えらえる葬送行為や墓葬文化が、島世界という独特な環境への移住後、どのように変容し現在に至るのかという時間軸による検討を行うことにある。ついで二つ目の目的は、アジア~オセアニアの島嶼域を大きく東南アジア・台湾・日本の南西諸島・オセアニアという4つの地域に分けたうえで、その地域性を人類の島嶼適応や移住といったテーマを軸とする人類史的な視点から検討することにある。また時間軸による検討では、アジア・オセアニアにおける現生人類の歴史と重なる5万年程度の幅の長期的な考古学的時間軸と同時代を含む約100年程度の幅の民族誌的時間軸を比較の準拠軸とする。本研究では、考古学と文化人類学を軸に分野横断的な比較検討を行うことで、島世界の葬送や墓葬にみられる普遍性、歴史性、地域性を明らかにしたい。

研究代表者 小野林太郎

班員 (館内) 印東道子、池谷和信、丹羽典生、野林厚志

(館外) 秋道智彌、片岡 修、片桐千亜紀、後藤 明、新里貴之、鈴木朋美、角南聡一郎、竹中正巳、田中和彦、前田一舟

研究会

2019年11月12日(火) 13:00~18:00 (国立民族学博物館 大演習室)

小野林太郎 (国立民族学博物館) 「共同研究の趣旨説明と目的の紹介——島世界における葬送の人類史」

片桐千亜紀 (沖縄県立埋蔵文化財センター) 「琉球列島における崖葬墓と島世界における人類史」

メンバーによる展示見学

前田一舟 (うるま市立海の文化資料館) 「近世以降における琉球列島の葬墓と葬送」

ディスカッション・今後の計画についての検討

2020年2月8日(土) 13:30~18:00 (国立民族学博物館 第4演習室)

小野林太郎 「第二回研究会の趣旨説明と目的の紹介」

鈴木朋美 「ベトナムの二次埋葬と甕棺埋葬」

片桐千亜紀 「インドネシア・トラジャ族による風葬・崖葬墓」

総合討論

成果

初年度となった本年度の共同研究では、計2回の研究会を実施し、本研究の趣旨や目的の共有をメンバー間でま
ず行った。また1回目の研究会では対象とする島嶼域のうち、とくに東アジアの島嶼域となる琉球列島における葬
送や墓の特徴を、その歴史の変遷も踏まえつつ事例発表に基づき議論した。また議論を進める中で、葬送や墓
といった語句の定義についても検討を進め、メンバー間での共通認識を形成することができた。2回目の研究会
では、東南アジアの事例を対象とし、比較の視点から大陸部となるベトナムの事例と島嶼部となるインドネシアの事
例を検討し、島嶼部における葬送や墓の特徴について議論を重ねた。その現時点での成果として、琉球列島にお
ける事例も含め、島嶼部において頻繁にみられる墓として、石灰岩洞窟や岩陰を墓域とし、二次葬や風葬といっ
た葬送により死者を葬る「崖墓」が一つの鍵になる可能性を確認することができた。

「感性と制度のつながり——芸術をめぐる『喚起』と『評価』のプロセスから考える」

本共同研究は、制作や展示といった芸術実践において、モノゴトや制度などの非人間を含めた諸存在の働きにお
ける「喚起」と「評価」のあり方に注目し、感性と制度の不可分なありさまを検討していく。

芸術の人類学では1980年代後半から、美や芸術の普遍性を前提とすることが孕む権力性に基づき、地域の実践と
グローバルな制度の関係が問題にされてきた。他方で、1990年代末以降は物質文化研究やエージェンシー論が隆盛
し、人やモノゴトの働きの連鎖や相互生成のありさまが提示されてきている。しかし、後者で注目を浴びた「喚起」
や「魅惑」と、前者で問題になっていた制度や審美的判断がどのように結びついているのかは、十分に検討されて
こなかった。

そこで本共同研究は、世界各地の絵画や生活造形、音楽、古今東西の景観、パフォーマンスなどを含む芸術実践
における「喚起」と「評価」の多様なあり方を明らかにしながら、感性と制度的領域が不可分に結びつくさまを検
討していく。

研究代表者 緒方しらべ

班員（館内） 登久希子、寺村裕史

（館外） 兼松芽永、竹久 侑、田中理恵子、橋本 梓、長谷川新、光本 順、渡辺 文

（※2019年度産休のため休会）

研究会

2019年12月15日（日）13：30～18：00（国立民族学博物館 第4演習室）

緒方しらべ（大阪大学）「研究会全体の趣旨説明」

共同研究員全員「自己紹介と本研究の展望」

緒方しらべ（大阪大学）、兼松芽永（女子美術大学）「本研究に関わる人類学の先行研究概要」

寺村裕史（国立民族学博物館）「本研究に関わる考古学の先行研究概要」

長谷川新（インディペンデントキュレーター）「本研究に関わる芸術学の先行研究概要」

共同研究員全員「先行研究を踏まえ、問題の所在や研究方針についての全体討論」

成果

初度で開催した研究会（1回）では、まず、人類学、芸術学、考古学の3分野における、本研究テーマに関わる
先行研究とキーワードの確認と議論を行った。その結果、主に3点について明確にすることができた。1）「感覚」
については、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という五感だけではなく、それらが複数あわさった多感覚的経験をも
視野に入れる。また、個々の感覚と、社会的に共有されたものの差異にも注目する。2）「制度」については、ア
ートワールドというグローバルな制度に加え、法や規範、政治や経済、教育などの諸制度や、各フィールドでの制度
化された慣習や暗黙の了解なども含め、広義に捉える。3）「美」については、「美しいか」と「喚起されるか／魅惑
されるか」を相互に置き換えて考察することで、美をめぐる制度的領域と感性的領域の結びつきを検証していく。
このように、次年度から個人発表を進めていくにあたっての重要な概念と理論について議論することができた。

「モビリティと物質性の人類学」

グローバル化の進展にともなって、人々の移動はますますその規模と多様性を増している。本研究の目的は、生
業活動から観光まで、現代世界の人々が地球上を移動してゆく様々なあり方について知見を集積するとともに、人
間の移動には不可避的に伴う物質的な側面を特に焦点化しながら比較分析することである。本研究ではまず、人々

の移動を共通項として研究を続けているメンバーの事例をもとに、a. 身体、b. インフラストラクチャー、c. マテリアリティを鍵概念としてそれぞれの移動に固有の物質的側面を検討する。そのうえで事例間の共通性と差異を、①地域（アジア、ヨーロッパ等）、②移動背景（難民、観光等）、および③移動手段（徒歩、自動車等）の三つを軸に比較分析する。本研究では人々の移動を、人とモノと環境がその都度の状況に応じて個別的な関係を取り結ぶ実践として捉え、上記の作業を通じてそこに内在する様々な物質性（materialities）の諸相を明らかにしてゆく。

研究代表者 古川不可知

班員（館内）高木 仁、那木加甫、片 雪蘭、八木百合子

（館外）左地亮子、土井清美、中野歩美、難波美芸、西尾善太、橋爪太作、村橋 勲

研究会

2019年11月2日（土）13：30～18：00（国立民族学博物館 第4演習室）

古川不可知（国立民族学博物館）「趣旨説明と研究動向紹介」

全員「研究テーマの共有」難波美芸（一橋大学）「インフラで考える巡る時間と流れる時間——ラオス北部ルアンナムタ県の流れ橋と鉄道建設」

全体討論および今後の進め方について

2020年2月1日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館 第1演習室）

村橋 勲（京都大学）「国境地帯のモビリティーズ——南スーダン-ウガンダ間の紛争と交易」

高木 仁（国立民族学博物館）「東ニカラグア・低湿地インディアンへのモビリティーに関わる物質文化」

総合討論および次年度の研究計画について

成果

初年度となる本年は、共同研究の趣旨を共有したうえで今後のおおまかな方針を策定した。またメンバーがそれぞれの調査地から移動と物質性をめぐる事例を提示して討議をおこなった。具体的には、第1回にラオスの移動インフラ（難波）を、第2回には南スーダン-ウガンダ国境をまたいでおこなわれる難民の経済活動（村橋）とニカラグアの漁労民の水上移動（高木）を取り上げ、それらの移動を可能とする物質的基盤や、移動パターンが成立・変化した歴史文化的背景、環境条件に応じた移動媒体の素材の差異とその変移などを比較検討した。またインフラの季節性/時間性など、2年目の検討課題とすべきいくつかの新たなトピックを抽出することができた。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム

国際フォーラム「地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割」

2019年10月29日～11月2日 台湾・蘭陽博物館

代表者：日高真吾

実施状況

本フォーラムは、台北芸術大学との協定事業の一環として、基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表：日高真吾）、科学研究費（基盤研究（B））「科研教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（代表：日高真吾）の研究成果として実施した。本フォーラムは台北芸術大学との共催で過去2年間開始してきた「地域文化の再発見——大学・博物館の視点から」（2017年度別府大学で開催）、「地域文化を保存する——実践者の視点から」（2018年度高雄市立博物館で開催）の流れを受けたものであり、地域文化を地域においてどのように継承していくのかを考える企画である。

今回の本フォーラムでは、地域文化の活用について、日本の民俗学や台湾における地方学がどのような役割を果たすのか、また、実際に地域文化の活用を企画する博物館や市民がどのように連携できるのかについて、地域研究を専門とする研究者をはじめ、保存科学者や保存修復家、博物館学芸員や市民から、それぞれの実践活動について講演をおこない、効果的な地域文化の活用について議論を深めた。特に日本の文化財保護法の改正のポイントに観光資源として文化を積極的に活用する動きがあることについて、この改正が活用対象となる文化を生み出した地域にどこまで留意したものなのかを注視する必要があることを確認した。また、地域文化の活用について、地域文化の理解、保存、活用というプロセスを経ることで、地域振興や地域活性の可能性が広がっていくことを明らかにした。

なお、本フォーラムでは、日本と台湾における地域文化の活用について、初日は日本の事例、2日目に台湾の事例を丁寧に議論するプログラム構成とした。そのことで、日本と台湾のそれぞれの課題と展望についてしっかりと議論ができる環境が生み出され、大きな成果を得ることができた。この成果については、ブックレットを刊行することとしている。

- 聴衆者数：2日間で182名
- 発表者数=受入数：35名
- 発表者数のうち外国人数：16名

成果

本フォーラムの成果は、来年度ブックレットとして刊行予定。活動報告について、日高基幹研究HP (<http://www.r.minpaku.ac.jp/s-hidaka/>) にて掲載予定。

地域研究コンソーシアム年次集会シンポジウム「グローバル化時代の文化力——〈地域知〉のマネージメント」——
2019年11月1日～11月2日 国立民族学博物館
代表者 丹羽典生

実施状況

11月1日から2日にかけて、本館も幹事組織である地域研究コンソーシアムの年次集会を開催した。1日は同コンソーシアムの理事会・運営委員会を開催することで、地域研究関連組織を連携しながら、地域研究を深めることができた。地域研究コンソーシアムは、いま事務局の体制の転換期を迎えており、次年度以降の持続的な組織運営を可能とするための話し合いがなされた。

11月2日は、年次集会に合わせて開催した一般公開シンポジウム（『グローバル化時代の文化力——〈地域知〉のマネージメント』）を通じて、地域研究拠点も抱える本館の地域研究の成果の一端を学術コミュニティに公開した。シンポジウムの趣旨は、交通システムや情報技術の世界的展開は、かつては僻地と呼ばれていたような地域においても先端的な知識のアクセスを容易にしたり、あるいは逆にローカルな地からの積極的な情報発信を可能にするなど、ダイナミックで双方向的な情報の流通が一般的なものとなりつつあるようなグローバル化時代の文化力のあり方を再考するものである。具体的には、地域知のマネージメントという視点から、アメリカ大陸、ヨーロッパ、中国、日本という世界各地において文化をベースとする情報がいかなる文脈の中で形成され、どのようなかたちで発信され、そしてどのような影響力をもつのか分析がなされた。

成果

シンポジウムには登壇者4名による4本の発表を行い、45名の参加者を募ることができた。そのみならず、本館で開催中の企画展（『アルテ・ポプラル』）と連動して行うことで、シンポジウムの中に展示の実行委員長による展示説明の場を設けた。文化発信の現在を実践的な形で展開した試みであったといえる。

公開シンポジウム「日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題——2020オリパラを迎える前に」——
2019年11月3日～11月4日 国立民族学博物館
代表者：廣瀬浩二郎

実施状況

2019年11月3日から4日、国立民族学博物館で公開シンポジウム「日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題」が実施された。

本シンポジウムには両日とも、全国の博物館関係者を中心に、140名余が参加した。2日間の熱気あふれる議論を通じて、ユニバーサル・ミュージアムに関心を寄せる人の輪、研究と実践のネットワークが確実に広がっている手応えを共有できたのは、シンポジウムの大きな成果といえよう。

民博でユニバーサル・ミュージアムをテーマとする大規模なシンポジウムが開催されるのは、今回が4回目である。2006年の初回シンポジウムでは、米国・メトロポリタン美術館の教育普及担当者に、ソーシャル・インクルージョンの理念に基づく多彩なプログラムの事例を紹介していただいた。「障害者対応は21世紀の博物館にとって重要な課題であり、日本もこれから頑張っていかなければならない」。2006年のシンポジウムが、欧米の先進例に刺激さ

れ、日本でもバリアフリー、ユニバーサルデザインの取り組みが各地の博物館に定着していく契機となったのは確かだろう。

2011年の第2回シンポジウムでは、考古学・自然史系の博物館関係者が中核となり、日本人の発表者のみで、すべてのパネルを組むことができた。従来は子ども向けの事業と位置付けられてきたハンズオン、さわれる展示に「ユニバーサル」の観点を加えることにより、日本の博物館は新たな段階に入った。そんな知的興奮、わくわく感がシンポジウム会場に満ちていたことが印象に残っている。

2015年の第3回シンポジウムには、たくさんの美術館学芸員が参加してくれた。美術館では、彫刻などの立体作品にさわる試みは1980年代から蓄積されてきたが、二次元の絵画に関しては一部の美術館スタッフ、ボランティアが「言葉による解説」を行う程度だった。「視覚障害者にどうすれば絵画の魅力を伝えることができるのか」。この難解な問いは、「そもそも視覚芸術とは何か」という根源的な探究にリンクする。ユニバーサル・ミュージアムは視覚優位、視覚依存の近代的な博物館に対して異議申し立てをする思想運動へと発展した。

そして、2019年の第4回シンポジウムである。今回のシンポジウムの狙いは、作品の制作者であるアーティストを積極的にユニバーサル・ミュージアム運動に巻き込むこと。シンポジウムの各セッションでは「視覚から触覚への変換」を通して、アートがどのように進化・深化するのかについて、活発な意見交換がなされた。シンポジウムに登壇してくださったアーティストの作品は、2020年秋の民博の特別展「ユニバーサル・ミュージアム——さわる！ “触”の大博覧会」で展示される予定である。

成果

廣瀬編『ユニバーサル・ミュージアム——「未開の知」に触れる』（小さ子社）を2020年9月に刊行する。（書名、価格、発行部数は検討中）2020年秋の民博の特別展「ユニバーサル・ミュージアム——さわる！ “触”の大博覧会」でシンポジウムの成果の一部を公開予定。

世界博物館学ワークショップ「刷新——展示における挑戦とイノベーション」

2019年12月11日～12月14日 国立民族学博物館

代表者：鈴木 紀

実施状況

本ワークショップは、欧米とアジア、オセアニア、ラテンアメリカの博物館学研究者と博物館学芸員18名を集め、博物館学および博物館展示の最新動向について議論した。ワークショップのタイトルである「刷新」（英語はinterruption）は、既存の博物館学の知識を一旦、中断／保留し、新傾向を踏まえた博物館学に刷新していくことを意図して付けたものである。ワークショップには、10カ国から若手研究者を含む16人と、本館の教員3人が参加し、研究発表を行った。

12月11日は参加者の自己紹介を兼ねた各自の研究関心の紹介と質疑応答を行った。12日午前は第1セッション「パラダイムと刷新」を開催し、博物館展示に関する既存のパラダイムが、いくつかの先端的な博物館や学芸員によっていかに挑戦されてきたかを概観した。午後の第2セッション「ヘテロトピアとしての博物館」では、異質で多様な文化を包含する場所として博物館を認識し、その中で行うさまざまなキュレーションの試みを検討した。第3セッション「国際化する博物館」では、東南アジア、韓国、台湾、ニュージーランド、カナダにおけるローカルなキュレーションの実践を取り上げた。アジアの博物館の文化展示の特色や、先住民族と博物館の関係などが比較検討された。13日午前は第4セッション「誰が、なにが実験なのか——芸術家、学芸員、博物館」を開催した。ある文化における芸術を他の文化の人々に展示する際の諸問題と、それを克服する工夫やコラボレーションのあり方について議論した。13日午後は、総合討論を行い、ワークショップの議論を総括した。その結果、資料を収集し知識を普及するという旧来の博物館像がさまざまな形で問い直されていることは明らかになったが、それらの挑戦が新しい規範をつくり出すというには時期尚早であるという合意を得た。この結果、今後は新しい試みをつづけて、その可能性を幅広く議論していることが必要であるという結論を得た。

最終日の14日は京都市の国立近代美術館と国際マンガミュージアムなどを訪問し、日本の美術館、博物館の先端的な試みを視察した。

成果

ワークショップの結果は、主要なワークショップ参加者で分担執筆し、Museum Worlds誌に投稿する方針である。

●国際研究集会への派遣

2019年国際ラテンアメリカ・カリブ研究連合（FIEALC 2019）における研究発表

2019年6月23日～6月28日 ハンガリー・セゲド大学

代表者：鈴木 紀

実施状況

2019年6月24日から28日にかけてハンガリー、セゲド大学イスパニック研究学科が主催する国際研究集会FIEALC（国際ラテンアメリカ・カリブ研究連合）2019に参加し、6月26日午前9時から12時にかけておこなわれた「文化研究——芸術表現と比較方法」の発表会場で「ラテンアメリカのアルテ・ポップラー——博物館展示学の比較研究」という題名の研究発表をおこなった。

発表では、ラテンアメリカのアルテ・ポップラーの意味は、それを展示する博物館の解釈に応じて、主に2つの意味があることを報告した。

第一の意味は、アルテ・ポップラーが先スペイン時代起源であると想定し、現在の先住民族の作品もアルテ・ポップラーに含める立場である。第二の意味は、アルテ・ポップラーの起源を植民地時代の混合文化にあると想定し、現在の先住民族の作品はアルテ・ポップラーに含めない立場である。前者は、アメリカ合衆国やメキシコなどの北中米の博物館に見られ、後者はペルーやパラグアイ、アルゼンチンなどの南米の博物館で認められる。この差が生じるのは、各国において先スペイン期の文化の文化遺産としての価値が異なることと、現代の先住民族の社会的な地位の異なることの現れであることであると推定される。

発表後、Manuel José de Lara Ródenas氏の司会で質疑応答がおこなわれ、アルテ・ポップラー展示における楽器の位置づけと、アルテ・ポップラーの「ポップラー」概念の意味について、質問が寄せられた。前者には、個別の楽器がアルテ・ポップラーとして展示している博物館は存在するが、楽器をアルテ・ポップラーの一要素としてまとまって展示している博物館は、発表者の知るかぎり存在しないと返答した。後者には、ポップラー概念はラテンアメリカ諸国の間で揺らぎをもち、先住民族が「ポップラー=民衆」に包摂されるか否かは一定しないことを強調した。

成果

FIEALC（国際ラテンアメリカ・カリブ研究連合）を主催したハンガリー、セゲド大学スペイン語学科の紀要Acta Hispanica誌に投稿予定。

第19回ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟会議（FIEALC）参加（ハンガリー）

2019年6月23日～6月30日 ハンガリー・セゲド大学

代表者：關 雄二

実施状況

ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟会議は、ラテンアメリカ地域研究に関する大規模な国際会議であり、2003年には、民博（地域研究企画交流センター）と大阪大学とで共催した経緯もある。報告者は、2年に一度開催される大会に、過去4回参加しており、2017年のセルビア大会では、民博の鈴木紀准教授、ダニエル・サウセド・セガミ外来研究員とで、文化遺産とその記憶をめぐるシンポジウムを組織し、研究成果の国際的発信に努めた。今回は、ダニエル・サウセド・セガミと米国イェール大学研究員のルーシー・サラサールと共同で、Materializando identidades: El Patrimonio Cultural y la formación de identidades locales, regionales y nacionales en América Latina（アイデンティティの物質化：ラテンアメリカにおける文化遺産と地域、地方そして国家のアイデンティティの形成）という有形遺産を対象としたシンポジウムを組んだ。共同提案者サラサール氏は、直前に参加をキャンセルしたが、文化遺産の周辺に位置するコミュニティ、地方自治体、国などのさまざまなレベルでアイデンティティが強化されるという報告がいくつかなされ、またグローバル化の中での文化遺産の意匠の権利をめぐる企業と先住民という先端的なテーマも扱われた。このうち申請者は、Relacionando el patrimonio cultural material e inmaterial para su uso y protección en la sierra norte del Perú（ペルー北高地における文化遺産の保存と活用のための無形遺産と有形遺産の融合）という発表を行い、住民が主体的、持続的に参加するためには有形と無形双方を組み合わせた文化遺産の活用が必要であると論じた。シンポジウムの総括として、文化遺産に関わる現象を、研究対象社会の人々と協働していく必要性が確認された。

成果

大会組織委員会より、プロシーディングスの刊行の連絡が届いており、投稿する準備はできている（2020年発行予定）。

ベルリン国立博物館群ヨーロッパ諸文化博物館で行われるシンポジウムでの発表

2019年6月23日～7月1日 ハンガリー・セゲド大学

代表者：森 明子

実施状況

ヨーロッパ諸文化博物館で開催された国際シンポジウム What's missing? Collecting and Exhibiting Europe に参加した。ベルリンのヨーロッパ諸文化博物館は、ベルリンの再統一後に東西両ベルリンに所在していたふたつの民俗学博物館を統合し、1999年に新たなコンセプトのもとにスタートしたものである。新たなコンセプトとは、それまでのドイツ民俗文化という枠組みを脱して、ヨーロッパ諸文化を対象とし、複数の文化という観点からヨーロッパについて展示、収集を行うものである。開館から20周年経過したことを記念して、ヨーロッパ展示・収集に関して実績のある研究者を招いて開催された。シンポジウムタイトルには、現在および将来のヨーロッパ展示・収集をめぐる、それぞれが遭遇し、あるいは見通している問題について討論しようとする意図がこめられている。

ICOM 会長の基調講演、主催者による挨拶と趣旨説明につづいて、4つのパネルで、合計16人の研究者が講演を行い、それにつづいて活発な議論が展開した。招聘研究者は、新大陸ではカナダと合衆国から（西インド諸島から出席予定だった研究者は、EUのビザが発行されずに欠席となった）、ヨーロッパではオーストリア、ポーランド、フランス、フィンランド、イギリス、ドイツ、ギリシャ、スイス、ベルギー、ハンガリーから、博物館および大学研究者が集った。欧米以外では、日本から森のみが参加した。平等、アイデンティティ、移民、マイノリティ、国家などのテーマが、展示と収集に関連して議論された。浮かび上がってきた論点は多岐にわたり、議論は収斂よりも、さまざまな展開の可能性を示すものとなった。その内容を出版物によって近い将来に提示することが約束された。

森の講演は、民博の2012年のヨーロッパ新展示をとりあげ、ヨーロッパ展示を日本でどのような視角から何を意図して構想し製作したか、現代世界における地域展示において文化と地域をどのようにとらえるべきか、今後何を予定しているかを中心に、展示する文化の重層性と展示の再帰性に焦点をおいて行った。この講演は大いに好意的に受け入れられ、とくに、ヨーロッパ文化の展示をみて喚起される再帰性に関心がよせられた。パンの展示は多くの参加者に新鮮な驚きと共感をもって迎えられた。出席者は100名前後、会場は講堂でオーディエンスに対する講演という形式で行われた。

成果

シンポジウムの成果は、主催者であるベルリン国立博物館群ヨーロッパ諸文化博物館が行うことが決まっている。それとは別に、シンポジウムの様子について、研究報告の資料として報告することを予定している。

国際伝統音楽学会（ICTM）第45回世界大会への出席と民博製作映像番組の上映

2019年7月8日～7月18日 タイ・バンコク

代表者：寺田吉孝

実施状況

2019年7月11日から17日にチュラロンコン大学（タイ王国バンコク市）で開催された国際伝統音楽学会 International Council for Traditional Music の第45回世界大会に参加し、7月13日に民博製作映像番組 Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Music (76分、2018年) の上映と討論を行った。本番組は、日本、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国のはざまに生きる在日コリアンの生活経験が、かれらの多様な音楽実践とどのように関連づけられているかについて紹介したものである。上映会の参加者は約40名で、番組上映後、在日コリアンの歴史や生活、今後の調査の展開、番組の製作過程、公開方法などについて活発な議論がおこなわれた。好意的な評価が数多く寄せられ、2019年8月末に上海音楽学院（中国、上海市）で行われる映画祭（音楽）の企画者から、上映の要請があった。また、本番組は民博特別研究「パフォーマンス・アーツと積極的共生」（2018年度～2020年度）の目的やテーマと関連しており、特別研究の推進についても有意義なフィードバックが得られた。

本大会は参加者が900名を超え、最大13のセッションが並行して行われた。発表の質も概して高く、充実した大会となった。大会中に学会傘下の研究グループがそれぞれ総会を開くことが慣習となっており、それらに参加して研

究の動向に関する貴重な情報を得ることができた。

成果

上映番組の製作に関するエッセイの寄稿を Routledge Handbook of Asian Music: Cultural Intersections の編者である Lee Tong Soon (リーハイ大学教授) より依頼されており、2020年7月に同書の1章として刊行予定である。今回の上映会での成果を加味しながら、今年度中に海外3箇所(中国、チェコ、カナダ)、国内5箇所(東京、豊中、福岡など)で同番組の上映会を開くべく準備を進めている。

AAA と CASCA 共同開催の国際学会における研究発表と研究者ネットワークの構築

2019年11月18日～11月24日 カナダ・バンクーバー

代表者：卯田宗平

実施状況

本研究成果プログラム(③国際研究集会への派遣)の目的は、2019年11月20日から24日までカナダ・バンクーバーで開催された AAA (American Anthropological Association) と CASCA (Canadian Anthropology Society) 共催による国際学会において、オタワ大学スコット・サイモン (Scott Simon) 教授ら8名の研究者と「Human-bird Entanglements in the Pacific Anthropocene」のセッションを組織し、(1)申請者が鶴飼研究の最新の成果を口頭発表するとともに、(2)国外の研究者との議論を通してアジア・オセアニア地域における人—鳥関係の研究の到達点と課題を明確にすることであった。

上記(1)の目的に関して、国際学会において申請者は「Multi Joining Methods among Cormorants, Fishers and Fishing Techniques」というタイトルで発表し、中国大陸の全体と対象とした鶴飼調査から導きだした鶴飼技術の地域的な固有性と全国的な共通性、鶴飼技術に地域的な違いがみられる要因に関わる研究成果を国際的に発信した。くわえて、大会の共通テーマである「気候変動」が動物利用にもたらした影響など広い視野から検討を加えた。上記(2)の目的に関しては、同じセッションで発表した各国の研究者と交流することで、アジア・オセアニアにおける人—鳥関係の研究を国際的に推し進める必要性を改めて確認するとともに、人間の生活世界において鳥がメタファーから食利用、そして生業における手段としての利用にいたるまで多種多様なかわりをもっていることが明らかになった。このように、本セッションにおける発表と交流により、人類学の立場から鳥類を研究する学者との研究ネットワークを構築することができ、かつ申請者自身の新たなテーマの選択や比較研究の軸を検討するうえにおいても意義があった。さらに、国際学会ではほかのセッションにも参加し、マルチスピーシーズ民族誌研究の研究動向を把握するとともに、人類学的な事例調査がまだ不足している事実を理解することができた。

成果

セッションの概要や個々の発表内容はすでに公開している。

(<https://www.eventscribe.com/2019/AAA/agenda.asp?startdate=11/20/2019&enddate=11/20/2019&BCFO=M&t=&cpf2=&cus2=&pta=&h=Wed,%20Nov%202020&pfp=FullSchedule>)

館長リーダーシップ経費による事業・調査

公開座談会「自然界から想像／創造する—— Creature Creators' Symposium」

本事業は秋の特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」の関連イベントとして2019年9月23日にナレッジシアター(グランフロント大阪、大阪梅田)にて開催した。特別展の最後のセクション「創る」で作品を展示している現代の漫画家・五十嵐大介氏と、ゲームクリエイター・長谷川朋広氏が登壇し自然界の生物のパーツや習性から実在しない生物を想像し、マンガやゲームコンテンツとして創造してゆくプロセスについて講演した。さらに、海遊館の西田清徳館長による自然史の視点からのコメントを皮切りに、山中教授が進行役となり形態・行動・生息域・分類・進化といったトピックに沿って座談会を行った。

自然を題材とするクリエイターと、自然を研究する海洋生物学者のクロストークを通して、自然界の生きものの形、民族資料に見られる伝統的な表象、新しいメディアにおける表現をめぐる知の交流が実現し、自然界と想像界の相関関係について新たな視野が開いた。特に、人間の目に見えている自然だけでなく、生物、コンピューターが、それぞれ異なる感覚で捉える環世界があることに気付かされた。

参加者のアンケート結果も非常に好意的なものが多く、大阪梅田の商業施設内でのイベントであったため、特別

展の広報としても効果的であったという手ごたえが感じられた。

なお、当日の参加者数は313名であった。

国立民族学博物館・国立科学博物館共同企画展「ビーズ——自然をつなぐ、世界をつなぐ」のための輸送——

国立科学博物館（以下「科博」という）で実施したビーズ展は、国立民族学博物館と科博の初めての共同企画であり、会期62日間の入場者数は全体で201,120人、1日平均3,244人の集客があった。

科博の企画展示室で開催された76の企画展の中で、総入場者数でも1日平均入場者数でも歴代7位を記録した。本展示は文化人類学（民族学）と自然史学の融合から人類によるビーズに対する認識や役割を紹介することを可能にするだけでなく、民博の活動を東京で広報するよい機会になった。

施工費用はすべて科博側がもつことになっており、民博側では民博所蔵の標本資料に限定して、輸送費を負担した。

大規模災害における人間文化研究

2011年の東日本大震災の発生以降、民博が継続してきた「被災地における無形の文化遺産の支援活動」の一環として、遠藤協・大澤未来共同監督作品「廻り神楽」の上映会をみんぱく映画会として実施した。両監督は、2012年から岩手県宮古市の「震災の記憶伝承事業」に参加し、被災地に通いはじめ、本作品を制作した。映画会では、遠藤氏と黒森神楽の研究者である神田より子氏（敬和学園大学名誉教授）氏を招へいし、上映後にトークセッションを合わせて開催した。トークセッションは民博の林勲男の司会で進め、会場フロアーからも質問用紙で30件を越える質問が寄せられ、遠藤氏と神田氏に可能な限り答えて頂いた。

事前に複数の新聞社による告知もあり、被災地の現状や伝統芸能の復興状況への関心の高さを示す参加者数であり、質問数であった。

なお、当日の参加者数は256名であった。

寺社石碑DBは、高知県立高知城歴史博物館において、高知ミュージアムネットワークのメンバー向けにワークショップを実施するとともに、意見交換をおこなった。その結果、(1)過去のスポット情報の保存、表示、(2)履歴の確認および編集機能の新設、(3)ユーザー権限の追加、(4)60進数（度分秒）による緯度・経度座標の登録機能の追加、(5)関連情報へのリンク機能の追加、(6)スポット検索の検索条件追加、(7)スポット一覧の表示項目変更、(8)スポット登録時の地図上に既登録スポットの座標を表示、(9)地域名一覧の並び替え機能の使い勝手向上、(10)登録済みのスポット情報のエクスポート、(11)スポットの詳細画面での登録ユーザも表示、(12)複数の地図への切り替え対応という12点の改修項目を洗い出せ、データベースへの反映をおこなった。

民博研究懇談会

第295回 2019年6月26日

Robert E. Johnson 「Deaf ethnicity: Paternity and patrimony speaker」

第296回 2019年7月24日

奈良雅史 「民族間関係の変容——中国雲南省回族社会における民族観光とイスラモフォビア」

第297回 2019年9月25日

アデイ・プラセティージョ 「オラン・リンバ——森林の本当の管理人」

第298回 2019年10月9日

話題提供：野林厚志、ファシリテーター：林 勲男 「討論会——フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの課題と可能性」

第299回 2019年11月27日

小野林太郎 「海のサビエンス史——海域アジアへ移住した人類の海洋・島嶼適応」

第300回 2020年1月29日

黒田賢治 「現代イランにおける40年の殉教物語——死の社会化と国家の『神話』形成」

2-2 外部資金による研究

科学研究費補助金による研究プロジェクト

2019年度科学研究費補助金 採択課題一覧

区分	種目	研究課題	研究代表者	研究年度
	国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化A)	遺伝子化時代の社会集団のカテゴリー化と差異化 ——インドにおける血と遺伝子を中心に	松尾瑞穂	2019-2021
	基盤研究 (A) 一般	北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成 と現状、未来に関する比較研究	岸上伸啓	2019-2023
	基盤研究 (B) 一般	文化遺産の「社会的ふるまい」に関する応用人類学的研究 ——東部アフリカを事例に	飯田 卓	2019-2021
	基盤研究 (B) 一般	バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学 的研究	上羽陽子	2019-2023
	基盤研究 (B) 一般	再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する 規則的描写の複合的評価	末森 薫	2019-2021
	基盤研究 (B) 一般	シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に 関する考古学的研究	寺村裕史	2019-2022
	基盤研究 (B) 一般	紛争後社会のレジリエンス——オセアニア少数民族の社会 関係資本と移民ネットワーク分析	丹羽典生	2019-2022
	基盤研究 (C) 一般	未発表原稿分析による J.-C. マルドリュスの執筆過程の解明	岡本尚子	2019-2023
	基盤研究 (C) 一般	中国——南太平洋島嶼国関係の変化と「オセアニアン・ チャイニーズ」像の表出	河合洋尚	2019-2022
	基盤研究 (C) 一般	日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史 変化の解明	相良啓子	2019-2022
新	基盤研究 (C) 一般	インド・オディシャーにおける親密圏の変容 ：恋愛・婚姻・家族をめぐる情動と経験	常田夕美子	2019-2021
	基盤研究 (C) 一般	世界遺産バンチェン遺跡の遺物の古美術品化とその価値 づけをめぐる文化人類学的研究	中村真里絵	2019-2022
規	基盤研究 (C) 一般	インド西部の地方都市における宗教実践とローカリティ 形成に関する人類学的研究	三尾 稔	2019-2022
	若手研究	肉食性動物のドメスティケーション ：毛皮産業近代化における人と動物の関係の変化	大石侑香	2019-2022
	若手研究	レソトにおけるジンバブエ移民行商人の会計方法にかん する人類学的研究	早川真悠	2019-2021
	若手研究	宗教と移動をめぐる人類学的研究 ：現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク	奈良雅史	2019-2022
	研究活動スタート支援	アオウミガメを例にした稀少動物に対する人為空間の構 造的理解に向けての比較研究	高木 仁	2019-2020
	研究成果公開促進費	敦煌莫高窟と千仏図	末森 薫	2019
	研究成果公開促進費	宣教と適応——グローバル・ミッションの近世	齋藤 晃	2019
	研究成果公開促進費	砂漠のノマド	中野歩美	2019
	研究成果公開促進費	「シュルパ」と道の人類学	古川不可知	2019
	研究成果公開促進費	<客家空間>の生産	河合洋尚	2019
	研究成果公開促進費	服装・身装文化デジタルアーカイブ	高橋晴子	2019

新 規	研究成果公開促進費	ゴミから生まれる異音獣！ 不思議なケモノはどんな音？不思議な音は何に見える？	山中由里子	2019
	特別研究員奨励費	ラテンアメリカ地域における「先住民性」についての民族誌的研究：コスタリカを中心に	額田有美	2019-2021
	特別研究員奨励費	アフリカ内水面における「よそ者」に着目した持続的水産資源管理構築に関する研究	稲井啓之	2019-2021
	特別研究員奨励費	東地中海域における小規模漁業の漁場利用生態と漁場管理制度の統合的解明	崎田誠志郎	2019-2021
継 続	新学術領域研究 (研究領域提案型)	人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築	野林厚志	2016-2020
	新学術領域研究 『学術研究支援基盤形成』	地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化	吉田憲司	2016-2021
	国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化)	移民の身体ポリテクス ——インド舞踊のグローバル化とエージェンシー	竹村嘉晃	2018-2020
	国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化B)	時空間を融合する——GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ	菊澤律子	2018-2023
	国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化B)	オセアニアの人類移住と島嶼間ネットワークに関わる考古学的研究	小野林太郎	2018-2021
	基盤研究 (A) 一般	ネットワーク型博物館学の創成	須藤健一	2015-2019
	基盤研究 (A) 一般	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究	吉田憲司	2015-2019
	基盤研究 (A) 一般	アンデスにおける植民地的近代 ——副王トレドの総集住化の総合的研究	齋藤 晃	2015-2019
	基盤研究 (A) 海外	チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究	長野泰彦	2016-2019
	基盤研究 (A) 海外	アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築	關 雄二	2016-2019
	基盤研究 (A) 一般	モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築	小長谷有紀	2017-2021
	基盤研究 (A) 一般	超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築	山中由里子	2018-2022
	基盤研究 (A) 一般	大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育	林 勲男	2018-2021
	基盤研究 (B) 特設	中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化	西尾哲夫	2016-2020
	基盤研究 (B) 一般	シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究	西尾哲夫	2017-2021
	基盤研究 (B) 海外	東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証	マシウス ピーター	2017-2020
	基盤研究 (B) 一般	教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存	日高真吾	2018-2020
	基盤研究 (B) 一般	セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発	園田直子	2018-2020
	基盤研究 (C) 一般	本州とその周辺の島々及び多島海的な海域における民俗芸能の研究	笹原亮二	2015-2019
	基盤研究 (C) 一般	ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論 ——新たな人・動物関係論の構築と展開	卯田宗平	2016-2019
	基盤研究 (C) 一般	カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究	藤本透子	2016-2020
	基盤研究 (C) 一般	農の「EU化」に伴うトランシルヴァニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究	杉本 敦	2017-2019
	基盤研究 (C) 一般	京都市東九条における日本人・在日コリアン・フィリピン人の関係形成についての人類学	永田貴聖	2017-2020

	基盤研究 (C) 一般	生理用品の受容によるケガレ観の変容に関する文化人類学的研究	新本万里子	2017-2019
	基盤研究 (C) 特設	中国西南タイ民族における詩的オラリティの継承と創造的実践に関する研究	伊藤 悟	2017-2019
	基盤研究 (B) 一般	触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究	廣瀬浩二郎	2018-2020
	基盤研究 (B) 一般	『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相	中道静香	2018-2022
	基盤研究 (C) 一般	セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張	盛 恵子	2018-2020
	基盤研究 (C) 一般	アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究	川瀬 慈	2018-2021
	基盤研究 (C) 一般	島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ	福岡正太	2018-2020
	基盤研究 (C) 一般	ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究	平井京之介	2018-2021
	基盤研究 (C) 一般	米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開	鈴木七美	2018-2021
	基盤研究 (C) 一般	無形文化遺産の継承・変容と自然災害による影響の動態的把握——バヌアツ北部事例研究	野嶋 洋子	2018-2020
	基盤研究 (C) 一般	アートツーリズムのエスノグラフィー——地方国際芸術祭の深化と拡充の理論化に向けて	山田 香織	2018-2020
継	若手研究 (A)	チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究	鈴木博之	2017-2020
	若手研究 (B)	現代インドにおける遺伝子の社会的配置に関する人類学的研究	松尾瑞穂	2016-2019
	若手研究 (B)	社会をつくる芸術——「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究	登 久希子	2016-2020
	若手研究 (B)	エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究	相島葉月	2017-2020
	若手研究 (B)	アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究——聖像の所有と継承に注目して	八木百合子	2017-2019
	若手研究 (B)	三線が引き出す社会関係、価値、感情——大衆楽器が人びとに与える効果の研究	栗山新也	2017-2019
	若手研究 (B)	20世紀前半ペルシア湾における「奴隷解放調書」の研究	鈴木英明	2016-2019
	若手研究 (B) における独立基盤形成支援(試行)	エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究	相島葉月	2017-2020
	若手研究	現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究	黒田賢治	2018-2020
	若手研究	アフリカ熱帯雨林における狩猟採集民の生態資源獲得の行動に関する人類学的研究	彭 宇潔	2018-2020
若手研究	身体性を基盤とした他者との共存の可能性を探求する——ケニアの自転車競技選手を事例に	萩原卓也	2018-2020	
若手研究	近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷——伊勢大神楽と韓国農楽を中心に	神野知恵	2018-2021	
挑戦的研究 (開拓)	個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究	出口正之	2017-2021	
挑戦的研究 (萌芽)	被災後社会の総体的研究——被災後をより良く生きるための行動指針の開発	竹沢尚一郎	2018-2019	
挑戦的研究 (萌芽)	新手話学の構成素の実証的検証研究	神田和幸	2018-2020	
挑戦的研究 (萌芽)	日本手話言語の変質に関する研究	川口 聖	2018-2020	

継 続	研究活動スタート支援	ヒマラヤ東部地域における輸送インフラの発展と移動する身体に関する人類学的研究	古川不可知	2018-2019
	研究活動スタート支援	食の認識体系とその変容——タイにおけるMSG（グルタミン酸ナトリウム）の消費と拒絶	大澤由実	2018-2019
	研究成果公開促進費	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	久保正敏	2018-2022
	特別研究員奨励費	セルビアにおけるポップフォークと民俗音楽の比較分析による文化的連関の研究	上畑 史	2017-2019
	特別研究員奨励費	贈与交換による平和の構築・維持・再生産に関する人類学研究——ソロモン諸島の事例から	藤井真一	2017-2019
	特別研究員奨励費	高齢期の人間にとっての居住型宗教施設の役割——南インドの事例から	松岡佐知	2018-2020
延 長	基盤研究（C） 一般	スリランカ系タミル人によるインド舞踊の発展と再々構築化に関する全体関連的研究	竹村嘉晃	2016-2019
	基盤研究（C） 一般	1950年代アメリカ海軍のグアム島における風下被ばく調査に関する研究	西 佳代	2016-2019
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化）	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（国際共同研究強化）	伊藤敦規	2016-2019
繰 越	新学術領域研究 （研究領域提案型）	人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築	野林厚志	2016-2020
	基盤研究（A） 一般	大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育	林 勲男	2018-2021
	基盤研究（A） 一般	アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究	齋藤 晃	2015-2019

受託事業

文化庁 文化遺産保護（ペルー、イラン及びメコン地域諸国）に係るシンポジウム等実施委託業務「日本ペルー交流年における文化遺産保護に係るシンポジウム等実施委託業務」

委 託 者：文化庁

担当教員：關 雄二

実施期間：2019年7月1日～2020年3月31日

目的と概要

2019年は、日本およびペルー両国が「日本ペルー交流年（ペルー日本人移住120周年）」と定めた記念すべき年である。本事業の目的は、この交流年に合わせて、過去60年以上にわたり考古学調査を実施し、現地研究者、ならびに日系人を含む地域住民と交流を続け、さらには対象となる文化遺産の保存と活用に取り組んできた日本調査団の足跡に関するシンポジウムや展示を実施すること、さらにはその後加わる民族学研究についても同様のシンポジウム等を開催することを通じて、日本、ペルー両国の文化交流を促進させることにある。

本事業は、ペルーにおけるシンポジウム4回（リマ市、カハマルカ市、クスコ市、ナスカ市）と展示（カハマルカ市）1回、ならびに日本におけるシンポジウム1回より構成される。

実施状況

1. シンポジウム「文化遺産研究と実践の最前線」

日時：2019年8月13日

会場：国立国民博物館、リマ市

ペルーの首都リマで開催した国際シンポジウム「文化遺産研究と実践の最前線」には、日本人考古学者8名が参加した。ペルー側研究者については、共同研究者（発表者）を含めて7名が参加した。具体的には、日本調査団が60年以上にわたり対象としてきたアンデス文明初期の形成期（前3000年～紀元前後）社会の研究と遺跡の保

護をメインテーマとした。

冒頭、土屋定之駐ペルー日本特命全権大使の挨拶に続き、ペルー文化省ルイス・ハイメ大臣の挨拶があり、これに続いて大貫良夫が、日本人考古学者による過去60年の調査の歩みをテーマとする基調講演を行った。続いて、会場を移し、地域ごとの最新成果を日本、ペルー両国の研究者が発表を行った。さらに、近年、若手研究者が興味を示す形成期以降の時代についても扱った。これらの発表に併せて会場内で2枚のパネルを用いたポスター発表も行った。なお、シンポジウムは、毎年、ペルー文化省が主宰して行われる「ペルー考古学会議」の1日をあて、会場もペルー文化省側が無償で提供した。なおこのシンポジウムは、文化庁、国立民族学博物館、在ペルー日本大使館、ペルー文化省、日本考古学調査団の主催、文化遺産国際協力コンソーシアムの共催、古代アメリカ学会の協力の形で実施した。基調講演にはおよそ200名、シンポジウムには60名の参加があった。

2. 展示「カハマルカにおける日本調査団——40年におよぶ考古学調査」

期間：2019年9月5日～

会場：文化省カハマルカ支局、カハマルカ市

ペルー北部高地カハマルカ州の州都カハマルカ市において展示を実施した理由は、カハマルカ州が、1979年以来、日本調査団が継続して調査を実施してきた場所であり、本年で40周年を迎えたためである。会場はペルー文化省が無償で提供する形となったが、展示および警備については日本側が負担することとなった。

文化省カハマルカ支局が事務所を構えるベレン教会複合内の旧男性用病棟という歴史的建造物内を利用した展示では、第1室において、1958年以来の日本調査団の歩みや、過去に調査に加わった両国の団員からのメッセージなどが披露された。展示空間の大半を占める第2室では、40年間の発掘調査によって得られた出土品を展示した。

9月5日の開幕式には、土屋定之特命全権大使、文化省文化遺産課長、カハマルカ州知事、カハマルカ市をはじめとする複数の市長が参列し、挨拶をするとともに、日本調査団に対して数多くの表彰が行われた。引き続き、大貫良夫による記念講演が行われ、土屋定之特命全権大使、文化省文化遺産課長、カハマルカ州知事、關雄二によるテープカットにより展示の公開が開始された。

当初、会期は3ヶ月ほどを予定していたが、2019年11月までの2ヶ月間で3万人の入館者を数え、現地のメディアでも大きく取り上げられるなど反響が大きいため、ペルー文化省側から会期延長の希望が表明され、2020年8月上旬まで延長することが決まった。しかしながら新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020年3月13日に会場が閉鎖された。これまでの入館者数は52,184人である。展示は、文化庁、国立民族学博物館、在ペルー日本大使館、ペルー文化省、日本考古学調査団の主催、文化遺産国際協力コンソーシアムの共催、古代アメリカ学会の協力の形で実施した。

3. シンポジウム「過去と現在の狭間で——ペルー北高地・北海岸の文化遺産の研究と保護」

日時：2019年9月6日

会場：文化省カハマルカ支局、カハマルカ市

展示に併せて、シンポジウムを実施した。当初、2日間の予定で実施することになっていたが、週末に会場が利用できないことが判明したため、1日で終えるというタイトなスケジュールに変更した。シンポジウムでは、冒頭、土屋定之特命全権大使の挨拶の後、日本・ペルー両国の考古学者によるカハマルカ地域の考古学調査と文化遺産保護の現状について討議が行われた。一般公開で実施されたほか、文化省のウェブを介して生中継された。現地会場における参加者はおよそ200名であった。

4. シンポジウム「アンデス南部高地における日本人による人類学研究の50年——軌跡、民族誌、文化的再評価」

日時：2019年11月13日

会場：クスコ歴史博物館講堂、クスコ市

本シンポジウムは、アンデスにおける民族学研究をテーマに、同分野の研究の中心地であるペルー南部のクスコ市を舞台に開催した。とくにペルー南部高地は、1960年代から日本人研究者が地元の研究者らと共同で調査研究をおこなってきた地域でもあり、今回は長年にわたる双方の研究成果を地元社会に還元する意味で、両国の関係機関の協力のもと実施された。シンポジウムでは、日本人人類学者3名のほか、日本の共同研究調査への参加実績のあるペルー人類学者2名が研究発表をおこなった。具体的には、南部高地の農村および牧畜社会におけるアンデス特有の慣習、土地利用、移動形態、儀礼などの無形文化を主題に、これまでの研究の歴史を振り返るとともに、今後の同地域の研究展望について述べられた。また、日本の研究者達が蓄積した画像や標本などの研究資料の活用の可能性等についても扱った。なお、本シンポジウムは文化庁、国立民族学博物館、ペルー文化省

クスコ支局、クスコ市、クスコ大司教府の協力のもと実施した。当日は、研究者、学生、行政関係者や地元市民ら130名の参加があった。また、本シンポジウムの開催に合わせて、関連イベントとして、写真スライド展示「アンデスの伝統：日本人人類学者による1960-1980年代の写真コレクション」も実施した。このイベントは、クスコ市の協力のもと、同市庁舎コンベンションセンターで3日間にわたりおこなった。期間中は、一般市民のほか、同地を訪問する観光客等も数多く足を運んだ。

5. シンポジウム「ペルーの文化遺産保護の最前線——アンデスの黄金、ナスカの地上絵、インカのミイラ」

日時：2019年12月14日

会場：東京文化財研究所、東京

このシンポジウムでは、日本人考古学者が4名参加した。ペルー側研究者については、2名の参加を予定していたが、1名は、来日直前に文化大臣の職に就き、かつまた世界文化遺産の暫定リストに掲載されたクエラップ遺跡周辺の山火事に対処することとなったため、参加が叶わず代読の形となった。

シンポジウムでは、豊城浩行文化庁文化財鑑査官、ハロルド・フォルサイト駐日ペルー大使の挨拶に続き、日本調査団が60年以上にわたり対象としてきたアンデス文明初期の形成期（前3000年～紀元前後）社会の研究と遺跡の保護の歩みについて、加藤泰建（埼玉大学名誉教授）が基調講演を行った。続いて、カルロス・ウエステル・ラ・トレ（国立ブルーニング考古学博物館長）による、ペルー北海岸チョトゥーナ遺跡とチョルナンカップ遺跡における遺跡保存とコミュニティ開発の事例、そして日本側からは、關雄二とダニエルモラーレスが率いるパコパンパ遺跡合同調査における文化遺産の活用、そして坂井正人ら山形大学チームが進めるナスカの地上絵の新発見とそれらの保護についての発表が続いた。

なおこのシンポジウムは、文化庁、国立民族学博物館の主催、文化遺産国際協力コンソーシアム、山形大学、金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際的研究の世界的拠点形成」、科学研究費（基盤研究（A））「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」（研究代表者：關雄二）の共催、古代アメリカ学会、在日本ペルー大使館の協力の形で実施した。一般公開の形で行われ、参加者は約80名であった。

6. シンポジウム「ペルー南海岸・南高地における考古学と文化遺産」

日時：2020年1月11日、12日

会場：アントニーニ博物館、山形大学ナスカ研究所、ナスカ市

本シンポジウムは、当初2019年10月に開催することで準備を進めてきたが、その時期にナスカ市の会場を確保することが難しかったこと、またペルーの入管法の変更により、予定していた時期に、日本人研究者が滞在することが困難になった点などの事情から、2020年1月の開催に変更となった。

シンポジウムの目的は、ペルー南海岸および南高地を調査している日本とペルーの研究者が、ナスカ市に集まり、成果を発信し、情報を共有することにある。ナスカ市で開催した理由は、山形大学が同市に研究施設を設立し、ユネスコ世界文化遺産ナスカの地上絵の研究を推進していることにある。1日目は、「パラカス」、「ナスカーパルパ」、「ワリ」という3つの異なる文化を扱うセッションによって構成された。またペルー南海岸および南高地で実施された最新の考古学調査の結果を報告するだけでなく、考古学調査を通じて明らかになった文化遺産が抱える諸問題についても議論した。2日目は「世界遺産ナスカの地上絵」を保護するために山形大学とペルー文化省が締結した協定に基づき、ナスカ市近郊のアハ地区に共同で設立した遺跡公園をシンポジウム発表者で視察し、その後、山形大学ナスカ研究所において、文化遺産とコミュニティの共生、文化遺産の持続的活用をめぐる討論を行った。日本人考古学者3名の他、ペルー人考古学者6名、イタリア人考古学者1名が参加し、聴衆は72名を数えた。

またシンポジウムは、文化庁、山形大学、国立民族学博物館の主催、山形大学ナスカ研究所、ペルー文化省ナスカーパルパ地区管理計画事務所、文化遺産国際協力コンソーシアム、アントニーニ博物館の共催、古代アメリカ学会の協力の形で実施した。なお本シンポジウムの運営については、国立民族学博物館より山形大学に再委託した。

民間などの研究助成金などによる研究活動

・寄附金

末森薫機関研究員研究助成金（鹿島美術財団「美術に関する調査研究」助成）

——末森 薫

齋藤玲子准教授研究助成金（公益財団法人アイヌ民族文化財団「アイヌ関連研究助成」）

齋藤玲子
 片雪蘭外来研究員研究助成金（公益信託 澁澤民族学振興基金）——片 雪蘭
 順益台湾原住民博物館研究賛助金——順益台湾原住民博物館
 奈良雅史准教授研究助成金（一般社団法人日本文化人類学会「植松東アジア研究基金2019年度研究促進事業」）
 ——一般社団法人日本文化人類学会
 鈴木英明助教研究助成金（Australian Research Council Discovery-collaboration Projects）
 ——鈴木英明
 国立民族学博物館活動助成金——株式会社阪急阪神百貨店
 高木仁外来研究員研究助成金（公益財団法人味の素食の文化センター「2019年度食の文化研究助成事業」）
 ——公益財団法人味の素食の文化センター

2-3 文化資源関連事業・情報関連事業

文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設の基盤業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。

また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究員の運営のもとで遂行されるが、情報管理施設の支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。

2019年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1. 運営体制

文化資源関連事業

文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」、「文化資源計画事業」、「情報管理施設の基盤業務」の3種類のカテゴリによって実施した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

2. 文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクト（以下「プロジェクト」という。）は、本館あるいは大学等関連機関が所有する学術資源の体系化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、本館専任教員の提案に基づき、期間として実施する研究プロジェクトである。

プロジェクトは、4つの分野（調査・収集、資料管理、展示、博物館社会連携）に関わる研究開発、または研究成果の前記4分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

1) 調査・収集分野

北村繁作「華ひらく」の購入

提案者：日高真吾

本プロジェクトは、2018年に開催した特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」で出展した北村繁氏作の漆工品「華ひらく」を、標本資料として購入したものである。本作品の制作者である北村繁氏は、正倉院や春日大社の漆工品の修理を通じて、奈良時代の漆工技術を活かした作品づくりをおこなっている。

ダーウィンフィンチのタッチカービング（5体）の購入

提案者：廣瀬浩二郎

内山春雄氏にタッチカービング（ダーウィンフィンチ）5体の制作を依頼し、購入した。これまでも民博では内山氏のカービング作品を「さわる標本資料」という位置付けで収集してきた。今回、生物進化の歴史を示すダーウィンフィンチが加わることで、一連のコレクションは厚みを増した。鳥の生態を触覚によって理解す

る体験は万人にとって貴重だろう。購入したカービングは、2021年秋の特別展「ユニバーサル・ミュージアム」において展示される予定である。

野生のウミウの捕獲道具一式の購入

提案者：卯田宗平

本プロジェクトは、茨城県日立市十王町において継承されている野生のウミウの捕獲作業を対象とし、捕獲において使用される道具の一式（捕獲用カギ棒やウミウを各地に運搬する籠など）を購入したものである。

「客家と日本」に関する標本資料購入の選定調査

提案者：河合洋尚

提案書の提出時は、2021年の春に企画展「客家と日本」（仮）の開催を想定しており、その収集のための調査をおこなう予定でいた。この企画展は、台湾客家文化センターが2020年に開催する予定であった企画展「台湾客家と日本」（仮）の標本資料を半分以上貸借することを前提としており、そこで収集されないであろう日本国内、中国、香港、東南アジアの資料を、今回の収集プロジェクトにて調査・補足する予定でいた。だが諸々の要因により台湾ではまだ企画展の開催が進んでおらず、2021年春の企画展は実現不可能となった。また、標本資料の保管のありかたを含めて収集や企画展構想を再調整する必要がでてきたため、今回の調査を見送らざるをえなくなった。したがって、本年度は予定していた成果をあげることが困難であると判断し、調査を中止し、調査費を全額返納した。

2) 資料管理分野

該当するプロジェクトなし。

3) 展示分野

特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」展示実施

提案者：山中由里子

本展示では、常識や慣習から逸脱した「異」なるもの（異境・異界・異人・異類）をめぐる人間の心理と想像力の働きを解明し、自然界と想像界の相関関係の歴史の変遷とその基層にある心性メカニズムを、学際的・多元的視点から究明した。具体的には、人魚、龍、河童、天狗、狼男など、この世の「キワ」にいるかもしれないと信じられていた驚異や怪異にまつわる民族資料、絵画、書籍などの展示を通して、人類に普遍的な思考回路と文化ごとに異なる事象の関係についての考察を喚起した。

特別展「子ども／おもちゃの博覧会」

提案者：笹原亮二

本プロジェクトは、民博所蔵の「時代玩具コレクション」（多田コレクション）の調査研究や、民博共同研究「モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に——」（研究代表者 是澤博昭）の成果をもとに、2019年3月21日から5月28日まで、本館特別展示館において特別展「子ども／おもちゃの博覧会」を開催した。あわせて、みんぱくゼミナールなどの関連催し物を開催した。

特別展「先住民の宝」

提案者：信田敏宏

世界各地の先住民が大切にしている「宝」をキーワードに、写真や動画、絵画や漫画などのメディアも活用しながら、それぞれの地域の先住民の暮らしや現状を紹介する。「宝」には、狩猟具、装身具、儀礼具、その他の生活用具などの具体物だけではなく、伝統的な生活、森や海などの自然環境、言語、信仰、芸能なども含まれる。先住民運動や文化復興運動などが隆盛し、民族アイデンティティが活性化している状況にも配慮しながら、展示全体のストーリーを構成する。（新型コロナウイルス感染のさらなる拡大の防止のため、臨時休館したことに伴い、開催時期を2020年3月19日～6月2日から2020年10月1日～12月15日に変更した。）

特別展「ユニバーサル・ミュージアム——触文化がいざなう「未開の知」への旅」（仮称）準備

提案者：廣瀬浩二郎

2020年秋の特別展実施に向けて準備を進めた。具体的には以下の4点について取り組んだ。(1)協力アーティストを確定し、各自の出展作品の数、内容に関して打ち合わせを行なった。(2)民博所蔵資料の中で、さわることに適したものを選定し、撮影した。(3)図録の目次案を固め、執筆予定者に原稿依頼状を送付した。(4)展示場全体のレイアウトについて展示デザイナーと議論を重ね、設計図面を完成させた。

特別展「おしゃべりするヒト」(仮称) 準備

提案者：菊澤律子

2022年秋(予定)の特別展開催に向けて、展示デザイン基本コンセプト、展示タイトル、構成、コンテンツ、国際巡回展部分関連の変更への対応の検討、展示装置の開発、その他展示協力者、予算関連と資金確保の方法、関連出版物の内容、などについて準備を進めた。

企画展「旅する楽器——南アジア、弦の響き」

提案者：寺田吉孝

企画展「旅する楽器——南アジア、弦の響き」を、2019年2月21日～5月7日の会期で開催し、期間中の関連イベントとして研究公演(1回)とギャラリー公演(3回)を実施した。

沙漠のムスリム女性の暮らしと半世紀の変容に関する企画展

提案者：西尾哲夫

中東における文化人類学的・人文地理学的研究を切り拓いた先駆者である、文化人類学者の片倉もところによるサウジアラビア現地調査資料(写真ほか)ならびに収集による本館所蔵資料(民具・衣装ほか)と、現地での最新の調査結果にもとづくデータを中心に、物質文化に焦点を当てることで、この半世紀における沙漠環境や社会構造の変化に伴うオアシスでのムスリム女性たちの生活の持続と変容について検証した。

企画展「メキシコのアルテ・ポプラル：暮らし・商品・声」(仮称)

提案者：鈴木 紀

メキシコでは、先スペイン時代に開花したメソアメリカ文明が基盤となり、16世紀以降はヨーロッパ、アフリカ、アジアの文化が流入し、アルテ・ポプラルと呼ばれる独自のものづくりの伝統が生まれた。これには、先住民族が儀礼に用いる仮面から、観光用の工芸品、政治的メッセージを込めたストリートアートまで、多様な物が含まれる。企画展では、アルテ・ポプラルの特徴として①人々の日常生活が反映されていること、②商品として国内外で流通していること、および③人々の主張が表現されていることの3点に着目し、展示を構成した。

梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」 準備

提案者：小長谷有紀

初代館長であった梅棹忠夫(1920-2010)の生誕100年にあたる2020年を機に、梅棹アーカイブズとして整理されてきた資料、とりわけ近年研究費を用いて整理されてきた資料を中心に公開する。

企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」の巡回展

提案者：西尾哲夫

企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」を横浜ユーラシア文化館にて開催した。文化人類学者片倉もところによるサウジアラビア現地調査資料(写真ほか)ならびに収集による本館所蔵資料(民具・衣装ほか)と、現地での最新の調査結果にもとづくデータを中心に、物質文化に焦点を当てることで、この半世紀における沙漠環境や社会構造の変化に伴うオアシスでのムスリム女性たちの生活の持続と変容について検証した。

国立民族学博物館・国立科学博物館共同企画展「ビーズ——自然をつなぐ、世界をつなぐ」

提案者：池谷和信

本計画では、民博所蔵の標本資料を中心に活用して、世界における多様な素材で作られたビーズや社会的役割を持つビーズを展示した。これらをとおして、私たち人類ホモ・サピエンスの文化の特質を理解する機会となった。つまり今回の展示は、特定の地域の文化に焦点を当てたものではなく、地球上に普遍的にみられるビーズ

というものをとおして、「人類とは何か」という人類学の基本課題を正面から追求したものである。

国立民族学博物館コレクション「世界の衣装」

提案者：上羽陽子

国立民族学博物館所蔵の標本資料を活用し、写真資料や映像資料とともに世界の衣装の多様性と豊かな手仕事の世界を紹介する展示を2019年11月13日(水)～25日(月)まで、阪急うめだ本店「阪急うめだギャラリー」において実施した。

特別展開連企画展「見てわかること、さわってわかること——ユニバーサル・ミュージアム再考」(仮称)——

提案者：廣瀬浩二郎

本プロジェクトは2019年度途中での提案・採択だったため、実際に企画展準備に取り組んだのは2020年1月～3月の3か月間である。展示の実施に向けて、主に以下の4点を中心に活動した。①民博所蔵資料の選定(出展の可否について、各展示プロジェクトチームと調整)。②協力アーティストの作品内容(大きさや個数)の確定。③展示レイアウト、設計図面の検討。④一部の出展予定資料の撮影(図録・リーフレット掲載用)。

4) 博物館社会連携分野

知的障害者の博物館活用モデル構築に関する実践的研究

提案者：信田敏宏

昨年度に引き続き、知的障害者を対象とした試行的ワークショップ「みんなく Sama-Sama 塾」を開催した。知的障害者にとっても分かりやすく、楽しめる博物館の活用モデルを目指し、知的障害者が博物館を活用する際に必要とされる支援や改善点などを検討しながら実施した。

小・中学生用パンフレット改訂

提案者：樫永真佐夫

本館展示場新構築以前の2009年に作成されたパンフレットは、展示場の現状との間に齟齬が生じていた。そのため内容を精査し、小・中学生の利用者による主体的な学びと展示場の有効利用を促すための新しい情報を追加するなど、改訂を行った。

3. 文化資源計画事業

文化資源計画事業は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、継続性の高い事業、または計画的に実施する事業で、3つの分野(資料関連、展示、博物館社会連携)に分けられる。

1) 資料関連分野

標本資料の撮影等業務

本事業は、標本資料を研究、展示、情報提供等に有効利用するために、標本資料の撮影、計測、及びそれらに付随する業務をおこなうものである。標本資料の正確かつ詳細な画像情報を記録し、標本資料を有効に活用するための基礎的データの蓄積を目的としており、大学共同利用機関として資料に付随する情報の公開等に供するデータを作成する基盤的な事業である。

研究資料整理・情報化及び利用管理業務【標本資料関連】

本事業は、本館が所蔵する標本資料に関する情報の作成及び資料の整理等を行うとともに、当該資料に関する情報サービス、展示準備・展示運営のための資料管理及び情報の作成・管理等を行うものである。

研究資料整理・情報化及び利用管理業務【データベース関連】

本事業は、本館が所蔵する標本資料に関する情報の作成及び資料の整理等を行うとともに、当該資料に関するデータベース掲載情報の作成、更新作業及び「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」に係るデータ整理業務を行うものである。

有形文化資源の保存・管理システム構築

本館所蔵資料の保存と活用の両立を目的に、その保存・管理システムを緊急度に応じて構築することを目的としている。本事業では、①有形文化資源の保存対策立案：総合的有害生物管理(IPM)の考えに基づいた生物被害の防除・殺虫対策、②資料管理のための方法論策定：博物館環境調査の分析および収蔵資料の収納改善と再配架、③資料の科学的調査の推進、これら資料管理に関わる研究と事業を、総合的かつ長期的視点のもと、

企画、実施、統括した。

トーテムポールの新規製作

2017・2018年度の台風により屋外に展示してあるトーテムポールの両翼が破損したため、新たなトーテムポールを製作することとなった。2018年度に、カナダ・バンクーバー島の先住民クワクワカワクウのアーティスト、ビル・ヘンダーソン氏にトーテムポールの製作を依頼し、2020年2月に完成した。完成したトーテムポールは、3月に日本へ向け発送された。

標本資料「東北六県の伝統こけしコレクション」の寄贈受入

本事業は、東北六県の伝統こけし232点の寄贈を受け入れるものである。このこけしコレクションは、寄贈者が平成元年から3年間にわたり、「伝統こけし工人手帳」をガイドブックに、東北六県の各工人工房を訪ね、その工人の自薦の「こけし」を収集したもので、おおよその点数の収集地、工人がリストにまとめられている。散逸を防ぐ意味でも、また個人が所有するよりも、公共に資するのが良いと考え寄贈を望まれた資料群である。

標本資料「日本の備中神楽面」の寄贈受入

本事業は、岡山県で使用されていた神楽の面9点の寄贈を受け入れるものである。この神楽面は、寄贈者の父が収集したもので、40～50年前のものと考えられる岡山の備中神楽面である。

標本資料「インドネシア刀剣」の寄贈受入

本事業は、第二次世界大戦期に今日のインドネシア・タラカン島にて従軍した故岡田清氏が、1975年に戦没者遺骨収集団の一員としてインドネシアに赴いた際にインドネシア政府の軍関係者より贈られた刀を民博が受け入れ、東南アジア標本資料および本館の刀剣類の標本資料の充実を図るものである。

標本資料「ブータン刀剣」の寄贈受入

栗田靖之民博名誉教授が所蔵していた、ブータンのダシヨという称号を与えられた人が腰に提げる刀、中国リス族の鉞、ネパールの刀剣(ククリ)等の寄贈を受け入れ、標本資料として整備した。刃渡りの長い刀剣類、とくにダシヨの刀は、国内で入手することが困難であり、稀少な資料が展示や共同利用で活用できるようになった。

標本資料「インドの仮面劇チョウで使用される面」の寄贈受入

インド音楽・芸能の研究者である田中多佳子氏(京都教育大学教授、民族音楽学者)が、1984年にインド、デリーで入手したチョウ(Chhau)仮面劇に用いる仮面1点を寄贈資料として受け入れた。

標本資料「フィリピン華僑の食物入れ用手提げ籠」の寄贈受入

本事業は、1980年までにフィリピンの首都マニラの華人たちが使用していた食物入れ用手提げ籠を受け入れるものである。今日では入手が困難な資料で、近現代の東南アジアと華僑文化を理解するのに重要な資料であり、特にフィリピン華僑の標本資料が不足している本館にとって貴重な資料である。

標本資料「中国のプイ族の絞り染め」の寄贈受入

本事業は、現代中国の絞り染めの文化を理解するのに重要なものであり、特に中国のプイ族の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。この絞り染めの画は、貴州省黔南プイ族ミャオ族自治州龍里洗馬店平坡村在住の女性(彦群花)による手作りのものであり、プイ族の人びとが笛の伴奏の下に歌ったり、踊ったりする様子を表現するものである。

標本資料「中国の女兒用衣装」の寄贈受入

本事業は、1980年代に中国で入手した女兒衣装を受け入れたものである。今日では入手が困難な資料で、現代中国の庶民の服飾文化を理解するのに重要なものであり、特に中国地域の子どもの標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の麵棒」の寄贈受入

本事業は、中国安徽省宿州市の董欣榮(主婦)が1990年代後半から使用していた麵食の道具である麵棒を受け入れたものである。ナツメの木材よりつくられたこの麵棒は、入手が困難である。現代中国の庶民の暮らしと食文化の変化を理解するのに重要なものであり、特に中国地域の食文化の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「タイの彫像『象』」の寄贈受入

本事業は、タイのランナー・タイ地域の芸術家が子象の塑像に彩色した彫像を受け入れるものである。タイの文化においては象という動物が大切な象徴であり、それを現代のアーティストが表現した本資料を受け入れることで、当館の象文化に関する資料の充実をはかることができる。

標本資料「中華人民共和国成立五十周年切手」の寄贈受入

本事業は、1999年に中華人民共和国建国50周年を記念して中央民族大学より発行された天安門、北京市内の風

景及び56の民族衣装からなる記念切手のセットを受け入れたものである。今日では入手が困難である。現代中国の国家と社会を理解するのに重要なものであり、特に切手の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「毛沢東小型銅像」の寄贈受入

本事業は、2000年代に湖南省韶山市韶山村で製造された毛沢東小型銅像を受け入れたものである。中華人民共和国初代指導者である毛沢東生誕110周年記念につくられた観光みやげ品であり、今日では入手が困難である。現代中国の国家と社会を理解するのに重要なものであり、特に近代社会の指導者に関わる標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「北米太鼓関連ポスター」の寄贈受入

提案者（寺田吉孝）が北米音楽文化研究の一環として収集したタイコ（和太鼓）演奏グループのポスター28点を寄贈受入した。本資料は民博特別展「越境する民族文化——いきかう人びと、まじわる文化」（1999年9月9日～2000年1月11日開催）の準備調査中に収集した資料である。

標本資料「日本の押し絵屏風」の寄贈受入

本事業は、押し絵屏風2点の寄贈を受け入れるものである。押し絵は、布細工による貼り絵の一種であり、近年では製作者も減少している。本資料は、祖母の後を継ぎ「押し絵の会」を主催していた寄贈者が制作した押し絵屏風で、祖母の作品は1988年に本館に寄贈されている。布の入手や作画が困難になってきたことから会の運営を断念することとなったが、江戸時代から続く押し絵（特に浮世絵）を残したいと思い寄贈を望まれたものである。

標本資料「沖縄の身分証明書」の寄贈受入

本事業は、戦後アメリカの統治下にあった沖縄在住の寄贈者の身分証明書（身分証明書、旅券、予防接種記録等）10点の寄贈を受け入れるものである。戦後、アメリカの統治下にあった沖縄で発行された身分証明書と、沖縄返還後に日本政府により発券された旅券は、当時の沖縄在住の人々の社会的立場や様相等が窺える資料として、戦後史の研究に資するものと考えられる。

標本資料「山形県のやっさら人形」の寄贈受入

本事業は、山形県遊佐地区直世地区につたわる「やっさら人形」の寄贈を受け入れるものである。やっさら人形を流し雛として川に流す「やっさら藁人形流し」は、2019年現在では山形県直世地区の中川及び樽川の2地区でしか行われていない。本資料は、寄贈者が2015年頃に、流し雛行事参加者の農家の方が自作されたものを譲り受けたもので、伝統文化を伝える資料として、本館の人形や日本の伝統行事に関係する資料の充実を図るものとして貴重である。

標本資料「マッチ箱・駅弁・たばこ・乗車券・入場券のパッケージのスクラップブック」の寄贈受入

旧蔵者が、昭和10年頃から平成年にかけて収集したマッチ箱・駅弁・たばこ・乗車券・入場券などを添付し整理したスクラップブックを受け入れる。同資料は関西在住の旧蔵者が通勤通学や旅行の際に各地で自ら収集したもので、当時の学生や労働者や都市生活者の生活の様々な側面を具体的にうかがうことができる。

標本資料「中国ナシ族のトンパ文字」の寄贈受入

本事業は、雲南省北部ナシ族に伝わる、象形文字の一種であるトンパ文字による手書きの対句である（「布鳥啼叫、伝来佳音」）を受け入れたものである。世界で唯一の「生きた象形文字」とされ、ナシ族の中でもごく少数の「トンパ」と呼ばれる司祭によってのみ受け継がれているこのトンパ文字は、今日では入手が困難な資料でもあり、現代中国の少数民族を理解するのに重要なものであり、特に象形文字の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の春聯」の寄贈受入

本事業は、総研大の韓国人留学生である金桂淵氏が2010年に韓国大邱の華僑会館で収集した春聯を受け入れたものである。今日では入手が困難な資料であり、韓国華僑の暮らしを理解するのに重要なものであり、特に海外華人の春節の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の文鎮（霸王項羽）」の寄贈受入

本事業は、2016年に楚の霸王項羽（232-202 BC）が漢の劉邦に敗れ、最期を迎えた場所である安徽省和県烏江鎮で入手した文鎮の寄贈を受け入れるものである。文鎮は、記念品として烏江鎮にある霸王祠で販売され、その両面は、項羽の略歴と司馬遷の『史記・項羽本紀』の中で記載された項羽のことが明記されている。中国人の歴史記憶を理解するのに重要なものであり、特に文鎮の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国のボールペン」の寄贈受入

本事業は、岳飛（1103～1141年）が埋葬されている浙江省杭州市西湖近くの岳王廟で収集したボールペンを受け入れたものである。ボールペンの表には、彼の背中で刺された「尽忠報国」と岳飛自筆の「還我山河」の文字が明記されている。中国人の歴史記憶を理解するのに重要なものであり、特に中国地域の文具の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の陝北漢画像石拓本」の寄贈受入

本事業は、2003年に中国の陝西省北部榆林市で収集した、榆林市米脂県官庄で出土された漢代の墓の画像石拓本を受け入れたものである。画像石は三つの部分からなり、上は孔雀（朱雀）、中間は幕が張ってある馬車に乗る貴族の女性、下は馬を飼育する御者、まぐさ桶と木が描かれている。今日では入手が困難な資料であり、漢代の美術史および当時の生活史を理解するのに重要なものであり、特に古代拓本や墓の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国陝西省北部の切り紙コレクション」の寄贈受入

本事業は、2003年に中国の陝西省延安市で収集した、陝西省北部切り紙の第一人者である白鳳蓮女史（1931年生まれ）の切り紙作品のコレクションを受け入れたものである。今日では入手が困難な資料であり、中国の切り紙の伝統文化を理解するのに重要なものであり、特に中国西北地域の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の書籍『毛主席語録』他」の寄贈受入

本事業は、中国瀋陽で使用していた文化大革命時期の学習資料を受け入れたものである。当時、小中高校、大学、さまざまな民族、職場や農村においてもっとも広く使用された、『毛沢東語録』（1963年発行）、『学習毛主席著作輔導読物』（「為人民服務」、「愚公移山」、「紀念白求恩」を収録した読本1967年発行）、『毛主席的五篇哲学著作』（1970年発行）の三種類である。これらは、当時の学習資料としてのみならず、さまざまな儀式等においても使用されるものであり、今日では入手が困難な資料である。近代中国の社会変化を理解するのに貴重な資料である。

標本資料「中国福建省の斗美宮（三王府）の護符」の寄贈受入

本事業は、福建省石獅市祥芝村の「斗美宮」により発行され、2003年にSARSが流行したときに使用されていた護符を受け入れたものである。護符には、守り神の王爺や、毛沢東の詩歌「送疫神」が印刷されている。今日では入手が困難な資料である。福建南部、台湾および東南アジアで篤く信仰されている王爺信仰の歴史とその伝播を考えるのに貴重な資料である。

標本資料「中国福建省の斗美宮（三王府）の靈籤解説書」の寄贈受入

本事業は、2010年に福建省石獅市祥芝村の「斗美宮」で収集された神籤の解説書を受け入れたものである。この神籤の解説書は、手書きのものであり、「斗美宮」で長年聖職者によって使用されていたものであり、今日では入手が困難な資料でもある。現代中国の宗教的実践を理解するのに重要なものであり、特に南部中国および東南アジアの王爺信仰の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の孔子肖像玉ペンダント」の寄贈受入

本事業は、2010年に福建省泉州市、学問の神様である孔子を祀る孔子廟（別名、文廟）で収集した孔子肖像玉ペンダントを受け入れたものである。この孔子肖像玉ペンダントは、孔子廟によって縁起物、お守りとして発行されたものである。社会主義体制の中国において、儒教の創始者である孔子が一般の人々や宗教施設によってどのように認識されているのかを考える上で、貴重な資料である。イデオロギーの規制が厳しい今日では入手が困難な資料でもあり、本館で所蔵する意義がある。

標本資料「中国の紙銭セット」の寄贈受入

本事業は、タイのバンコクで収集されて、タイの華人が使用する死者供養の紙銭セットを受け入れたものである。この紙銭セットは、死者がああ世で不自由なく暮らすために用意された航空券、パスポートや、通帳、クレジットカード、テレホンカードを含む。今日では入手が困難な資料であり、タイの華人を考える上で、貴重な資料であり、特に現代の死者供養の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の字牌（玩具）」の寄贈受入

本事業は、中国地域の伝統的遊びの一つである字牌を受け入れたものである。本資料は、2010年に福建省泉州で収集され、泉州海外交通史博物館長である王連茂の母親（当時93歳）が、長年自宅で遊んでいた玩具である。今日では入手が困難な資料であり、伝統的中国的娯楽文化を考える上で、貴重な資料であり、特に娯楽の標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の新聞『石獅僑報』・『石獅日報』」の寄贈受入

本事業は、華僑の故郷と見なされている福建省南部で発行された地方新聞紙である『石獅僑報』（2012年3月15日）、『石獅日報』（2012年3月19日）を受け入れたものである。本新聞は、華僑の専門新聞であり、2012年に福建省石獅市で収集したものである。中国福建地元の人々と東南アジアの華僑との文化的、経済的なつながりを考える上で、貴重な資料であり、本館で所蔵する意義がある。

標本資料「中国の泉州海外交通史博物館発行の記念切手・絵葉書・しおり」の寄贈受入

本事業は、中国唯一の航海と海のシルクロードを展示する国立泉州海外交通史博物館が発行した記念切手・絵葉書・しおりを受け入れたものである。資料は、マルコ・ポーロの『東方見聞録』、と14世紀のイブン・バットゥータの『三大陸周遊記』で、「世界最大の港」として記された国際的港である、泉州海外交通史博物館で2010年に収集したものであり、当時、遠洋航海に使用された船、ヒンズー教の神々やキリスト教天使の石彫刻などが記録されている。中国福建と、南アジアや世界とのつながりを考える上で、貴重な資料であり、特に海のシルクロードの標本資料が不足している本館にとって、貴重な資料である。

標本資料「中国の経典『道德経』」の寄贈受入

本事業は、福建省泉州市の道教的施設が発行された道教の経典である『道德経』を受け入れたものである。資料は、2010年福建省泉州市道教の寺院で収集した老子の道德経のテキスト全文及びその現代語による解釈を含む。『道德経』は、春秋時代の思想家老子が書いたと伝えられる本書は道家の代表的書物であり、社会主義体制の中国において、この道教的の古典がどのように利用され、解釈されているのかを考える上で、貴重な資料である。イデオロギーの規制が厳しい今日では入手が困難な資料でもあり、本館で所蔵する意義がある。

標本資料「中国の銅製やかん」の寄贈受入

本事業は、内モンゴル地域で使われている伝統的な飲食道具である銅製やかんを受け入れたものである。本資料は、2017年内モンゴル自治区フフホト市で収集したものであり、このようなやかんは農耕民との茶馬交易を営んできた遊牧民によって、湯沸かしや水やお茶の容器として使われてきた。機械による大量生産の今日、この地域では、このような職人による手作りの銅製やかんがまだ見かけられる。今日では入手が困難な資料であり、現代中国のモンゴル族の暮らしを理解するのに貴重な資料である。

標本資料「米国先住民ホピ製アート3点（絵画、土器壺、スタンドグラス）」の寄贈受入

2019年4月から7月にかけて科研費で渡米した際に、申請者が先住民ホピのアーティスト複数名から民博への寄贈を前提として自作アート作品を託された。本計画事業により、それら3点を民博に寄贈する手続きを完了させた。寄贈した3点は、絵画1点（Ed Kaboutie作『A Tewa Migration Story』）、土器壺1点（Gwen Setalla作『Mimbres Nectar Gatherers』）、スタンドグラス1点（Ramson Lomatewama作『Mimbres Connection』）である。これらは、2017年8月28日から9月2日まで米国ニューメキシコ州立大学附属博物館などで開催した国際ワークショップの成果として制作された。

標本資料「ソマリの容器、屋根資料」の寄贈受入

本事業は、現在本館にはほとんど収蔵されていないソマリの民族資料として、ミルク容器・食物入れ・屋根を受け入れるものである。ソマリは、ラクダ遊牧民として知られる。今回の受入によって、食物入れやミルク容器から遊牧生活の一部を知ることができ、またこれまでほとんど収蔵されていなかった民族・地域の資料の充実を図ることができる。

標本資料「ペルーの帽子」の寄贈受入

本事業は、ペルー南高地で使用されていた女性用帽子1点の寄贈受入をおこなうものである。形と装飾から判断して、ケチュア語話者に民族集団カバナが使用するものと推測され、本資料を受け入れることで、南米アンデス地方の帽子資料の充実を図ることができる。

標本資料「日本のふくさ」の寄贈受入

本事業は、結納の際に使用されたふくさ等10点のふくさの寄贈を受け入れるものである。本資料群には、寄贈者の両親が結婚された際に実際に使用した結納の品の上にかぶせる「ふくさ」3点を含む。1929～1930年前後に入手された品で、鳳凰柄の大小（男性用、女性用）と、鶴亀柄の計3枚、ふくさを収める木箱が付属されており、経年しているにも関わらず保存状態がきわめて良好で、織物としての資料価値が極めて高い資料である。

標本資料「ミャンマーのぞうり（パナツ）」の寄贈受入

本事業は、ミャンマーの男性用ぞうり（パナツ）1点を受け入れるものである。本館は、ミャンマーで用いられる衣装ロンジーを複数所有しており、それに合わせて用いられるパナツも何点かあるが、男性がフォーマルな場で用いるパナツはなかった。今回あらたに寄贈を受けたことで、ミャンマーの伝統的衣装のバリエーションを把握できるようになる。

標本資料「大韓民国の衣服」の寄贈受入

本事業は、大韓民国で使用されている改良韓服や学生服、校章など29点を受け入れるものである。韓国の現代の改良韓服も学生服も、本館展示「朝鮮半島の文化」にて展示されている。校外学習で訪れた中高生やその関係者から、自分たちに身近な制服にも地域による差があることがわかったと好評を得ており、共同利用にもより深く寄与できる。

標本資料「ケニアの盾」の寄贈受入

本事業は、アフリカ・トゥルカナ族の戦闘用盾1点を受け入れるものである。アフリカンバッファローの革で作られた物は現在では入手困難であることから、貴重な資料であり本館のアフリカ関係資料の充実を図ることができる。

標本資料「南アジアの弦楽器および付属品」の寄贈受入

2019年度企画展「旅する楽器-南アジア、弦の響き」に借用した楽器および楽器の付属品の中から計20点の寄贈を受け入れた。内訳は、人類学者の田森雅一氏が1980年から1990年代にかけて収集した弦楽器とそれらの付属品18点、およびインド音楽の演奏家ガーヤトリ・カセバウム氏の私蔵資料2点である。

標本資料「アイヌの工芸品」の勘定科目替え受入

2020年開催の特別展「先住民の宝」に展示するために、消耗品として購入したアイヌの現代の工芸品（財布、IDカードホルダー、ペンケース、小銭入れ）について、展示終了後も活用できるよう、標本資料への勘定科目替えをおこなった。

標本資料「サーミの工芸および観光産業資料」の勘定科目替え

特別展「先住民の宝」に向けた2019年10月の現地調査において、庄司博史民博名誉教授と提案者が入手した、ノルウェーとフィンランドのサーミ工芸資料と観光産業資料（消耗品）を、標本資料として受け入れた。資料の多くは現地でしか入手できず、付帯情報も充実している。現代サーミの生業や先住民運動を推し量る貴重な資料として、展示や共同利用で活用できるようになった。

2) 展示分野

コレクション展示 「日本から遠く離れて——朝枝利男の見たガラパゴス」

本館所蔵の映像音響資料である朝枝利男コレクションにもとづく展示を開催した。朝枝利男とは、アメリカの学芸員で画家・写真家・剥製師でもあった人物であり、本展示では、その中でもアメリカの探検隊に同伴して撮影したガラパゴス関係の写真を中心に、彼のアルバム・探検日記・魚類の水彩画について紹介した。

新型コロナウイルス感染のさらなる拡大の防止のため、国立民族学博物館が臨時休館されたことに伴い、当初予定していた期日（2020年3月24日（火））より早い2月27日（木）に閉会した。

3) 博物館社会連携分野

ボランティア活動支援

国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体であるMMP（みんなくミュージアムパートナーズ）の活動支援をおこなった。

ワークショップの実施ならびにワークシートの運用

ワークショップ実施をとおして利用者からの様々な意見や要望を聞くことができた。また、社会連携事業検討ワーキングにおいて作成した6種類の新規ワークシートは、みんなく展示場におけるあたらしい資料の見方を提示できる内容となった。

音楽の祭日2019 in みんなく

社会連携活動の一環として、出演者229名（28組）が特別展示館およびエントランスホールにて演奏する音楽イベントを開催した。

みんなく「エチオピアをまとう——アムハラの装い」の制作

本館の教育機関向け貸出キット「みんなく」に関して、アフリカ地域を知りたいという教育現場からの要望が多いため、エチオピアの生活文化に焦点をあてたパックを新たに制作した。2019年度運用開始に向け準備を進めていたが、2018年6月18日に発生した大阪府北部を震源とする地震により、制作作業に必要な燻蒸庫（カポックス）が一時停止したため運用開始時期を半年延長した。

カムイノミ及び「アイヌ古式舞踊」演舞の実施

当館が所蔵するアイヌの標本資料に対して、安全な保管と後世への確実な伝承を目的に、祈りの儀式（カムイノミ）をおこない、あわせてアイヌ古式舞踊の演舞を、一般公開で実施した。初の試みとして、本館1階エン

トランスホールに大型モニターを設置して、カムイノミと古式舞踊の演舞の中継映像を流した。また、工芸品製作の実演「アイヌ工芸 in みんなく」をおこなった。

みんなく改訂版制作（アイヌ文化にであう）

学校機関や各種社会教育施設を対象に貸出を行う学習キット「みんなく」は、バック制作後10年を耐用年数とし、また、時代に即した内容にするためにも改訂を行う必要がある。2019年度は内容物についての新規制作と、それらについての情報の更新等の最終調整を行った。2020年4月より運用を開始することができる準備が整っている。

情報関連事業

情報関連事業は、2016年度まで文化資源関連事業として実施してきた事業の一部を再編し、2017年度から実施している事業である。本事業は、「情報プロジェクト」「情報計画事業」からなり、情報運営会議が募集し、選定する。2019年度の情報関連事業の概要は以下のとおりである。

1. 情報プロジェクト

情報プロジェクトは、本館又は大学等関連諸機関が所有する学術資源の情報化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、本館専任教員の提案に基づき、実施する研究プロジェクトである。

情報プロジェクトは、3つの分野（取材・収集、展示情報化、情報化）に関わる研究開発、または研究成果の展開を目的とし、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元を前提としている。

その選定においては、提案者が作成した提案書に対して館外の研究者や専門家から意見を聴取している。その意見書と提案者が行うプレゼンテーションに基づいて、情報運営会議の委員が審査し、委員の審査結果と評価指標を基に情報運営会議での審議を経て採択している。

1) 取材・収集分野

●エチオピア、ティグライ州の女性の門付け儀礼「アシェンダ」の映像民族誌制作

提案者：川瀬 慈

映像民族誌「アシェンダ！エチオピア北部地域社会の女性のお祭り」の編集を行った。編集過程において、館内の教員、館外の有識者と構成について議論を重ね、最終的に37分の作品にまとめた。

●みんなく映像民族誌「オアシス都市の暮らし——ウズベキスタン・サマルカンドの食文化」の制作

提案者：寺村裕史

ウズベキスタン共和国のサマルカンド周辺において2018年度に映像取材・撮影を実施した成果を素材に、みんなく映像民族誌「オアシス都市の暮らし——ウズベキスタン・サマルカンドの食文化」として約58分の長編映像1本を制作した。

●みんなく映像民族誌「王の祭り——仮面の王国・マンコン、カメルーン高地」の制作

提案者：飯田 卓

研究公開利用の必要から仮編集されていた民族誌映像を、みんなく映像民族誌の一編として公開するため、映像と情報を確認点検し、あらためて映像民族誌「王の祭り——仮面の王国マンコン、カメルーン高地」として完成させた。

2) 情報化分野

●チベット宗教図像（白描画）データベース作成プロジェクト

提案者：三尾 稔

2015～2018年度に実施した共同研究『チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究』（代表者：長野泰彦）の成果公表の一部として、その結果を種々のレファランズと写真とともにデータベースとして整備し、共同利用に資する一助とした。

2. 情報計画事業

情報計画事業は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、計画的に実施する事業であり、所掌事務又は本館専任教員からの提案を基に、情報運営会議で実施するか否かを審議する。

1) 特別展・企画展パノラマ映像制作

- 特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」
- 企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」
- 企画展「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」
- コレクション展示「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」

2) ビデオトーク番組制作

- 「王の祭り——仮面の王国マンコン、カメルーン高地」
制作監修：飯田 卓、端 信行
- 「民博でのカムイノミ——2016年度『ミンパク オッタ カムイノミ』の記録」
制作監修：齋藤玲子

2-4 人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構総合人間文化研究推進センターは、2016年度より6ヵ年にわたり、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。基幹研究プロジェクトは、(Ⅰ)機関拠点型、(Ⅱ)広領域連携型、(Ⅲ)ネットワーク型(地域研究および、日本関連在外資料調査研究・活用)の、3類型から構成され、その研究成果については、出版、データベース、映像および展示の制作等を通じて、学界や社会に広く発信するとともに、大学における新たな教育プログラムとして活用をはかる計画である。

本館が担当しているプロジェクトは以下のとおりである。

●広領域連携型

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

みんぱくユニット「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」

代表者：日高真吾

1. プロジェクト概要

日本列島は、南北に長く、海岸部から平野部、そして中山間部に居住地が広がり、それぞれの環境に適応させた多様な地域文化を育んできた。一方で、これらの地域文化は、グローバル化する社会変容のなかで、地域特有の文化が見えにくくなり、表面的には日本社会全体で画一化されたような印象を私たちに感じさせている。また、多発する大規模災害からの復興で、コミュニティの再編を余儀なくされた地域は、それまで受け継がれてきた地域文化を再構築せざるを得ない状況になることもしばしば見られる現状がある。

そこで、本研究では、地域文化に着目し、さまざまな地域でどのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかの実情を明らかにする。また、これらの動向に人間文化研究がいかに貢献しうるのかを考察し、現在(いま)への社会貢献、未来への社会貢献を視野に入れた研究成果を目指す。

具体的には、「地域文化の再発見」、「地域文化の保存」、「地域文化の活用」という3つの視点から研究を展開する。その上で、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって地域文化を有意義な形で表象するためのシステムを構築する。

2. 研究概要(研究目的、基本計画における当該年度の目的)

地域文化の保存を軸とした研究活動として、寺社で管理される文化財の保全を目的とした環境調査を実施し、よりよい保存環境の創出のための収蔵庫等の運用について助言をおこなう。また、地域文化の活用をテーマに台北芸術大学との共同主催で国際フォーラムを蘭陽博物館で実施するとともに、多言語による展示解説が可能な電子ガイ

ドおよび展示ツールを秋に開催される ICOM 京都大会で展示する。

3. 年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

地域文化の保存を軸とした研究活動として、寺社で管理される文化財の保全を目的とした環境調査を大徳寺で実施し、蔵のなかでよりよい保存環境を創出するため、換気の時期について助言をおこなった。また、滋賀県日野町の馬見岡綿向神社祭礼渡御図絵馬の保存修復事業のなかで、蛍光 X 線分析による絵馬の顔料調査を実施し、修復支援をおこなった。地域文化の活用をテーマとした研究活動では、台北芸術大学との共同主催で国際フォーラムを蘭陽博物館で実施し、182名の参加を得た。本フォーラムでは、地域文化の活用について、日本の民俗学や台湾における地方学がどのような役割を果たすのか、また、実際に地域文化の活用を企画する博物館や市民がどのように連携できるのかについて、地域研究を専門とする研究者をはじめ、保存科学者や保存修復家、博物館学芸員や市民から、それぞれの実践活動について講演をおこない、効果的な地域文化の活用について議論を深めた。特に日本の文化財保護法の改正のポイントに観光資源として文化を積極的に活用する動きがあることについて、この改正が活用対象となる文化を生み出した地域にどこまで留意したものなのかを注視する必要があることを確認した。また、地域文化の活用について、地域文化の理解、保存、活用というプロセスを経ることで、地域振興や地域活性の可能性が広がっていくことを明らかにした。さらに、今年度は地域文化の活用を視野に、多言語による展示解説が可能な電子ガイドおよび展示システムを開発し、秋に開催された ICOM 京都大会で展示した。電子ガイドは、民博の展示場をフィールドにして、展示観覧をサポートする機器である。この機器は、展示資料にまつわる日本語の動画番組に国連公用語とハングル、繁体字の字幕をつけることで海外からの来館者が展示を楽しむための支援をおこなうものである。ICOM 京都大会でも展示するとともに、大会後、民博でのデモンストレーションをおこない、好評を得た。また、「Dr. みんぱこ」は健常者、視覚障害者、聴覚障害者が平等に展示資料の情報を得ることができる展示システムである。本システムは、「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」（人間文化研究機構）のなかで開発を進めた民博版モバイルミュージアム「トラベリングディスプレイシステム」を応用し、資料を触りながら、音声・字幕の入った解説映像から資料情報を得ることができるシステムである。次世代型のユニバーサルな展示システムとしての可能性について高い評価を得た。なお、本システムで応用した「トラベリングディスプレイシステム」は2019年9月13日に特許が認められ、登録されたことを追記しておく。

今後のプロジェクト推進方策

今年度にまとめた鹿児島大学大学院人文社会科学研究所との連携授業の報告書を2020年度に出版社から出版する予定である。また、2021年3～6月に各ユニットが参加して、民博において特別展「復興を支える地域の文化——3.11から10年」（仮題）を開催する予定である。さらに、2021年度にシンポジウムを開催し、報告書およびブックレットを刊行する予定で、これらを通じて研究成果を地域に還元する。

●広領域連携型

アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

みんぱくユニット「文明社会における食の布置」

代表者：野林厚志

1. プロジェクト概要

本研究の目的は、食の概念とその体系的な実践とを、文明社会を支える文化装置としてとらえ、食の社会的機能や歴史動態を解明し、食をめぐる社会的共存や衝突の原理を探究することである。

食は個体の生命を維持するための基本的な営みであると同時に、文化や経済と深く関わる行為としてとらえられてきた。一方で食糧資源の大量生産、大量廃棄、地球規模の人口増加と数億人にもおよぶ飢餓人口は、生態学的適応に乖離した現代社会の食の実態を物語っている。

こうした現代社会の食に関わる諸問題を超域的な視点で連結させるとともに、異なる視点をもつ研究分野の協働として、人類史の視点からの文明の盛衰と食との関係、生態学的アプローチからの食の機能等を議論に組み込み、文明社会の中における食の健全なありかたを探究していくことも本研究の狙いである。

なお、本研究プロジェクトは総合地球環境学研究所が中心となり推進する「アジアにおける『エコヘルス』の新展開」の一つのユニット研究として実施する。「エコヘルス」は、医療や疾病研究の視点で捉えられてきた「健康」を、社会変容と環境変化が急速に進む近現代における、暮らしや生態環境、生業、食生活等との関わりから探究し

ようとする新たな研究の視座である。

2. 研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

ユニットプロジェクトを構成する身体、生態、文化・制度の3つのグループで、それぞれの強みを活かした野外調査を実施するとともに、昨年度に構築したTEMS（The Eating Motivation Survey）のWeb調査ツールの試行を開始する。具体的な実施内容は、1）3つのグループがそれぞれの課題にしたがって、インドネシア、ラオス、日本、タイ、台湾、中国等のアジア各地域を中心に野外調査を行う。2）研究会の実施：年に2回、実施し、各グループの調査の進捗状況を確認し、研究進展のための意見交換を行う。また、各グループにおける研究会合を実施し、成果の共有をはかる。3）初年度に実施したアジア食論壇の成果刊行物の編集作業、昨年度に開催した国際シンポジウムの成果刊行論集の編集を行う。

3. 年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

【研究成果の公開・可視化】

- 『民博研究報告』特集「地域社会における食の構築」（査読付）を刊行した。
- 査読付き論文6本（前掲特集収録を含む）、査読なし論文・分担執筆論文2本等を刊行した。
- Association for the Study of Food and Society (ASFS) and the Agriculture, Food and Human Values Society (FFHVS) 2019の年次大会において、Critical Seafood Studies: Taste and Politics of Wilderness in the North Pacific.のパネルを組織し、研究発表を実施した。実施日と場所：June 28 2019, The University of Alaska Anchorage, Alaska
- ワークショップ「食資源の利用と移動ドメスティケーションの視点から」を実施した。
実施日と場所：2020年2月9日（日）13:00～17:00、国立民族学博物館第6セミナー室
- 大手町アカデミアにおいて、当該ユニットからの平成31年度NIHU若手研究者海外派遣プログラムにおける調査成果の一般公開として「食べるフィールド言語学——『Food×風土』の視点から」を実施した。
実施日と場所：2020年2月13日（木）18:30～20:15、読売新聞ビル

【若手研究者の人材育成の取組み】

- 修士課程、博士課程の論文作成の支援として「若手研究者セミナー」を開催し、ユニットに参加している修士課程、博士課程の学生ならびに助教の研究発表と議論を行った。本年度はこのセミナーの参加者のうち、修士論文、博士論文の提出を1名ずつ達成した（いずれも学位取得）。
実施日と場所：2019年11月16日（土）13:00～17:00、東京大学医学部
- 2019年度NIHU若手研究者海外派遣プログラムへ、機関の教員の推薦を行い、派遣プログラムによる海外調査を実施した。

今後のプロジェクト推進方策

COVID-19の感染対策のため、年度末に予定していたいくつかの海外調査を次年度以降に持ち越すことになった。世界的な状況を見ながらこれらに対応する必要がある、柔軟に計画を進めていく予定である。国際シンポジウム'Making Food in Human and Natural History'の成果論文集の編集を完了した。現在、Springer社と出版に関わる交渉を進めている。TEMS（The Eating Motivation Survey）のWeb調査ツールの試行については、TEMSのアンケート票開発者との連絡が遅延し、質問項目の使用の正式な許可が得られなかった。このため、ユニットで独自の調査票を開発する等の対応が必要である。中期計画前半に実施した国際シンポジウム（アジア食論壇）の成果はすべて刊行し、当初の研究計画は達成している。次年度以降はプロジェクト全体の成果を発信するための出版計画を進める予定である。

●ネットワーク型：北東アジア地域研究

北東アジアにおける地域構造の変容——越境から考察する共生への道

中心拠点「自然環境と文化・文明の構造」

代表者：池谷和信

1. プロジェクト概要

国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点は、民博館内の文化人類学・民族学およびその隣接分野の研究者、お

よび連携機関である国立歴史民俗博物館の考古学の研究者を中心に構成され、北東アジアを対象に、人とモノの移動と交流、政治及び経済のシステムの導入と影響に着目して、先史時代から現代に至るまでの長期的な時間幅の中で、自然環境と文化、文明の構造と変容の解明を目指している。

ここでの北東アジア地域とは、国・地域で言えばロシアのシベリア及び極東地域、モンゴル、韓国、北朝鮮、中国、日本に広がる空間を対象としている。従来は国家の枠組みにおいて研究が行われてきたが、これらの国・地域を横断的に捉える新たな試みである。

なお本拠点は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、鳥根県立大学北東アジア地域研究センター、早稲田大学総合研究機構現代中国研究所の各拠点とともに、中心拠点として本プロジェクトを推進している。

2. 研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

本プロジェクトは「北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道」という中心研究テーマを設定し、各拠点にて研究活動を行っている。国立民族学博物館拠点では、「自然環境と文化・文明の構造」というテーマを掲げ、本年度は、調査研究を継続するとともに、最終年度における成果出版を見据えつつ、これまでの調査の結果を踏まえて研究成果の公開を進めた。

3. 年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

国立民族学博物館拠点では、館内研究会（6回）、ハンガリーのツングース研究者を交えた国際セミナー、熊本県球磨郡五木村において自治体と共催で国内セミナーを開催した。また、ヒトと動物の関係学会・関西シンポジウムの共催、国立科学博物館における展示への協力を行った。

今後のプロジェクト推進方策

特にプロジェクトとしての最終的な研究成果の提示を意識していくことになる。各拠点が研究成果を共有していくとともに、当該分野でインパクトのある提示方法を模索していくつもりである。

研究を推進していくための連携についてであるが、感染症対策を考慮したうえで可能な限り、これまで通り拠点間の連携と、国外ネットワークのさらなる拡充、強化を図りたい。

また、これらの研究成果と国内外の協力関係を教育に生かしていくことも重要である。研究成果を大学教育の場や社会に還元していくことはもちろんのこと、国内外の研究機関との協力関係を若手研究者が研究するための資源として活用できるようにしておきたい。

●ネットワーク型：南アジア地域研究

グローバル化する南アジアの構造変動——持続的・包摂的・平和的発展のための総合的地域研究中心拠点「南アジアの文化と社会」

代表者：三尾 稔

1. プロジェクト概要

急速な経済発展とともに社会文化も大きく変わりつつある南アジア地域の現状は、わが国にとっても到底無視できるものではない。本事業は、人文・社会諸科学を中心に自然科学分野とも協働して、地域の一体性の強い南アジア全体の総合的・俯瞰的な理解を深める研究プログラムを推進している。このプロジェクトには、副中心拠点である国立民族学博物館をはじめ、京都大学（中心拠点）、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の6拠点が参加し、ネットワーク型の共同研究事業を行っている。

民族学博物館拠点では、南アジア発の人や文化・価値の環流状況の解明や社会変化の中でも維持される南アジア的な社会結合の特性の解明を通じ、地域固有の社会的レジリエンスの特徴を抽出し、グローバル化の中で生ずる社会的リスクへの対応という問題解決に貢献する。また、国際シンポジウムの開催、研究成果の英文叢書の刊行、国際学術協定の拡大、アジアにおける南アジア研究センター・コンソーシアムの構築など、拠点事業全体の国際化の推進を担っている。

2. 研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

本拠点の重点テーマは「南アジアの文化と社会」である。調査研究活動は、「南アジアにおける社会的レジエン

ス」を扱う研究ユニット1（「移動・移民」研究班と「社会変動と親密圏」研究班）、「環流する南アジア」を扱う研究ユニット2（「音楽・芸能」研究班と「布」研究班）、そして両ユニットを橋渡しする「宗教」研究班という研究体制を軸に、南アジアの文化と社会の動態の長期的・総合的観点からの解明に取り組んでいる。また副中心拠点として、国際シンポジウム主催や開催支援、事業の研究成果の英文叢書等刊行支援、国際学術交流協定関係の拡大、国際南アジア研究センター・コンソーシアムの構築など、拠点事業の国際化の推進を行っている。

【調査研究活動】

南アジアをはじめ海外の各地に拠点メンバーを派遣し、南アジア発の文化の動態やグローバル化の中で維持される南アジア社会のレジリエンスの実態を調査する。調査成果は、拠点独自で編集する成果論文集の刊行を念頭に、昨年度同様、「移民・移動」、「音楽・芸能」、「社会変動と親密圏」、「宗教」、「布」の5つのテーマ別研究会を年に数回開催するほか、拠点全体でユニット2のテーマ「環流する南アジア」に関する合同研究会を1回開催して議論を深め、メンバー間で知見の共有を図る。また、外国人研究者を招聘したMINDAS-South Asia国際セミナーを複数回開催する。さらに、研究交流協定を結んでいるエジンバラ大学との研究協同を推進するため、拠点メンバーを派遣して研究発表の機会を提供し、今後の共同的研究の発展に関して意見交換を行う。

国際的な南アジア研究センター間の連携やネットワーク化を目指して2016年度に発足させたACSASの第3回国際シンポジウムをシンガポール国立大学と共催（11月）し、日本から研究者を派遣して研究発表の機会を提供するとともに、シンポジウム後に行う運営会議で今後の共同的研究ネットワークの発展に関して意見交換を行う。また12月には、龍谷大学と京都大学との共催による第11回INDAS全体国際シンポジウムを開催していく。

【研究成果の公開・可視化】

(1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

- ① 第1回ACSAS（2017年度）の成果をWorld Scientific社（シンガポール）から刊行し、第2回会議（2018年度）の成果の刊行に向けた作業も進めた（韓国外国語大学南アジア研究センター発行の学術雑誌Journal of South Asian Studiesの特集号として刊行予定）。
- ② 2018年1月にネパール・カトマンズで開催したINDAS South Asia/Martin Chautari共催の国際シンポジウム（第9回INDAS全体国際シンポジウム）に関する成果論集の取りまとめ・編集作業を引き続き支援し、年度内にRoutledge社から刊行を目指した。
- ③ INDAS-South Asia全体および各拠点が中心となった英文の研究成果に対して校閲の補助を行った。

(2) 教育プログラム等

- ① 国立民族学博物館と大学の連携に向け、主に関西圏の大学で拠点メンバーがそれぞれ担当する授業等において、同館の活用方法および南アジア展示に関する解説を行い、南アジア地域の理解を促した。
- ② 社会人向けセミナー等への出講を積極的に行い、南アジア地域に関する研究成果の普及に努めた。
- ③ 南アジア研究の若手研究者育成の重要な機会となっている「南アジア研究集会」の第52回大会を共催し、本拠点の「布」班の研究成果公開の一環とするとともに、研究集会で若手研究者に研究発表や研究交流の機会を与え、研究者育成を促進した。

(3) 展示等

- ① 国立民族学博物館の南アジア展示コーナーに関して、「躍動する南アジア」の現在を念頭に置きつつ、随時展示替えや一部改修を行った。
- ② 本拠点「布」班を中心として企画を進めている、2021年度開催予定の企画展開催の準備を支援した。
- ③ 同館に寄贈されたブータン民族資料の調査とデータベース化を支援し、南アジアの文化と社会に関するモノ資料の更なる充実を図った。

【研究プロセスの国内外に向けた情報発信】

拠点が運営するホームページからの情報発信を積極的に進めるとともに、本プロジェクトの国際化をさらに推進すべく、英文情報ページの充実を図った。

【若手研究者の人材育成の取組み】

拠点が主催する個別・合同研究会等で博士後期課程・PDレベルの若手研究者に研究発表の機会を積極的に与え、研究ネットワークの拡充を図る。また若手研究者のフィールドや国際学会への派遣に努め、調査・研究活動を支援する。これらを通じて若手研究者の研究能力の育成に取り組んだ。

3. 年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

【調査研究活動】

本拠点メンバーの中から計11名の研究者をインド（ムンバイ、ラージャスターン、グジャラート）、スリランカ、シンガポール、アメリカ、フランス等に派遣し、南アジア発の文化の動態やグローバル化の中で維持される南アジア社会の実態について、個別の事例を比較検討するために現地滞在調査を行った。最終年度の成果発信に向けて、各々の研究の進展に貢献した。

昨年度に引き続き、研究ユニット1「南アジア社会におけるレジリエンス」を「社会変動と親密圏」「宗教」「布」、研究ユニット2「環流する南アジア」を「音楽・芸能」「移民・移動」という各班にわけ、具体的なテーマに絞った個別の研究会を計7回（計44名が参加）と各班を統合した合同研究会を1回、国際セミナーを2回、本拠点独自の成果論文集の出版（2021年度刊行予定）に向けた問題意識の共有と議論をさらに深めた。拠点全体としての研究活動の一体性が増す効果が得られた。（3月7日の宗教班研究会は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により延期）

本プロジェクトの国際化を担う当拠点の活動として、国際的な（特にアジア圏）南アジア研究センター間の連携やネットワーク化を目指して、2016年度に発足させた ACSAS の第3回国際シンポジウムを国立シンガポール大学と共催で開催し（シンガポール、11月22・23日）、発表者をプロジェクト内から公募で募り、4名の研究者を派遣して研究発表を行った。また、シンポジウム後に開いたコンソーシアム運営会議において、研究成果の刊行や共同的研究ネットワークのさらなる発展に関して意見交換を行った。

南アジアのグローバルな重要性が高まるなかで、アジア諸国には南アジア（またはインド）研究センターが次々に設立されつつあるが、各研究センター間を横断した連携は皆無に等しかった。本コンソーシアムは南アジア研究の厚い蓄積を有する日本を基軸として、アジアにおける南アジア研究の連携を図り、欧米によるコロニアル/ポストコロニアルな枠組みとは異なる関係を育んできたアジア諸国の歴史的経験に立脚した南アジアへの視点を新たに確立することで、南アジア研究の国際的な活性化を狙う特色がある。運営面では、第1期事業以来ネットワーク型地域研究の経験を積み重ねてきた本研究プロジェクトが主導し、とくに本プロジェクトの国際化を担う国立民族学博物館拠点がハブとしての役割を果たし、参加各国持ち回りでのシンポジウムの開催やその成果論文集の編集、さらにはメーリングリストを通じた情報共有などを行って、アジア圏を中心に本プロジェクトの存在を広く海外に発信することに貢献している。

英国・エジンバラ大学南アジア研究センターとは第1期事業以来研究交流協定を結び、研究者を相互に派遣して国際セミナー等を開催してきたが、2020年5月に協定の期限を迎える。そこで先方の代表と交渉して協定の継続について原則合意する一方、来年度本拠点の構成員の派遣に伴う共同的研究の実施についても意見交換を行った。

くわえて、第11回 INDAS 全体国際シンポジウム（龍谷大学大宮学舎開催、12月14・15日）を龍谷大学拠点および京都大学拠点との共催で実施し、拠点メンバーが企画・運営にあたり、メンバーの中から2名が発表を行った。全体集会の企画・運営・成果において、拠点も一定の貢献を果たすことができた。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に外国人研究員（4～7月）として来日していたインド人研究者を本拠点主催の国際セミナー（6月20日）に招へいし、独立運動期のインド社会学の言説構築に関して知見を共有した。さらに日本とバングラデシュの国際結婚カップルに関するドキュメンタリー映像作品を制作したバングラデシュ人研究者を、本拠点主催の国際セミナー（10月13日）に招いて、同映像の上映と日本のバングラデシュ移民に関する知見を共有した。これらを通じて、拠点の国際的ネットワークの深化に貢献した。

【研究成果の公開・可視化】

(1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

「報告書・成果論集」

2018年1月にネパール・カトマンズで開催した第9回、2019年12月に龍谷大学で開催した第11回の INDAS 全体国際シンポジウムの英文での成果論集を Routledge 社から刊行する予定であり、編集作業を進めた。第9回会議の成果の刊行は、2020年度になる。なお、同出版社は海外の大学・研究機関でも高く評価されており、研究成果の国際的な発信に大いに貢献できるものである。

当初計画を変更し、2017年11月にタイ・バンコクで開催した ACSAS 第1回、2018年11月韓国・ソウルで開催した第2回、および2019年11月シンガポールで開催した第3回国際シンポジウムの成果論集について、Journal of Indian and Asian Studies からの刊行を目指して編集作業を進めた。同雑誌は韓国外国語大学インド研究所と World Scientific 社（シンガポール）が共同発行する査読誌で、研究成果のグローバルな発信が期待される。

(2) 教育プログラム等

- ① 国立民族学博物館と大学間の連携促進にむけ、本拠点メンバーが関西圏の大学で担当する南アジア関連の授業において、同館が収蔵する文献・映像資料の活用方法や南アジア展示に関する解説を行い、学生にとって馴染みのない南アジア地域に対する理解を促した。また、同館にて受講学生（日本人および外国人留学生）を対象とした博物館実習も実施し、南アジア社会の暮らしをモノから体験する機会を提供することで、南アジア地域をより身近に感じさせることに貢献した。
- ② 同館が定期的に開催するウィークエンドサロンおよび公開講演会にて本拠点のメンバー複数名が講義を行い、南アジア地域の文化について参加者の理解を図った。
- ③ 全国市町村国際文化研究所にて、本拠点メンバーが全国の地方公務員研修者に対して、インドの暮らしと文化に関する講義を行い、地方行政における南アジアを中心とした国際交流の推進に貢献した。
- ④ 第52回南アジア研究集会（犬山国際ユースホテル、7月14・15日）および国際ファッション専門職大学シンポジウム「インド・ファッションの世界——素材から考える装い」（同名古屋キャンパス、7月13日）を共催で開催し、本拠点「布」班の研究成果の一部を公開するとともに、研究集会で若手研究者に研究発表や研究交流の機会を与え、研究者育成の推進に貢献した。

(3) 展示等

- ① 国立民族学博物館の南アジア展示コーナーに関して、「躍動する南アジア」の現在を念頭に置きつつ、展示品の収集作業を支援した。将来的な展示コーナー改修に貢献した。
- ② 国立民族学博物館にて2019年8月から11月まで開催された特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」で、南アジア関連の研究実施の補助等を通じ、同展の開催を支援した。本特別展は非常に多く来場者に恵まれ、学術面でも高く評価された。そのうち南アジア関連展示には本拠点も大きく貢献した。
- ③ 本拠点「布」班の研究成果の一端を国立民族学博物館の企画展として2021年度に開催する計画を立て、本拠点「布」班を中心に企画を進めた。最終年度の企画展に向けて、準備は順調に進んだ。④同館に寄贈されたブータン民族資料の受け入れと今後の展示やデータベース化の可能性に向けて、同資料の研究を支援した。将来的な社会的発信に貢献した。

【研究プロセスの国内外に向けた情報発信】

本拠点が運営するホームページをリニューアルし、より分かりやすく、魅力的な掲載方法を検討するなどして、研究情報の国内外への発信をより一層強化した。

【若手研究者の人材育成の取組み】

本拠点メンバーや他大学のPD、助教、講師、准教授レベルの若手研究者に対して、本拠点が主催する班別および合同研究会での発表機会（のべ12名）を提供し、学際的な視点をふまえた研究能力の育成に務め、ワーキング・ペーパーや論文などの研究成果に結びつくよう働きかけた。加えて、国際学会（アメリカ、10月6日～10月22日）や、ACSAS第3回国際シンポジウム（シンガポール、11月22・23日）では発表者の公募と研究発表に伴う旅費の支援を行い、国際的な学術交流の機会を提供することに取り組んだ。

今後のプロジェクト推進方策

当初、「現代インド地域研究」プロジェクト第二期が2015年度から始まった時点では、2019年度までの5年間でINDAS全体国際シンポジウムを5回開催し、うち3回は「持続的発展」、「包摂的発展」、「平和的発展」を全体テーマとして、3冊の英文叢書をRoutledge社から刊行する計画を立てた。しかしその後、2019年度からあとまだ3年間を残すことになったため、国際シンポジウムをあと3回続け、それぞれの成果をベースとする、さらに3冊の英文叢書の刊行をめざすことにした。その基本思想は、「問題解決志向型研究」を持続的、包摂的、平和的発展の3つのテーマで研究を終えた今、INDAS-South Asiaの全体テーマの主題「グローバル化する南アジアの構造変動」に今一度立ち戻り、構造変動の様態をもう一度しっかりと分析して見据え、その上で一段高い視点から「問題解決」を考えてみようということである。

具体的には、2019年度の国際シンポジウムについては上述の通りであるが、2020年度は「経済」の構造変動、最終2021年度は「政治」の構造変動を取り上げ、それぞれ、東京大学経済班+広島大学+京都大学資源環境グループ、東京大学その他+東京外国語大学+京都大学政治グループ、が共同で担当することにしている。2020年度は、神戸大学にて“Understanding the Transitional Process from Agrarian to Industrialized Economy in South Asia: With a Focus on Employment and Labor Markets”をテーマとしてINDAS全体国際シンポジウムを開催することが決まっている。なお、英文叢書の出版は、INDAS-South Asiaプロジェクト終了後、2022年度、2023年度まで

ずれ込むことを見込んでいる。

次に、ACSASについて、2019年度のシンガポールでの国際会議については上述の通りであり、2020年度はベトナム、2021年度は日本で開催する予定である。成果論集の出版については、Journal of Indian and Asian Studiesからの刊行を予定している。なお、2022年度以降、INDAS-South Asia プロジェクトが終了後もACSASへの主導的参画を続ける予定であるが、日本全体としての制度的枠組みや予算措置など、今後、詰めていく必要がある。

南アジアセミナーは2019年度は広島大学を幹事拠点とし、「南アジア地域研究のフロンティア——時空間のダイナミクス」を共通テーマに9月17日～19日まで開催し、5名の院生やポストドクレベルの研究者が参加・発表を行った。同セミナーにはプロジェクト第二期となった2015年度以降で、計36本の研究発表があり、のべ137名が参加し、次世代研究者の育成に大きく貢献してきた。この南アジアセミナーも、あと2年間は従来通り継続する。開催地は、2020年度が龍谷大学、最終2021年度が京都大学となる予定である。

また2020年度からは、その準備作業も含め、NIHU ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」および「北東アジア地域研究」の2つの地域研究プロジェクトとの間の本格的な連携事業の企画・運営に積極的に参画し、協力する所存である。INDAS-South Asia はすでに、研究会や大学院生等の教育・育成プログラム（南アジアセミナー）で、他の2つの地域研究プロジェクトとの連携を行った実績がある。

● ネットワーク型：現代中東地域研究

地球規模の変動下における中東の人間と文化——多元的価値共創社会をめざして

中心拠点「中東地域における文化資源の現代的変容と個人空間の再世界化」

代表者：西尾哲夫

1. プロジェクト概要

現代中東地域研究では、国立民族学博物館拠点を中心拠点とし、その他国内の四拠点と共同で研究活動を進めている。端的に述べると現代中東地域研究とは、中東地域における「個」と社会（共同体）のあり方の現代的動態に基づき、グローバル化と地域をめぐる双方向の複眼的な分析ベクトルをもって、人類や人間文化という普遍的な価値を視野に入れた研究である。

本拠点では、現代的諸問題を解決するための基盤形成のために中東地域における社会構築のプロセスを、文化知識の資源化プロセスに着目して研究している。中東地域を基点として広がる空間においては、世界を形成・構想するうえで、生身の個人が経験する未知なる人・場・情報との遭遇が重要な役割を担っている。流動する諸個人が暫定的に構築してゆく場の継起・累積から社会を構築する方法を、文化知識の資源化という側面から検討することで、個人が織りなす世界の特質を解明することが可能となる。そこで(1)「個」から世界への視点による他者観と、(2)社会的心性としての世界観にかかるサブプロジェクトを連携させた活動を実施している。

2. 研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

中東地域の現代的動態について、資源をめぐる問題系として①文化資源（文化遺産、個人と世界観、宗教とマテリアリティなどの問題群）、②自然資源（生態系と生活空間、環境問題と人間、資源と環境ガバナンスなどの問題群）③知的資源（情報環境、コミュニケーションと社会空間、伝統知と教養などの問題群）④人的資源（高齢化、障害者、女性・子ども・若者、経済的弱者やマイノリティ、難民などの問題群）として整理し、それぞれの問題群の検討を通じて、人間文化や人類の普遍性への地平を拓く新たな価値創出を目指す。

国立民族学博物館現代中東地域研究拠点（担当分野：文化資源）では、「個人空間の再世界化」をテーマとし、文化知識の資源化に焦点をあててきた。

基本計画では、プロジェクト4年度目の本年には、1)各研究拠点の研究推進（本調査）、2)若手研究者による公募型共同研究の成果発表及び推進（1年次）、3)展示活動による研究成果の発信、4)研究成果の公刊（日本語・英語・仏語・アラビア語等）の四つを柱として設定した。ただし当初の基本計画では公募型の若手共同研究は運用について計画変更を行っており、第2年次として東京外国語大学拠点での若手共同研究事業を継続して行いつつ、上智大学拠点、秋田大学拠点で若手共同研究事業を開始した。

3. 年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

プロジェクト前半の研究成果を刊行物としてとりまとめを行いつつ、プロジェクト後半の研究体制を整えながら、博物館検索データベースに新たに湾岸諸国編を編集したことに加え、これまでの各国のデータを横断して検索可能

なプラットフォームへと変更するなど利便性の高い研究インフラの整備を進めた。初年度から行ってきた日本語・英語でのレクチャーシリーズを継続的に実施したほか、プロジェクトのプレゼンスを国内外で高めるとともに国内外の大学等研究機関との連携強化を目的に、一般市民に向け日本出身の世界的なイスラーム学者であった井筒俊彦に焦点を当てたドキュメンタリー『シャルギー（東洋人）』（4月27日）のフィルム上映ワークショップを龍谷大学で開催したことに加え、国外でもオックスフォード大学で国際ワークショップ（“Neither Near Nor Far: Encounters and Exchanges between Japan and the Middle East” 5月24・25日）を開催した。また研究分担者でもあるマギル大学のサルヴァトーレ・アルモンド氏が2018年に刊行した *Wiley Blackwell History of Islam* の合評会を4月に開催し、国際学術雑誌への投稿の準備をすすめた。

さらに秋田大学拠点と協力しながら、片倉もとこ本館名誉教授が行った調査への追跡調査によるソースコミュニティとの協業に基づいた企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」を国立民族学博物館（6月6日～9月10日入館者数34,180名）と横浜ユーラシア文化館（10月5日～12月22日10380人）にて開催し、ワークショップ、ギャラリートーク、講演会などの関連行事を通じて、日本の一般社会と研究成果を共有することができた。また秋田大学で開催された日本中東学会年次大会（5月12・13日）において、同大学拠点協力しながら大会運営を行った。

今後のプロジェクト推進方策

各拠点が各分担テーマについて研究を深めていくことはもとより、現代中東地域研究全体での研究成果の発信を進めていながら、プロジェクトで当初から設定してきた人類や人間文化という普遍的な価値を提供することが可能であるようなグローバル化時代の中東地域研究へと議論を高次に発展させていく。

国立民族学博物館拠点においては、継続して行ってきたレクチャーシリーズなどの研究会を通じて方法論的深化を進めていくとともに、京都大学拠点と協力しながら日本語での現代中東地域研究全体での研究叢書の刊行に向け、編集作業を進める。

なお新型コロナウイルス感染症の世界的な流行にともない、移動制限をはじめとした研究活動への影響も予測されるなか、オンラインによる研究会の開催など、これまで構築してきた研究体制を資本としながら新たな社会的状況に対応した研究活動も推進していく。

2-5 研究成果の公開

刊行物

●国立民族学博物館研究報告

44巻1号（2019年7月25日発行）

・論文

- 国立民族学博物館における大阪府北部を震源とする地震による収蔵庫の被害と対応 —— 園田直子
 大阪府北部を震源とする地震で被災した国立民族学博物館の復旧活動 —— 日高真吾
 アグリビジネスから食の民主主義へ——岐路にある日本とフランスの食と農 —— 竹沢尚一郎
 参加と競争のはざまにおけるテクノロジーをめぐる —— ス페인・カタルーニャ州の人間の塔を事例に —— 岩瀬裕子

44巻2号（2019年10月29日発行）

・論文

- The Decay and Reconstruction of Nominal Classes in Srinagar Burushaski —— Noboru Yoshioka
 工場生産の現場にみる身体——機械の関係性 —— 日比野愛子
 ・特集「地域の食の形成——日本を中心とした産業化の脈略のなかで」
 序 —— 野林厚志
 変容する伝承食の真正性——福井県嶺南地方沿岸部のサバのヘシコナレズシを事例として —— 濱田信吾
 戦後日本における鯨肉の変遷——工業化時代の代替肉からポスト工業化時代の伝統食へ —— 若松文貴
 アメリカ合衆国、日本のローカルフードの成長と緊張 —— イーサン・D・スクールマン／アレクサンダー・ホー
 現代日本におけるうま味の認識とその構築 —— 大澤由実
 台湾社会における甘味を嗜好した飲食文化の形成——砂糖の歴史生態から考える —— 野林厚志

44巻3号 (2020年1月6日発行)

- 論文
普遍主義の響宴——アナガーリカ・ダルマパーラと神智協会——
Nomadic Storytellers: Scottish Traveller Self-Representation in Stanley Robertson's *Exodus to Alford*
Ryo Yamasaki
- 研究ノート
日本手話、台湾手話、韓国手話の二桁から四桁の数の表現における変化
——「10」「100」「1000」に着目して——
相良啓子

44巻4号 (2020年3月16日発行)

- 論文
海域世界の鼓動に耳を澄ます——19世紀インド洋西海域世界の季節性——
1930年代のアメリカにおける私的探検の考察
——朝枝利男が参加した探検隊の旅程と経路の分析から——
鈴木英明 丹羽典生
- 研究ノート
ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ局——「文化週間」をめぐる民族誌的考察——
三島禎子

● Senri Ethnological Studies

No. 101 (2019年6月21日発行)

Ritsuko Kikusawa, and Fumiya Sano (eds.) *Minpaku Sign Language Studies 1*

No. 102 (2019年12月9日発行)

Naoko Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World*

● Senri Ethnological Reports (国立民族学博物館調査報告)

No. 149 (2019年6月24日発行)

岸上伸啓編『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』

No. 150 (2020年3月31日発行)

河合洋尚・張 維安編『客家族群與全球現象——華僑華人在「南側地域」的離散與現況』

● 民博通信 Online

No. 1 (2020年3月31日発行、旧『民博通信』通巻165号)

真実と虚偽の狭間に措定された「史実性」の追究——
なぜ公共空間の生態学なのか——「潜在的なもの」に目を凝らし、耳を澄ますために——
伝統染織とは何か——伝統と革新、そして継承——

風間計博 内藤直樹 中谷文美 など

● TRAJECTORIA

No. 1 (2020年3月31日発行)

• Article

Creatively Utilising the Encyclopaedia Cinematographica Film Project: Visual Repatriation of the Masakin
Isao Murahashi

• Special Theme

Introduction
Decolonizing Museum Catalogs
Demonstrational Lecture of the Collections Review Research
Database as Collaborative Environment
Collaboration Is Only a Tool to Decolonize the Museum

Atsunori Ito
Kelley Hays-Gilpin, Atsunori Ito, and Robert Breunig
Cynthia Chavez Lamar and Jim Enote
Robin Boast
Chip Colwell

●研究年報2017 改訂版（2019年3月30日発行）

●外部出版

森 明子編『ケアが生まれる場 他者とともに生きる社会のために』ナカニシヤ出版（2019年4月26日刊行）

石森大知・丹羽典生編『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社（2019年6月3日）

池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』昭和堂（2020年3月31日刊行）

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

「みんなくリポジトリ」は、2010年1月12日に一般公開され、10年が経過した。2019年度は、館内出版物『国立民族学博物館研究報告』、『国立民族学博物館調査報告 (Senri Ethnological Reports)』『民博通信』の登録を行った。また、今年度新しく刊行された電子ジャーナルの登録を開始した。

2019年度新たに登録したコンテンツは169件で、2019年度末のコンテンツ登録数は4,934件となった。コンテンツのダウンロード数は、年間540,384件に達している。

学術講演会

●みんなく公開講演会

「アニメ『聖地』巡礼——サブカルチャー遺産の現在」

実施日 2019年11月15日（金）

場 所 日経ホール（東京）

共 催 日本経済新聞社

参加者 340名

概要説明 「遺産観光におけるバーチャリティ」

講 師 飯田 卓（国立民族学博物館・教授）

内 容 テーマ設定のきっかけとなった「文化遺産の人類学」について述べたあと、この分野が直面する課題として、インターネット上でおこなわれる不可視のコミュニケーションとその表面化のプロセスを把握することの重要性を指摘した。また、アニメのモチーフは観光資源になりうるにもかかわらず、場所とは結びつかない点で特殊である点を指摘した。

講演 1 「聖地巡礼のラビリンス——現代日本における旅・キャラクター物語」

講 師 川村清志（国立歴史民俗博物館・准教授）

内 容 アニメや漫画の舞台となった場所を巡る「聖地巡礼」は、2000年代以後に大きく展開した。聖地の中には、地方の自治体や企業を巻き込み、国際的な観光地に成長する一方で、ファンと地域社会が物語を超えた新たな関係性を築くケースもみられる。地域社会の実情に対応した関係性の深化に注目しながら、聖地の現在を考えた。

講演 2 「アニメのある景観——中国地域の客家文化継承をめぐる」

講 師 河合洋尚（国立民族学博物館・准教授）

内 容 台湾や香港では、近年、アニメ・キャラクターを描いた建造物が注目を集めている。この動きは、観光客を集めること以上に、若い世代が文化遺産に関心を持つことを意図しているという。客家の人びとがアニメを景観デザインに集める事例を報告し、変わりゆく文化遺産の現状を議論した。

パネルディスカッション

川村清志×河合洋尚 司会：飯田 卓

2-6 学会開催

学会開催

2019年度 なし

2-7 若手研究者奨励セミナー

若手研究者奨励セミナー

国内の大学院博士課程在籍者及びPD（ポストドクター）などの若手研究者を対象として、2009年度から「みんなばく若手研究者奨励セミナー」の名称のもと、本館教員の講演の後、参加者が特定のテーマで研究発表を行うセミナーを行っている。2017年度からは、研究部改組に伴い、新しく再編された各研究部のミッションに沿った形で当該研究部が年度毎に本プログラムを担当する体制を整えた。2019年度は超域フィールド科学研究部が担当し、「ゆらぐマジオリティ／マイノリティ」というテーマが設定され、国公私立大学の大学院生を含む若手研究者8名が参加した。教員による講演に続き、参加者による研究発表が行われ、優秀発表者に「みんなばく若手研究者奨励セミナー賞」が授与された。同時に、図書室、展示場などの施設見学や、アイヌのカムイノミ（神への祈り）見学を実施した。

2-8 研究員制度

外来研究員

BAE JINSUNG 裴 眞晟（ペ ジンソン）韓国 釜山大学校人文大学考古学科教授

研究課題：支石墓と民間信仰

BAI FUYING 白 福英（ハク フクエイ）中国

研究課題：中国・内モンゴルにおける漢民族の牧畜活動に関する研究——オラド後旗の事例から

CHE Sohee 諸 昭喜（チェ ソヒ）韓国 奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了

研究課題：アジアの民族特有の産後の病いに関する比較研究

De Antoni Andrea（デ・アントーニ アンドレア）イタリア 立命館大学国際関係研究科准教授

研究課題：現代日本とイタリアにおける憑依と除霊の体験——宗教・生物医療を感じる身体とジェンダー

Elnzeer Tirab Abaker Haroun（アルナジール ティラブ アバカール ハロン）スーダン National Corporation for Antiquities and Museums

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

GAO Qian（カオ チエン）中国

研究課題：中国南西部の少数民族地域における芸術・文化の変容に関する研究

GHAZAL Walaa A.A.（ガザル ワラ）パレスチナ Ministry of Tourism and Antiquities

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

HAKOOLA Alfred（ハコラ アルフレッド）ザンビア Lusaka National Museum

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

HOFER Theresia（ホーフアー テレジア）オーストリア Senior Lecturer in Social Anthoroplogy, University of Bristol

研究課題：人類学におけるユニバーサル・ミュージアム・デザイン

KARAPETYAN Julietta（カラペティアン ジュリエッタ）アルメニア History Museum of Armenia

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

MAISARAH Sarona（マイサラ サロナ）インドネシア Aceh Tsunami Museum

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

- MARZEC AGNIESZKA (マジェッツ アグネシカ) ポーランド
研究課題：異文化接触場面におけるコミュニケーション・ストラテジー——在日外国人を中心に
- MOHAMED Alzahraa Saifeldien Selim (モハメッド アルザハラ セイフディン サリン) エジプト Egyptian Museum / Ministry of Antiquities
研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース
- MWIINDE Shamu Ephason (ムインデ シャム エファソン) ザンビア Livingstone Museum
研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース
- NAMUJIAFU (ナムジャウ) 中国 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了
研究課題：モンゴル国におけるオイラドの宗教復興に関する人類学的研究
- PYEON Seollan (ピョン ソラン) 韓国 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了
研究課題：チベット難民の越境と第3国への再移住に関する人類学的研究
- SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante (サウセド セガミ ダニエル ダンテ) ベルー 立命館大学言語教育センター 外国語嘱託講師
研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する研究
- SHUR Bold (シュル ボルド) モンゴル エドヴェシュ・ローランド大学モンゴル・中央アジア研究科博士後期課程
研究課題：国立民族学博物館におけるモンゴル有形文化財の保管整備状況
- TASHI Sangay (タシ サンゲイ) ブータン The Royal Heritage Museum
研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース
- VAVALOA William Southwick (ババロア ウィリアム サウスウィック) フィジー Fiji Museum
研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース
- Wang Xiyun (オウ シ エン) 中国 フランス社会科学高等研究院社会人類学博士課程
研究課題：金門島（台湾）の自然・文化遺産——中国のフロンティアにおける集団的アイデンティティの構築
- Yimin 伊敏 (イミン) 中国
研究課題：中国における少数民族言語地名の漢字表記にみる歴史と文化——内モンゴル地域におけるモンゴル語と満洲語の地名を中心に
- ZHAO Furong 趙 芙蓉 (チョウ フヨウ) 中国
研究課題：チベット仏教とモンゴル・シャマニズムの関係性に関する研究——モンゴル地域の土地神信仰をめぐって
- ZONG Xiaolian 宗 曉蓮 (ソウ ギョウレン) 中国 西南大学国際文化学部非常勤講師
研究課題：日中相互間における社会イメージの形成および社会記憶の構造に関する研究——訪日旅行者のインタラクティブな文化交流と相互理解への影響を事例として
- ZULU Betty (ズル ベティ) ザンビア Choma Museum and Crafts Centre
研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース
- 秋保 さやか (アキホ サヤカ) 日本
研究課題：内戦後のカンボジア農村開発に関する民族誌的研究

荒田 恵（アラタ メグミ）日本 天理大学附属天理参考館学芸員

研究課題：アンデス形成期の祭祀遺跡における工芸品製作

伊藤 悟（イトウ サトル）日本

研究課題：中国西南タイ民族における詩的オラリテイの継承と創造的实践に関する研究

伊藤 渚（イトウ ナギサ）日本

研究課題：布と人の関わりを通じた身体観の変遷に関する人類学的研究——ラオス北部タイ系民族の女性の織る布と紋様に注目して

稲井 啓之（イナイ ヒロユキ）日本 日本学術振興会特別研究員／京都大学アフリカ地域研究資料センター・特任研究員

研究課題：アフリカ内水面における「よそ者」に着目した持続的水産資源管理構築に関する研究

井家 晴子（イノイエ ハルコ）日本

研究課題：妊娠・出産の異常とその対処法に関する文化間比較研究

井上 航（イノウエ コウ）日本

研究課題：ブラウクルン語の表出的な言葉と声についての民族誌的研究

今井 彬暁（イマイ アキトシ）日本

研究課題：ベトナムのモン社会における死者のエージェンシーの研究

上畑 史（ウエハタ フミ）日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：セルビアにおけるポップフォークと民俗音楽の比較分析による文化的連関の研究

浮ヶ谷 幸代（ウキガヤ サチヨ）日本 相模女子大学人間社会学部教授

研究課題：現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究

内田 修一（ウチダ シュウイチ）日本

研究課題：都市的環境におけるソングイの精霊憑依の実践の研究

緒方 しらべ（オガタ シラベ）日本 大阪大学非常勤講師

研究課題：感性と制度のつながり——芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える

岡本 尚子（オカモト ナオコ）日本 洗足学園音楽大学音楽学部非常勤講師／実践女子大学非常勤講師

研究課題：未発表原稿分析によるJ.-C. マルドリュスの執筆過程の解明

奥村 京子（オクムラ キョウコ）日本 日本学術振興会海外特別研究員

研究課題：1980年代の以降のジェルジ・リゲティ作品における異文化表象

風間 計博（カザマ カズヒロ）日本 京都大学大学院人間環境学研究所教授

研究課題：オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究

川口 聖（カワグチ キヨシ）日本

研究課題：日本における手話の言語変化に関する研究

神田 和幸（カンダ カズユキ）日本 中京大学名誉教授/NPO 手話技能検定協会理事長

研究課題：新手話学の構成素の実証的検証研究

- 工藤 さくら（クドウ サクラ）日本 東北大学大学院文学研究科専門研究員
研究課題：現代ネワール社会における儀礼の変容と《テータヴァーダ》——ダルマ、ジェンダー、ダリット
- 工藤 由美（クドウ ユミ）日本 東邦大学看護学部非常勤講師 / 慶應義塾大学法学部非常勤講師 / 江戸川大学社会学部非常勤講師 / 明海大学外国語学部非常勤講師
研究課題：チリ先住民マプーチェの民族医療の都市的展開に関する人類学的研究
- 栗山 新也（クリヤマ シンヤ）日本 沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員
研究課題：三線が引き出す社会関係、価値、感情——大衆楽器が人びとに与える効果の研究
- 児玉 徹（コダマ トオル）日本 筑波大学准教授（筑波会議・TGSW 推進ユニット ユニット長兼務） / 一般財団法人国際貿易投資研究所客員研究員
研究課題：産官学民連携のもとで文化ツーリズム推進策の人類学的な分析——ワインツーリズム推進政策の国際比較を中心に
- 小美浪 フミ（コミナミ フミ）日本 アイヌ工芸家
研究課題：アイヌの編み袋（サラニブ）の研究
- 佐川 徹（サガワ トオル）日本 慶応義塾大学文学部准教授
研究課題：統治のフロンティア空間をめぐる人類学——国家・資本・住民の関係を考察する
- 崎田 誠志郎（サキタ セイシロウ）日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：東地中海域における小規模漁業の漁場利用生態と漁場管理制度の統合的説明
- 佐藤 浩司（サトウ コウジ）日本
研究課題：オーストロネシア語族の建築に関する比較研究
- 佐藤 吉文（サトウ ヨシフミ）日本 神戸市外国語大学非常勤講師
研究課題：ティワナク国家とケヤ文化：先スペイン期アンデスにおける初期国家形成プロセスに関する研究
- 新本 万里子（シンモト マリコ）日本 広島大学アクセシビリティセンター
研究課題：生理用品の受容によるケガレ観の変容に関する文化人類学的研究
- 杉本 敦（スギモト アツシ）日本 東北学院大学文学部・法学部非常勤講師 / 盛岡大学文学部非常勤講師
研究課題：農の「EU化」に伴うトランシルヴァニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究
- 次下 利春人（ズグスタ リチャード）日本
研究課題：西部ボルネオ島のダヤク系民族に関する歴史人類学研究
- 鈴木 博之（スズキ ヒロユキ）日本 オスロ大学人文学部ポストク研究員
研究課題：チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究
- 高木 仁（タカギ ヒトシ）日本
研究課題：人とウミガメの民族誌(2)
- 高橋 晴子（タカハシ ハルコ）日本
研究課題：服装・身装文化デジタルアーカイブの国際化および標準化の検討と実践
- 竹村 嘉晃（タケムラ ヨシアキ）日本
研究課題：移民の身体ポリテクス——インド舞踊のグローバル化とエージェンシー

田沼 幸子（タヌマ サチコ）日本 東京都立大学大学院人文科学研究科准教授
研究課題：ネオリベリズムの中のモラルティ

田村 卓也（タムラ タクヤ）日本
研究課題：東アフリカ沿岸部の小規模漁業者による水域環境の利用に関する研究

辻本 香子（ツジモト キョウコ）日本 大阪芸術大学芸術学部非常勤講師 / 京都精華大学非常勤講師 / 近畿大学非常勤講師
研究課題：都市における芸能を主としたイベントの構築にみる音環境の研究

東城 義則（トウジョウ ヨシノリ）日本
研究課題：日本社会における狩猟の現代化に関する民族誌的研究

常田 夕美子（トキタ ユミコ）日本 大阪大学人間科学部非常勤講師 / 京都女子大学大学院現代社会研究科非常勤講師
研究課題：インド・オディシヤにおける親密圏の変容——恋愛・婚姻・家族をめぐる情動と経験

内藤 直樹（ナイトウ ナオキ）日本 徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学学域准教授
研究課題：カネとチカラの民族誌——公共性の生態学にむけて

仲尾 友貴恵（ナカオ ユキエ）日本 京都大学大学院文学研究科非常勤講師 / 大阪行岡医療専門学校長柄校非常勤講師
研究課題：タンザニア・ダルエスサラームにおける身体障害者の生活基盤

中川 敏（ナカガワ サトシ）日本 大阪大学大学院人間科学研究科教授
研究課題：文化人類学を自然化する

中川 渚（ナカガワ ナギサ）日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了
研究課題：先史アンデス形成期における社会動態

永田 貴聖（ナガタ アツマサ）日本 大阪国際大学国際教養学部非常勤講師
研究課題：京都市東九条における日本人・在日コリアン・フィリピン人の関係形成についての人類学

中田 梓音（ナカタ シオン）日本
研究課題：対人関係の構築過程における言語コミュニケーション研究

中谷 文美（ナカタニ アヤミ）日本 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授
研究課題：伝統染織品の生産と消費——文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐる

中野 歩美（ナカノ アユミ）日本 関西学院大学先端社会研究所専任研究員
研究課題：インド北西部に暮らす移動民の比較研究

中道 静香（ナカミチ シズカ）日本 大阪大学非常勤講師 / 天理大学非常勤講師
研究課題：『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相

中村 真里絵（ナカムラ マリエ）日本 園田学園女子大学シニア専修コース非常勤講師 / 大谷大学文学部非常勤講師 / 大阪国際大学国際教養学部非常勤講師 / 神戸女子大学非常勤講師 / 桃山学院大学非常勤講師 / 龍谷大学非常勤講師
研究課題：世界文化遺産バンチェン遺跡の遺物の古美術品化とその価値づけをめぐる文化人類学的研究

- 二階堂 祐子（ニカイドウ ユウコ）日本 明治学院大学社会学部非常勤講師
研究課題：出生前検査の「対象となる妊婦」に関する人類学的研究——サブスタンスの地域性と動態
- 西 佳代（ニシ カヨ）日本
研究課題：1950年代アメリカ海軍のグアム島における風下被ばく調査に関する研究
- 西 真如（ニシ マコト）日本 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特定准教授
研究課題：心配と係り合いについての人類学的探求
- 額田 有美（ヌカダ ユミ）日本 日本学術振興会特別研究員／同志社大学グローバル地域文化学部非常勤講師／大阪大学人間科学部非常勤講師
研究課題：ラテンアメリカ地域における「先住民性」についての民族誌的研究——コスタリカを中心に
- 野澤 豊一（ノザワ トヨイチ）日本 富山大学人文学部准教授
研究課題：音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究
- 野嶋 洋子（ノジマ ヨウコ）日本
研究課題：無形文化遺産の継承・変容と自然災害による影響の動態的把握——バヌアツ北部事例研究
- 登 久希子（ノボリ クキコ）日本
研究課題：社会をつくる芸術——「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究
- 萩原 卓也（ハギワラ タクヤ）日本 京都コンピュータ学院非常勤講師／びわこ成蹊スポーツ大学非常勤講師
研究課題：身体性を基盤とした他者との共存の可能性を探求する——ケニアの自転車競技選手を事例に
- 早川 真悠（ハヤカワ マユ）日本 摂南大学外国語学部非常勤講師／神戸女学院大学文学部非常勤講師／関西大学社会学部非常勤講師／久米田看護専門学校非常勤講師
研究課題：レソトにおけるジンバブエ移民行商人の会計方法にかんする人類学的研究
- 平田 晶子（ヒラタ アキコ）日本 日本学術振興会特別研究員（京都文教大学 総合社会学部）／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア フェロー
研究課題：テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究
- 廣川 和子（ヒロカワ カズコ）日本 アイヌ工芸家
研究課題：アイヌ衣服の仕立て方について
- 福岡 真央（フクマ マオ）日本 メキシコ北部国境大学院大学ポスドク研究員
研究課題：境界域の先住民——モビリティ、記憶、境界
- 藤井 真一（フジイ シンイチ）日本 日本学術振興会特別研究員／天理大学国際学部非常勤講師
研究課題：贈与交換による平和の構築・維持・再生産に関する人類学研究——ソロモン諸島の事例から
- 藤田 瑞穂（フジタ ミズホ）日本 京都市立芸術大学学芸員
研究課題：拡張された場における映像実験プロジェクト
- 松岡 佐知（マツオカ サチ）日本 日本学術振興会特別研究員／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員
研究課題：高齢期の人間にとっての居住型宗教施設の役割——南インドの事例から
- 松田 有紀子（マツダ ユキコ）日本

研究課題：花街の担い手コミュニティによる「伝統」継承をめぐる歴史人類学的研究

盛 恵子（モリ ケイコ）日本

研究課題：セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張

山 泰幸（ヤマ ヨシユキ）日本 関西学院大学人間福祉学部教授

研究課題：グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティブ・ポリティクス

山田 香織（ヤマダ カオリ）日本 追手門学院大学基盤教育機構常勤講師

研究課題：アートツーリズムのエスノグラフィー——地方国際芸術祭の深化と拡充の理論化に向けて

山本 文子（ヤマモト アヤコ）日本 和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師

研究課題：都市における精霊信仰の人類学的研究——ミャンマー・ヤンゴンの事例から

横田 浩一（ヨコタ コウイチ）日本 亜細亜大学国際関係学部非常勤講師／聖心女子大学文学部非常勤講師／川村学園女子大学非常勤講師／東洋大学生命科学部非常勤講師

研究課題：潮州系華人の宗教領域における統治と放縦に関する研究

吉直 佳奈子（ヨシナオ カナコ）日本 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻 文化人類学コース博士課程単位取得退学

研究課題：生殖技術における〈自然〉の一考察——法制化を巡る日本の論争事例から

渡辺 裕木（ワタナベ ユキ）日本 フェリス女学院大学非常勤講師（スペイン語）

研究課題：メキシコ先スペイン期の遺跡に与えられた自国のアイデンティティ形成に果たす役割

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

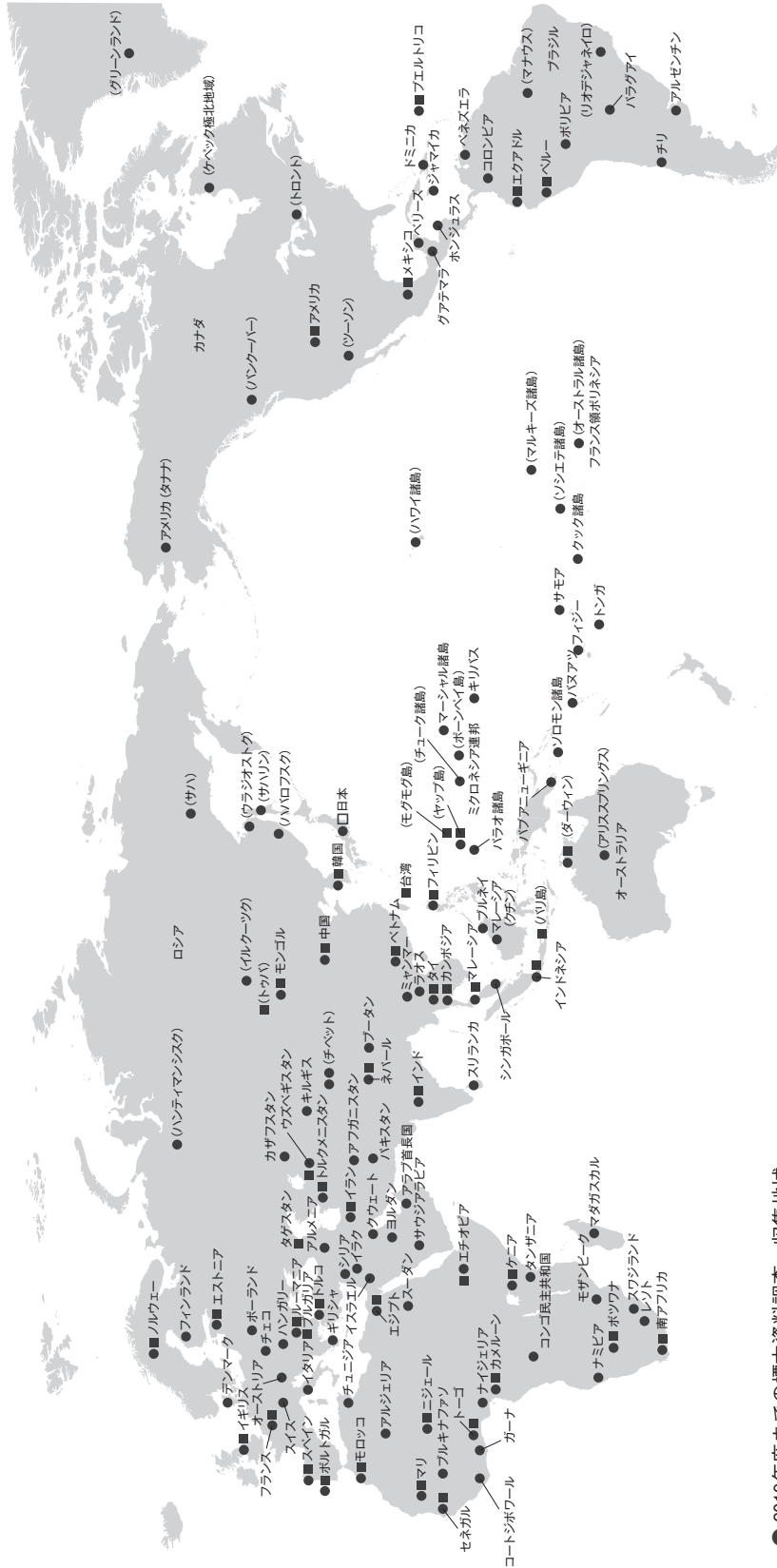
特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけでなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2019年度は、国立大学3人、私立大学1人、計4人の大学院生を受け入れた。

2-9 データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

● 標本資料および映像取材地域



● 2019年度までの標本資料調査・収集地域
○ 2020年度の標本資料調査・収集計画地域

■ 2019年度までの映像取材地域
□ 2020年度の映像取材計画地域

●標本資料の収集・利用状況

●2020年3月31日現在の収蔵資料数（未登録資料含む）

海外資料／179,256点 (未登録資料含む)	国内資料／165,878点 (未登録資料含む)	総点数／345,134点 (未登録資料含む)
----------------------------	----------------------------	---------------------------

●大学・博物館等への貸し出し

総点数／594点

●映像音響資料の収集・利用状況

●取材

2019年度該当無し

●2020年3月現在の収蔵資料数

映像資料／8,223点	音響資料／62,651点	総点数／70,874点
-------------	--------------	-------------

●資料の利用

利用総件数／153件（内、大学47件）	資料利用総点数 6,004点（内、大学218点）
館内利用など	
利用件数／82件	資料利用点数／1,255点
特別利用（館外での上映・試聴など）	
利用件数／52件	資料利用点数／228点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2019年度図書室の活動

1. 利用者サービス

利用者支援の一環として、図書室案内・見学対応等を行った。

- ① 外来研究員オリエンテーション
- ② 総研大生新入生ガイダンス
- ③ 民博新任職員研修
- ④ JICA 委託事業「博物館とコミュニティ開発」
- ⑤ 若手研究者奨励セミナー
- ⑥ みんなくデイスカバリーツアー

*その他、他大学等からの見学対応

2. 資料整備関連

1) 遡及入力事業として、国立情報学研究所 NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2019年度はマイクロ資料について図書2,607件、新聞雑誌2タイトル（141件）の遡及入力を行った。

2) 資料整備関連事業として、書庫・探究ひろばの約22万冊の蔵書点検を行った。

3) 購読雑誌について、教員への希望調査に基づき継続図書を削減した経費から新規に3タイトルの購読を決定した。

3. 広報、社会貢献その他

中学生の職場体験学習を受け入れた。

吹田市立古江台中学校 2名（2019年11月7日）

豊中市立第二中学校 2名（2019年11月13日）

●2019年度新規受入数

日本語図書 2,046点	外国語図書 1,499点		
AV資料他 34点	製本雑誌 678点	合計4,257点	

●2019年3月末現在の収蔵図書数

日本語図書 268,282点	外国語図書 413,897点	合計 682,179点
日本語雑誌 10,144種	外国語雑誌 7,051種	合計 17,195種

●利用状況（2019年度）

入室者	全体	10,072人	文献複写	受付	国内（うち謝絶）	1,283（191）件	
	館外者	1,543人		受付	国外（うち謝絶）	12（12）件	
時間外入室者		179人	依頼	来室		2,916 件	
うち日曜、祝日		70人		依頼	国内		214（24）件
貸出	図書	12,516冊	現物貸借	依頼	国内		15（0）件
	雑誌	257冊		受付	国内		496（27）件
うち館外貸出図書		2,793冊	依頼	国内		379（15）件	
HRAF 利用受付		0 件	事項調査	依頼	国内		0（0）件
		(カウンター受付件数)		受付	国外		0（0）件
						13件	

民族学資料共同利用窓口

2006年度に、本館が所蔵する民族学資料の利用に関する問合せ窓口として「民族学資料共同利用窓口」を設置した。本館の民族学資料が、館内外における各分野の研究・教育において有効利用され、社会に還元されることを目的に、問合せ窓口を一本化したものである。

2019年度の問合せ件数は、283件であった。

問い合わせ者別	(件)	問い合わせ者の所属機関別	(件)
教員（大学）	59	大学・大学図書館	68
大学院生	3	博物館・美術館	36
大学生	3	小・中・高	2
教員（小・中・高）	1	その他教育機関	1
学生（小・中・高）	0	研究機関	7
博物館・美術館関係	14	公共図書館	2
図書館	11	地方公共団体	8
教育・研究機関	4	各種団体	4
マスコミ関係	0	民間	
会社・団体	48	研究機関	1
一般	55	会社	22
民博教職員	85	団体	14
計	283	個人	
		館外	55
		館内	63
		不明	0
		計	283

資料の利用目的 (件)

調査・研究	研究 ^{*1}	91	業務用	展示用	37
	論文作成	5		番組制作	4
	学習 ^{*2}	0		出版物作製	27
	図書館から	11		参考資料	2
	授業で利用	45		入手方法	1
	その他	16		その他	4
	小計	168		小計	75
館内利用	刊行物作成	3	その他	寄贈申出	6
	館の事業	32		その他	0
	参考資料	1		小計	6
	資料の複製	0		合計	285 ^{*3}
	小計	36			

注) ^{*1} 大学生以上の調査を「研究」とする
^{*2} 高校生以下の調査を「学習」とする
^{*3} 問合せ件数よりも利用目的の件数が2件多いのは、1件に複数の利用目的の問合せがあったため。

民族学研究アーカイブズの構築事業

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の一つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、石毛直道、泉靖一、岩本公夫、内田勤、梅棹忠夫、江口一久、大内青琥、沖守弘、桂米之助、鹿野忠雄、木内信敬、菊沢季生、栗田靖之・別府春海、篠田統、杉浦健一、西北ネパール学術探検隊1958年データカード、土方久功、馬淵東一、丸谷彰、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブの資料目録の作成等を行い、その成果を順次公開している。

2019年度は、昨年度に引き続き資料の整理事業を行い、「西北ネパール学術探検隊1958年データカードアーカイブ」、「木内信敬アーカイブ」、「石毛直道アーカイブ」の3件の目録を Web 公開した。また、アーカイブズ文書資料の特殊性に鑑み、複写にあたっては申請者の研究内容との関連性等を総合的に判断した上で許可することや、複写の申請は原則として来館時に限ること等を明記することなど、利用方法について再検討を行い、規程改正の準備を進めた。また、近年国外からの来館者の利用申請が増加傾向にあることを踏まえ、利用申請書の英語版作成のための翻訳案検討を行った。

目録を公開し、利用に供しているアーカイブは22件である。2019年度の利用状況は閲覧・視聴が71件、特別利用が13件、事業利用が10件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

●標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2018年度までの作成件数	286,297
2019年度までの作成件数	134
2019年度のアクセス件数	75,939

●標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2018年度までの作成件数	73,393
2019年度の作成件数	3,866
2019年度のアクセス件数	8,795

• 標本資料記事索引

本館関連出版物に掲載された所蔵標本資料の解説について、その書誌事項を標本資料別に整理したデータベース。

2018年度までの作成件数	67,426
2019年度の作成件数	1,838
2019年度のアクセス件数	4,078

• 韓国生活財

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあつたすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。

2018年度までの作成件数	7,827
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	1,834

• ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）

宣教師であり神学博士でもあつたジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	2,992
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	428

• 映像資料目録

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD など映像資料の情報。

2018年度までの作成件数	8,223
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	2,304

• ビデオテーク

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューから探すことができる。

2018年度までの作成件数	775
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	3,580

• 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2018年度までの作成件数	849
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	266

• 松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	170
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	391

• 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	22,361
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	1,081

- 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション
大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。
2018年度までの作成件数 7,889
2019年度の作成件数 0
2019年度のアクセス件数 965
- アフリカ カメルーン民族誌写真集——端信行コレクション
端信行本館名誉教授が1969年から90年代初頭にかけて行った、おもにアフリカのカメルーン共和国での民族学的調査のなかで撮影した写真の情報（画像あり）。
2018年度までの作成件数 6,530
2019年度の作成件数 0
2019年度のアクセス件数 993
- 沖守弘インド写真（日本語版、英語版）
写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり）。
2018年度までの作成件数 21,971
2019年度の作成件数 3
2019年度のアクセス件数 2,016
- ネパール写真（日本語版、英語版）
「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。
2018年度までの作成件数 3,879
2019年度の作成件数 0
2019年度のアクセス件数 13,041
- 音響資料目録
本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。
2018年度までの作成件数 62,651
2019年度の作成件数 0
2019年度のアクセス件数 1,783
- 音響資料曲目
本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。
2018年度までの作成件数 351,802
2019年度の作成件数 0
2019年度のアクセス件数 785
- 図書・雑誌目録
本館が所蔵する図書・雑誌資料（マイクロフィルムなどを含む）の書誌・所蔵情報。
2018年度までの作成件数 647,344
2019年度の作成件数 3,266
2019年度のアクセス件数 694,993
- 梅棹忠夫著作目録（1934～）
著書・論文をはじめ本の帯の推薦文にいたるまで、梅棹忠夫本館初代館長のあらゆる著作を網羅した目録情報。
2018年度までの作成件数 6,725
2019年度の作成件数 186
2019年度のアクセス件数 3,363
- 中西コレクション——世界の文字資料
世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。
2018年度までの作成件数 2,729
2019年度の作成件数 0
2019年度のアクセス件数 68,948

• 吉川「シュメール語辞書」

吉川守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2018年度までの作成件数	33,450語（40,596頁）
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	842

• Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）

Lawrence A. Reid氏（ハワイ大学名誉教授）が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2018年度までの作成件数	7,717
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	3,785

• 日本昔話資料（稲田浩二コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。音声は館内限定公開。

2018年度までの作成件数	3,696
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	1,725

• rGyalrongic Languages（ギャロン系諸語）〔英語、中国語〕

長野泰彦本館名誉教授と Marielle Prins 博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース（音声あり）。83の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200の文例を収録している。

2018年度までの作成件数	41,078語（文例：15,706件）
2019年度の作成件数	0語（文例：0件）
2019年度のアクセス件数	24,238

• 衣服・アクセサリ

本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリ標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	31,430
2019年度の作成件数	266
2019年度のアクセス件数	19,872

• 身装文献

身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2) 服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。

2018年度までの作成件数	179,794
2019年度の作成件数	1,976
2019年度のアクセス件数	8,383

• 近代日本の身装電子年表

洋装がまだ日本に定着していなかった1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2018年度までの作成件数	11,905
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	1,012

• 身装画像——近代日本の身装文化

和装と洋装が拮抗していた1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）までの日本を対象とした身装関連の画像データベース。当時の新聞小説挿絵、写真、図書中の図版、ポスターなどから画像を収録。

2018年度までの作成件数	6,740
2019年度の作成件数	1

- 2019年度のアクセス件数 28,040
- 津波の記憶を刻む文化遺産——寺社・石碑データベース

日本の沿岸部に残されている、地震や津波災害の記憶を伝える寺社や石碑、銘板などの情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	378
2019年度の作成件数	62
2019年度のアクセス件数	78,730
 - 3次元CGで見せる建築——東南アジア島嶼部の木造民家

佐藤浩司本館准教授が1981年以来調査してきた東南アジア各地の木造建築物の情報。民家の3次元CGから作成したgifアニメーションにより建築物内外を巡回して見ることができる。

2018年度までの作成件数	36地点	57棟
2019年度の作成件数	0地点	0棟
2019年度のアクセス件数	592	
 - 焼畑の世界——佐々木高明のまなざし

佐々木高明（本館元館長）が、調査で撮影・記録した写真の中から、特に日本の焼畑に関するものを収録（画像あり）。

2018年度までの作成件数	454
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	4,224
 - 平成の百工比照コレクションデータベース

金沢市政120周年記念事業として、加賀藩の文化奨励政策の象徴的存在である「百工比照」の現代版をめざし、平成21（2009）年度から金沢市と金沢美術工芸大学が共同で制作した「平成の百工比照」の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	—
2019年度の作成件数	553
2019年度のアクセス件数	245
- 館内で利用できるデータベース
- 標本資料詳細情報（館内専用）

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2018年度までの作成件数	277,624
2019年度の作成件数	773
2019年度のアクセス件数	41,285
 - カナダ先住民版画

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち——カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2018年度までの作成件数	158
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	110
 - 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。

2018年度までの作成件数	849
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	89
 - 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	42,195
---------------	--------

- | | |
|---------------|-----|
| 2019年度の作成件数 | 0 |
| 2019年度のアクセス件数 | 445 |
- 梅棹忠夫写真コレクション

梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	35,481
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	10,290
 - オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真

小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	7,999
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	145
 - 朝枝利男コレクション

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	3,966
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	180
 - 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション

大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	8,842
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	21
 - 沖守弘インド写真（日本語版）

写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり。）

2018年度までの作成件数	22,120
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	13
 - 西北ネパール及びマナスル写真

「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班の写真（推定）を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。

2018年度までの作成件数	620
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	2
 - タイ民族誌映像——精霊ダンス

田邊繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。

2018年度までの作成件数	写真：10,082	調査報告：41
2019年度の作成件数	0	
2019年度のアクセス件数	16	
 - 東南アジア稲作民族文化総合調査団写真

日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。

2018年度までの作成件数	4,393
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	27
 - 日本昔話資料（稲田コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録

音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。

2018年度までの作成件数	3,696
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	51

●国内資料調査報告集

日本国内における、1) 民具などの標本資料類の所在、2) 伝統技術伝承者の所在、3) 民族・民俗映像記録の所在、4) 民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。

2018年度までの作成件数	21,373
2019年度の作成件数	0
2019年度のアクセス件数	3

●2019年度に館外公開されたデータベース

- ・焼畑の世界——佐々木高明のまなざし（2019年5月16日公開）
- ・平成の百工比照コレクションデータベース（2019年5月16日公開）

2-10 みんなく施設の利用

博物館施設の利用状況

●民博（展示場）を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

愛知教育大学(4)、追手門学院大学(250)、大阪大学(122)、大阪大谷大学(80)、大阪学院大学(61)、大阪芸術大学(17)、大阪工業大学(20)、大阪国際大学(14)、大阪樟蔭女子大学(16)、大阪城南女子短期大学(26)、大阪成蹊大学(45)、大阪人間科学大学(23)、岡山理科大学(10)、沖縄県立芸術大学(29)、追手門学院大学(60)、尾道市立大学(29)、金沢学院大学(8)、金沢星稜大学(102)、関西大学(123)、関西学院大学(69)、岐阜大学(17)、岐阜女子大学(52)、京都大学(15)、京都産業大学(27)、京都市立芸術大学(2)、京都精華大学(126)、京都造形芸術大学(70)、京都橘大学(175)、京都府立大学(40)、近畿大学(61)、高知大学(11)、甲南大学(75)、甲南女子大学(66)、神戸大学大学院(10)、神戸芸術工科大学(47)、神戸女学院大学(120)、神戸女子大学(80)、国際ファッション専門職大学(49)、滋賀県立大学(42)、実践女子大学(25)、四天王寺大学(6)、杉野服飾大学短期大学部(41)、杉野服飾大学(9)、スタンフォード大学 日本センター(7)、成安造形大学(32)、成蹊大学(4)、摂南大学(56)、園田学園女子大学(14)、拓殖大学(6)、中国学園大学(54)、中国短期大学(60)、筑波大学(9)、帝塚山学院大学(57)、東海大学(36)、東京大学(11)、東京芸術大学(18)、同志社大学(25)、東北学院大学(70)、東北芸術工科大学(9)、東北生活文化大学(26)、獨協大学(12)、奈良教育大学(27)、奈良芸術短期大学(21)、奈良県立大学(13)、梅花女子大学(55)、阪南大学(27)、姫路獨協大学(1)、兵庫県立大学(19)、福知山公立大学(6)、平安女学院大学(23)、別府大学(12)、法政大学(20)、桃山学院大学(27)、龍谷大学(170)、早稲田大学(14)

*注 利用申請手続きをおこなった大学・研究機関等

□来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

- ・70名近い学生を天候に関わりなくつれていける場所として、最も適格的である
- ・学科の性格に最も合った展示内容を有している
- ・セミナー室の利用を認めていただけるのでとても使いやすい
- ・企画展「旅する音楽」を見学するため
- ・造形美術に関連して、世界各地の文化を学ぶことができるため
- ・本学から近く、雨天でも活動が可能で、団体に利用できる食堂があるから
- ・周辺に太陽の塔や大阪日本民芸館などがあるから
- ・学芸員資格科目の見学実習のため
- ・日本にある博物館の中でも最大級の規模を持ち、設立の理念と経緯、研究・教育・展示の各方面における現在に至るまでの様々な取組など、国内の博物館のありようを学習するうえで民博は必ず見学しておくべき存在だと考えたため
- ・特別展「子ども／おもちゃの博覧会」を見学し、日本のおもちゃや子ども文化に対する学生の理解を促すため

- 「比較文化研究」という講座なので、異文化理解の最適の場所として選んだ
- 博物館実習の授業の一環で見学
- 異なる世界の文化について理解を深めるため
- 展示が質量ともに豊富であること
- 今回の課外授業をきっかけに博物館への関心を高めることができそうな施設であること
- 博物館資料保存論の授業として、保存・活用・收藏の実際を見学・体験できるため
- 大学から至便であり、世界各地の民族文化に関する資料が豊富である
- 民族衣装や染織品の展示方法を拝見させていただく場として利用
- 学生のリサーチのため図書室と展示場を使用したかったため
- アイヌ民族や琉球民族等の日本のマイノリティーグループについて学ぶため
- デザイン、イラストレーションの授業のインスピレーションになりそうと考えたから
- 海外の文化について広範に学ぶことができるため
- 社会学を専攻する学生なので、文化人類学的な素養を学ぶ必要があるため。

● 国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、京都文教学園 [大学・短期大学]、同志社大学 [文化情報学部・文化情報学研究科]、千里金蘭大学、学校法人立命館 [立命館大学]、学校法人塚本学院 [大阪芸術大学・大阪芸術短期大学・大阪芸術大学附属大阪美術専門学校※通信課程含む]、京都大学、京都市立芸術大学、同志社大学 [グローバル地域文化学部] (3,985)

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1) 既存施設・設備の有効活用への取組状況

- 施設の有効利用及び適切な管理のための施策の検討を行うために、施設マネジメント委員会を2019年度は10回開催した。

2) 施設の維持管理の取組状況

- 現行の建築関係基準に適合しておらず（既存不適格）、安全性に問題があった講堂（1981年建設）の客席ホール（450席）の吊り天井を現行基準に適合した構造とするため耐震改修工事を行った。
- 本館4階屋上の劣化した防水層の改修及び4階への夏場の断熱、遮熱効果を意図した対策等の屋上改修工事を行った。
- 自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。
- 安全対策として、館内（展示場・収蔵庫除く）の状況調査を行い、防災管理点検、安全巡視点検の結果と照合し、危険箇所の改善を行った。
- 衛生的環境を確保するため、2019年度も館内害虫駆除を行った。

※館内害虫駆除については、調達係へご確認ください。

3) 省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

- 昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知した。

2-11 受賞・特許

受賞

● 2019年度の職員受賞者

園田直子	2019年6月23日	文化財保存修復学会	第13回学会賞
末森 薫	2019年6月23日	文化財保存修復学会	第13回奨励賞
川瀬 慈	2019年7月15日	第6回鉄犬ヘテロトピア文学賞	

鈴木英明 2019年11月2日 第9回地域研究コンソーシアム研究作品賞

知的財産形成・特許出願など

●特許登録

発明の名称：案内装置

登録日：2019年5月24日

登録番号：特許第6528306号

発明者：平井康之、富本浩一郎、吉田憲司、日高真吾、山中由里子

発明の名称：展示台

登録日：2019年9月13日

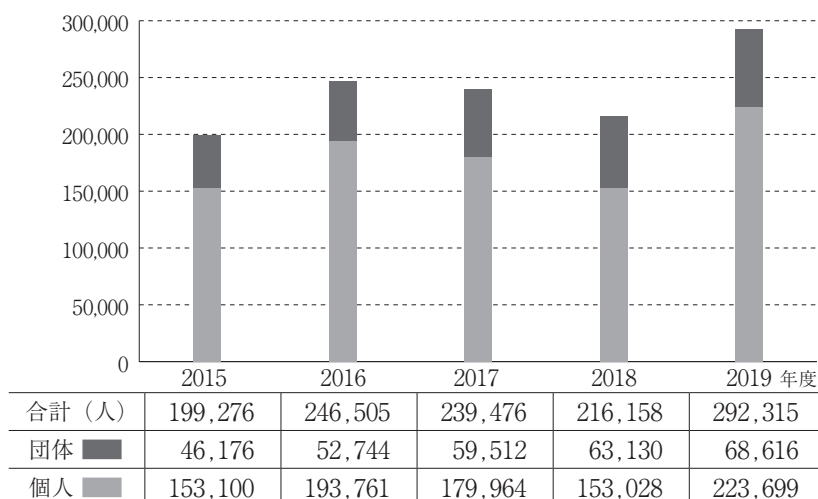
登録番号：特許第6583878号

発明者：日高真吾、上まり子、小谷竜介、和高智美

3 展示

入館者数

- 2019年度総観覧者数（共催展、巡回展含む） 523,902人
- 入館者数（5年間。共催展、巡回展除く）



本館展示

●本館展示プロジェクトチーム

	代表者	構成メンバー	(五十音順)
オセアニア展示	ピーター・マシウス	小野林太郎、菊澤律子、丹羽典生、林 勲男	
アメリカ展示	伊藤敦規	岸上伸啓*、齋藤 晃、齋藤玲子、鈴木七美、鈴木 紀、 關 雄二、八木百合子	
ヨーロッパ展示	新免光比呂	宇田川妙子、森 明子	
アフリカ展示	三島禎子	飯田 卓、池谷和信、川瀬 慈、鈴木英明、吉田憲司	
西アジア展示	菅瀬晶子	相島葉月、上羽陽子、西尾哲夫、山中由里子	
音楽展示	福岡正太	川瀬 慈、笹原亮二、寺田吉孝	
言語展示	菊澤律子	西尾哲夫、吉岡 乾、相良啓子	
南アジア展示	南 真木人	上羽陽子、寺田吉孝、松尾瑞穂、三尾 稔、吉岡 乾	
東南アジア展示	信田敏宏	小野林太郎、檜永真佐夫、平井京之介、福岡正太	
中央・北アジア展示	藤本透子	池谷和信、寺村裕史	
東アジア展示（朝鮮半島の文化）	太田心平		
東アジア展示（中国地域の文化）	河合洋尚	卯田宗平、韓 敏、奈良雅史、野林厚志	
東アジア展示（アイヌの文化）	齋藤玲子	岸上伸啓*、吉田憲司	
東アジア展示（日本の文化）	日高真吾	池谷和信、卯田宗平、笹原亮二、菅瀬晶子、出口正之、 寺村裕史、野林厚志、廣瀬浩二郎、南 真木人	
情報・インフォメーション	野林厚志	飯田 卓、伊藤敦規、寺村裕史、廣瀬浩二郎、福岡正太、 丸川雄三	
イントロダクション展示		※2019年度は、展示情報高度化事業実施部会が担当する。	

*は、兼任教授、特別客員教員、機関研究員等を示す

●特別展・企画展ワーキング

開催を予定する各特別展・企画展の実行委員会、本館展示プロジェクトリーダー（1～2名）

●本館展示の新構築（展示チームは一般公開日現在）

●アフリカ展示

一般公開 2009年3月26日～

アフリカ展示チームリーダー 飯田 卓

アフリカ展示チームメンバー（館内）池谷和信 川瀬 慈 竹沢尚一郎 三島禎子 吉田憲司

内容

人類誕生の地とされるアフリカは、常に外部世界と結びつきながら変化を重ねてきた。私たちが、現在目にするアフリカ大陸の中の、文化や言語の多様性は、そうした変化の結果にほかならない。新たに構築したアフリカ展示では、人びとの「歴史を掘り起こす」営みに目を向けるとともに、現在のアフリカに生きる人びとの生活のありさまを4つの「動詞」（憩う・働く・装う・祈る）のコーナーに分けて紹介する。

●西アジア展示

一般公開 2009年3月26日～

西アジア展示チームリーダー 山中由里子

西アジア展示チームメンバー（館内）上羽陽子 菅瀬晶子 西尾哲夫

内容

中東ともよばれる西アジアの人びとは、自分たちが暮らす地域をマシュリク（日出ずる地）とよび、マグリブ（日没する地）と呼ばれる北アフリカと深い関係を保ってきた。乾燥地帯が大部分を占め、遊牧を生業とする人びとが移動する一方、バグダードやカイロなどでは古来より都市文化が栄えてきた。多くの住民はムスリムだが、ユダヤ教やキリスト教発祥の地でもある。新たに構築した西アジア展示では、地域規模の変動の時代に移りゆく人びとの暮らしを紹介する。

●音楽展示

一般公開 2010年3月25日～

音楽展示チームリーダー 福岡正太

音楽展示チームメンバー（館内）川瀬 慈 笹原亮二 寺田吉孝

内容

私たち人類は、音や音楽によって意志や感情をつたえ、自分の位置を知り、訪れたことのない場所や過ぎ去った時に思いを馳せ、心を奮い立たせたり慰めたりしてきた。また、神仏や精霊など見ることのできない存在と交わってきた。この展示では、音や音楽と私たちの存在とのかかわりを、世界各地の「太鼓」、「ゴング」、「チャルメラ」、「ギター」等の例を通して考える。

●言語展示

一般公開 2010年3月25日～

言語展示チームリーダー 庄司博史

言語展示チームメンバー（館内）菊澤律子 西尾哲夫 八杉佳穂

内容

音声や身ぶりを媒体とすることばは、高度に発達した伝達手段で、感情から科学的な知識まで多くの情報を伝えることができる。文化の多様性を反映すると同時に、人間のもつ認知能力や創造性を生み出すことばは、人類のもつかけがえのない資産である。言語展示では、「言葉を構成する要素」、「言語の多様性」、「世界の文字」というテーマを中心に構成する。

●オセアニア展示

一般公開 2011年3月17日～

オセアニア展示チームリーダー ピーター・マシウス

オセアニア展示チームメンバー（館内）印東道子 菊澤律子 久保正敏 小林繁樹 須藤健一 丹羽典生
林 勲男

内容

海がほとんどの面積を占めているオセアニアには、大小数万をこえる島々が点在している。そこには、発達した航海術をもち、根栽農耕を営む人々が暮らしてきた。「移動と拡散」「海での暮らし」「島での暮らし」では、資源の限られた島環境で、さまざまな工夫をして生活してきた様子を展示している。「外部世界との接触」「先住民のアイデンティティ表現」では、外の世界と出会うなかで、人びとが伝統文化をどのように継承、発展させてきたかを紹介する。

• アメリカ展示

一般公開 2011年3月17日～

アメリカ展示チームリーダー 鈴木 紀

アメリカ展示チームメンバー (館内) 伊藤敦規 岸上伸啓 齋藤玲子 鈴木七美 齋藤 晃 關 雄二
八杉佳穂

内容

広大なアメリカ大陸には、極地から熱帯雨林まで、さまざまな自然環境が見られる。人びとは、それぞれの環境に応じた生活を営んできた。一方で、ヨーロッパ人による征服と植民の歴史を経験したこの地には、日常生活の隅々まで、外来の文化が浸透していった。ここでは衣、食、宗教に焦点をあて、アメリカ大陸の多様性と歴史の重なりを明らかにするとともに、土着の資源に現代的価値を見出そうとする芸術家や工芸家のすがたを紹介する。

• ヨーロッパ展示

一般公開 2012年3月15日～

ヨーロッパ展示チームリーダー 宇田川妙子

ヨーロッパ展示チームメンバー (館内) 庄司博史 新免光比呂 森 明子

内容

ヨーロッパは、16世紀から20世紀にかけて、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、さまざまな技術や知識を世界各地に移植した。現代、この流れが逆転するなかで、世界中からの移民とともに、彼らの文化も社会の一部となりつつある。ここでは、時間の流れに注目しながら伝統的な生活様式と宗教、近代の産業化、さらに現代の新しい動きが層をなしてヨーロッパをつくりあげていることを示している。

• 情報・インフォメーション

一般公開 2012年3月15日～

情報・インフォメーションチームリーダー 野林厚志

情報・インフォメーションチームメンバー (館内) 飯田 卓 伊藤敦規 田村克己 廣瀬浩二郎 福岡正太

内容

展示資料の情報を検索して調べることのできる「リサーチデスク」、研究者が取り組んでいる調査を紹介する「研究の現場から」、展示資料を見てさわって理解する「世界をさわる」の3つのコーナーを通して、みんなの研究や展示をより詳しく知ることができる。展示場で見た資料についてもっと知りたい、みんなの研究者って何を調査しているの、モノと身近に接してみたいという探究心を満たし、知識をさらに深める場としてご活用いただきたい。

• 東アジア展示 (日本の文化)

一般公開 「祭りと芸能」「日々の暮らし」 2013年3月22日～

「沖縄の暮らし」「多みんぞくニホン」 2014年3月20日～

東アジア展示(日本の文化)チームリーダー 日高真吾

東アジア展示(日本の文化)チームメンバー (館内) 池谷和信 近藤雅樹 笹原亮二 庄司博史 菅瀬晶子
野林厚志 出口正之

内容

北海道から沖縄県まで、南北に細長い日本列島は、多様な自然に恵まれている。こうした環境のなかで、隣接する諸文化と影響しあいながら、さまざまな地域文化を展開してきた。また、近年では多くの外国人が私たちの隣人として生活をともにしている。ここでは、「祭りと芸能」、「日々の暮らし」、「沖縄の暮らし」、「多みんぞくニ

ホン」という4つの角度から、日本文化の様相を展示している。

• 東アジア展示（朝鮮半島の文化）

一般公開 2014年3月20日～
東アジア展示(朝鮮半島の文化)チームリーダー 朝倉敏夫
東アジア展示(朝鮮半島の文化)チームメンバー (館内) 太田心平

内容

朝鮮半島の人びとは、外部の民族から影響を受けつつも、独自の文化を育んできた。有史以前は東シベリアの諸民族から、その後は中国から取り入れた文化要素を、独自のものに再編し、世界に例を見ないほど高度に統合された文化を獲得してきた。近代には日本に植民地支配され、独立後にはふたつの分断国家として急速な近代化を進めた。そして現代には、積極的に世界に進出する韓国人や、コリア系の海外生活者の姿も見られる。こうした文化の歴史的な重なりや躍動性を、精神世界、衣食住、あそびと知をテーマに紹介する。

• 東アジア展示（中国地域の文化）

一般公開 2014年3月20日～
東アジア展示(中国地域の文化)チームリーダー 塚田誠之
東アジア展示(中国地域の文化)チームメンバー (館内) 韓 敏 小長谷有紀* 田村克己 野林厚志
横山廣子

内容

中国地域では、広大な面積と高低差のある地形がうみだす多様な自然環境のもと、さまざまな民族文化が育まれてきた。漢族が人口の90%以上を占め、平野部を中心に全国に居住している。大陸の55の少数民族は、おもに西南、西北、東北地方の高地や草原に居住しており、台湾には漢族のほか先住のオーストロネシア系民族が居住している。また、世界各地に、中国を故郷とする華僑・華人がくらしている。多様な生活環境から生みだされたさまざまな民族の文化を、歴史や地域性をふまえ、生業、装い、楽器、住居、工芸、宗教と文字、漢族の婚礼や祖先祭祀、台湾の原住民族、華僑・華人をテーマに紹介する。

• 南アジア展示

一般公開 2015年3月19日～
南アジア展示チームリーダー 三尾 稔
南アジア展示チームメンバー (館内) 上羽陽子、杉本良男、寺田吉孝、松尾瑞穂、南 真木人、吉岡 乾、
竹村嘉晃*、豊山亜希*

内容

南アジア地域は、北部の山岳地帯から西はアラビア海沿岸、東はベンガル湾沿岸にいたるさまざまな自然環境のもと、多様な宗教や文化、生活様式をもつ人びとが共存しあう知恵を育んできた。経済発展が著しい現代においても、その知恵は保たれている。この展示では、宗教文化や生業・工芸の多様性、都市を中心とした活気あふれる大衆文化、またグローバル化のなかで花ひらく染織文化のすがたを紹介する。

• 東南アジア展示

一般公開 2015年3月19日～
東南アジア展示チームリーダー 信田敏宏
東南アジア展示チームメンバー (館内) 樫永真佐夫、佐藤浩司、平井京之介、福岡正太、吉田ゆか子*

内容

森と海に囲まれた東南アジア。熱帯・亜熱帯の気候にくらす人びとは、早朝の涼しい時間から働きはじめ、40度近くに達する日中は屋内で昼寝などをして暑さをしのぐ。夕方、スクールが通り過ぎた後は、少し暑さが和らぎ、人びとは買い物や農作業に出かける。日が落ちて涼しくなると、友人や家族と屋台に出かけたり、演劇を見たりして余暇を楽しむ。本展示場では、「東南アジアの1日」をテーマに、その多彩な民族文化を紹介する。

• 中央・北アジア展示

一般公開 2016年6月16日～
中央・北アジア展示チームリーダー 藤本透子

中央・北アジア展示チームメンバー (館内) 池谷和信、佐々木史郎、寺村裕史、小長谷有紀*

内容

中央・北アジアは、ユーラシア大陸の北東部を占める広大な地域である。古くから東西南北をむすぶ交渉路としての役割を担い、多様な民族が行き交っていた。20世紀に社会主義を経験した後、市場経済に移行し、グローバル化の波にさらされながら伝統を再評価する動きがみられる。「自然との共生」「社会主義の時代」というふたつの共通テーマをふまえて、「中央アジア」「モンゴル」「シベリア・極北」の3つの地域に生きる人びとの今を紹介する。

・アイヌの文化展示

一般公開 2016年6月16日～

アイヌの文化展示チームリーダー 齋藤玲子

アイヌの文化展示チームメンバー (館内) 伊藤敦規、岸上伸啓、佐々木史郎、吉田憲司、北原次郎太*

内容

アイヌは、北海道を中心に日本列島北部とその周辺に暮らし、寒冷な自然環境のもとで独自の文化をはぐくんできた先住民族である。江戸時代に幕府による支配が始まり、明治時代に同化がすすめられると、アイヌは差別を受け生活に困るようになった。しかし近年、日本政府はその歴史的事実を認め、アイヌ民族を尊重した政策に取り組みはじめた。ここでは、伝統を継承しつつ、あらたな文化を創造する人びとの姿を紹介する。

*併任教授、客員教員、特別客員教員、機関研究員等を示す

特別展示・企画展示など

●特別展示

特別展 「子ども／おもちゃの博覧会」

会 期 2019年3月21日(木・祝)～5月28日(火)

会 場 特別展示館

主 催 国立民族学博物館

企画協力 一般財団法人日本玩具文化財団

協 力 大妻女子大学、一般財団法人千里文化財団、総合地球環境学研究所

入場者 37,377名

実行委員長 笹原亮二

実行委員 (館内) 日高真吾、寺村裕史

(館外) 是澤博昭(大妻女子大学)、内田幸彦(埼玉県教育局)、後藤知美(埼玉県立歴史と民俗の博物館)、井上かおり(埼玉県立歴史と民俗の博物館)、杉山正司(埼玉県立歴史と民俗の博物館)、神野由紀(関東学院大学)、森下みさ子(白百合女子大学)、是澤優子(東京家政大学)、山田慎也(国立歴史民俗博物館)、濱田琢司(南山大学)、香川雅信(兵庫県立歴史博物館)、滝口正哉(千代田区教育委員会)、亀川泰照(荒川ふるさと文化館)、稲葉千容(今治市大三島美術館)、小山みずえ(武蔵野短期大学)

内容

日本の社会は、明治の海外からの技術や知識の伝来や、国家による軍隊や学校などの制度の施行、昭和の第二次世界大戦の敗戦などによって大きな変化をこうむり、その時々の子どものありようや人びとの子ども観に影響を与えた。この展示では、江戸時代から戦後のさまざまな玩具をつうじ、子どもや子どもをめぐる社会の変遷とその意味を探った。

特別展 「驚異と怪異——想像界の生きものたち」

会 期 2019年8月29日(木)～11月26日(火)

会 場 特別展示館

主 催 国立民族学博物館

後 援 NHK 大阪放送局

協 力 Muséum national d'histoire naturelle(国立自然史博物館、パリ)、
Museum Volkenkunde(国立民族学博物館、ライデン)、海遊館、国際日本文化研究センター、

- 出品協力 国立歴史民俗博物館、株式会社スクウェア・エニックス、一般財団法人千里文化財団、兵庫県立歴史博物館、湯本豪一記念日本妖怪博物館（三次もののけミュージアム）
- 企画協力 五十嵐大介、長谷川朋広
- 入場者 78,682名
- 実行委員長 山中由里子
- 実行委員 （館内）笹原亮二、松尾瑞穂
- 内容

なぜ人類は、この世のキワにいるかもしれない不思議な生き物を思い描き、形にしてきたのか？ 奇妙で怪しい、不気味だけどかわいい、世界の霊獣・幻獣・怪獣を集め、現代のアーティスト・漫画家・ゲームデザイナーたちによるクリーチャー制作も紹介し、妖怪やモンスターの源泉にある想像と創造の力を探った展示となった。

●企画展示

「旅する楽器——南アジア、弦の響き」

- 会 期 2019年2月21日(木)～5月7日(火)
- 会 場 企画展示場
- 主 催 国立民族学博物館
- 協 力 サンディップ・タゴール、東京国立博物館、トルコ共和国 ユヌス・エムレ インスティトゥート東京、一般財団法人千里文化財団
- 協 賛 エア・インディア
- 後 援 在大阪・神戸インド総領事館
- 入場者 41,400名
- 実行委員長 寺田吉孝
- 実行委員 （館内）福岡正太、田森雅一
（館外）小日向英俊（東京音楽大学）、谷 正人（神戸大学）、米山知子（関西学院大学）、ジェニファー・ポスト（アリゾナ大学音楽部）

内容

南アジアの弦楽器は、中央アジアや西アジアから伝えられた楽器が改良され定着したものが多く、そのいくつかは南アジアでの変容を経て東南アジア、東アジアにも伝えられた。本展示では、このような弦楽器の遙かな旅を、南アジアを中心に紹介した。

「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」

- 会 期 2019年6月6日(木)～9月10日(火)
- 会 場 企画展示場
- 主 催 国立民族学博物館
- 共 催 片倉もとこ記念沙漠文化財団、横浜ユーラシア文化館
- 協 力 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」（国立民族学博物館拠点・秋田大学拠点）、国立民族学博物館「フォーラム型情報ミュージアム」プロジェクト、国立民族学博物館「新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム 地域研究に関する地域研究画像デジタルライブラリ（DiPLAS）」
- 特別協力 サウジアラビア遺産観光庁、ワーディ・ファティマ社会開発センター、キング・ファイサル・センター、アナス・ムハンマド・メレー（ムスリム世界連盟日本代表理事）
- 後 援 サウジアラビアマッカ州、サウジアラビア労働社会発展省
- 特別協賛 アラムコ・アジア・ジャパン株式会社
- 入場者 34,180名
- 実行委員長 西尾哲夫
- 実行委員 （館内）菅瀬晶子、相島葉月、黒田賢治
（館外）縄田浩志（秋田大学）、遠藤 仁（秋田大学）、片倉邦雄（片倉もとこ記念沙漠財団）、

河田尚子（片倉もとこ記念沙漠財団）、藤本悠子（片倉もとこ記念沙漠財団）、
竹田多麻子（横浜ユーラシア文化館）

内容

1960年代末、急激な社会変化をむかえるサウジアラビア西部のオアシスで、文化人類学者の片倉もとは、当時ほとんど不可能と思われた長期調査をおこなった。そして「みられる私」ではなく「みる私」としてのサウジ女性の姿に気づいた。本展示では、片倉が現地で撮影した貴重な写真を手がかりに、半世紀後に実施した最新の追跡調査の成果を交えながら、飾面や民族衣装など個性的で色鮮やかな物質文化をとおして、サウジ女性の生活世界の変遷をたどった。

「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」

会 期 2019年10月10日(木)～12月24日(火)

会 場 企画展示場

主 催 国立民族学博物館

後 援 在日メキシコ大使館

入場者 52,336名

実行委員長 鈴木 紀

実行委員 (館内) 八木百合子

(館外) 山森靖人(関西外国語大学)、小林貴徳(関西外国語大学)、山越英嗣(早稲田大学)

内容

メキシコでは先スペイン時代にメソアメリカ文明が開花し、16世紀以降はヨーロッパ、アジア、アフリカからさまざまな文化が流入して、独自のものづくりの伝統が生まれた。アルテ・ポプラーとは、特別な才能に恵まれた芸術家の作品ではなく、職人や一般の人びとによる造形表現の総称である。本展示では、仮面や毛糸絵、陶器の資料とともに、骸骨(がいこつ)の姿があふれる都市の街路をイメージしたコーナーや典型的なアルテ・ポプラーである生命の木など、現在のメキシコのアルテ・ポプラーの多様な姿を紹介した。

●共催展示

国立民族学博物館・国立科学博物館 共同企画展「ビーズ——自然をつなぐ、世界をつなぐ」

会 期 2019年4月9日(火)～6月16日(日)

会 場 国立科学博物館

担当者 池谷和信

内容

東京・上野の国立科学博物館と共同で、それぞれの専門分野である民族学、自然科学の視点からビーズを眺め、双方の知見を合わせることで、ビーズと人類とのかかわり方を紹介する企画展示を開催した。

国立民族学博物館コレクション「世界のかわいい衣装」

会 期 2019年11月13日(水)～11月25日(月)

会 場 阪急うめだ本店9階 阪急うめだギャラリー

担当者 上羽陽子

内容

本館が所蔵するコレクションのなかから、「かわいい」をキーワードに選んだ、1920年代から現在までの衣装約120点を紹介した。これらを身につける人びとの世界に思いを馳せることは、私たちの装いについても問い直す機会となった。

●コレクション展示

「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」

会 期 2020年1月16日(木)～2月27日(木)

会 場 企画展示場

担当者 丹羽典生

内容

1932年のガラパゴス諸島に足を踏み入れ記録した日本人がいた。このコレクション展示では、アメリカの学芸員

で画家・写真家・剥製師でもあった朝枝利男がガラパゴスで撮影した写真を中心に彼のアルバム・日記・魚の水彩画について紹介した。

●巡回展示

「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」

会 期 2019年10月5日(土)～12月22日(日)

会 場 横浜ユーラシア文化館

担当者 西尾哲夫

内容

本館で開催した企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」(2019年6月6日～9月10日)を巡回展示した。

「子ども／おもちゃの博覧会」

会 期 2019年10月12日(土)～11月24日(日)

会 場 埼玉県立歴史と民俗の博物館

担当者 笹原亮二

内容

本館で開催した特別展「子ども／おもちゃの博覧会」(2019年3月21日～5月28日)を巡回展示した。

●その他

「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」

会 期 2020年1月7日(火)～2月10日(月)

会 場 文部科学省エントランス(新庁舎2階)

担当者 吉田憲司

内容

アフリカのモザンビークでは、1975年の独立後1992年まで続いた内戦の結果、戦争終了後も大量の武器が民間に残された。この武器を農具と交換することで回収し、武装解除を進めるとともに、回収された銃器を用いてアートの作品を生み出し、平和を人びとの心に根づかせようという、TAE(Transfomação de Armas em Enxadas / Transforming Arms into Plowshares)「銃を鋤に」というプロジェクトが進められ、内戦後の平和構築のモデルとして注目を集めている。2012年、このプロジェクトの一環として、フィエル・ドス・サントス、クリストヴァオ・カニャヴァート(ケスター)の二人のアーティストの手で、日本に住む人びとへのメッセージを込めて4点の作品が制作され本館におさめられた。この展示では、本館で収集した作品を展示し、アートを通じて平和を築く営みを紹介した。

展示関連出版物およびプログラム

●特別展示

「子ども／おもちゃの博覧会」

発行日 2019年3月21日

編 者 笹原亮二

発 行 国立民族学博物館

「驚異と怪異——想像界の生きものたち」

発行日 2019年8月29日

編 者 山中由里子

発 行 国立民族学博物館

●ビデオテークブースで公開した番組

「王の祭り——仮面の王国マンコン、カメルーン高地」(番組番号1757)

制作監修：飯田 卓、端 信行

カメルーン高地に現在もその伝統がみられる王政社会の最大の行事は、数年に一度催される、王とともに踊る「王の祭り」である。

「民博でのカムイノミ——2016年度「ミンパク オッタ カムイノミ」の記録」(番組番号1758)

制作監修：齋藤玲子

民博に収蔵されているアイヌ民族資料の安全な保管と継承を願い、開催されたカムイノミ（儀式）のようすを短くまとめたものである。

「王の祭り——仮面の王国マンコン、カメルーン高地」(番組番号7249)

制作監修：飯田 卓、端 信行

カメルーン高地に現在もその伝統がみられる王政社会の最大の行事は、数年に一度催される、王とともに踊る「王の祭り」である（映像民俗誌）。

「オアシス都市のくらし——ウズベキスタン・サマルカンドの食文化」(番組番号7250)

制作監修：寺村裕史

バザール（市場）での買い物から、羊肉の調理やパン焼きの様子など、「食」をつうじてオアシス都市でのくらしぶりを紹介する。

「アシェンダ！エチオピア北部地域社会の女性のお祭り」(番組番号7251)

制作監修：川瀬 慈

アシェンダはエチオピア北部において開催されるお祭りです。はなやかに着飾った若い女性のグループが太鼓をたたきながら家々の軒先で歌い踊ると同時に、道行く人々を祝福する。

「ジャワ島の仮面芝居ワヤン・トベン」(番組番号7071)

制作監修：福岡正太

仮面舞踊劇ワヤン・トベンの上演の記録。みにくい若者が、神の助けにより美しい武将パンジに変身し、美しい姫と結ばれる。

「西ジャワの仮面舞踊トベン・チルボン」(番組番号7072)

制作監修：福岡正太

西ジャワ北海岸の町チルボン周辺でさかんな仮面舞踊。王族の墓所前の広場でおこなわれた上演と村の儀礼における上演の記録。

「ジャワ島の影絵人形芝居ワヤン・クリット」(番組番号7073)

制作監修：福岡正太

ジャワ島中部の影絵芝居の上演、人形作り、ゴング作りの記録。マハーバーラタの登場人物ビモがいけにえを要求する怪物をたおす。

「スンダ人の伝統音楽と楽器」(番組番号7075)

制作監修：福岡正太

竹の楽器アングルンとチャレン、竹笛スリン、太鼓クンダン、胡弓ルバップ。西ジャワのスンダ人の楽器とその音楽を紹介する。

「ワヤンとマハーバーラタの物語」(番組番号7076)

制作監修：福岡正太

『マハーバーラタ』はインド起源の長大な叙事詩だ。ジャワ島の芸能ワヤンが描く、その魅力的な登場人物たちを紹介する。

「ジャワ島チルボンの木偶人形芝居——ワヤン・ゴレック・チュパック」(番組番号7077)

制作監修：福岡正太

ワヤン・ゴレック・チュパックは、ジャワ島西部北海岸の町チルボンで盛んな人形芝居。その上演と人形製作の過程を紹介する。

●マルチメディア番組

該当なし

●「みんなく電子ガイド」プログラム数（2020年3月31日現在）

展示プロジェクト地域	プログラム数			
	日本語版	中国語版	英語版	韓国語版
オセアニア	23	23	23	23
アメリカ	27	27	27	27
ヨーロッパ	12	12	12	12
アフリカ	17	17	17	17
西アジア	16	16	16	16
南アジア	40	40	40	40
東南アジア	32	32	32	32
中央・北アジア	30	30	30	30
東アジア				
朝鮮半島の文化	47	47	47	47
中国地域の文化	39	39	39	39
アイヌの文化	10	10	10	10
日本の文化	35	35	35	35
音楽	0	0	0	0
言語	0	0	0	0
総計	各 328			

4 国際連携と研究協力

海外研究機関との研究協力協定

国(地域)名	ペルー
相手機関名	国立サン・マルコス大学
協定書等名	国立民族学博物館とペルー・国立サン・マルコス大学との間における考古学調査と学術交流に関する協定
締結日	2005年6月14日
協定終了予定日	2020年5月17日
目的	考古学分野における共同調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流の促進。
協定内容	パコパンパ考古学プログラム

国(地域)名	台湾
相手機関名	順益台湾原住民博物館
協定書等名	国立民族学博物館と順益台湾原住民博物館との学術協力協定書
締結日	2006年7月1日
協定終了予定日	2020年3月31日
目的	台湾原住民に関する学術調査、研究を推進する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none">台湾原住民族の現代的動態に関わる人類学的、言語学的、歴史学的調査国立民族学博物館ならびに他の博物館に収蔵されている台湾原住民族関連の資料に係る調査上記に係る報告書ならびに研究誌の発行

国(地域)名	韓国
相手機関名	国立民俗博物館
協定書等名	国立民族学博物館と大韓民国国立民俗博物館との文化交流協定
締結日	2007年7月11日
協定終了予定日	2022年6月14日
目的	学術、文化交流を通して友好関係を強化し、この関係を発展させる。
協定内容	<ul style="list-style-type: none">国際共同展示に係る協定教職員及び研究者の交流共同研究及び研究集会の実施博物館の展示及び教育活動に関する協力学術的情報及び出版物の交換両機関で合意されたその他の事業

国(地域)名	中国
相手機関名	内蒙古大学
協定書等名	国立民族学博物館と中華人民共和国内蒙古大学との学術協力の協定
締結日	2008年9月22日
協定終了予定日	2023年5月22日
目的	相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none">双方の教職員・研究者の交流研究プロジェクトの展開博物館展示品の展覧及び教育分野における協力活動学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開その他両機関で合意された分野における協力

国(地域)名	台湾
相手機関名	国立台北芸術大学
協定書等名	国立民族学博物館と台湾国立台北芸術大学との学術協力の協定
締結日	2009年5月15日

協定終了予定日	2024年5月14日
目的	相互の学術交流と両者の発展を目的とした学術協力関係を築く。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> • 双方の教職員・研究者の交流 • 研究プロジェクトの展開 • 博物館展示品及び教育分野における協力活動 • 学術研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の促進 • その他両機関で合意された分野における協力
国(地域)名	英国
相手機関名	エジンバラ大学
協定書等名	国立民族学博物館と英国・エジンバラ大学との研究交流協定
締結日	2010年5月17日
協定終了予定日	2020年5月16日
目的	相互理解と互酬性の原則に則り、両機関の学術研究交流を強化し、発展させる。
協定内容	学術研究に関し、両機関が合意する事業の交流・協力
国(地域)名	ロシア
相手機関名	ロシア民族学博物館
協定書等名	国立民族学博物館とロシア民族学博物館との間の博物館学及び文化研究の分野における学術協力に関する協定
締結日	2010年12月3日
協定終了予定日	2020年12月2日
目的	博物館学、調査研究、文化財保護の各分野における協力・相互支援関係を樹立する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> • 両博物館が保有する歴史的、文化的財産の保存状態改善を目的としたプロジェクトの支援 • 両博物館の研究者交流 • ロシア民族学博物館が実施するシベリア、中央アジア、極東、北コーカサスでの民族学的フィールドワークへの民博の研究者の参加 • 両博物館が指名する経理、データベース構築、収集品の考証、資料の分類、保存科学などの諸分野の専門家の交流
国(地域)名	ロシア
相手機関名	ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クストカメラ）
協定書等名	国立民族学博物館とロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クストカメラ）との間の協力および文化交流に関する協定
締結日	2011年10月21日
協定終了予定日	2021年10月20日
目的	学術、文化の両分野において相互交流および協力関係を発展させる。
協定内容	<p>野外調査および学術・理論的研究、博物館関連活動の分野における交流を以下の項目について実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 教職員の交流 • 野外調査、学術・理論的研究、学術集会の共同実施 • 展示および教育プロジェクトの共同実施 • 学術情報および刊行物の交換 • 両博物館の合意による、その他のあらゆる学術分野の活動
国(地域)名	ベトナム
相手機関名	生態学生物資源研究所
協定書等名	国立民族学博物館とベトナム生態学生物資源研究所の学術協力に関する協定
締結日	2012年3月22日
協定終了予定日	2021年6月6日

目的 相互の理解、利益および協力の原則に基づいて学術研究および交流の強化、発展のために本契約を締結する。

協定内容 共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進

国(地域)名 米国

相手機関名 アシウィ・アワン博物館・遺産センター

協定書等名 国立民族学博物館とアシウィ・アワン博物館・遺産センターの学術協力に関する協定

締結日 2012年6月3日

協定終了予定日 2022年6月2日

目的 相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。

協定内容

- 双方の教職員・研究者の交流
- 共同研究プロジェクトの展開
- 博物館資料の展覧および教育分野における協力活動
- 学術研究資料、学術情報および公開出版物についての交換と相互利用の展開
- その他両機関で合意された分野における協力

国(地域)名 フィリピン

相手機関名 フィリピン国立博物館

協定書等名 国立民族学博物館とフィリピン国立博物館の学術協力に関する協定

締結日 2012年7月18日

協定終了予定日 2023年1月16日

目的 相互の理解、利益および協力の原則に基づいて学術研究および交流の強化、発展のために本契約を締結する。

協定内容 共同研究、研修、出版、展示等に関するプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進

国(地域)名 中国

相手機関名 中国社会科学院民族学・人類学研究所

協定書等名 国立民族学博物館と中国社会科学院民族学・人類学研究所との学術交流協定

締結日 2012年8月28日

協定終了予定日 2021年8月27日

目的 両機関の学術交流を通して国際的な連携を進めるため、平等互惠と相互尊重の理念のもとに、この協定を締結する。

協定内容

- 研究プロジェクトの展開
- 双方の教員・研究者交流
- 研究資料、学術情報及び公開出版物についての交換と相互利用の展開
- その他両機関で合意された分野における協力

国(地域)名 米国

相手機関名 北アリゾナ博物館

協定書等名 国立民族学博物館（日本国 大阪）および北アリゾナ博物館（米国 アリゾナ州 フラッグスタッフ）との学術協力・協働協定書

締結日 2014年7月4日

協定終了予定日 2024年7月3日

目的 学術交流・研究を強化・発展させる。

協定内容 より一層の交流、情報共有、協力関係、良質な民族誌的記録向上を目的として、博物館やソースコミュニティと共に諸活動を研究・促進するプロジェクトの発展のために協働する。

国(地域)名 台湾

相手機関名 国立台湾歴史博物館

協定書等名 国立民族学博物館と国立台湾歴史博物館との間の学術研究交流に関する協定書

締結日	2015年10月16日
協定終了予定日	2021年10月15日
目的	相互に理解と友好を深め、両機関における学術研究交流を促進する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> • 研究者の交流 • 共同研究及び研究集会の実施 • 博物館の展示や教育活動に関する協力 • 学術情報及び出版物の交換 • その他両機関が合意した事項
国(地域)名	米国
相手機関名	ヴァンダービルト大学
協定書等名	国立民族学博物館（日本国）とヴァンダービルト大学（アメリカ合衆国）との協定合意書
締結日	2016年1月15日
協定終了予定日	2021年1月14日
目的	両機関が友好と相互平等と利益互恵の原則に基づいて学術的に協力・協同する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> • 講演会やシンポジウム、研究会における協力 • 共同研究 • 文化交流
国(地域)名	中国
相手機関名	浙江大学人類学研究所・図書館
協定書等名	日本国国立民族学博物館と中華人民共和国浙江大学人類学研究所・図書館との学術交流に関する協定書
締結日	2016年4月19日
協定終了予定日	2021年4月18日
目的	両機関の刊行物をお互いに寄贈することにより、民博側は浙江大学に創設された「民博文庫」の充実に努め、浙江大学側は民博図書館における中国（語）関係資料の充実に努める。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> • 研究者などの人材交流 • 人類学及び人類学資料事業に関する研究 • 学術出版物の寄贈 • その他協定の目的のために両機関が必要と認める活動に関すること
国(地域)名	カナダ
相手機関名	ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館（UBC）
協定書等名	日本・国立民族学博物館とブリティッシュコロンビア大学人類学博物館の学術協力に関する協定書
締結日	2017年3月9日
協定終了予定日	2022年3月8日
目的	研究交流や人材交流を行い、両博物館における研究活動や博物館活動を促進・活性化させる。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> • 研究者などの人材交流 • 人類学及び人類学資料事業に関する研究 • 学術出版物の寄贈
国(地域)名	イラン
相手機関名	イラン国立博物館
協定書等名	イラン・イスラム共和国・イラン国立博物館および日本・国立民族学博物館の博物館協力に関する覚書
締結日	2017年11月8日
協定終了予定日	2022年11月7日
目的	両博物館の文化・研究分野の協力強化。
協力分野	<ul style="list-style-type: none"> • 共同研究プロジェクトに関すること

- 刊行物の交換に関すること
- 共同で行う展示に関すること
- 学術調査、博物館学（技術者研修）、標本資料の保存・修復分野における専門研究者の交流に関すること
- 博物館学、保存、修復分野に関する共同ワークショップ、会議、セミナー、シンポジウム開催に関すること
- 実験研究分野での連携協力に関すること
- インターネット、デジタル資源の共同作業と共有に関すること

国(地域)名 台湾
 相手機関名 客家文化発展センターおよび交通大学客家文化学院
 協定書等名 国立民族学博物館と客家委員会客家文化発展センター、交通大学客家文化学院との間の三者学術研究交流に関する協定
 締結日 2017年12月16日
 協定終了予定日 2023年12月15日
 目的 三者間の学術研究交流の推進。
 協定内容

- 研究者、教職員、職員の交流
- 共同研究及び研究集会の実施
- 博物館展示や教育活動に関する交流と協力
- 学術情報及び出版物の交換と使用
- その他三機関が合意した事項

国(地域)名 ザンビア
 相手機関名 国立博物館機構
 協定書等名 国立民族学博物館と国立博物館機構との間の学術協力に関する協定
 締結日 2018年8月12日
 協定終了予定日 2023年8月11日
 目的 相互に理解を深め、両機関の学術協力を通して友好関係を強化する。
 協定内容

- 研究者・学芸員、その他の研究職員の交流
- 共同研究及び研究集会の実施
- 博物館の展示や教育活動、研修事業に関する協力
- 関連分野に関する学術情報及び出版物の交換
- 学術専門集会、フォーラムおよび協議会への相互の招待

国(地域)名 インドネシア
 相手機関名 国立考古学研究センター
 協定書等名 インドネシア・国立考古学研究センターおよび日本・国立民族学博物館との共同調査研究に関する覚書
 締結日 2019年6月10日
 協定終了予定日 2021年6月9日
 目的 インドネシア国内での国際共同調査の実施、および研究成果の共有。
 協定内容

- インドネシア国内における共同研究の推進
- 学術情報及び出版物の交換と使用
- 博物館展示に関する交流と協力
- その他、両機関が必要と認める研究活動の実施

国(地域)名 ウズベキスタン
 相手機関名 ウズベキスタン共和国科学アカデミー ヤフヨ・グロモフ考古学研究所
 協定書等名 ウズベキスタン・ウズベキスタン共和国科学アカデミー
 ヤフヨ・グロモフ考古学研究所および日本・国立民族学博物館との学術協力に関する協定書

締結日	2019年9月19日
協定終了予定日	2024年9月18日
目的	国際共同発掘調査・研究、研究者交流、考古学に関する資料や情報の交換等・研究者・学芸員などの人材交流。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> • 考古学、人類学、地理学、保存科学、その他関連分野に関する共同研究の推進 • カフィル・カラ遺跡とその周辺遺跡の発掘調査、ならびにザラフシャン川中流域の遺跡踏査および測量調査 • 博物館展示や教育活動、研修事業に関する交流と協力 • その他、両機関が必要と認める研究活動の実施
国(地域)名	バングラデシュ
相手機関名	バングラデシュ農業大学
協定書等名	バングラデシュ農業大学および日本・国立民族学博物館との学術研究交流に関する協定書
締結日	2019年11月3日
協定終了予定日	2023年11月2日
目的	相互理解、相互利益及び協力関係の原則に基づいた学術研究及び学術交流の強化・促進。
協定内容	学術研究と共同研究、研修、出版、展示プロジェクトにおける学術研究及び研究交流の推進
国(地域)名	ケニア
相手機関名	ケニア国立博物館群
協定書等名	ケニア国立博物館群および日本国立民族学博物館による学術・文化・教育面での交流促進に関する覚書
締結日	2019年11月7日
協定終了予定日	2022年11月6日
目的	平等で互利的な関係のもとに、文化と博物館に関する研究と教育の分野での協働にむけて合同して活動する。
協定内容	<ul style="list-style-type: none"> • 共同調査プロジェクトの実施 • 講演会、シンポジウム、共同展示の実施 • 調査に関わる情報と資料の交換 • 文化ならびに博物館学に関する交流プログラムの振興 • 研究スタッフの交流に関する協力
国(地域)名	タイ
相手機関名	カセサート大学林学部
協定書等名	タイ・カセサート大学林学部および日本・国立民族学博物館との学術研究交流に関する協定書
締結日	2019年11月22日
協定終了予定日	2023年11月21日
目的	相互理解、相互利益及び協力関係の原則に基づいた学術研究及び学術交流の強化・促進。
協定内容	共同研究、研修、出版、展示に関わるプロジェクトにおいて、学術研究および交流を推進する

MINPAKU Anthropology Newsletter

Newsletter 48 (June 2019)

Special Theme: Education at the Museum

Doctoral Studies at Minpaku	_____	Taeko Udagawa
Annual Junior Researcher's Seminar	_____	Hironao Kawai
MMP: Official Volunteers for Minpaku	_____	Masayuki Deguchi
Minpaku Sama-Sama School: for People with Intellectual Disabilities	_____	Toshihiro Nobuta

Special Theme: Special Research Project

- Performing Arts and Conviviality ————— Yoshitaka Terada
 Musical Conviviality in the otto & orabu Ensemble ————— Mia Nakamura
 Musicking for Conviviality, Solidarity and Peacebuilding ————— Olivier Urbain
 Intention, Connection, and Convivência ————— Deborah Wong

みんぱくフェローズ

客員研究員等で国立民族学博物館に在籍した研究者で、帰国後も継続的な関係を維持するためにMINPAKU Anthropology Newsletterを送付している研究者、および国立民族学博物館と関連の深い国内外の研究機関で、MINPAKU Anthropology Newsletterを送付している機関。

アジア・中東・オセアニア		ヨーロッパ		北米・中南米		アフリカ	
アラブ首長国連邦	2	アイスランド	2	アルゼンチン	1	エジプト	15
アルメニア	7	イタリア	2	米国	154	エチオピア	6
イスラエル	11	英国	45	エクアドル	3	ガーナ	3
イラン	1	オーストリア	3	カナダ	18	カメルーン	1
インド	13	オランダ	9	ガイアナ	2	ケニア	3
インドネシア	17	キプロス	1	コロンビア	2	コートジボワール	1
オーストラリア	23	ギリシャ	1	ジャマイカ	4	ザンビア	13
韓国	31	スイス	4	チリ	1	スーダン	2
サウジアラビア	3	スウェーデン	9	パラグアイ	1	エスワティニ	2
サモア	4	スペイン	2	ブラジル	5	セーシェル	2
シンガポール	5	スロベニア	1	ペルー	13	タンザニア	2
スリランカ	3	セルビア	1	ボリビア	3	ナイジェリア	3
ソロモン諸島	3	チェコ	3	ホンジュラス	1	ナミビア	1
タイ	27	デンマーク	3	メキシコ	4	ボツワナ	2
台湾	30	ドイツ	27			マダガスカル	2
中国	189	ノルウェー	3			マリ	1
トルコ	5	フィンランド	1			南アフリカ	5
ニュージーランド	3	フランス	18			モーリタニア	1
日本	201	ブルガリア	3				
ネパール	6	ベルギー	3				
パキスタン	1	ポーランド	5				
バヌアツ	1	ポルトガル	3				
パプアニューギニア	3	マケドニア	1				
パレスチナ	7	ルーマニア	2				
フィジー	9	ロシア	14				
フィリピン	7						
ブータン	3						
ブルネイ	1						
ベトナム	7						
香港	3						
マレーシア	10						
ミャンマー	11						
モンゴル	8						
ヨルダン	8						
ラオス	4						
小 計	667	小 計	166	小 計	212	小 計	65
総 計							1110

「博物館とコミュニティ開発」コース

国際協力事業団（JICA）が主宰し、本館が中心となって1994年から10年間実施してきた「博物館技術（収集、保存、展示）コース」は、開発途上国における諸博物館の技術向上と、博物館間の国際的ネットワーク構築に大いに貢献してきた。また、その過程を通じて、本館はじめわが国の博物館関係者も、研修参加者から多くのことを学ぶことができた。

研修コースの設置から10年の節目を迎えた2003年、国際協力事業団は独立行政法人国際協力機構に衣替えし、本館もまた、2004年4月より法人化し、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の1機関となった。この機に当たり、改めて過去10年の成果を点検し、いくつかの点でコースの改変を行い、2004年度からは「博物館学集中コース」として再出発した。

この新たな「博物館学集中コース」は、本館がJICAから全面的な事業委託を受け、滋賀県立琵琶湖博物館と協同で運営することとなった。もとより、研修の実施に際しては、国内の多くの博物館・美術館とその関係者から協力をあおぐことはいうまでもない。本館のもつ国際的ネットワークは、対象国の博物館事情を踏まえた研修実施に不可欠な要因であり、またその先進的な情報・資料管理や博物館運営は、研修に大きな効果をあげている。その一方で、研修員の多くにとって切実な問題である、自らの属するコミュニティの資料を収集・整理し、展示するという課題については、主として海外資料の収集・展示に関わる人文社会系の博物館である本館での研修に限界があることも事実である。そこで、2004年度からの新しいコースでは、自然科学系の博物館としてこの分野の活動で先進的な業績をあげている、琵琶湖博物館と密接に連携することで、より充実した研修を進めている。また、研修プログラムの設定にあたっては、各講義を講師による一方向の教育ではなく、講師と研修員とが自らの経験や知識を共有する議論の場として位置付け、相互に学び合うコースとなるように留意している。

その後、2009年度からは、JICA 集団研修全体の枠組みが大きく変更され、3年間を一区切りとして、その間は研修員受入れ割り当て国を変更しない、という基本原則が定められた。日本の国際協力事業全体を見直す動きの中で、同一国に継続的な協力を行ってその結果が現地に確実に還元される仕組みを作り、それを3年ごとに確認して当該コースを継続すべきかを外部評価の判断にゆだねる、というJICAの方針から、このような枠組みの変更が行われたものである。しかし、本館としては、この枠組みの変更に際し、博物館関係者を3年間にわたり継続して派遣することが困難な国も多いことを勘案して、「大きな需要を持ちながらも博物館人材の少ない国を切り捨てる結果に陥らないこと」を要望してきた。その結果、2012年度以降は、JICAが各国に向けて要望調査を行う際の、割り当て国の固定をやめ、全世界に要望調査を行うことになった。2015年度においては、「博物館学集中コース」を博物館が地域社会に果たす役割により重点を置いたコースへと改組し、合わせて「博物館とコミュニティ開発」コースへと名称変更を行った。さらに、2018年度より琵琶湖博物館が展示刷新のため本コースの運営を辞退し、本館単独での運営となった。

2019年度は、アルメニア、インドネシア、エジプト、ザンビア、スーダン、パレスチナ、フィジー、ブータンの8か国・地域から10名の研修員を受け入れ、8月30日から11月22日まで研修を行った。本館における講義・実習等の実施だけでなく、9月1日から7日に開催された第25回ICOM（国際博物館会議）京都大会2019に参加し、9月3日には過去の研修員とともにセッションを実施したほか、新潟県中越地震の被災地や中越メモリアル回廊、東京国立博物館や国立科学博物館、横浜美術館、三重県総合博物館、広島平和記念資料館などへの研修旅行も行った。

また研修員全員が、自国の博物館の活動や課題を報告し、検討する「公開フォーラム世界の博物館2019」を2019年10月26日に国立民族学博物館で開催した。67名の参加者があり、報告者と活発な意見交換を展開した。また、全期間にわたって日本のさまざまな博物館関係者と直接ふれあい、その一部の現場を訪ねることで、研修員が日本側の経験に学ぶと同時に、日本側も研修員の目を通して、日本の博物館の持っている可能性と課題に気づかされるなど、たがいに経験と知見を分かちあうことができたと考えられる。

● 「博物館とコミュニティ開発」コース研修員

KARAPETYAN Julietta (カラペティアン ジュリエッタ) アルメニア

————— アルメニア歴史博物館 考古部 主任研究員

TASHI Sangay (タシ サンゲイ) ブータン

————— ザ・ロイヤル・ヘリテイジ・ミュージアム 文化部 シニア・キュレーター

MOHAMED Alzahraa Saifeldien Selim (モハメッド アルザハラ セイフディン サリン) エジプト
————— エジプト考古学博物館 第4課-新王国・ユーヤ・トーヤコレクション キュレーター/管理官

VAVALOA William Southwick (ババロア ウィリアム サウスウィック) フィジー
————— フィジー博物館 展示課 展示助手

MAISARAH Sarona (マイサラ サロナ) インドネシア
————— アチェ津波博物館 博物館マーケティング マーケティング製品専門職員

GHAZAL Walaa A A (ガザル ワラ) パレスチナ
————— 観光・遺跡庁 博物館・遺跡局 キュレーター

Elnzeer Tirab Abaker Haroun (アルナジール ティラブ アバカール ハロン) スーダン
————— スーダン国立博物館 シニア・キュレーター

ZULU Betty (ズル ベティ) ザンビア
————— チョマ博物館・工芸センター 歴史課 管理助手

HAKOOLA Alfred (ハコラ アルフレッド) ザンビア
————— ルサカ国立博物館 図書館 司書

MWIINDE Shamu Ephason (ムインデ シャム エファソン) ザンビア
————— リビングストーン博物館 保存課 保存助手

国内研究機関等との研究連携、協力の推進

相手機関名	日本文化人類学会
協定名	人間文化研究機構国立民族学博物館と日本文化人類学会との連携に関する協定
締結日	2008年2月27日
概要	研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用を促進し、もって人類社会における学術の発展と普及に寄与する。
終了予定日	なし
相手機関名	金沢大学
協定名	大学共同利用機関法人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人金沢大学との連携・協力に関する協定
締結日	2014年3月23日
概要	金沢大学と民族学博物館とのこれまで長年にわたり培ってきた信頼関係と連携・協力の実績を基盤に、より緊密かつ組織的に行う体制強化を図る。
終了予定日	2020年3月31日
相手機関名	立命館大学
協定名	国立民族学博物館と立命館大学との学術交流に関する協定書
締結日	2014年4月10日
概要	食に関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力を行う。
終了予定日	2024年4月9日
相手機関名	大阪工業大学
協定名	国立民族学博物館と大阪工業大学との学術交流に関する協定書
締結日	2015年3月23日

概要	情報メディア・デジタルコンテンツに関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力をを行う。
終了予定日	2025年3月22日
相手機関名	株式会社海遊館
協定名	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と株式会社海遊館との連携・協力に関する協定
締結日	2015年11月19日
概要	産学連携の推進、学術研究の振興、研究成果による社会貢献、その他の諸活動の発展に向けた連携協力をを行う。
終了予定日	2020年3月31日
相手機関名	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
協定名	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との連携・協力に関する協定
締結日	2015年11月25日
概要	世界諸地域の言語と文化に関する学術研究、その他の諸活動の発展に向けた連携協力をを行う。
終了予定日	2022年3月31日
相手機関名	神戸大学大学院人文学研究科
協定名	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人神戸大学大学院人文学研究科との学術交流に関する協定
締結日	2016年7月15日
概要	研究教育のための学術交流を推進する。
終了予定日	2022年3月31日
相手機関名	大妻女子大学
協定名	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と大妻女子大学との学術交流・協力に関する基本協定書
締結日	2017年6月20日
概要	研究・教育活動全般における学術交流を推進し、相互の研究・教育の一層の進展と地域社会及び国内外の発展に資する。
終了予定日	2020年6月19日
相手機関名	山形大学
協定名	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館と国立大学法人山形大学との学術交流・協力に関する基本協定書
締結日	2018年2月16日
概要	研究・教育活動全般における学術交流・協力を推進し、相互の研究・教育の一層の進展と地域社会及び国内外の発展に資する。
終了予定日	2021年2月15日
相手機関名	大阪大学
協定名	国立民族学博物館と大阪大学との学術交流に関する協定書
締結日	2018年3月17日
概要	学術研究、教育、社会貢献及びその他諸活動の発展に資する。
終了予定日	2022年3月16日
相手機関名	京都造形芸術大学
協定名	人間文化研究機構国立民族学博物館と京都造形芸術大学との学術交流・協力に関する基本協定書

締結日	2018年3月19日
概要	研究・教育活動全般における学術交流・協力を推進し、相互の研究・教育の一層の進展と地域社会及び国内外の発展に資する。
終了予定日	2021年3月18日
相手機関名	一般社団法人文化財保存修復学会
協定名	人間文化研究機構国立民族学博物館と一般社団法人文化財保存修復学会との学術交流・協力に関する基本協定
締結日	2018年11月19日
概要	文化財保存のための基礎研究を行う研究者、実際に文化財の修復を行う修復家、美術館・博物館の学芸員、将来の専門家を育成する教育機関の関係者、専門家を志す学生などさまざまな立場の会員が集まり、文化財の保存に関わる科学・技術の発展と普及を図る。
終了予定日	2021年11月18日
相手機関名	日本展示学会
協定名	人間文化研究機構国立民族学博物館と日本展示学会との学術交流・協力に関する基本協定
締結日	2018年11月26日
概要	両機関が行う研究・教育活動全般における学術交流・協力を推進し、相互の研究・教育の一層の進展と地域社会及び国内外の発展に資する。
終了予定日	2021年11月25日
相手機関名	大阪府
協定名	大阪府と国立民族学博物館との手話言語に係る連携協力に関する協定書
締結日	2019年8月28日
概要	手話言語学の分野において、相互に連携の強化を図り、双方の発展と充実に寄与する。
終了予定日	2020年8月27日
相手機関名	一般社団法人東洋音楽学会
協定名	一般社団法人東洋音楽学会と人間文化研究機構国立民族学博物館との連携に関する協定
締結日	2019年11月3日
概要	研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用を促進し、もって音楽文化の持続可能な発展と、音楽文化研究の深化に寄与する。
終了予定日	2022年11月2日
相手機関名	神奈川大学日本常民文化研究所
協定名	神奈川大学日本常民文化研究所と国立民族学博物館との学術交流に関する協定
締結日	2020年3月26日
概要	両機関が行う研究活動全般における学術交流・協力を推進し、相互の研究の一層の進展と日本の文化人類学・民俗学等の発展に資する。
終了予定日	2025年3月25日

概観

高校生の観覧料無料化

次世代を担う高校生の文化人類学・民族学への興味を深める機会を拡大し、国際理解教育の充実に貢献するために、2019年6月6日から高校生の観覧料を無料とした。年度途中からの実施ではあったが、高校生の団体見学件数は前年度から25%程度増加した。

地域に根ざした広報活動

2015年に開業した大型複合施設エキスポシティ内にある吹田市情報発信プラザ「Inforestすいた」で1カ月間（9月2日～9月30日）、「みんぱくフェア」を開催した。標本資料を利用した顔出しパネルを設置するなど、研究・展示活動を発信し、本館の認知度向上と集客を図った（入場者数25,947名）。

北大阪8市3町の美術館・博物館計57館が参加する「北大阪ミュージアム・ネットワーク」による文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」に会場を提供するとともに、本館のブースを出した。他にもミュージアムぐるっとパス・関西2019に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の活動における中心的役割を担い、注目度を増した千里を起点として発信する広報活動を展開した。

学校教育・社会教育活動

本館研究者の研究成果を幅広い層に社会還元するため、積極的なアウトリーチの講演活動を行った。主に社会人を対象とした生涯教育として、大阪・梅田のグランフロント大阪で、一般社団法人ナレッジキャピタルと連携して「みんぱく×ナレッジキャピタル 想像界の奥へ」を開催し、3講座を実施した。今年度は、第1回目の講座を公開座談会（2019年9月23日）としてグランフロント大阪のナレッジシアターにおいて開催し、313名の参加があった。また第2回目はグランフロント大阪のカフェ・ラボにて対談を行い（10月8日、参加者54名）、第3回目は展示場ツアー（10月20日、参加者30名）とすることで、館外での催しを展示観覧につなげることを企画した。

さらに、本館オリジナルの映像作品である「みんぱく映像民族誌」シリーズの作品を広報、普及するため、大阪市内にあるミニシアター「淀川文化創造館シアターセブン」において上映するとともに、監修者による解説を行った。4回の実施で延べ166人の参加があり、当館への来館経験がない層に対し当館の活動を広報することができた。

千里文化財団の協力のもと、大学等教育機関との連携を図り、文化人類学・民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」を継続実施し、高等教育への本館の活用を促した。今年度は、新規加入1校（同志社大学グローバル地域文化学部）、継続加入8校（大阪大学、学校法人京都文教学園（京都文教大学・短期大学）、同志社大学文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学、学校法人立命館（立命館大学）、学校法人塚本学院（大阪芸術大学、大阪芸術大学短期大学部、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校）、京都大学、京都市立芸術大学）の申込があり、計3,985名の学生、教職員が来館した。また、本館の展示や館蔵資料を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学生・教員のためのみんぱく活用」を本館ウェブサイトに掲載するとともに、活用方法を紹介したリーフレットを作成し、全国の大学に配布した。今年度は、本館を利用した大学教員による講義・講習が113件実施され、3,215名の学生等に展示場が利用された。

初等中等教育への貢献として、大阪北摂地域の中学校6校から15名を職場体験として受け入れたほか、学校教員を対象に、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツール、貸出用学習キットなどの紹介を目的としたガイダンスを春と秋の遠足シーズン前に2回実施し、80団体243名の参加があった。

また、小学校団体の博物館見学を有意義で楽しいものにし、体験を通じて多文化共生を学ぶきっかけをつくることを目的とした、展示場における体験プログラム「わくわく体験 in みんぱく」（参加団体16件、参加人数1,292名）を提供した。さらに、夏休み期間中に小学4年生～6年生を対象に、本館展示場内でフィールドワークを体験するワークショップ「フィールドワークに挑戦！極寒！——40℃のくらし」を実施（12名参加）したほか、科学研究費補助金研究成果公開促進費の支援を受け、「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」の事業として小学5、6年生を対象に、特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」関連ワークショップ「ゴミから生まれる異音獣！」を実施した。本ワークショップにおいては、立体コピーや3Dプリンタで作成した触察資料を用いることで、視覚障害児童が共に学んで楽しめるユニバーサルな形態で実施した。

その他、若い世代に対する特別展と本館展示の相互観覧による理解度の向上を目的に学校団体（大学）に対する特別展観覧料の優待措置を継続した。

インターネットによる広報活動

ウェブサイト上のニュースや、催し物のコンテンツで最新の情報を発信したほか、特別展や企画展は個別サイトを作成し関連イベントを中心とした情報発信を行った。ホームページの利用者数は、訪問者数1,215,040、ページビュー数3,704,553であった。

メールマガジン（みんぱく e-news）に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月1回継続して発信した（配信数は53,892件）。

ソーシャルメディアに関しては、利用者も順調に増加し、自前の広報メディアとして、着実に地歩を固めている。（Facebook いいね！数15,949（累計）、Twitter フォロワー数47,697（累計）、YouTube 総再生回数回32,530（年度）、Instagram いいね！数3,340（累計））。

マスメディアによる広報活動

新聞に関しては、毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」の連載を継続し、本館の研究者がそれぞれの研究内容を多様な年齢層、地域の読者向けにわかりやすく解説した。また、文部科学教育通信で月2回「国立民族学博物館の収蔵品」を連載し、本館研究者が研究内容と本館収蔵資料について解説した（2019年8月26日終了）。さらに、週刊新潮でコラムニストがみんぱくの収蔵品を紹介する、「ディープ『みんぱく』探検隊」の連載が開始された（2019年12月～）。千里ニュータウンFM放送番組「ごきげん千里837（やあ、みんな）」も継続している。

プレスリリースも随時発信し、マスメディアに情報提供した（年間30本）。報道関係者との懇談会・内覧会等は、年11回（参加者数167名）開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した。2019年度は、テレビ63件、ラジオ60件、新聞583件、雑誌129件、ミニコミ誌123件、その他356件の各媒体総数1,314件で、本館の活動が紹介された。

研究成果の社会還元及び教育普及活動

研究成果の社会還元として、継続して文化人類学・民族学の最新の研究成果を発信する「みんぱくゼミナール」を11回（参加者数2,125名）、研究部のスタッフと来館者が展示場内でより身近に語り合う「みんぱくウィークエンド・サロン——研究者と話そう」を29回実施した（参加者数1,287名）。みんぱくゼミナールにおいては生涯学習の促進のために10回参加毎に表彰を行っており、今年度は104名を表彰した。

また、映画の上映に研究者の解説を加えた「みんぱく映画会」を8回（参加者数1,270名）開催した。特に今年度は、当館がこれまで継続してきた「被災地における無形の文化遺産の支援活動」の一環として、東日本大震災により甚大な被害を受けた岩手県三陸海岸を舞台に、大津波を生き抜いた神楽と、この地に暮らす人びとの生活のベースにある力強さを描いたドキュメンタリー映画「廻り神楽」の上映とトークセッションを行った。

この他、特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」関連として、研究公演「能と怪異（あやかし）」（2019年9月29日・参加者数638名）や企画展「アルテ・ポップラ——メキシコの造形表現のいま」関連として研究公演「ソン・ハローチョ——国境を越えるメキシコの歌」（2019年10月27日・参加者数384名）を開催した。研究公演「ソン・ハローチョ」の前日には、メキシコでソン・ハローチョが成立した歴史や演奏の際に使用する楽器について学ぶことを目的としたワークショップ「ソン・ハローチョを楽しもう」をセミナー室にて開催（参加者数33名）した。

今年度で17回目の実施となる「音楽の祭日2019 in みんぱく」（参加者数のべ5,891名）、本館が所蔵するアイヌの標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的として行う祈りの儀式「カムイノミ儀礼」（見学者数266名）を実施した。カムイノミ儀礼において、今年度は、参加者の安全面を配慮し、儀式の同時中継を当館エントランスホールで行ったところ、小さな子ども連れの参加者や保育園児が中継にて参加した。

さらに、特別展・企画展・展示イベントに関連するワークショップ、ゼミナール、ウィークエンド・サロンなど、多数のイベントを開催し、展示の理解を深めることに寄与した。

これらの活動は、みんぱくカレンダーやチラシを制作し、関係諸施設を通じて配布したほか、広報誌『月刊みんぱく』を国立民族学博物館友会の会会員に配付するとともに、全国の研究機関、大学等に寄贈することによって、広く情報発信を行った。視覚障害者向けの同誌音訳版も並行して製作・配付した。

その他の活動

学校を卒業した知的障害者に対し、博物館を開かれた学びの場として提供するため「みんぱく Sama-Sama 塾」の試行を昨年度に引き続き行った。今年度はワークショップを6回実施し、延べ207名の参加があった。ワークショップ当日の様子やアンケート結果を元に知的障害者が博物館を活用する際に必要とされることや改善点などを探った。

また、高齢者や身体が不自由な方等多くの方が快適に来館できるよう、特別展会期中の土、日、祝日に大阪モノ

レール「万博記念公園駅」から本館まで無料のシャトルバスを運行した。

国立民族学博物館要覧2019

- 和文要覧 2019年7月発行
- 英文要覧 2020年2月発行

ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp/> (2020年3月31日現在)

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

提供している主な情報は以下の通り。2019年度の訪問件数は1,215,040件。

• 研究活動

研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

• 博物館展示・事業活動

本館展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・ゼミナール・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

• 大学院教育

総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。

• データベース

本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんぱく e-news」を発行し、毎月開催している「みんぱくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんぱく映画会」「特別展」などのお知らせを、月1回電子メールで配信している。2019年度の配信数は53,892部。

報道

● 報道関係者との懇談会

- | | | |
|------------|-----------|--|
| 2019年4月18日 | 16名 (11社) | 観覧料の改定について、企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」、みんぱく映画会「サーミの血」(第45回みんぱくワールドシネマ)、最新の研究紹介 |
| 5月16日 | 15名 (10社) | 焼畑データベース公開について、DiPLASプロジェクトについて、最新の研究紹介(刊行物紹介)、音楽の祭日2019 in みんぱく |
| 6月20日 | 14名 (7社) | 特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」、夏やすみみんぱくワークショップ、最新の研究紹介(刊行物紹介)、研究の窓(民博の台湾資料——フォーラム型情報ミュージアムによって引き出される新たな価値、『ブレイジット』にみる民主主義とメディア)、企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」(展示ツアー) |
| 7月18日 | 11名 (10社) | 主催事業 ICOM 京都大会、特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」関連催し、最新の研究紹介(刊行物紹介)、研究の窓(亜熱帯・温帯ポリネシアにおける熱帯作物の生産のはじまり)、「ストリーットの精霊たち」第6回鉄犬ヘテロトピア文学賞 受賞について |
| 8月28日 | 26名 (20社) | 特別展「驚異と怪異」報道・出版関係者向け内覧会 |

9月19日	15名(10社)	企画展「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」、みんなく映画会「ワグダーストラック」(第46回みんなくワールドシネマ)、一般公演シンポジウム「グローバル化時代の文化力——〈地域知〉のマネージメント」、公開シンポジウム「日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題 2020オリパラを迎える前に」、公開講演会「サブカルチャー遺産の現在「アニメ『聖地』巡礼」、国立民族学博物館コレクション「世界のかわいい衣装」
10月17日	15名(11社)	トーテムポールの制作に向けて、ミンパク オッタ カムイノミ(みんなくでのカムイノミ)・アイヌ工芸 in みんなく、みんなく映画会「あまねき旋律(しらべ)」(第47回みんなくワールドシネマ)、最新の研究紹介(刊行物紹介)、研究の窓(応援の比較文化論)、企画展「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」(展示ツアー)
11月28日	15名(10社)	コレクション展示「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」、トーテムポール制作——最新報告、みんなく年末ワークショップ「みんなく村に神楽がやって来る!——伊勢大神楽実演とおはなし」、最新の研究紹介(刊行物紹介)、特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」報告
12月19日	14名(12社)	公開講演会「ふたつの文化を生きる——ドイツのトルコ系移民から私たちのこれからのを考える」、みんなく映画会「廻り神楽」、みんなく映画会/みんなく映像民族誌シアターについて、最新の研究紹介(刊行物紹介)、研究の窓(第9回地域研究コンソーシアム賞の受賞と研究報告)
2020年1月16日	10名(7社)	特別展「先住民の宝」、特別展「先住民の宝」関連イベント(ワークショップ「ボードゲームで学ぶ・考える 北極域の環境変化と人」、研究公演「絆——人をつなぐ太鼓」、研究の窓(カワウを同時に孵化させる技術)コレクション展示「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」(展示ツアー)
2月20日	16名(12社)	梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」、特別展「先住民の宝」アイヌ(日本)、国際シンポジウム「Performing Arts and Conviviality」、研究の窓(海のサピエンス史)

●新聞等報道件数

2019年度は、テレビ63件、ラジオ60件、新聞583件、雑誌129件、ミニコミ123件、他356件、計1,314件の報道があった。

月刊みんなく

4月号(第499号)	2019年4月1日発行	特集「みんなくの収蔵庫」
5月号(第500号)	2019年5月1日発行	特集「月刊みんなく500号のあゆみ」
6月号(第501号)	2019年6月1日発行	特集「サウジアラビア、女性の暮らしの半世紀」
7月号(第502号)	2019年7月1日発行	特集「バスケットリー」
8月号(第503号)	2019年8月1日発行	特集「驚異と怪異——想像界の生きものたち」
9月号(第504号)	2019年9月1日発行	特集「奴隷展示は問う」
10月号(第505号)	2019年10月1日発行	特集「メキシコのアルテ・ポプラー」
11月号(第506号)	2019年11月1日発行	特集「ラグビーという文化」
12月号(第507号)	2019年12月1日発行	特集「先住民の言語」
1月号(第508号)	2020年1月1日発行	特集「世界の縁起モノ」
2月号(第509号)	2020年2月1日発行	特集「朝枝利男とガラパゴス」
3月号(第600号)	2020年3月1日発行	特集「先住民とアート」

みんなくゼミナール

第490回 教育玩具とその時代——子ども・おもちゃ・教育

【特別展「子ども／おもちゃの博覧会」関連】

2019年4月20日

講師 是澤博昭（大妻女子大学 教授）
笹原亮二

受講者 163名

内容 近代教育の対象として、幼児を含む子ども全体を意識し始める過程を玩具から振り返った。

第491回 文化遺産の持続的な活用をめざして——南米ペルー北高地パコパンバ遺跡での試み

2019年5月18日

講師 關 雄二

受講者 164名

内容 南米アンデス文明の神殿遺跡パコパンバの調査において、住民とともに実施している文化遺産の持続的活用を目指す活動を紹介した。

第492回 物質文化から見た沙漠社会——アラビア半島オアシスの半世紀

【企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」関連】

2019年6月15日

講師 西尾哲夫

縄田浩志（国立民族学博物館 特別客員教授）
遠藤 仁（現代中東地域研究・秋田大学拠点研究員）

受講者 161名

内容 アラビア半島でおよそ半世紀前に撮影された写真と人文地理学的・文化人類学的記述をてがかりに、物質文化の特質と生活世界の持続と変容について考えた。

第493回 アンデスの褐色のキリスト——奉納品をとおしてみる信仰の世界

2019年7月20日

講師 八木百合子

受講者 165名

内容 アンデス高地のクスコの町に祀られる褐色のキリスト像など、人びとが寄進した奉納品に描かれたイメージを紐解きながら、信仰の世界を読み解いた。

第494回 文化人類学者・片倉もとの見たサウジアラビア

【企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」関連】

2019年8月17日

講師 菅瀬晶子

片倉邦雄（片倉もところ記念沙漠文化財団評議員会議長、元駐 UAE・駐イラク・駐エジプト大使）
藤本悠子（片倉もところ記念沙漠文化財団事務局主事）

受講者 258名

内容 片倉もところがサウジアラビアで撮影した写真や収集した民具などの調査資料を活かしつつ、半世紀後に実施した最新の現地調査成果を紹介した。

第495回 奴隷交易の世界史——サハラ以南アフリカと世界

2019年9月21日

講師 鈴木英明

受講者 200名

内容 サハラ以南アフリカから輸出された奴隷交易に注目し、世界史的な観点からこの交易の実態を考えた。

第496回 珍獣・霊獣・幻獣・怪獣——人はなぜモンスターを想像するのか？

【特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」関連】

2019年10月19日

講師 山中由里子

受講者 274名

内容 世界各地の人びとが創りだしてきた想像界の生物多様性を探求するとともに、人類に普遍的な心の動きやイメージのつくられ方について考えた。

第497回 ルーマニア近代の知識人と民衆—民族主義、正教信仰、社会主義のなかで

2019年11月16日

講師 新免光比呂

受講者 166名

内容 西欧化した知識人と前近代的な農民社会を特徴とする20世紀ルーマニアの激動の時代を振り返った。

第498回 海の人類史—東南アジア・オセアニア考古学の最前線

2019年12月21日

講師 小野林太郎

受講者 190名

内容 東南アジアやオセアニアの島々を舞台に、私たち人類の海洋適応や渡海について、最新の考古学成果を交え、紹介した。

第499回 イタリアにおける人と食のかかわり

2020年1月18日

講師 宇田川妙子

受講者 182名

内容 自分たちの食に高い関心とプライドを持ち、食に関する活動も活発なイタリアにおける食の現状を、さまざまな角度から紹介した。

第500回 文明の転換点におけるミュージアム—みんなくのこれまでとこれから

2020年2月15日

講師 吉田憲司

受講者 202名

内容 人類学と博物館そしてみんなくが、今どのような地点に立ち、これからどのような方向へ向かおうとしているのかをお話した。

第501回 南半球の華僑華人—客家を中心として

2020年3月21日（新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による臨時休館のため中止）

講師 河合洋尚

受講者 —

内容 21世紀に突入後、南半球では華僑の移住が急増している。そのうち客家が多いタヒチ、ニューカレドニア、バレーをとりあげ、中国系新移民の流入による華人社会の変化を解説する。

みんなくウィークエンド・サロン—研究者と話そう

第538回 2019年4月7日 南アジアの弦楽器

講師 寺田吉孝

受講者 46名

内容 南アジアは弦楽器の宝庫であるが、その多くが西アジアや中央アジアから伝えられた外来の楽器に改良が加えられ定着したものである。人間とともに移動してきた楽器の「旅」を紹介する企画展「旅する楽器—南アジア、弦の響き」の見所と楽しみ方を紹介した。

第539回 2019年4月14日 戦後のおもちゃ

講師 日高真吾

受講者 31名

内 容 戦後のおもちゃは、敗戦後から、高度経済成長にかけて大きく変化した社会情勢に呼応するようにさまざまな形で展開していった。ウイークエンド・サロンでは、戦後日本の社会の変化とおもちゃの変遷について解説した。

第540回 2019年4月21日 認知革命とビーズ

講 師 池谷和信

受講者 23名

内 容 4月9日から6月16日まで、みんぱくと科博（国立科学博物館）との合同企画『ビーズ』展が科博で開催された。ここでは、人類にとってビーズとは何かを、科博での展示とのかかわりから追求した。ビーズは、人類の最古のアートといわれる。言語、ダンス、絵画、神話などとビーズを比較して、ビーズの文化的特徴について考えた。

第541回 2019年4月28日 どうして言葉は変わるのか

講 師 吉岡 乾

受講者 64名

内 容 日々私たちが使っている言語は、日々変化している。親やその親、子やその子、歳の離れた人たちの言葉と自分のとを改めて比べてみると、違うことがわかる。それは言葉が変わるからである。では、どうして言葉は変わるのか、考察した。

第542回 2019年5月12日 新ビデオテーク紹介「ただいまオンエア——ソニンケ・ディアスポラをつなぐ地域ラジオ」

講 師 三島禎子

受講者 18名

内 容 地域ラジオの活動をとおして、文化の力で地域の発展を試みるソニンケ民族の取り組みについて、映像を交えて話した。新しいビデオテークと映像民族誌DVDを先取りして紹介した。

第543回 2019年5月19日 アーミッシュキルトの誕生——米国のエスニックグループの交流史から

講 師 鈴木七美

受講者 14名

内 容 アーミッシュキルトは、ヨーロッパからの宗教移民であるアーミッシュが、19世紀後期に、米国で作り始めたものとされている。アーミッシュたちはどのようにしてキルトと出会ったのか。キルトづくりをさまざまなエスニックグループの交流史から考えた。

第544回 2019年5月26日 アンデスの悪魔の踊り

講 師 八木百合子

受講者 47名

内 容 アンデス高地の祭りでは、ディアブラダと呼ばれる奇抜な仮面と鮮やかな衣装をまとった悪魔たちが大行進を繰り広げる。スペインの植民地化以降に始まったこの悪魔の踊りの起源や現在の悪魔たちの姿について紹介した。

第545回 2019年6月9日 「みられる私」から「みる私」への変身——ベールの内からみる世界へ

講 師 西尾哲夫・縄田浩志

受講者 50名

内 容 本館名誉教授の片倉もとこが半世紀前にサウジアラビアで収集した民族資料や民族誌写真を、現在の現地の人びとといっしょに読み解くことで、そのあいだに起こった環境や社会の変化のなかで女性たちの暮らしがどのように変わってきたかについて考えた。

第546回 2019年6月30日 中国文化の中の「動物」たち

講 師 韓 敏

受講者 39名

内 容 羊、馬、豚、鳥、魚、獅子のような動物、あるいは竜や麒麟のような想像上の生き物は、長い間人類と共存してきた。かれらがわれわれの暮らしのパートナー、また、人生観や宇宙観を表すメタファーとして、人間社会にどのようにかかわってきたのかを考えた。

第547回 2019年7月14日 「サウジ版江南スタイル」にみるハラールな若者文化

講 師 相島葉月

受講者 47名

内 容 韓国人ラッパーPSYが2012年に発表した「江南スタイル」。ソウルの富裕層を風刺した歌詞とダンスは世界中の若者を虜にし、パロディ版が次々とYouTubeにアップロードされた。女性が登場しない「サウジ版江南スタイル」から、サウジアラビアの若者文化について考えた。

第548回 2019年7月21日 ジャワ島のガムランのリズム

講 師 福岡正太

受講者 45名

内 容 比較的単純なリズムを組み合わせる1つのリズムをつくるのが東南アジア音楽の特徴の1つである。インドネシア、ジャワ島のガムランのリズムを体験するコーナーで、大小いくつかのゴングを実際にしながら、一緒にリズムを体験した。

第549回 2019年7月28日 バザールの風景——ウズベキスタンの市場事情

講 師 寺村裕史

受講者 38名

内 容 バザール（市場）は、たくさんの人やモノ、そして情報が集まる場所である。バザールのあちこちで、値段交渉や情報交換のための大きな話し声が飛び交っている。そうしたバザール独特のにぎわいや喧騒を、ウズベキスタンの映像をまじえながら紹介した。

第550回 2019年8月4日 南太平洋・ヴァヌアツの華僑華人

講 師 河合洋尚

受講者 19名

内 容 ヴァヌアツは現在、オセアニア島嶼部で最も中国系人口が増加している国であるといっても過言ではない。彼らが移住した社会・経済的背景、現在の生活、そして現地への影響関係について解説した。

第551回 2019年8月11日 ヒジャーズとパレスチナ、その歴史的なかわり

講 師 菅瀬晶子

受講者 46名

内 容 企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」で扱っている地域は、古来ヒジャーズ地方と呼ばれてきた。かつてヒジャーズ地方とパレスチナを結んだヒジャーズ鉄道の今日の姿を中心に、両地域の歴史的なかわりについて話した。

第552回 2019年8月25日 えっ、何で博物館で会計の話？おかねの言語体系「会計」と人類学

講 師 出口正之

受講者 36名

内 容 博物館は人類の森羅万象にヒントを与えてくれる場である。インカ帝国の遺物から現代社会のグローバル企業、非営利法人の会計までを視野に入れて、「会計」が持つ不思議さを語った。

第553回 2019年9月1日 特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」

講 師 山中由里子

受講者 113名

内 容 なぜ人類は、この世のキワにいるかもしれない不思議な生きものを思い描き形にしてきたのか。水に潜み、天に羽ばたき、地を巡る、世界の霊獣・幻獣・怪獣が一堂に会した特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」を案内した。

- 第554回 2019年9月8日 アオテアロア／ニュージーランドへの長い旅路——オセアニア大航海
 講師 ピーター J. マシウス
 受講者 49名
 内容 高性能な帆走カヌーにより、人びとは太平洋を移動し、隔絶した島々で新たな共同体を築くため植物や動物を搬送した。近年の研究成果を紹介した。
- 第555回 2019年10月6日 特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」を巡って
 講師 笹原亮二
 受講者 94名
 内容 特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」の展示内容にちなんだ、日本の民俗文化にかかわる話題を紹介した。
- 第556回 2019年10月13日 ガンディーの携帯用手紡ぎ車
 講師 三尾 稔
 受講者 30名
 内容 2019年10月2日は、インド独立の父マハトマ・ガンディーの生誕150年にあたる。みんなの展示資料からガンディーとゆかりの深い携帯用手紡ぎ車を取り上げ、その開発の経緯や彼が広めた手紡ぎ手織り布運動とインド独立運動のつながりについて話した。
- 第557回 2019年10月20日 インドにおける異形の神々
 講師 松尾瑞穂
 受講者 97名
 内容 インドのヒンドゥー教の神々は、時に恐ろしく時に奇妙な異形の姿を示している。動物との合体像や多面多臂像、血を滴らせた恐ろしい女神像……。また、さまざまな動物も聖獣として信仰されてきた。これらの神々をとおして、インドにおける異形の具像表現を紹介した。
- 第558回 2019年11月3日 ラテンアメリカのアルテ・ポプラル
 講師 鈴木 紀
 受講者 44名
 内容 企画展「アルテ・ポプラル——メキシコの造形表現のいま」ではメキシコの民衆的な造形表現を展示したが、アルテ・ポプラルは他のラテンアメリカ諸国にも見られる。ラテンアメリカのいくつかの博物館の展示を比較しながら、企画展の特徴を解説した。
- 第559回 2019年11月10日 「旧世界」の驚異——キリスト教宣教とアメリカ先住民
 講師 齋藤 晃
 受講者 81名
 内容 15世紀末のアメリカの「発見」はヨーロッパ人には未知の世界を開示する驚異であった。しかし、先住民にとっても「旧世界」は驚異に他ならなかった。ヨーロッパ文化に接した先住民の驚嘆が、彼らのキリスト教改宗とどのように結びついていたかを説明した。
- 第560回 2019年12月1日 みんなの展示場の中の宗教
 講師 新免光比呂
 受講者 41名
 内容 世界にはさまざまな宗教があり、儀礼や神話、彫像や画像などで多彩な表現をおこなっている。みんなの展示場の標本資料をとおして、その一端にふれた。
- 第561回 2019年12月8日 「健常者」幻想をぶっ壊せ！——琵琶法師、イタコの触角力
 講師 廣瀬浩二郎
 受講者 36名
 内容 人間はいつから「触角＝動物的な勘」を失ってしまったのか。実は、今日もなお「動物的な勘」を保持

しているのが障害者である。琵琶法師やイタコなど、盲目の宗教・芸能者の歴史を振り返り、健常者が忘れていた「触角」の潜在力を引き出す方法を探った。

第562回 2019年12月15日 サンタクロースとなまはげ——ヨーロッパの時間と季節の感覚

講師 宇田川妙子

受講者 47名

内容 クリスマスの前夜に子どもにプレゼントを持ってくるサンタクロースは、実は、日本のなまはげと似ている部分がある。キーワードは「来訪神」。季節や時間の節目に、異界から訪ねてくる神様の意味である。ヨーロッパの来訪神や関連する祭りを紹介しながら、彼らの季節感・時間観について考えた。

第563回 2020年1月12日 カワウの雛を同時に孵化させる技術

講師 卯田宗平

受講者 16名

内容 自然下のカワウは、親鳥が2-3日に1個のペースで産卵する。よって雛も抱卵期を過ぎると2-3日に1羽のペースで孵化する。ところが中国雲南省の漁師たちは、飼育下のカワウを同時に孵化させる。自然下ではみられない、カワウの同時孵化の技術を紹介した。

第564回 2020年1月19日 聖者になる過程——カザフのイスラームと近代

講師 藤本透子

受講者 36名

内容 病気の治癒や子授け祈願などのため、カザフスタンでは多くの人が聖者の墓廟（ほびょう）を訪れる。20世紀に成立した比較的新しい墓廟をとりあげ、ある人物が聖者とみなされていく過程をとらえて、イスラームと近代の関係を考えた。

第565回 2020年2月16日 バリ島トゥンガナン歴100年分のカレンダーをつくる

講師 山本泰則

受講者 10名

内容 バリ島のトゥンガナン村ではバリ歴とは異なる独自の暦を使っている。今回、かつてみんなくで作成したトゥンガナン歴カレンダー作成プログラムを解説し、西暦2016年から100年分のカレンダーをつくった。ウィークエンド・サロンでは、そのときの苦労話を話した。

第566回 2020年2月23日 収蔵庫を窓からのぞいてみよう

講師 園田直子

受講者 30名

内容 展示、貸出、閲覧・調査など、さまざまな場面で活用されるみんなくの資料。資料を保管している収蔵庫はどのような場所か。みんなくで進めている収蔵庫の改修・再配架計画の話の後、収蔵庫を窓から実際に見た。

第567回 2020年3月1日 朝枝利男のガラバゴス探検

(新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による臨時閉館のため中止)

講師 丹羽典生

第568回 2020年3月8日 2020年春のアメリカ展示場改修

(新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による臨時閉館のため中止)

講師 伊藤敦規

第569回 2020年3月22日 風がもたらす異文化接触

(新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による臨時閉館のため中止)

講師 久保正敏

第570回 2020年3月29日 旅と映画とマヤ民族
(新型コロナウイルス感染症拡大防止対策による臨時閉館のため中止)

講師 鈴木 紀

研究公演

特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」関連

「能と怪異（あやかし）」

2019年9月29日

司会 山中由里子

出演 辰巳満次郎（能楽師）

吉田憲司

参加者 638名

内容 特別展「驚異と怪異」の関連企画として、前半は能楽師、辰巳満次郎氏と吉田憲司館長が、異界と現界のはざまに立ち現れる精霊や妖怪を具現する面と演者について対談し、後半は能「土蜘蛛（つちぐも）」の公演をおこなった。

企画展「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」関連

「ソン・ハローチョ——国境を超えるメキシコの歌」

2019年10月27日

司会 鈴木 紀

解説 ルベン・エルナンデス・レオン（カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授）

出演 カンバラチェ

参加者 384名

内容 企画展「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」の関連企画として、ロサンゼルスを拠点に活動するソン・ハローチョのグループ「カンバラチェ」を招き、メキシコ人のアメリカ合衆国への移住の動向と、チカーノたちの暮らしにもふれながら、新旧のソン・ハローチョを紹介した。

みんなく映画会

【みんなく映画会】

2020年2月11日

「廻り神楽」

司会 林 勲男

登壇者 遠藤 協（共同監督／プロデューサー）

神田より子（敬和学園大学 名誉教授）

参加者 256名

内容 民博がこれまで継続してきた「被災地における無形の文化遺産の支援活動」の一環として、遠藤協・大澤未来共同監督作品「廻り神楽」の上映会を企画した。

両監督は2012年から岩手県宮古市の「震災の記憶伝承事業」に参加し被災地に通いはじめ、本作品を制作した。なお、上映会では遠藤氏と神田氏を招きトークセッションを合わせて開催した。

【みんなくワールドシネマ 映像から考える〈人類の未来〉】

〈人類の未来〉をキーワードに、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施。（全3回）

2019年6月16日

「サーミの血」

司会 鈴木 紀

解説 庄司博司

参加者 305名

内容 スウェーデン・ノルウェー・デンマーク合作「サーミの血」を上映し、独自の言語と文化を持つサーミ

人の少女が、国の分離政策によって差別的な扱いを受け、自らのルーツと葛藤しながら成長し生きる姿をとおして、民族のアイデンティティについて考えた。

2019年11月9日

特別展 「驚異と怪異——想像界の生きものたち」 関連

「ワンダーストラック」

司会・解説 山中由里子

参加者 255名

内容 アメリカ映画「ワンダーストラック」を上映し、美しい映像世界の中で、聴覚障害者の視点をとおして、博物館の始まりについて考えた。

2019年12月22日

「あまねき旋律」

司会 寺田吉孝

解説 岡田恵美（琉球大学 准教授）

参加者 288名

内容 インド北東部、ミャンマー国境付近に位置するナガランド州の農村の歌を描いたドキュメンタリー「あまねき旋律」を上映し、日々の生活や感情を歌に紡ぎながら生きていく人びとを追う映像をとおして、人間にとって歌とは何かを考えた。

【みんなく映像民族誌シアター】

本館オリジナルの映像作品である「みんなく映像民族誌」シリーズのなかから選定した作品を上映後、監修者による解説をおこなった。（全4回）

2020年1月11日

バイラヴ仮面舞踊

司会 福岡正太

解説 南 真木人

参加者 43名

2020年1月25日

ネパールの楽師ガンダルバ

司会 福岡正太

解説 南 真木人

参加者 50名

2020年2月8日

フィリピン周縁地域の音楽

司会 福岡正太

解説 米野みちよ（東京大学 准教授）

寺田吉孝

参加者 39名

2020年2月22日

民俗芸能と軽業

司会 福岡正太

解説 笹原亮二

参加者 34名

博物館社会連携

●学習キット「みんぱっく」

学校や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として、学習キット「みんぱっく」の貸し出しを実施している。みんぱっくは世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2020年3月現在で17種類28パックを用意している。

名称	個数	2019年度貸出件数	2019年度利用者数
極北を生きる	2	11	2,043
アンデスの玉手箱	2	19	1,838
ジャワ島の装い	1	7	473
イスラム教とアラブ世界の暮らし	1	8	610
ソウルスタイル	2	16	1,224
ソウルのこども時間	2	16	1,248
インドのサリーとクルター	2	17	1,621
プリコラージュ	3	0	0
アラビアンナイトの世界	2	10	1,584
アイヌ文化にであう	1	11	1,103
アイヌ文化にであう2	1	15	1,484
モンゴル	2	25	2,041
あるく、ウメサオタダオ展	1	7	775
世界のムスリムの暮らし1	2	22	3,907
世界のムスリムの暮らし2	2	18	1,987
エチオピアのコーヒーセレモニー	1	2	175
エチオピアをまとう	1	5	213

●ワークショップ

春のみんぱくワークショップ「かざってポン！オセアニアのかざり」

開催日：2019年4月6日(土)

講師：丹羽典生

参加人数：21名

オセアニア展示場の標本資料を活用したワークショップ。教員の解説の後、イノシシの牙のかたちをデザインしたスタンプの配置を考えながら布製バッグに押し、オリジナルのエコバッグを作成した

特別展「子ども／おもちゃの博覧会」関連ワークショップ「手づくりおもちゃ 張り子の絵付け」

開催日：2019年4月13日(土)

4月14日(日)

講師：豊永盛人(琉球張り子作家／玩具ロードワークス代表)

笹原亮二

参加人数：4月13日(土) 午前の部 17名

午後の部 19名

4月14日(日) 午前の部 19名

午後の部 19名

沖縄の張り子・玩具作家の豊永盛人氏を招き、張り子おもちゃの歴史や作り方、沖縄の人びとと張り子おもちゃとの関わりなどについての説明の後、同氏の指導で参加者が無地の張り子の半製品に自ら絵付けを行い、張り子人形を完成させた。

ワークショップ「みて ふれて つくって 世界のビーズ」

開催日：2019年4月26日(金)

4月27日(土)

参加人数：4月26日(金) 114名
4月27日(土) 178名

万博記念公園の「ロハスフェスタ万博 2019 SPRING」開催に合わせて、世界のビーズ資料に触れるコーナーと、ペーパービーズを使用したアクセサリ作りのコーナーを実施した。ペーパービーズ制作体験後に本館展示場内のビーズ資料の展示に関するリーフレットを配布し、本館展示場への入場をうながした。

夏休み子どもワークショップ「フィールドワークに挑戦！——極寒！-40℃のくらし」

開催日：2019年7月28日(日)

講師：大石侑香

参加人数：12名

小学4～6年生対象の民族資料観察ワークショップ。参加者は本館の中央・北アジア展示場においてシベリアの人々のくらしに関する資料を各自選択して観察し、講師の指導のもと研究報告書を作成した。研究報告書は一定期間、館内で展示され、来館者により閲覧された。

ワークショップ「ドムドム！タイの香り体験」

開催日：2019年8月3日(土)

講師：大澤由実

参加人数：午前の部 18名

午後の部 18名

ヤードム（ハーブや精油を混ぜたもの。嗅ぐことで気分転換などができる）を愛用するタイの文化や、使用する原材料（植物）などに関する説明を行った後、参加者が好みの材料を各自で調合し、オリジナルのヤードムを制作した。

ワークショップ「だれのぼうし？どんなぼうし？」

開催日：2019年8月12日（月・祝）

講師：大石侑香

参加人数：午前の部 14名

午後の部 14名

講師による帽子や機能や象徴性についての講義と本館の展示資料を参考に、各参加者は紙や布等を使用して思い思いの帽子を工作した。最後に、完成した帽子を身につけて発表会を行った。

企画展関連 親子 de ワークショップ「メキシコのパンづくり——死者のパン」

開催日：2019年10月20日(日)

11月24日(日)

講師：エルサ・マルティネス（メキシコ料理研究家）

小林貴徳（関西外国語大学 助教）

鈴木 紀

参加人数：2019年10月20日(日) 8組16名

11月24日(日) 10組20名

企画展「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」関連ワークショップとして実施した。メキシコで行われる「死者の日」の供物である「死者のパン」を親子でつくり、日本とメキシコの死生観の違いや、死者に対する共通の思いを感じる機会となった。

KAKENHI ひらめき☆ときめきサイエンスワークショップ

「ゴミから生まれる異音獣！ 不思議なケモノはどんな音？ 不思議な音は何に見える？」

開催日：2019年11月2日(土)

11月3日(日)

講師：渡辺 亮（パーカッショニスト）

山中由里子

参加人数：11月2日(土) 21名

11月3日(日) 11名

特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」の関連ワークショップとして、2日間に分けて2種類のワークショップを行った。1日目「不思議なケモノはどんな音？」では、世界各地の幻獣、怪獣を描いた展示物を鑑賞し、そのイメージを音にした。パーカッショニスト渡辺亮氏の指導のもとに廃材から楽器を作り、みんなで演奏した。2日目「不思議な音は何に見える？」では、渡辺亮氏の演奏を聞き、その不思議な音から想像をふくらませて、クリーチャーやモンスター、精霊の衣装をつくり変身した。参加者は思い思いの異音獣に変身、全員で大行進した。

年末ワークショップ「みんぱく村に神楽がやってくる！——伊勢大神楽実演とおはなし」

開催日：2019年12月14日(土)

講師：神野知恵

参加人数：343名

特別展示館を村の広場に見たて、参加者はみんぱく村の村人となって伊勢大神楽の到来を迎えた。獅子舞や曲芸の演舞の他に、神楽師たちの旅暮らしについての話を聞き、「伊勢音頭」を一緒に歌うなどして交流を図った。

ワークショップ「飛び出す獅子舞 福ぬりえ——つくって かざって 厄ばらい！」

開催日：2020年1月11日(土)

1月12日(日)

参加人数：1月11日(土) 92名

1月12日(日) 115名

伊勢大神楽が家々を訪れる様子を描いたぬりえを配布し、自由に着色した。会場内には伊勢大神楽の活動の様子を伝える写真パネルや、家々に授けられる神符などの展示、2019年12月14日実施ワークショップ「みんぱく村に神楽がやってくる！——伊勢大神楽実演とおはなし」の記録写真のスライドショーの上映を行った。

ワークショップ「ハンティの文様の世界——フェルトのコースターづくり」

開催日：2020年1月19日(日)

講師：大石侑香

参加人数：午前の部 14名

午後の部 14名

西シベリア森林地帯に暮らすハンティは衣服や日用品に動物等を象った文様を毛皮やビーズ、フェルトで施して装飾する。講師によるハンティの暮らしと文様についての講義の後、フェルトと毛糸を用いてハンティの文様を施したコースターを制作した。

●ワークシート

テーマに沿って展示場を見学できるガイドマップ「みんぱく見どころアラカルト」など、テーマに沿って本館展示場を見学できるもの、特別展や企画展にまつわるもの、自主学習ができるものなどを作成している。これらは当館のホームページ上に掲載しており、ダウンロードして利用できる。2019年度は、「社会連携事業検討ワーキング」において作成した基本方針とコンセプトをもとに、来館者が各自の興味関心にあわせて選択できる10種類のアクティビティを集約したワークシート群のうち6種類の試作を行った。2020年度はこれらの試行と調査を行う。

●アウトリーチへの取り組み

国立淡路青少年交流の家にて開催された「ミュージアムキッズ！ 全国フェア in AWAJI 2019」においてワークショップ「つくって かぶって みんぱく・ほうし工房」を実施し、2日間で300人をこえる参加者があった。また、近隣施設である「ららぽーと EXPOCITY」内にある「EXPOCITY Lab」において「ドムドム！タイの香り体験とヤードムづくり」をおこない、これまで来館経験のない一般市民に対し、より広く本館の研究成果および社会連携事業の内容を周知することができた。

●社会連携事業検討ワーキング

本館の博物館社会連携活動を強化するため、博物館活動に関する専門的知識を有する特任専門職員を配置し、2018年度新たに配置された人文知コミュニケーター及び社会連携担当の機関研究員をメンバーに加えた「社会連携事

業検討ワーキング」を立ち上げ、活動を強化するための体制を整備した。今年度は小中学生向けパンフレットの改訂を行うとともに、アウトリーチプログラム及びワークシートの充実に向けた検討を開始したほか、大阪大学との連携協定に基づき、日本と世界の民族文化の多様性と共通性を学び、文化の展示と表象をめぐる諸問題について考える機会を提供することを目的として、大阪大学の全学生を対象としたスタディ・ツアーのプログラムを実施した。

●みんぱく春と秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス

春のガイダンス 2019年4月4日(木)、5日(金)

秋のガイダンス 2019年8月22日(木)、23日(金)

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春と秋に実施し、春には46団体149名、秋には34団体94名、計80団体243名の学校関係者が参加した。

当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、見学に関するさまざまな相談も受けた。

●職場体験

2019年10月16日(水)～11月14日(木)

学校教育及び社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2019年度は6校15名を受け入れた。

その他の事業

●「音楽の祭日2019 in みんぱく」

実施日：2019年6月23日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、当館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く当館を解放して開催することとなった。当日は28のグループや個人の演奏があった。

●カムイノミ

実施日：2019年11月28日

カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌ標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。以前は萱野 茂氏(故人)を祭司に非公開でおこなわれていた。2007年度からは、社団法人北海道ウタリ協会(現 公益社団法人北海道アイヌ協会)の会員がカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施し、2019年度は豊浦アイヌ協会の協力を受け実施した。

●連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル 想像界の奥へ」

2014年度に一般社団法人ナレッジキャピタルとの間に取り交わした連携協力協定に基づき、連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」を開講した。2020年度は、第1回目の講座を公開座談会としてグランフロント大阪のナレッジシアターにおいて実施し、第2回目はグランフロント大阪のカフェ・ラボにて対談を行い、第3回目は本館の展示場ツアーとし、これまでとは異なる形態で開催した。

ボランティア活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年9月に発足した団体であり、本館は、市民活動の場として、MMPの活動を支援している。

2019年度は、総勢170名を超えるMMPメンバーの自己研鑽のための支援として、特別展及び企画展の概要説明会(3回)、本館の教員による継続研修「来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座」(5回)を行った。さらに、新規メンバーに対しては、活動にあたり必要な知識を得るための研修(全5回)を実施し、そのうち1回は外部講師を招いている。以上の支援により、本年度MMPは展示場内における視覚障害者の展示体験をサポートするプログラム「視覚障害者案内」を16回(案内数87名)、主に小学生を対象とした体験型見学プログラム「わくわく体験 in みんぱく」を16回(プログラム参加者数1,292名)、その他一般来館者を対象とした各種ワークショップ

プ（「点字体験ワークショップ」10回、特別展「子ども／おもちゃの博覧会」関連ワークショップ11回、その他のワークショップ8回）を実施した。また、特別展「子ども／おもちゃの博覧会」関連体験プログラム「いっしょにあそぼ！」および「20年後の子どもたちへ／未来への伝言板」の体験コーナーにおいては、12,000名を超える観覧者のサポートをした。さらに、館外で開催されたボランティアフェスタへも参加するなど、本館の外での活動（ワークショップ5回）にも積極的に取り組んでおり、博物館を起点とした社会連携を推進している。

6 学術資源研究開発センター

センターの設置目的

学術資源研究開発センターは、本館が所蔵する学術資源の学際的かつ国際的共同利用性を高度化することを目的として、2017年4月1日に設置された。

国立民族学博物館には、約34万点の標本資料や約7万点の映像・音響資料、約67万冊の書籍、本館の所蔵資料をはじめ、多様な研究資料や写真資料、研究成果に関連するデータベース、文化人類学者・民族学者が残したフィールドノートや調査資料からなる民族学研究アーカイブズ等がある。これらは人類の文化や活動に関わる文化資源であり、人類の過去、現在、そして未来を考えるための貴重な学術資源でもある。本館では、これらの学術資源に関する研究成果や情報を「フォーラム型情報ミュージアム」とよばれるデータベースや、特別展・企画展・巡回展など多様な媒体を利用して公開するなど、学術資源の共同利用性を学際的かつ国際的に高めるプロジェクトを実施している。本センターでは、これらの研究プロジェクトを支援するとともに、新たに立案し、推進する。

センターの研究事業

2019年度には、おもに3つの事業を展開した。

●フォーラム型情報ミュージアム構築プロジェクトの研究推進と支援

本館では、2016年度より人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクト「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を実施している。2019年度には、「アイヌ資料」や「中央・北アジア資料」など4件の開発型プロジェクトと「中南米資料」や「オセアニア資料」など6件の強化型プロジェクトを実施した。本センターでは、標本資料名の統一化・多言語化などについて研究をおこなった。またデータベースの構築や編集、発信などに関して各プロジェクトの推進を支援した。

●特別展・企画展・巡回展プロジェクトの研究推進と支援

本館では、学術資源やそれらに関連する研究成果を公開するために、特別展や企画展、巡回展を実施している。2019年度には、特別展「子ども／おもちゃの博覧会」、「驚異と怪異——想像界の生きものたち」、「先住民の宝」や企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」、「アルテ・ポプラー——メキシコの造形表現のいま」、コレクション展示「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」などの準備と開催を支援した。本センターでは、これらの展示をおこなうための研究を進めるとともに、実施するための支援をおこなった。

●学術資源の共同利用性の高度化に関する研究

2019年度には、いかにすれば本館の学術資源の学際的・国際的な共同利用化が進展し、大学教育や学術研究、知識の一般社会への普及、文化の担い手による文化の創成等に効果的に貢献できるかについて研究した。

7 国際研究統括室

設置目的

国際研究統括室は、新領域開拓のための本館の共同利用型研究体制の基盤整備及び国際・国内研究戦略を立案し統括することを目的として、2017年4月に設置されました。

具体的には、研究活動の戦略策定、共同研究・共同利用体制の整備、学術交流協定（国内外）締結方針の策定と締結、研究動向調査、外部資金に関する情報収集と情報提供など、本館がより戦略的かつ組織的に国際的な研究連携や共同研究を推進していくために必要な活動を行っています。

2019年度活動報告

- (1) 国内の研究機関との協定について、8月に大阪府、11月に一般社団法人東洋音楽学会、翌年3月に神奈川大学日本常民文化研究所との間で協定を締結しました。
- (2) 海外の研究機関との協定について、6月にインドネシア・国立考古学研究センター、9月にウズベキスタン共和国科学アカデミー・ヤフヨ・グロモフ考古学研究センター、11月にバングラデシュ農業大学、ケニア国立博物館群、及びタイ・カセサート大学林学部と新たに学術協定を締結しました。また、台湾・順益台湾原住民博物館、台湾・国立台北芸術大学、中国・浙江大学人類学研究所・図書館、米国・北アリゾナ博物館（アリゾナ州・フラッグスタッフ）との協定について、これまでの交流状況及び今後の交流計画について審議を行い、その更新を行いました。
- (3) 外国人研究員（客員）については、本館の特別研究プロジェクトに関連する研究を行い、その推進に貢献していただく研究者を公募しましたが、応募がなかったため、追加公募を実施しました。
- (4) 国際学術交流の面では、本館と関わりのある海外の研究者及び本館と関連の深い国内外の研究機関を「民博フェローズ」として位置づけ、研究者ネットワークを構築しており、2019年度末の民博フェローズは92カ国・地域、1,110件が登録されています。
- (5) 前年度から引き続き、共同研究の在り方について、研究期間、審査体制等について検討を行いました。
- (6) 『民博通信』について、『月刊みんぱく』や『研究報告』等の広報媒体との位置づけを考慮し、今後の在り方について検討を行いました。
- (7) 外来研究員の制度については、2018年度末に全面改定した、受入に係る新制度に基づき、見直しを続け、特に①若手研究者支援の充実、②外来研究員の科研費の応募等にかかる取扱いについて、引き続き整備を行いました。
- (8) 「遺伝資源の取得の機会及びその利用から生ずる利益の公平かつ衡平な配分（Access and Benefit-Sharing: ABS）」への対応について検討し、教員連絡会でABS対応に関する説明を行い、本館で該当する研究について現状把握するためのアンケートを実施することとしました。

国立民族学博物館（民博）には、総合研究大学院大学（総研大）の文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）が設置されている。総研大は、学部を持たない大学院博士課程だけの国立大学法人で、大学共同利用機関の人材と研究環境を基礎とし、各機関の行っている高度な研究活動に密着した教育・研究を行っている。民博に基盤をおく2専攻は、長期のフィールドワークで得られた資料に基づき博士論文を作成することを目的とし、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールを通して、広い視野を持った人間性豊かな研究者の養成をめざしている。

本年度の文化科学研究科長は、地域文化学専攻（民博）の池谷和信がその任にあたり、地域文化学専攻長は樫永真佐夫、比較文化学専攻長は宇田川妙子が務めた。

●葉山キャンパス・文化科学研究科の動き

2019年度、総研大は設立31周年を迎え、国立大学法人化16年目を迎えた。

総研大本部のある葉山キャンパスにおいて、入学式に続き、新入生を対象とする合宿型の集中講義「フレッシュマン・コース」が開催された。本年度は、地域文化学専攻、比較文化学専攻から新入生それぞれ1名が参加した。

文化科学研究科においては、かねてより連携強化が図られ、2005年度から文部科学省の「魅力ある大学院教育イニシアティブ」事業として専攻を横断して「総合日本文化研究実践教育プログラム」が2ヵ年実施された後、2007年度より「文化科学研究科連携事業」が始まり、民博に基盤を置く2専攻もこれに参加してきた。2019年度は、査読付き学術雑誌『総研大文化科学研究』第16号が刊行され、地域文化学専攻在籍生の論文2本、資料紹介1本が掲載された。また、「総研大文化フォーラム2019 境界を行き交う知」を2019年11月30日、12月1日に国文学研究資料館（東京・立川市）で開催し、地域文化学専攻の1年次生1名、比較文化学専攻の1年次生2名が学生企画委員として、その企画立案から準備・運営全般に携わった。さらに「学術資料マネジメント教育プログラム」として、文化科学研究科の各基盤機関が所蔵する学術資料を活用し、高度な知識と技術の習得ができる授業が開講されており、本年度は比較文化学専攻の飯田 卓准教授による「学術映像の基本」、園田直子教授による「資料保存学」が開講された。

第69回教授会（2020年2月28日）において地域文化学専攻から1名、比較文化学専攻から2名の課程博士が承認された。

●教員の異動

小野林太郎准教授、奈良雅史准教授が、2019年4月1日付で地域文化学専攻担当になった。同じく4月1日付で、鈴木 紀、山中由里子が教授に昇任した。小長谷有紀教授は民博退職に伴い、2019年3月31日付で総研大教員の併任解除となった。

吉岡 乾准教授が、2019年10月1日付で比較文化学専攻担当になった。

寺田吉孝教授は民博定年退職に伴い、2020年3月31日付で総研大教員の併任解除となった。

●学位の授与

【課程博士】

チヤスチヤガン
査斯查干（地域）『オイラド・モンゴルにおける口頭伝承とアイデンティティ——故郷創出物語から』[文学]

〔審査委員〕太田心平、韓 敏、新免光比呂、
小長谷有紀（独立行政法人日本学術振興会 監事）、
藤井真湖（愛知淑徳大学交流文化学部 教授）

リウセイウ
劉征宇（比較）『中国都市部の家庭の食生活に関する歴史民族誌——社会主義制度下（1949-2018年）の天津市の事例』[文学]

〔審査委員〕野林厚志、池谷和信、樫永真佐夫、
朝倉敏夫（立命館大学食マネジメント学部食マネジメント学科 教授）、
西澤治彦（武蔵大学人文学部日本・東アジア文化学科 教授）

ヘンセイオン
辺清音（比較）『神戸南京町50年の民族誌的研究——包摂的チャイナタウンの生成と変容』[文学]

〔審査委員〕南 真木人、太田心平、河合洋尚、
大橋健一（立教大学刊行学部交流文化学科 教授）、
張玉玲（南山大学学国語学部アジア学科 教授）

●学生の就職状況

学生の受入を開始した1989年以来、2020年3月末日までに地域文化学専攻・比較文化学専攻を巣立った131名の修了生および退学生のうち、合計71名が常勤の教育研究職に就いた。内訳は、国立大学17名、公立大学7名、私立大学34名、海外等その他の機関7名、歴博1名、民博3名、地球研1名、人間文化研究機構1名である。

●入学者選抜試験

2020年度入学者の選抜試験には、地域文化学専攻4名、比較文化学専攻2名、計6名の志願者があり、地域文化学専攻3名、比較文化学専攻2名、計5名の合格者を第69回教授会において決定し、5名が入学手続きをとった。入学定員（各専攻3名）に対する出願者の倍率は1.0倍（合格者に対する倍率は1.2倍）であった。合格者、「志望研究題目」、（主任指導教員、副指導教員）は以下の通りである。

【地域文化学専攻】

岩下夏岐

「タイの高齢化対策を実践する医療福祉現場の民族誌的研究」
（平井京之介、鈴木七美）

金丸雄一

「日本列島における海士・海女の民族誌的研究」
（池谷和信、野林厚志）

澁谷美和

「国際退職移動した日本人の移動先における人的交流と相互扶助に関する研究」
（平井京之介、鈴木七美）

【比較文化学専攻】

服部裕規

「ヨウヒッコの時空と精神——現代フィンランドで再興する古楽器パフォーマンスの民族誌」
（福岡正太、新免光比呂）

エルマー パトリック
ELMER, PATRICK

「The Origins of the Japonic Language family and its relationship to Austronesian and Koreanic」
（菊澤律子、野林厚志）

2020年度入学者も、ここ数年と同様、研究対象である現地での経験を持つ者が多い。出身大学の内訳は、公立1名、私立2名、海外2名で出身大学院の地方別では、関東、中部、九州、海外となっている。

2020年3月現在、地域文化学専攻と比較文化学専攻それぞれ16名、あわせて32名が在籍しているが、このうち3年次以上には両専攻あわせて20名がいる。これは、教育研究の柱としている長期フィールドワークにそれぞれ出かけているためである。

2019年度は、館内でオープンキャンパス（入試相談会／2000年度から開催）を9月20日に開催した。総研大および民博の概要説明、施設見学、在学生・修了生・教員との懇談会等が行われた。参加者は16名で関東、中部、九州、海外からと多岐にわたった。

●日本学術振興会特別研究員（DC2）への採用

2019年度は地域文化学専攻 拉加本、比較文化学専攻 星野麗子が日本学術振興会特別研究員（DC2）に採用された。

●地域文化学専攻・比較文化学専攻教員数（2020年3月現在）

専攻	専攻長	担当教員数
地域文化学専攻	1	23
比較文化学専攻	1	24（基盤機関の長である民博館長を含む）

●地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生（2020年3月現在）

専攻	入学定員	現員			計
		1年次	2年次	3年次	
地域文化学専攻	3	2	5	9	16
比較文化学専攻	3	3	2	11	16

●年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
1991（平成3年）年度			1		1
1992（平成4年）年度					0
1993（平成5年）年度			1	1	2
1994（平成6年）年度	2		1		3
1995（平成7年）年度	2		1		3
1996（平成8年）年度		3			3
1997（平成9年）年度	3		4		7
1998（平成10年）年度	4	2			6
1999（平成11年）年度					0
2000（平成12年）年度	2		2	1	5
2001（平成13年）年度	1	1	2	1	5
2002（平成14年）年度	1	1		2	4
2003（平成15年）年度					0
2004（平成16年）年度	2	3			5
2005（平成17年）年度	4	2		2	8
2006（平成18年）年度	2		3		5
2007（平成19年）年度	2	1	3		6
2008（平成20年）年度	1		1		2
2009（平成21年）年度		1	1	1	3
2010（平成22年）年度	2		2	3	7
2011（平成23年）年度	3		1	1	5
2012（平成24年）年度	1	1	1	1	4
2013（平成25年）年度			1	1	2
2014（平成26年）年度	2	1	2		5
2015（平成27年）年度	3	1			4
2016（平成28年）年度	1	1	1		3
2017（平成29年）年度	1		1		2
2018（平成30年）年度	1				1
2019（平成31・令和元年）年度	1		2		3
計	41	18	31	14	104

索引

あ

相島葉月	91
東 賢太朗	214
アデイ プラセテイエージョ	164
アラウジヨ サミュエル	168
飯泉菜穂子	36
飯田 卓	58、177、181
池谷和信	60
石原 和	136
石山 俊	137
伊藤敦規	116
イリーナ モロゾワ	167
上羽陽子	69
ウォン デボラ アン	170
浮ヶ谷幸代	199
宇田川妙子	40
卯田宗平	71
宇陀則彦	148
大石侑香	146
大坂 拓	160
大澤由実	130
太田心平	47、186
大西秀之	214
緒方しらべ	218
小野林太郎	73、184、217

か

風間計博	206
樫永真佐夫	42
神野知恵	131
河合洋尚	94、216
河村友佳子	138
辛嶋博善	142
川瀬 慈	24
菅野美佐子	144
菊澤律子	26
岸上伸啓	106、196
黒田賢治	143
ゴーパーラン ラヴィンドラン	166
小長谷有紀	152
小林直明	140

さ

齋藤 晃	65
齋藤玲子	121、180
相良啓子	37
佐川 徹	209
笹原亮二	110
下道基行	153

シヨムファイ デイビッド イシュトヴァン	169
ジョンソン ロバート エリック	166
新免光比呂	50
末森 薫	133
菅瀬晶子	51
鈴木七美	83
鈴木英明	100、217
鈴木 紀	66
關 雄二	11
園田直子	15、201

た

武居 渡	155
田中铁也	145
田沼幸子	204
田森雅一	161
辻 邦浩	154
出口正之	19
寺田吉孝	111、176
寺村裕史	76、183

な

内藤直樹	211
中生勝美	202
中川 敏	203
中谷文美	207
奈良雅史	52
縄田浩志	157、197
西 真如	208
西尾哲夫	85
丹羽典生	123、188
野澤豊一	198
野林厚志	103、174、215
信田敏宏	87

は

橋本沙知	140
林 勲男	39、193
原 大介	149
韓 敏 (ハン ミン)	44
日高真吾	21、191
平井京之介	14
平井康之	163
平田晶子	200
廣瀬浩二郎	96
福岡正太	29
藤本透子	79
古川不可知	135、219
彭 宇潔 (ホウ ウケツ)	141

藤田瑞穂 213

ま

マシウス ピーター ジョセフ 45

松尾瑞穂 54、195

丸川雄三 32

三尾 稔 81

三島禎子 98

南 真木人 126、190

森 明子 89

や

八木百合子 127、187、205

山中由里子 114

山本泰則 33

山 泰幸 210

吉岡 乾 35

吉田憲司 8

[研究年報 2019]

編集・発行——大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立民族学博物館

印刷——株式会社 遊文舎

発行日——2021年3月16日
〈非売品〉